青森県埋蔵文化財調査報告書　第395集

山 元（1）遺 跡

― 国道7号浪岡バイパス建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 ―

（第一分冊）

２００５年３月

青森県教育委員会

遺跡全景（南から）

遺跡の主体部（北から）

遺跡の主体部（東から）

遺跡近景（北から）

壕の北東側部分（北東から）

土師器

第14号住居跡出土土師器

序

浪岡町山元（１）遺跡は、国道７号浪岡バイパス建設事業の実施に先立って、平成14・15年度に当センターが発掘調査を行ないました。今回の調査は、平成６・７年度に当センターが調査し、その後保存措置が講じられた国史跡高屋敷館遺跡の迂回ルートの決定に伴って行なわれました。

調査の結果、平安時代の遺構が多数発見されました。竪穴住居跡が最も多く、ほかに高床式の建物跡や土坑（穴）・井戸跡・溝跡・道跡もあります。竪穴住居跡や高床式の建物跡のなかには、方形にめぐる深い二重堀で囲まれたものもあり、調査の最中からその建物の特殊性について注目されました。

また、遺構の内外からは平安時代に用いられた土師器や須恵器とともに、鉄製品なども発見されましたが、ほかに縄文時代前期の竪穴住居跡や土坑、溝状土坑（落とし穴）も発見されており、この地域が、縄文時代から人々の生活の場として利用されていたことがうかがわれます。

この報告書は、この２カ年にわたる調査成果をまとめたものです。この地域の埋蔵文化財の調査・研究、文化財の活用等に役立ていただければ幸いです。

調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、種々御指導・御協力くださった関係各位に対して、厚くお礼を申しあげる次第です。

平成17年３月

青森県埋蔵文化財調査センター

所　長　佐　藤　良　治

例　　言

1　本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが平成14・平成15年度の２カ年にわたって実施した、国道７号浪岡バイパス建設事業に伴う山元（１）遺跡の発掘調査報告書である。

2　山元（１）遺跡の所在地は南津軽郡浪岡町大字高屋敷字野尻地内、遺跡番号は29054である。

3　本報告書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集した。執筆は、当センター畠山総括主幹、小山文化財保護主事、工藤臨時事務補助員が担当した。執筆担当者名は文末に記したが、依頼原稿については執筆者名を文頭に記した。

4　本報告書に掲載した地形図（遺跡位置図）は、国土地理院発行の五万分の一地形図「青森西部」を複製して使用した。

5　挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付した。遺物写真の縮尺は統一していない。

6　遺構・遺物の表現は原則として次の様式・基準に拠った。

（１）挿図に付した方位は座標北であり、公共座標は旧日本測地系に基づいている。

（２）遺構内外堆積土の注記には、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄；1996）を用いた。

（３）遺物には観察表・計測表を付し、出土地点・法量及び諸特徴を一覧できるようにした。なお、文中の出土数は接合前の破片数を示している。

（４）本文・挿図・観察表・計測表・写真図版の遺物番号は一致している。

（５）平安時代の竪穴住居跡の主軸方向はカマドの煙道方向が、北から何度傾いているかを計測したものである。

（６）竪穴住居跡のピットは床面からの深さを計測し、挿図に示している。

（７）平安時代の住居跡から出土した縄文時代の遺物については、「縄文時代の遺構外出土遺物」としてまとめて記述した。

7　発掘調査時に使用した遺構の略号は以下の通りであるが、ＳＫとして調査した中に井戸跡となったものもある。また、これらの遺構の諸特徴を一覧できるように、巻末にまとめている。

ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＫ：土坑　ＳＥ：井戸　ＳＤ：溝跡　ＳＮ；焼土遺構　ＳＸ：道跡及び性格不明遺構

8　出土遺物の鑑定・分析等については、次の方々と機関に依頼した（順不同、敬称略）。

地形・地質と基本層序及び石器の石質鑑定　青森県立浪岡高等学校　山口　義伸

黒曜石の産地同定　京都大学原子炉実験所　藁科　哲男

放射性炭素年代測定　（株）地球科学研究所

須恵器の蛍光Ｘ線分析　大谷女子大学　三辻　利一

火山灰のＥＰＭＡ分析　弘前大学　柴　正敏

炭化材の樹種同定　木工舎「ゆい」　　橋　利彦

9　遺物の写真はシルバーフォトに依頼した。

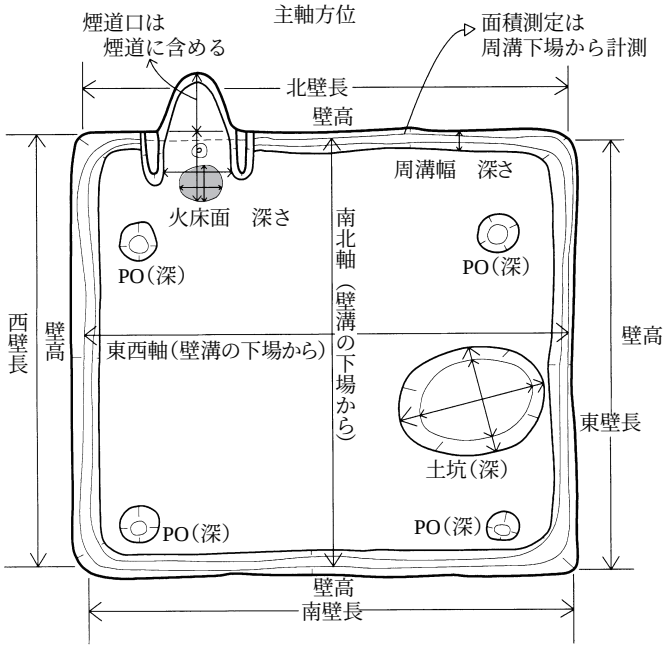
10　引用・参考文献については、巻末に収めた。

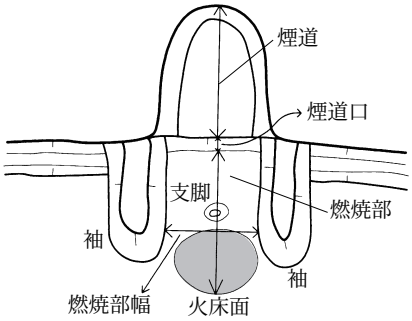
11　出土遺物、実測図、写真などは、現在青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

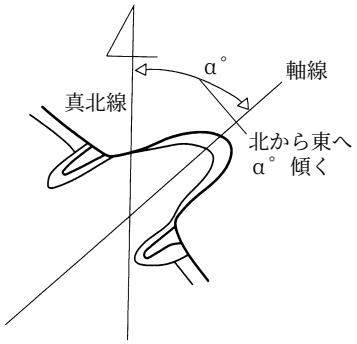
12　発掘調査及び本報告書の作成にあたっては、下記の方々からご協力を得た（敬称略、順不同）。

北林　八洲晴、木村　康一、工藤　清泰、小林　和彦、杉山　陽亮、藤原　弘明

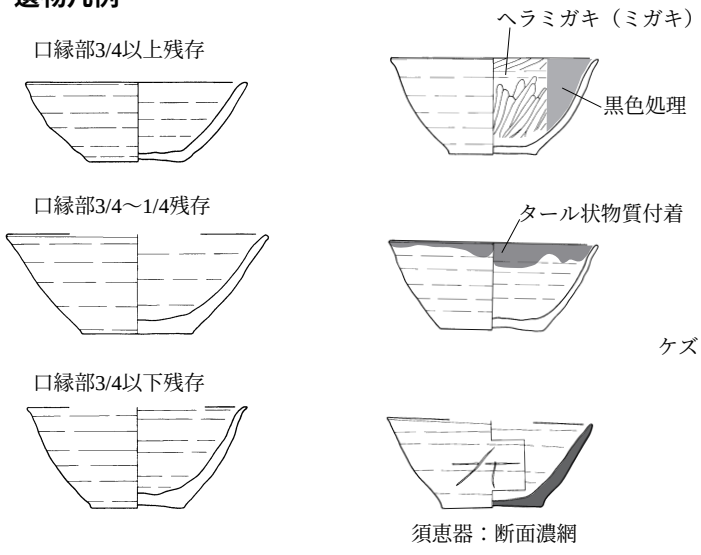
遺構凡例

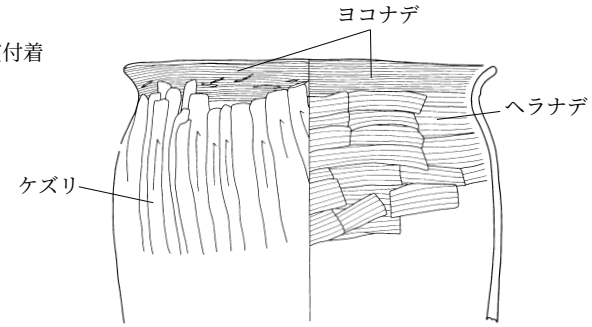






遺物凡例





目　　次

＜第一分冊＞

口絵
序
例言
目次

第 1 章　調査の概要 …… 1
　第 1 節　調査に至る経過 …… 1
　第 2 節　調査要項 …… 1
　第 3 節　調査方法 …… 3
　第 4 節　調査の経過 …… 4

第 2 章　遺跡の概要 …… 5
　第 1 節　遺跡周辺の地形と地質について …… 5
　第 2 節　遺跡の概観 …… 10

第 3 章　縄文時代の遺構 …… 19
　第 1 節　竪穴住居跡 …… 19
　第 2 節　土坑 …… 36
　第 3 節　溝状土坑 …… 42
　第 4 節　土器埋設遺構 …… 63

第 4 章　縄文時代の遺構外出土遺物 …… 64
　第 1 節　土器 …… 64
　第 2 節　石器 …… 69
　第 3 節　土製品、石製品 …… 73

第 5 章　平安時代の遺構 …… 86
　第 1 節　壕跡 …… 86
　第 2 節　竪穴住居跡 …… 92
　第 3 節　竪穴遺構 …… 200
　第 4 節　掘立柱建物跡 …… 205
　第 5 節　柱列 …… 209
　第 6 節　井戸跡 …… 211
　第 7 節　土坑 …… 214
　第 8 節　円形・方形周溝 …… 250
　第 9 節　溝跡 …… 252
　第10節　道跡 …… 287
　第11節　土器埋設遺構 …… 289
　第12節　性格不明遺構 …… 289

第 6 章　平安時代の遺構外出土遺物……291
第 1 節　土師器……291
第 2 節　須恵器、須恵器片利用の円盤……291
第 3 節　石器……291
第 4 節　鉄製品……291

第 7 章　時期不明の遺構と遺物……295
第 1 節　時期不明の遺構……295
1　掘立柱建物跡……295
2　土坑……296
3　焼土遺構……299
4　溝跡……301
5　小穴群……308
第 2 節　遺物……319
1　珠洲……319
2　近世陶磁器……319
3　古銭……319
4　土製品……319
5　石製品……319

第 8 章　調査の成果とまとめ……321
第 1 節　縄文時代の遺構……321
1　竪穴住居跡……321
2　土坑……328
3　溝状土坑……328
第 2 節　平安時代の遺構と遺物……330
1　検出遺構……330
（1）竪穴住居跡……330
（2）壕跡……343
（3）土坑……344
（4）溝跡……346
（5）円形・方形周溝……347
（6）道跡……348
（7）遺構の配置について……348
2　出土遺物……350
（1）土師器……350
（2）須恵器……356
（3）金属製品……369
（4）土製品・石製品……373
第 3 節　時代、時期の不明な遺構……376
遺構・遺物観察表……378
報告書抄録

図 版 目 次

図1　山元（1）遺跡調査区域図…… 3
図2　浪岡町周辺の等高線図…… 6
図3　浪岡町周辺の地形分類図…… 6
図4　山元（1）遺跡調査区内の地形分類…… 9
図5　基本層序…… 9
図6　遺跡の位置と周辺の遺跡…… 11
図7　山元（1）遺跡と山元（2）遺跡…… 12
図8　山元（1）遺跡遺構配置図（1）…… 15
図9　山元（1）遺跡遺構配置図（2）…… 17
図10　縄文時代竪穴住居跡の分布…… 19
図11　第2号住居跡…… 20
図12　第11号、28号住居跡…… 21
図13　第31号住居跡…… 23
図14　第34号住居跡…… 24
図15　第37号住居跡…… 24
図16　第38号住居跡…… 26
図17　第38号住居跡出土土器…… 27
図18　第38号住居跡出土石器…… 28
図19　第39号住居跡…… 29
図20　第40号住居跡…… 30
図21　第41号住居跡…… 32
図22　第42号住居跡…… 32
図23　第43号住居跡…… 33
図24　第47号住居跡…… 35
図25　縄文時代の土坑…… 40
図26　縄文時代の土坑出土遺物…… 41
図27　溝状土坑（1）…… 56
図28　溝状土坑（2）…… 57
図29　溝状土坑（3）…… 58
図30　溝状土坑（4）…… 59
図31　溝状土坑（5）…… 60
図32　溝状土坑（6）…… 61
図33　溝状土坑（7）、出土遺物（1）…… 62
図34　溝状土坑出土遺物（2）…… 63
図35　第1号土器埋設遺構…… 63
図36　縄文時代の遺物分布…… 64
図37　遺構外出土土器（1）…… 67
図38　遺構外出土土器（2）…… 68
図39　遺構外出土石器（1）…… 74
図40　遺構外出土石器（2）…… 75
図41　遺構外出土石器（3）…… 76
図42　遺構外出土石器（4）…… 77
図43　遺構外出土石器（5）…… 78
図44　遺構外出土石器（6）…… 79
図45　遺構外出土石器（7）…… 80
図46　遺構外出土石器（8）…… 81
図47　遺構外出土石器（9）…… 82
図48　遺構外出土石器（10）…… 83
図49　遺構外出土石器（11）…… 84
図50　遺構外出土石器（12）…… 85
図51　壕跡とセクション（1）…… 87
図52　壕跡セクション（2）…… 88
図53　壕跡出土遺物（1）…… 89
図54　壕跡出土遺物（2）…… 90
図55　壕跡出土遺物（3）…… 91
図56　第1号住居跡…… 93
図57　第1号住居跡 カマドと出土遺物…… 94
図58　第3号住居跡（1）…… 96
図59　第3号住居跡（2）…… 97
図60　第3号住居跡出土遺物（1）…… 98
図61　第3号住居跡出土遺物（2）…… 99
図62　第4号住居跡……101
図63　第4号住居跡出土遺物……102
図64　第5号住居跡と出土遺物……105

図65　第6号住居跡（1）……106
図66　第6号住居跡（2）……107
図67　第6号住居跡出土遺物（1）……108
図68　第6号住居跡出土遺物（2）……109
図69　第8号住居跡と出土遺物……111
図70　第9号住居跡と出土遺物……112
図71　炭化材と遺物の出土状況……113
図72　第10号住居跡と出土遺物……115
図73　第12号住居跡と出土遺物、
　　第13号住居跡と出土遺物……117
図74　第14号住居跡……119
図75　第14号住居跡出土遺物（1）……120
図76　第14号住居跡出土遺物（2）……121
図77　第15号住居跡（1）……123
図78　第15号住居跡（2）、出土遺物（1）……124
図79　第15号住居跡出土遺物（2）……125
図80　第16号住居跡……127
図81　第16号住居跡出土遺物……128
図82　第18号住居跡と出土遺物……130
図83　第19号住居跡と出土遺物……132
図84　第20号住居跡……135
図85　第20号住居跡遺物出土状況……136
図86　第20号住居跡 カマドと出土遺物（1）……137
図87　第20号住居跡出土遺物（2）……138
図88　第20号住居跡出土遺物（3）……139
図89　第20号住居跡出土遺物（4）……140
図90　第21号・22号住居跡……142
図91　第23号住居跡……144
図92　第23号住居跡出土遺物と出土状況……145
図93　第24号住居跡……146
図94　第24号住居跡出土遺物……147
図95　第25号住居跡と出土遺物……148
図96　第26号住居跡（新段階）……150
図97　第26号住居跡（古段階）と出土遺物……151
図98　第27号住居跡と出土遺物……152
図99　第29号住居跡……154
図100　第29号住居跡出土遺物……155
図101　第30号住居跡と出土遺物……155
図102　第32号住居跡と出土遺物……157
図103　第33号住居跡と出土遺物……159
図104　第33号住居跡出土遺物と出土状況……160
図105　第35号住居跡と出土遺物……161
図106　第36号住居跡……163
図107　遺物出土状況……164
図108　第36号住居跡出土遺物……165
図109　第44号住居跡と出土遺物……167
図110　第45号住居跡と出土遺物……168
図111　第46号住居跡……170
図112　第48号住居跡と出土遺物……171
図113　第49号住居跡と出土遺物……173
図114　第50号住居跡と出土遺物……175
図115　第51号住居跡と出土遺物……177
図116　第52号・53号住居跡……178
図117　第54号住居跡と出土遺物……179
図118　第55号住居跡……181
図119　第55号住居跡出土遺物……182
図120　第56号住居跡……183
図121　第56号住居跡出土遺物……184
図122　第57号住居跡……186
図123　第58号住居跡……187
図124　第58号住居跡出土遺物……188
図125　第59号・60号住居跡と出土遺物……189
図126　第62号住居跡と出土遺物……190
図127　第65号・66号住居跡……193

図128　第65号住居跡 カマドと出土遺物……194
図129　第65号・66号住居跡出土遺物……195
図130　第67号住居跡と出土遺物……196
図131　第68号住居跡と出土遺物……197
図132　第69号住居跡と出土遺物……198
図133　第70号住居跡……199
図134　竪穴遺構……202
図135　竪穴遺構出土遺物……203
図136　壕内掘立柱建物跡・柱列配置、
第1号掘立柱建物跡……206
図137　第2号・3号掘立柱建物跡……207
図138　第4号掘立柱建物跡……208
図139　第1号・2号柱列……210
図140　井戸跡と出土遺物……212
図141　平安時代の土坑（1）……238
図142　平安時代の土坑（2）……239
図143　平安時代の土坑（3）……240
図144　平安時代の土坑（4）……241
図145　平安時代の土坑（5）……242
図146　平安時代の土坑（6）……243
図147　平安時代の土坑（7）……244
図148　平安時代の土坑（8）……245
図149　平安時代の土坑出土土師器（1）……246
図150　平安時代の土坑出土土師器（2）……247
図151　平安時代の土坑出土須恵器（1）……248
図152　平安時代の土坑出土
須恵器（2）、鉄器・石製品等……249
図153　円形・方形周溝……251
図154　平安時代の溝跡遺構配置……263
図155　平安時代の溝跡（1）……264
図156　平安時代の溝跡（2）……265
図157　平安時代の溝跡（3）……266
図158　平安時代の溝跡（4）……267
図159　平安時代の溝跡（5）……268
図160　平安時代の溝跡（6）……269
図161　平安時代の溝跡（7）……270
図162　平安時代の溝跡（8）……271
図163　平安時代の溝跡（9）……272
図164　平安時代の溝跡（10）……273
図165　平安時代の溝跡（11）……274
図166　平安時代の溝跡（12）……275
図167　平安時代の溝跡（13）……276
図168　平安時代の溝跡（14）……277
図169　平安時代の溝跡（15）……278
図170　平安時代の溝跡（16）……279
図171　平安時代の溝跡（17）……280
図172　平安時代の溝跡出土土師器（1）……281
図173　平安時代の溝跡出土土師器（2）……282
図174　平安時代の溝跡出土土師器（3）……283
図175　平安時代の溝跡出土須恵器（1）……284
図176　平安時代の溝跡出土須恵器（2）……285
図177　平安時代の溝跡出土遺物
（石器・ミニチュア土器・土製品・金属製品）……286
図178　道跡（1）……287
図179　道跡（2）……288
図180　土器埋設遺構、性格不明遺構……290
図181　遺構外出土土師器……292
図182　遺構外出土須恵器……293
図183　遺構外出土遺物
（ミニチュア土器・金属製品・砥石）……294
図184　第5号掘立柱建物跡……295
図185　第1号焼土遺構……299
図186　時期不明の土坑……300
図187　時期不明の溝跡（1）……309

図188　時期不明の溝跡（2）……310
図189　時期不明の溝跡（3）……311
図190　時期不明の溝跡（4）……312
図191　時期不明の土坑、溝跡出土遺物……313
図192　小穴群1 全体図……314
図193　小穴群1 拡大図①……315
図194　小穴群1 拡大図②……316
図195　小穴群1 拡大図③……317
図196　小穴群2……318
図197　その他の遺物……320
図198　縄文時代の住居跡と土坑の分布……322
図199　縄文時代住居跡集成……324
図200　縄文時代前期中葉の住居跡例（1）……325
図201　縄文時代前期中葉の住居跡例（2）……326
図202　縄文時代前期中葉の住居跡例（3）……327
図203　縄文時代、溝状土坑の分布……329
図204　平安時代住居跡集成（1）……337
図205　平安時代住居跡集成（2）……338
図206　平安時代住居跡集成（3）……339
図207　平安時代住居跡集成（4）……340
図208　カマド集成（1）……341
図209　カマド集成（2）……342
図210　遺構の変遷……349
図211　一括遺物1……351
図212　一括遺物2……352
図213　一括遺物3……353
図214　一括遺物4とその他の資料1……354
図215　その他の資料2……355
図216　須恵器集成（1）……360
図217　須恵器集成（2）……361
図218　須恵器集成（3）……362
図219　須恵器集成（4）……363
図220　須恵器集成（5）……364
図221　須恵器集成（6）……365
図222　須恵器集成（7）……366
図223　須恵器集成（8）……367
図224　ヘラ記号集成……368
図225　金属製品集成図1……371
図226　金属製品集成図2……372
図227　土製品、石製品……375

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経過

当遺跡に隣接する高屋敷館遺跡は、国道７号浪岡バイパス建設事業の実施に先だち、平成６年６～11月と平成７年５～11月に、当センターが発掘調査を行なった（注1～2）。この後、この館跡の保存をめぐって文化庁、青森県文化課（現文化財保護課）、浪岡町が建設省青森工事事務所（現国土交通省青森河川国道事務所）と協議を行い、西側にルート変更して保存が図られることとなった。これを受け、青森県教育庁文化課は平成11年６月28日～７月９日に、新ルート内の埋蔵文化財確認調査を行なった。この結果、平安時代の竪穴住居跡３軒と少量の遺物が発見された（注3）が、記録保存措置で対応が可能と判断され、新ルートが決定した。

高屋敷館はこの後、平成13年１月29日に国史跡に指定されたが、この館跡を含む旧ルートと新ルートの土地交換等の点で、国土交通省と浪岡町による協議・手続きが行なわれた。そして、平成13年度から、新ルートの調査実施に向けて打合せがもたれ、平成13年10月25日には、文化財保護課・当センター職員が新ルート上の山元（１）・高屋敷館遺跡、野尻（２）・（３）遺跡を踏査した。翌平成14年１月22日には、国土交通省青森工事事務所・文化財保護課・当センターの三者で、平成14年度以降の調査実施に向けて打合せを行ない、うわもの撤去・伐採等の問題で解決のメドがついた地域から暫時、調査を行ない、すべての調査を２年間で終えることとなった。

山元（１）遺跡の調査は、同年４月16日から10月18までの予定で、約5,500㎡を対象として行なうこととなり、翌平成15年は、残りの部分12,300㎡を４月15日から10月24日までの予定で調査することになった。（福田　友之）

（注1）青森県埋蔵文化財調査センター　1997　『高屋敷館遺跡発掘調査概報』県埋蔵文化財調査報告書第206集

（注2）青森県埋蔵文化財調査センター　1998　『高屋敷館遺跡』県埋蔵文化財調査報告書第243集

（注3）青森県教育委員会　2000　『青森県遺跡詳細分布調査報告書 XII』県埋蔵文化財調査報告書第284集

第２節　調査要項

１　調査目的

国道７号浪岡バイパス建設事業の実施の実施に先立ち、当該地区に所在する山元（１）遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

２　発掘調査期間　（平成14年度）４月16日から同年７月５日まで

（平成15年度）４月15日から同年10月24日まで

３　遺跡名及び所在地　山元（１）遺跡（青森県遺跡番号29054）

青森県南津軽郡浪岡町大字高屋敷字野尻41-16他

4　調査面積　（平成14年度）　5,500㎡
（平成15年度）　13,000㎡

5　調査委託者　国土交通省青森工事事務所（平成15年度から同青森河川国道事務所）

6　調査受託者　青森県教育委員会

7　調査担当機関　青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査体制

（平成14年度）

調査指導員　市川　金丸　　青森県考古学会長（考古学）
調　査　員　高島　成侑　　八戸工業大学教授（建築史）
　　山口　義伸　　青森県環境生活部文化・スポーツ振興課総括主幹（地質学）
　　工藤　清泰　　浪岡町教育委員会生涯学習課文化班長（考古学）
調査担当者　青森県埋蔵文化財調査センター
　　所　長　　佐藤　良治
　　次　長　　福田　友之
　　調査第三課長　　大湯　卓二
　　総務課長　　工藤　和夫
　　文化財保護主幹　　畠山　昇（現・総括主幹）
　　文化財保護主事　　佐藤　純子（現･文化財保護主査）
　　調査補助員　　長谷川　蓉子・奈良岡　詩織
　　〃　　成田　英規・葛西　恵子
　　研修職員　　樋口　徹典（尾上町教育委員会主事補）

（平成15年度）

調査指導員　村越　潔　　青森大学社会学部教授（考古学）
調　査　員　山口　義伸　青森県立浪岡高等学校教諭（地質学）
調査担当者　青森県埋蔵文化財調査センター
　　所　長　　佐藤　良治
　　次　長　　福田　友之
　　総務課長　　工藤　和夫
　　文化財保護主幹　　畠山　昇（現・総括主幹）
　　文化財保護主事　　小山　浩平
　　臨時事務補助員　　工藤　司
　　調査補助員　　長谷川　蓉子・奈良岡　詩織
　　〃　　葛西　恵子・其田　香保里
　　〃　　二川目　直人・戸田　久恵

（福田　友之）

第３節　調査方法

グリッドの設定は公共座標を用い、過去に高屋敷館遺跡の調査で設定したグリッドの軸線にあわせることとした。その際、本遺跡から北側に位置している高屋敷館南西地区や野尻（３）・（４）遺跡までを対象に４ｍのメッシュをかけ、南から北方向へ算用数字、東から西へアルファベットＡ～Ｙを使用して表記した。グリッドの呼称は軸線の南東隅の交点を用いた。なお、本遺跡と高屋敷館南西地区との境界は85ラインであり、これより南側の１～85ラインの区域が山元（１）遺跡である。

遺構の調査は二分法及び四分法で行い、遺構の実測は遣り方測量とトータルステーションによる測量を併用した。遣り方測量の縮尺は1/20を基本とし、必要に応じて1/10とした。また、トータルステーションによる遺構実測に使用したソフトは株式会社アイシン精機の「遺構実測支援システム」（「遺構くん」）である。

遺構番号は遺構の種類に応じた仮の表記を用い、確認した順に番号を付した。遺構に用いた仮の表記は、例言に記した通りであるが、調査の進展によって遺構の種類や番号に欠番が生じたものが少数ある。そのため、本書では遺構名と現場で使用した遺構の略号・番号を併記した。

遺物の取り上げはグリッドごと、層位ごとに一括して取り上げたが、必要に応じて1/10及び1/20の縮尺で記録してから取り上げたものもある。また、遺構内においては出土地点を記録して取り上げることを基本としたが、なかには覆土一括あるいは層位一括で取り上げたものもある。

土層の名称は、基本土層については表土から下位にローマ数字を付し、細分される場合は小文字のアルファベットを用いた。遺構内の堆積土については、上位から下位に算用数字を付した。

写真撮影は35㎜の一眼レフカメラのほか、デジタルカメラやインスタントカメラを用いて遺構の堆積状況、遺物の出土状況、完掘状況等を中心に撮影し、その他必要に応じて基本土層や調査状況などについても記録した。フィルムはモノクロネガとカラーリバーサル及びカラーネガを使用した。

（畠山）

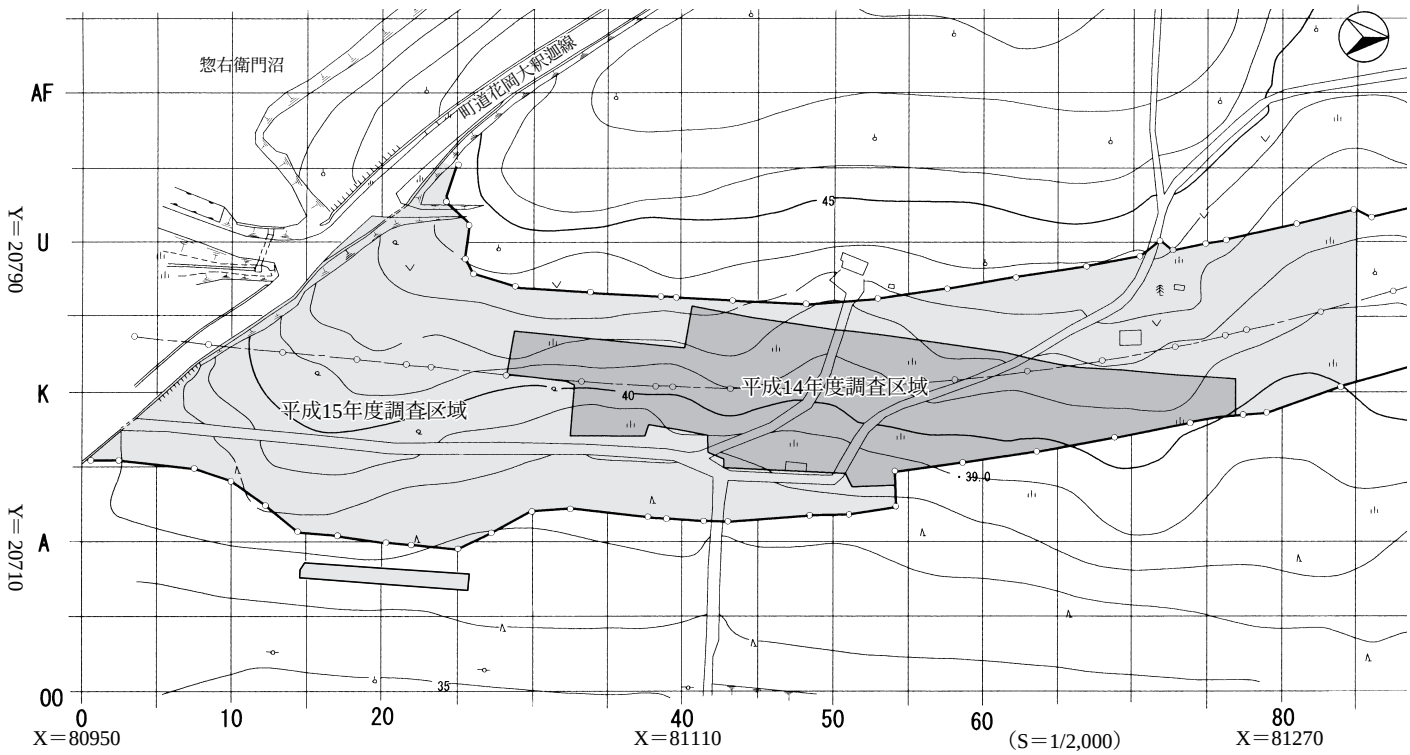


図1　山元(1)遺跡調査区域図

第４節　調査の経過

（平成14年度）

４月16日、調査器材運搬後、器材整理と環境整備を行う。調査区域を確認し、原点移動と粗掘り等の調査に入る。

４月下旬、溝跡と平安時代の住居跡を確認、先に溝跡の調査に入る。

５月上旬には縄文時代の土坑や溝状土坑、下旬には平安時代の道跡を検出する。土坑の調査では底面から縄文時代後期の浅鉢型土器２個が重なった状態で出土する。

７月５日、本遺跡の調査を終了し、翌日から高屋敷館遺跡南西地区の調査に入る。

10月18日、高屋敷館遺跡南西地区の調査を終了し、今年度の調査を終了する。

（平成15年度）

４月15日、調査器材運搬後、器材整理と環境整備を行う。調査区域の確認、昨年度で検出した遺構の清掃とこれに繋がる部分の粗掘りを行う。

４月、北側の区域を中心に粗掘りを行い、検出された遺構の精査を行う。また、順次南側へと粗掘りを拡張させ、遺構の確認を優先させる。この結果、平安時代の住居跡10軒を確認し、遺構密度が高い様子がうかがわれた。

５月、調査区の北側と南側とに分かれて調査を進める。南側には遺構が集中している様子がしだいに明らかになる。粗掘りの進展につれて、壕が並行に２条確認され、下旬にはこれが方形に巡っていることが明らになってくる。遺構の検出数は増加したが、壕で囲まれた区域では遺構の密度が比較的薄いことが判明する。北側の調査区は下旬に終了し、全員が南側の調査区に合流して遺構の調査を進める。この頃、まだ未買収であった町道東側のＪＲ防風林区域の買収が遅れ気味であること、防風林の代わりに設置する防風フェンス部分も調査して欲しい旨の要望が原因者側から示される。

６月、壕の内側で検出された遺構や壕と重複している遺構の調査を中心に行う。外壕の北側では平安時代の住居跡の他に縄文時代前期の住居跡も多数検出される。

７月上旬、未買収であったＪＲ防風林区域の立木の伐採が終了したことから、中旬にＪＲ防風林の調査に入る。粗掘りが進むにつれて住居跡や溝跡等の遺構が多数検出され、ここでも遺構密度が高い様子がしだいに明らかになってくる。

８月上旬、ＪＲ防風林区域で検出した遺構の精査に着手する。この区域は低地にあって雨水がたまりやすく、また黒色土が厚いことから遺構確認の難しい場所でもあった。加えて遺構の重複も激しかったために、しだいに調査が難航しはじめる。

９月７日、本遺跡と高屋敷館遺跡・野尻（3）遺跡との合同の現地見学会を開催する。見学者は150名で、盛況であった。

９月上旬、町道の迂回道路を造成し、町道下の調査にも着手する。ＪＲ防風林からこの町道部分を含めた区域では、平安時代の住居跡や土坑、方形周溝、溝跡、道跡のほか、縄文時代の溝状土坑などの遺構も重複して検出される。

10月24日、全遺構の調査を終了。当センターに器材を撤収して、調査を終了した。（畠山）

第２章　遺跡の概要

第１節　遺跡周辺の地形と地質について

青森県立浪岡高等学校教諭　　山口義伸

南津軽郡浪岡町は津軽平野の南東部に位置している。

津軽半島中央部は、袴腰岳（627m）、大倉岳（677m）、馬ノ神山（549m）、梵珠山（468m）などがほぼ南北に連なって津軽山地をなしており、西の津軽平野と東の陸奥湾に臨む青森平野との分水嶺となっている。浪岡町の西方に位置する津軽山地南端部は梵珠山系と呼ばれ、標高400m以下の低い山地からなっている。そして梵珠山系外縁には緩やかな前田野目台地が分布し津軽平野に接している。一方浪岡町東方には、津軽山地の南方への延長部にあたる八甲田火山起源の緩やかな火山性丘陵が展開しており、大釈迦丘陵と呼ばれている。

図２は浪岡町周辺の等高線図を示したものである。西の梵珠山系から外縁の前田野目台地にかけての標高30～240mの等高線は間隔が広く緩やかに南傾斜する地形であることが読み取ることができる。東の大釈迦丘陵ではほぼ南北に延びる標高60mの等高線を境にその間隔に差違が認められる。標高60～400mの等高線は間隔が広く、谷筋においては入り組みが大きく、緩やかな丘陵を刻む小谷によって開析されているのが読み取ることができる。標高60m以下の等高線は弧状の配置をなしており、西方の大釈迦川に向かって1000分の15～20の緩い勾配をもつ扇状地として分布している。なお、標高60m付近に認められる南北に直線的な線状模様（リニアメント）は高賀野－平賀撓曲を示している。

浪岡町を流れる主な河川として、大釈迦川、浪岡川、正平津川がある。大釈迦川は梵珠山を源とし、梵珠山系と大釈迦丘陵の境界をなす形でほぼ南流している。なお、梵珠山系の分水嶺西方には梵珠山北方の馬ノ神山を源とする前田野目川もほぼ南流している。一方、浪岡川は東方の大釈迦丘陵を北西流して平野部に達し、前田野目台地南端の女鹿沢付近で大釈迦川と合流している。合流後は台地を迂回し、板柳付近で十川と合流している。正平津川も大釈迦丘陵に源をもち、北西流して浪岡町五本松付近で浪岡川と最接近し浪岡城跡で合流している。

次に浪岡町周辺の地形及び地質について述べることとする。図３には浪岡町周辺の地形分類を示した。浪岡町周辺は奥羽脊梁山脈の西翼にあって、いわゆるグリーンタフ地域の前縁部に位置している。この付近の基盤岩は主に梵珠山系に分布し、流紋岩質溶岩・同凝灰岩（馬ノ神山層）、シルト岩（源八森層）、砂岩（大釈迦層）などの新第三紀層からなっている。そして、梵珠山系外縁の狼ノ長根面及び丘陵では約65万年前に流下した八甲田第１期火砕流堆積物と第四紀の前田野目層（細粒砂・シルト）で構成され、基盤の大釈迦層を覆っている。特に、本遺跡に隣接する丘陵では前田野目層が東方の大釈迦川に向かって大きく傾斜しており、この川に沿って延びる浪岡撓曲の影響が反映していると考えられる。一方、大釈迦川以東に展開する大釈迦丘陵は上述の八甲田第１期火砕流堆積物と約40万年前に流下した八甲田第２期火砕流堆積物の厚い堆積物から構成されている。なお、八甲田第１期及び八甲田第２期火砕流堆積物は北八甲田山北東麓に位置する田代平カルデラの形成に絡む噴出物である。

中位段丘に相当する花岡面は大釈迦川にわずかに分布しており、構成層としてローム層直下に有機

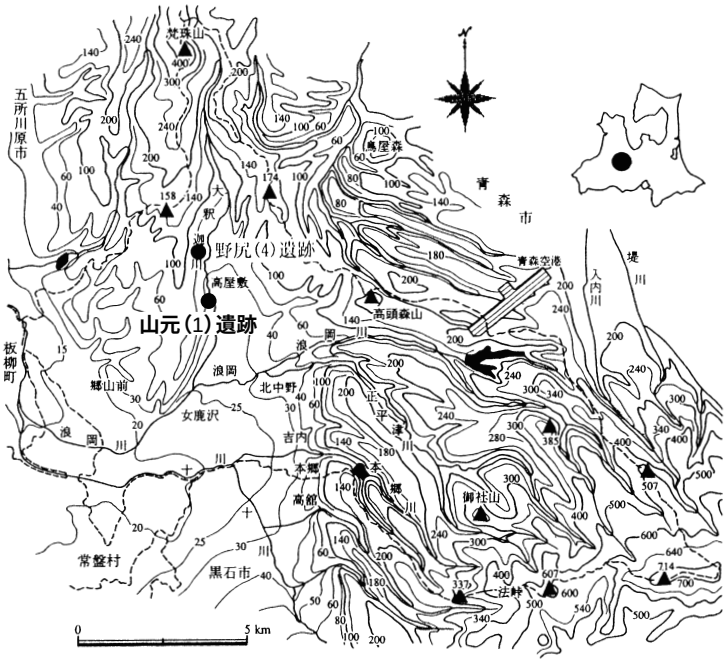
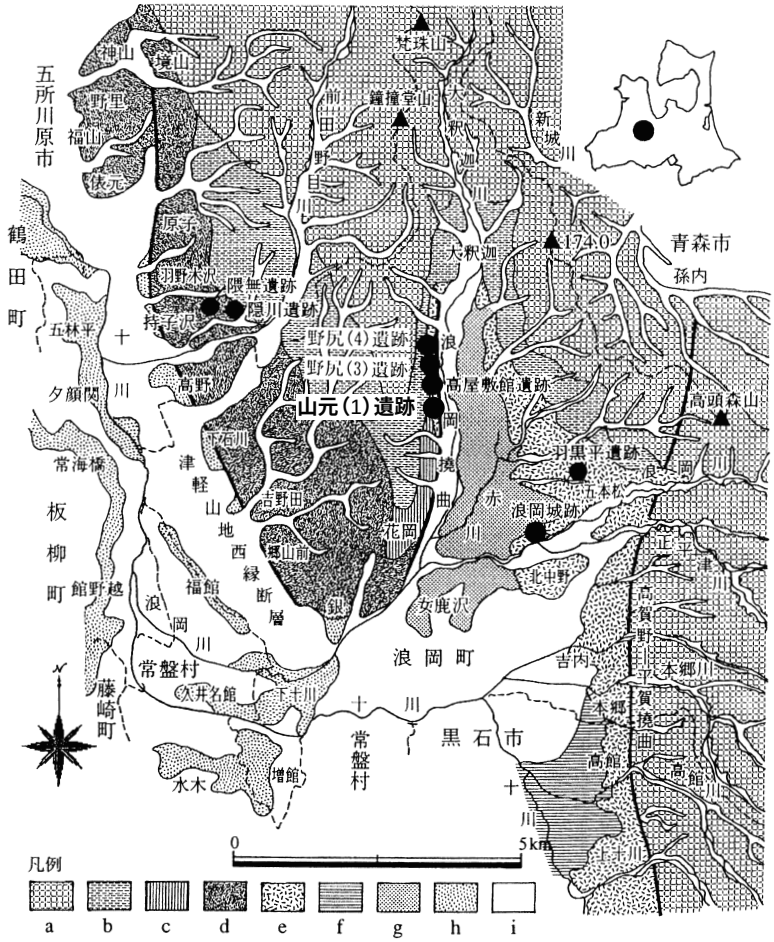


図2　浪岡町周辺の等高線図（浪岡町教育委員会(2004)より転載）



a. 丘陵地　b. 狼ノ長根面　c. 花岡面　d. 樽沢面　e. 羽黒平面
f. 平賀面　g. 上位沖積面　h. 自然堤防　i. 下位沖積面

図3　浪岡町周辺の地形分類図（浪岡町教育委員会(2004)より転載）

質粘土、砂及び砂礫を主体とした扇状地性堆積物が認められる。なお、ローム層最下部には津軽西海岸の鰺ヶ沢町から深浦町にかけては指標としての洞爺火山灰が薄く堆積しているが、浪岡町周辺では確認されていない。

低位段丘は津軽山地西縁及び大釈迦丘陵西縁に分布している。津軽山地西縁に展開する樽沢面では丘陵に隣接して標高20～50mの、1000分の20～25の傾斜地として南北に帯状に分布している。平野部とは比高数mの急崖あるいは急斜面で接し、段丘面を刻む小谷の発達でやや起伏に富んでいる。構成層は最上部に低位段丘の指標火山灰である千曳浮石（東北地方第四紀研究グループ、1969）、あるいは碇ヶ関浮石（山口、1993）に比定される降下火山灰が認められ、直下に軟弱な有機質粘土と細粒～中粒砂の互層が堆積している。一方、大釈迦川以東の丘陵縁辺部に展開する羽黒平面では浪岡川流域の五本松付近を扇頂部とする扇状地が展開している。標高35～60mの、1000分の15～20の緩い傾斜地であって、浪岡川や正平津川などによって大きく開析されている。この扇状地は丘陵から供給された砂礫や有機質粘土、火砕流堆積物で構成されている。この火砕流堆積物は十和田カルデラに起因するものであって、約3.2万年前と約1.3万年前に流下したと考えられている（山口、1993）。なお、本遺跡が立地する大釈迦川西岸にも小規模ながら後背地から供給された砂礫層や火砕流起源の浮石質な粘土・砂などが堆積する段丘（樽沢面）が存在している。面上に立地する高屋敷館遺跡で検出された堀跡の壁面及び底面から出土した埋没樹枝の放射性炭素による年代測定を実施したところ、壁面から見られる段丘構成層からは約1.8万年前の、底面の埋没樹枝からは約2.4万年前の数値が得られている。なお、この段丘構成層が大釈迦川に向かってやや傾斜していており、前田野目層と同様に大釈迦川に沿う浪岡撓曲（活断層研究会、1991）による影響を反映していることを示唆している。

大釈迦川流域の上位沖積面は低位段丘に相当する扇状地前縁部を一部被覆しながら流域沿いに広く分布している。全体的には扇状地面から連続する形で分布することから、その境界部は不明であるが、ほぼ浪岡町中心街がこの面に立地していると考えられる。

大釈迦川西岸の低位段丘は標高40～60mであって、南北に帯状に展開している。面の開析度が小さく平滑であるが、大釈迦川に向かって500分の20～25とやや大きく傾斜している。本遺跡北方に立地する高屋敷館遺跡及び野尻（4）遺跡で確認したところ、段丘構成層である浮石質粘土中に含まれる褐鉄鉱層には周氷河地帯に見られる、波状のインボリューション（凍結融解現象）が認められる。インボリューションの凸部には低位段丘の指標火山灰である碇ヶ関浮石に相当する降下火山灰が堆積しているが、凹地には同火山灰の再堆積相を示す黄褐色浮石質粘土及び同質砂、有機質粘土からなる湿地性堆積物が縞状に堆積している。なお、褐鉄鉱層は段丘面よりもさらに大きく大釈迦川に向かって傾いており、浪岡撓曲に沿って継続的に撓曲運動が行われていた事実を示している。

山元（1）遺跡は浪岡町中心街から北方3.0㎞の地点にあって、大釈迦川西岸に分布する低位段丘上に立地している。調査区域は標高35～42mの段丘末端部に位置し、低湿地部を除いて、河床へは比高3～4mの急傾斜面で臨んでいる。

段丘面は標高39～42mのインボリューション凸部に相当し、園地造成により削平されているが、耕作土直下に碇ヶ関浮石が堆積している。一方、インボリューション凹部は標高35～39mの低湿地であって湧水が著しい。M－25～35グリッドを頂部とし南側のＥ－10グリッドから北側のＥ－55グリッドにかけての緩やかな弧状の分布を示し、大釈迦川に臨む沖積低地に隣接している。この箇所は基本層

序の第Ⅰ層から第Ⅲ層にかけての黒色腐植質土が60㎝以上と厚く堆積し、また直下には指標火山灰である碇ヶ関浮石が堆積しておらず、黄褐色浮石質粘土及び同質砂、有機質粘土からなる湿地性堆積物が縞状に堆積していることが特徴的である。なお、低位段丘に接する標高38～40mには小規模な急傾斜地が認められ、検出遺構の多くはこの急傾斜地の西側に存在している（図４）。

次に、本遺跡の調査区域内での基本層序について述べることとする。標高の高い調査区域西側の段丘面は園地造成のために削平され、基本層序の第Ⅰ層直下には碇ヶ関浮石（第Ⅴ層）が認められることから、第Ⅴ層を掘り込む遺構の確認は明瞭に識別できる。一方、標高の低い調査区東側は大釈迦川へ向かう低湿地であって、軟質の黒色腐植質土（第Ⅰ層～第Ⅲ層）が60～90㎝と厚く堆積している。このことから、基本層序は表層の削平されていない東側に設定した（図５）。基本層序の層相については高屋敷館遺跡（青森県教育委員会、1998）と対比して記述した。

第Ⅰ層　黒色土（10YR2/1）　高屋敷館遺跡の第I層に対比される。耕作土である。粘性・湿性が多少あり、固く締まる。ただ、調査区東側の低湿地では粘性・湿性が強く、全体的にソフトな感じがある。乾くと黒褐色に変色しクラックが目立つ。軽石粒・粘土粒及び炭化粒がごく少量ながら混入している。

第Ⅱａ層　黒色土（10YR2/2）　高屋敷館遺跡の第Ⅱ層上部に対比される。粘性・湿性があり、全体的に腐植質である。軽石粒・粘土粒及び炭化粒が少量ながら混入している。また、本層中には白頭山起源の苫小牧火山灰（B-Tm）が道跡（SX-01）及び第９号溝跡（SD09）周辺で薄く堆積しているのを確認できた。なお、調査区西側が削平されていることから、本層以下の各層は東側の傾斜地のみに堆積している。

第Ⅱｂ層　黒色土（10YR3/1）　高屋敷館遺跡の第Ⅱ層下部に対比される。上部の第Ⅱａ層よりもやや固く締まり、断片的な分布を示している。特に道跡（SX-01）の検出された周辺で確認されている。

第Ⅲ層　黒色土（10YR1.7/1）　高屋敷館遺跡の第Ⅲ層に対比される。粘性・湿性のある腐植質土であって、全体的にソフトながらも最上部はやや固く締まっている。標高の低い調査区域東側の低湿地で40～60㎝と厚く堆積している。軽石粒や粘土粒が多少混入している。本層最上部からは道跡（SX-01）及び第９号溝跡（SD09）が検出されている。

第Ⅳａ層　黒色土（10YR1.7/1）　高屋敷館遺跡の第Ⅳ層に対比される。全体的に腐植質であって、全体的に色調が暗く、乾くと大まかなクラックが発達する。軽石粒や粘土ブロック、細粒砂～粗粒砂の混入が目立ち、また酸化の染みもみられる。調査区域の酉側に堆積する傾向が強い。

第Ⅳｂ層　暗褐色土（10YR3/4）　高屋敷館遺跡の第Ⅴ層に対比される。粘性・湿性があり、固く締まっている。上部のⅣａ層に比較して軽石粒や粘土ブロックの混入が目立ち、粘土化した軽石粒混じりの砂質粘土である。調査区域東側の低湿地に厚く堆積している。

第Ⅴ層　黄褐色軽石（10YR5/8）　高屋敷館遺跡の第Ⅵ層に対比される。低位段丘の指標火山灰である千曳浮石（東北地方第四紀研究グループ、1969）、あるいは碇ヶ関浮石（山口、1993）に比定される降下火山灰である。調査区西側のインボリューションの凸部では緻密堅固な細粒軽石層で、径5～20㎜大の軽石粒が多量に混入している。しかし、インボリユーショ

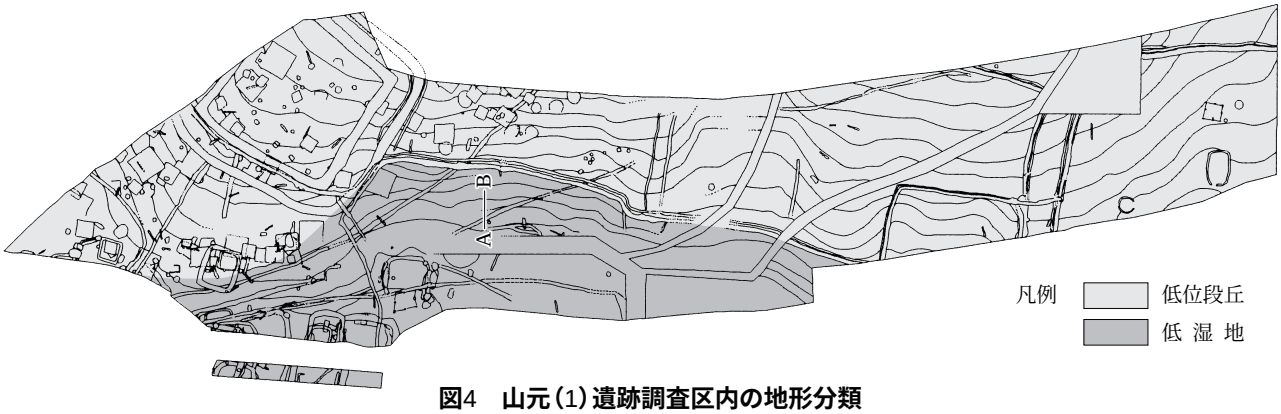


図4　山元(1)遺跡調査区内の地形分類

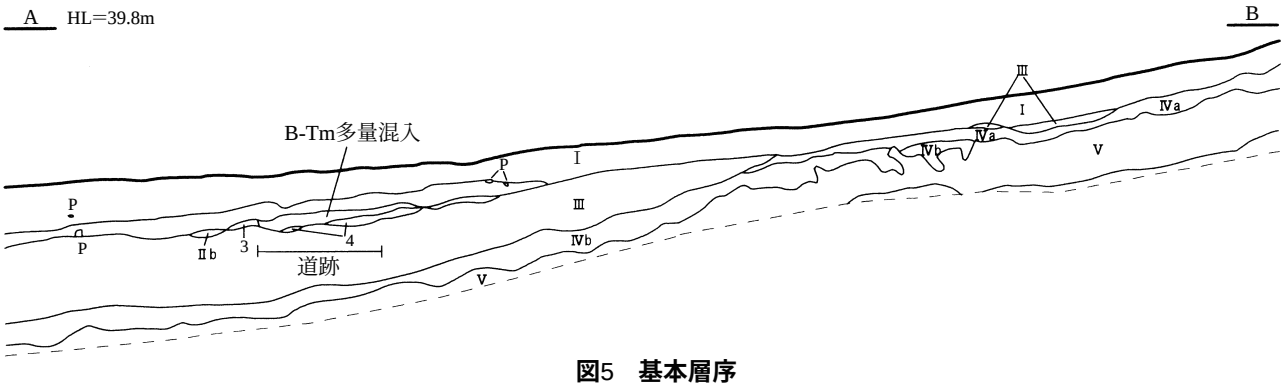


図5　基本層序

ンの凹部では水成堆積相を示し、直下の軟弱な有機質粘土と粘土化した軽石粒細粒～中粒砂の互層と同環境下で堆積したものと考えられる。

第Ⅵ層　褐色軽石質粘土（7.5YR4/4）　高屋敷館遺跡の第Ⅶ層及び第Ⅷ層に対比される。粘土化した軽石粒を多量に包含する湿地性堆積物である。高屋敷館遺跡で検出された堀跡でも確認したように、酸化の染みが認められる赤褐色粘土質細粒砂や有機質粘土が挟在して縞状の堆積相を示している。これらの特徴は、特に基本層序を設定したＪライン以東のインボリューション内の凹部に認められる。なお調査区西側では、本層最上部に風化帯が認められ、固く締まり、乾くとクラックの発達が見られる。

ところで、調査区内から検出された内壕（SD22）及び外壕（SD23）などで確認した段階では、第Ⅴ層直下に基本層序の第Ⅵ層と層相の異なる扇状地性の堆積物が認められた。低位段丘面を構成する第Ⅴ層直下には黄褐色粘土質ロームと灰褐色軽石質ロームが互層をなして堆積している。

引用・参考文献

東北地方第四紀研究グループ（1969）『東北地方における第四紀海水準変化』「日本の第四紀」　地学団体研究会専報No.15
中川久夫（1972）『青森県の第四系』「青森県の地質　第二部」青森県
村岡洋文・長谷紘和（1990）『黒石地域の地質』「地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）」地質調査所
活断層研究会編（1991）『新編目本の活断層　分布図と資料』東京大学出版会
山口義伸（1993）『平川流域での十和田火山起源の浮石流凝灰岩にっいて』「年報　市史ひろさきNo.2」弘前市
青森県教育委員会（1998）『高屋敷館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第243集
浪岡町教育委員会（2004）『野尻（4）遺跡」浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第10集

第２節　遺跡の概観

１　周辺の遺跡

浪岡町では開発に伴って多数の遺跡が調査され、古代の浪岡の様子が次第に明らかになってきている。とくに、国道７号浪岡バイパス建設や国道101号浪岡五所川原道路建設及び大釈迦工業団地開発事業に先だって実施された発掘調査では、山本遺跡、野尻（１）～（４）遺跡、高屋敷館遺跡、山元（２）・（３）遺跡等で平安時代の集落が確認されており、それぞれ特徴的な遺構や遺物が多数検出されている。これらの遺跡で検出された竪穴住居跡の総数は700軒近くにのぼるが、この中には外周溝と掘立柱建物跡が付随する特殊な構造の竪穴住居跡も相当数見られ、とくに野尻（１）・（３）・（４）遺跡に集中している。

他に特筆されるものとしては山本遺跡の精錬遺構、野尻（２）遺跡の円形周溝（墓域）や高屋敷館遺跡の環濠集落（防御性集落）等があげられる。また、野尻（４）遺跡でも小規模な環壕が検出されており、環壕の発生を考える上でも興味深い。

また、本地域には土鈴の出土数が他地域に較べてきわめて多いことも特筆される。とくに、山元（２）遺跡では県内及び東北全体で見ても、１遺跡としては傑出した出土量である。ほかに、野尻（４）遺跡の馬の線刻画が描かれた土器や山元（３）遺跡の漆皮箱と思われる残片、山元（２）遺跡の石製の硯の出土例も注目される。

これらの遺跡の年代は、一部に９世紀前半のものや12世紀前葉の集落もあるが、大半は９世紀後半から10世紀後半にかけてのものが主体となっている。

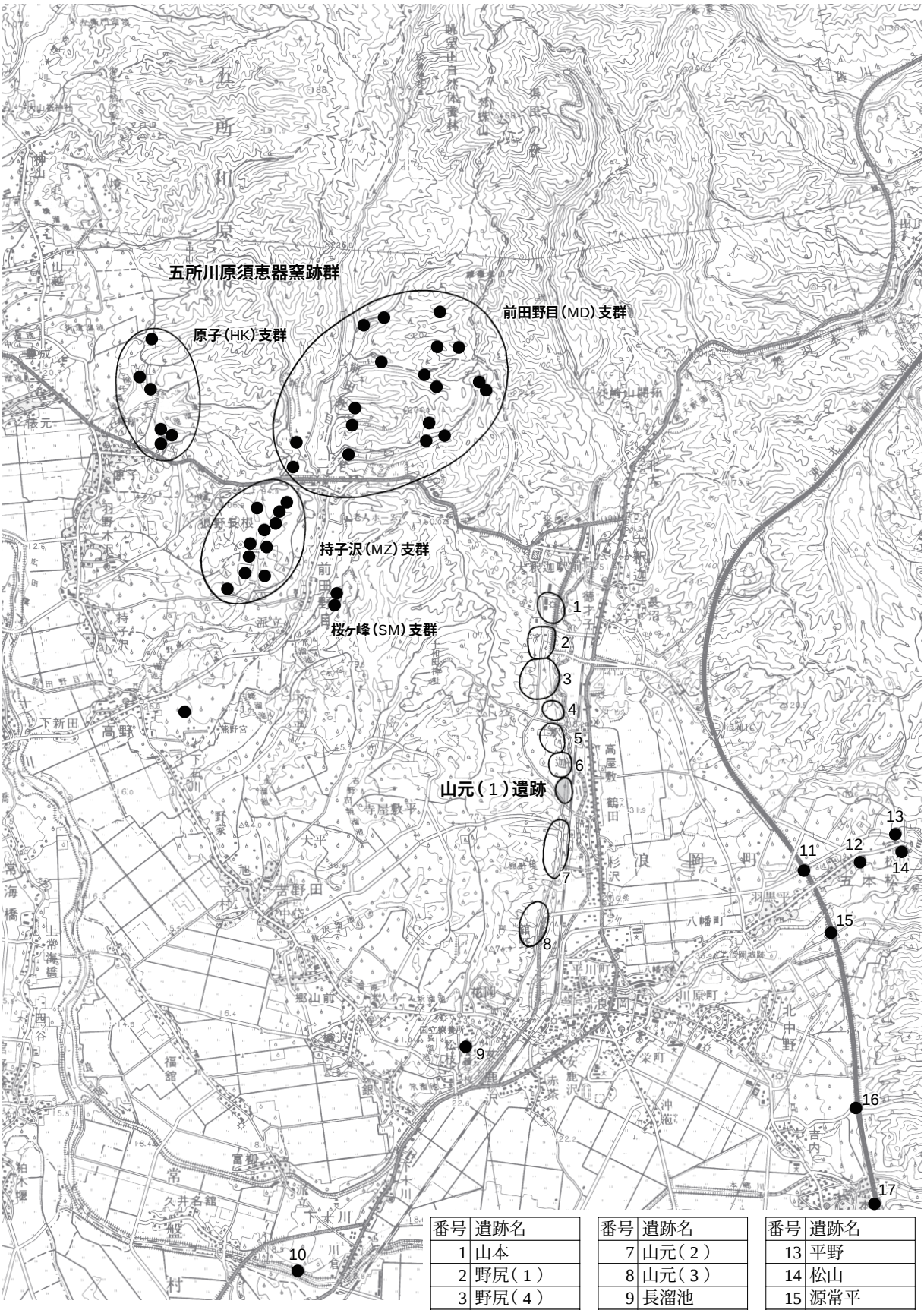
また、これらの遺跡の北西方約５㎞付近の前田野目川支流域及びその周辺には、五所川原須恵器窯跡群（前田野目系、持子沢系）も確認されており、生産地周辺の遺跡としても注目される。

さて本遺跡は、高屋敷館南西地区と山元（２）遺跡に挟まれた遺跡である。高屋敷館遺跡南西地区とは国史跡の高屋敷館遺跡の南西にあたる区域で、散発的ながら数軒の竪穴住居跡が検出されている（報告書は今年度刊行）。また、山元（２）遺跡は南側の低地を挟んだ台地上にあり、本遺跡とは60mほどの距離がある。平成４年度の発掘調査では、平安時代の住居跡108軒のほか、竪穴遺構４基、鍛冶遺構１基、掘立柱建物跡５棟などが検出されている。なお、竪穴住居跡には外周溝と掘立柱建物跡が付随する構造のものが６軒含まれているが、大部分は竪穴部分のみの構造の住居跡である。出土遺物には土師器や須恵器の他に、土鈴・土玉・土錘などの土製品、石製の硯のほか、刀子・山刀・鎌・鋤先・斧・手斧等の鉄器が出土している。

本遺跡では平安時代の道跡が検出されている。これに通ずる道跡は高屋敷館遺跡でも検出されており、当時の集落景観としてみると興味深いものがある。

２　遺跡の概観

山元（１）遺跡は大釈迦川右岸にあり、標高35～50mの段丘状に立地している。調査区は幅50～80m、長さ300mで、遺跡の東側を南北に長く横切っている。調査区内は標高36～43mの緩傾斜地で、南西側が高く、北から東にかけて徐々に低くなり、北側は標高40m前後の平坦地となっている。南東



番号	遺跡名
1	山本
2	野尻（１）
3	野尻（４）
4	野尻（２）
5	野尻（３）
6	高屋敷館

番号	遺跡名
7	山元（２）
8	山元（３）
9	長溜池
10	大沼
11	羽黒平（１）
12	羽黒平（３）

番号	遺跡名
13	平野
14	松山
15	源常平
16	杉ノ沢
17	松元

図6　遺跡の位置と周辺の遺跡

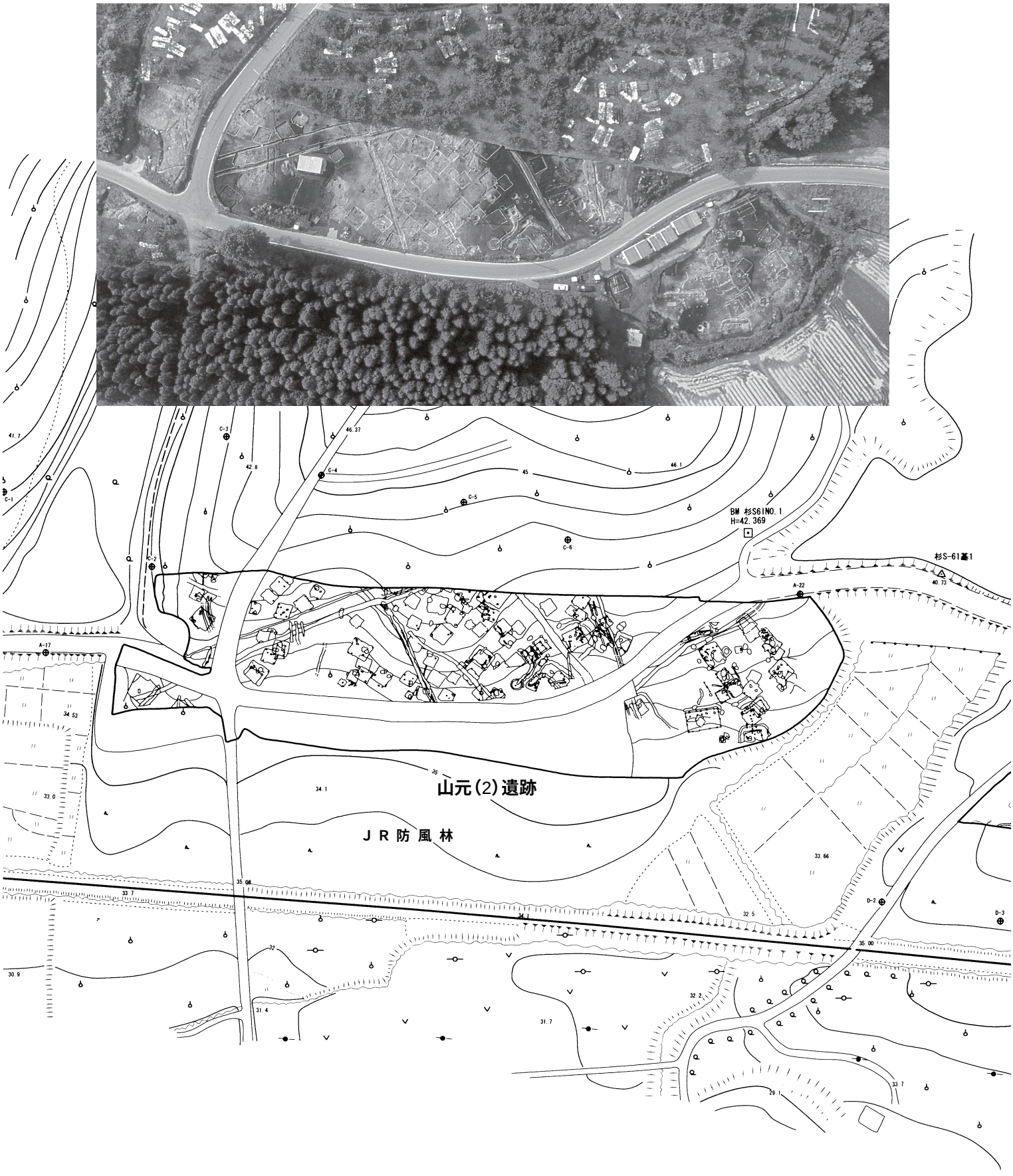
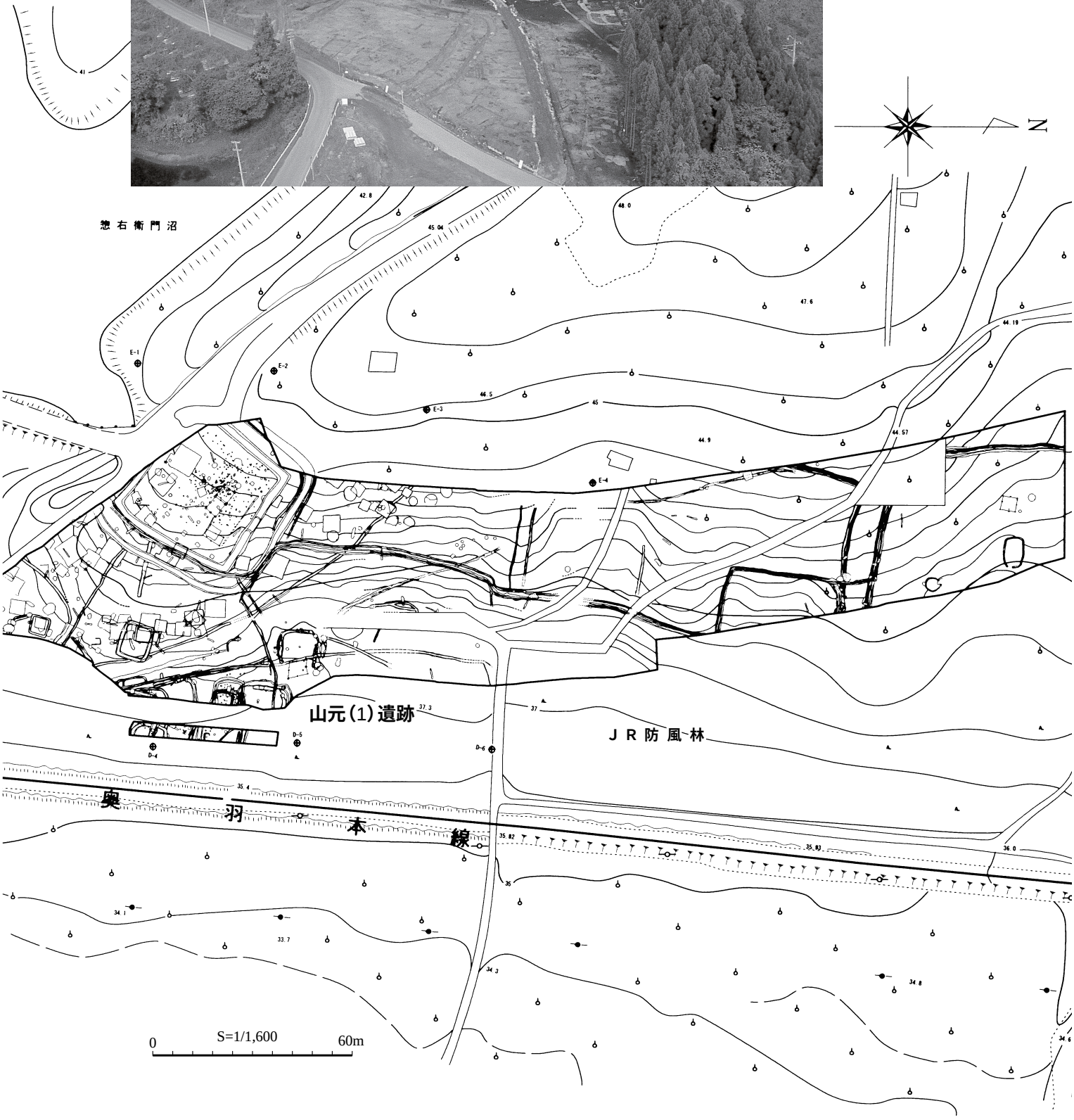


図7　山元(1)遺跡と山元(2)遺跡


惣右衛門沼
山元(1)遺跡
ＪＲ防風林
奥羽本線
N
0
S=1/1,600
60m

部の高い区域では表層に削平を受けており、東側や北側の低地では表層に黒色土が厚く堆積している。なお、調査区の大半は最近までリンゴ園や蔬菜畑に利用されており、東側の低地部分はＪＲの防風林となっている。

二カ年の発掘調査の結果、調査区域の全域で遺構が検出されたが、調査区の南側では縄文時代と平安時代の遺構が多数検出された。

縄文時代の遺構は竪穴住居跡13軒のほか、土坑、溝状土坑、土器埋設遺構が検出された。竪穴住居跡は前期中葉のもので、この時期の集落跡の検出は浪岡町においては初めての事例である。また、縄文時代後期の土坑も検出されている。出土遺物には縄文時代前期～後期の土器や石器があるが、ほとんどが縄文時代前期中葉の円筒下層ｂ式期のものである。

平安時代の遺構は竪穴住居跡53軒のほか、竪穴遺構、掘立柱建物跡、壕跡、井戸跡、土坑、円形・方形周溝、溝跡、土器埋設遺構、道跡等の遺構が検出された。壕は方形区画の二重壕で、調査区内でも高い場所に構築されている。竪穴住居跡は緩斜面上に検出され、壕と重複して検出されたものもある。掘立柱建物跡は壕の内側に検出され、壕との関連が注目される。溝跡は東側の低地で多数検出されたほかに、住居跡群と低地との間に区画するように巡っているものや集落から離れた場所に検出されたものもある。円形周溝は調査区の北側、方形周溝は壕の東側で住居跡を切って検出されている。井戸跡は集落の中心から離れた沢筋の場所や低地に構築されている。道跡は住居跡群と低地の溝跡群との間に検出され、高屋敷館遺跡方面へと続いている。出土遺物には、土師器、須恵器、ミニチュア土器、鉄器（鋤先、鏃、手鎌、釘等）、土鈴、土玉等がある。（畠山）

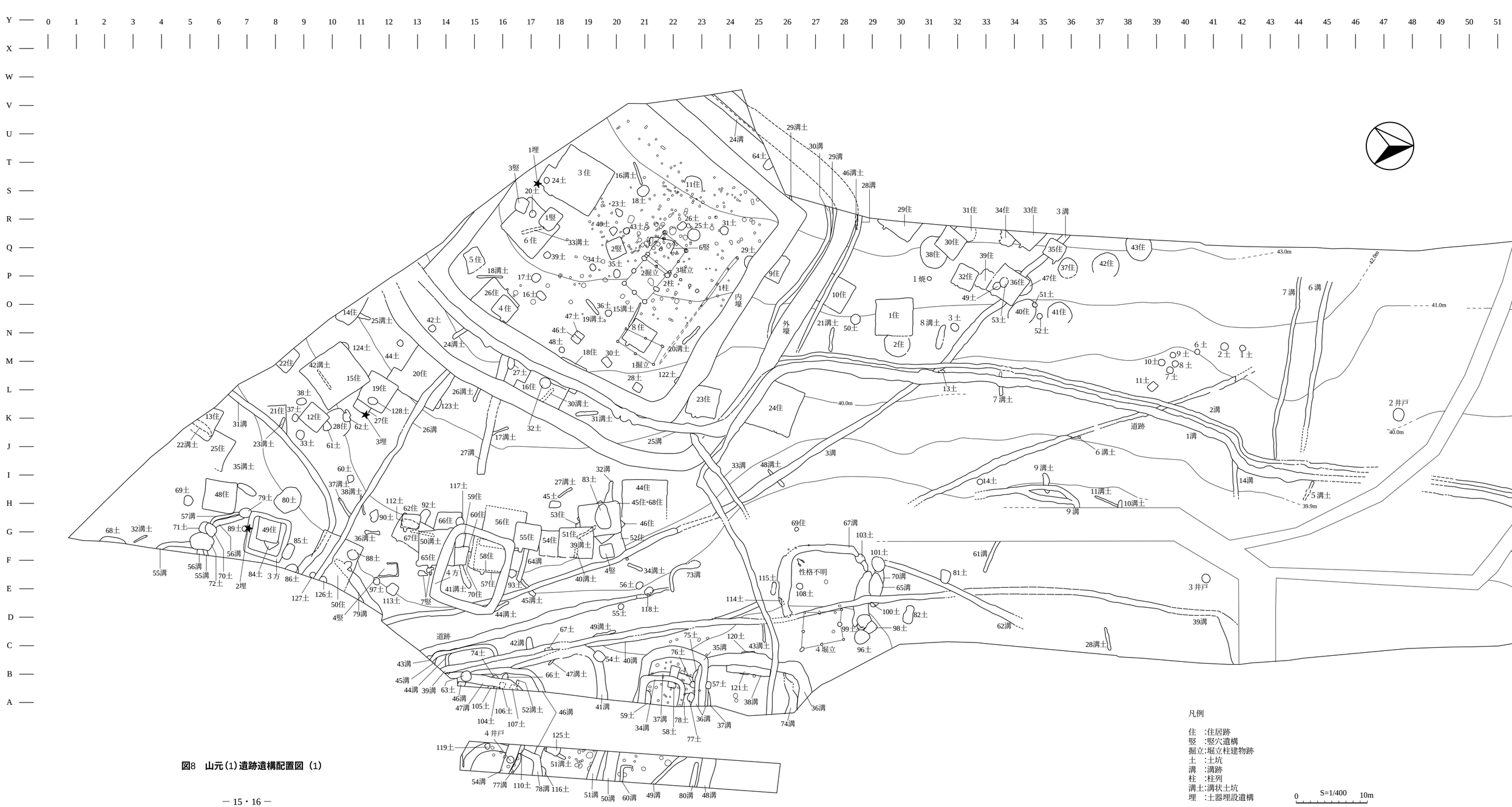
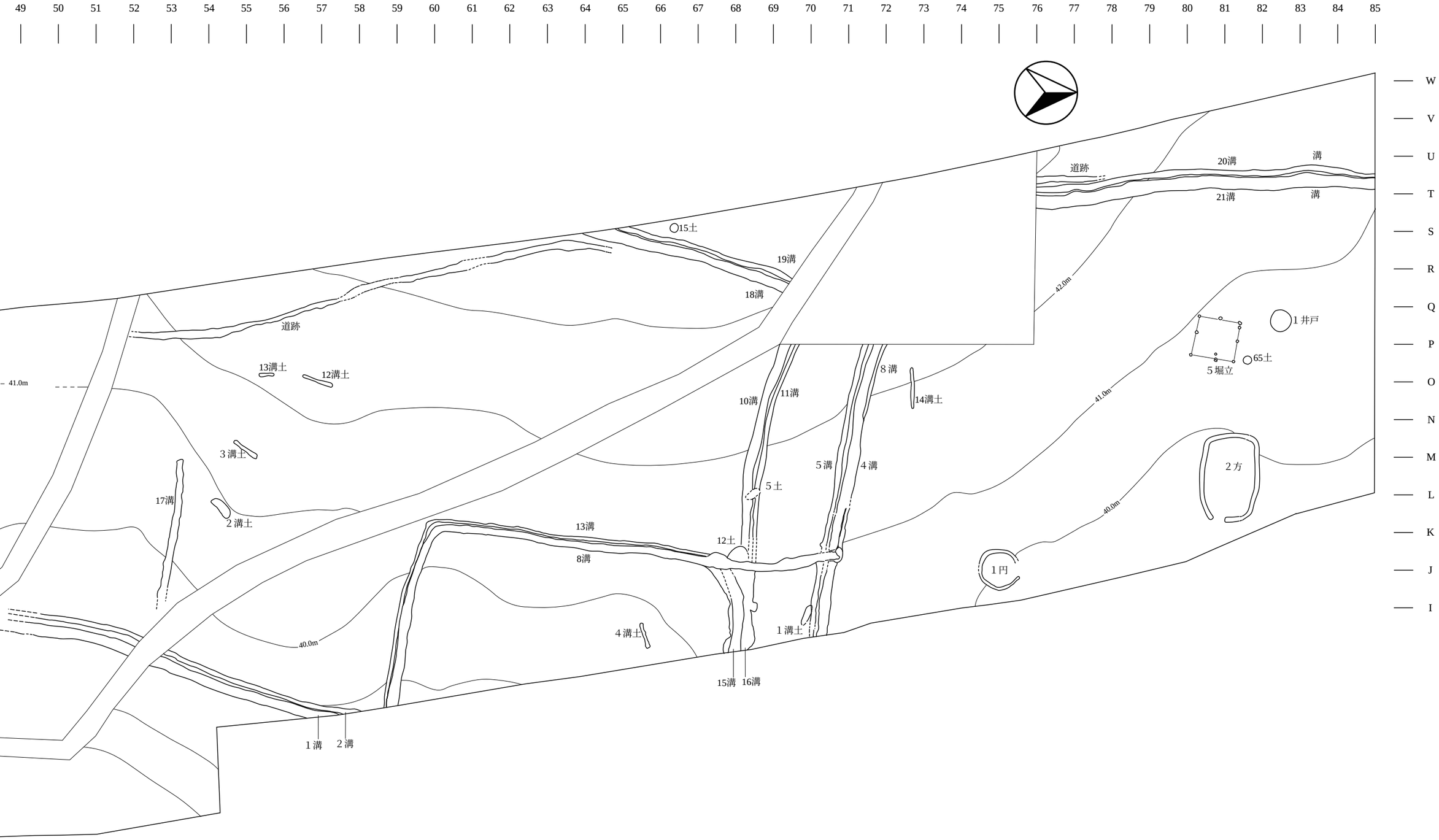


図8　山元(1)遺跡遺構配置図（1）



凡例

住　:住居跡
竪　:竪穴遺構
掘立:堀立柱建物跡
土　:土坑
溝　:溝跡
柱　:柱列
溝土:溝状土坑
埋　:土器埋設遺構

0　S=1/400　10m

図9　山元(1)遺跡遺構配置図（2）

第３章　縄文時代の遺構

竪穴住居跡13軒、土坑14基、溝状土坑52基が検出された。竪穴住居跡や土坑は調査区の南側に、溝状土坑は調査区の全域で散在して検出された。このうち、竪穴住居跡は調査区の南側に検出され、とくにM～Q－29～339グリッドの区域に11軒が集中して検出されている。しかしながら、この区域は緩斜面であることや畑地造成による削平や平安時代の遺構に切られていることから、遺構の全体を検出できなかったものが多い。出土遺物や住居跡の構造からは、大半の住居跡が縄文時代前期中葉に属するものと考えられる。

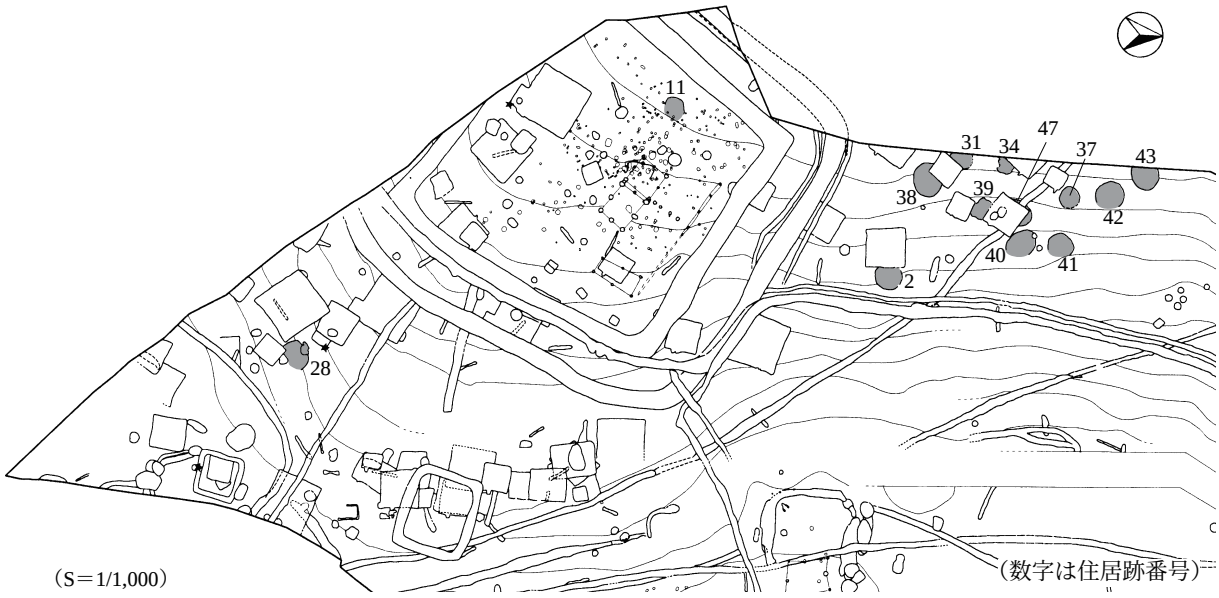


図10　縄文時代竪穴住居跡の分布

第１節　竪穴住居跡

第２号住居跡（ＳＩ02）（図11）

［位置・重複］調査区中央の南西側、M－29・30グリッドの緩傾斜地に位置している。西壁部分が平安時代の第１号住居跡と重複している。

［平面形・規模・壁・床面］平面形はほぼ円形を呈し、規模は長軸3.60m、短軸3.50mである。壁高は最も高い部分（北壁）で28㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を床面とし、全体に硬く締まっている。床面には若干の凹凸が認められるもののほぼ平坦である。また、地形の傾斜にそって西側がいくぶん低くなっている。床面積は9.00㎡である。

［堆積土］５層に分層できた。上位には黒色土と黒褐色土、中位にはロームブロックを主体とする黄褐色土の堆積が見られ、下位には暗褐色土が床面を広く覆っている。また、炉の上位には硬く締まっている黒褐色土が見られたが、これは炉の堆積土第１層に対応するものである。

［炉］床面中央に64×74㎝の楕円形で深さ13㎝の浅い落ち込みを検出した（Ｐ１）。被熱の痕跡は認められなかったが、炉と思われる。炉の堆積土は２層に分層されたが、２層とも硬く締まっている。

第１層は黒褐色土で炭化物の混入が少量見られ、第２層は黒色土でロームブロックの小塊や炭化物の混入が微量であるが認められた。

［柱穴・ピット］炉の両脇に２個の小ピットを検出した。径約20㎝で、深さはＰ３が74㎝、Ｐ２が71㎝である。また、壁際からは径約10㎝前後、深さ５～14㎝の５個の小ピットが検出された。壁柱穴の可能性が考えられる。

［遺物］堆積土の第１層～第４層にかけて第Ⅱ群土器の破片239点（1,586ｇ）が出土した。図11-１は口縁部に単軸絡状体第１類が、隆帯際に結節が横位に回転施文されている。隆帯の断面形は低い台形状になる。図11-２・３はいずれも口縁部に結節が横位に回転施文されており、隆帯が貼り付けられている。隆帯の断面形は２が低い台形状になり、３は高い山形状になる。図11-４の胴部には単軸絡状体第１類が縦位に回転施文されている。図11-５・６には無節の原体を巻き付けた単軸絡状体第１類が縦位に回転施文されている。剥片石器は削器、剥片、チップ等71点、礫石器は石鋸、半円状扁平打製石器などの破片が出土している。

［小結］炉に近接した場所に２本の柱を持つ住居跡で、縄文時代前期中葉に属するものと考えられる。

（畠山、遺物は小山〈以下同〉）

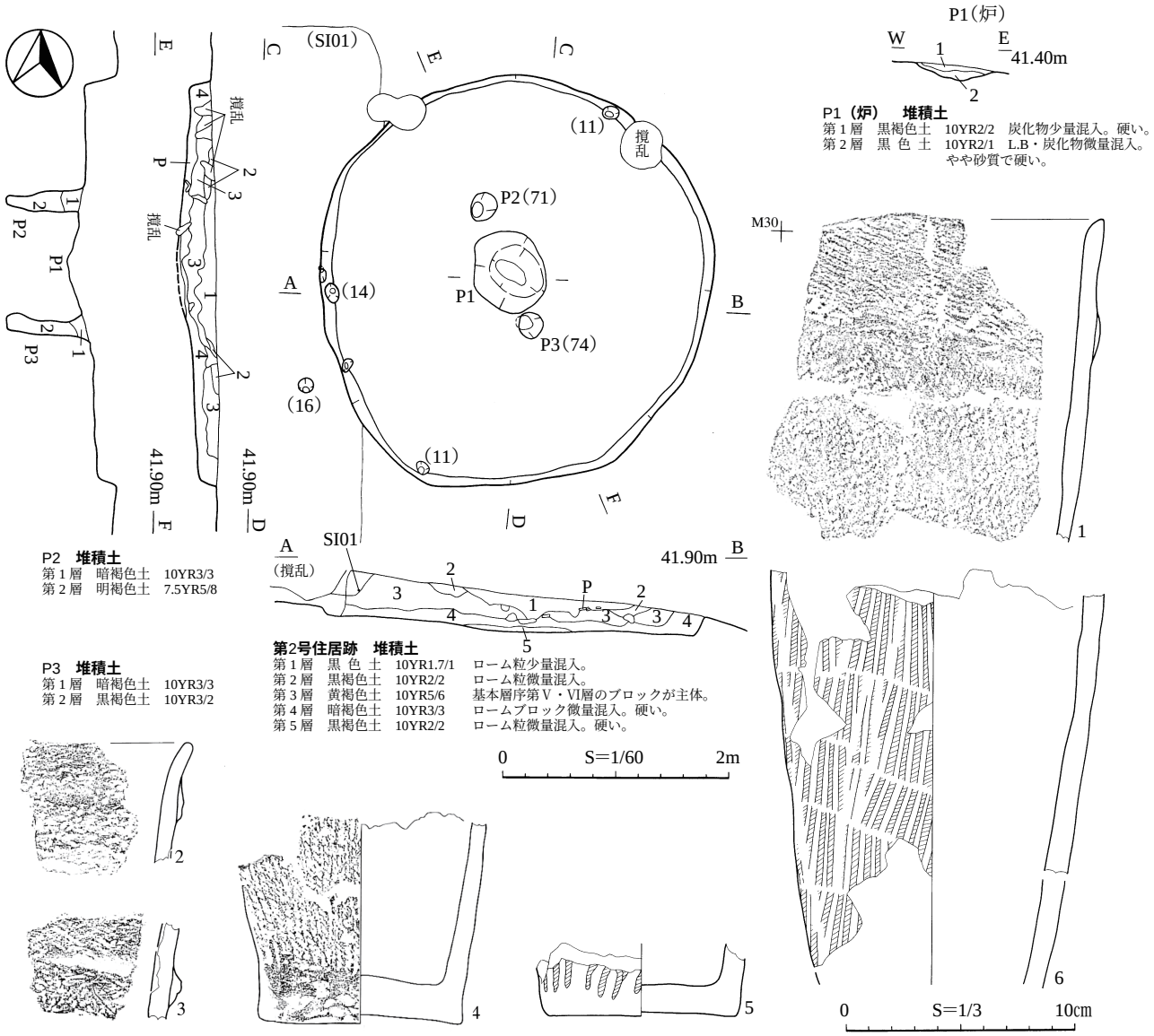


図11　第2号住居跡

第11号竪穴住居跡（ＳＩ11）（図12）

［位置・重複］調査区南側で壕の内側、Ｓ－22グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層で、暗褐色土の円形プランとして確認した。壕の内側に拡がるピット群と重複し本遺構の方が古い。

［平面形・規模］本遺構は西側から東側へ下る緩斜面地に構築され、遺構の東側は斜面のため大半が削平を受けている。その為、全体形は不明であるが、円形を基調としたものと思われる。計測できた地点での南北軸は上場で約2.5m、下場で2.35mである。現存している床面積は3.13㎡である。

［壁・床面］壁高は、最も残りの良い北壁で約16㎝である。基本層序第Ⅴ層を床面とし、貼り床等は検出されなかった。床面はほぼ平坦である。

［堆積土］暗褐色土の単層で、ローム粒が微量に混入している。

［炉］床面の中央付近より円形で断面が皿状になる落ち込みを確認した（Ｐ３）。規模は60×75㎝で、深さは最大で約10㎝である。焼面は検出されなかったが、配置から炉に関わる施設と考えられる。

［柱穴・ピット］炉の脇から２個の小穴を検出した。位置・規模から主柱穴と考えられる。本遺構は小穴群と重複しており、床面上から多数のピットが検出された。堆積土を掘り下げる段階で新旧関係を確認できなかったものも含まれており、Ｐ１・Ｐ２以外にも住居に伴うピットが存在する可能性は考えられる。

［遺物］第Ⅱ群土器が17点（101ｇ）出土している。図12-１は口縁部片で、口唇際にLRの側面圧痕が施されており、口縁に結節が横位に回転施文されている。

［小結］炉に近接した場所に２本の柱を持つ住居跡で、縄文時代前期中葉に属するものと考えられる。

（小山）

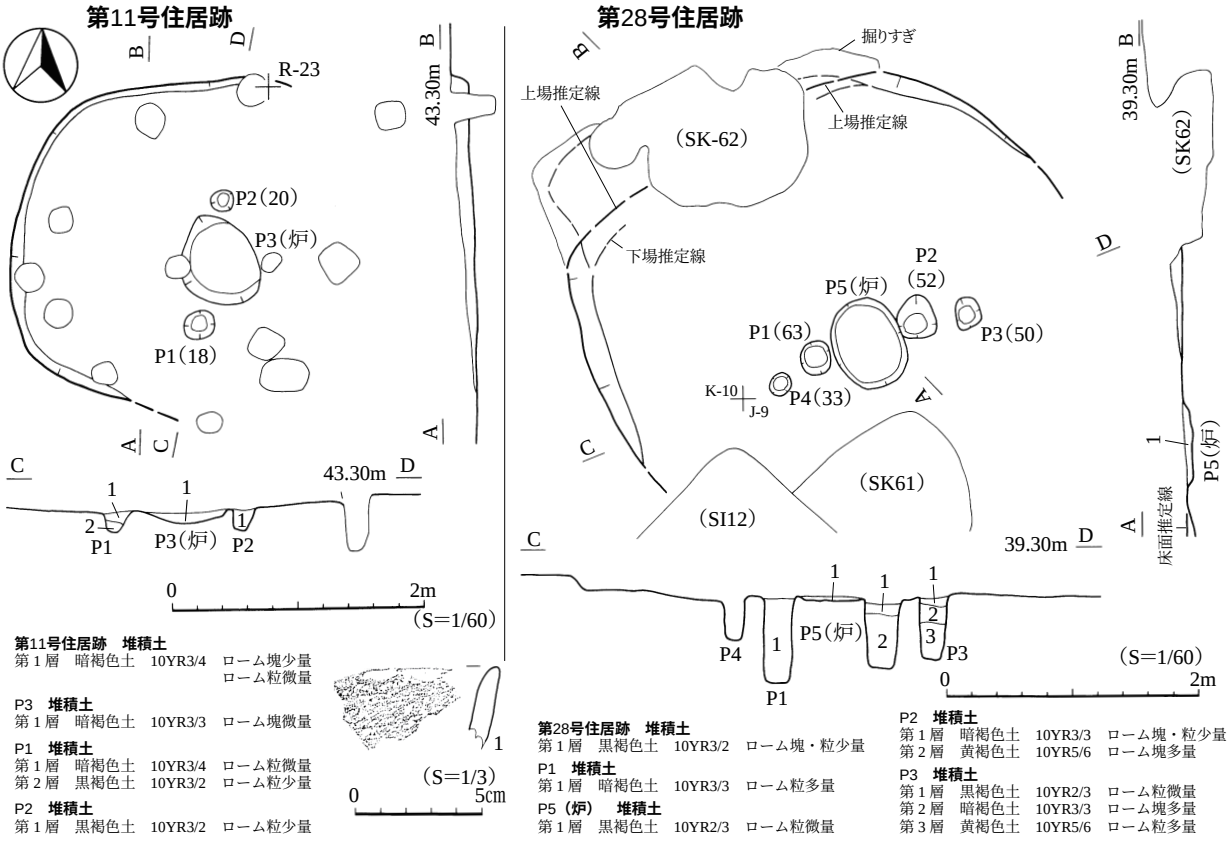


図12　第11号、28号住居跡

第28号竪穴住居跡（ＳＩ28）（図12）

［位置・重複］調査区南側で壕の外側にあたるＪ・Ｋ－９・10グリッドに位置する。基本層序第Ⅴ層より、黒褐色土の不整形プランとして確認した。また、硬化面も一部検出した。第12号竪穴住居跡、第61、62号土坑より古い。

［平面形・規模］本遺構は西側から東側へ下る緩斜面地に構築され、遺構の東側は斜面のため大半が削平を受けている。その為、全体形は不明であるが、円形を基調としたものと思われる。計測できた地点での南北軸は上場で約3.9m、下場で3.7mである。現存している床面積は4.98㎡である。

［壁・床面］壁高は最も残りの良い北壁で、約10㎝である。基本層序第Ⅴ層を床面とし、貼り床等は検出されなかった。床面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒褐色土の単層で、ローム粒が微量に混入している。

［炉］床面の中央と思われる地点から円形で断面が皿状になる落ち込みを確認した（Ｐ５）。規模は55×75㎝で、深さは最大で約４㎝である。焼面は検出されなかったが、配置から炉に関わる施設と考えられる。

［柱穴・ピット］炉の両脇から計４個の小穴が検出された。Ｐ１とＰ２・Ｐ３とＰ４がそれぞれ対応して機能していたと考えられる。位置、規模から主柱穴と考えられる。主柱穴が２セット検出されたことから本遺構は拡張等が行われた可能性も考えられる。

［出土遺物］なし。

［小結］炉に近接した場所に２本の柱を持つ住居跡で、縄文時代前期中葉に属するものと考えられる。

（小山）

第31号住居跡（ＳＩ31）（図13）

［位置・重複］調査区中央の南西側、Ｑ－32グリッドの緩傾斜地に位置している。西側が調査区域外にかかり、南東側が平安時代の第30号住居跡に、北側が耕作によって削平されている。

［平面形・規模・壁・床面］上記の理由から平面形は不明であるが、検出した部分や他の住居跡の例からも円形を基調としたものと思われる。炉を中心として考えると、規模は直径がおおむね４m前後と思われる。壁は南西部分でのみ検出できたが、その部分の壁高は７㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を床面とし、全体に硬く締まっている。また、床面には若干の凹凸が認められるもののほぼ平坦で、いくぶん中央（炉）に向かって窪んでいる。

［堆積土］３層に分層できた。第２層はややローム質の褐色土で、やや厚く堆積している。第３層は締まりのある黒褐色土で、薄く床面を覆っている。

［炉］床面中央に110×130㎝の不整円形で、深さ15㎝の浅い落ち込み（Ｐ１）を検出した。被熱の痕跡は認められなかったが、炉と思われる。炉の堆積土は２層に分層された。２層とも硬く締まっているが、とくに第２層がより顕著である。第１層は黒褐色土で炭化物の混入がやや多量に見られ、焼土粒も微量混入していた。第２層は褐色土で炭化物の混入が微量認められた。

［柱穴・ピット］５個の小ピットを検出した。このうち、柱穴と考えられるのは炉を挟んで位置するＰ３とＰ４である。径約110㎝で、深さ約60㎝である。

［遺物］堆積土及び炉、Ｐ５から第Ⅱ群土器の小破片27点（150ｇ）、石匙１点、敲石１点が出土した。

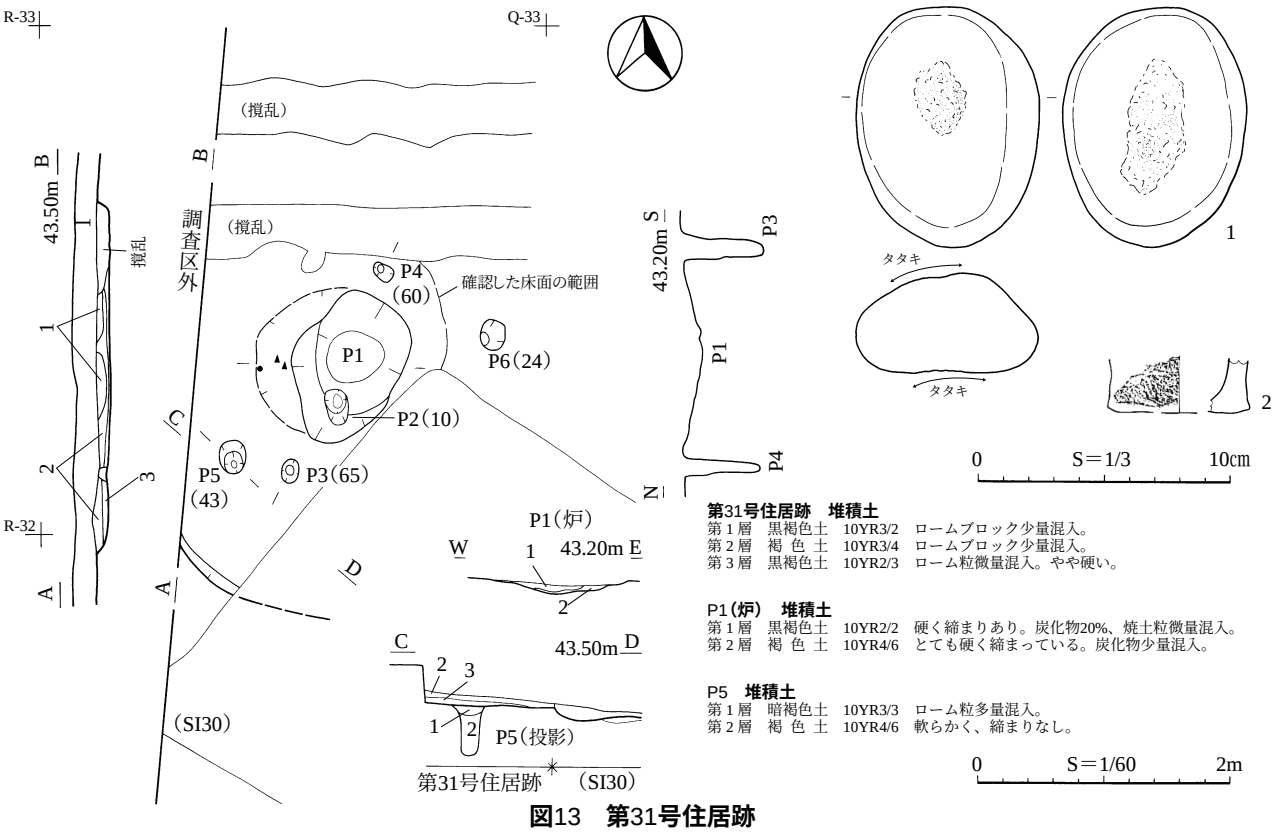


図13　第31号住居跡

図13-１は器面の両面に敲打痕が見られる。図13-２はミニチュア土器の底部で、胴部に単軸絡状体第１類が縦位に回転施文されており、底径は（5.6㎝）である。

［小結］撹乱や重複によって本住居跡の全容が不明であるが、概ね４m前後の規模であり、炉を中心とした２本柱の構造を持つ住居跡と考えられる。出土した土器から縄文時代前期中葉の住居と思われる。（畠山）

第34号住居跡（ＳＩ34）（図14）

［位置・重複］調査区中央の南西側、Ｑ－33グリッドの緩傾斜地に位置している。南側には第31号住居跡が隣接している。西側が調査区域外にかかり、北西側が平安時代の第30号住居跡に切られている。また、周辺も耕作によって削平されている。

［平面形・規模・壁・床面］上記の理由から平面形は不明であるが、検出した部分や他の住居の例からも円形を基調としたものと思われる。壁は全く検出できなかった。床面は炉を中心とした部分のおよそ1.2～1.4mほどの範囲を確認できただけである。基本層序の第Ⅴ層上面を整地して構築しており、全体に硬く締まっている。床面には小さな凹凸が認められ、中央（炉）に向かって若干くぼんでいる。

［堆積土］１層しか確認できなかった。ローム粒やロームブロックを含んだ暗褐色土である。

［炉］床面の中央付近に48×55㎝の楕円形で、深さ８㎝の浅い落ち込み（Ｐ１）を検出した。被熱した痕跡は認められなかった。炉の堆積土は２層に分層された。２層とも硬く締まっているが、とくに第２層が顕著である。第１層は多量のローム粒や炭化物の混入を含んだ黒色土で、焼土粒も少量混入している。第２層はローム粒を多量に含んだ褐色土であるが、その混入量は第１層よりも多い。また、炭化物や焼土粒も少量混入している。

［柱穴・ピット］３個の小ピットを検出した。このうち、柱穴と考えられるのは炉を挟んで位置するＰ３とＰ４である。炉からは約50㎝ほど離れている。ピットの規模は径約17×23㎝の楕円形で、深さが約70㎝である。

［遺物］Ｐ２から第Ⅱ群土器の小破片２点（６ｇ）が出土しただけである。

［小結］撹乱や重複により本住居跡の全容は不明である。住居の構造から、構築時期は縄文時代前期中葉と思われる。（畠山）

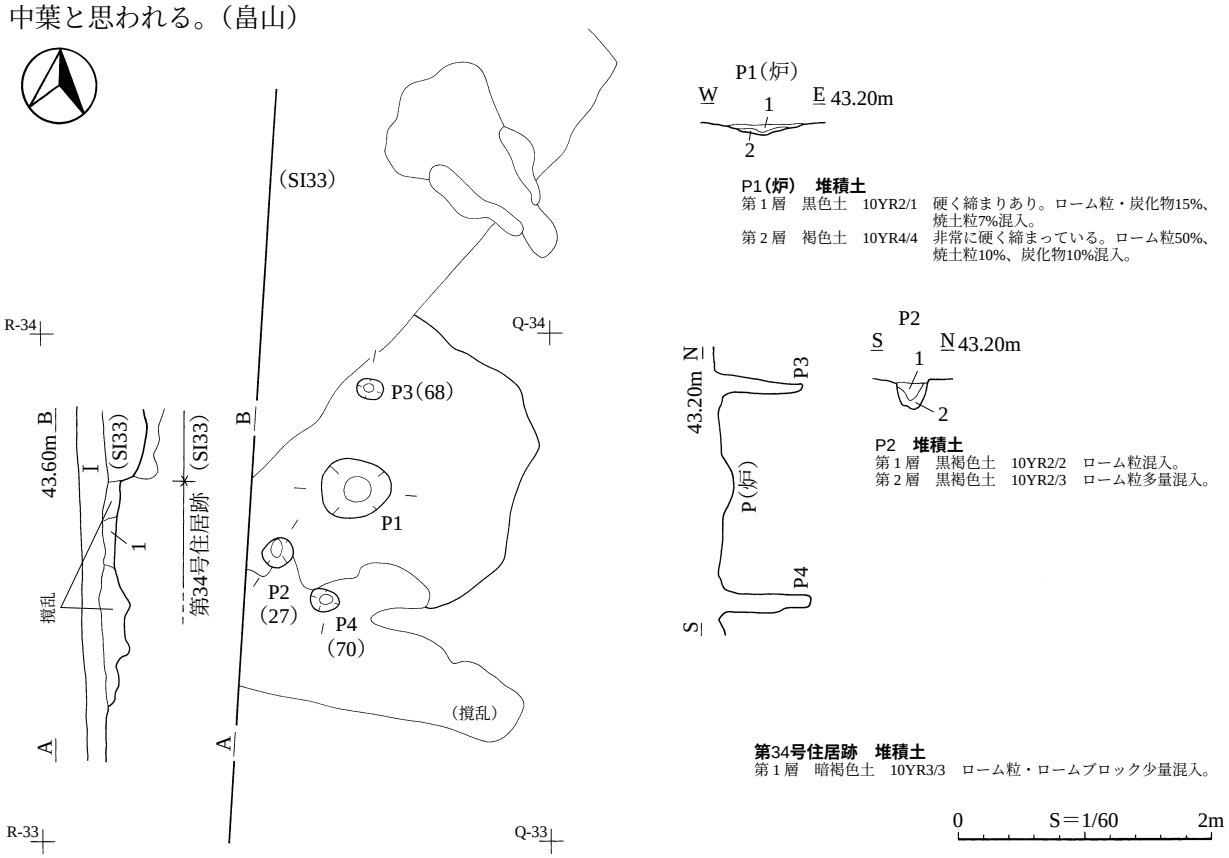


図14　第34号住居跡

第37号住居跡（ＳＩ37）（図15）

［位置・重複］調査区中央の南西側、Ｐ－35・36グリッドの緩傾斜地に位置している。北側には第42号住居跡、東側には第40号・41号・47号住居跡が隣接している。

［平面形・規模・壁・床面］掘り込みが浅いため、東側の壁の立ち上がりは検出されなかった。平面形は楕円形で、規模は長軸2.84m、短軸2.66mである。壁は西側を中心に検出されたが、最も高い部分で10㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層上面を浅く掘りくぼめて構築しており、全体に硬く締まっている。床面

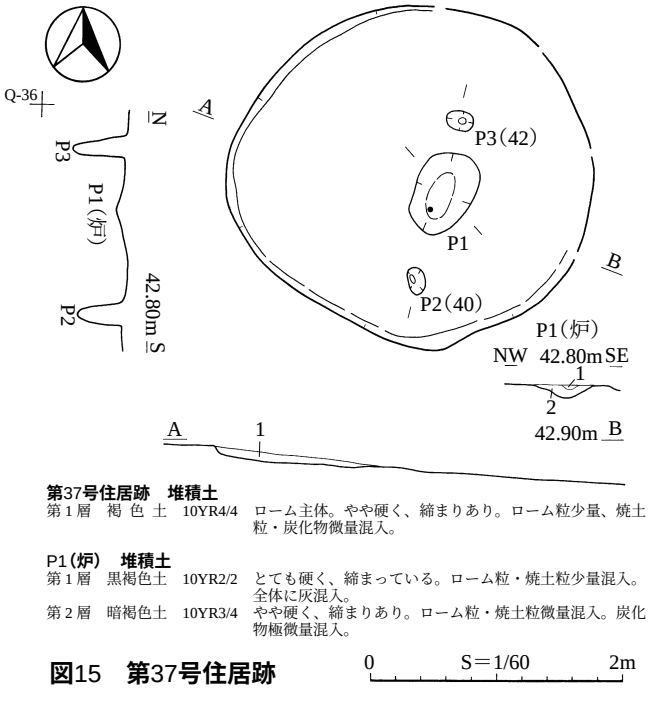


図15　第37号住居跡

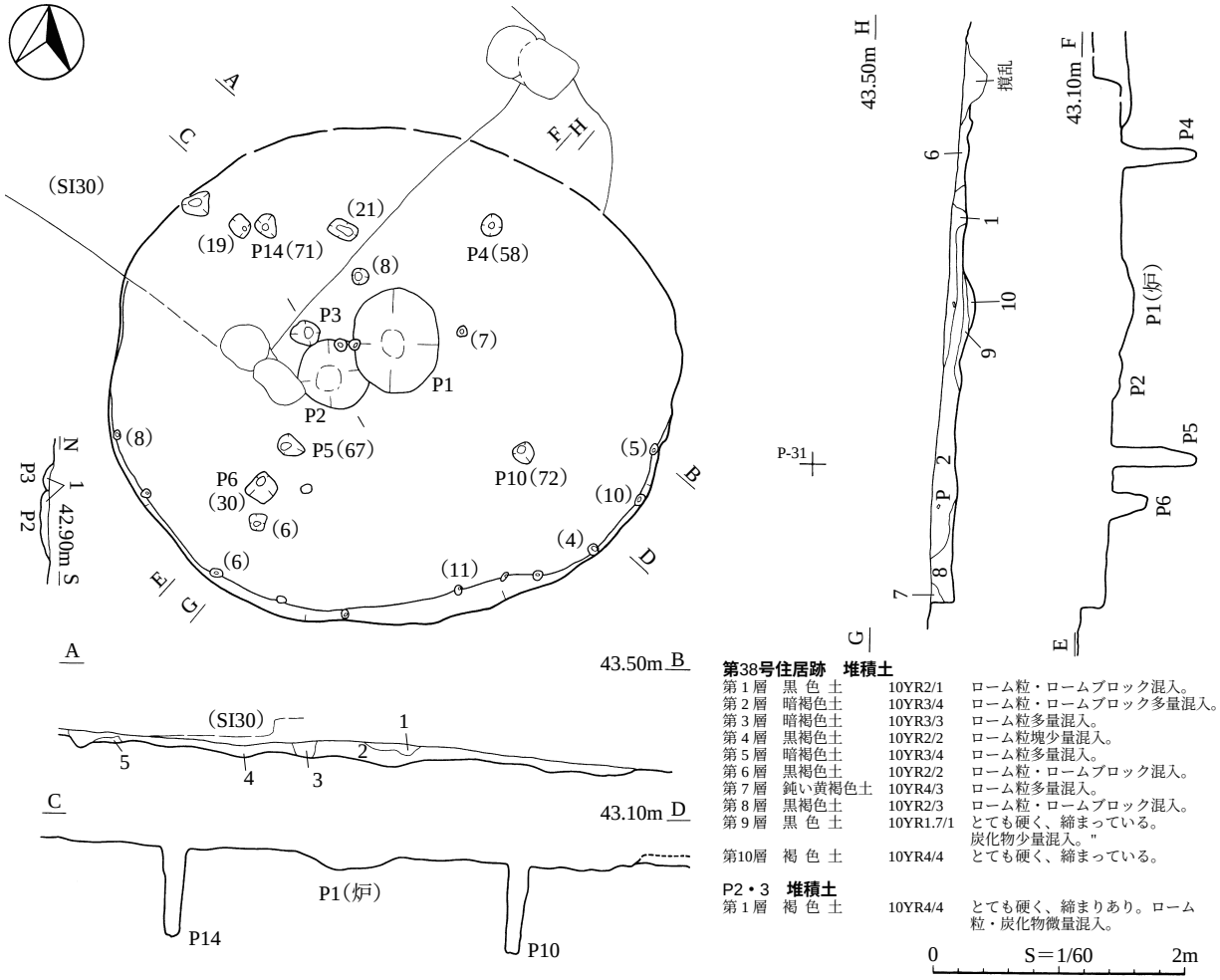
には小さな凹凸が認められるが、ほぼ平坦である。推定床面積は、5.35㎡である。
［堆積土］西側の部分しか確認できなかった。ローム主体の褐色土が堆積していた。
［炉］中央からやや東側によった場所に46×68㎝の楕円形で、深さ８㎝の浅い落ち込み（Ｐ１）を検出した。被熱した痕跡は認められなかった。炉の堆積土は２層に分層されたが、第１層は上部のほんの一部分しか確認できていない。２層とも硬く締まっているが、とくに第１層が非常に硬く締まっている。第１層は黒褐色土で少量のローム粒や焼土粒の混入が見られ、灰の混入も見受けられた。第２層は暗褐色土でローム粒や焼土粒・炭化物が微量混入している。
［柱穴・ピット］炉の両脇、20～26㎝離れた場所に２個の小ピットを検出した。柱穴と考えられる。ピットの規模は径約20㎝前後の楕円形で、深さ約40㎝である。
［遺物］床面直上から第Ⅱ群土器の小破片１点（３ｇ）が出土しただけである。
［小結］２本柱の構造の住居である。縄文時代前期中葉に属するものと思われる。（畠山）

第38号住居跡（ＳＩ38）（図16～18）
［位置・重複］調査区中央の南西側、Ｏ・Ｐ－31グリッドの緩傾斜地に位置している。北西側が平安時代の第30号住居跡と重複し、さらに北西側には縄文時代の第31号住居跡が位置している。
［平面形・規模・壁・床面］平面形は楕円形で、長軸4.52m、短軸が約3.9m（推定）の規模である。壁は西側から南側にかけて検出され、高さ２～20㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層上面を浅く掘りくぼめて構築しており、全体に硬く締まっている。推定床面積は、13.47㎡である。
［堆積土］10層に分層された。大半は暗褐色土と黒褐色土であり、暗褐色土には多量のローム粒やロームブロックを含んでいる。なお、第４層は第30号住居跡の掘り方にかかわる部分もあるが、セクション観察では明確にはできなかった。
［炉］中央付近に２基の炉（Ｐ１・Ｐ２）が検出された。ともに被熱した痕跡は認められなかったが、炉と思われる。Ｐ１はＰ２の炉より新しいもので、作り替えが行われたものと考えられる。Ｐ１の炉はほぼ中央に検出された。平面形は68×82㎝の楕円形で、深さ12㎝である。炉の堆積土は２層（住居跡堆積土の第９・10層）に分層された。ともに硬く締まっていたが、とくに第９層は非常に硬く、堆積土には少量の炭化物が混入している。
　Ｐ２の炉は中央からやや西側に偏在した位置に検出された。平面形は52×56㎝のほぼ円形で、深さ８㎝である。堆積土はローム粒を多量に含んだ褐色土で、北西側に接して検出されたＰ３にまで及んでいた。これも硬く締まった土である。
［柱穴・ピット］住居内から大小15個のピットと壁際から11個の小ピットを検出した。このうち柱穴と思われるのはＰ４・５・10・14の４個であり、1.7～1.8mの間隔で位置している。ピットの規模は径16㎝で、深さ60～70㎝である。また、壁際の小ピットは径8㎝、深さ２～10㎝の規模である。
［遺物］縄文時代前期前葉の土器片が約1000点（14,011ｇ）出土した。石器は石鏃、石匙、削器、剥片等29点と、半円状扁平打製石器、石鋸、敲石等の礫石器５点が出土した。
　図17-１～６は口縁部片で、口縁部には結節が横位に回転施文されている。隆帯の断面形は４が高さのある山形状になり、他は低い台形状になる。２・６は隆帯上に結節が回転施文され、３は指頭圧痕が施されている。口唇形状は１・５が平坦になり、２～４・６は先端が尖る。６は口唇端にも結節

が回転施文されている。胴部は１・２がRL、３はLRが斜位に回転施文されている。

図17-７はＲの直前段反撚りが口縁部、隆帯上、胴部に回転施文されている。図18-８は口縁に単軸絡状体第１類が横位に回転施文されている。図17-９・10の胴部にはRLRが横から斜位に回転施文されている。図17-11は頸部片で、口縁部に結節が横位に回転施文され、隆帯上には深さ３㎝程の深い沈線が施されている。図17-12は口縁部の小破片で、口唇端及び口唇際に側面圧痕が施され、口縁部には結節が横位に回転施文されている。図17-13は口縁に側面圧痕が施されている。図17-14はLRLが口唇際から横位に回転施文されている。図17-15～18は胴部片で、15は単軸絡状体第６類が縦位に、16は結束第１種の羽状縄文が横位に、17は単軸絡状体第１類が縦位に回転施文されている。図17-18～21は底部片である。18～20は底部に縄文が回転施文されているもので、21は文様施文されていないものである。

図18-１・２は石鏃で、基部は１が円基、２が尖基になる。図18-３～５は石匙で、３は素材の端部に片面調整によりつまみを作出している。裏面全体に光沢を確認した。４は裏面に見られる破損部の剥離稜が摩滅しており、破損後も使用されたと考えられる。裏面全体に弱い光沢を確認した。５は左辺の側縁稜が摩滅している。裏面全体に光沢を確認した。図18-６・７は半円状扁平打製石器である。



第38号住居跡　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒・ロームブロック混入。
第２層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・ロームブロック多量混入。
第３層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒多量混入。
第４層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒塊少量混入。
第５層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒多量混入。
第６層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒・ロームブロック混入。
第７層	鈍い黄褐色土	10YR4/3	ローム粒多量混入。
第８層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・ロームブロック混入。
第９層	黒 色 土	10YR1.7/1	とても硬く、締まっている。炭化物少量混入。"
第10層	褐 色 土	10YR4/4	とても硬く、締まっている。

P2・3　堆積土

第１層	褐 色 土	10YR4/4	とても硬く、締まりあり。ローム粒・炭化物微量混入。

図16　第38号住居跡

図17　第38号住居跡出土土器

６は側面が稜線上になり、稜が摩滅しているのに対して、７は幅広な磨り面を形成している。図18-８・９は敲き石である。８には凹み痕が見られ、９には広い範囲で器面が荒れている。

［小結］他と較べて比較的大きな住居跡であるためか、４本柱の柱穴配置である。炉はやや中央からやや偏在した場所に構築され、作り替えが認められている。出土土器から、縄文時代前期中葉に属するものと考えられる。（畠山）

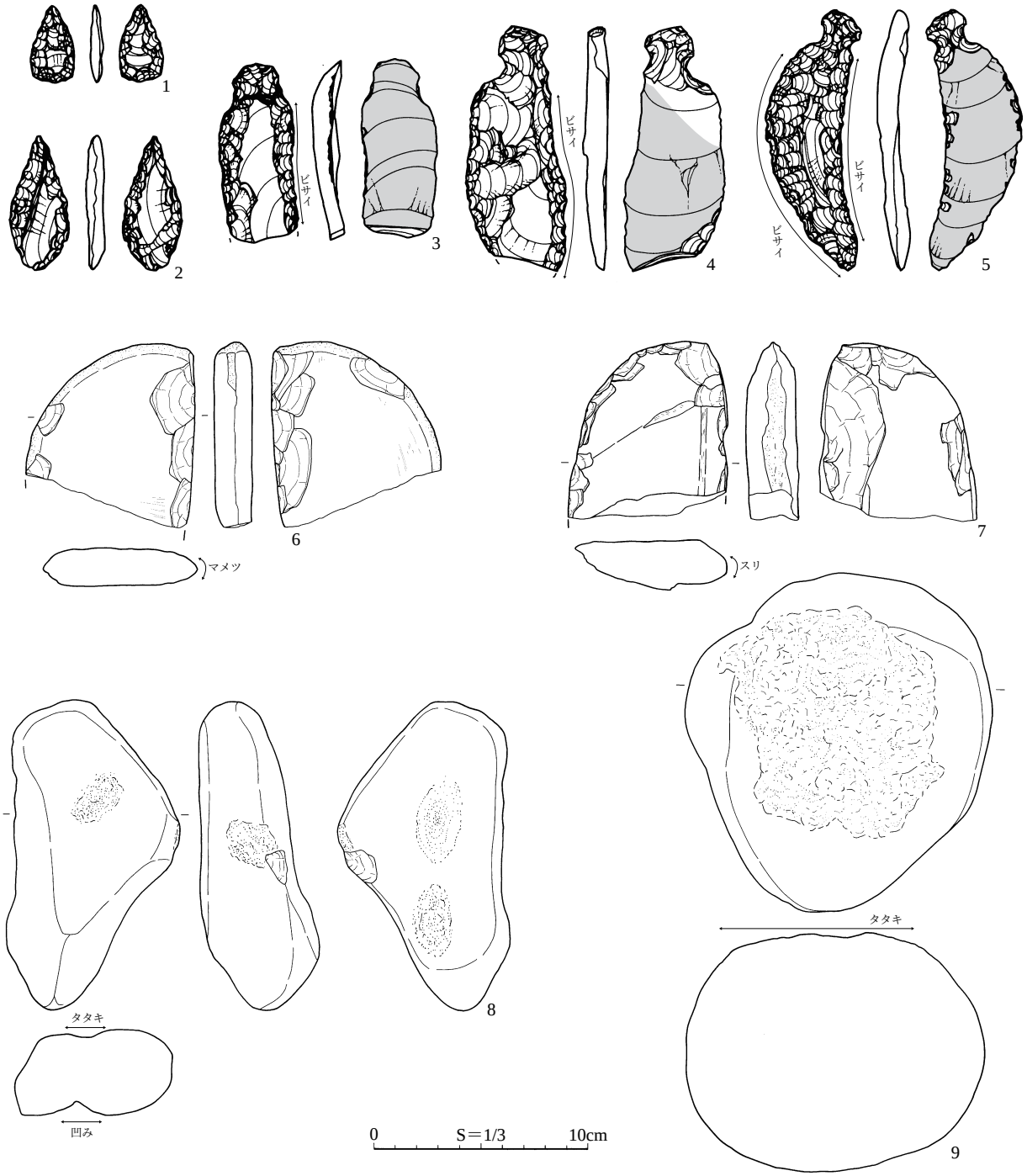


図18　第38号住居跡出土石器

第39号住居跡（ＳＩ39）（図19）

［位置・確認］調査区中央の南西側、Ｏ・Ｐ－32・33グリッドに位置している。南北を平安時代の住居跡（第32号、第36号）に切られている。

［平面形・規模・壁・床面］重複や掘り込みが浅いために壁を確認できなかったため、平面形や規模は不明である。確認できた部分から推測して、径４m前後の規模と思われる。床面は基本層序の第Ⅴ層を床面とし、若干の凹凸が認められる。

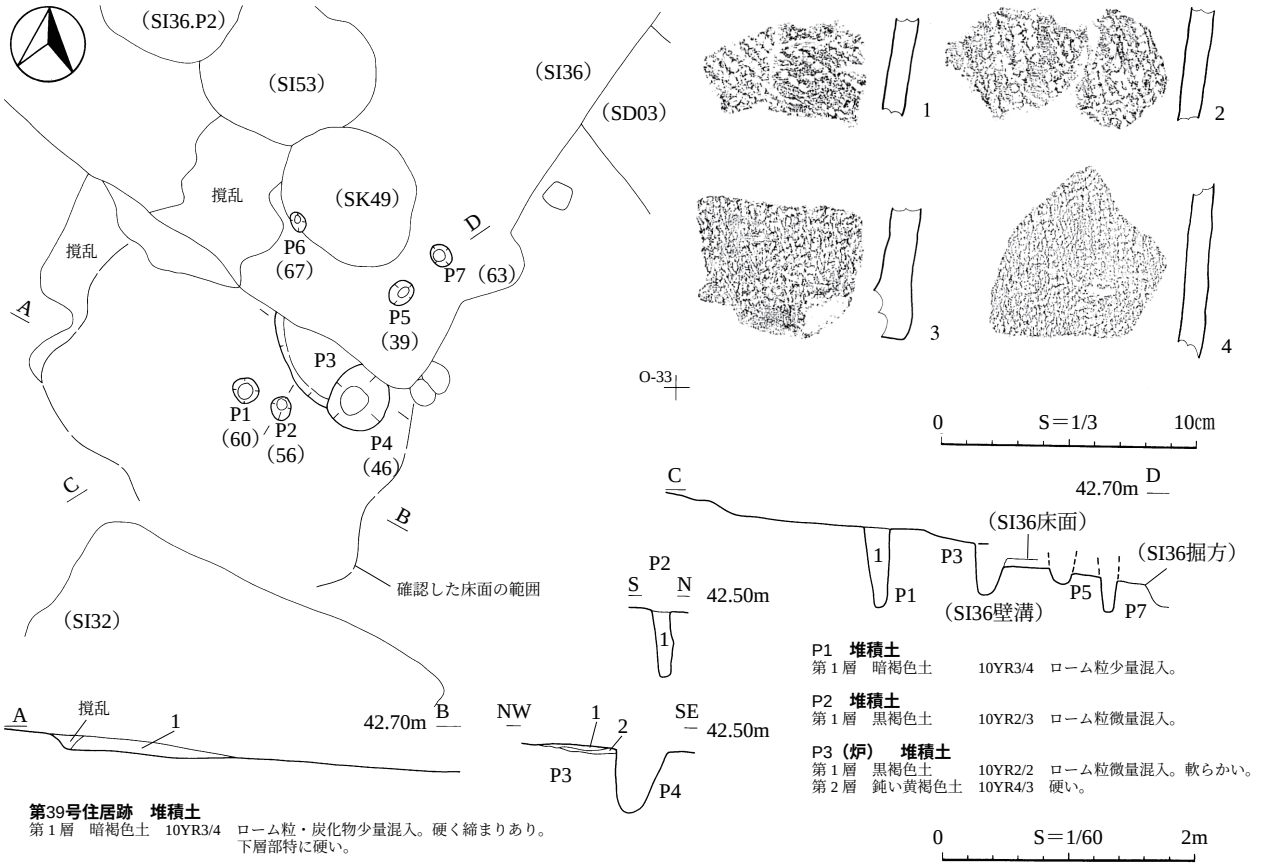
［堆積土］1層しか確認できなかった。暗褐色土で、ローム粒や炭化物を少量含んだ土である。

［炉］平安時代の第36号住居跡と時期不明のＰ４に破壊されているが、Ｐ３が炉と思われる。住居床面の中央に位置するものと思われる。炉の平面形は楕円形を呈するものと思われ、深さ８㎝である。炉の堆積土は２層に分層された。第1層は軟らかい黒褐色土で第２層は硬さのあるにぶい黄褐色土である。底面には被熱の痕跡は認められなかったが、硬く締まっている。

［柱穴・ピット］床面から２個の小ピット（Ｐ１・２）と第36号住居跡床下（掘り方）から３個の小ピット（Ｐ５～７）が検出された。Ｐ５は深さが39㎝であるが、他は60㎝前後の深さをもっており、柱穴と思われるものである。柱穴配置は不明であるが、Ｐ１・Ｐ２とＰ５・Ｐ７が炉の両脇に対峙しているように見られることから、これらのピットが柱穴であった可能性が考えられる。おそらく、本住居も２本柱の構造と思われることから、柱の建て替えが行われた可能性が考えられる。

［遺物］撹乱部分も含めて、堆積土から52点（497ｇ）の土器片が出土した。すべて、第Ⅱ群土器である。図示したものは全て胴部片である。図19-１・２はRLが回転施文され、３・４は、単軸絡状体第１類が縦位に回転施文されている。

［小結］平面形や規模は不明であるが、出土土器から縄文時代前期中葉の住居跡と思われる。（畠山）



第39号住居跡　堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒・炭化物少量混入。硬く締まりあり。下層部特に硬い。

P1　堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒少量混入。

P2　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量混入。

P3（炉）　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒微量混入。軟らかい。
第２層　鈍い黄褐色土　10YR4/3　硬い。

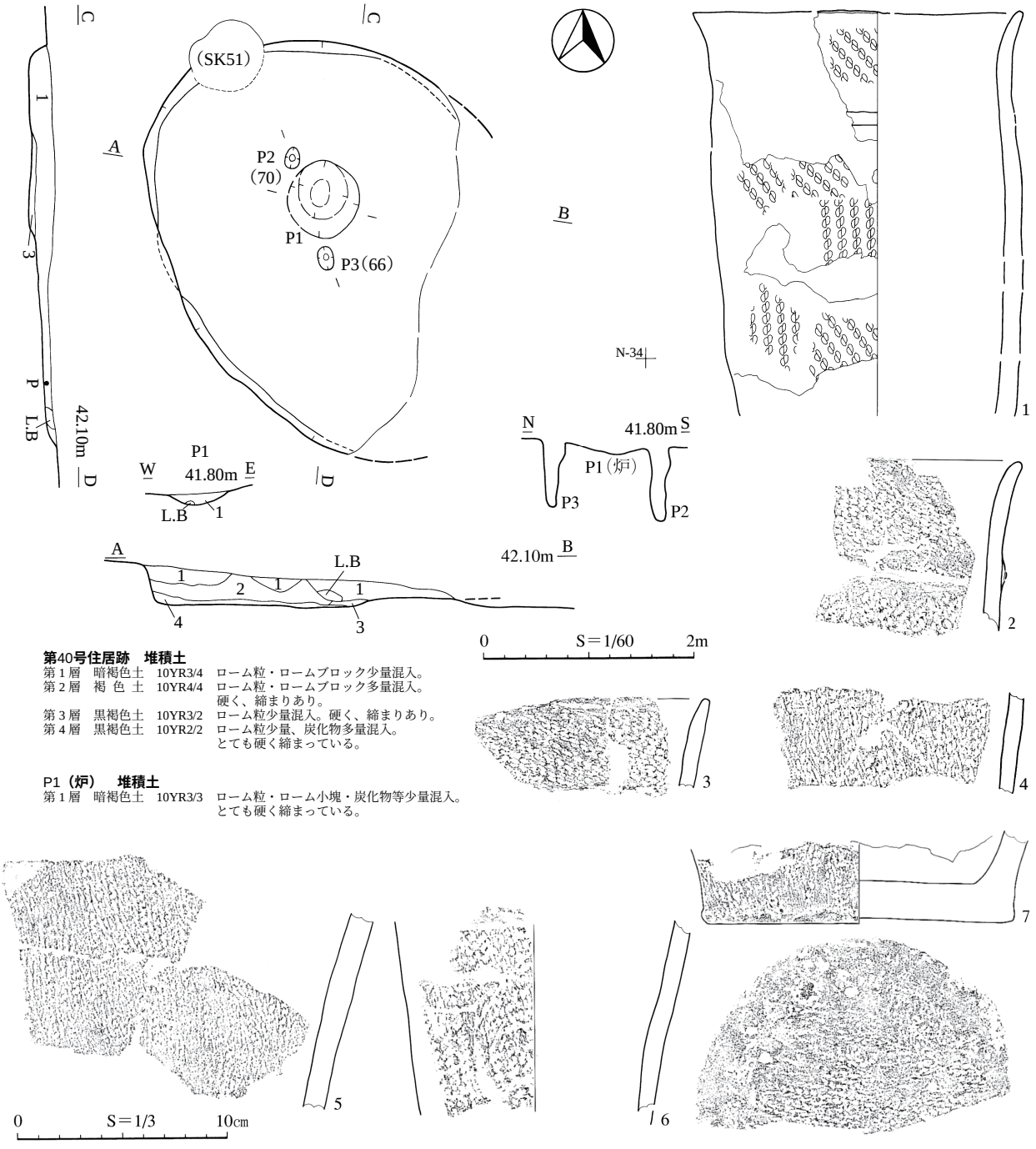
図19　第39号住居跡

第40号住居跡（ＳＩ40）（図20）

［位置・確認］調査区中央の南西側、Ｎ・Ｏ－33・34グリッドに位置している。北西で第51号土坑と重複し、これよりも古い。また、北側には縄文時代の第41号住居跡、第52号土坑が、西側には第47号住居跡が隣接している。

［平面形・規模・壁・床面］緩傾斜地に構築されていることと掘り込みが浅いために東側の壁・床面は確認できなかった。平面形は楕円形を呈している。長軸は確認できた部分では3.25mであるが、推定では４～4.2mと思われる。短軸では3.2mである。壁は北東で最も高く、40㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめて構築している。硬く締まり、ほぼ平坦である。

［堆積土］４層に分層された。第１層は暗褐色土で西側の上部から東側の床面に至るまで広く覆って



第40号住居跡　堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒・ロームブロック少量混入。
第２層　褐 色 土　10YR4/4　ローム粒・ロームブロック多量混入。硬く、締まりあり。
第３層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒少量混入。硬く、締まりあり。
第４層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒少量、炭化物多量混入。とても硬く締まっている。

P1（炉）　堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒・ローム小塊・炭化物等少量混入。とても硬く締まっている。

図20　第40号住居跡

いる。第２層はローム粒やロームブロックを多量に含んだ褐色土で、西側を中心に見られた。人為堆積と考えられるものである。また、中央から西側の床面にはローム粒を多量に含んだ黒褐色土が堆積している。

［炉］床面のやや北西寄りに、浅い楕円形の落ち込みを検出した（Ｐ１）。平面形は66×70㎝の円形で、深さ10㎝である。被熱の痕跡は認められなかったが、炉と考えられる。炉の堆積土は暗褐色土の単層で、非常に硬く締まっており、ローム粒やロームブロックの小塊、炭化物を少量含んでいる。

［柱穴・ピット］炉に両脇に近接して、２個の小ピットを検出した。径約20㎝で、深さ約70㎝である。２本柱の柱穴配置と考えられる。

［遺物］堆積土から第Ⅱ群土器が約200点（2,545ｇ）出土した。石器は削器２点が出土した。図20-１～３は口縁部片である。いずれも口縁部にRLRが横位に回転施文されている。なお、１は胴部にもRLRが回転施文され、微隆帯が貼り付けられている。図20-４～６は胴部片で、RLRが斜位に回転施文されている。図20-７は底部片で、底面に縄文が回転施文されている。

［小結］炉は床面の中央からやや北西に偏った場所につくられ、２本柱の構造である。出土遺物および住居の構造から縄文時代前期中葉の住居跡と考えられる。（畠山）

第41号住居跡（ＳＩ41）（図21）

［位置・確認］調査区中央の南西側、Ｎ－35グリッドに位置している。南側には第40号住居跡と第51号・52号土坑、第47号住居跡が隣接している。

［平面形・規模・壁・床面］緩傾斜地に構築されているために東壁を確認できなかったが、平面形は円形を呈するものと思われる。長軸方向は不明であるが、南北方向では3.55m、東西方向は2.84mを確認している。壁は西壁付近が高く、30㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を浅く掘りくぼめており、ほぼ平坦で、硬く締まっている。検出部分の床面積は6.7㎡であるが、おおよそ９㎡前後の規模と推測される。

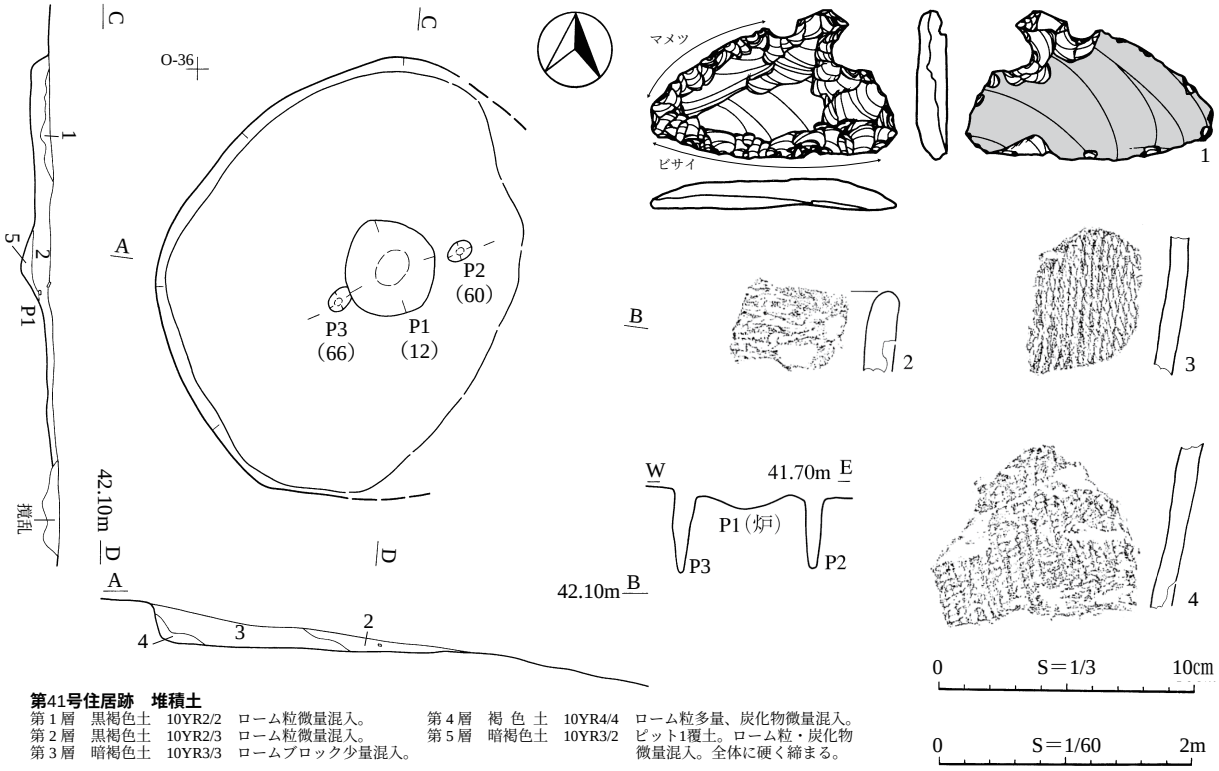
［堆積土］５層に分層できたが、このうち第５層は炉の堆積土である。西壁際では、締まりのある暗褐色土、中央から東側では黒褐色土で覆われている。

［炉］床面のほぼ中央付近に、径70×75㎝の円形で、深さ12㎝の浅い窪み（Ｐ１）を検出した。底面には被熱した痕跡は認められなかったが、炉と思われる。炉の堆積土は暗褐色土で全体に硬く締まっている。ローム粒及び炭化物を微量含んでいる。

［柱穴・ピット］炉の両脇に近接して、径15×20㎝の円形で、深さ60㎝と65㎝の小ピットを検出した。柱穴と考えられ、２本柱の構造と考えられる。

［遺物］堆積土から須恵器１点、第Ⅱ群土器86点（710ｇ）が出土した。石器は石匙１点、剥片１点が出土した。須恵器は後世の撹乱による流れ込みによるものである。図21-１は横型で、左辺の側縁稜と、下辺の側縁稜が摩滅している。裏面全体に光沢を確認した。図21-２は口縁部片で、口縁に結節が横位に回転施文されている。図21-３・４は胴部片で、３は単軸絡状体第１類が、４はRLが斜位に回転施文されている。

［小結］全体を確認できなかったが２本柱の構造の住居跡である。出土土器、構造等から縄文時代前期中葉のものと考えられる。（畠山）



第41号住居跡　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒微量混入。
第２層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量混入。
第３層　暗褐色土　10YR3/3　ロームブロック少量混入。
第４層　褐 色 土　10YR4/4　ローム粒多量、炭化物微量混入。
第５層　暗褐色土　10YR3/2　ピット1覆土。ローム粒・炭化物微量混入。全体に硬く締まる。

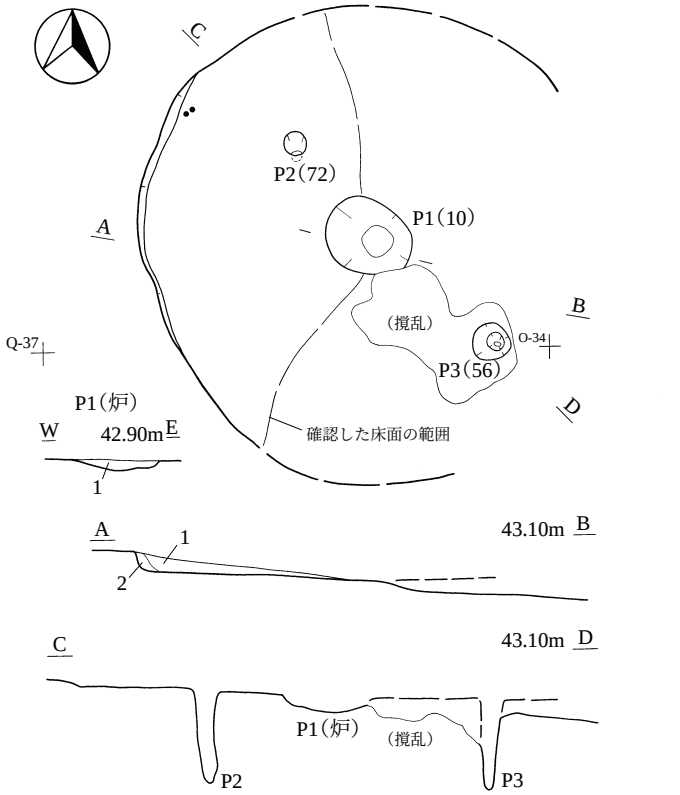
図21　第41号住居跡

第42号住居跡（ＳＩ42）（図22）

［位置・確認］調査区中央の南西側、Ｐ－37グリッドの緩斜面上に位置している。本住居の北東には第37号住居跡、南西には第37号住居跡が隣接している。

［平面形・規模・壁・床面］掘り込みが浅いために、西側の一部しか確認できなかった。壁高は西壁で約10㎝である。床面は西側部分しか確認できなかったが、基本層序の第Ⅴ層を掘り込んだもので、ほぼ平坦である。平面形は検出できた部分から推測すると、径3.6mほどの円形になるものと思われる。

［堆積土］西側の一部しか確認できなかった。壁際にローム質の褐色土の堆積が見られたが、大半は軟らかな暗褐色土である。



第42号住居跡　堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒・炭化物微量混入。軟らかく締まりなし。
第２層　褐 色 土　10YR4/6　ローム質。やや締まりあり。

P1（炉）　堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒・炭化物微量混入。硬く締まりあり。

図22　第42号住居跡

［炉］中央と思われる場所に径58×72㎝の楕円形で、深さ10㎝の浅い落ち込み（Ｐ１）を検出した。底面には被熱した痕跡は見られなかったが、炉と思われる。堆積土は硬く締まった暗褐色土の単層で、ローム粒や炭化物を微量含んでいる。

［柱穴・ピット］炉を挟んで、２個の小ピットを検出した。Ｐ２は炉から50㎝、Ｐ３は炉から約80㎝離れている。深さはＰ２は72㎝、Ｐ３は床面が確認できないかったが同規模の深さと思われる。

[遺物]住居跡内から第Ⅱ群土器が26点（146ｇ）出土した。

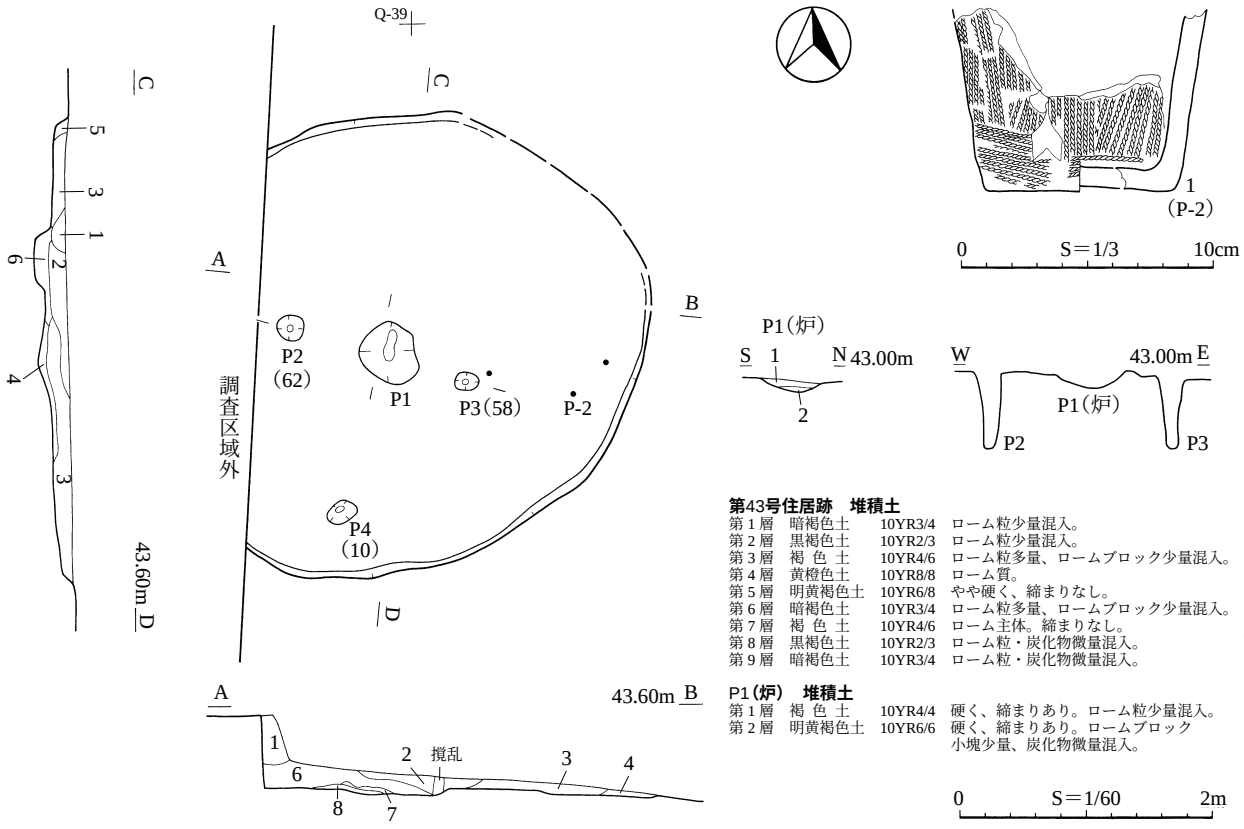
［小結］２本柱の柱穴配置を持つ住居跡である。出土土器、構造から縄文時代前期中葉の住居跡と考えられる。（畠山）

第43号住居跡（ＳＩ43）（図23）

［位置・確認］調査区中央の南西側、Ｐ・Ｑ－38グリッドに位置している。西側が調査区域外にのびている。また、南西には第42号住居跡が隣接している。

［平面形・規模・壁・床面］径3.62ｍの円形を呈する。壁は最も高い北壁で10㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を床面とし、やや凹凸が認められる。検出した部分の床面積は8.9㎡である。

［堆積土］９層に分層された。壁際にローム質の明黄褐色土や黄橙色土の堆積が見られる部分もあるが、大半はローム粒やロームブロックを含む褐色土や暗褐色土である。また、炉の上部にはやや硬く締まった暗褐色土が覆っている。



第43号住居跡　堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量混入。
第２層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量混入。
第３層	褐　色　土	10YR4/6	ローム粒多量、ロームブロック少量混入。
第４層	黄橙色土	10YR8/8	ローム質。
第５層	明黄褐色土	10YR6/8	やや硬く、締まりなし。
第６層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒多量、ロームブロック少量混入。
第７層	褐　色　土	10YR4/6	ローム主体。締まりなし。
第８層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・炭化物微量混入。
第９層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・炭化物微量混入。

P1(炉)　堆積土

第１層	褐　色　土	10YR4/4	硬く、締まりあり。ローム粒少量混入。
第２層	明黄褐色土	10YR6/6	硬く、締まりあり。ロームブロック小塊少量、炭化物微量混入。

図23　第43号住居跡

［炉］ほぼ中央に径44×48㎝の不整円形で、深さ10㎝の落ち込み（Ｐ１）を検出した。底面には被熱の痕跡がないが、炉と考えられる。堆積土は褐色土と明黄褐色土の２層が確認され、ともに硬く締まっている。
［柱穴・ピット］床面から３個の小ピットを検出した。このうち、柱穴と考えられるのはＰ２とＰ３で、炉からは30～46㎝離れている。径20㎝前後で、深さ60㎝前後である。２本柱の柱穴配置と考えられる。
［遺物］堆積土から９点（115ｇ）の土器片が出土した。すべて、第Ⅱ群土器である。図23-１は、単軸絡状体第１類が縦位に回転施文されている。
［小結］２本柱の柱穴配置を持つ住居跡である。出土土器、構造から縄文時代前期中葉の住居跡と考えられる。（畠山）

第47号住居跡（ＳＩ47）（図24）
［位置・確認］Ｏ－34グリッドに位置している。平安時代の第36号住居跡と第３号溝跡に大部分を破壊されている。また、東側には第40号・41号住居跡や第51号・52号土坑が、南側には第39号住居跡や第44号・53号土坑が隣接している。このうち、第53号土坑と本住居が重複している可能性が高いが、平安時代の遺構に破壊されているため、新旧関係は把握できなかった。
［平面形・規模・壁・床面］平面形は楕円形を呈し、短軸3.4m前後（推定）である。長軸は不明であるが、おおよそ４m前後と思われる。壁高は30～40㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘り込んだもので、確認した部分ではほぼ平坦である。
［堆積土］1層のみ確認できた。軟らかい締まりの弱い暗褐色土で、ローム粒を少量含んでいる。
［炉］第36号住居跡と第３号溝跡の構築の際に破壊されたものと考えられ、確認できなかった。おそらく、Ｐ１とＰ２の中間に位置していたものと思われる。
［柱穴・ピット］床面から１個、第36号住居床下から２個検出した。このうち、柱穴と考えられるのは、Ｐ１とＰ２である。径20㎝前後の円形で、深さはＰ１が87㎝、Ｐ２が50㎝である。
［遺物］第Ⅱ群土器が床面から６点、堆積土から21点（430ｇ）が出土した。また、削器２点、剥片７点が出土した。図24-１は口縁形状が２個一対の小波状になり、口縁は単軸絡状体第１類が横位に、胴部は縦位に回転施文されている。隆帯際には側面圧痕が施されている。図24-２・３は口縁部に、結節が横位に回転施文されている。２は胴部に、単軸絡状体第１類が縦位に回転施文されている。図24-４は、底面に縄文が回転施文されている。
［小結］大部分を破壊されているが、住居の構造は２本柱の柱穴配置と考えられる。出土遺物から、縄文時代前期中葉と思われる。（畠山）

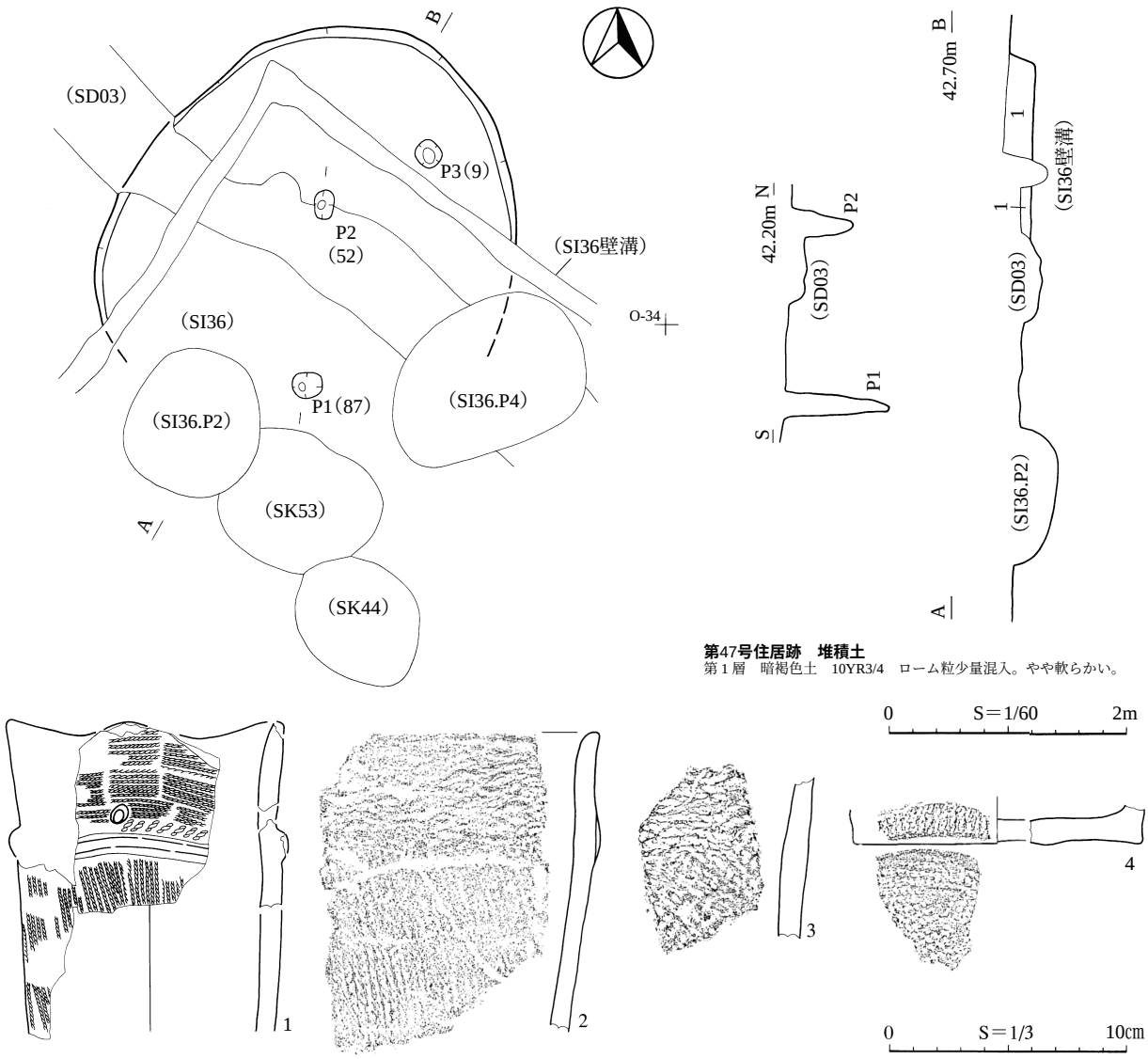

（SD03）
P3（9）
P2
（52）
（SI36壁溝）
（SI36）
O-34
（SI36.P2）
P1（87）
（SI36.P4）
（SK53）
（SK44）
A
B
42.20m N
S
P2
（SD03）
P1
42.70m B
A
1
（SI36壁溝）
（SD03）
（SI36.P2）
第47号住居跡　堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒少量混入。やや軟らかい。
0　S＝1/60　2m
1
2
3
4
0　S＝1/3　10cm

図24　第47号住居跡

第２節　土坑

遺物の出土状態、断面形状、堆積土の状況、立地等を総合的に判断して、総数14基を抽出した。以下に検出順に記載する。

第１号土坑（ＳＫ01）（図25・26）

［位置］Ｍ－42グリッドに位置している。上部が削平を受けており、東側が一段低くなっている。

［平面形・断面形・規模］平面形は円形で、開口部の軸長は88×96㎝、底面の軸長は75×82㎝、深さは30㎝である。断面は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］４層に分層された。底面近くにロームブロックを含む黒色土（第２層）が部分的に見られたが、大半は黒色土（第１層）である。第３層は出土した土器の間に見られたもの、第４層は土器と壁・底面との間に見られたもので、基本層序の第Ⅵ層に相当する。

［遺物］南東壁で底面に密着して２個体の浅鉢型土器（1163ｇ）が重なって、斜位に出土した。土器は、粘土質のローム（第４層）で土坑に固定されていた。図26-２は上位から、図26-２は下位から出土したものである。文様構成はいずれも同じで、文様帯の作出後にミガキを施している。また、文様帯の作出方法も同じで、地文施文後に区画する上方の沈線、文様帯内の沈線、区画する下方の沈線の順に施文されている。器形は文様帯の上方にて屈曲し、立ち上がっている。胎土には小礫が混入する。十腰内Ⅱ式に相当するものである。

［小結］構築時期は縄文時代後期と考えられ、墓の可能性が高い。（畠山）

第２号土坑（ＳＫ02）（図25・26）

［位置］Ｍ－41グリッドに位置している。上部が削平を受け、浅い土坑となっている。第１号土坑の南側に隣接している。

［平面形・断面形・規模］平面形は円形で、開口部の軸長は105×110㎝、底面の軸長は84×95㎝、深さは24㎝である。断面は浅箱型で、底面は平坦である。

［堆積土］３層に分層された。壁際に黒褐色土、上下にローム粒を多量に含む黒色土（第１・２層）が堆積している。

［遺物］縄文時代後期の土器破片が１点（21ｇ）出土した。図26-２は地文施文後に沈線が施文されている。胎土には小礫が混入する。十腰内Ⅱ式に相当すると考えられる。

［小結］構築時期は縄文時代後期で、第１号土坑と同時期のものと考えられる。（畠山）

第９号土坑（ＳＫ09）（図25・26）

［位置］Ｍ－39グリッドに位置している。本遺構の西側には第８号土坑が隣接している。

［平面形・断面形・規模］平面形は円形で、開口部の軸長は80×80㎝、底面の軸長は104×112㎝、深さは76㎝である。断面形はフラスコ型で、底面は平坦である。

［堆積土］５層に分層されたが、黒色土が主体となっている。中位には第Ⅴ層起源の黄褐色土のブロックを主体とする土層が見られた。人為堆積と考えられる。

［遺物］第Ⅱ群土器が１点（15ｇ）出土した。図26-４は胴部片でRLが斜位に回転施文されている。
［小結］土坑の形態や堆積土の状況から縄文時代に構築されたものと判断される。堆積土から前期の土器片が出土しているが、周辺に位置する土坑の時期が縄文時代後期であることから、本土坑もそれらと構築時期を同じくする可能性が高い。（畠山）

第10号土坑（ＳＫ10）（図25）
［位置］Ｌ・Ｍ－39グリッドに位置している。北側には第７～９号土坑が隣接している。
［平面形・断面形・規模］平面形は円形で、開口部の軸長91×95㎝、底面の軸長98×102㎝、深さ68㎝である。断面形はフラスコ型で、底面は平坦である。
［堆積土］５層に分層された。底面には黒褐色土が薄く堆積し、その上には黒色土（第１・３層）が厚く堆積している。第３層中には薄い褐色土（第４層）の層が見られ、第１層下部には黄褐色土（第２層）がブロック状に含まれている。
［遺物］底面から縄文時代後期と思われる無文の土器片と第Ⅱ群土器が１点出土した。石器は削器１点が出土した。
［小結］出土土器や隣接する第９号土坑と形態や堆積状態が似ていることから、縄文時代後期に属するものと思われる。（畠山）

第14号土坑（ＳＫ14）（図25）
［位置］調査区の中央の低地、Ｈ－32グリッドに位置している。周辺には平安時代の道跡や第９号溝跡があるが、本土坑はこれらの遺構の下位に検出された。
［平面形・断面形・規模］平面形は円形で、開口部の軸長は78×80㎝、底面の軸長は62×63㎝、深さ86㎝である。断面形は深箱型で、底面は平坦である。
［堆積土］11層に分層された。大半が黒色土や黒褐色土であるが、次の三つに大別される。一つは第1層から７層までの黒褐色土や黒色土である。総じて軟らかく、ローム粒が少量混入している。二つめは第８層～10層までの黒褐色土で、ローム粒やロームブロックを多量に含んでおり、人為的なものと考えられる土層である。三つ目は第11層の黒色土である。
［遺物］なし。
［小結］全体として円筒形を呈する土坑である。明確な時期決定はできないが、第Ⅳ層下位から検出されていることから、縄文時代に構築されたことは確実である。（畠山）

第29号土坑（ＳＫ29）（図25）
［位置］Ｐ－24グリッドに位置している。平安時代の内壕（ＳＤ22）に半分以上を削平されている。
［平面形・断面形・規模］残存部から平面形が円形であることはわかるが、全体の規模は不明である。検出した部分では、開口部・底面とも170㎝で、深さ40㎝である。壁の立ち上がりは垂直に近い部分と袋状に掘り込まれている部分がある。
［堆積土］３層に分層された。底面にローム質の褐色土が堆積しているが、大半が黒褐色土で、硬く締まった土である。

［遺物］縄文時代前期の土器片３点（36ｇ）が出土した。
［小結］土坑上部が崩落によって変形している可能性が高く、本来はフラスコ型の土坑であったと思われる。（畠山）

第31号土坑（ＳＫ31）（図25）
［位置］調査区南側で壕の内側、Ｑ－23グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部115×120㎝、底面140×150㎝、深さ40㎝である。
［断面形・底面］断面形はフラスコ型で、底面は平坦である。
［堆積土］黒色土を主体に５層に分層され、第３～５層中にはロームブロックが多量に混入している。
［遺物］堆積土中から第Ⅱ群土器が200ｇ出土した。
［小結］断面形状及び遺物から帰属時期は縄文時代と考えられる。（小山）

第49号土坑（ＳＫ49）（図25）
［位置］Ｏ－33グリッドに位置し、平安時代の第36号住居跡の床下から検出された。また、西端が第53号土坑と接しているが、新旧関係は不明である。
［平面形・断面形・規模］上部が削平されているが、平面形は楕円形である。検出面（第36号住居床面）での軸長は97×118㎝、底面の軸長は80×80㎝である。検出面からの深さは44㎝であるが、すでに削平された分を加味すると、約64㎝である。断面形は逆台形で、底面には凹凸が見られる。
［堆積土］黒褐色土の単層であり、ローム粒やロームブロックを多量含んでいる。人為堆積である。
［遺物］なし。
［小結］構築時期の決定が困難であるが、縄文時代の土坑と思われる。（畠山）

第51号土坑（ＳＫ51）（図25）
［位置］Ｏ－34グリッドに位置している。第40号住居跡と重複し、これより新しい。
［平面形・断面形・規模］平面形は円形で、開口部の軸長は61×71㎝、底面の軸長は71×74㎝、深さ42㎝である。断面形はフラスコ型で、底面は平坦である。
［堆積土］３層に分層された。壁際に黒褐色土が見られるが、大半は黒色土である。
［遺物］なし。
［小結］構築時期の決定の根拠にかけるが、縄文時代前期の土坑と思われる。（畠山）

第52号土坑（ＳＫ52）（図25）
［位置］Ｍ－34グリッドに位置している。
［平面形・断面形・規模］平面形は円形で、開口部の軸長は77×81㎝、底面の軸長は90×98㎝、深さ72㎝である。断面形はフラスコ型で、底面は平坦である。
［堆積土］４層に分層された。上位には黒色土と黒褐色土（第１・２層）、中位にローム質の褐色土（第３層）、下位に黒褐色土の堆積が見られた。第２層以下は人為堆積と思われる。
［遺物］縄文時代前期の土器片が１点（44ｇ）出土した。

［小結］出土遺物から、縄文時代前期中葉に構築されたものと思われる。（畠山）

第53号土坑（ＳＫ53）（図25）

［位置］Ｏ－33グリッドに位置している。平安時代の第36号住居跡床下から検出され、上部を削平されている。また、東端が第44号土坑と接しているが、新旧関係は不明である。

［平面形・断面形・規模］平面形は楕円形で、検出面（第36号住居跡床面）での軸長は111×132㎝、底面での軸長は88×103㎝である。検出面からの深さは53㎝であるが、すでに削平された分を加味すると、約73㎝である。断面形は逆台形で、底面は平坦である。

［堆積土］２層に分層されたが、ともにローム粒やロームブロックを多量に含んだ土で、人為堆積と思われる。

［遺物］縄文時代前期中葉の土器片51点（963ｇ）が出土した。すべて細片である。

［小結］時期決定の根拠にかけるが、出土遺物から縄文時代前期中葉に構築されたものと思われる。（畠山）

第68号土坑（ＳＫ68）（図25）

［位置］調査区南側の南端、Ｆ－１・２グリッドに位置している。調査区際から検出したため、全てを検出することは出来なかった。

［平面形・規模］平面形は円形になると思われる。現存する長軸軸長は370㎝、深さは40㎝である。

［断面形・底面］断面形は浅箱型である。底面はほぼ平坦で、底面の全域にわたり踏みしめられたような堅さが認められた。

［堆積土］黒褐色土を主体として４層に分層された。ロームブロック等は含まれていない。

［遺物］なし。

［小結］炉、柱穴等は検出されなかったが、底面の堅さ、堆積土の状況から、縄文時代の竪穴住居跡の可能性が考えられる。（小山）

第122号土坑（ＳＫ122）（図25）

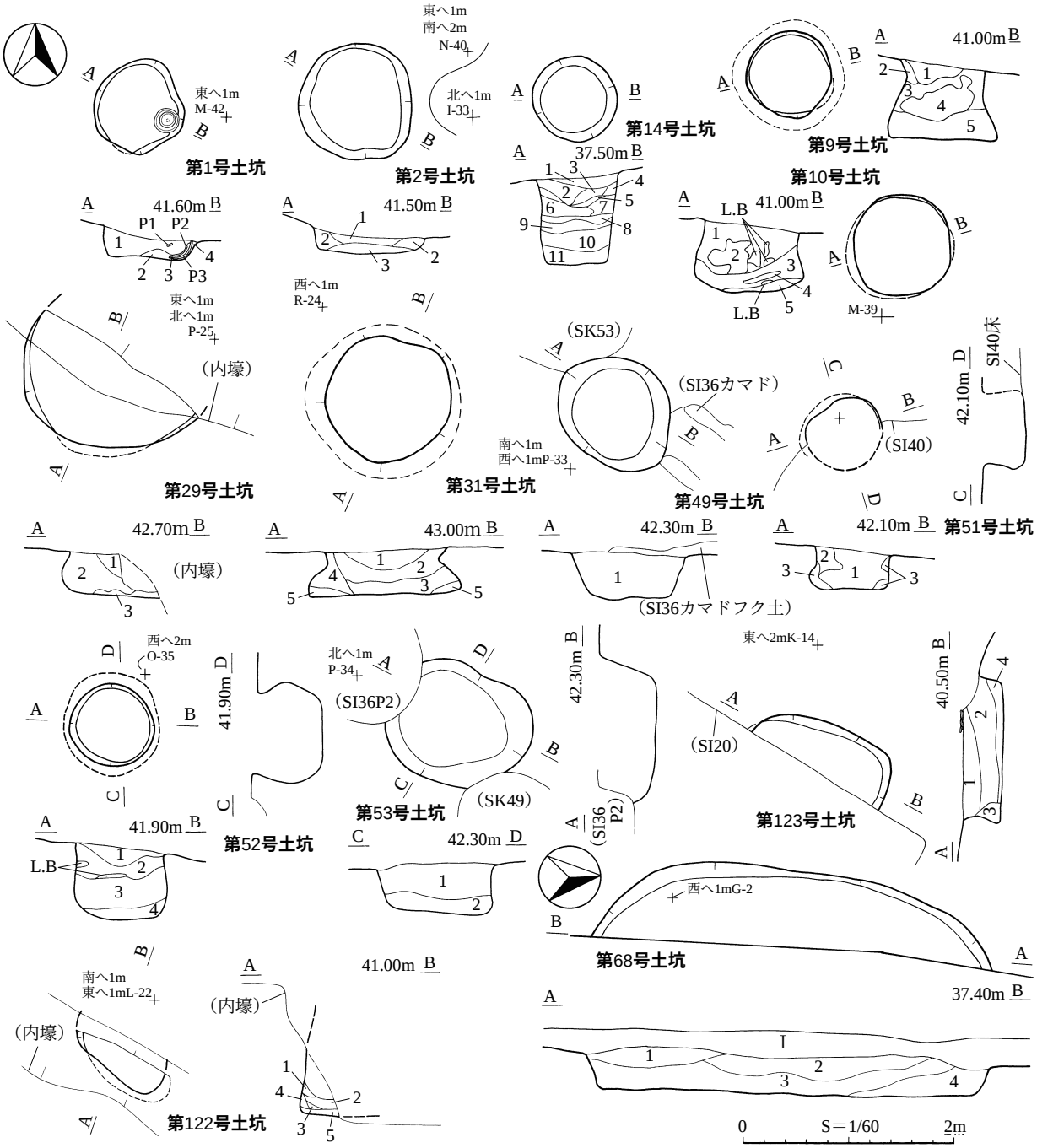
［位置］Ｌ－22グリッドに位置している。平安時代の内壕（SD22）の調査中に検出したもので、大部分を削平されており、全体の状況は不明である。

［平面形・断面形・規模］平面形は不明であるが、残存部分から円形を基調としたものと考えられる。開口部と底面の大部分が削平されているため規模は不明であるが、残存部分は底面で98㎝であり、比較的大きな土坑であったと考えられる。深さは123㎝である。断面形はフラスコ型で、底面は平坦である。

［堆積土］壁際の一部分ではあるが、４層が確認された。大部分がローム質の明黄褐色土であり、人為堆積の様子がうかがわれた。

［遺物］縄文時代前期中葉の土器破片２点（43ｇ）が出土した。２点とも小片である。

［小結］時期決定の根拠にかけるが、縄文時代のフラスコ型土坑と思われる。（畠山）



第1号土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒多量混入
第2層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒多量混入
第3層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量混入
第4層	暗褐色土	10YR3/4	粘土質

第2号土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒多量混入
第2層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒多量混入
第3層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量混入

第9号土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量混入
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量混入
第3層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量混入
第4層	黄褐色土	10YR5/8	浮石粒・塊主体
第5層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量混入

第10号土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒少量混入
第2層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	軟らかい
第3層	黒 色 土	1.7/1	炭化物少量混入
第4層	褐 色 土	7.5YR4/4	炭化物混入
第5層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量混入

第29号土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量混入
第2層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量混入
第3層	褐 色 土	10YR4/6	ローム質

第14号土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量混入
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量混入
第3層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒少量混入
第4層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量混入
第5層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒の薄層あり
第6層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量混入
第7層	黒 色 土	1.7/1	軟らかい
第8層	黒 色 土	10YR2/2	ローム粒・塊多量混入
第9層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量混入
第10層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量混入
第11層	黒 色 土	1.7/1	軟らかい

第31号土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒微量混入
第2層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量混入
第3層	黒褐色土	10YR2/2	ロームブロック少量
第4層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒多量混入
第5層	暗褐色土	10YR3/3	ロームブロック多量

第49号土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・塊少量、焼土粒・塊微量混入

第51号土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量混入
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量混入
第3層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒・塊少量混入

第52号土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量混入
第2層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒多量混入
第3層	褐 色 土	10YR4/6	ローム質黒色土混入
第4層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量混入

第53号土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒、焼土粒微量
第2層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒、焼土粒微量

第68号土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量混入
第2層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量混入
第3層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量混入
第4層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒微量混入

第122号土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量混入
第2層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム質
第3層	明褐色土	7.5YR5/6	粘土質硬い
第4層	明褐色土	7.5YR5/6	粘土質ローム粒混入
第5層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒混入

第123号土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量混入
第2層	褐 色 土	10YR4/6	ロームブロック少量
第3層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量混入
第4層	褐 色 土	10YR4/4	ロームブロック多量

図25　縄文時代の土坑

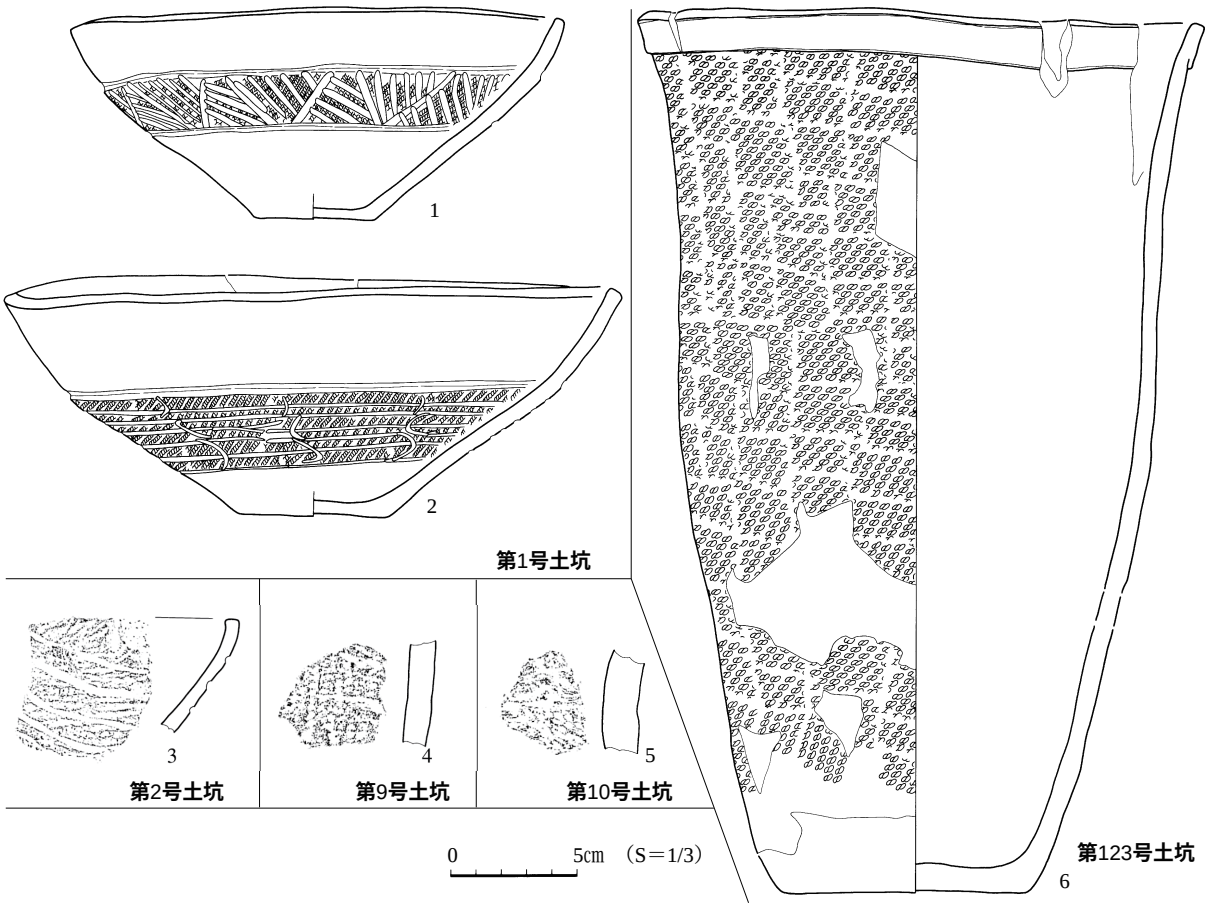


図26　縄文時代の土坑出土遺物

第123号土坑（ＳＫ123）（図26）

［位置］調査区南側の壕の外側、Ｋ－13グリッドに位置している。

［重複］第20号竪穴住居跡より古い。

［平面形・規模］重複により全体形を検出できなかったが楕円形になるものと考えられる。計測できた軸長は、開口部1.4m、底面1.4mで、深さは35㎝である。

［断面形・底面］断面形はフラスコ型で、底面は平坦である。

［堆積土］黒褐色土を主体に４層に分層された。第１層上面から完形個体が横転した状況で出土した。

［出土遺物］図26-6は中期末葉から後期初頭の粗製土器である。器形は胴部が膨らみ、そこから一旦内傾し、口縁部で外反している。最大径は口縁になる。口唇は折り返し状になり、文様はRLRが縦位に回転施文されている。

［小結］出土遺物から帰属時期は縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。（小山）

第３節　溝状土坑

総数52基を検出した。本文中で、軸長の記載をする際には長軸×短軸の順で記した。また長軸方向の傾きは真北から何度傾くかを記した。以下、検出順に記載する。

第１号溝状土坑（ＳＶ01）（図27）
［位置］調査区の北側、Ｈ－69グリッドに位置している。
［重複］第5号溝跡と重複し、これより古い。また、東端が撹乱を受けている。
［規模］軸長は、開口部228×57～67㎝、底面250×12～30㎝で、深さ80㎝である。やや幅広の土坑で、長軸方向は63度西へ傾いている。
［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面はやや開きながら立ち上がっている。底面は平坦で、西側へ向かって低くなっている。
［堆積土］８層に分層された。底面付近では明黄褐色土のロームが見られるが、上部では混入物の少ない黒色土や黒褐色土が堆積している。
［出土遺物］なし。（畠山）

第２号溝状土坑（ＳＶ02）（図27）
［位置］調査区の中央付近、Ｋ－54グリッドに位置している。西へ５ｍ離れた場所には、第３号溝状土坑が隣接している。
［規模］軸長は開口部257×87～98㎝、底面268×25～42㎝で、深さ115㎝である。幅広の土坑で、長軸方向は52度東へ傾いている。
［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面は開きながら立ち上がっている。底面には凹凸が見られ、中央部で若干高くなっている。
［堆積土］８層に分層された。上半部では黒色土と暗褐色土の堆積が見られ、下半部では黄褐色系の土が厚く堆積している。黄褐色系の土は壁の崩落に伴うものとも考えられる。
［出土遺物］なし。（畠山）

第３号溝状土坑（ＳＶ03）（図27）
［位置］調査区の中央付近、Ｍ－54・55グリッドに位置している。東へ５ｍ離れた場所には第２号溝状土坑が、北西約９ｍ離れた場所には第12号、13号溝状土坑が位置している。
［規模］軸長は、開口部300×35～54㎝、底面326×11～26㎝で、深さ112㎝である。幅の狭い土坑で、北端がやや広く掘り込まれている。長軸方向は36度東へ傾いている。
［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。
［堆積土］８層に分層された。ローム粒を多量に含む黒褐色土や暗褐色土が主体となっている。
［出土遺物］なし。（畠山）

第４号溝状土坑（ＳＶ04）（図27）
［位置］調査区の北側、Ｈ－65グリッドに位置している。
［規模］軸長は、開口部278×30～43㎝、底面293×11～23㎝で、深さ92㎝である。幅の狭い土坑で、長軸方向は71度東へ傾いている。
［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。底面はほぼ平坦であるが、中央付近が低く掘り込まれている。
［堆積土］９層に分層された。暗褐色土と黒褐色土、明黄褐色土が交互に堆積している。
［出土遺物］なし。（畠山）

第５号溝状土坑（ＳＶ05）（図27）
［位置］調査区の中央付近、Ｈ－44グリッドに位置している。
［規模］軸長は、開口部296×30～41㎝、底面305×11～37㎝で、深さ72㎝である。浅く、幅の狭い土坑で、長軸方向は64度西へ傾いている。
［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面は垂直に立ち上がっている。中央付近では壁の崩落が見られ、この付近の堆積土にはロームブロックの混入が著しい。
［堆積土］11層に分層された。黒色土や黒褐色土、黄褐色土等が交互に見られている。底面付近では壁の崩落に伴うロームブロックが堆積している。
［出土遺物］なし。（畠山）

第６号溝状土坑（ＳＶ06）（図27）
［位置］調査区の中央付近、Ｊ－35・36グリッドに位置している。
［重複］道跡と重複し、これよりも古い。
［規模］軸長は、開口部263×20～30㎝、底面288×８～22㎝で、深さ73㎝である。浅く、幅の狭い土坑で、長軸方向はほぼ南北にあり、真北を向いている。
［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面は垂直に立ち上がっている。底面は中央付近で高く、両端が低くなっている。
［堆積土］５層に分層された。底面に粘土質の褐色土、この上部には黒色土や黒褐色土が堆積している。
［出土遺物］なし。（畠山）

第７号溝状土坑（ＳＶ07）（図27）
［位置］調査区の南側、Ｌ－33グリッドに位置している。
［重複］第１号・２号溝跡と重複し、これらの遺構よりも古い。
［規模］重複により大半を削平されているが、現存する軸長は開口部337×45㎝、底面346×８～13㎝で、深さ68㎝である。幅の狭い土坑で、長軸方向はほぼ真西にあり、東へ87度傾いている。
［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面は垂直に立ち上がっている。底面は平坦で、東へ向かって低くなっている。
［堆積土］４層に分層された。ローム粒を多量に含んだ黒色土が主体である。
［出土遺物］なし。（畠山）

第８号溝状土坑（ＳＶ08）（図27・33）

［位置］調査区の南側、Ｍ・Ｎ－31グリッドに位置している。

［規模］軸長は、開口部350×65～92㎝、底面440×20～30㎝で、深さ142㎝である。幅の広い土坑で、長軸方向は78度西へ傾いている。

［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれている。短軸壁面は垂直に近い立ち上がりであり、全体にＹ字状となっている。底面は平坦で、中央付近が低く窪んでいる。

［堆積土］14層に分層された。ローム粒を多量に含んだ暗褐色土や黒褐色土とローム質の明黄褐色土が交互に堆積している。

［出土遺物］堆積土から第Ⅱ群土器127点（1,348ｇ）、石錐１点が出土した。図33-１は単軸絡状体第１類が縦位に回転施文され、図33-２はRLRが横位に回転施文されている。図33-３は端部付近に加工が密に施され、端部は摩滅している。（畠山）

第９号溝状土坑（ＳＶ09）（図27）

［位置］調査区南側の低地、Ｈ－35グリッドに位置している。

［重複］第９号溝跡と重複し、これよりも古い。

［規模］軸長は、開口部286×60～72㎝、底面314×24～36㎝で、深さ114㎝である。やや幅の広い土坑で、長軸方向は82度東へ傾いている。

［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面は垂直に立ち上がっている。西壁の半分が崩落して、いくぶん広くなっている。底面は平坦である。

［堆積土］10層に分層された。下半部では壁の崩落に伴う黄褐色土や褐色土、上半部では混入物の少ない黒色土が堆積している。

［出土遺物］第Ⅱ群土器片１点（31ｇ）が出土した。（畠山）

第10号溝状土坑（ＳＶ10）（図28）

［位置］調査区南側の低地、Ｇ・Ｈ－37グリッドに位置する。東側は町道のため、調査できなかった。

［重複］第11号溝状土坑と重複し、これよりも新しい。

［規模］検出した部分の軸長は、開口部90×56㎝、底面110×30㎝で、深さ120㎝である。やや幅の広い土坑で、長軸方向は84度西へ傾いている。

［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

［堆積土］７層に分層された。最下部は湧水のため確認していないが、混入物の少ない黒色土が主体となっている。基本層序の第Ⅲ層下部から掘り込まれている。

［出土遺物］なし。（畠山）

第11号溝状土坑（ＳＶ11）（図28）

［位置］調査区南側の低地、Ｇ・Ｈ－37グリッドに位置する。町道のため、北端を調査できなかった。

［重複］第10号溝跡と重複し、これよりも古い。

［規模］検出した部分の軸長は、開口部355×26㎝、底面363×14㎝で、深さ87㎝である。幅の狭い土

坑で、長軸方向は23度東へ傾いている。
［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面は垂直に立ち上がっている。底面は平坦であるが、中央付近が窪んでいる。
［堆積土］５層に分層された。ローム粒やロームブロック含む黒色土が主体となっている。基本層序の第Ⅲ層下部から掘り込まれている。
［出土遺物］なし。（畠山）

第12号溝状土坑（ＳＶ12）（図28）
［位置］北側調査区、Ｎ・Ｏ－56グリッドに位置している。
［規模］軸長は開口部335×25～45㎝、底面345×15㎝、深さ65㎝で、長軸方向は東へ20度傾いている。
［壁・底面］長軸両端の壁は袋状に掘り込まれ、短軸壁は垂直に立ち上がっている。底面は片側の長軸方向へ向かい緩やかに傾斜しており、起伏が見られる。
［堆積土］３層に分層された。第３層にはロームブロックが多量に含まれている。
［出土遺物］なし。（小山）

第13号溝状土坑（ＳＶ13）（図28）
［位置］北側調査区、Ｏ－55グリッドに位置している。
［規模］軸長は開口部160×40㎝、底面200×10㎝、深さ100㎝で、長軸方向はほぼ真北を指している。
［壁・底面］長軸両端の壁は袋状に掘り込まれ、短軸壁は垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。
［堆積土］３層に分層された。第３層にはロームブロックが多量に含まれている。
［出土遺物］なし。（小山）

第14号溝状土坑（ＳＶ14）（図28）
［位置］調査区の北側、Ｎ・Ｏ－72グリッドに位置している。
［規模］軸長は、開口部433×38㎝、底面484×18㎝で、深さ96㎝である、幅の狭い土坑である。長軸方向はほぼ東西で、88度東へ傾いている。
［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれているが、とくに西端が広く掘り込まれている。短軸壁面は垂直に立ち上がっている。底面は凹凸が激しく、中央付近が低く掘り込まれている。
［堆積土］５層に分層された。大半は混入物の少ない黒色土や黒褐色土が主体となっている。
［出土遺物］なし。（畠山）

第15号溝状土坑（ＳＶ15）（図28・33）
［位置］南側調査区の壕の内側、Ｎ－20グリッドに位置している。
［重複］第８号住居跡より古い。
［規模］開口部375×35㎝、底面415×15㎝で、深さは125㎝である。長軸方向は東へ115度傾いている。
［壁・底面］長軸両端の壁は袋状に掘り込まれ、単軸壁は垂直に立ち上がっている。底面は片側の長軸方向へ向かい緩やかに傾斜しており、起伏が見られる。

［堆積土］７層に分層され、黒色土と、ロームブロックを多量に含む層が交互に堆積している。
［出土遺物］堆積土中から第Ⅱ群土器が1,200ｇ、削器が１点出土した。図33-４は胴部片で、LRLが斜位に回転施文されている。図33-５は端部につまみらしい突起が作出され、裏面右側縁に光沢を確認した。つまみの形状が明瞭でないため、削器に含めたが、刃部形状、光沢などから石匙と同様な用途を持った石器と考えられる。（小山）

第16号溝状土坑（ＳＶ16）（図28）
［位置］南側調査区の壕の内側、Ｓ・Ｔ－20グリッドに位置している。
［規模］軸長は開口部335×35㎝、底面410×20㎝で、深さ85㎝である。長軸方向は東へ70度傾いている。
［壁・底面］長軸両端の壁は袋状に掘り込まれ、短軸壁は垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。
［堆積土］４層に分層された。第３層はローム層で、第４層はロームとの混合土層である。崩落土と考えられる。
［出土遺物］なし。（小山）

第17号溝状土坑（ＳＶ17）（図28）
［位置］南側調査区の壕の外側、Ｊ－15・16グリッドに位置している。
［平面形・規模］長軸の端部が拡がる形状で、軸長は開口部275×18～50㎝、底面340×10～35㎝で、深さは90㎝である。長軸方向は東へ160度傾いている。
［壁・底面］長軸両端の壁は袋状に掘り込まれ、短軸壁は垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。
［堆積土］４層に分層された。堆積土中にロームブロックやローム層は混入していない。
［出土遺物］なし。（小山）

第18号溝状土坑（ＳＶ-18）（図28）
［位置］南側調査区の壕の内側、Ｄ－24グリッドに位置している。
［規模］開口部325×20㎝、底面330×15㎝で、深さは60㎝である。長軸方向はほぼ真北を指している。
［壁・底面］長軸両端の壁は袋状に掘り込まれ、短軸壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は片側の長軸方向へ向かい緩やかに傾斜しており、起伏が見られる。
［堆積土］黒褐色土を主体として６層に分層された。最下層にあたる第６層はロームとの混合土で、壁が崩落したものと考えられる。
［出土遺物］なし。（小山）

第19号溝状土坑（ＳＶ19）（図29・33）
［位置］南側調査区の壕の内側、Ｎ・０－18・19グリッドに位置している。
［規模］軸長は開口部270×40㎝、底面335×15㎝、深さ120㎝で、長軸方向は東へ50度傾いている。
［壁・底面］長軸両端の壁は袋状に掘り込まれ、短軸壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は片側の長軸方向へ向かい緩やかに傾斜し、起伏が見られる。
［堆積土］黒色土を主体として５層に分層された。最下層にあたる第５層は黒色土層で第３・４層は

ローム主体の層である。黒色土が薄く堆積した後、壁が崩落しながら埋没した状況が考えられる。
［出土遺物］堆積土中から第Ⅱ群土器が500ｇ出土した。図33-６は口縁部片で、結節が横位に回転施文されている。７～９は胴部片で、７はRLRが、９はLRが斜位に回転施文されている。８は口縁部及び隆帯下に結節が横位に回転施文され、隆帯上には結節端部の側面圧痕が施されている。胴部にはRLが横～斜位に回転施文されている。（小山）

第20号溝状土坑（ＳＶ20）（図29・33）
［位置］調査区の南側、Ｍ・Ｎ－22グリッドに位置している。
［規模］軸長は、開口部336×46㎝、底面422×25㎝で、深さ115㎝である。幅の狭い土坑で、長軸方向は47度西へ傾いている。
［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面は垂直に立ち上がっている。南西壁は崩落のため、いくぶん袋状になっている。底面はほぼ平坦である。
［堆積土］４層に分層された。底面に黒色土の堆積が見られるものの、下半部は褐色土や黄褐色土、上部から中程にかけてはロームブロックを含む黒褐色土で占められている。また、壁には崩落の状況が見られることから、第２層はこれが堆積したものと考えられる。
［出土遺物］縄文時代前期の土器片２点（133ｇ）が出土した。図33-10は頸部片である。隆帯上には結節が、胴部にはRLが回転施文されている。（小山）

第21号溝状土坑（ＳＶ21）（図29・33）
［位置］調査区の南側、Ｍ・Ｎ－27グリッドに位置している。
［規模］軸長は、開口部343×35～54㎝、底面370×20～28㎝で、深さ138㎝である。幅の狭い土坑である。長軸方向は東西に近く、83度西へ傾いている。
［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面は垂直に立ち上がっている。底面は平坦であり、中央部がやや高くなっている。
［堆積土］11層に分層された。上半部は混入物の少ない黒褐色土、下半部は暗褐色土・黒色土と黄褐色土・明褐色土とが交互に堆積している。
［出土遺物］縄文時代前期の土器片27点（503ｇ）と石鋸１点が出土した。図29-11・12・14は胴部片で、11には単軸絡状体第１類が縦位に、12にはRLRが横位に、14にはRLRが斜位に回転施文されている。13は底部片で、底面に縄文が回転施文されている。図34-15は剥離加工後に擦痕調整を施している。刃部は摩滅している。（畠山）

第22号溝状土坑（ＳＶ22）（図29）
［位置］南側調査区の南端で調査区際、Ｊ・Ｋ－５グリッドに位置している。
［重複］第13号竪穴住居跡より古い。
［平面形・規模］平面形は長軸の端部ですぼまり、屈曲する形態である。調査区外へ伸びるため、両端共にこのような形態をするかは不明である。現存する規模は開口部（305）×90㎝、底面（320）×40㎝で、深さは100㎝である。長軸方向は東へ35度傾いている。

［壁・底面］現存している長軸壁は袋状に掘り込まれ、短軸壁は段になりながら立ち上がっている。底面には起伏が見られる。
［堆積土］９層に分層された。第１層から第５層は黒色土を主体とし、第６層以下はロームを主体とする層である。特に第７層は純粋なローム層である。このローム層は堆積土の半分を占めており、50㎝程の厚さで堆積している。短軸側の断面形が段を持ち不整形になるため、地滑りのように一気に崩落した事が考えられる。
［出土遺物］堆積土中から第Ⅱ群土器が500ｇ出土した。（小山）

第23号溝状土坑（ＳＶ23）（図29）
［位置］南側調査区で壕の外側、Ｊ－８グリッドに位置している。
［重複］第21号竪穴住居跡、第31号溝跡より古い。
［規模］軸長は開口部250×45㎝、底面290×15㎝、深さ90㎝で、長軸方向は東へ110度傾いている。
［壁・底面］長軸両端の壁は袋状に掘り込まれ、短軸壁は垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。
［堆積土］５層に分層された。第４層にはロームが多量に混入している。
［出土遺物］なし。（小山）

第24号溝状土坑（ＳＶ24）（図29）
［位置］南側調査区で壕の外側、Ｍ・Ｎ－14グリッドに位置している。
［重複］第23・25号溝跡より古い。
［規模］重複による削平のため現存する軸長は開口部（335）×60㎝、底面350×15㎝で、深さは80㎝である。長軸方向は東へ150度傾いている。
［壁・底面］現存している長軸壁は袋状に掘り込まれ、短軸壁は底面から20㎝程の高さまでは垂直に立ち上がり、そこから大きく開きながら立ち上がっている。
［堆積土］10層に分層された。第３・４・６・８層はローム層で、第10層はロームとの混合土層である。断面形と短軸が幅広であることから、壁が崩落しながら堆積したものと考えられる。
［出土遺物］堆積土中から第Ⅱ群土器が１点出土した。（小山）

第25号溝状土坑（ＳＶ25）（図29）
［位置］南側調査区の南端で調査区際、Ｎ－11グリッドに位置している。
［重複］第14号竪穴住居跡より古い。
［規模］軸長は開口部330×40～65㎝、底面360×20～40㎝で、深さは120㎝である。長軸方向は東へ15度傾いている。
［壁・底面］長軸両端壁は袋状に掘り込まれ、短軸壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は片側の長軸方向へ向かい緩やかに傾斜しており、起伏が見られる。
［堆積土］６層に分層された。第５・６層はローム層で他の混入物が見られない。上場の形状が土層観察部分で拡がるため、壁が崩落したものと考えられる。
［出土遺物］なし。（小山）

第26号溝状土坑（ＳＶ-26）（図30）

［位置］南側調査区の壕の外側、Ｋ・Ｌ－15グリッドに位置している。

［重複］第23号溝跡（外壕）より古い。

［平面形・規模］平面形は長軸の端部で若干ふくらむ形状となる。重複により反対側の端部が削平されており、全体形は不明である。現存している軸長は開口部（210）×35～45㎝、底面235×15～30㎝で、深さは100㎝である。長軸方向は東へ115度傾いている。

［壁・底面］現存の長軸壁は袋状に掘り込まれ、短軸壁は垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。

［堆積土］５層に分層された。堆積土中にはロームが集中するような層は見られなかった。

［出土遺物］なし。（小山）

第27号溝状土坑（ＳＶ27）（図30）

［位置］調査区の南側、Ｈ－18グリッドに位置している。

［規模］軸長は、開口部238×28㎝、底面280×８～20㎝で、深さ102㎝である。幅の狭い小型の土坑で、長軸方向は34度西へ傾いている。

［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面は垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

［堆積土］５層に分層された。上部に混入物の少ない黒褐色土、中程から下部にかけてはロームブロックを含んでいる黒褐色土と褐色土が堆積している。

［出土遺物］なし。（小山）

第28号溝状土坑（ＳＶ28）（図30）

［位置］調査区中央付近の低地、Ｃ－37グリッドに位置している。

［規模］軸長は、開口部328×45㎝、底面356×15～20㎝で、深さ88㎝である。幅の狭い土坑で、長軸方向は78度東へ傾いている。

［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面は垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。

［堆積土］６層に分層された。第３層にはローム粒が多量に含まれているが、全体に混入物の少ない黒色土や黒褐色土が主体となっている。

［出土遺物］なし。（小山）

第29号溝状土坑（ＳＶ29）（図30）

［位置］調査区の南側、Ｒ－26グリッドに位置している。調査区域外にのびているためと重複により、全容は不明である。

［重複］内壕（SD22）と重複し、これよりも古い。

［規模］現存での軸長は、開口部114×29㎝、底面100×20㎝で、深さ102㎝である。幅の狭い土坑で、長軸方向は東西に近く、80度東へ傾いている。

［壁・底面］長軸端部は不明、短軸壁面は垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。

［堆積土］６層に分層された。底面直上に黄褐色土の堆積が見られるが、混入物の少ない黒褐色土が主体となっている。［出土遺物］なし。（畠山）

第30号溝状土坑（ＳＶ30）（図30）

［位置］調査区の南側、Ｋ－17グリッドに位置している。重複により上部と片端が削平されている。

［重複］外壕（SD23）と第16号住居跡と重複し、これらよりも古い。

［規模］現存での軸長は、開口部310×45㎝、底面350×23～40㎝である。深さは第16号住居跡床面から120㎝である。幅の狭い土坑で、長軸方向は45度西へ傾いている。

［壁・底面］片端部のみであるが、長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面は垂直に立ち上がっている。底面は平坦であるが、やや東へ傾斜している。

［堆積土］14層に分層された。上半部では混入物の少ない黒褐色土、下半部では黒褐色土と黄褐色土とが交互に堆積している。

［出土遺物］第Ⅱ群土器片４点（48ｇ）が出土した。図34-16は口縁部片で、結節が横位に回転施文されている。（小山）

第31号溝状土坑（ＳＶ31）（図30・34）

［位置］調査区の南側、Ｋ－18・19グリッドに位置している。

［規模］軸長は、開口部312×54㎝、底面356×35㎝で、深さ90㎝である。幅の狭い土坑で、長軸方向は東西に近く、85度東へ傾いている。

［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、やや広くなっている。短軸壁面は垂直に立ち上がっているが、崩落による凹凸が見られる。底面は平坦である。

［堆積土］５層に分層された。底面に明黄褐色土の堆積が２枚見られるが、大半は混入物の少ない黒褐色土である。

［出土遺物］第Ⅱ群土器片61点（903ｇ）が出土した。図34-17は胴部片で、単軸絡状体第１類が斜位に回転施文されている。図34-18は口唇端、口縁、隆帯上、胴部に単軸絡状体第１類を回転施文しているもので、胴部には縦位に回転施文している。（畠山）

第32号溝状土坑（ＳＶ32）（図30）

［位置］南側調査区の南端、Ｆ－３グリッドに位置している。

［規模］木根により完掘出来ず、全体規模は不明である。現存している軸長は開口部（195）×25㎝、底面220×15㎝で、深さは70㎝である。長軸方向は東へ60度傾いている。

［壁・底面］現存の長軸壁は袋状に掘り込まれ、短軸壁は垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。

［堆積土］６層に分層された。第２・４・６層にロームブロックが混入している。

［出土遺物］なし。（小山）

第33号溝状土坑（ＳＶ33）（図30・34）

［位置］南側調査区で壕の内側、Ｑ－16・17グリッドに位置している。

［重複］第６号竪穴住居跡、第19号土坑より古い。

［規模］軸長は開口部325×40㎝、底面335×15㎝、深さ80㎝である。長軸方向は東へ80度傾いている。

［壁・底面］長軸壁の一方は袋状に掘り込まれ、もう一方は開きながら立ち上がっている。短軸壁は

ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は片側の長軸方向へ向かい緩やかに傾斜しており、平坦である。
［堆積土］10層に分層された。第４・６・８・10層はローム主体層で、第４・６層はローム層で他の混入物が見られない。壁が崩落したものと考えられる。
［出土遺物］堆積土中から第Ⅱ群土器が0.3kg、剥片が１点出土した。図34-19・20は胴部片で、いずれもRLが斜位に回転施文されている。（小山）

第34号溝状土坑（ＳＶ34）（図31）
［位置］調査区の南側、Ｅ－20グリッドに位置している。
［規模］軸長は、開口部218×35～50㎝、底面242×６～20㎝で、深さ85㎝である。幅の狭い小型の土坑で、長軸方向は22度東へ傾いている。
［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面は垂直に立ち上る。底面には凹凸が若干見られる。
［堆積土］５層に分層された。底面直上に明褐色土の堆積が見られるが、大半はローム粒を少量含んだ黒色土と黒褐色土である。
［出土遺物］なし。（畠山）

第35号溝状土坑（ＳＶ35）（図31）
［位置］南側調査区の南端、Ｈ－６・７グリッドに位置している。
［規模］軸長は開口部290×105㎝、底面305×30㎝で、深さ100㎝で、長軸方向は東へ30度傾いている。
［壁・底面］長軸壁の一方は袋状に掘り込まれ、もう一方は開きながら立ち上がっている。短軸壁は壁面中位までは垂直に立ち上がり、そこから開きながら立ち上がっている。底面は片側の長軸方向へ向かい緩やかに傾斜しており、平坦である。
［堆積土］５層に分層された。第２層はローム主体層で、第４層はローム層で他の混入物が見られない。壁が崩落したものと考えられる。
［出土遺物］なし。（小山）

第36号溝状土坑（ＳＶ36）（図31）
［位置］南側調査区の南端、Ｆ・Ｇ－11グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は長軸の両端が拡がるタイプで、軸長は開口部210×20、60㎝、底面205×10、30㎝で、深さは100㎝である。長軸方向はほぼ真北を指している。
［壁・底面］壁は長軸、短軸共に垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。
［堆積土］７層に分層された。第３～６層はローム主体層で、第７層はローム層である。壁が崩落したものと考えられる。
［出土遺物］なし。（小山）

第37号溝状土坑（ＳＶ37）（図31）
［位置］南側調査区の南端、Ｇ・Ｈ－10グリッドに位置している。
［重複］第26号溝跡より古い。

［規模］軸長は開口部370×35～55㎝、底面360×25～50㎝で、深さは55㎝である。長軸方向は東へ約60度傾いている。
［壁・底面］長軸壁の一方は袋状に掘り込まれ、もう一方は開きながら立ち上がっている。短軸壁は垂直に立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。
［堆積土］５層に分層された。第３・５層はローム主体層である。壁の崩落土と考えられる。
［出土遺物］なし。（小山）

第38号溝状土坑（ＳＶ38）（図31）
［位置］南側調査区の南端、Ｇ・Ｈ－11グリッドに位置している。
［重複］第26号溝跡より古い。
［規模］軸長は開口部280×20㎝、底面275×15㎝で、深さは50㎝で、長軸方向は東へ約80度傾いている。
［壁・底面］長軸壁の一方は袋状に掘り込まれ、もう一方は開きながら立ち上がっている。短軸壁は垂直に立ち上がっている。底面は片側の長軸方向へ向かい緩やかに傾斜しており、平坦である。
［堆積土］３層に分層された。各層にローム粒、ロームブロックが含まれている。
［出土遺物］なし。（小山）

第39号溝状土坑（ＳＶ39）（図31・34）
［位置］調査区の南側、Ｆ・Ｇ－18グリッドに位置している。重複により上部が削平されている。
［重複］第45号住居跡を中心とする平安時代の各住居跡より古い。
［規模］現存での軸長は、開口部316×30～44㎝、底面342×16～30㎝で、深さ80㎝である。幅の狭い土坑で、長軸方向は33度西へ傾いている。
［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面は垂直に立ち上がっている。底面には凹凸が見られる。
［堆積土］６層に分層された。混入物の少ない黒褐色土が主体となっている。
［出土遺物］第Ⅱ群土器片14点（168g）が出土した。図34-21・22は口縁部片で、21は単軸絡状体第１類が横位に、22は結節が横位に回転施文されている。（小山）

第40号溝状土坑（ＳＶ40）（図31）
［位置］調査区の南側、Ｆ－18グリッドに位置している。
［重複］第51号住居跡と重複し、これよりも古い。また風倒木により、東側の大半が破壊されている。
［規模］現存での軸長は、開口部137×31～42㎝、底面178×25～75㎝で、深さ75㎝である。幅の狭い土坑で、長軸方向は78度西へ傾いている。
［壁・底面］長軸端部及び短軸壁面は袋状に掘り込まれている。底面は平坦である。
［堆積土］セクションは実測していないが、混入物の少ない黒褐色土が主体となっている。
［出土遺物］なし。（畠山）

第41号溝状土坑（ＳＶ41）（図31・34）

［位置］調査区の南側、Ｅ－14グリッドに位置している。

［規模］軸長は、開口部385×50～72㎝、底面442×30～43㎝、深さ105㎝である。やや幅の広い土坑で、長軸方向は71度東へ傾いている。

［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれているが、とくに東端が広くなっている。短軸壁面はやや開き気味に立ち上がっている。底面は平坦である。

［堆積土］９層に分層された。下部に黒褐色土と黄褐色土の互層、上部に混入物の少ない黒色土や黒褐色土の堆積が見られた。

［出土遺物］第Ⅱ群土器片３点（57g）が出土した。図34-23は胴部片でRLRが斜位回転施文される。（畠山）

第42号溝状土坑（ＳＶ42）（図32）

［位置］南側調査区の壕の外側に、Ｌ－９グリッドに位置している。

［重複］第15号住居跡より古い。

［規模］開口部330×30㎝、底面320×20㎝で、深さは70㎝である。長軸方向は東へ約55度傾いている。

［壁・底面］長軸、短軸壁共に垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。

［堆積土］７層に分層された。第７層はロームとの混合土層で、第２層はローム層である。崩落土と考えられる。

［出土遺物］なし。（小山）

第43号溝状土坑（ＳＶ43）（図32）

［位置］南側調査区の東側、Ｄ－24グリッドに位置している。

［重複］第39号溝跡より古い。

［規模］軸長は開口部325×20㎝で、底面330×15㎝で、深さは60㎝である。長軸方向は東へ85度傾いている。

［壁・底面］長軸両端壁は袋状に掘り込まれ、断面は垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。

［堆積土］10層に分層された。黒色土とローム層が交互に堆積し、崩落しながら堆積したと考えられる。

［出土遺物］なし。（小山）

第44号溝状土坑（ＳＶ44）（図32・34）

［位置］調査区の南側、Ｄ－16・17グリッドに位置している。

［規模］軸長は、開口部381×33～63㎝、底面472×16～40㎝で、深さ114㎝である。幅の狭い土坑で、長軸方向は23度西へ傾いている。

［壁・底面］長軸両端は袋状に掘り込まれ、短軸壁面は垂直に立ち上がっている。南側では、壁上部が崩落している。底面には若干の凹凸が認められ、中央部が窪むように掘り込まれている。

［堆積土］７層に分層された。黒褐色土と明黄褐色土が交互に堆積している。

［出土遺物］第Ⅱ群土器片１点（143ｇ）が出土した。図34-24は胴部片で、単軸絡状体第１類が縦位に回転施文されている。（畠山）

第45号溝状土坑（ＳＶ45）（図32・34）

［位置］調査区の南側、Ｄ・Ｅ－16グリッドに位置している。

［重複］第３号溝跡と重複し、これよりも古い。

［規模］軸長は、開口部372×38～61㎝、底面357×20～39㎝で、深さ108㎝である。幅の狭い土坑で、長軸方向は48度東へ傾いている。

［壁・底面］長軸端部と短軸壁面は、垂直に近く掘り込まれている。短軸壁面には崩落のために袋状となっている部分もある。底面は若干の凹凸が見られるものの、ほぼ平坦である。

［堆積土］８層に分層された。上半部は黒褐色土が、下半部は黄褐色土が主体となっている。

［出土遺物］第Ⅱ群土器片２点（47g）が出土した。図34-25は結節が横位に回転施文されている。（小山）

第46号溝状土坑（ＳＶ46）（図32）

［位置］調査区の南側、Ｑ－28グリッドに位置している。西側は調査区域外のため調査できなかった。

［重複］外壕（SD23）と第28号溝跡と重複し、これよりも古い。

［規模］現存での軸長は、開口部222×33㎝、底面250×18㎝で、深さ115㎝である。幅の狭い土坑である。長軸方向は東西にあり、90度東に傾いている。

［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面は立ち上がっている。底面は平坦である。

［堆積土］５層に分層された。混入物の少ない黒褐色土や暗褐色土が主体となっている。

［出土遺物］なし。（畠山）

第47号溝状土坑（ＳＶ47）（図32）

［位置］南側調査区の東側、Ｂ－17・18グリッドに位置している。

［重複］第40号溝跡より古い。

［規模］重複により全体規模は不明である。現存している軸長は開口部290×90㎝、底面265×15㎝で、深さは130㎝である。長軸方向は真東へ140度傾いている。

［壁・底面］長軸両端壁は袋状に掘り込まれ、短軸壁は壁の中位まで垂直に立ち上がり、中位から大きく開きながら立ち上がっている。底面は平坦である。

［堆積土］７層に分層された。第５層にロームブロックが多量に混入している。

［出土遺物］なし。（小山）

第48号溝状土坑（ＳＶ48）（図33）

［位置］調査区の南側、Ｈ・Ｉ－25グリッドに位置している。

［重複］第３号溝跡と重複し、これよりも古い。

［規模］軸長は、開口部323×40～52㎝、底面336×12～20㎝で、深さ118㎝である。幅の狭い土坑で、長軸方向は43度東へ傾いている。

［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面は垂直に立ち上がっている。底面には若干の凹凸が見られ、東側へ傾斜している。

［堆積土］土層図は作成していないが、混入物の少ない黒褐色土が主体となっていた。

［出土遺物］第Ⅱ群土器片10点（174ｇ）が出土した。（小山）

第49号溝状土坑（ＳＶ49）（図33・34）

［位置］調査区の南側、Ｃ－19グリッドに位置している。

［規模］軸長は、開口部358×40～62㎝、底面445×16～40㎝で、深さ105㎝である。幅の狭い土坑で、長軸方向は18度西へ傾いている。

［壁・底面］長軸端部は袋状に掘り込まれ、短軸壁面は垂直に掘り込まれている。壁面には崩落の痕跡が認められる。底面はほぼ平坦であるが、南側はいくぶん低くなっている。

［堆積土］土層図は作成していないが、黒褐色土と明黄褐色土が交互に堆積している。

［出土遺物］第Ⅱ群土器片２点（55ｇ）が出土した。図34-26は結節が横位に回転施文されている。

（畠山）

第50号溝状土坑（ＳＶ50）（図33）

［位置］南側調査区の東側、Ｆ・Ｇ－12・13グリッドに位置している。

［重複］第65・67号住居跡より古い。

［規模］軸長は開口部340×25～40㎝、底面340×20㎝で、深さは60㎝である。長軸方向は東へ10度傾いている。

［壁・底面］長軸壁の一方は袋状に掘り込まれ、もう一方は開きながら立ち上がっている。短軸壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

［堆積土］土層図は作成していないが、所見では黒色土を主体とした堆積土であった。

［出土遺物］なし。（小山）

第51号溝状土坑（ＳＶ51）（図33）

［位置］南側調査区でＪＲ防風林地区と呼称したＯＹ－17・18グリッドに位置している。

［重複］第125号土坑より古い。

［規模］軸長は開口部320×45㎝、底面300×30㎝、深さ35㎝である。長軸方向は東へ25度傾いている。

［壁・底面］長軸、短軸壁共に、垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。

［堆積土］土層図は作成していないが、所見では黒色土を主体とした堆積土であった。

［出土遺物］なし。（小山）

第52号溝状土坑（ＳＶ52）（図33）

［位置］南側調査区の東端、Ａ－16グリッドに位置している。

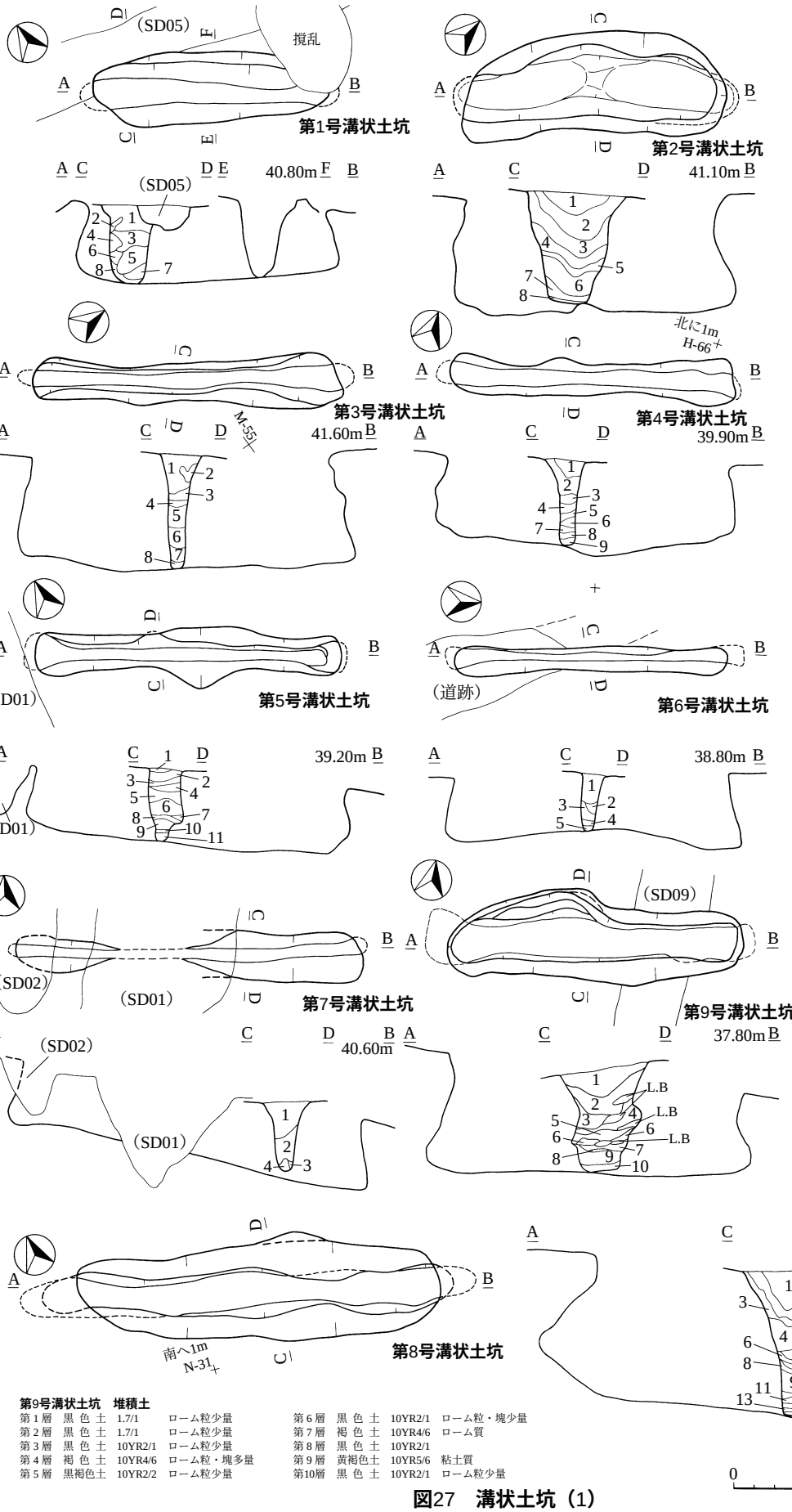
［重複］第107号土坑、第47号溝跡より古い。

［規模］重複により全体規模は不明である。現存する軸長は開口部（70）×40㎝、底面（55）×15㎝で、深さは60㎝である。長軸方向は東へ110度傾いている。

［壁・底面］長軸は袋状に掘り込まれ、断面壁は垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。

［堆積土］土層図は作成していないが、調査時の所見では黒色土を主体とした堆積土であった。

［出土遺物］なし。（小山）



第1号溝状土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量
第2層	明黄褐色土	10YR6/8	黒色土
第3層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量
第4層	黒 色 土	10YR2/1	
第5層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒多量
第6層	明黄褐色土	10YR6/8	黒色土
第7層	明黄褐色土	10YR6/8	黒色土
第8層	明黄褐色土	10YR6/8	ロームとの混合土

第2号溝状土坑　堆積土

第1層	褐 色 土	10YR4/4	ローム粒多量
第2層	黒 色 土	1.7/1	
第3層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒多量
第4層	黄褐色土	10YR5/6	ローム粒多量
第5層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒少量
第6層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム質
第7層	黄褐色土	10YR5/6	
第8層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒多量

第3号溝状土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒多量
第2層	褐 色 土	10YR4/4	ローム質
第3層	褐 色 土	10YR4/4	ローム質
第4層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒多量
第5層	褐 色 土	10YR4/4	ローム粒多量
第6層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量
第7層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒多量
第8層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒多量

第4号溝状土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒少量
第2層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・塊多量
第3層	黒褐色土	10YR2/2	
第4層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム質
第5層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量
第6層	黒褐色土	10YR2/3	
第7層	明黄褐色土	10YR7/6	ローム質
第8層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム質
第9層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量

第5号溝状土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	1.7/1	
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量
第3層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量
第4層	黒 色 土	10YR2/1	
第5層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量
第6層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量
第7層	褐 色 土	10YR4/6	ローム粒少量
第8層	黒 色 土	1.7/1	
第9層	褐 色 土	10YR4/4	粘土質
第10層	黒 色 土	1.7/1	
第11層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量

第6号溝状土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量
第2層	褐 色 土	10YR4/6	ローム質
第3層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒少量
第4層	黒 色 土	1.7/1	
第5層	褐 色 土	7.5YR4/4	粘土質

第7号溝状土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒多量
第2層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒多量
第3層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量
第4層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量

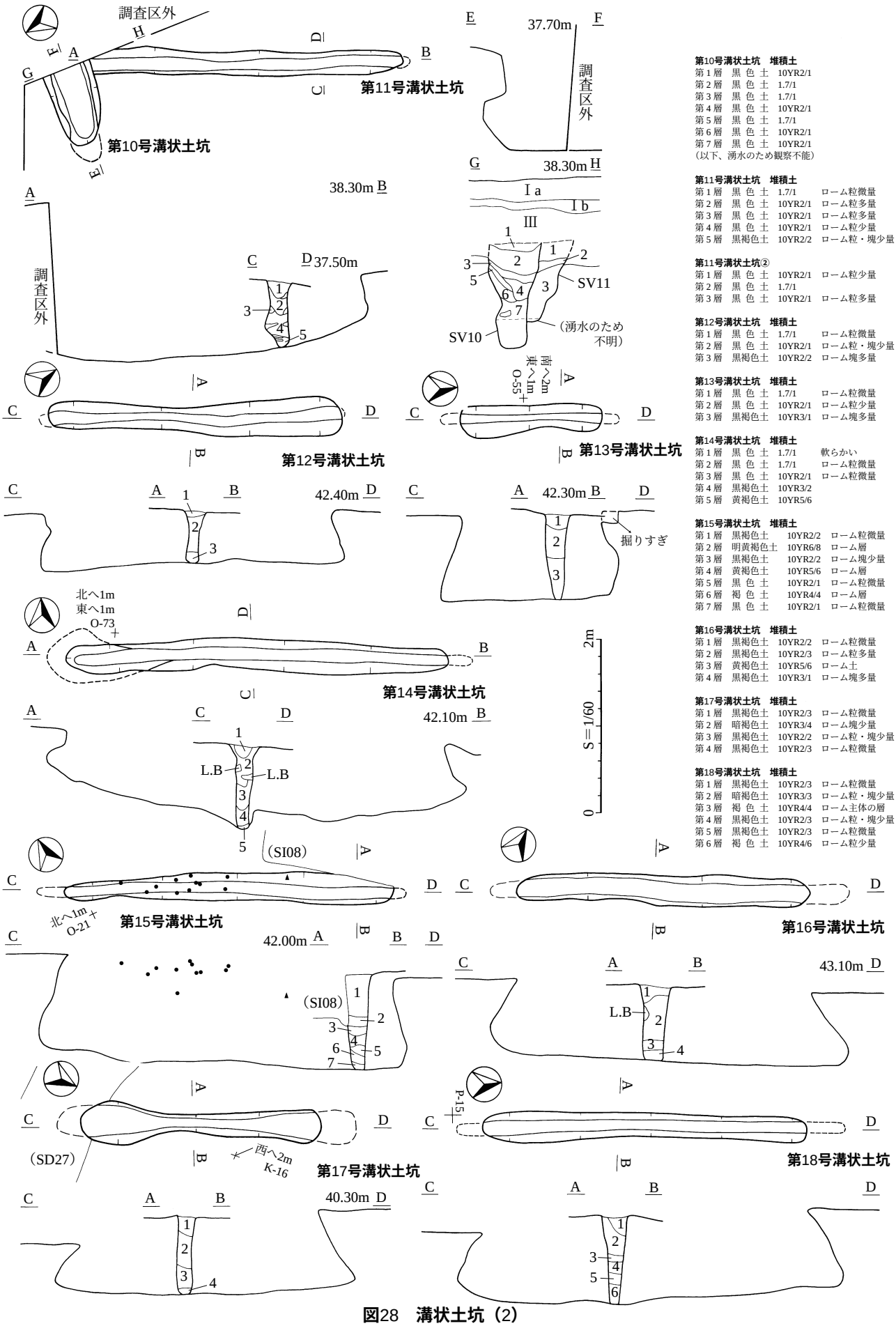
第8号溝状土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	1.7/1	
第2層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒少量
第3層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量
第4層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	褐色土混入
第5層	明黄褐色土	10YR6/6	褐色土混入
第6層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒混入
第7層	明黄褐色土	10YR6/6	やや砂質
第8層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒多量
第9層	明黄褐色土	10YR6/6	やや砂質
第10層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒多量
第11層	明黄褐色土	10YR6/6	やや砂質
第12層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒多量
第13層	黒 色 土	1.7/1	
第14層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒多量

第9号溝状土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒少量
第2層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒少量
第3層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量
第4層	褐 色 土	10YR4/6	ローム粒・塊多量
第5層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量
第6層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒・塊少量
第7層	褐 色 土	10YR4/6	ローム質
第8層	黒 色 土	10YR2/1	
第9層	黄褐色土	10YR5/6	粘土質
第10層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量

図27　溝状土坑（1）



第10号溝状土坑　堆積土
第１層　黒　色　土　10YR2/1
第２層　黒　色　土　1.7/1
第３層　黒　色　土　1.7/1
第４層　黒　色　土　10YR2/1
第５層　黒　色　土　1.7/1
第６層　黒　色　土　10YR2/1
第７層　黒　色　土　10YR2/1
（以下、湧水のため観察不能）

第11号溝状土坑　堆積土
第１層　黒　色　土　1.7/1　　ローム粒微量
第２層　黒　色　土　10YR2/1　ローム粒多量
第３層　黒　色　土　10YR2/1　ローム粒多量
第４層　黒　色　土　10YR2/1　ローム粒少量
第５層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒・塊少量

第11号溝状土坑②
第１層　黒　色　土　10YR2/1　ローム粒少量
第２層　黒　色　土　1.7/1
第３層　黒　色　土　10YR2/1　ローム粒多量

第12号溝状土坑　堆積土
第１層　黒　色　土　1.7/1　　ローム粒微量
第２層　黒　色　土　10YR2/1　ローム粒・塊少量
第３層　黒褐色土　10YR2/2　ローム塊多量

第13号溝状土坑　堆積土
第１層　黒　色　土　1.7/1　　ローム粒微量
第２層　黒　色　土　10YR2/1　ローム粒少量
第３層　黒褐色土　10YR3/1　ローム塊多量

第14号溝状土坑　堆積土
第１層　黒　色　土　1.7/1　　軟らかい
第２層　黒　色　土　1.7/1　　ローム粒微量
第３層　黒　色　土　10YR2/1　ローム粒微量
第４層　黒褐色土　10YR3/2
第５層　黄褐色土　10YR5/6

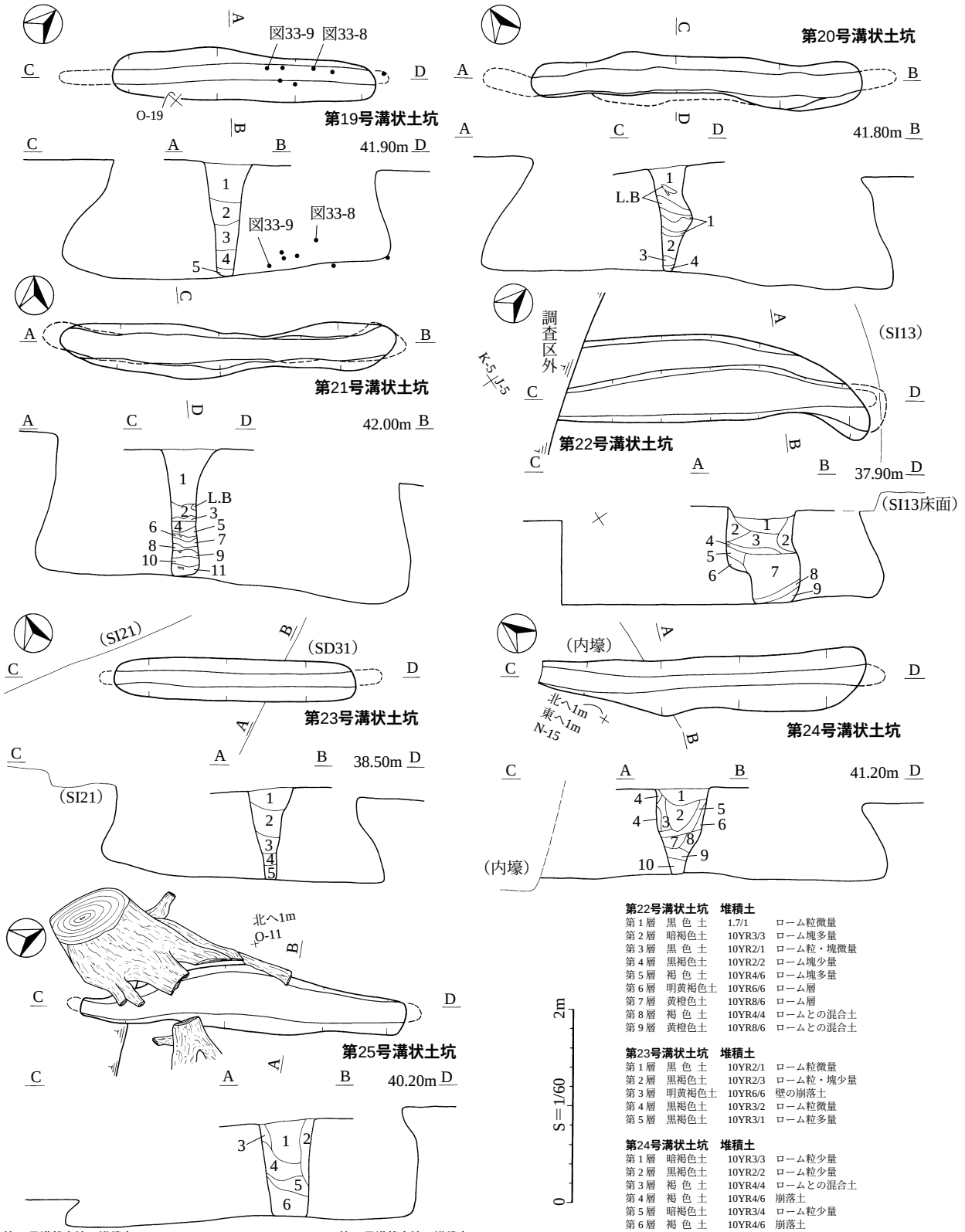
第15号溝状土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　　10YR2/2　ローム粒微量
第２層　明黄褐色土　10YR6/8　ローム層
第３層　黒褐色土　　10YR2/2　ローム塊少量
第４層　黄褐色土　　10YR5/6　ローム層
第５層　黒　色　土　10YR2/1　ローム粒微量
第６層　褐　色　土　10YR4/4　ローム層
第７層　黒　色　土　10YR2/1　ローム粒微量

第16号溝状土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒微量
第２層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒多量
第３層　黄褐色土　10YR5/6　ローム土
第４層　黒褐色土　10YR3/1　ローム塊多量

第17号溝状土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量
第２層　暗褐色土　10YR3/4　ローム塊少量
第３層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒・塊少量
第４層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量

第18号溝状土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量
第２層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒・塊少量
第３層　褐　色　土　10YR4/4　ローム主体の層
第４層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒・塊少量
第５層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量
第６層　褐　色　土　10YR4/6　ローム粒少量

図28　溝状土坑（2）



第19号溝状土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒少量
第2層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒・塊少量
第3層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム主体の層
第4層	黄褐色土	10YR5/6	ローム塊多量
第5層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒微量

第20号溝状土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量
第2層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム質
第3層	褐 色 土	7.5YR4/4	粘土質
第4層	黒 色 土	10YR2/1	軟らかい

第21号溝状土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量
第2層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒微量
第3層	黄褐色土	10YR5/6	ローム質
第4層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒微量
第5層	明黄褐色土	10YR6/6	
第6層	黒 色 土	10YR2/1	
第7層	明褐色土	7.5YR5/6	褐色土多量
第8層	黒 色 土	10YR2/1	
第9層	明褐色土	7.5YR5/6	硬い
第10層	黒 色 土	10YR2/1	
第11層	明褐色土	7.5YR5/6	硬い

第22号溝状土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒微量
第2層	暗褐色土	10YR3/3	ローム塊多量
第3層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒・塊微量
第4層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊少量
第5層	褐 色 土	10YR4/6	ローム塊多量
第6層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム層
第7層	黄橙色土	10YR8/6	ローム層
第8層	褐 色 土	10YR4/4	ロームとの混合土
第9層	黄橙色土	10YR8/6	ロームとの混合土

第23号溝状土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第2層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・塊少量
第3層	明黄褐色土	10YR6/6	壁の崩落土
第4層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒微量
第5層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒多量

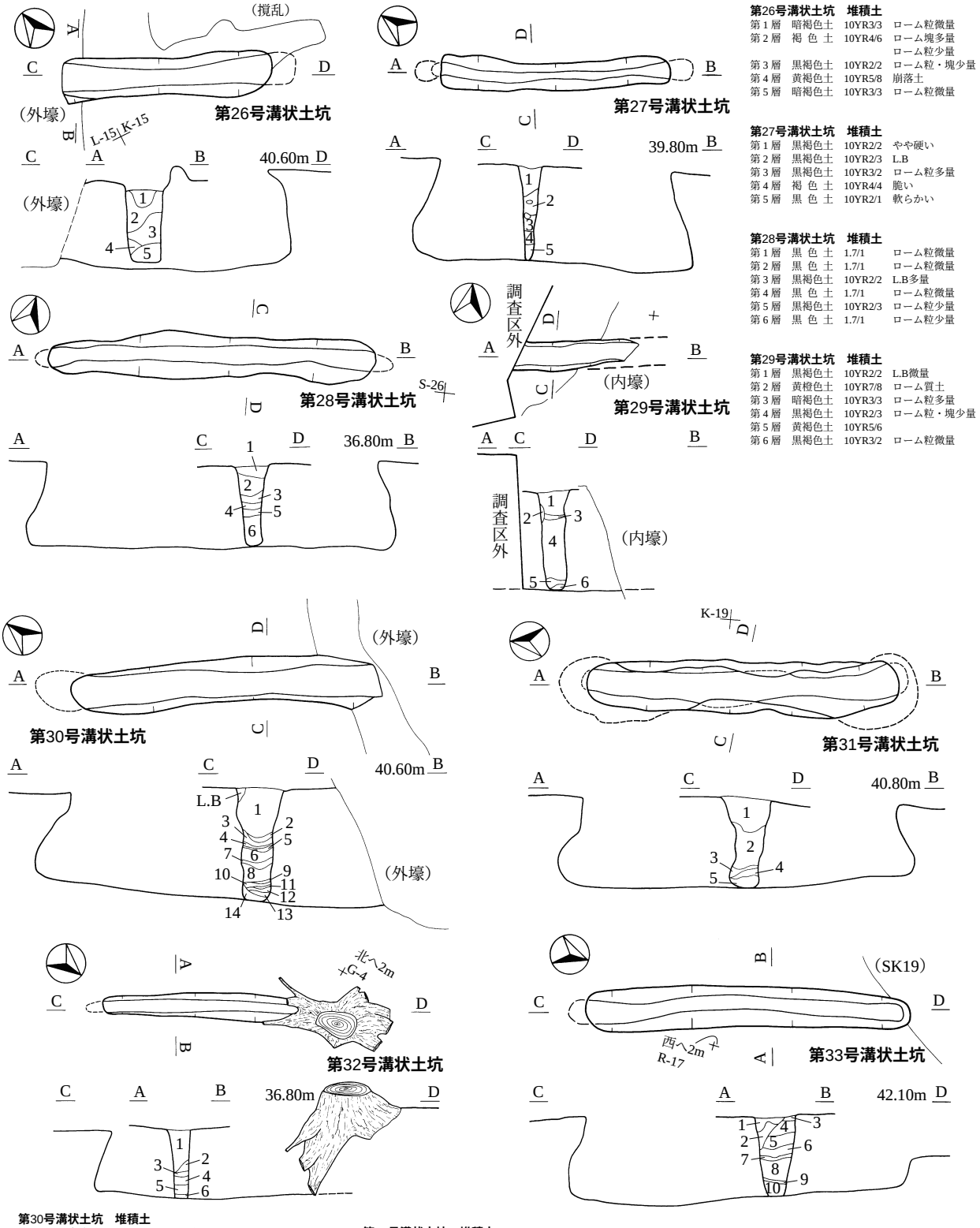
第24号溝状土坑　堆積土

第1層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量
第3層	褐 色 土	10YR4/4	ロームとの混合土
第4層	褐 色 土	10YR4/6	崩落土
第5層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量
第6層	褐 色 土	10YR4/6	崩落土
第7層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量
第8層	褐 色 土	10YR4/4	崩落土
第9層	暗褐色土	10YR3/3	下部にローム塊集中
第10層	黄褐色土	10YR5/6	ロームとの混合土

第25号溝状土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒微量
第2層	褐 色 土	10YR4/6	ローム粒多量
第3層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量
第4層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量
第5層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム層
第6層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム層

図29　溝状土坑（3）



第26号溝状土坑　堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒微量
第２層	褐 色 土	10YR4/6	ローム塊多量 ローム粒少量
第３層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒・塊少量
第４層	黄褐色土	10YR5/8	崩落土
第５層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒微量

第27号溝状土坑　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/2	やや硬い
第２層	黒褐色土	10YR2/3	L.B
第３層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒多量
第４層	褐 色 土	10YR4/4	脆い
第５層	黒 色 土	10YR2/1	軟らかい

第28号溝状土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒微量
第２層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒微量
第３層	黒褐色土	10YR2/2	L.B多量
第４層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒微量
第５層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量
第６層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒少量

第29号溝状土坑　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/2	L.B微量
第２層	黄橙色土	10YR7/8	ローム質土
第３層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒多量
第４層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・塊少量
第５層	黄褐色土	10YR5/6	
第６層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒微量

第30号溝状土坑　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量
第２層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒微量
第３層	黄褐色土	10YR5/6	ローム主体
第４層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量
第５層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒微量
第６層	黄褐色土	10YR5/6	ローム主体
第７層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量
第８層	褐 色 土	10YR4/6	ローム主体
第９層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量
第10層	褐 色 土	10YR4/6	ローム主体
第11層	黒褐色土	10YR2/2	軟らかい
第12層	褐 色 土	10YR4/6	ローム主体
第13層	暗褐色土	10YR3/3	
第14層	にぶい黄褐色土	10YR5/3	

第31号溝状土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒少量
第２層	黒 色 土	10YR2/1	軟らかい
第３層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム主体
第４層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第５層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム主体

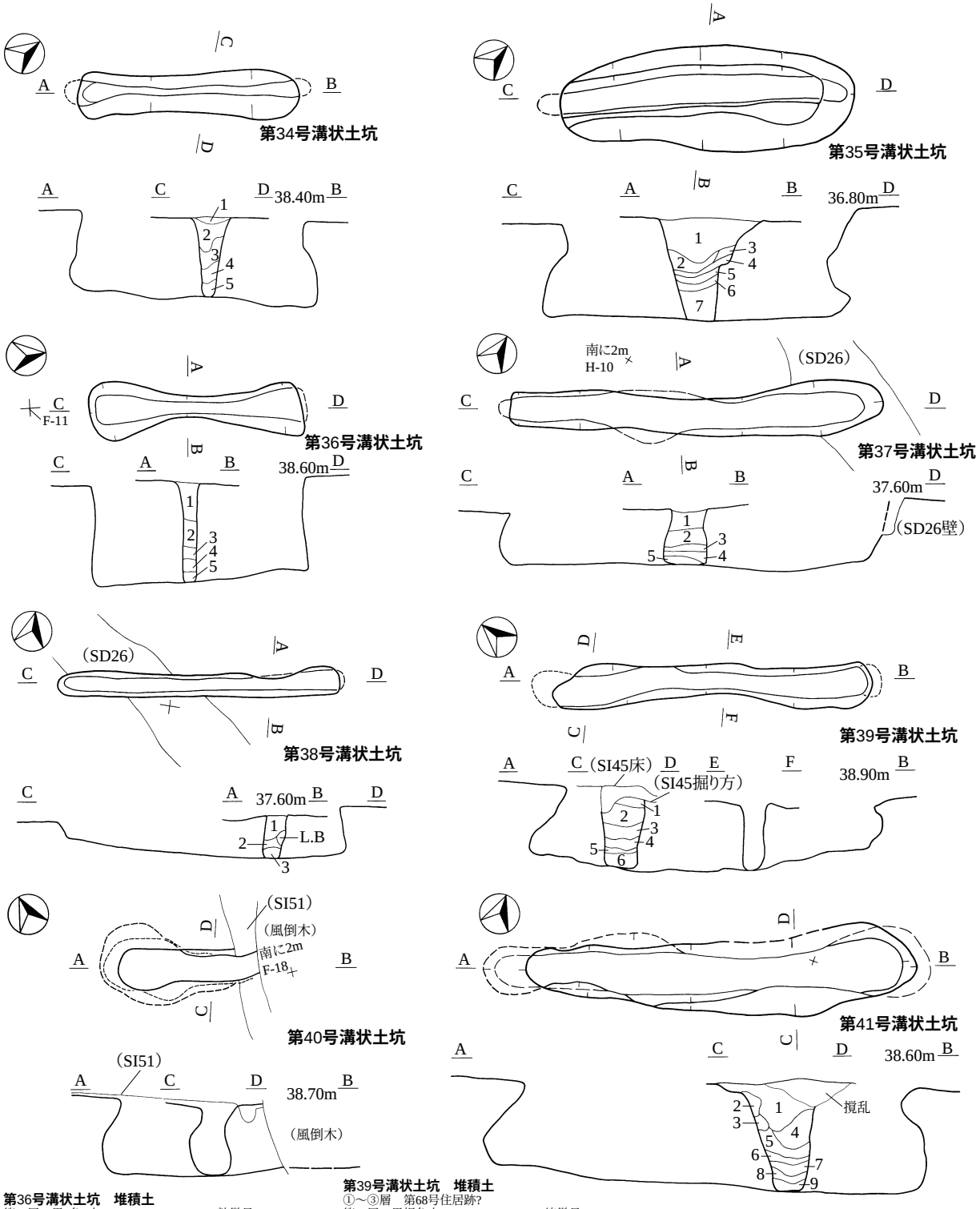
第32号溝状土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒微量
第２層	褐 色 土	10YR4/6	ローム塊多量
第３層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒微量
第４層	明黄褐色土	10YR6/6	ロームが帯状に堆積
第５層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第６層	暗褐色土	10YR3/3	ローム塊少量

第33号溝状土坑　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量
第２層	褐 色 土	10YR4/6	ローム粒多量
第３層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊少量
第４層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量
第５層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量
第６層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム層
第７層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第８層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム層
第９層	黒 色 土	1.7/1	
第10層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム層に黒色土混じる

図30　溝状土坑（4）



第36号溝状土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒微量
第2層	褐 色 土	10YR4/6	ローム塊多量
第3層	暗褐色土	10YR3/3	ローム塊、粒少量
第4層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム層
第5層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量

第37号溝状土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒微量
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊少量
第3層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム層
第4層	黒褐色土	10YR3/2	ローム塊、粒多量
第5層	黄褐色土	10YR5/6	ローム層

第38号溝状土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒微量
第2層	黒褐色土	10YR2/3	壁際にローム塊大
第3層	黒 色 土	1.7/1	壁際にローム塊大

第39号溝状土坑　堆積土

①～③層　第68号住居跡?

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊微量
第2層	黒 色 土	10YR2/1	
第3層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量
第4層	黒褐色土	10YR2/2	
第5層	黒褐色土	10YR2/3	下部にローム粒混入
第6層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量

第41号溝状土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	
第2層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	
第3層	黒褐色土	10YR2/2	
第4層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒が水平に
第5層	黄褐色土	10YR5/6	ローム粒・塊主体
第6層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量
第7層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム主体
第8層	黄褐色土	10YR5/6	ローム主体
第9層	黒褐色土	10YR2/2	

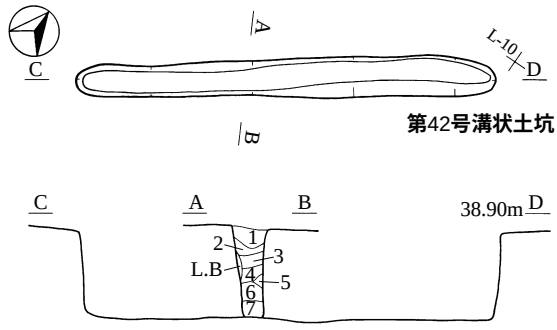
第34号溝状土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/3	
第2層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量
第3層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量
第4層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム主体
第5層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒少量

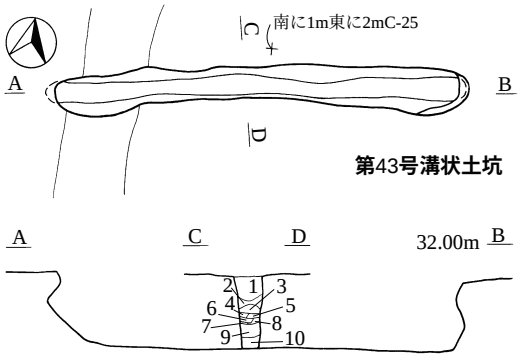
第35号溝状土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒微量
第2層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・塊微量
第3層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム粒・塊多量
第4層	明黄褐色土	10YR6/8	ロームとの混合土
第5層	明黄褐色土	10YR6/6	ロームとの混合土
第6層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒・塊多量
第7層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム層

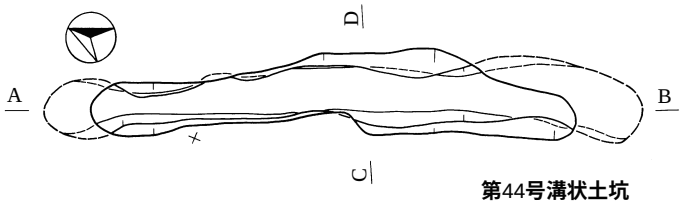
図31　溝状土坑（5）



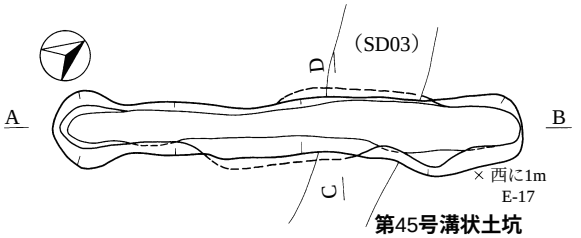
第42号溝状土坑



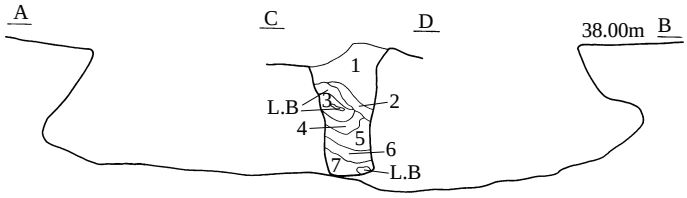
第43号溝状土坑

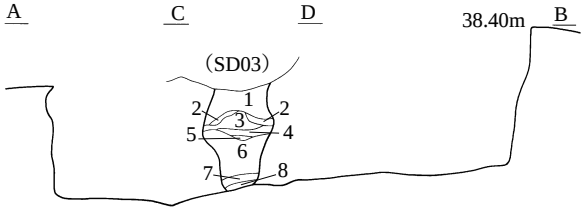


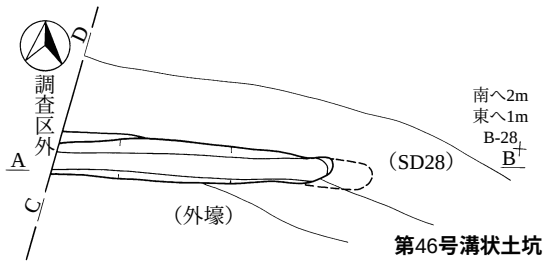
第44号溝状土坑



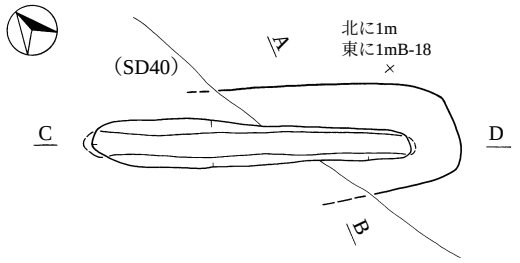
第45号溝状土坑



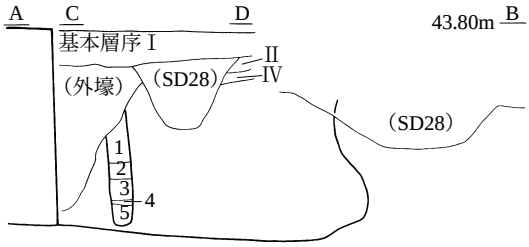


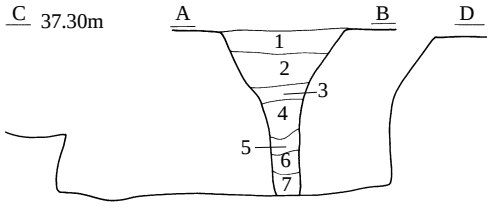


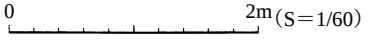
第46号溝状土坑



第47号溝状土坑







第42号溝状土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒微量
第２層	褐 色 土	10YR4/6	ローム層
第３層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第４層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量
第５層	褐 色 土	10YR4/4	ローム層
第６層	暗褐色土	10YR3/4	ローム塊少量
第７層	明黄褐色土	10YR6/6	ロームとの混合土

第43号溝状土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	1.7/1	
第２層	黒 色 土	1.7/1	ローム微量
第３層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒微量
第４層	黒 色 土	1.7/1	ローム塊微量
第５層	黒 色 土	1.7/1	ローム塊少量
第６層	黒 色 土	1.7/1	
第７層	黒 色 土	1.7/1	ローム塊微量
第８層	明黄褐色土	10YR7/6	ローム塊多量
第９層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒微量
第10層	黒褐色土	10YR2/2	

第44号溝状土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	1.7/1	
第２層	黒褐色土	10YR3/2	
第３層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム主体
第４層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量
第５層	黄橙色土	10YR7/8	ローム主体
第６層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量
第７層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム主体

第45号溝状土坑　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊微量
第２層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム主体
第３層	黒褐色土	10YR2/3	
第４層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム主体
第５層	黒褐色土	10YR3/2	ローム塊少量
第６層	黄褐色土	10YR5/6	ローム主体
第７層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊微量
第８層	黄褐色土	10YR5/6	ローム主体

第46号溝状土坑　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量
第２層	暗褐色土	10YR3/3	ローム塊少量
第３層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量
第４層	黒褐色土	10YR2/2	
第５層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量

第47号溝状土坑　堆積土

第１層	褐 色 土	10YR4/6	ロームとの混合土
第２層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒微量
第３層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第４層	黒 色 土	1.7/1	ローム粒微量
第５層	黒褐色土	10YR2/3	ローム塊多量
第６層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第７層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量

図32　溝状土坑（6）

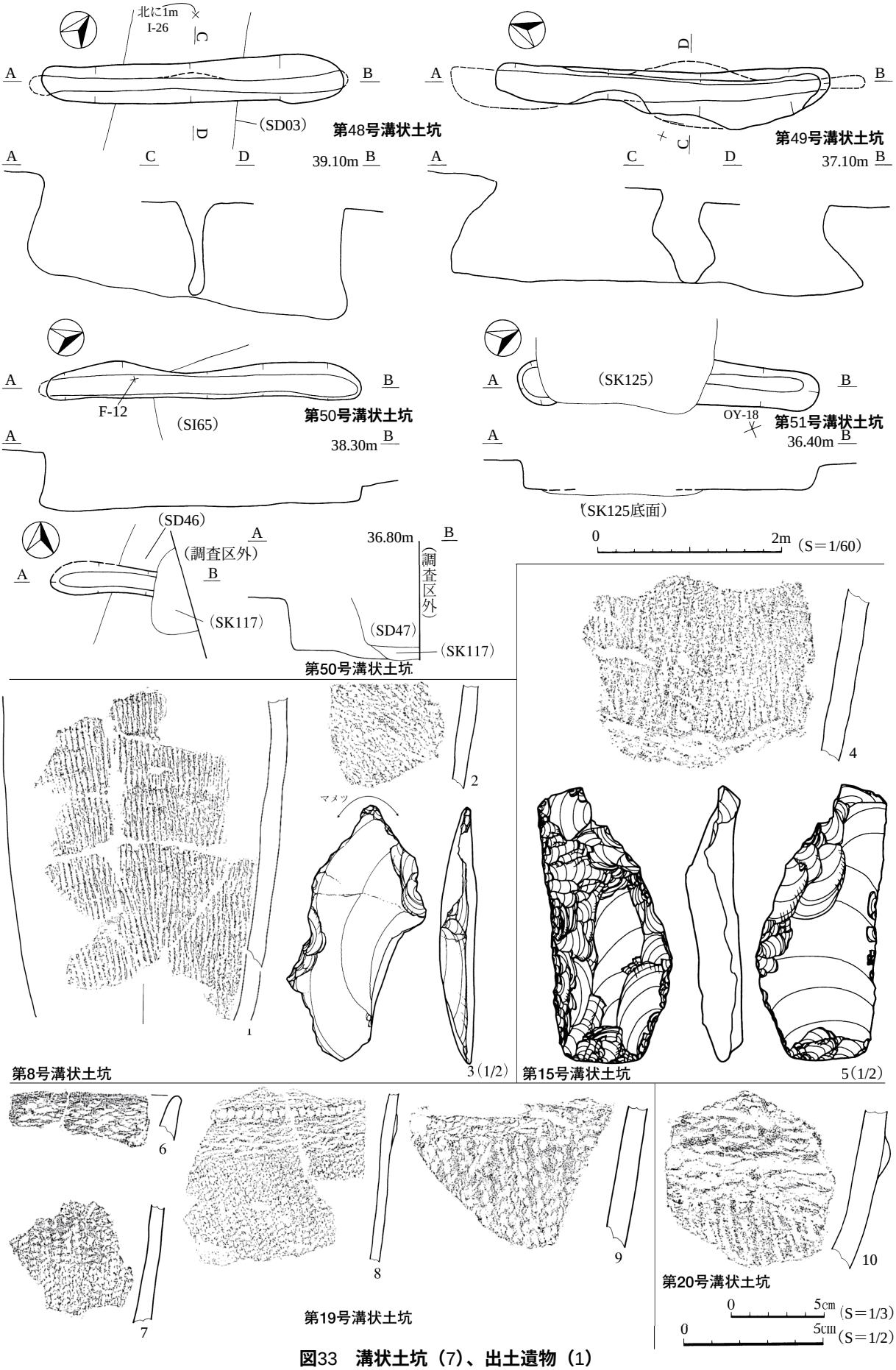


図33　溝状土坑（7）、出土遺物（1）

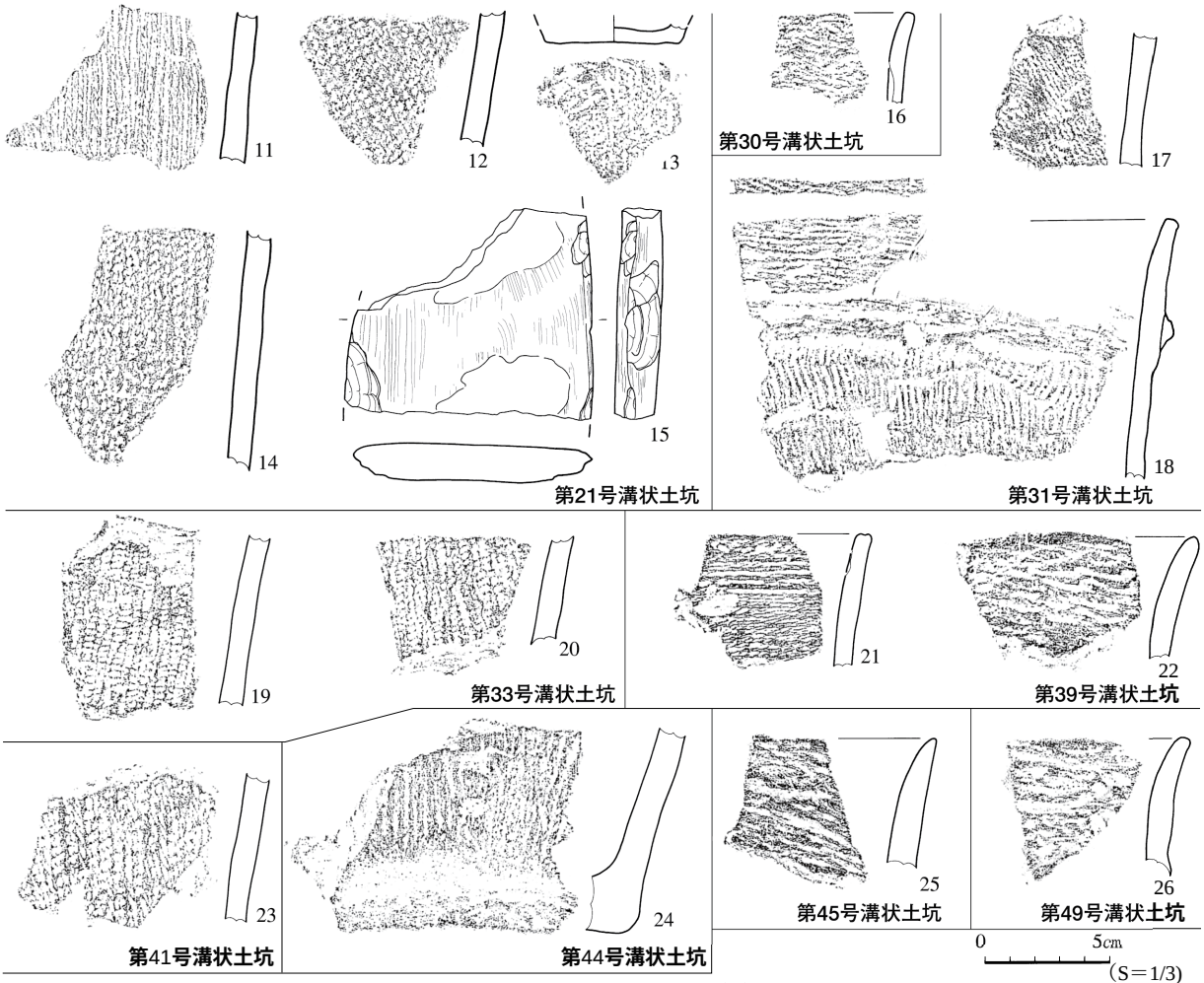


図34　溝状土坑出土遺物(2)

第４節　土器埋設遺構

１基の検出である。

［位置・確認］調査区南端、Ｓ－17グリッドに位置している。口縁～胴部の大半は欠損し、底部付近で確認した。

土器の遺存状態は悪く、ひびが細かく入る非常に脆い状況で検出した。

［土器と掘り方］底部の状況から、正立に埋設したものと考えられる。底部が入り子状になり検出した。しかし、底部同士が接合しており、同一個体といえる。攪乱が激しいために移動した可能性が考えられる。第Ⅱ群土器である。胴部文様はRLが斜位に回転施文され、縦走する縄文が描かれる。基本層序第Ⅴ層を掘り込む掘り方を検出した。規模は径28㎝、深さ10㎝である。

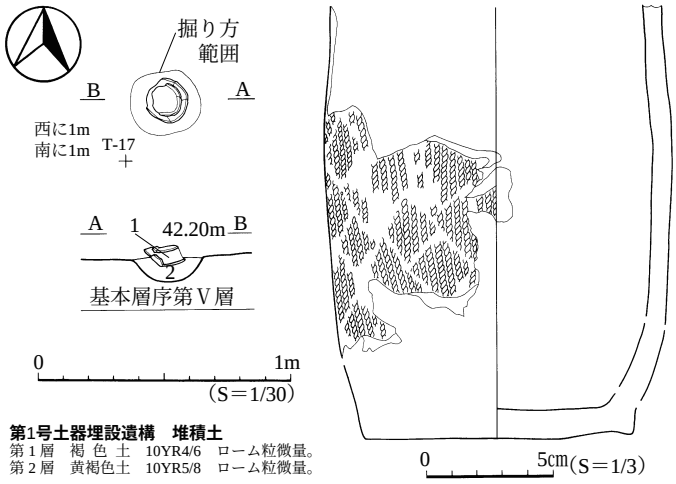


図35　第1号土器埋設遺構

［小結］本遺構は土器の特徴から、縄文時代前期中葉に構築されたものと考えられる。（小山）

第４章　縄文時代の遺構外出土遺物

第１節　土器

遺構外からは総重量145kgの土器が出土した。平安時代の遺構から出土した縄文時代の遺物は遺構外出土のものとした。各地点より出土した重量を図36に示した。遺物は調査区全体に散在しているが、特に南側調査区のほぼ中央Ｉ～Ｏ－23～26グリッド付近と、Ｈ～Ｌ－31～35グリッド付近に集中する。この地点は、東から北東方向へ下る緩斜面地となっている。また、壕跡とした第22号、23号溝跡をはじめ、平安時代の遺構からも相当数の縄文土器が出土しており、遺物はかなり攪乱されたものと考えられる。その影響か、復元できたものは少なく、殆どが破片資料である。

縄文時代早期後葉～弥生時代後期の遺物が出土した。中でも、主体を占めるのは縄文時代前期中葉の円筒下層式に比定される土器群である。弥生時代の遺物は、同時代の遺構等が検出されず、出土量もわずかであるため、本節で記述するものとする。出土土器を以下のように分類した。

Ⅰ群　縄文時代早期後葉の土器
Ⅱ群　縄文時代前期の円筒下層式土器
Ⅲ群　縄文時代中期初頭の円筒上層式土器
Ⅳ群　縄文時代中期後葉～後期前半の粗製土器
Ⅴ群　縄文時代後期初頭の土器
Ⅵ群　縄文時代後期前葉の土器
Ⅶ群　縄文時代後期中葉の土器
Ⅷ群　縄文時代後期後葉の土器
Ⅸ群　縄文時代晩期後葉～弥生時代前期初頭
Ⅹ群　弥生時代後期の土器

Ⅰ群　縄文時代早期後葉の土器（図38-１）

１点の出土である。胎土に繊維を含み、色調は明黄褐色になる。外面はミガキ調整が施され、内面にはRLが回転施文されている。内面の縄文施文と胎土から早稲田５類に相当すると考えられる。

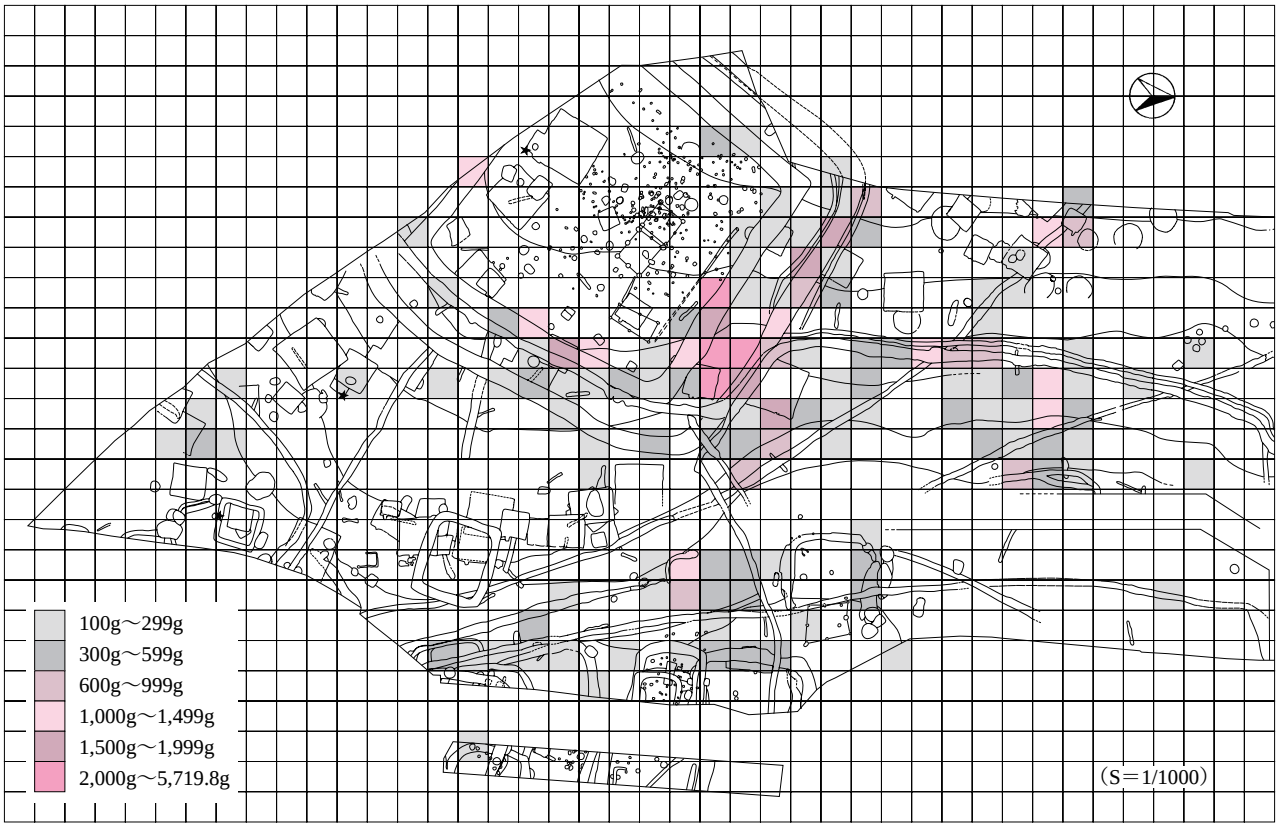


図36　縄文時代の遺物分布

Ⅱ群　縄文時代前期の円筒下層式土器（図37-２～図38-30）

本遺跡で主体を占める土器群である。口縁部文様により以下のように分けられる。

・縄文が回転施文されているもの（図38-２）

口縁はRL、隆帯上から胴部にはRLRが回転施文されている。隆帯の断面形状は山形状になる。

・結節が回転施文されているもの（図38-3～15）

３～12は隆帯を持つ。隆帯の断面形状は、山形状（３～９）と、台形状（10～12）が見られ、台形状は、山形状と比して高さは見られない。５・７・８は、隆帯下にも結節が回転施文され、７の胴部は、RLが横位～斜位に回転施文されている。９は、口縁部に横走沈線が施文されている。10は隆帯上に竹管工具による刺突が施され、胴部にはRLが斜位に回転施文されている。11は隆帯の上下に結節が回転施文され、胴部にはRLRが斜位に回転施文されている。12は隆帯の上下に横走沈線、隆帯上は竹管工具による刺突が施され、胴部に単軸絡状体第１類が縦位に回転施文されている。

13は隆帯を持たない。口唇形状は平坦で、胴部はRLが斜位に回転施文されている。15は結節を横回転させた後、縦位にRLの側面圧痕が施されている。

・単軸絡状体により回転施文されているもの（図37-16～図38-27）

16～20は口縁部に単軸絡状体第１類が横位に回転施文されている。16は口唇端にRLの側面圧痕が施されている。17は台形状の低い隆帯を持ち、隆帯の上下にはRLRの側面圧痕が施されている。胴部文様は単軸絡状体第１類の縦位回転により施文されている。19はRLの側面圧痕により口縁部と胴部の文様帯が区切られ、胴部は単軸絡状体第１類の縦位回転により施文されている。21は単軸絡状体第１類が斜位に回転施文されている。22・23は口縁部と胴部の文様帯を区切るものはなく、横位回転から縦位回転に変化する。22は口唇が弱く内傾しており、他とは形態が異なっている。

24は単軸絡状体第５類、25・26は単軸絡状体第6A類が横位に回転施文されている。26の器形は直線的に立ち上がり、口縁形態は２個１対の波状口縁になる。台形状の低い隆帯を持ち、隆帯上には単軸絡状体第１類が回転施文されている。胴部は単軸絡状体第１類が縦位回転施文されている。

・側面圧痕されているもの（図38-27・28）

27は口唇際に半裁竹管工具による刺突が１列、その下位にはLRの側面圧痕が施され、側面圧痕後に横走沈線が施されている。28は口唇端、口縁にRLの側面圧痕が施されている。

・その他（図38-29）

胴～底部片で、単軸絡状体第１類の縦位回転により施文されている。底部は弱い上げ底状になる。

本群の特徴をまとめると

・胎土に繊維を多量に含み、繊維の剥落痕が顕著に確認できるものが多い。断面色調は黒色になり、内面にミガキ調整を施すものが多い。

・口縁部文様帯は結節回転文が施文されているものが多く、その他に単軸絡状体、縄文の側面圧痕を施しているものがみられる。

・胴部文様は縄文原体を斜位に回転させ縦走する縄文を描くものが多い。

・遺構外では図示しなかったが、本類の底面には縄文を回転施文するものが見られる。

などが上げられる。全体形を復元できるものが少なく、器形的な特徴はつかめないが、以上の事から本群は円筒下層ｂ式の古い段階に相当するものと考えられる。

III群　縄文時代中期初頭の円筒上層式土器（図38-30）

１点の出土である。胎土に繊維を含まず、色調はにぶい黄橙色になる。Ｔ字状の隆帯が貼り付けられ、隆帯を囲うようにLRが回転施文されている。円筒上層a式に相当すると考えられる。

IV群　縄文時代中期後葉～後期前半の粗製土器（図38-31～34）

出土点数は少なく、全て図示した。31は平口縁で口唇際は無文になる。文様は単軸絡状体第１類が縦位に回転施文されている。外面色調はにぶい赤褐色である。口唇付近の内面及び口唇端に丁寧なミガキ調整が施されている。32・33は、外面色調がにぶい黄橙色になり、２点共にLRが横位回転施文されている。32の内面はナデ調整が施されている。34は口唇付近で強く外反する器形で、口頸部で段を有する。口唇付近にはミガキ調整が施され、口唇内面に煤が付着する。胴部文様は箆状工具により、格子状の沈線が施文されている。施文手法から十腰内Ⅰ式に相当する可能性も考えられる。

Ⅴ群　縄文時代後期初頭の土器（図38-35～39）

出土点数は少なく、同一個体を除き全て図示した。35～37は紐状の隆帯が貼り付けられ、隆帯上は刺突が施されている。35は地文縄文を施文後、沈線を施し、その後ミガキ調整が施されている。地文はLRが斜位に回転施文されている。36は逆に沈線施文後に縄文が充填されている。縄文はLRが斜位に回転施文されている。37は口縁部片で、口唇端は平坦になる。胴部は無文でミガキ調整が施されている。38・39は地文施文後に沈線施文しているもので、いずれもRLが斜位に回転施文されている。39の口唇端は平坦になる。細隆帯に刺突を施す手法、胴部文様などから蛍沢式に相当すると考えられる。

VI群　縄文時代後期前葉の土器（図38-40～44）

出土点数は少なく、同一個体のものを除き全て図示した。弧状入組文、入組文、多条沈線文が施文されている。沈線幅は40が４㎜、41は１㎜、42は３㎜、43は２㎜、44は１㎜弱である。文様の施文手法から十腰内Ⅰ式に相当するものと考えられる。

Ⅷ群　縄文時代後期後葉の土器（図38-45～48）

出土点数は少なく、全て図示した。45・46は同一個体である。口唇端にRLの側面圧痕が施文され、口唇に瘤状突起が付いている。また、口唇際の内面には横走沈線が施文されている。47も口唇際に瘤状突起が付き、地文施文後に沈線施文されている。48は、０段多条のLRが縦位に回転施文されている。

IX群　縄文時代晩期後葉～弥生時代前期初頭（図38-49～54）

出土点数は少なく、同一個体を除き全て図示した。49・50は地文施文後に、口唇際に２条の横走沈線が施文されている。49がRL、50がLRを横位に回転施文している。51～53は地文のみで、胎土に黄色浮石が混入している特徴がある。54も地文のみだが、黄色浮石は前者ほど含まれない。器形は口縁が若干内湾し、LRが横位に回転施文されている。内面はナデ調整が施され、調整痕が確認できる。

Ⅹ群　弥生時代後期の土器（図38-55～58）

出土点数は少なく、全て図示した。いずれも外面の色調はにぶい黄橙色である。55は口縁部片で、口唇が内湾する器形である。口唇際には刻みが施され、刻みの下位にはRLの側面圧痕が施文されている。地文はRLが斜位回転施文されている。56は幾何学的な沈線文様を施文し、沈線間に竹管工具による刺突が施されている。57は地文施文後に横走、弧状沈線が施文されている。58は、口唇が内湾する器形で、口唇際には刻みが施され、刻みの直下には２条の平行沈線が施文されている。胴部文様は、RLの斜位回転により縦走する縄文を施文されている。（小山）

図37　遺構外出土土器（1）

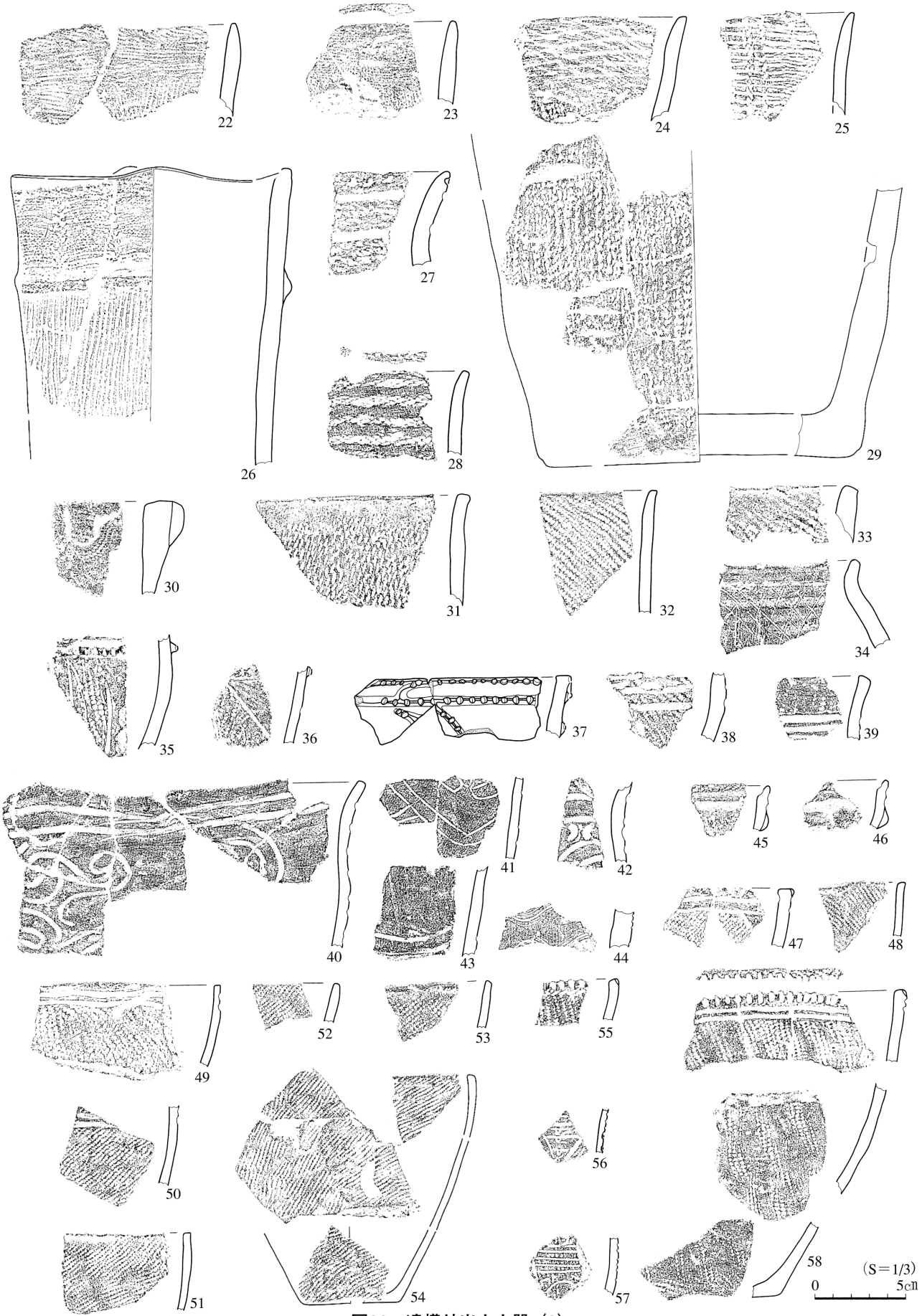


図38　遺構外出土土器（2）

第２節　石器

○剥片石器類（図39-１～図44-106）

遺構内、遺構外合わせて832点の出土である。定型石器類が84点、異形石器や削器などの不定形石器は374点、二次加工及び使用痕跡の認められない剥片・チップ類は374点である。石材は珪質頁岩が主体を占めているが、黒曜石、玉随などがわずかではあるが使用されている。

土器と同様に平安時代の遺構からも石器が出土しており、本来廃棄された場所から移動していることが考えられる。出土層位もⅠ～Ⅲ層とまとまりが見られず、正確な帰属時期は不明である。しかし、本遺跡より出土している土器は、縄文時代前期中葉の土器が主体を占めること、定型石器の形態が、当該期に見られる特徴を有していることより、定型石器に関しては、縄文時代前期中葉に帰属する可能性が高いと考えられる。

石鏃（図39-１～17）

22点出土し、19点を図示した。無茎鏃（１～13）、有茎鏃（14～17）に分けられる。基部形態は、１～７は平基若しくは弱い凹基になり、８・９は円基、10～13は尖基になる。３・５・９は被熱している。14は茎の部分にアスファルトが付着している。17は黒曜石製である。16は茎部が長くなる形態で、前期中葉以外の時期のものと考えられる。

石槍（図39-18～27）

10点出土し、全て図示した。２種類の製作技法が認められる。荒い調整が施され器面整形されているもの（18～23）と、丁寧な調整が施され器面整形されているもの（24～27）である。具体的な特徴として前者は、剥離内の打点が発達し、剥離の末端がステップになるものが多く、技法的には直接打撃による整形と考えられる。後者は、剥離内の打点は発達せず、剥離の長さも器面内部にまで達するものが多く、技法的には押圧剥離による整形と考えられる。調整技法の違いは、そのまま断面形状や側面観にも反映しており、前者の断面形状は厚手の六角形状、側面観は稜線がギザギザになっているのに対して、後者は断面形状が薄手のレンズ状で、側面観は稜線がほぼまっすぐになっている。

18は先端部付近に見られる剥離の稜が摩滅しており、その部分で弱い光沢を確認した。20・21共に、側縁下位の稜が潰れている。刃部角が大きければ調整時のものとも想定されるが、潰れている周辺の刃部角は鋭角であることより、調整時の可能性は低いと思われ、装着を意識し意図的につぶしている可能性が考えられる。25は黒曜石製である。左辺上位は新しい押圧剥離調整が施されており、右辺上位には連続する微細剥離がみられることより、削器に転用された可能性も考えられる。26は欠損部に剥離調整が施されており、破損後も器体整形されている。27は左辺下位の稜が摩滅しており、その付近に弱い光沢が見られることより、削器に転用された可能性が考えられる。

石匙（図40-28～図41-56）

45点出土し、34点を図示した。本器種は基本的に片面調整により器面整形が行われ、つまみ部のみが両面調整されるものである。また、剥離技法としては押圧剥離による調整がほとんどである。55・56はつまみが欠損するが、刃部形状及び剥離調整の度合から本類に含めた。本器種の裏面には肉眼観察でも光沢を確認できたものが多い。帰属時期が円筒下層式になることを考えると、光沢の種類は、熊ヶ平遺跡（青埋報第180集）や、熊沢遺跡（青森市教委第48集）などで分析が行われているように、いわゆる、コーングロスと考えられる。

縦型石匙

28～34は側縁がほぼ平行になるもので、30を除き、裏面に光沢を確認した。光沢の範囲は裏面全体に拡がるものが多い。35～39は先端がすぼまる形態である。35・36の裏面に光沢を確認した。37は端部に再加工が施されおり、尖端部が作出されている。錐に転用された可能性も考えられる。40～43は端部に向けて側縁が拡がる形態である。40～42の裏面に光沢を確認した。42は横長剥片を素材とし、素材の末端につまみが作出されている。44～47は１側縁がまっすぐで、もう１側縁が屈曲する形態で、44・45に光沢を確認した。44の左側縁の稜は摩滅している。

横型石匙

48は縦型と横型の中間タイプであるが、刃部が下側縁になることから横型に含めた。刃部縁辺に光沢を確認した。52・53は刃部縁辺に光沢を確認した。

欠損品　56の左側縁の稜は摩滅しており、欠損部に再加工が施されている。

石篦（図41-57・58）

２点出土し、２点共に図示した。本器種は両面調整により器面整形が施されている。器体に見られる剥離は打点が発達し、末端がステップになることから、直接打撃により制作されたと考えられる。一方刃部付近は、打点が発達せず、剥離の厚さが薄いため、押圧剥離により調整を施されたと考えられる。よって、製作技法としては、器体には直接打撃、刃部には押圧剥離が用いられたと考えられる。57・58は刃部縁辺が摩滅しており、器面に光沢が見られるものである。57の刃部形状は両刃の円刃状で、光沢は刃部裏面の縁辺より確認した。58は刃部両面が強く摩滅している。観察したままを表現すると「トロトロ」しているような感じを受ける。刃部形状は両刃の偏刃状である。57・58共に器面に見られる光沢は、器体の高い部分に位置している剥離の稜及び剥離内より観察された。装着に伴う光沢の可能性が考えられる。

石錐（図41-59～62）

５点出土して、４点を図示した。器面全体に両面調整が施されるもの（59・60）と、端部付近にのみ調整が施されるもの（61・62）とに２分される。

59は直接打撃により、器面調整が施された後、押圧剥離により最終調整が施されており、尖端部が若干摩滅している。60は押圧剥離のみで器面調整が施されている。

61・62は側縁に刃部が形成されており、複合機能を持つものと考えられる。尖端部は若干の剥離調整が施され作出されている。２点共に尖端部が摩滅している。62は側縁のみならず、もう一方の端部にも刃部が作出されており、その部分の剥離稜は摩滅している。光沢も確認された。

異形石器（図41-63・64）

２点出土して、２点共に図示した。63は押圧剥離による片面の周縁加工が施されている。64は押圧剥離による両面調整が施されており、尖端部の側縁稜は潰れている。

掻器（図42-65～68）

側縁に急角度の刃部を持つものを掻器とした。８点出土して、４点を図示した。65・66は２側縁に刃部が形成されている。

削器（図42-69～図44-106）

363点出土して、40点を図示した。本器種は調整の度合いにより、３類に細分した。

Ⅰ類　両面調整が施されているもの（図42-69～78）

32点出土して、11点図示した。

69は端部につまみらしい突起が作出されている。石匙の可能性も考えられるが、本遺跡より出土した石匙は片面調整を基本としているため、本類に含めた。裏面の両側縁中位に加工が密に施されている。71は左辺の側縁稜が潰れている。剥離の状況及び、器形から刃つぶし加工と考えられる。

Ⅱ類　片面調整が施されているもの（図42-79～図44-105）

122点出土して、29点を図示した。

79～94は２側縁に刃部が形成されている。79・80はつまみらしい突起が端部に作出されており、裏面右側縁には光沢も確認された。つまみの形状が明瞭でなく、本類に含めたが、用途的には石匙と同様のものが想定される。81・82も調整及び刃部形状から石匙の破損品に含まれる可能性も考えられる。95～105は１側縁に刃部が形成されているものである。

Ⅲ類　素材の縁辺に微細剥離が見られるもの（図44-106）

210点出土して、１点を図示した。黒曜石製である。

石核　図示しなかったが１点の出土である。

○石斧類

磨製石斧のみ７点が出土した。緑色細流凝灰岩、輝緑岩、粘板岩等が使用されている。

磨製石斧（図44-107～109）

７点出土して、３点図示した。３点共に刃部は両刃の弱い偏刃状になり、刃部に直行している線状痕が観察された。刃部稜は弱く摩滅しており丸みを帯びる。108は器体上～中位に軸線に直行している擦痕を確認した。装着痕の可能性も考えられる。16・18・19の刃部は両刃の偏刃状で、刃部に斜行している線状痕を確認した。16・19の刃部端は摩滅している。17の刃部は両刃の円刃状で、刃部に直行もしくは若干斜交している線状痕を確認した。刃部端は摩滅しており、光沢が認められる。20は、基端部に敲打痕が見られ、破損後に敲き石として転用された可能性も考えられる。

○礫石器類（図45-110～図50-166）

縄文時代に帰属すると思われる礫石器は、遺構内、遺構外合わせて139点の出土である。使用されている石材は安山岩が最も多く、全体の71％を占め、次いで流紋岩（11％）、凝灰岩（９％）などが使用されている。その他に頁岩、砂岩、シルト、粘板岩などが使用されている。

礫石器は、擦る、若しくは擦り切るもの、敲打するもの、その他のものというように、使用痕跡により３種類に大別される。中には、擦る、敲く、といった複合機能を持つものもあるが、本遺跡より出土した「擦る」機能を持つ石器は、器面調整が施されているものが多いため、複合機能を持ち、器面調整されないものは「敲く」機能に主眼をおいた。

・擦る、擦り切る機能をもつもの

石鋸（擦切具）（図45-110～118）

19点出土して、９点図示した。使用されている石材は全て安山岩である。本石器の大きな特徴は素

材の長軸辺に両刃になる刃部が形成され、擦痕調整により器体整形されていることがあげられる。中には剥離加工後に擦痕調整が施されているものもある。擦痕調整は器面のみならず、側縁縁辺にまで施されているものもある。刃部に見られる擦痕には使用時のものも含まれていると考えられるが、器面調整時の擦痕との違いは認識できなかったため、刃部に見られる擦痕が使用時のものか、調整のものかは判断できない。全て破損品での出土で、破損状況も何片かに分かれて割れているものが多い。薄手の素材を使用するため、このような割れ方をする事も想定されるが、意図的に割っている可能性も考えられる。本類は破損品が多いため、器面調整、刃部形状がよく似る抉入扁平磨石器の破損品も含まれている可能性がある。

110～113は刃部の稜線が尖り、刃部と反対の側縁稜は擦痕調整により平坦になる。113は刃部稜の丸みを帯びたところに、刃部に直行する擦り調整を施し、再び、尖った稜線を作出している部分が認められる。114・115は刃部反対の側縁稜が調整により平坦になるが、刃部稜は丸みを帯びている。116は刃部の大半がスポール状に割れるが、その割れ口にも擦痕調整が認められる。117は一方の側縁稜に擦痕調整が施され、もう一方の側縁稜は剥離加工により作出されている。擦痕調整は一側縁にのみ施されており、半円状扁平打製石器の破損品の可能性も考えられる。118も同様に側縁付近にのみ擦痕調整が施されている。

半円状扁平打製石器（図45-119～図48-141）

61点出土し、26点を図示した。出土点数の中には、破損品で、石鋸（擦切具）との区別が出来なかった12点も含めている。剥離による周縁加工を行い、長軸上の１側縁を刃部として使用するものを本類とした。使用している石材は安山岩、凝灰岩、頁岩で、安山岩が最も多く、出土数の８割近くを占める。破損率は石鋸のように100％ではないが、それでも８割近くは破損している。

119～122は石鋸状に器面及び側縁を調整した後、側縁に剥離加工を施し、刃部を作出している。119・120は刃部が稜線状になり、稜は摩滅し、丸みを帯びている。121・122も稜が摩滅し丸みを帯びているが、前者より摩滅幅が大きくスリ面のような状況を呈している。120は長軸の両端に抉りが施されている。121は接合資料で、互いの接合面にすれた痕跡が認められる。すれた痕跡は接合面で合致しており、破損後も補修を行いながら使用したことにより形成されたものと考えられる。類例としては青森県の南部に位置する南郷村畑内遺跡で見られる。（青埋報第326集　畑内遺跡Ⅷ）

123～131は刃部が摩滅し、丸みを帯びている。123～128には器面に擦痕調整が施されている。124も割れ面に合致するすれた痕跡を確認した。123・130は長軸端に抉りが施されている。

132～135は刃部が摩滅し丸みを帯びる部分と、幅広なスリ面を併せ持つもので、器面に擦痕調整が施されている。

136～141は刃部に幅広のスリ面が形成され、136～138は器面に擦痕調整が施されている。

磨り石（図48-142～145）

５点出土し、４点を図示した。器面に剥離調整が施されず、素材の縁辺をそのまま使用しているものを本類に含めた。使用されている石材は安山岩、頁岩、凝灰岩、流紋岩である。142は器面に擦痕調整が施され、表面に２カ所の敲打痕が見られる。付着位置から、使用時に手の滑り止めを意識し、敲打されている可能性が考えられる。143・145は１側縁を、144は２面を使用している。

・敲く機能をもつもの

敲き石（図48-146～図49-156）

30点出土して、14点を図示した。安山岩が８割を占める割合で使用されている。他に、凝灰岩、流紋岩が使用されている。

図48-146～154に見られる敲打痕は器面があれるものである。このうち、146・147は複合機能を持ち、器面に敲打痕、側面にスリ痕が見られる。147～149は器面に擦痕が確認された。使用時のものか、制作時のものかは不明である。図49-155・156は敲打痕が凹みになるものである。156は端部に剥離調整が、側縁に弱い敲打痕が見られる事から、石錘に転用された可能性も考えられる。

・その他の機能を持つもの

礫器（図49-157・図50-158）

４点出土して、２点を図示した。使用部位が潰れた痕跡を示すものを本類とした。使用されている石材は安山岩と粘板岩である。

石錘（図50-159～163）

６点の出土で、５点を図示した。安山岩、粘板岩、シルト岩が使用されている。159・160はシルト岩を使用しており、非常に軽い。161・162は円形の素材が用いられる。163は縦長の礫を素材とし、長軸端に剥離調整が施されている。

石棒（図50-164）

加工痕が認められないため、石器として認定していいものか判断に悩むものである。多角柱状の礫を石棒の可能性のあるものとした。11点出土し、１点を図示した。石材は全て流紋岩である。

石皿（図50-165・166）

２点出土し、２点共に図示した。165は安山岩を、153は砂岩を使用している。（小山）

第３節　土製品、石製品

土製品、石製品の出土は少なく、全て図示した。167・168ともに、胎土に繊維を含み、断面色調は黒色になるものである。胎土の特徴から第Ⅱ群土器と考えられる。167はミニチュア土器で、底径は3.8㎝ある。残存部分には文様施文されない。168は円盤状土製品である。頸部片を使用し、口縁は、結節が横位に回転施文されている。周縁を打ち欠き、円形に調整が施されている。

169は岩版である。軽石凝灰岩を素材とし、頂部付近に穿孔が、器面に刺突が施されている。表面と裏面には若干の違いが認められる。表面は径、深さ共２㎜程度の刺突が側縁に沿うように施され、裏面は１㎜程度の刺突が無規則に施されている。側縁は深さ３㎜ほどの溝が掘り込まれている。このような特徴を持つものは、管見にふれたところでは、青森県碇ヶ関村に所在する大面遺跡より出土している。大面遺跡出土のものも、側面に溝、器面には列点、穿孔が施されており、前期中葉の捨て場から出土している。また、類例は青森県寅平遺跡、秋田県内袋遺跡、下茂屋遺跡に見られ、帰属時期は、青森県のものは前期中葉、秋田県のものは前期末葉で、前期に帰属するとされている。169も形態的特徴と、本遺跡で縄文時代前期中葉の土器が主体を占めることから、帰属時期は当該期になる可能性が高いと考えられる。（小山）

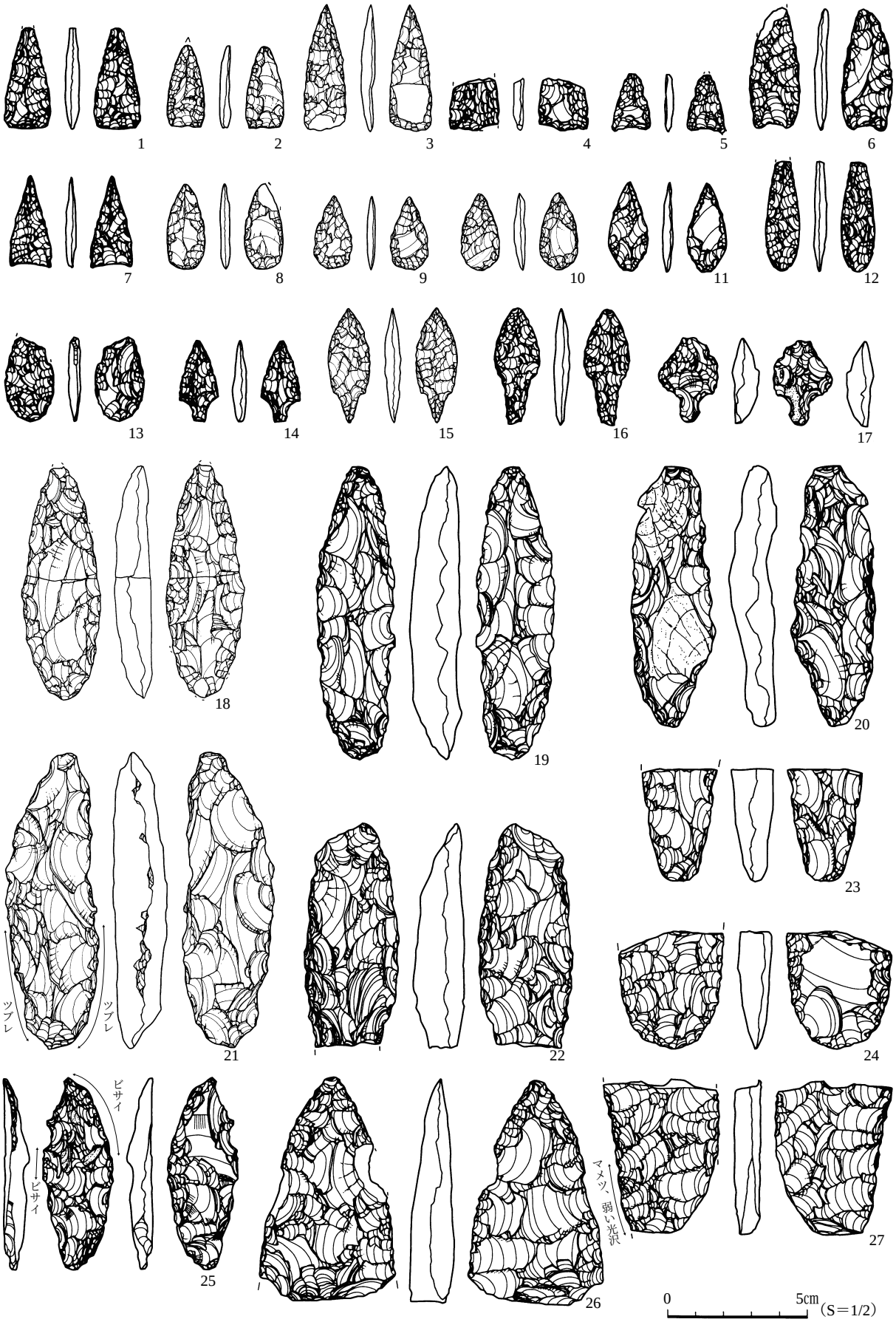


図39　遺構外出土石器（1）

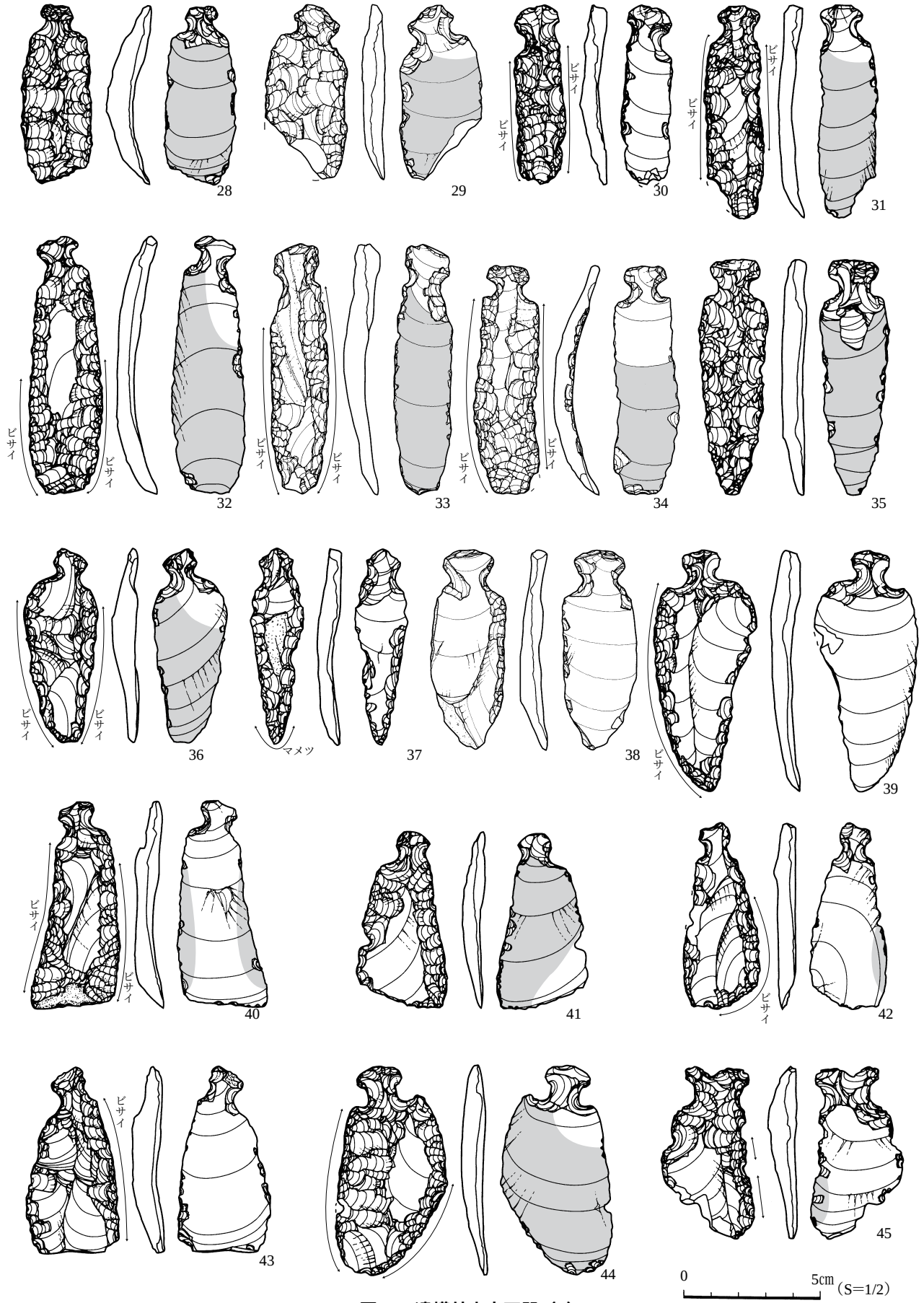


図40　遺構外出土石器（2）

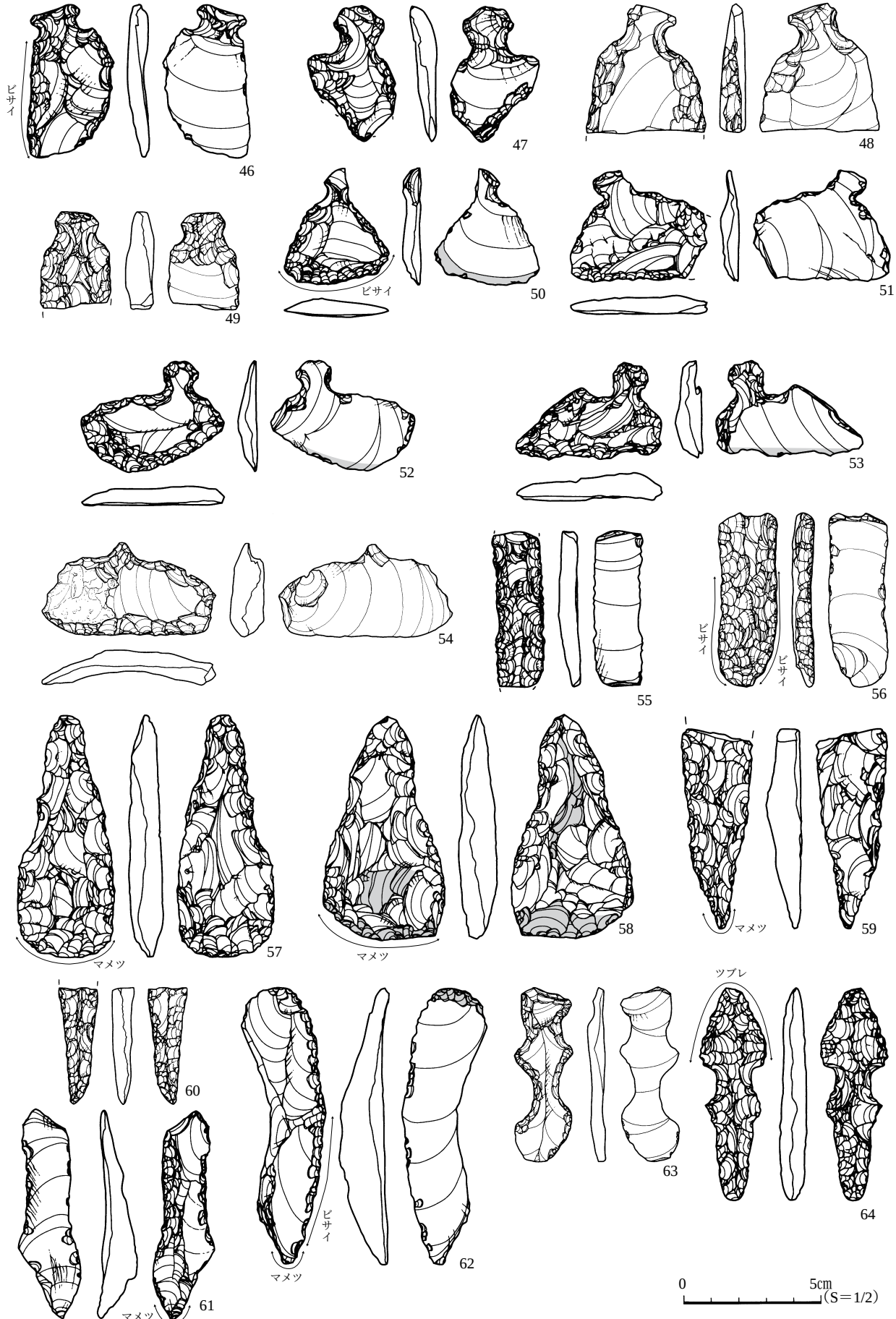


図41　遺構外出土石器（3）

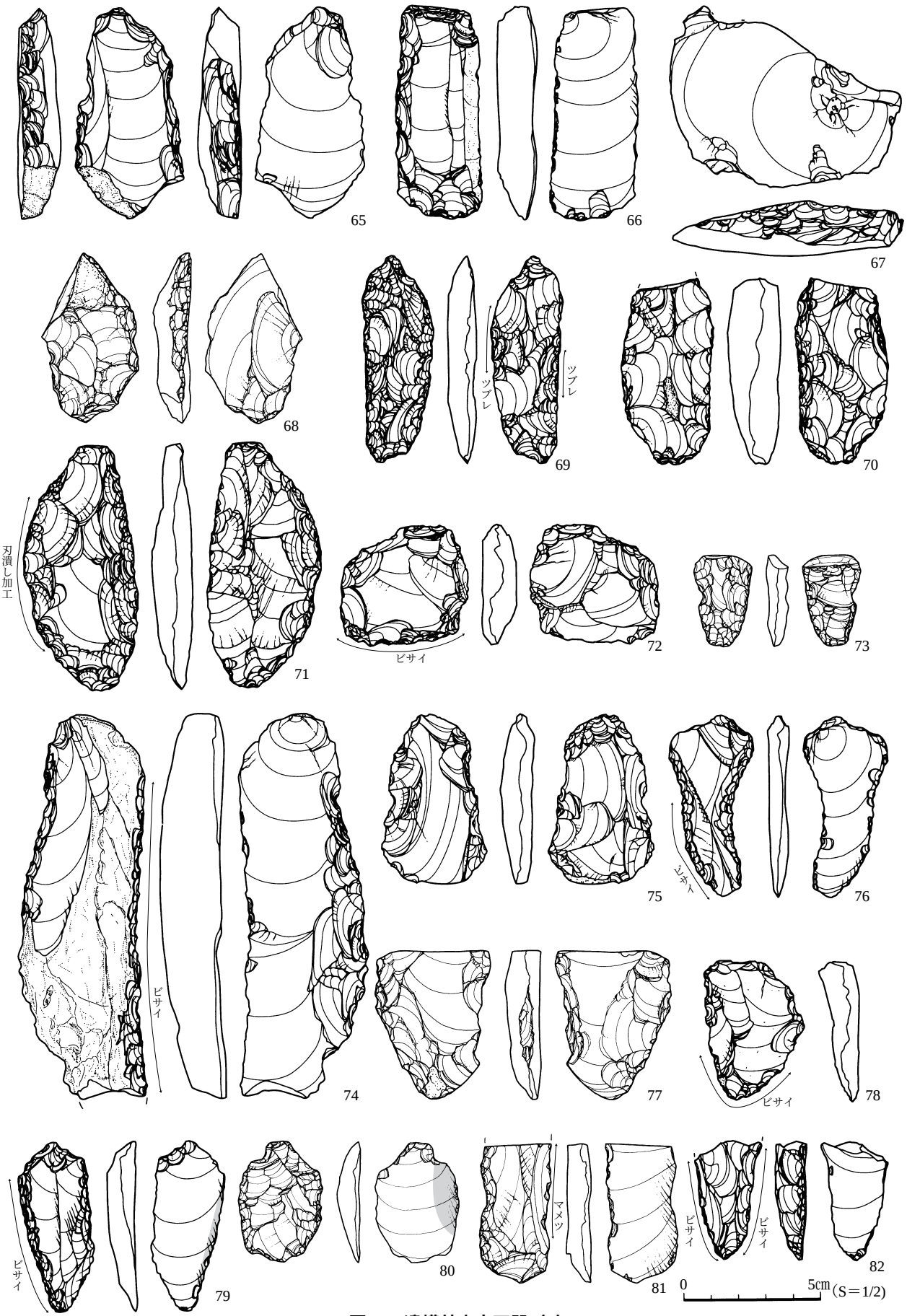


図42　遺構外出土石器（4）

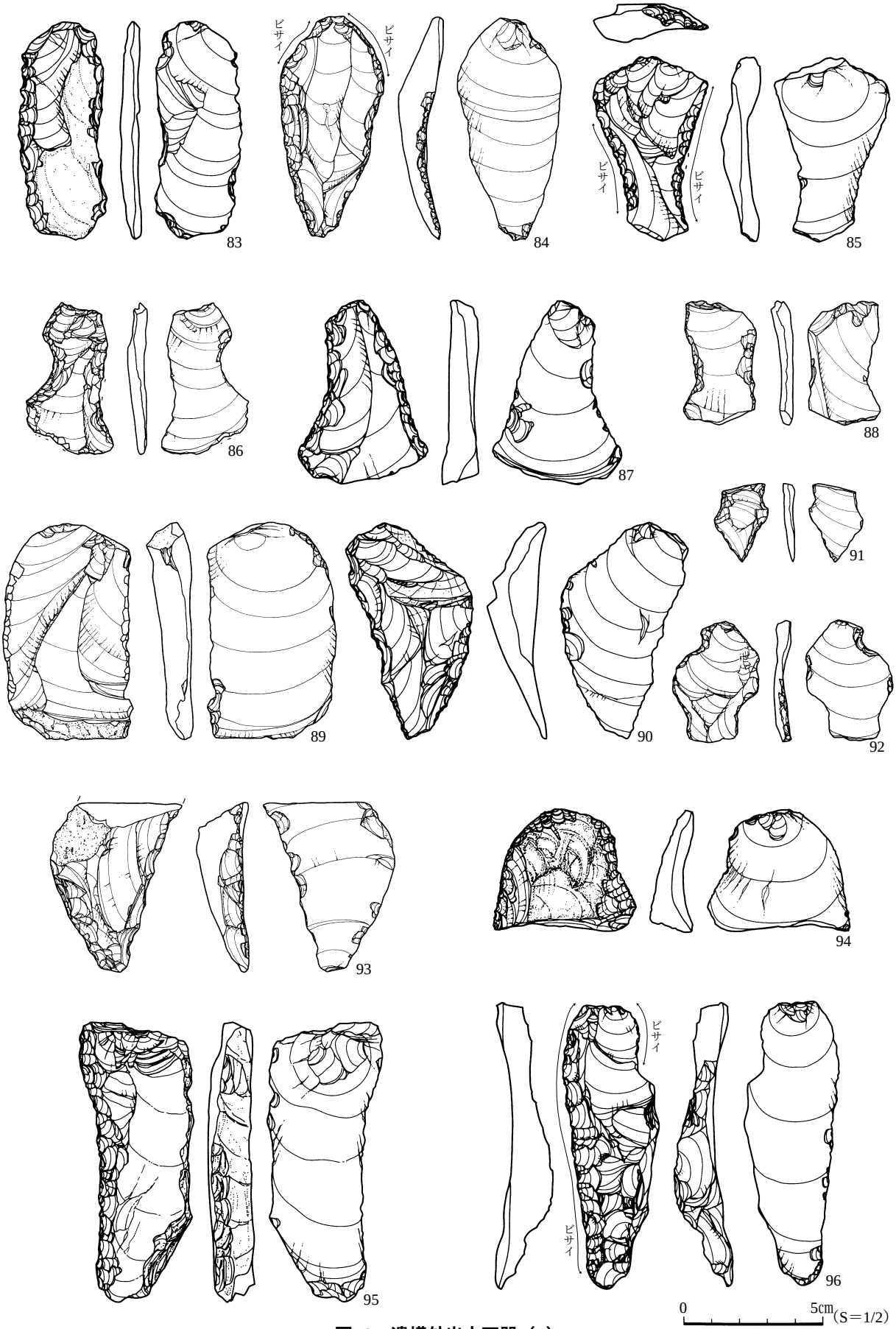


図43　遺構外出土石器（5）

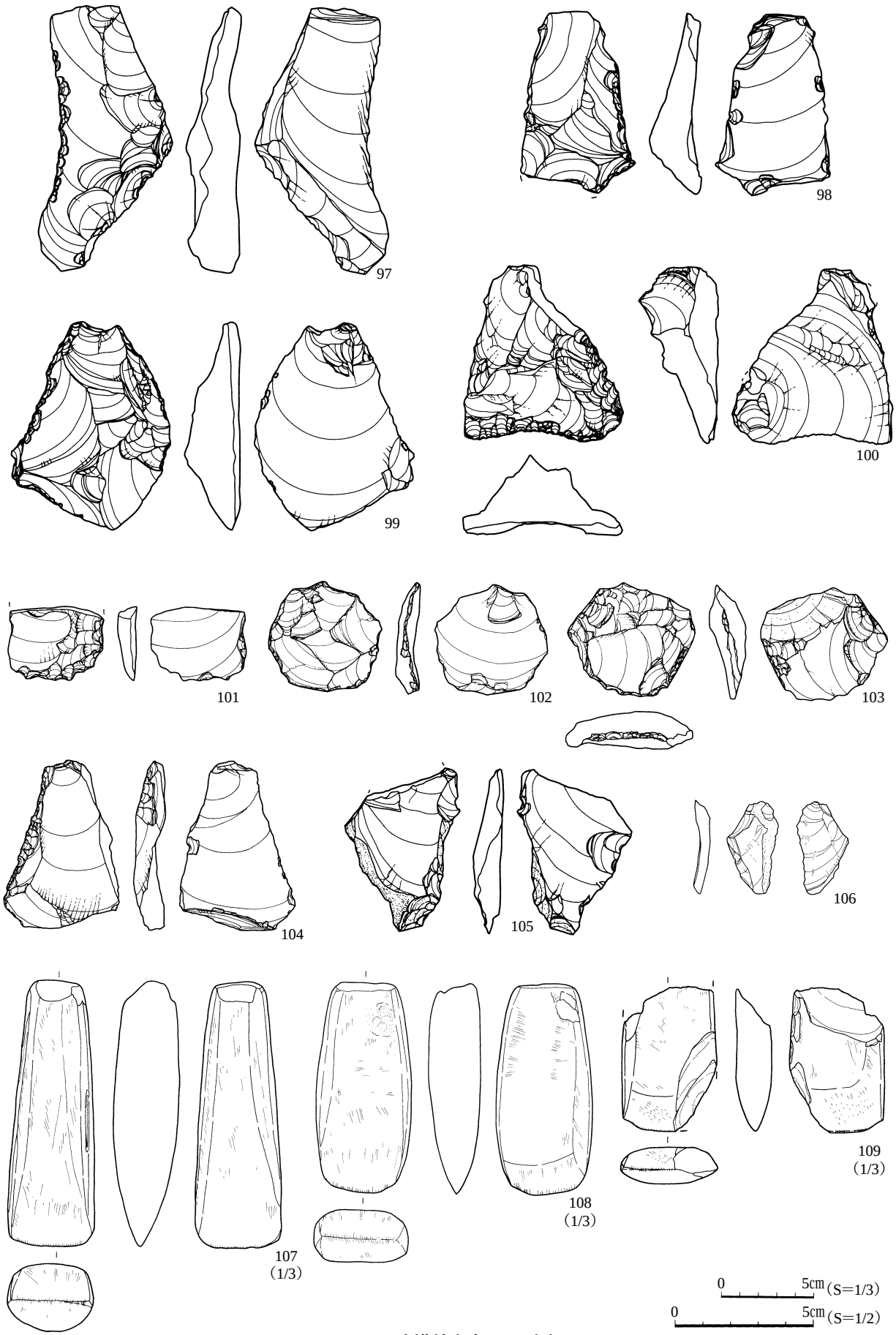


図44　遺構外出土石器（6）

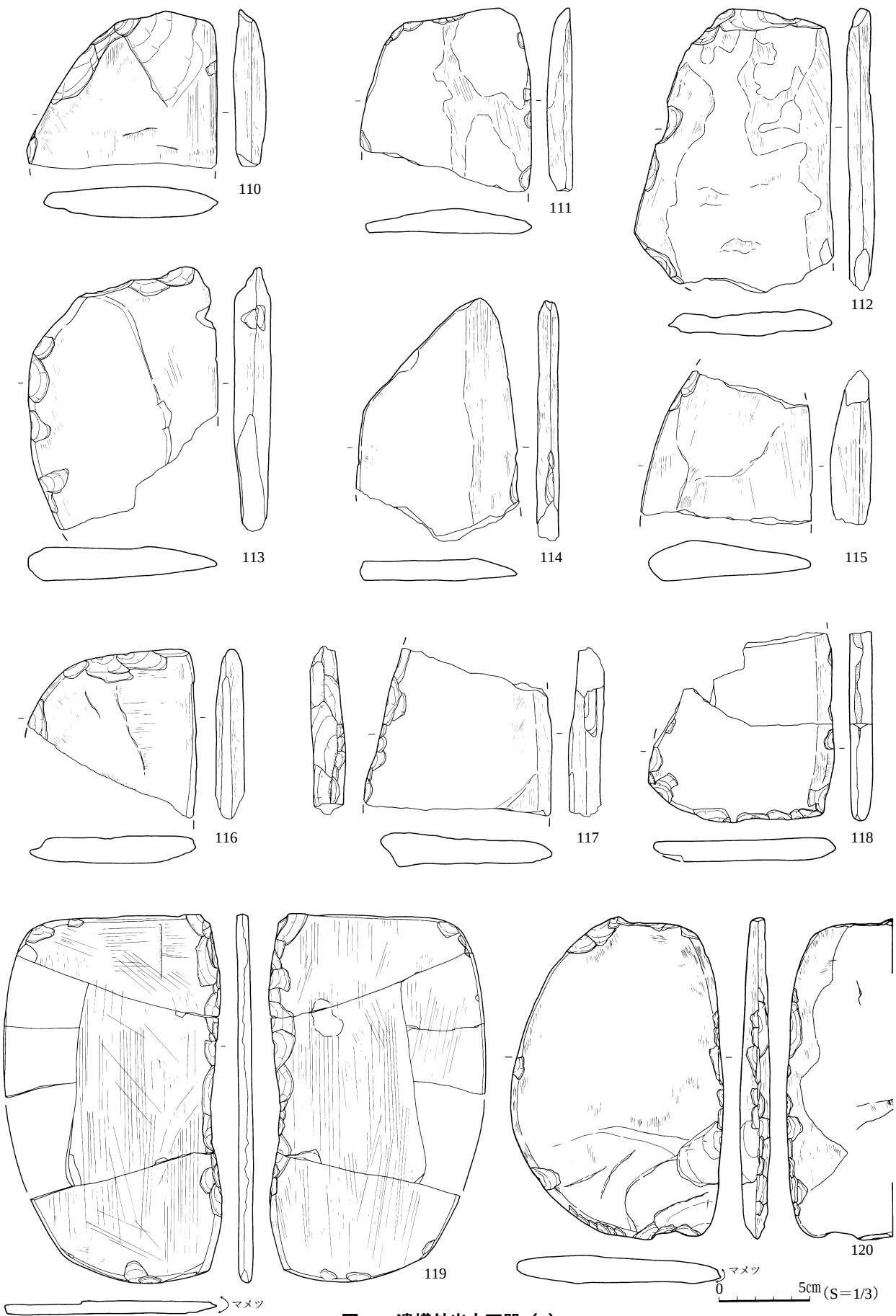


図45　遺構外出土石器（7）

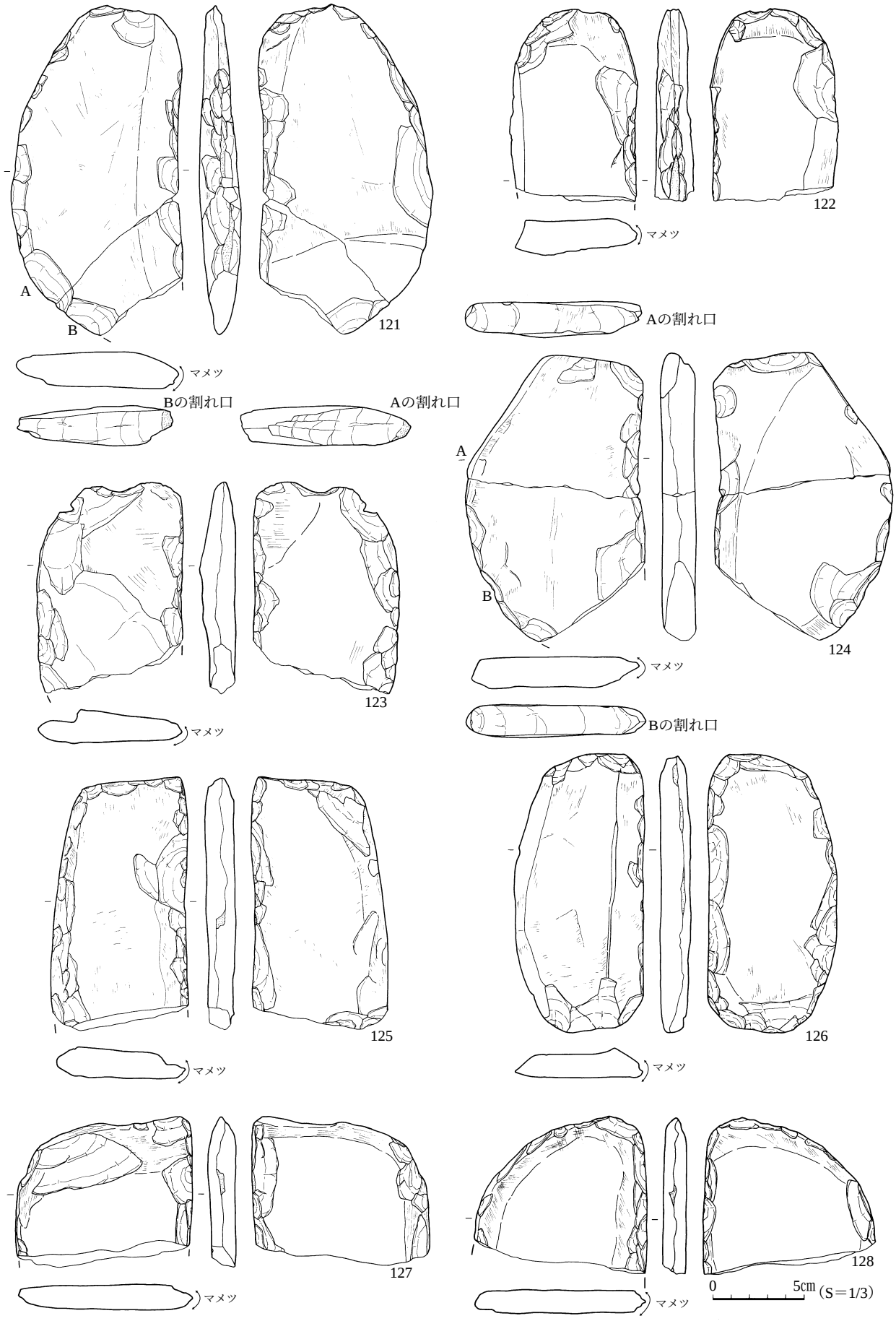


図46　遺構外出土石器（8）

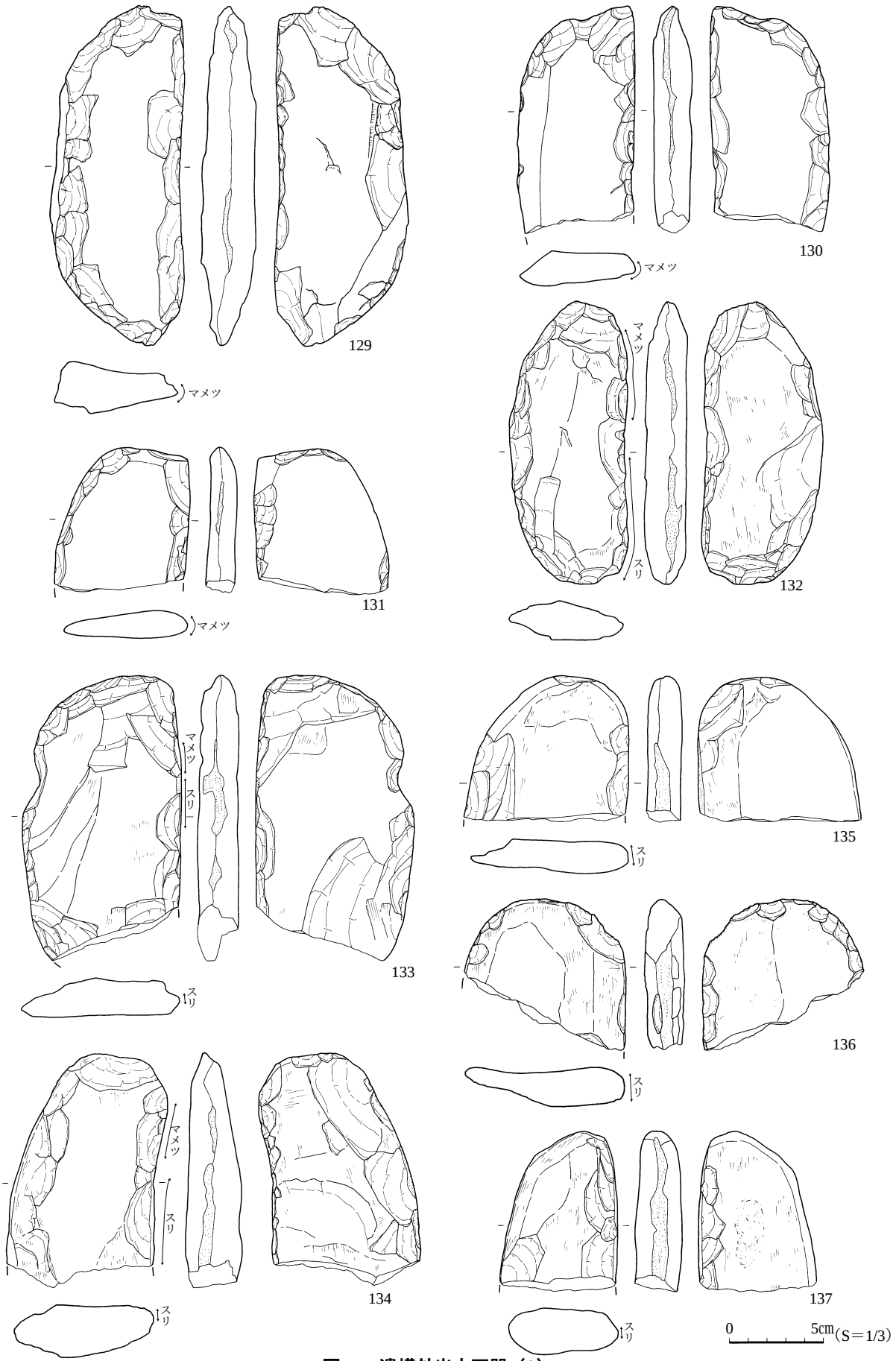


図47　遺構外出土石器（9）

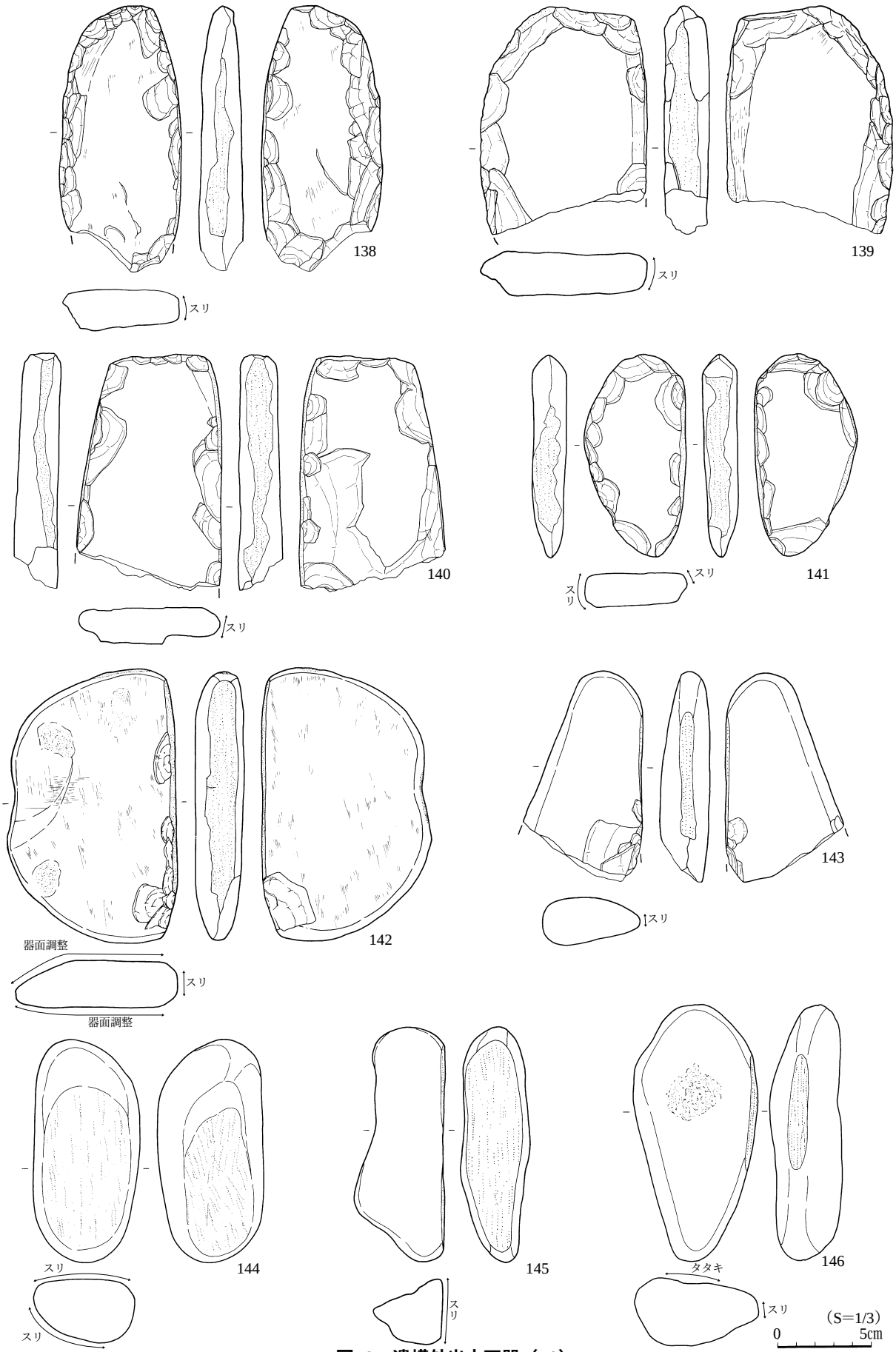


図48　遺構外出土石器（10）

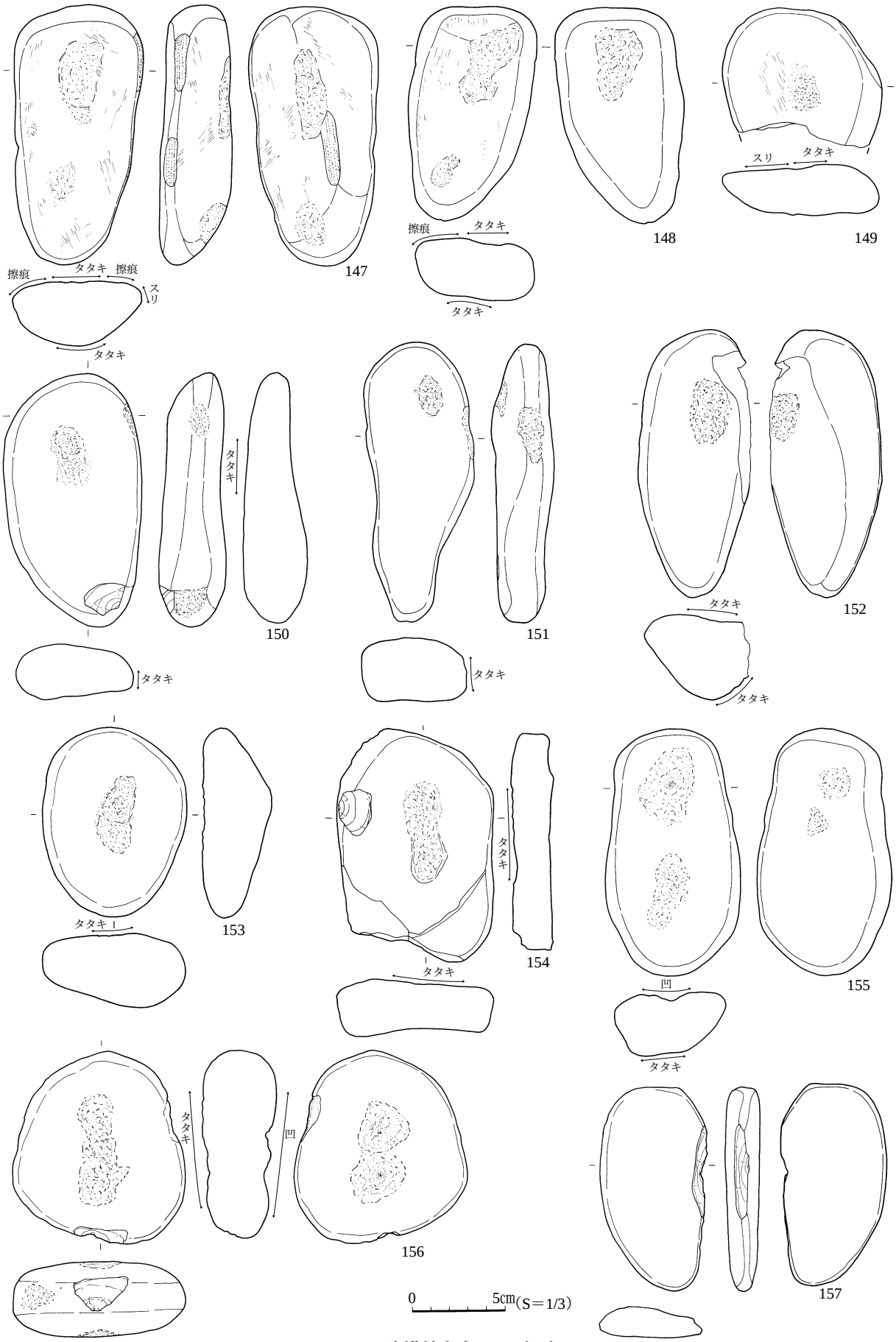


図49　遺構外出土石器（11）

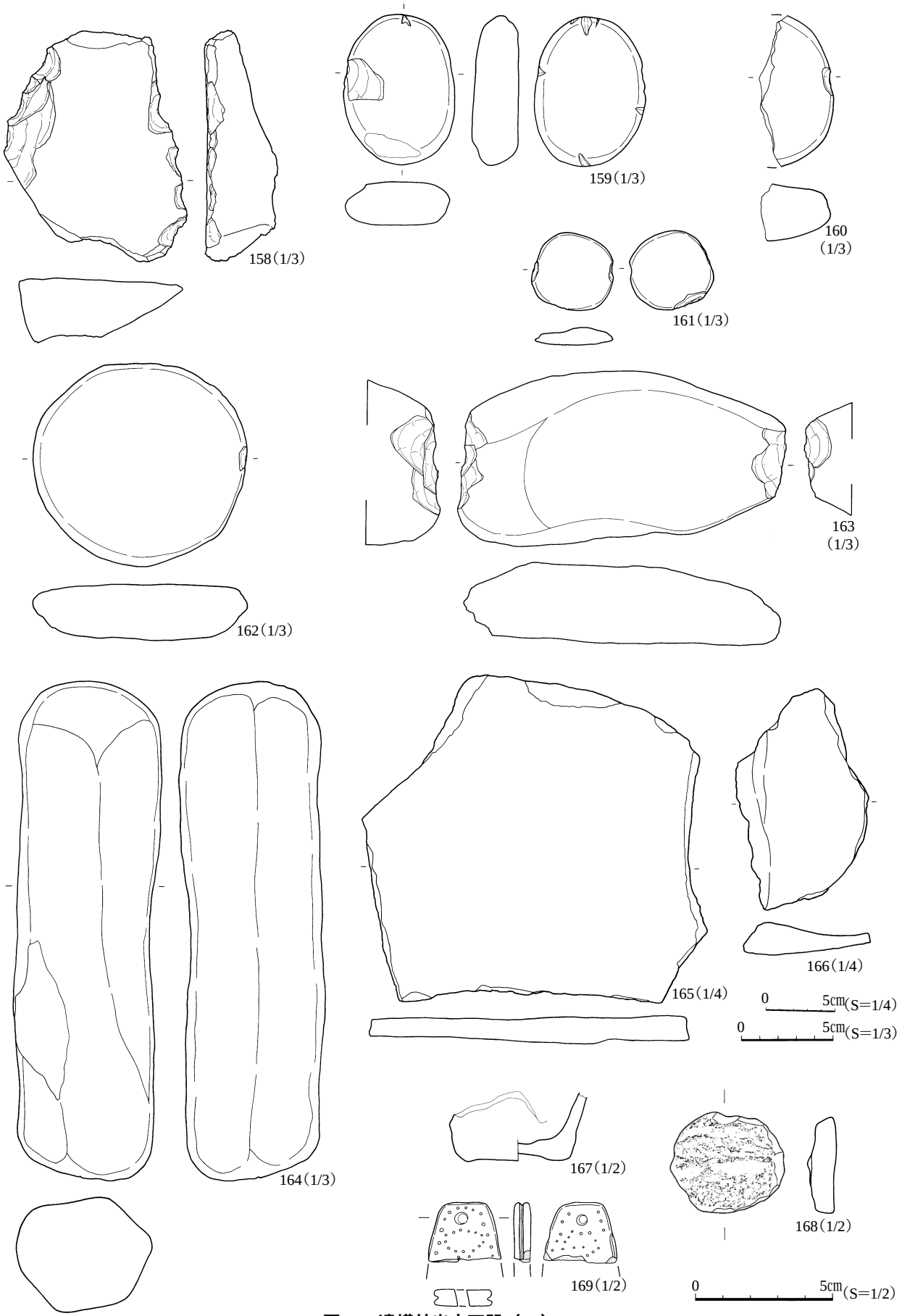


図50　遺構外出土石器（12）

第５章　平安時代の遺構

平安時代の遺構は壕跡２条、竪穴住居跡53軒、竪穴遺構７棟、掘立柱建物跡４棟、柱列２基、井戸跡４基、土坑88基、円形・方形周溝４基、溝跡39条、道跡、土器埋設遺構２基等の遺構が検出された。このうち、壕は方形区画の二重壕の構造をもつもので、県内では初めての検出である。

第１節　壕跡（SD22・SD23）（図51～55）

［位置・構造］調査区域南東側の小高い場所に壕は構築されている。地形的には緩斜面上に構築されており、最も高い区域は北西方向にある。南側は削平されているが、ほぼ方形で、二重に構築されている。ここでは、内側の壕を内壕（SD22）、外側を外壕（SD23）として記述する。

［重複］構築された時代や時期の不明な第１号・24号・25号・28～30号・33号溝跡より古い。また、平安時代の第４号・９号・10号・16号・18号・20号・26号住居跡及び第26号・27号溝跡、縄文時代と考えられる第29号、122号土坑よりは新しい。このように多数の遺構と重複しているが、縄文あるいは平安時代の遺構を切っている。

［規模・断面形］内壕は幅2.50～3.50m（平均2.94m）、壕底部の幅1.40～2.06m（平均1.74m）、深さ1.00～1.55m（平均1.19m）で、断面形は逆台形状である。長さ113.55mを検出した。

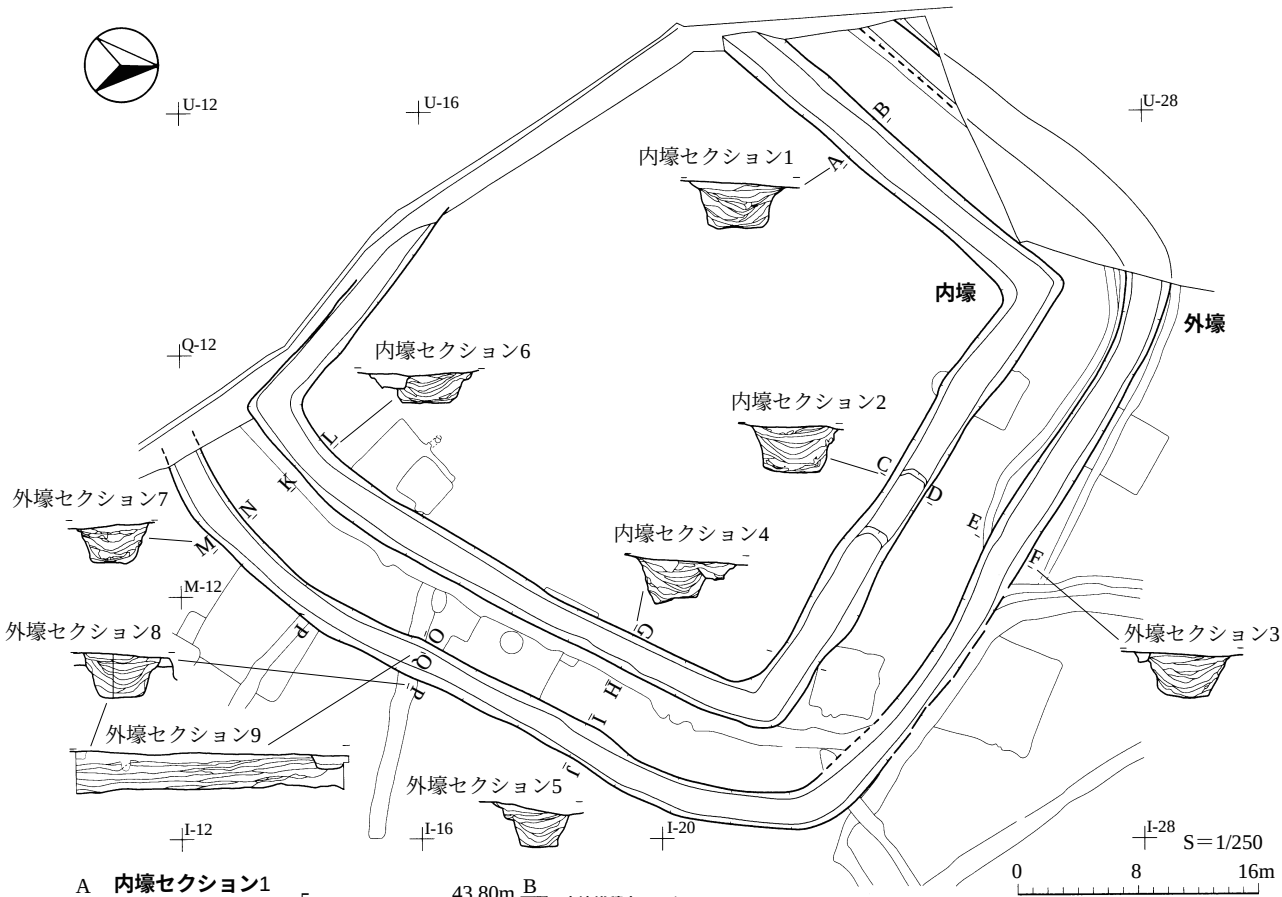
外壕は幅2.20～2.74m（平均2.38m）、壕底部の幅1.02～1.73m（平均1.35m）、深さ1.00～1.55m（平均1.32m）で、断面形は逆台形状を呈する。長さ96.7mを検出した。

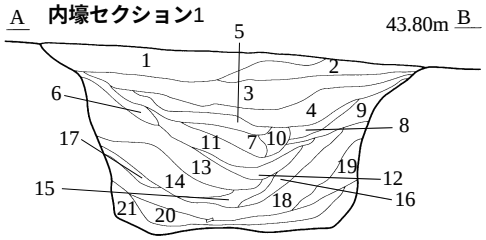
外壕は内壕から約４～５mほど離れて構築されている。また、内壕の南北は約34.4m、東西は35.6mで、内壕で囲まれた面積は約1,200㎡である（調査した部分は1,120㎡）。軸方向は北から33度東へ傾いている。

［堆積土］場所によって若干の違いが認められるが、内壕、外壕とも似たような堆積状況を示している。全般に、上部から下半部にかけて黒褐色土や暗褐色土がレンズ状に堆積し、これにローム質の褐色土やローム粒を多量に含む暗褐色土がそれらの間に見られる場合が多い。底面直上では黄褐色土や粘土質の明黄褐色土が見られるところが多いが、まれにロームブロックを多量に含んだ黒褐色土や暗褐色土が見られるところや白頭山火山灰のブロックが見られた場所もある。また、場所によっては壁の崩落が見られるところあり、とくに内壕の第９号住居と重複している付近ではそれが激しい。この場所では、崩落した壁や第９号住居跡の床面が壕の底面から底面直上にかけて堆積していた。

［出土遺物］内壕では土師器片1,649点（20,121ｇ）、須恵器片143点（4,140ｇ）、ミニチュア土器片13点、釘状鉄製品１点、外壕では土師器片772点（9,302ｇ）、須恵器片91点（2,465ｇ）、ミニチュア土器片６点、鉄製品の破片（軸破片）１点、羽口片１点が出土した。大半は住居跡と重複している近辺での出土が多い。図55-268の土師器坏の内面には赤色顔料が付着している。また、須恵器では図-65・299・510及び図55-153には刻書が見られた。このうち、図55-153の坏の底部内面には摩滅しており、転用硯の可能性がある。なお、胎土分析による産地同定では、図54-５・９は五所川原産、図55-１・９・11・15は産地不明であった。このほかに、縄文時代前期・後期、弥生時代の土器片2,481点（27,908ｇ）や縄文時代の石器140点（石鏃、石槍、石匙、磨製石斧、石鋸、磨り石等）が出土している。

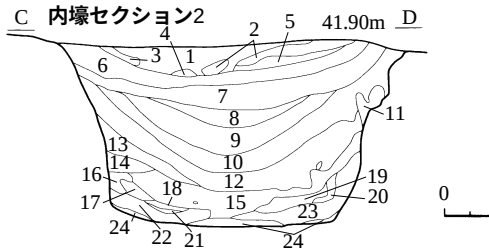
［その他］表層が削平を受けていることもあって、土塁は確認できなかった。また、壁面には柱穴状のピットも見られたところもあったが、橋脚の跡と思われるものは検出できなかった。（畠山）

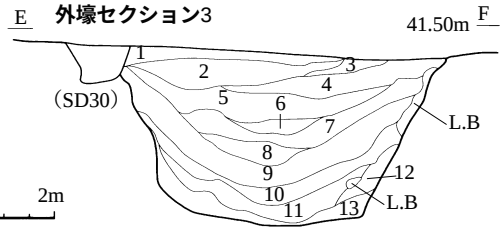


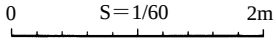


内壕堆積土　セクション1

第１層	暗褐色土	10YR3/4	L.B少量混入。	第12層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量混入。
第２層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量混入。	第13層	黒褐色土	10YR2/3	L.B15%混入。
第３層	暗褐色土	10YR3/3	炭化粒微量混入。	第14層	黒褐色土	10YR2/3	L.B少量混入。
第４層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒微量混入。	第15層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒微量混入。
第５層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量混入。	第16層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量混入。
第６層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒多量混入。	第17層	黄褐色土	10YR5/6	ローム質。
第７層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒40%混入。	第18層	暗褐色土	10YR3/3	L.B少量混入。
第８層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒10%混入。	第19層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒30%混入。
第９層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量混入。	第20層	黒　色　土	10YR2/1	L.B25%混入。
第10層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒5%混入。	第21層	黄褐色土	10YR5/6	ローム質。
第11層	褐　色　土	10YR4/4	ローム質。				







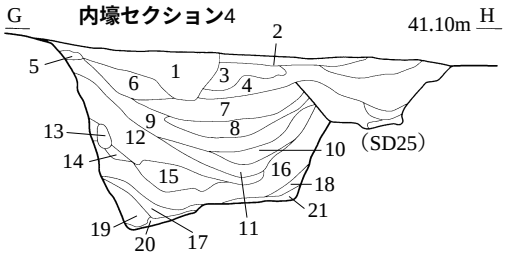
内壕堆積土　セクション2

第１層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒(φ1~5㎜)微量混入。硬い。
第２層	明褐色土	7.5YR5/8	ローム質粘土。φ1~3㎜の砂少量混入。
第３層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒(φ1~3㎜)少量混入。硬い。
第４層	黒褐色土	10YR2/3	L.B(φ1㎜)少量混入。
第５層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒(φ1㎜)少量混入。
第６層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒(φ1~10㎜)少量混入。硬い。
第７層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒(φ1~2㎜)、L.B(φ1~13㎜)混入。
第８層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒(φ1~7㎜)微量混入。軟らかい。
第９層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒(φ1~60㎜)少量混入。軟らかい。
第10層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒(φ1~7㎜)微量混入。軟らかい。
第11層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム質。脆い。
第12層	暗褐色土	10YR3/3	ローム質の粘土(φ1~15㎜)20%混入。硬い。
第13層	暗褐色土	10YR3/4	ローム質の粘土(φ1~5㎜)15%混入。軟らかい。
第14層	黄褐色土	10YR5/8	ローム質。脆い。
第15層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒(φ1~20㎜)7%混入。硬い。
第16層	鈍い褐色土	7.5YR5/4	粘土質。やや硬い。
第17層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒(φ1~2㎜)7%、L.B(φ10~15㎜)混入。
第18層	明黄褐色土	10YR6/6	
第19層	黄褐色土	10YR5/8	硬い。
第20層	暗褐色土	10YR3/3	粘土塊(φ15~20㎜)少量混入。軟らかい。
第21層	黒褐色土	10YR2/2	粘土塊(φ5~10㎜)少量混入。軟らかい。
第22層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒(φ1~2㎜)20%、L.B(φ20~25㎜)混入。
第23層	明褐色土	7.5YR5/6	粘土質。硬い。
第24層	橙　色　土	7.5YR6/6	ローム粒・塊(φ1~30㎜)多量混入。やや硬い。

外壕堆積土　セクション3

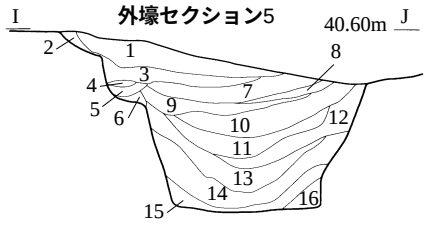
第１層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒・塊(φ1~10㎜)少量混入。
第２層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・塊(φ1~10㎜)少量混入。
第３層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒・塊(φ1~20㎜)少量混入。
第４層	黒　色　土	10YR1.7/1	ローム粒・塊(φ1~8㎜)少量混入。
第５層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・塊(φ1~25㎜)少量混入。
第６層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・塊(φ1~20㎜)少量混入。
第７層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒15%、L.B(φ2~10㎜)7%混入。
第８層	黒　色　土	10YR1.7/1	ローム粒・塊(φ2~60㎜)・炭化物混入。
第９層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量混入。
第10層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量混入。
第11層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・塊(φ2~20㎜)少量混入。
第12層	褐　色　土	10YR4/6	ロームと粘土の層。
第13層	黄褐色土	10YR5/6	ロームと粘土の層。下層部に砂混入。

図51　壕跡とセクション（1）



内壕堆積土　セクション4

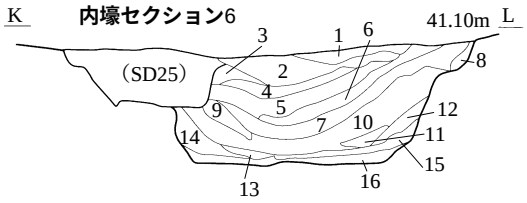
第１層	黒褐色土	10YR2/3	硬い。ローム粒少量混入。
第２層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒少量混入。
第３層	鈍い黄褐色土	10YR4/3	ローム粒30%、L.B(φ2~5㎜)混入。
第４層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒15%、粘土塊、炭化物少量混入。
第５層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム質。
第６層	暗褐色土	10YR3/3	L.B(φ2~20㎜)少量混入。
第７層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒10%、L.B・炭化物少量混入。
第８層	暗褐色土	10YR3/4	L.B(3~25㎜)7%、ローム粒25%混入。
第９層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量、L.B(2~5㎜)少量混入。
第10層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒10%混入。
第11層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒少量混入。



外壕堆積土　セクション5

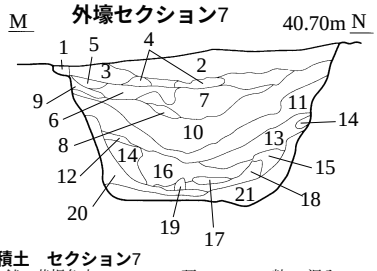
第１層	暗褐色土	10YR3/3
第２層	暗褐色土	10YR3/4
第３層	黒褐色土	10YR2/3
第４層	暗褐色土	10YR3/3
第５層	黒褐色土	10YR2/3
第６層	黄橙色土	10YR7/8
第７層	黒褐色土	10YR2/3
第８層	黒褐色土	10YR2/3
第９層	暗褐色土	10YR3/3
第10層	暗褐色土	10YR3/4
第11層	黒褐色土	10YR2/3
第12層	暗褐色土	10YR3/3
第13層	黒褐色土	10YR2/2
第14層	褐　色　土	10YR4/4
第15層	黒褐色土	10YR3/2
第16層	明褐色土	10YR6/8

第12層	黄褐色土	10YR5/6	L.B多量混入。粘土塊混入。
第13層	黒褐色土	10YR2/2	
第14層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒5%、L.B(2~10㎜)10%混入。
第15層	暗褐色土	10YR3/3	L.B(φ2~20㎜)10%混入。
第16層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒30%、L.B(φ2~90㎜)15%混入。
第17層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒15%、L.B(φ2~20㎜)少量混入。
第18層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒30%、L.B(φ2~3㎜)少量混入。
第19層	黄褐色土	10YR5/6	ローム粒多量、下層部に砂少量。
第20層	明黄褐色土	10YR6/6	粘土質。
第21層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量混入。硬く、締まりあり。



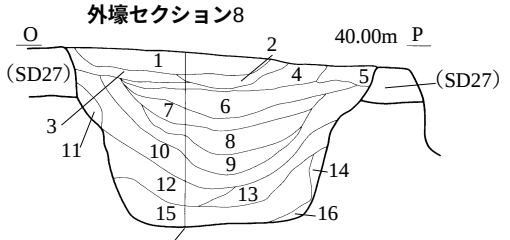
内壕堆積土　セクション6

第１層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・塊(φ2~10㎜)少量混入。
第２層	暗褐色土	10YR3/4	粘土塊30%、ローム粒15%、L.B3%混入。
第３層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・塊(φ2~10㎜)少量混入。
第４層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒15%、L.B(φ2~15㎜)混入。
第５層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・塊(φ2~5㎜)少量混入。
第６層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒20%、L.B(φ2~20㎜)混入。
第７層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒・塊(φ2~10㎜)少量混入。
第８層	黄褐色土	10YR5/8	
第９層	褐　色　土	10YR4/6	ローム粒15%、L.B少量混入。
第10層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒25%、L.B(φ2~20㎜)15%混入。
第11層	褐　色　土	10YR4/6	ローム粒・塊(φ2~10㎜)7%混入。
第12層	褐　色　土	10YR4/6	ローム粒・塊少量混入。
第13層	暗褐色土	10YR3/4	
第14層	褐　色　土	10YR4/6	粘土質。
第15層	褐　色　土	10YR4/6	上部に粘土混入。ローム粒・塊微量混入。
第16層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒10%、L.B(φ2~20㎜)混入



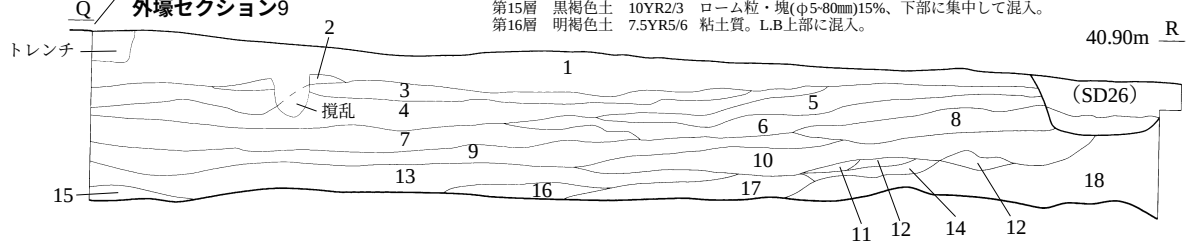
外壕堆積土　セクション7

第１層	鈍い黄褐色土	10YR4/3	硬い。ローム粒7%混入。
第２層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒・塊(φ1~50㎜)少量混入。
第３層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒・塊(φ1~8㎜)少量混入。
第４層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量混入。
第５層	暗褐色土	10YR3/4	L.B(φ1~8㎜)10%混入。
第６層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒少量混入。
第７層	暗褐色土	10YR3/3	L.B(φ1~60㎜)15%混入。
第８層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒微量混入。
第９層	褐　色　土	10YR4/6	ローム粒・塊少量混入。
第10層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒少量混入。
第11層	鈍い黄褐色土	10YR5/4	ローム粒・塊(φ1~15㎜)7%混入。
第12層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・塊(φ1~30㎜)少量混入。
第13層	褐　色　土	10YR4/4	L.B(φ1~30㎜)20%混入。
第14層	明黄褐色土	10YR6/8	軟らかい。
第15層	明黄褐色土	10YR6/6	締まり、粘性あり。粘土塊(φ1~100㎜)混入。
第16層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒・塊(φ1~40㎜)20%混入。
第17層	明黄褐色土	10YR6/6	粘土主体。
第18層	暗褐色土	10YR3/3	L.B(φ1~40㎜)少量混入。
第19層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム質。
第20層	鈍い褐色土	7.5YR6/6	粘土主体。下方に粘土塊25%。
第21層	褐　色　土	10YR4/6	粘土主体。下方に黄褐色土が水平に堆積。



外壕堆積土　セクション8

第１層	褐　色　土	10YR4/6	ローム粒・塊(φ1~20㎜)少量混入。
第２層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・塊(φ3~40㎜)少量混入。
第３層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・塊微量混入。
第４層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・塊(φ4~10㎜)微量混入。
第５層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒・塊(φ1~10㎜)微量混入。
第６層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・塊(φ3~6㎜)10%、上部に集中して堆積。
第７層	黒褐色土	10YR2/2	セクション9の3層に対応
第８層	黒褐色土	10YR2/3	セクション9の4層に対応
第９層	黒褐色土	10YR2/2	セクション9の7層に対応。
第10層	暗褐色土	10YR3/4	セクション9の9層に対応。
第11層	褐　色　土	10YR4/4	L.B(φ10~70㎜)、粘土塊下部に混入。
第12層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・塊(φ4~30㎜)15%混入。
第13層	褐　色　土	10YR4/6	ローム粒・塊(φ2~10㎜)10%混入。粘土塊混入。
第14層	黄褐色土	10YR5/6	ローム質。
第15層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・塊(φ5~80㎜)15%、下部に集中して混入。
第16層	明褐色土	7.5YR5/6	粘土質。L.B上部に混入。



外壕堆積土　セクション9

第１層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・塊10%混入。粘土塊混入。
第２層	暗褐色土	10YR3/4	
第３層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒・塊(φ1~7㎜)15%混入。
第４層	黒褐色土	10YR2/2	
第５層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒7%混入。
第６層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒5%混入。
第７層	黒褐色土	10YR1.7/1	
第８層	褐　色　土	10YR4/4	ローム質。ローム粒・塊(φ1~10㎜)15%混入。
第９層	暗褐色土	10YR2/3	
第10層	暗褐色土	10YR2/3	褐色ローム全体的に20%、ローム粒・塊15%混入。
第11層	黄褐色土	10YR5/6	
第12層	明褐色土	7.5YR5/8	ローム質。
第13層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒・塊25%混入。褐色土40%混入。
第14層	褐　色　土	10YR4/6	ローム30%混入。
第15層	褐　色　土	7.5YR4/6	粘土質。暗褐色土15%混入。
第16層	褐　色　土	10YR4/4	粘土質。L.B(φ5~30㎜)10%混入。
第17層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒40%混入。
第18層	褐　色　土	10YR4/4	黄褐色土10%、ローム粒3%、粘土2%混入。

0　S＝1/60　2m

図52　壕跡セクション（2）

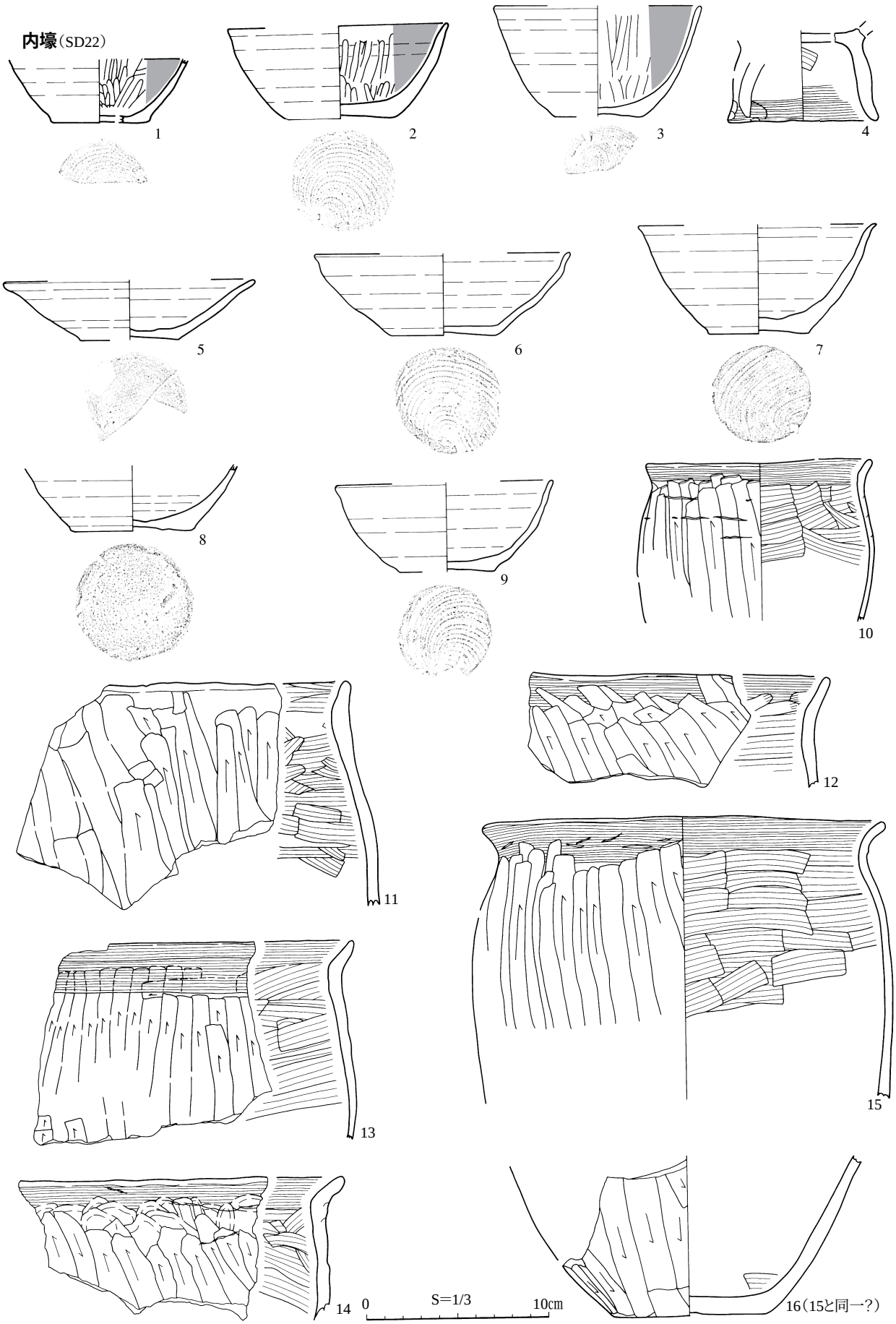


図53　壕跡出土遺物（1）

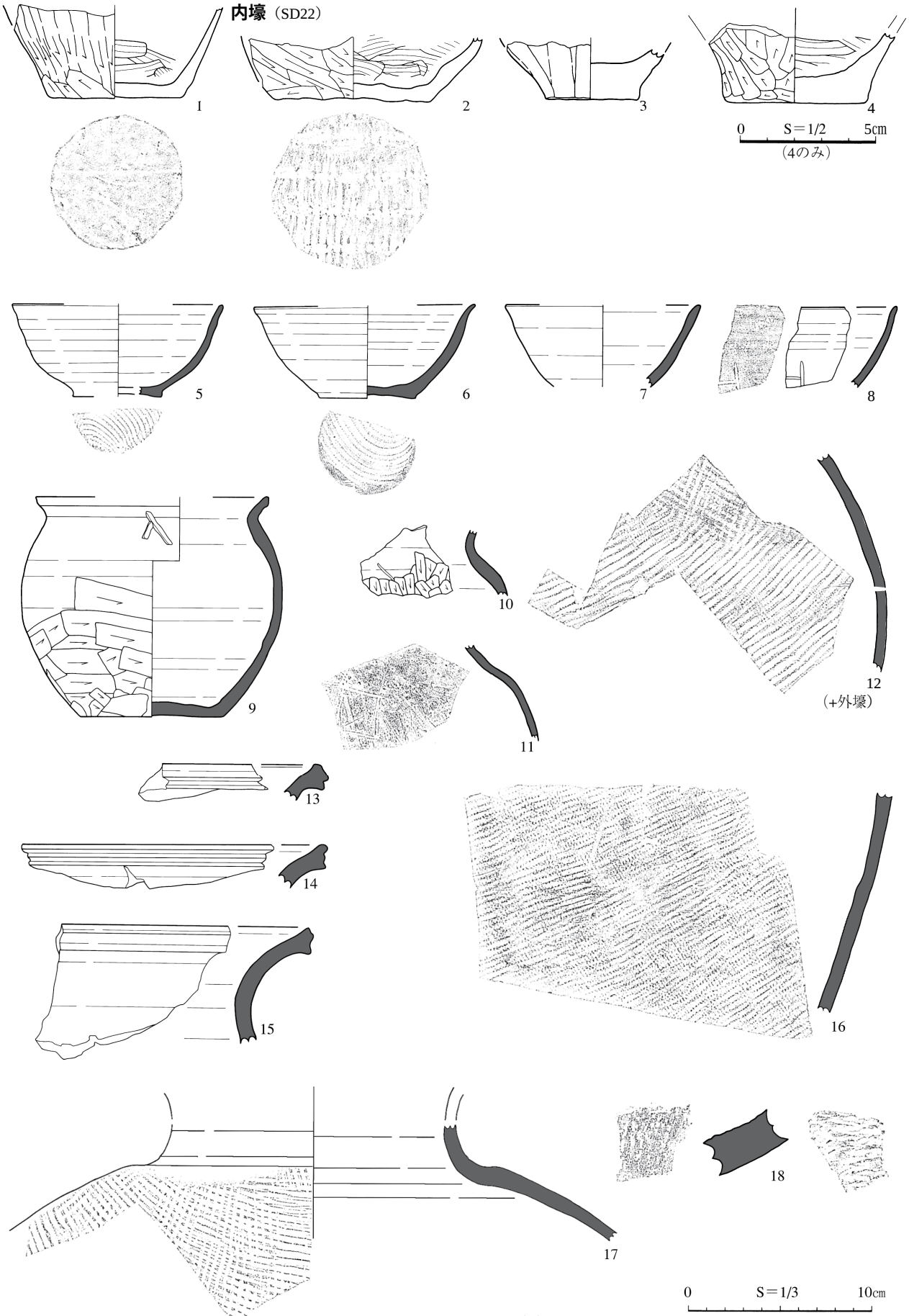

内壕（SD22）
1
2
3
4
0 S＝1/2 5cm
（4のみ）
5
6
7
8
9
10
11
12
（+外壕）
13
14
15
16
17
18
0 S＝1/3 10cm

図54　壕跡出土遺物（2）

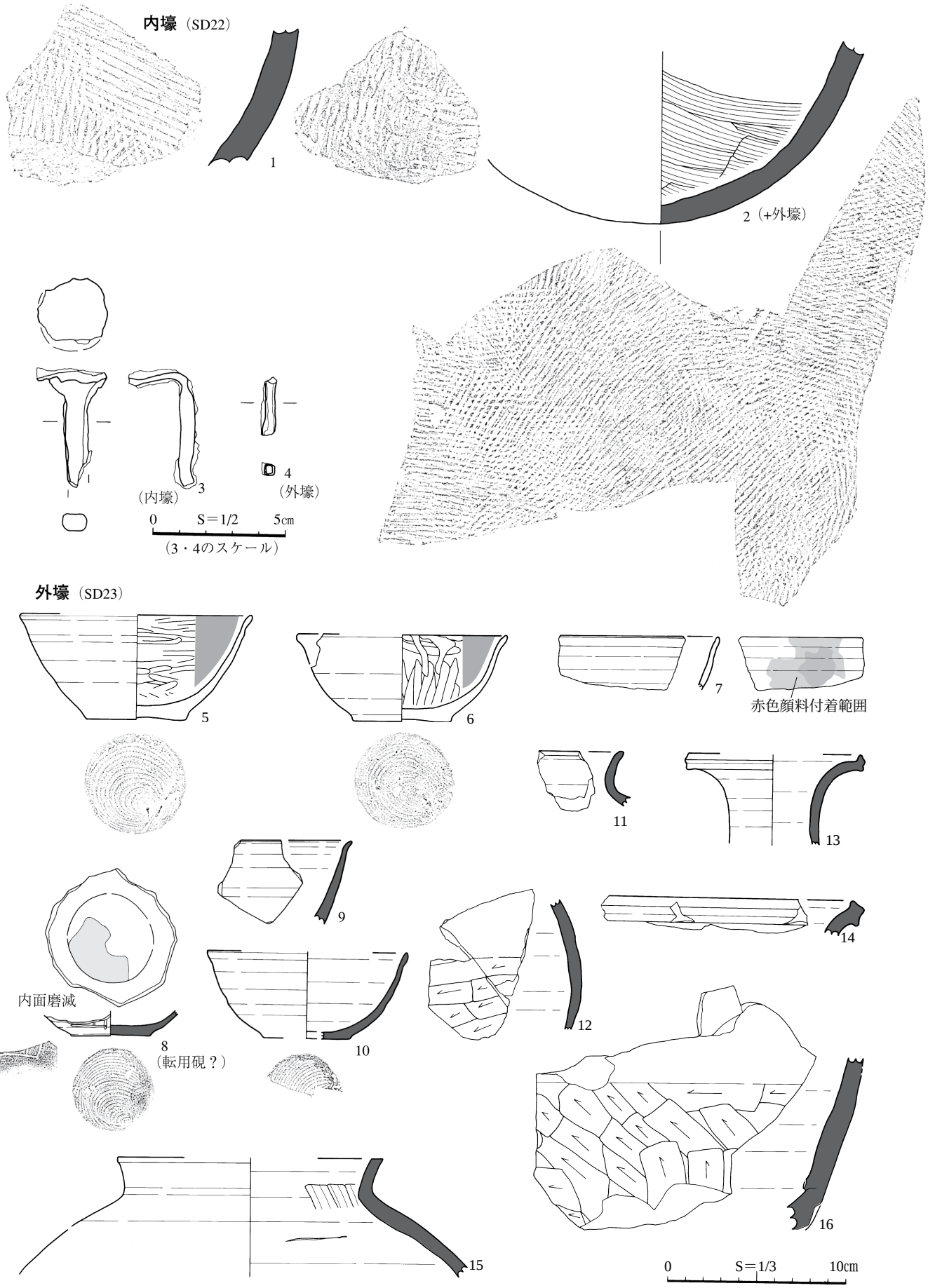

内壕（SD22）
1
2（+外壕）
3
（内壕）
4
（外壕）
0　S＝1/2　5㎝
（3・4のスケール）
外壕（SD23）
5
6
7
赤色顔料付着範囲
11
13
9
14
内面磨滅
8
（転用硯？）
10
12
15
16
0　S＝1/3　10㎝

図55　壕跡出土遺物（3）

第２節　竪穴住居跡

第１号住居跡（ＳＩ01）（図56・57）

［位置と確認］壕の北側、Ｎ・Ｏ－29・30グリッドに位置している。また、東壁側に掘立柱建物跡が付随する建物跡と考えられる。南側には第10号住居跡、北西側に第29号・30号・32号住居跡、北側に平安時代の第３号溝跡が隣接している。

［重複］東壁際で縄文時代の第２号住居跡と重複している。

［平面形・規模］平面形は方形で、規模は東壁5.28m、西壁5.27m、南壁5.03m、北壁5.30mで、長短軸とも5.23mである。床面積は25.79㎡である。主軸方位は北から90度東へ傾いている。

［壁・床面］基本層序の第Ⅴ層から第Ⅵ層上面まで掘り込んで構築している。壁高は東壁０～２㎝、西壁約50㎝、南壁27～38㎝、北壁約30㎝である。床面にはローム粒を含んだ褐色土の貼床を施し、全般に硬く、ほぼ平坦である。

［堆積土］５層に分層された。堆積土の大半はローム粒やロームブロックを含んだ黒褐色土で、上部に白頭山火山灰？のブロックを少量含んでいる。なお、第４層は貼床、第５層は掘り方の埋土である。

［カマド］東壁際に２基検出された。ともに壁辺のおよそ１／３のところに位置しており、ＢカマドからＡカマドへと改築が行われている。Ｂカマドは東壁南寄りの場所にあり、火床面のみの検出である。Ａカマドは東壁北寄りの場所に検出されたが、上部や右袖に耕作時の撹乱を受けていて、遺存状況は良くない。灰白色粘土を主体としているが、芯材は確認できなかった。燃焼部内壁の幅は約35㎝、奥行きは65㎝である。火床面は23×32㎝の不整楕円形で、２㎝ほど窪んでいる。煙道部は検出されなかったが、半地下式の構造であったと考えられる。

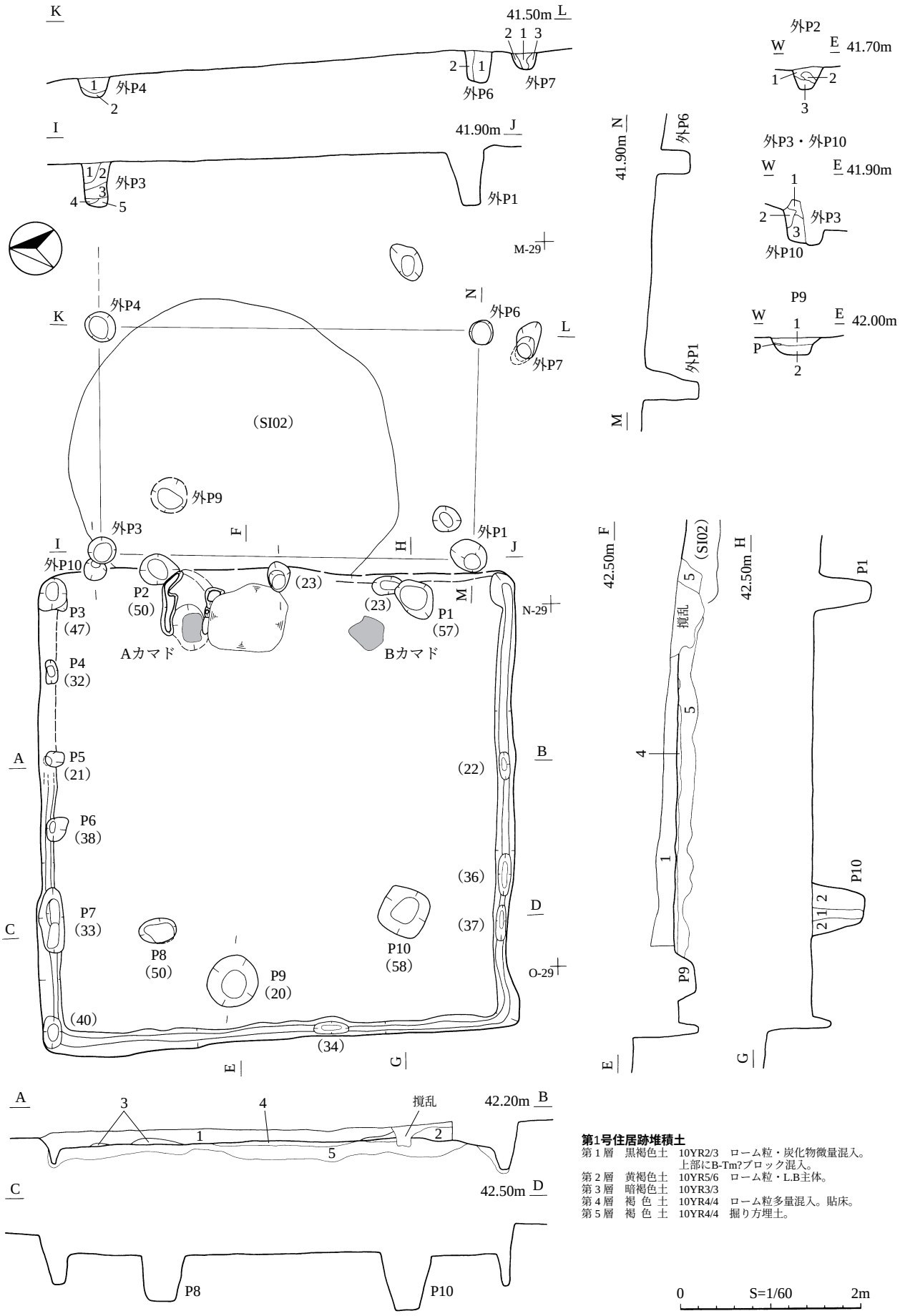
［壁溝］幅15～20㎝、深さ20～30㎝で、北壁中央から西壁及び南壁にかけて検出した。

［柱穴・ピット］床面および壁溝内から16個のピットを検出した。このうち、深さや配置からＰ１・Ｐ２・Ｐ８・Ｐ10が主柱穴と考えられる。また、北壁では70㎝～１m間隔で６個、東壁では約１m間隔で３個の壁柱穴が検出された。南壁と西壁では壁柱穴が不明瞭であるが、壁溝内に柱穴状の深い部分が何カ所かあり、壁柱穴の可能性がある。４本の主柱と壁柱穴とで建つ構造と考えられる。

［出土遺物］土師器117片（1428ｇ）、須恵器１点（69ｇ）、鉄器２点が出土した。出土数にくらべ、接合できたものはきわめて少ない。図57-１は西壁際の小さな土坑（Ｐ９）覆土から出土した須恵器坏の略完形品である。１の外面には何かの記号と思われる刻書が描かれている。また、器内面の口縁付近には煤状炭化物が見られ、灯明具として再利用された可能性がある。２は西壁際の離れた場所から出土した５片が接合した土師器坏である。鉄器は、鋤先（７）と刀子（８）が西壁際の床面から出土した。このほか、縄文時代前期の土器破片1037点（11,634ｇ)や石器24点（石匙、石篦、異形、削器、剥片等、石鋸、半円状扁平打製石器等）が出土した。

［掘立柱建物跡］カマドのある東壁側に検出したが、耕作による削平と東側が傾斜面で一段低くなっていたことから、西側部分しか検出できなかった。

［小結］竪穴住居に掘立柱建物が併設された建物跡と考えられる。堆積土中に見られた白頭山火山灰の堆積状況から、少なくとも10世紀中葉以降と思われる。（畠山）



第1号住居跡堆積土

第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒・炭化物微量混入。
　　上部にB-Tm?ブロック混入。
第２層　黄褐色土　10YR5/6　ローム粒・L.B主体。
第３層　暗褐色土　10YR3/3
第４層　褐 色 土　10YR4/4　ローム粒多量混入。貼床。
第５層　褐 色 土　10YR4/4　掘り方埋土。

0　S=1/60　2m

図56　第1号住居跡

P9堆積土
第 1 層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム粒少量混入。
第 2 層　黄褐色土　10YR5/6　ローム粒多量混入。

P10堆積土
第 1 層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒多量混入。
第 2 層　褐 色 土　10YR4/6　ローム粒少量混入。

外P2堆積土
第 1 層　黒褐色土　10YR2/2　L.B微量混入。
第 2 層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒多量混入。
第 3 層　黒 色 土　10YR2/1　褐色土混入。

外P3堆積土
第 1 層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒混入。
第 2 層　暗褐色土　10YR3/3　L.B混入。
第 3 層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒混入。
第 4 層　明褐色土　7.5YR5/6　ローム質。
第 5 層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒混入。

外P4堆積土
第 1 層　黒褐色土　10YR2/2
第 2 層　黒褐色土　10YR2/2　L.B少量混入。

外P6堆積土
第 1 層　黒褐色土　10YR2/2
第 2 層　黒 色 土　10YR2/1　L.B多量混入。

外P7堆積土
第 1 層　黒 色 土　10YR1.7/1　L.B少量混入。
第 2 層　黒 色 土　10YR2/1
第 3 層　黒 色 土　10YR2/1

外P10堆積土
第 1 層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒混入。
第 2 層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒多量混入。
第 3 層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒少量混入。

Aカマド堆積土
第 1 層　黒褐色土　10YR2/3　焼土微量混入。
第 2 層　暗赤褐色土　5YR3/6　粘土塊混入。
第 3 層　鈍い黄褐色土　10YR4/3　粘土粒微量混入。
第 4 層　暗褐色土　10YR3/3　粘土塊。
第 5 層　暗褐色土　10YR3/3　やや軟らかい。
第 6 層　褐 色 土　10YR4/4　粘土塊。
第 7 層　鈍い黄褐色土　10YR4/3　粘土塊。袖。
第 8 層　黒褐色土　10YR2/3　焼土微量混入。

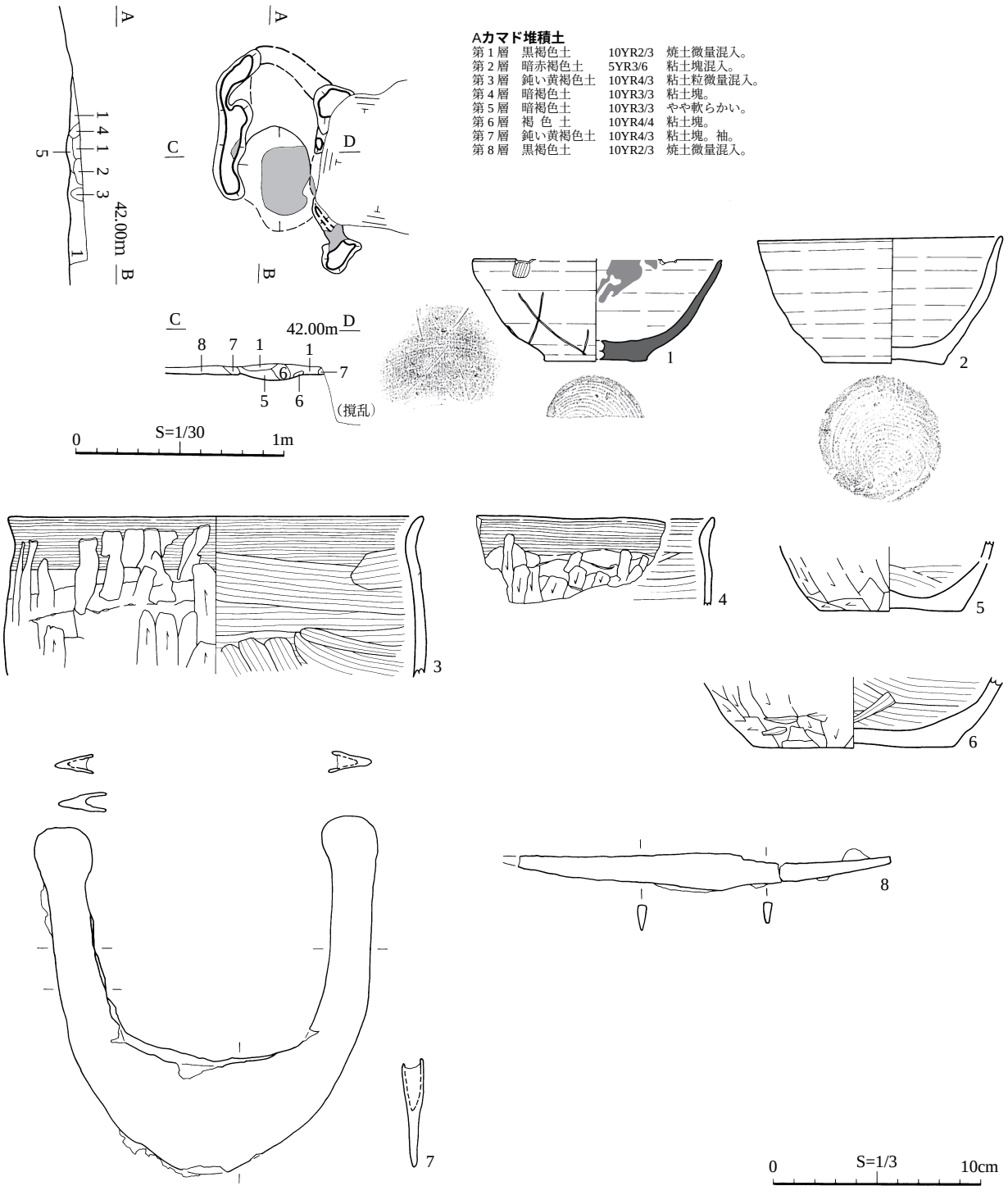


図57　第1号住居跡 カマドと出土遺物

第３号住居跡（ＳＩ03）（図58～61）

［位置・確認］調査区南側で壕の内側、Ｒ～Ｔ－17～19グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より方形プランとして確認した。

［重複］第24号土坑より古い。

［平面形・規模］平面形は方形である。規模は東壁7.4m、西壁7.4m、南壁7.6m、北壁7.6mである。また、南壁の東側から、張り出し部が検出された。張り出し部の規模は東壁1.2m、西壁1.0m、南壁2.9mである。軸長は南北軸が7.4mで、張り出し部を含めると約8.59mになる。東西軸は7.3mである。床面積は約53.80㎡で､張り出しを含めると57.11㎡である｡主軸方位は真北から東に約125度傾いている。

［壁・床面］壁高は東壁側が最も低く20㎝で、西壁50㎝、南壁40㎝、北壁40㎝である。床面は、基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。さらに、東壁寄りの床面上から薄い貼り床が検出されており、床面が２面あることを確認した。

［堆積土］暗褐色土を主体にして15層に分層された。第５層中には白頭山火山灰（肉眼観察による）がブロック状に混入している。第13層は壁溝、第14層は貼り床、第15層は掘り方層である。

［カマド］東壁の南側で、壁辺の約１／４の所より検出された。堆積土は崩落粘土や崩落焼土を主体に27層に分層された。第８層が火床面、第９～17層は袖の構築材、第18～22層は掘り方層になる。また、第23～25層は壁溝を埋め戻した層と考えられ、第26、27層は古段階の火床面と考えられる。構築材に使用されたと思われる粘土は、燃焼部内に堆積するほか、燃焼部の手前側に多く拡がっている。カマドの右側より砂鉄、左側より灰の拡がりが検出された。砂鉄は20×30㎝の不整形範囲で、灰は径30㎝程の円形範囲で拡がっている。

袖は左右検出されており、遺存状態は良好である。両袖共に幅20×105㎝、高さ約10㎝の規模で残存している。袖の堆積状況より、カマドは、床面に直接粘土を盛るのではなく、ローム質土や暗褐色の土で土台を作ってから、にぶい黄橙色の粘土を盛り構築している状況が伺える。また、袖内から土師器片が数点出土しており、芯材に用いられたと考えられる。

火床面は２面検出された。火床面１は45×50㎝の円形範囲で、約５㎝の深さで被熱し、火床面２は、15×35㎝の不整形範囲で、３㎝の深さで被熱している。火床面２は右袖下から検出されており、位置をずらしてカマドが作り替えられた可能性が考えられる。燃焼部規模は55×120㎝で、底面は煙道口までほぼ平坦で、煙道口で約10㎝の高さで立ち上がっている。煙道は検出されなかったが残存部から判断して、煙道の短い半地下式の構造と推測される。支脚等は検出されなかった。燃焼部の手前より、30×90㎝、深さ約５㎝で落ち込む施設が検出された。前庭部と考えられる。

火床面直上には天井部の崩落と考えられる焼土が堆積しており、これの直上から、土師器坏、甕の破片、須恵器甕の破片がまとまって出土した。特に須恵器甕の破片は敷かれたような状況で出土しており、カマドが崩落した際に廃棄されたものと考えられる。また、火床面付近に集中していることから祭祀を意識して遺棄した可能性も考えられる。

［壁溝］底面を全周している壁溝が検出された。規模は幅15～30㎝、深さ10～20㎝である。

［柱穴・ピット］床面から27個の小穴が検出された。位置、規模などからＰ１～Ｐ４が主柱穴になると考えられ、いずれも柱痕が確認された。柱痕は他にＰ５・６・８・27から検出されている。Ｐ27の底面付近から焼土及び炭化物が検出された。検出状況から廃棄されたと考えられる。規模は開口部が

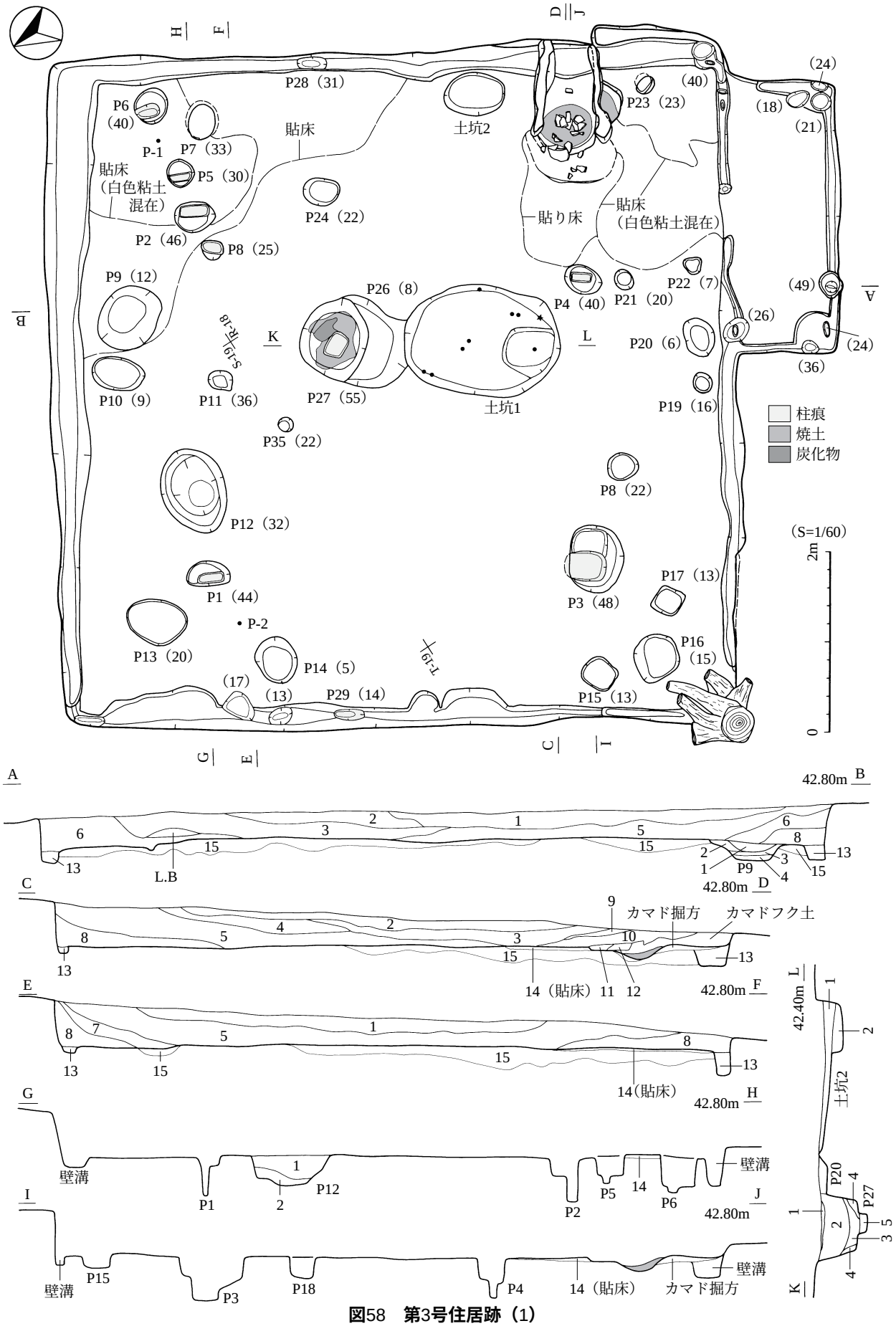

P28（31）
P6（40）
P-1
P7（33）
貼床
土坑2
P23（23）
（40）
（24）
（18）
（21）
貼床（白色粘土混在）
P5（30）
P24（22）
貼り床
貼床（白色粘土混在）
P2（46）
P8（25）
P9（12）
P26（8）
P4（40）
P21（20）
P22（7）
（49）
（26）
（24）
P20（6）
（36）
P10（9）
P11（36）
P27（55）
土坑1
P19（16）
P35（22）
柱痕
焼土
炭化物
P8（22）
P12（32）
（S=1/60）
2m
0
P17（13）
P1（44）
P3（48）
P-2
P13（20）
P16（15）
P14（5）
（17）
（13）
P29（14）
P15（13）
42.80m
L.B
カマド掘方
カマドフク土
14（貼床）
42.40m
土坑2
壁溝
P1
P12
P2
P5
P6
P20
P27
P15
P3
P18
P4
14（貼床）
カマド掘方

図58　第3号住居跡（1）

第3号住居跡　堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/4	ローム塊、ローム粒少量混入
第２層	褐　色　土	10YR4/4	ローム塊少量混入、ローム粒微量混入
第３層	暗褐色土	10YR3/4	ローム塊少量混入、黒色土ブロック微量混入
第４層	褐　色　土	10YR4/6	ローム塊少量混入、炭化物微量混入
第５層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊少量混入、B-Tmブロック状に少量混入、粘土ブロック、炭化物微量混入
第６層	暗褐色土	10YR3/3	ローム塊多量混入、黒色土ブロック少量混入
第７層	褐　色　土	10YR4/6	ローム粒少量混入、粘土ブロック微量混入
第８層	褐　色　土	10YR4/4	ローム塊、粘土ブロック少量混入
第９層	褐　色　土	10YR4/6	ローム粒、炭化物微量混入
第10層	褐　色　土	10YR4/4	焼土粒、白色粘土ブロック微量混入
第11層	暗褐色土	10YR3/4	粘土ブロックと焼土ブロックの混在層
第12層	暗褐色土	10YR3/3	粘土ブロック多量混入、須恵器包含層
第13層	暗褐色土	10YR3/4	ローム塊、炭化物微量混入
第14層	暗褐色土	10YR3/3	焼土粒、白色粘土ブロック微量混入
第15層	暗褐色土	10YR3/4	周溝、粘土ブロック、ローム塊少量混入
第16層	黄褐色土	10YR5/6	貼り床層、本層下位に黒色土層が薄く堆積する
第17層	明黄褐色土	10YR6/8	掘り方、ローム塊、粘土ブロック多量混入

P12　堆積土

第１層	黄褐色土	10YR5/6	ローム塊、粘土ブロック少量混入
第２層	明黄褐色土	10YR6/6	粘土ブロック多量混入

P26　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量混入

P27　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR3/2	ローム塊微量混入
第２層	褐　色　土	10YR4/4	粘土とロームの混合土
第３層	黒　色　土	10YR2/1	焼土と炭化物の廃棄層
第４層	褐　色　土	10YR4/6	ローム粒微量混入
第５層	黄褐色土	10YR5/6	

P9　堆積土

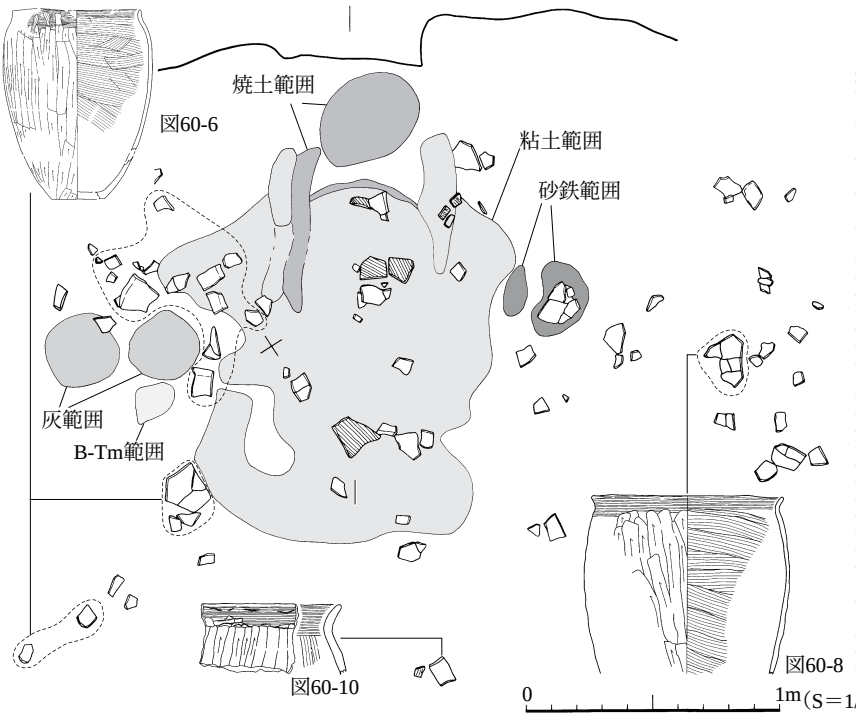
第１層	黄褐色土	10YR5/6	ローム粒微量混入
第２層	暗褐色土	10YR3/4	B-Tmブロック混入
第３層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒、炭化物粒微量混入

土坑1　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR3/2	ローム塊少量混入、粘土ブロック微量混入

土坑2　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR3/2	ローム塊少量混入、粘土ブロック微量混入
第２層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒少量混入、炭化物微量混入



カマド　堆積土

第１層	褐　色　土	10YR4/6	
	崩落土。明褐色土(7.5YR5/8)の崩落焼土含む。		
第２層	明褐色土	7.5YR5/8	
	崩落焼土		
第３層	暗褐色土	10YR3/4	
	焼土ブロック(φ12×3㎜)		
第４層	暗褐色土	10YR3/3	
	粘土塊少量、焼土ブロック、ローム粒微量		
第５層	明黄褐色土	10YR6/6	
	ローム粒多量、焼土粒、炭化物微量		
第６層	暗褐色土	10YR3/4	ローム、焼土粒多量
第７層	明褐色土	7.5YR5/8	崩落焼土
第８層	赤褐色土	5YR4/8	火床面
第９層	にぶい黄橙色土	10YR7/4	袖部、白色粘土
第10層	褐　色　土	10YR4/4	袖部、ローム
第11層	褐　色　土	7.5YR4/4	袖部、被熱部分
第12層	にぶい黄橙色土	10YR6/4	
	袖部、ローム質土、白色粘土塊少量		
第13層	にぶい黄橙色土	10YR7/4	袖部、白色粘土
第14層	暗褐色土	10YR3/4	袖部、白色粘土粒
第15層	褐　色　土	10YR4/4	袖部、ローム質土
第16層	暗褐色土	10YR3/4	袖部、焼土粒微量
第17層	にぶい黄橙色土	10YR7/4	袖部、白色粘土
第18層	褐　色　土	10YR4/6	掘り方、ローム質土
第19層	黒　色　土	10YR2/1	掘り方
第20層	にぶい黄橙色土	10YR6/4	掘り方、ローム質土
第21層	にぶい黄橙色土	10YR7/4	掘り方、ローム質土
第22層	褐　色　土	10YR4/6	掘り方、ローム質土
第23層	黄褐色土	10YR5/8	
	周溝の埋め戻し土、ロームとの混合土		
第24層	暗褐色土	10YR3/4	
	周溝の埋め戻し土、ローム塊少量		
第25層	褐　色　土	10YR4/6	周溝の埋め戻し土
第26層	赤褐色土	5YR4/8	古段階カマドの火床面
第27層	褐　色　土	10YR4/4	古段階カマドの掘り方

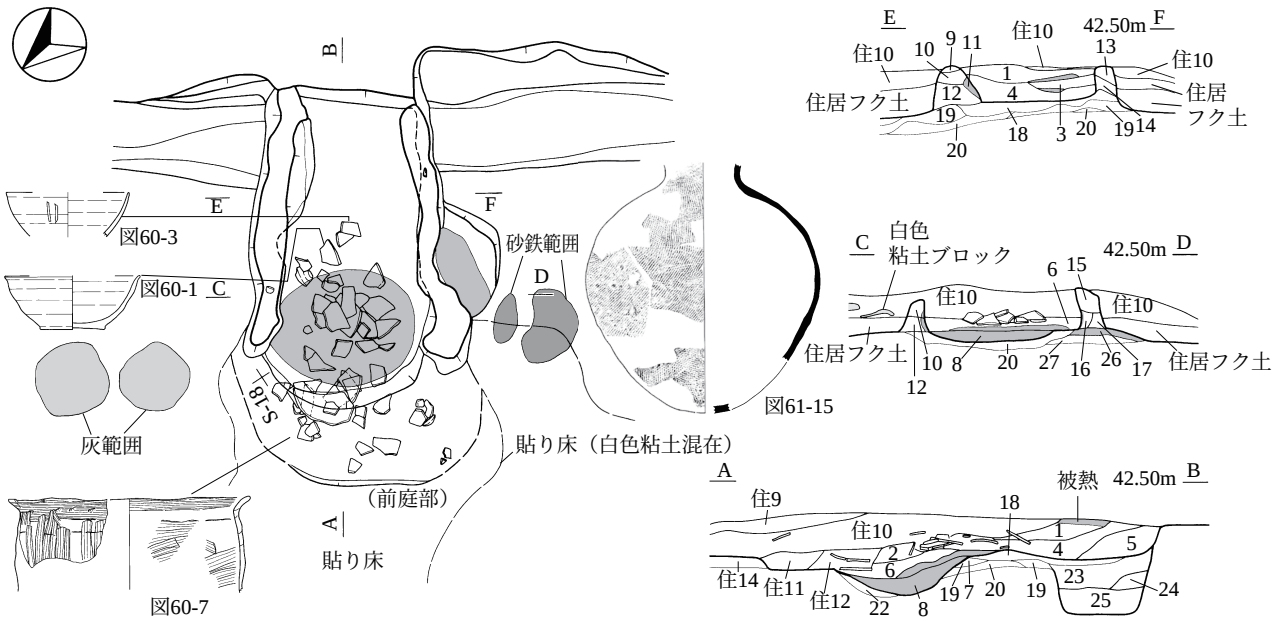


図59　第3号住居跡（2）

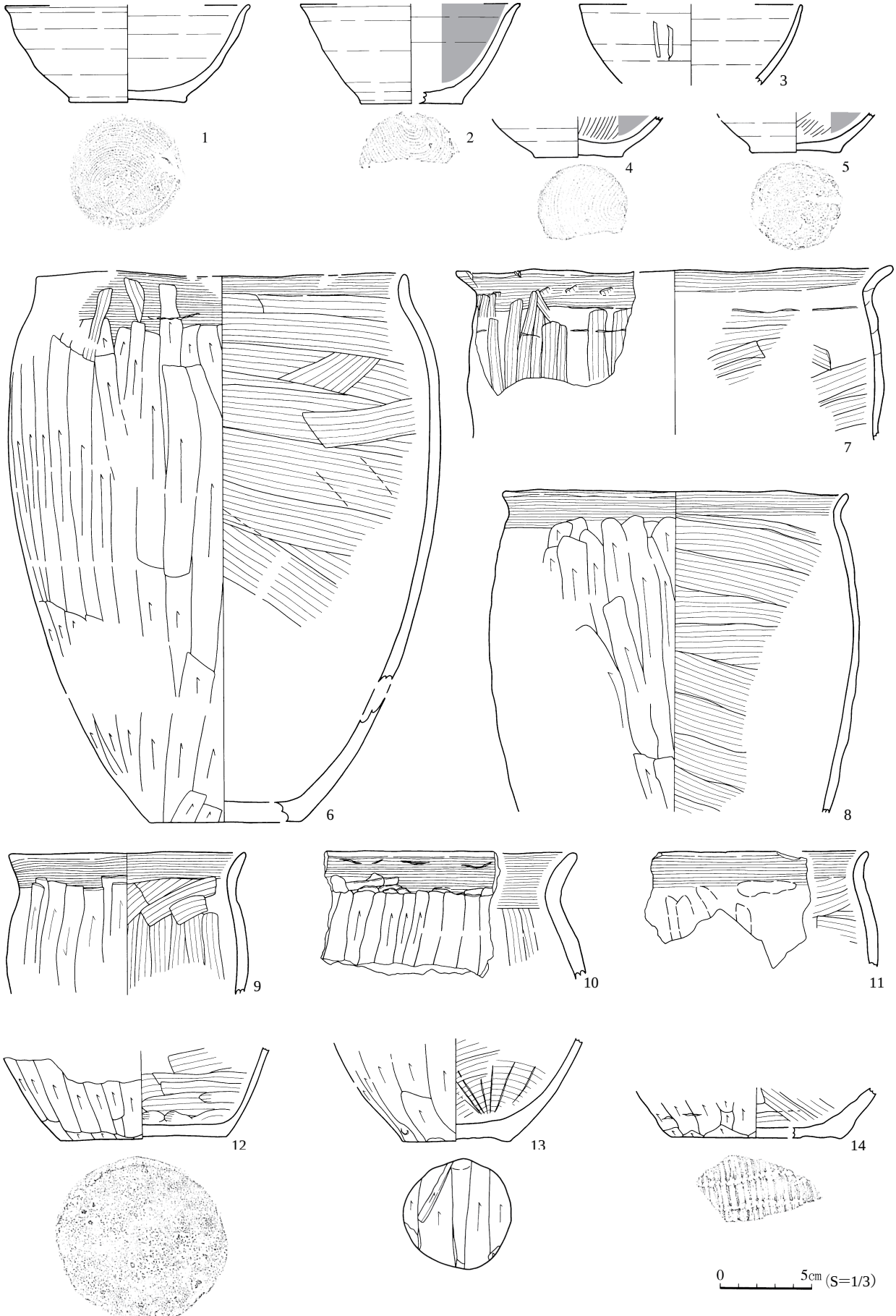


図60　第3号住居跡　出土遺物（1）

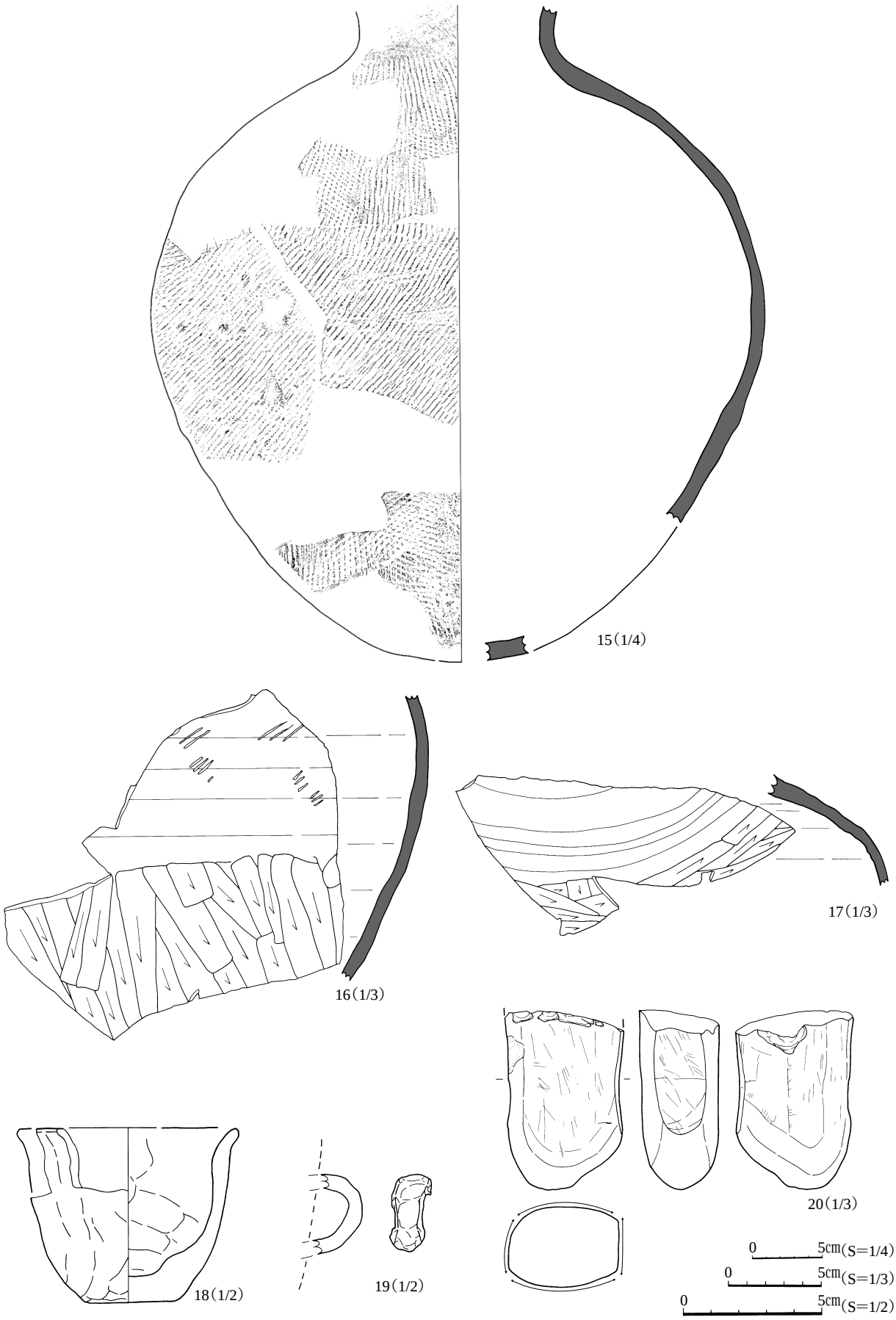


図61　第3号住居跡　出土遺物（2）

70×90㎝、深さ55㎝である。周溝から12個の小穴が検出された。Ｐ28・29は位置、深さから対応すると考えられる。

［その他の施設］床面上より２基の土坑が検出された。土坑１は床面ほぼ中央付近から検出された。規模は、開口部120×170㎝、底面110×160㎝で、深さは15㎝である。土坑２はカマド脇から検出されており、規模は開口部45×65㎝、底面35×60㎝で、深さは約６㎝である。

［出土遺物］土師器片493点（7.6kg）、須恵器片102点（5.0kg）、ミニチュア土器の破片３点、刀子片と思われる鉄製品１点、鉄滓１点、砥石１点、被熱した礫５が出土した。遺物の出土状況で特筆されるのは、火床面付近でまとまって出土した遺物である。折り重なった状況で出土している須恵器甕は、すべて同一個体である。復元した結果、内壕、外壕（SD22・23）や、近接している第１号竪穴遺構（SK19）より出土したものと接合する他、壕跡近辺の遺構外出土のものとも接合している。しかし、復元率は５割弱で非常に悪く、破片数も全体形の復元に至るには絶対数が足りない。カマド祭祀に用いて余った破片を廃棄している可能性が考えられる。この須恵器を産地同定分析にかけており、五所川原産との結果を得ている。図60-１・３は須恵器と同レベルから、７は須恵器の下から出土したものでヘラ記号が記されている。

４は床面直上、５はＰ27の堆積土から出土した土師器の坏で、内面に黒色処理が施されている。８は土師器の甕で、カマド周辺に散在する土器が接合したものである。図61-17は須恵器の壺で、胴部にケズリが施されている。産地同定分析より五所川原産との結果を得ている。18はミニチュア土器で、手づくねである。19は耳付土器の耳部分である。20は砥石で、細粒凝灰岩を素材としている。このほかに、縄文時代前期、後期、弥生時代の土器片が183点（1842.5ｇ）、石器15点（石匙・削器・剥片・半円状扁平打製石器・砥石等）が出土している。

［小結］白頭山火山灰と思われる火山灰がブロック状に混入しており、住居の構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。床面の状況、カマドの火床面、小穴数などからから、建て替え若しくは、改築が行われた可能性が考えられる。壕跡及び竪穴遺構出土の遺物と接合しており、これらと極めて近い時期に埋没した可能性も考えられる。火床面付近より遺物が折り重なった状況で出土しており、カマド祭祀の可能性も考えられる。（小山）

第４号住居跡（ＳＩ04）（図62・63）

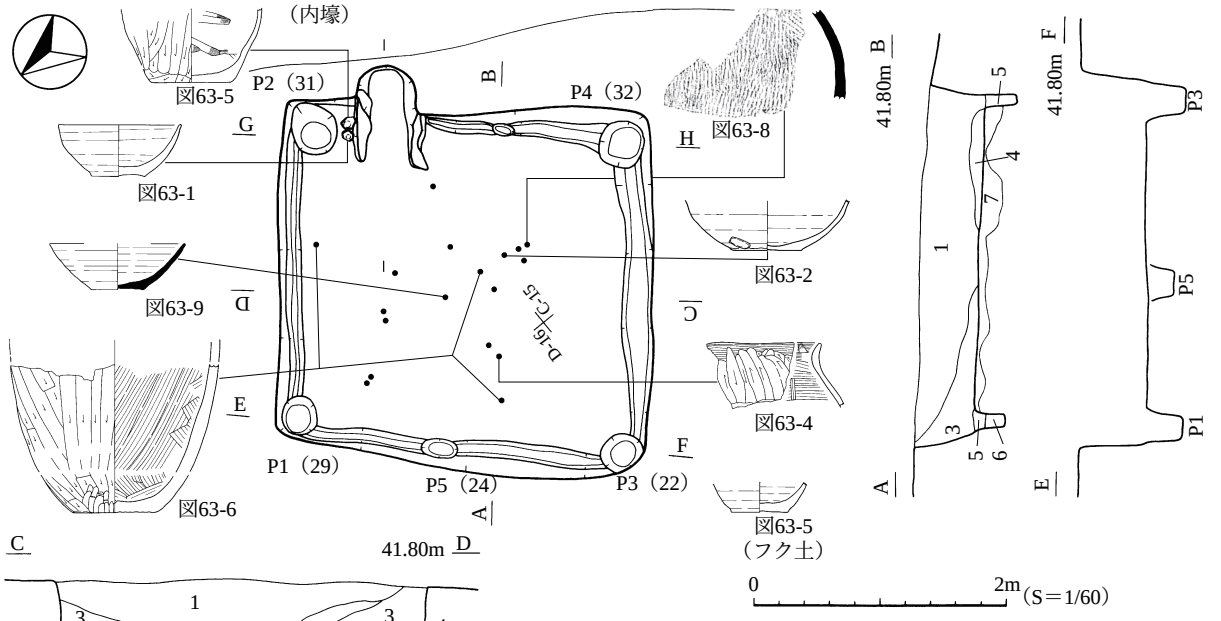
［位置・確認］調査区南側で壕の内側にあたるＮ・Ｏ－15・16グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より方形プランとして確認した。

［重複］第26号住居跡と重複し本遺構の方が新しい。

［平面形・規模］平面形は方形で、規模は、東壁2.8m、西壁2.9m、南壁は2.8m、北壁2.6mである。軸長は南北軸が2.8m、東西軸が2.6mとなり、南北軸が長軸になる。床面積は約7.46㎡である。主軸方位は真北から東に130度傾いている。

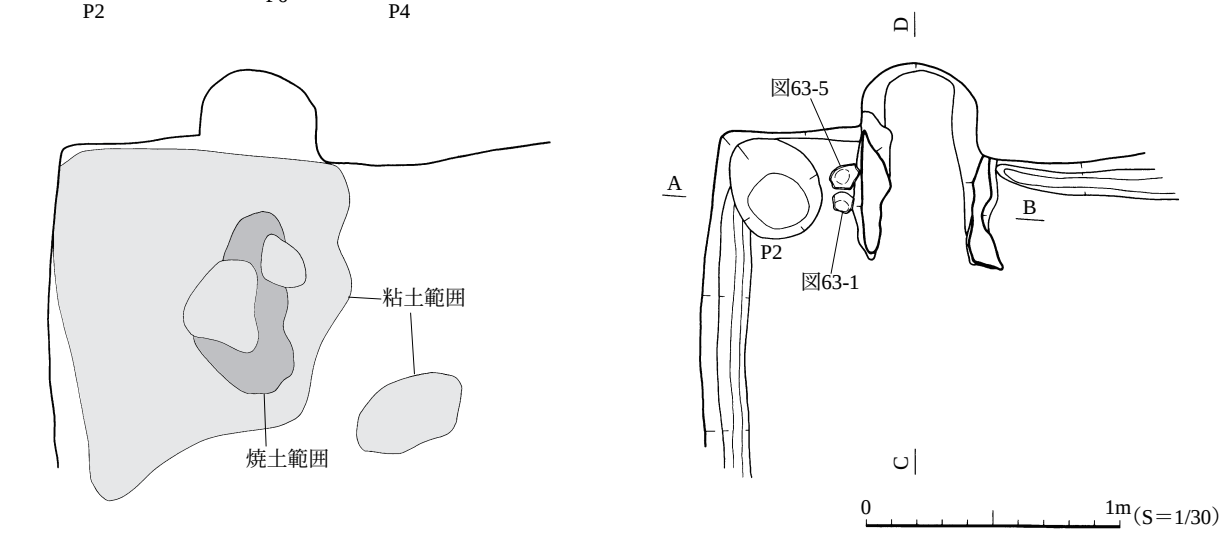
［壁・床面］壁高はどの部分も約45㎝である。床面は基本層序第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、黄褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。

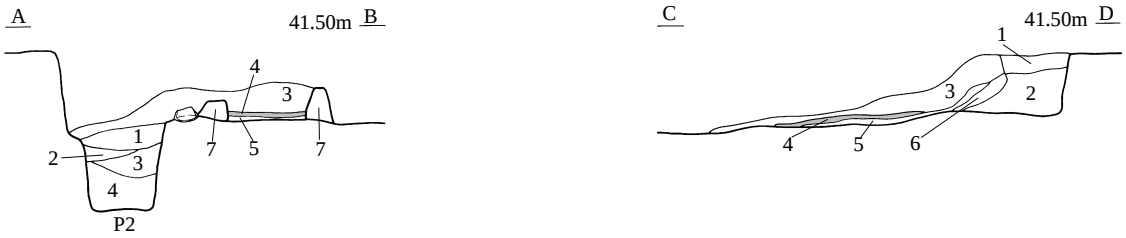
［堆積土］黒褐色土を主体として７層に分層された。第１～４層にはロームブロックが含まれ、第１層には白頭山火山灰が粒状に混入している。（火山灰分析では、白頭山苫小牧テフラ起源のガラスの



第4号住居跡　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊、ローム粒少量、B-Tm粒微量
第２層	黒褐色土	10YR2/3	ローム塊、ローム粒微量
第３層	褐　色　土	10YR4/6	ローム塊多量
第４層	暗褐色土	10YR3/4	ローム塊微量
第５層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊微量、周溝覆土
第６層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒微量、周溝覆土
第７層	明黄褐色土	10YR6/6	ロームとの混合土、貼り床層





カマド　堆積土

第１層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒微量
第２層	褐　色　土	10YR4/6	ローム粒微量
第３層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	粘土層
第４層	暗褐色土	7.5YR3/4	崩落焼土層
第５層	黒　色　土	10YR2/1	炭化物と灰が多量に混入
第６層	黄褐色土	10YR5/6	粘土層
第７層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	袖部

P2　堆積土

第１層	褐　色　土	10YR4/4	ローム塊多量
第２層	褐　色　土	10YR4/6	ローム塊、ローム粒多量
第３層	黄褐色土	10YR5/6	ローム塊少量
第４層	褐　色　土	10YR4/4	ローム塊少量

図62　第4号住居跡

ほかに、十和田八戸テフラ起源のガラスの混入が認められており、汚染されたものであることが明らかになっている）。

［カマド］東壁の北側で、壁辺の約１／３の所より検出された。半地下式のカマドである。にぶい黄褐色の粘土が住居の北東端に、115×135㎝の不整形範囲で拡がりをみせ確認した。主にカマドの左側に多く拡がっており、構築材は左側の方に廃棄もしくは崩落したものと考えられる。堆積土は褐色土を主体にして７層に分層された。

袖はにぶい黄褐色の粘土で作られており、芯材等は検出されなかった。袖の遺存状態は比較的良好で、両袖共に10×40㎝の規模で残存している。煙道は約30㎝の長さで壁外に伸びている。燃焼部から煙道の底面は平坦で、煙り出しの部分でほぼ垂直に立ち上がっている。火床面は検出されず、正確な燃焼部規模は不明であるが、袖の範囲から推定すると、35×50㎝になると思われる。

［壁溝］カマドを除いて巡っている壁溝が検出された。規模は幅15～25㎝、深さ15～30㎝である。

［柱穴・ピット］６個の小穴が検出された。深さ、配置からＰ１・２・３・４が主柱穴と考えられる。Ｐ５・６は壁溝のほぼ中央に位置することから対応して機能したものと考えられる。

［出土遺物］土師器片66点（2.4kg）、須恵器片７点（263ｇ）が出土している。遺構間の接合状況としては６・10が第２号竪穴遺構（ＳＫ22）と、９は内壕（ＳＤ22）より出土したものと接合している。また、接合はしていな８は胎土の状況より、第６号住居跡より出土した図68-21と同一個体と考えられる。１と５は左袖脇より粘土に覆われた状況で出土した。９は産地同定分析により、五所川原産と

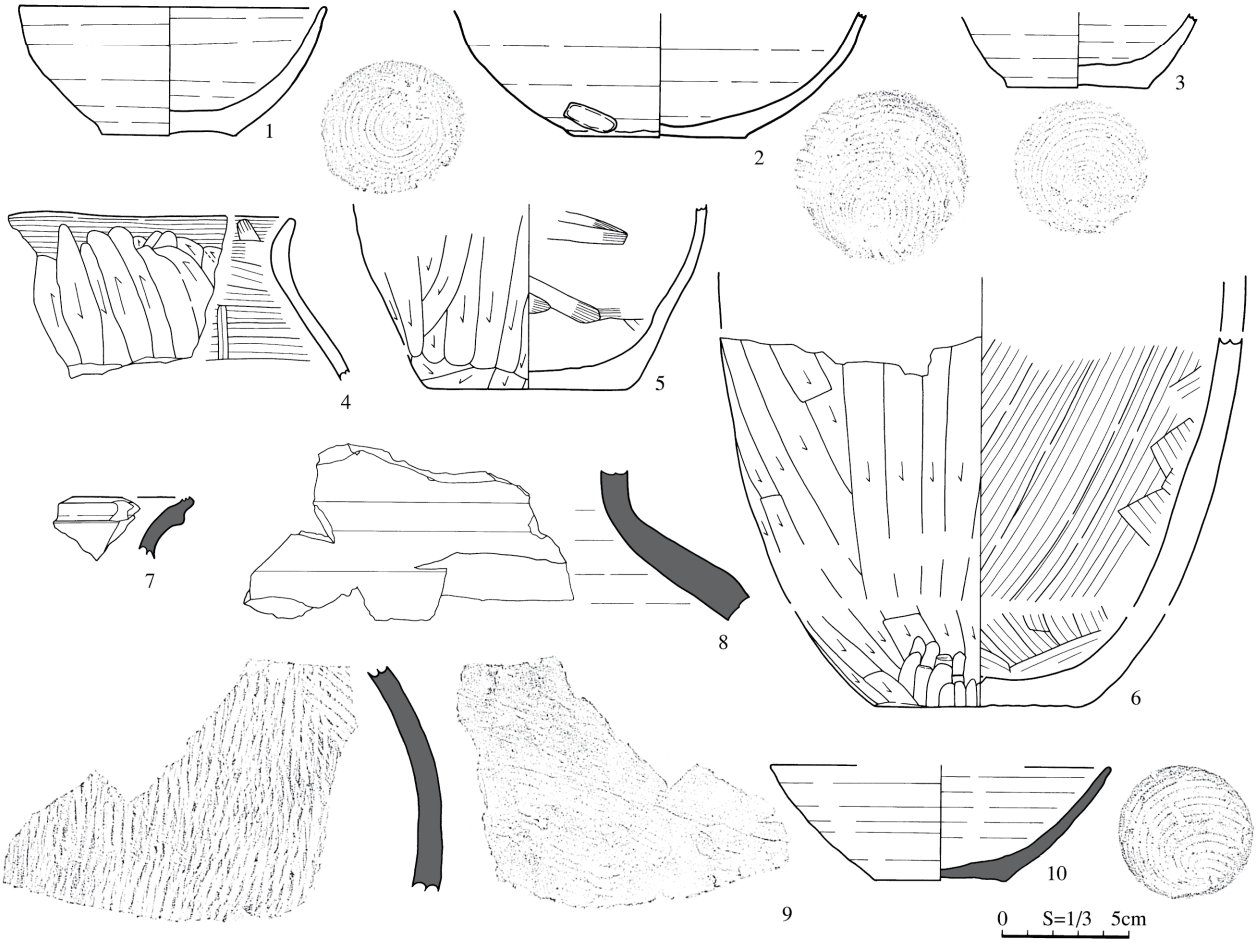


図63　第4号住居跡　出土遺物

の結果を得ている。その他に縄文時代前期の土器片11点（60ｇ）と、異形石器が出土している。
［小結］汚染された白頭山火山灰がブロック状に混入しており、住居の構築時期は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

第５号住居跡（ＳＩ05）（図64）
［位置・確認］調査区南側で壕の内側、Ｏ－14・15グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より方形プランで確認した。また、住居確認時に東壁の南側より袖と思われる粘土範囲を確認した。
［重複］本遺構の東側は現代の攪乱により壊されている。
［平面形・規模］平面形は長方形で、規模は、攪乱の影響を受けていない西壁が2.3m、南壁は2.8mである。軸長は南北軸が2.2m、東西軸が2.8mとなり、東西軸が長軸になる。現存している床面積は約（5.35㎡）である。主軸方位は真北から東に150度傾いている。
［壁・床面］壁高は東壁14㎝、西壁20㎝、南壁５㎝、北壁30㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、黄褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。
［堆積土］黒褐色土を主体に６層に分層された。第１～３層にはローム塊が含まれている。第４・５層はカマド付近に見られる土層で、第４層は粘土層である。第６層は掘り方層になる。
［カマド］南東壁の南側で、壁辺の約１／３の所より検出された。褐色の粘土が袖の両側に不整形な範囲で拡がり検出された。堆積土は暗褐色土を主体にして４層に分層された。燃焼部の堆積土中に崩落した粘土や焼土は含まれておらず、崩落する前に意図的に天井部を壊した可能性も考えられる。
　袖は明黄褐色の粘土で作られており、芯材等は検出されなかった。袖の遺存状態は比較的良好で、右袖は壁から15×45㎝の規模で、左袖は13×35㎝の規模で残存している。火床面は検出されず、正確な燃焼部規模は不明であるが、袖の範囲から推定すると、35×40㎝になると思われる。煙道は検出されなかったが残存部から判断して、煙道の短い半地下式の構造と推測される。
［壁溝、その他の施設］検出されなかった。
［柱穴・ピット］８個の小穴が検出された。深さ、配置からＰ１・４・８が主柱穴と考えられる。
［出土遺物］土師器片22点（967ｇ）、鉄製の鋤先１点が出土している。１・２は右袖脇から出土しており、２は土師器皿？、１は土師器坏である。３は土師器の小型甕で、カマドより若干離れた位置より正立した状態で出土した。掘り方等は検出されず、意図的に埋設した可能性は低いと思われる。その他に、縄文時代前期中葉、後期前葉の土器片が（106ｇ）、石器は削器、半円状扁平打製石器の破損品がそれぞれ１点ずつ出土している。
［小結］出土遺物から構築年代は10世紀代と考えられる。（小山）

第６号住居跡（ＳＩ06）（図65～68）
［位置・確認］調査区南側で壕の内側、Ｐ～Ｒ－16・17グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より方形プランで確認した。また、住居確認時に東壁の南側よりカマドと思われる焼土や粘土ブロックの不整形範囲を確認した。
［重複］第１号、第３号竪穴遺構、第20号土坑より古く、第33号溝状土坑より新しい。
［平面形・規模］平面形は方形で、規模は、東壁6.4m、西壁6.0m、南壁5.9m、北壁6.0mである。軸

長は南北軸が6.2m、東西軸が5.9mとなり、南北軸が長軸になる。床面積は約36.17㎡である。主軸方位は真北から東に約135度傾いている。

［壁・床面］壁高は、東壁15㎝、西壁15㎝、南壁10㎝、北壁15㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、黄褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。

［堆積土］黒褐色土を主体に10層に分層された。床面直上付近で、白色をした火山灰がブロック状に点在している状況を確認した。分析の結果、十和田a火山灰であることが明らかになった。

［カマド］東壁の南側で、壁辺の約１／３の所より検出された。堆積土は明褐色土を主体に５層に分層される。第１層とした焼土層は火床面と接しており崩落した焼土と考えられる。本層上位より遺物が出土しているが、住居内土坑や、ピット出土遺物と接合しており、廃棄された遺物と考えられる。第４層は袖の掘り方、第５層は掘り方となる。

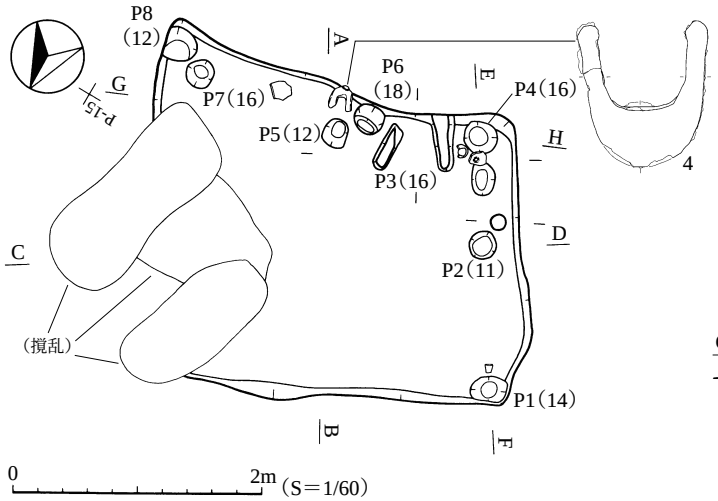
袖、煙道、支脚などは検出されず、袖の掘り方と火床面のみの検出である。火床面は不整円形で、規模は43×45㎝、被熱している厚さは５㎝である。正確な燃焼部規模は不明であるが、火床面から推定して長さは90㎝、幅は50㎝前後と推定される。燃焼部底面は平坦でなく、煙道口で若干落ち込んでいる。煙道は検出されなかったが残存部から判断して、煙道の短い半地下式の構造と推測される。また、本カマドは粘土の出土が少ない。遺構確認時に崩落焼土を検出しており、削平されている可能性も考えられるが、天井部が直下に崩落しているにもかかわらず、粘土材が検出されず、崩落した焼土のみが検出されたこと、焼土直上に遺物が廃棄されていること、袖の遺存状態の悪さなどから、カマド破壊が行われ、他所へ廃棄された可能性も考えられる。

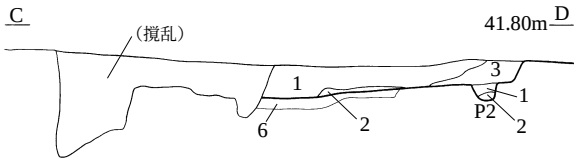
［壁溝］カマドを除いて巡っている壁溝が検出された。規模は幅20～25㎝、深さ10～25㎝である。

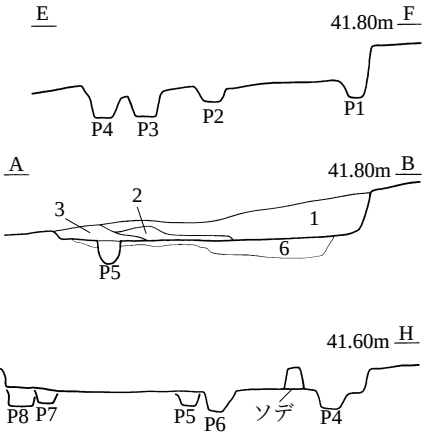
［柱穴・ピット］15個の小穴が検出された。深さ、配置からＰ１～４が主柱穴と考えられる。また、壁溝内から検出されたＰ５・Ｐ６・Ｐ14は検出位置から対応するものと考えられる。カマドの左脇には径50㎝、深さ34㎝のピットが検出されている。

［その他の施設］床面の北東隅より３基の土坑が検出された。規模及び平面形は、土坑１が開口部140×150㎝の円形で、深さ24㎝、土坑２が、100×115㎝の方形で、深さ32㎝、土坑３が開口部95×110㎝の円形で、深さ30㎝である。土坑２の堆積土中からは約4,100ｇに及ぶ大量の遺物が出土した。遺物は住居の堆積土及びカマド周辺の遺物と接合しており、同時期に廃棄されたものと考えられる。このような出土状況を見せるのは本土坑のみであり、特別な用途があった事も考えられる。

［出土遺物］土師器片639点（12.8kg）、須恵器片13点（240ｇ）、ミニチュア土器の破片３点、羽口片１点が出土している。図67-５・６は土坑２より出土した高台付坏で、内面に黒色処理が施されている。７・８はロクロ整形が施されている土師器甕である。７は土坑２より出土した土器を主体にして復元されたが、同遺構では土坑１の覆土出土遺物と、他遺構では第26号住居跡、内壕出土遺物と接合した。胴部下半に外面ケズリ、内面ナデ調整が施されている。図68-13～18は非ロクロ整形の土師器甕である。甕の器形は口縁部に最大径を持つものが多く、９のみが胴部に最大径をもつ。19はカマド周辺から出土した須恵器坏である。21は須恵器甕で、胎土分析により産地不明と判明している。接合はしなかったが、同一個体と思われるものが、第４号住居跡より出土している（図63-８）。22・23はミニチュア土器である。この他に縄文時代早期末葉、前期中葉、弥生時代前期の土器が出土している。石器では削器が３点ほど出土している。







第5号住居跡　堆積土

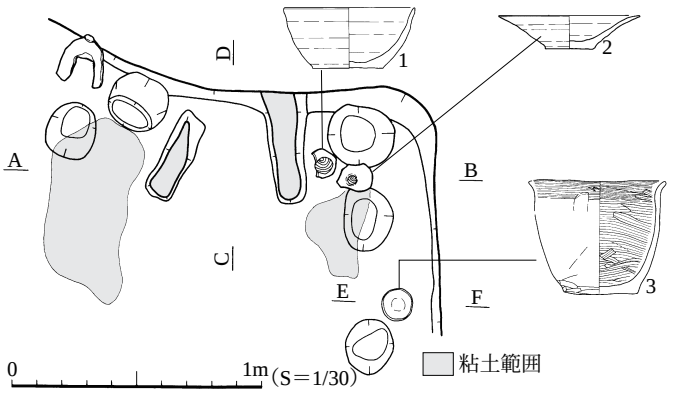
第１層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊、粘土塊、ローム粒少量混入
第２層	褐　色　土	10YR4/4	ローム質土
第３層	暗褐色土	10YR3/4	ローム塊多量、粘土ブロック少量混入
第４層	褐　色　土	10YR4/4	カマド材の廃棄粘土層
第５層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒微量混入
第６層	黄褐色土	10YR5/6	ロームとの混合土、貼り床層

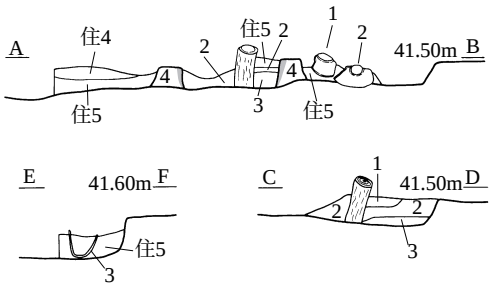
P2　堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/4	ローム塊少量混入
第２層	褐　色　土	10YR4/6	

P5　堆積土

第１層	黄褐色土	10YR5/6	ローム粒微量混入





第5号住居跡カマド　堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/4	焼土塊、ローム塊微量混入
第２層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量混入
第３層	褐　色　土	10YR4/4	ローム塊、ローム粒少量混入
第４層	明黄褐色土	10YR6/6	袖の粘土

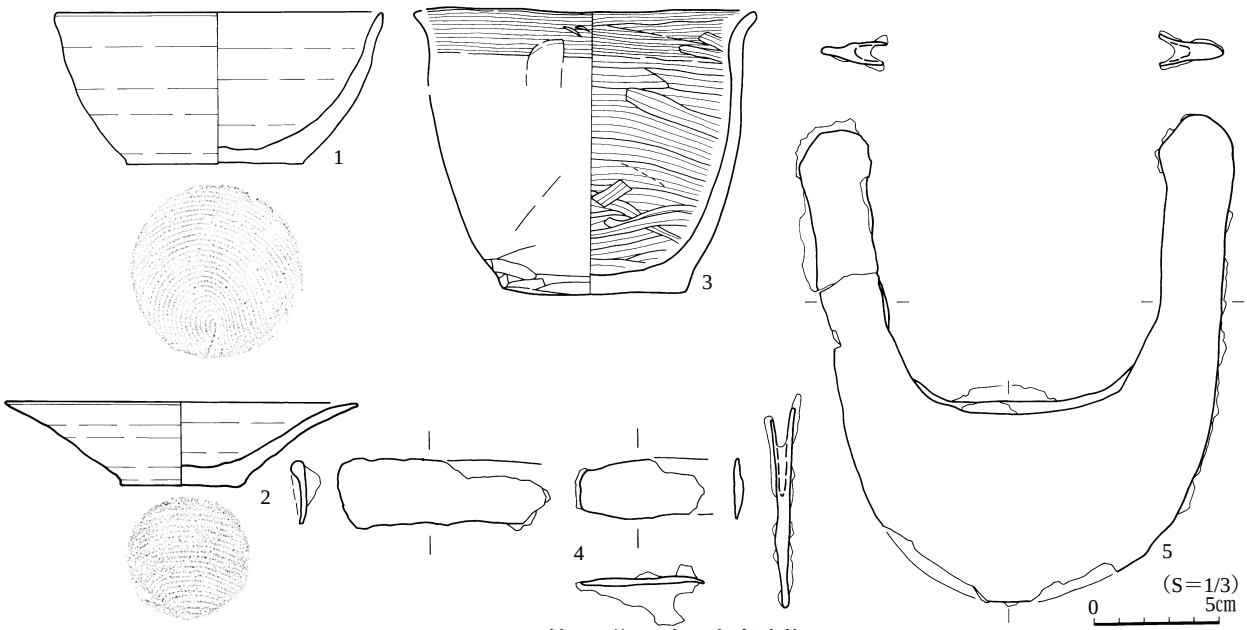
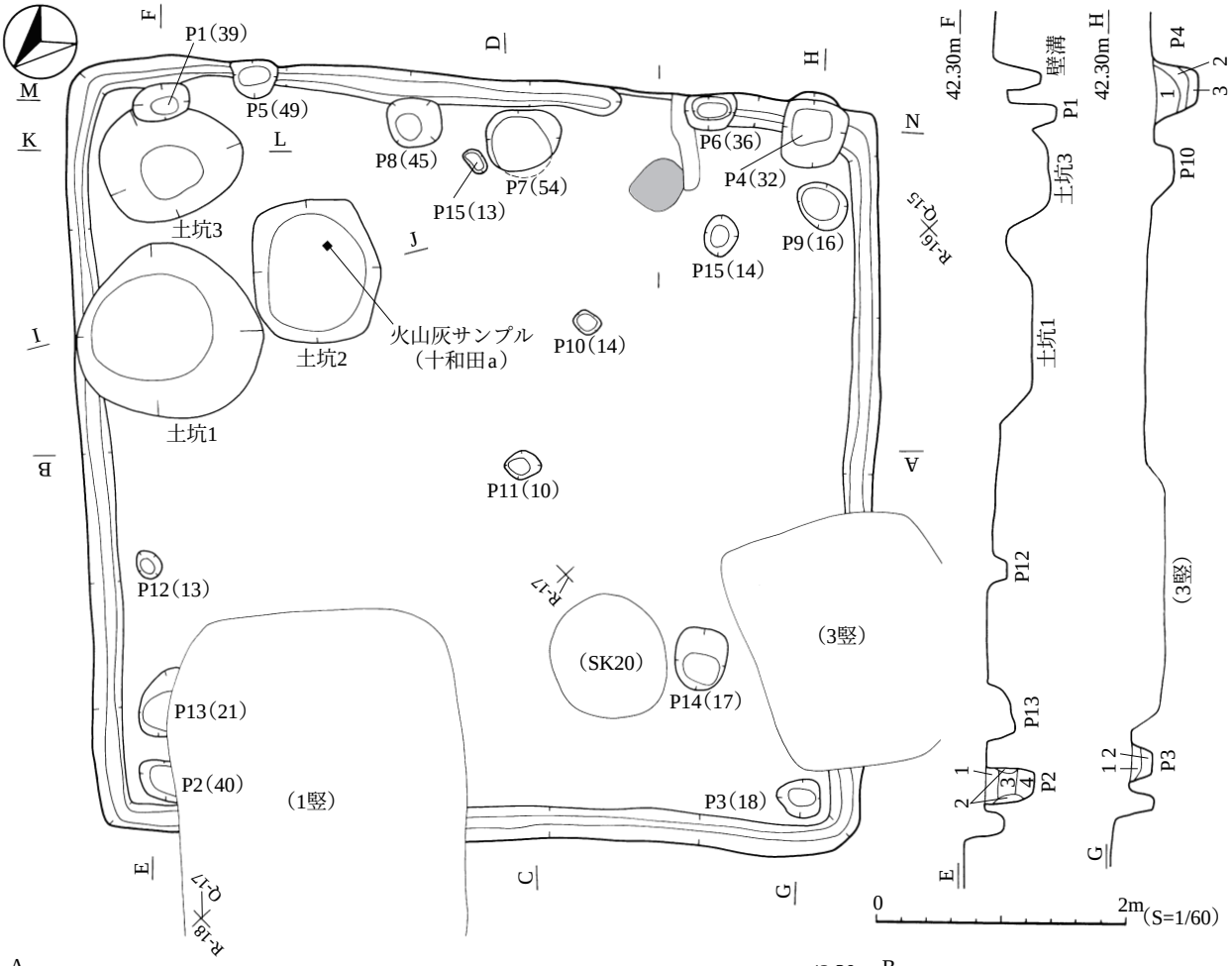
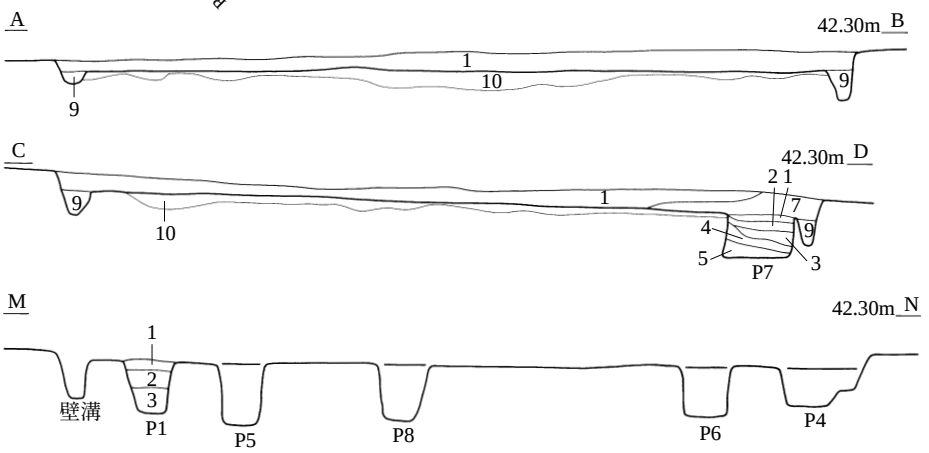
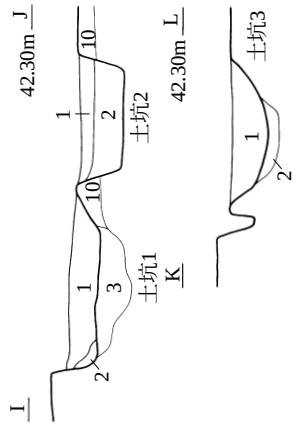


図64　第5号住居跡と出土遺物







第6号住居跡　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊、ローム粒少量 To-a火山灰ブロック状に混入
第2層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量
第3層	褐 色 土	10YR4/4	ローム粒、焼土粒微量
第4層	褐 色 土	7.5YR4/6	焼土ブロックの層
第5層	褐 色 土	10YR4/6	焼土粒多量、ローム粒微量
第6層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒微量
第7層	褐 色 土	10YR4/6	ローム主体の層
第8層	暗褐色土	10YR3/4	焼土粒多量、焼土ブロック、 粘土塊、炭化物粒少量
第9層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量
第10層	明黄褐色土	10YR6/8	ロームとの混合土、貼り床層

P1　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム塊、ローム粒少量
第2層	明黄褐色土	10YR7/6	ローム塊多量
第3層	黄褐色土	10YR5/8	ローム粒少量

P3　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第2層	黄褐色土	10YR5/6	ローム塊微量

P2　堆積土

第1層	暗褐色土	10YR3/4	ローム塊、ローム粒少量
第2層	黄褐色土	10YR5/6	ローム塊
第3層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量
第4層	黄褐色土	10YR5/8	ローム塊少量、炭化物微量

P4　堆積土

第1層	褐 色 土	10YR4/4	ローム塊、焼土粒少量
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量、ローム塊少量
第3層	黄褐色土	10YR5/6	ローム粒少量

P7　堆積土

第1層	黄褐色土	10YR5/6	ローム粒微量
第2層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒微量
第3層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量、焼土粒微量
第4層	黄褐色土	10YR5/6	ローム塊少量、炭化物微量
第5層	褐 色 土	10YR4/6	ローム塊、粘土粒少量

土坑1　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒少量、ローム塊微量
第2層	黄褐色土	10YR5/6	ローム塊多量
第3層	明黄褐色土	10YR6/6	ロームとの混合土

土坑2　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量 ローム塊少量 炭化物微量
第2層	暗褐色土	10YR3/4	焼土ブロック 焼土粒多量 炭化物少量 ローム粒少量

土坑3　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊 ローム粒多量 炭化物微量
第2層	明黄褐色土	10YR6/6	ロームとの混合土 掘り方層

図65　第6号住居跡（1）

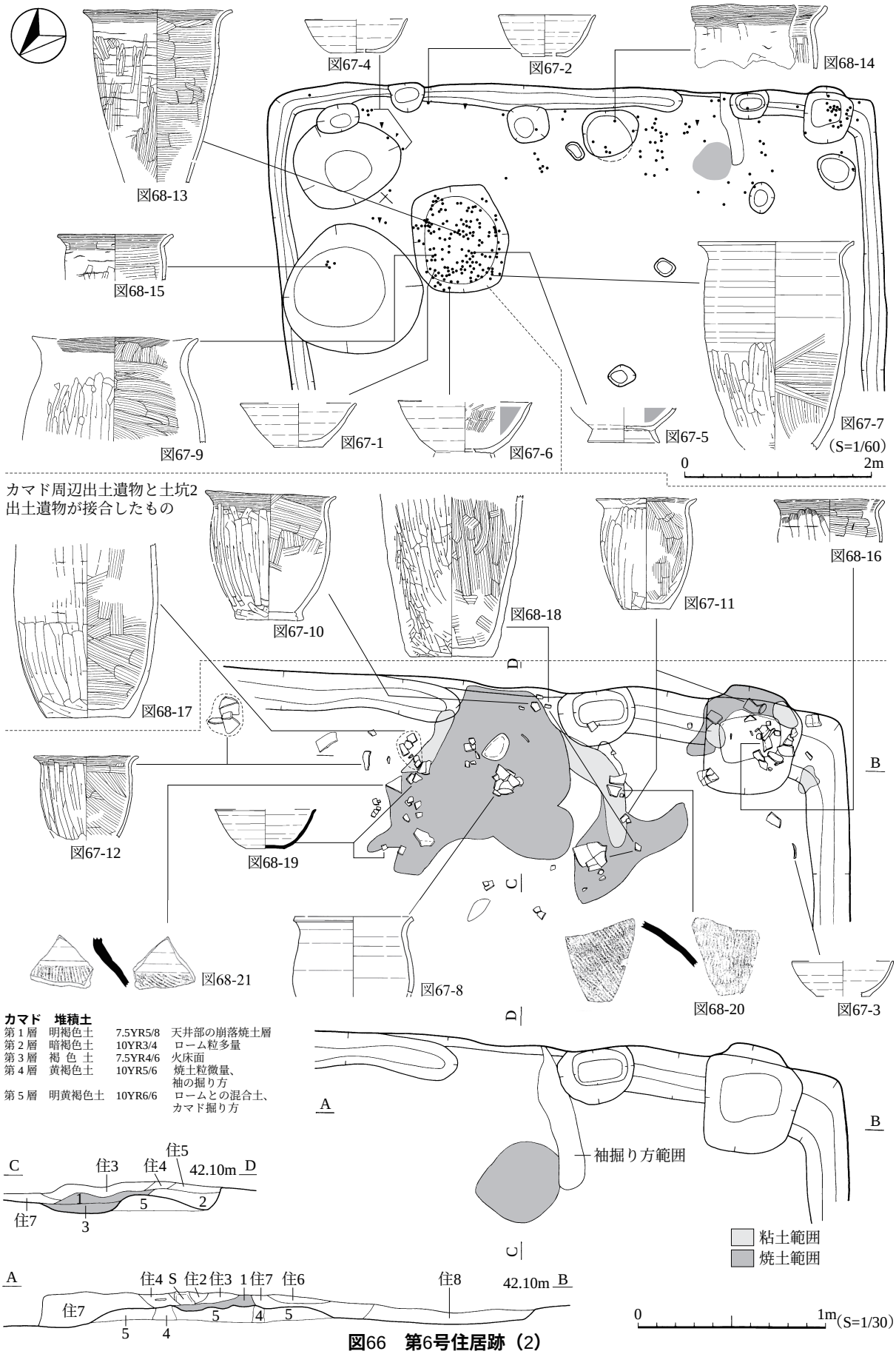


図67-4
図67-2
図68-14
図68-13
図68-15
図67-9
図67-1
図67-6
図67-5
図67-7
（S=1/60）
0
2m
カマド周辺出土遺物と土坑2
出土遺物が接合したもの
図68-16
図67-10
図68-18
図67-11
図68-17
図68-12
図68-19
図68-21
図67-8
図68-20
図67-3
D
B
C
A
袖掘り方範囲
粘土範囲
焼土範囲
0
1m（S=1/30）
カマド　堆積土
第１層　明褐色土　7.5YR5/8　天井部の崩落焼土層
第２層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒多量
第３層　褐 色 土　7.5YR4/6　火床面
第４層　黄褐色土　10YR5/6　焼土粒微量、袖の掘り方
第５層　明黄褐色土　10YR6/6　ロームとの混合土、カマド掘り方
C
住3
住4
住5
42.10m
D
住7
1
5
2
3
A
住4
S
住2
住3
1
住7
住6
住8
42.10m
B
住7
5
4
5
4
5

図66　第6号住居跡（2）

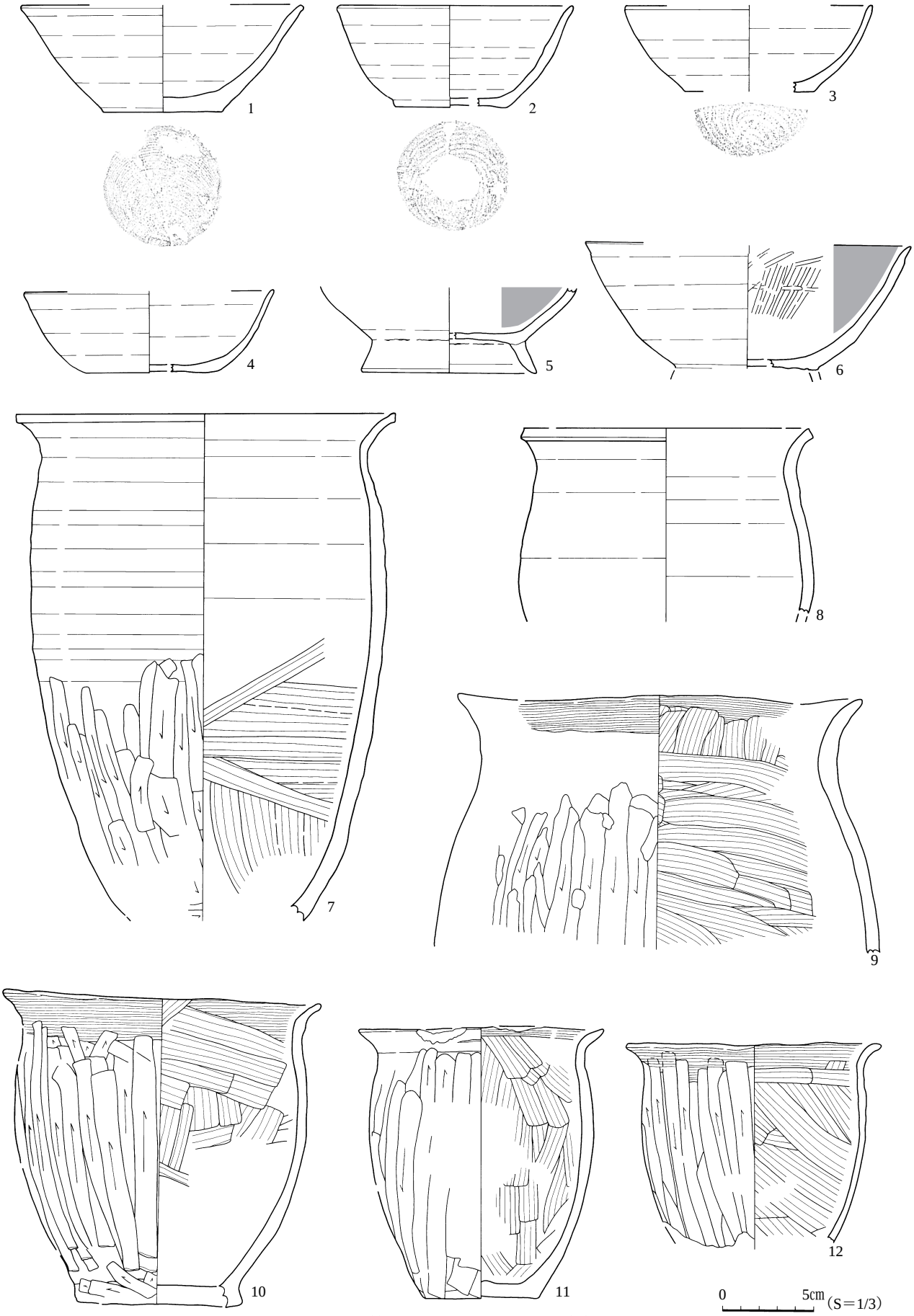


図67　第6号住居跡　出土遺物（1）

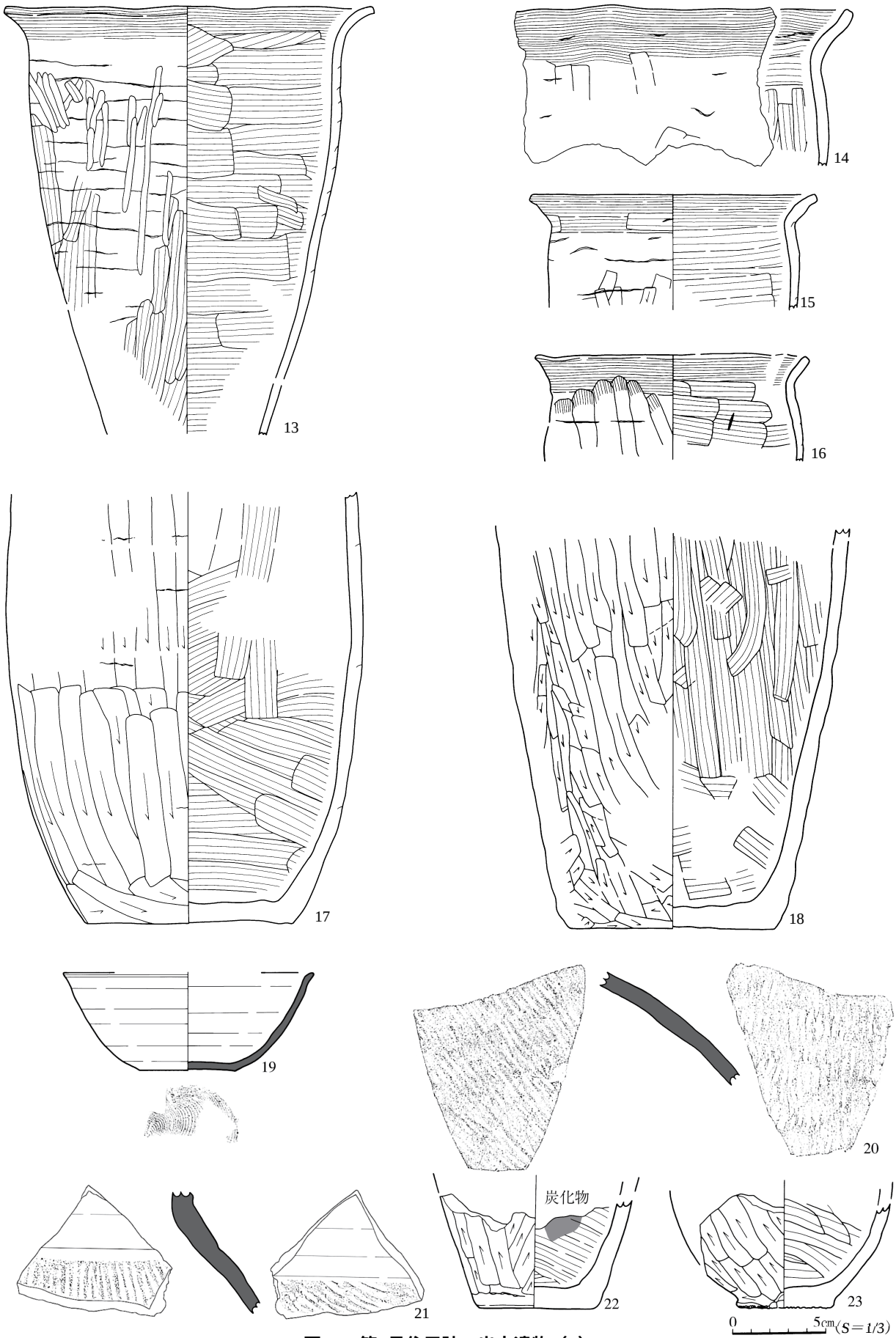


図68　第6号住居跡　出土遺物（2）

［小結］白頭山火山灰が堆積せず、十和田a火山灰のみが堆積している。このような状況は、本遺跡では数が少なく、遺跡内でも若干古めの住居跡と考えられる。内面に黒色処理が施されている高台付坏が出土していることや他の出土遺物から構築年代は９世紀後半と考えられる。（小山）

第８号住居跡（ＳＩ08）（図69）

［位置・確認］調査区南側で壕の内側、M・Ｎ－20・21グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より方形プランとして確認した。

［重複］第15号溝状土坑より新しく、第１号掘立柱建物跡より古い。

［平面形・規模］平面形は方形で、規模は、東壁3.7m、西壁3.6m、南壁は3.5m、北壁3.45mである。軸長は南北軸が3.5m、東西軸が3.25mとなり、南北軸が長軸になる。床面積は約12.45㎡である。主軸方位は真北から東に約120度傾いている。

［壁・床面］壁高は東壁35㎝、西壁50㎝、南壁45㎝、北壁35㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。

［堆積土］９層に分層された。各層共にロームブロックを多量に含み、人為堆積の状況を示している。第４・５層には白頭山火山灰（肉眼観察による）がブロック状に混入している。

［カマド］東壁の南側で、壁辺の約１／３の所より検出された。半地下式のカマドである。堆積土は崩落焼土を主体にして13層に分層された。第11層が火床面、第12層が袖部になる。崩落した焼土が燃焼部、煙道部を覆うように見られることから、天井部が直下に崩落した状況が想定される。

袖は黄褐色の粘土で作られており、芯材等は検出されなかった。袖の遺存状態は比較的良好で、両袖共に15×50㎝の規模で残存している。袖の内側に被熱し、赤変している範囲を確認した。煙道は約45㎝の長さで壁外に伸びている。煙道口のところで比高差約10㎝の段が見られるが、段の部分にローム主体の層が斜めに堆積しており、使用時はロームを盛ってスロープ状に煙道底面を整えていた可能性も考えられる。カマドの中軸線上で、燃焼部の端付近より、径15㎝の火床面が検出された。被熱している深さは約５㎝である。燃焼部規模は50×50㎝である。

［壁溝］カマドを除いて巡っている壁溝が検出された。規模は幅10～15㎝、深さ10㎝である。

［柱穴・ピット］５個の小穴が検出された。配置からＰ１・２・３・４が主柱穴と考えられる。

［出土遺物］本遺構は縄文土器の出土が多く、土師器片は13点（87ｇ）が出土したのみである。１は土師器坏で底部付近にヘラ記号が記されている。縄文時代の遺物は、前期中葉の土器が154点（２kg）、石器は削器、剥片の２点が出土している。

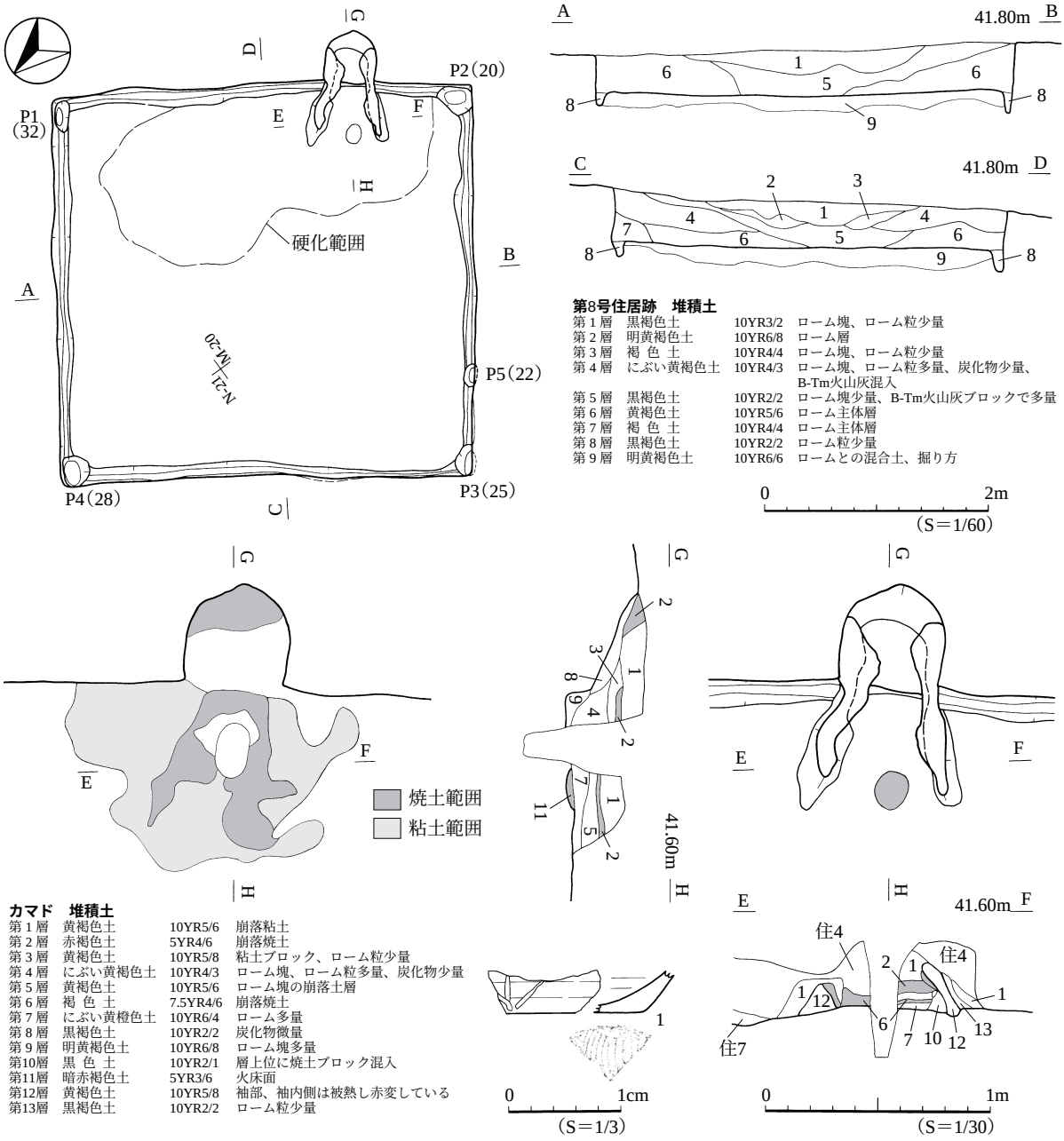
［小結］火山灰の堆積状況から、構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

第９号住居跡（ＳＩ09）（図70・71）

［位置・確認］壕の北側、内壕と外壕に挟まれたＰ－25グリッドに位置している。外壕を挟んだ北側には第10号住居跡や第１号住居跡が隣接して検出されている。

［重複］内壕と重複し、本住居跡が古い。

［平面形・規模］重複により南側の半分が失われているが、方形に近い形態と思われる。北壁が破壊されずに残っていて、その壁長は3.77mである。残存する壁長は、東壁2.40m、西壁1.38mで、残存



第8号住居跡　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR3/2	ローム塊、ローム粒少量
第２層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム層
第３層	褐 色 土	10YR4/4	ローム塊、ローム粒少量
第４層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ローム塊、ローム粒多量、炭化物少量、B-Tm火山灰混入
第５層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊少量、B-Tm火山灰ブロックで多量
第６層	黄褐色土	10YR5/6	ローム主体層
第７層	褐 色 土	10YR4/4	ローム主体層
第８層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量
第９層	明黄褐色土	10YR6/6	ロームとの混合土、掘り方

カマド　堆積土

第１層	黄褐色土	10YR5/6	崩落粘土
第２層	赤褐色土	5YR4/6	崩落焼土
第３層	黄褐色土	10YR5/8	粘土ブロック、ローム粒少量
第４層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ローム塊、ローム粒多量、炭化物少量
第５層	黄褐色土	10YR5/6	ローム塊の崩落土層
第６層	褐 色 土	7.5YR4/6	崩落焼土
第７層	にぶい黄橙色土	10YR6/4	ローム多量
第８層	黒褐色土	10YR2/2	炭化物微量
第９層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム塊多量
第10層	黒 色 土	10YR2/1	層上位に焼土ブロック混入
第11層	暗赤褐色土	5YR3/6	火床面
第12層	黄褐色土	10YR5/8	袖部、袖内側は被熱し赤変している
第13層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量

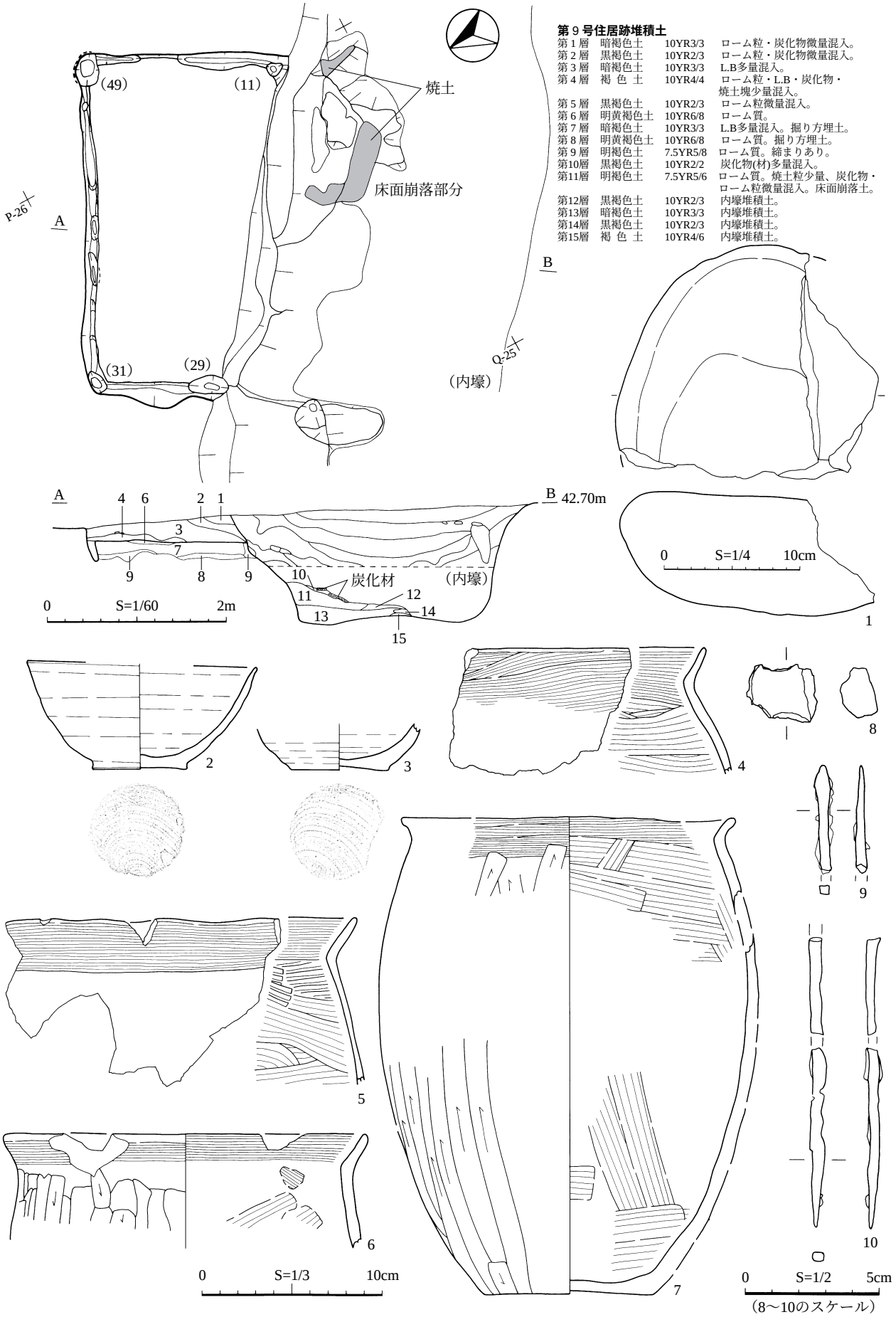
図69　第8号住居跡と出土遺物

床面積は6.61㎡であるが、12㎡前後の規模と考えられる。主軸方位は北から11度東へ傾いている。

［壁・床面］残存する西壁40㎝、北壁８～30㎝、東壁５㎝である。基本層序の第Ⅵ層上部まで掘り込んで床面を構築し、部分的にローム質の明黄褐色土を貼っている。また、床面の一部が壕に崩落している状況が見られた。

［堆積土］９層に分層された。堆積土の大半は暗褐色土と褐色土であるが、床面には炭化粒や、焼土粒の分布が薄く見られたところもある。

［カマド］検出されなかったが、壕の底面直上に、本住居の床面とカマド材と見られる焼土塊や焼土粒が堆積していた。カマドの一部が崩落したものと考えられ、火床面と思われる部分も検出された。このことから、東壁の南寄りの場所にカマドが構築されていたものと考えられる。煙道部は不明である。



第９号住居跡堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・炭化物微量混入。
第２層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・炭化物微量混入。
第３層	暗褐色土	10YR3/3	L.B多量混入。
第４層	褐 色 土	10YR4/4	ローム粒・L.B・炭化物・焼土塊少量混入。
第５層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒微量混入。
第６層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム質。
第７層	暗褐色土	10YR3/3	L.B多量混入。掘り方埋土。
第８層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム質。掘り方埋土。
第９層	明褐色土	7.5YR5/8	ローム質。締まりあり。
第10層	黒褐色土	10YR2/2	炭化物(材)多量混入。
第11層	明褐色土	7.5YR5/6	ローム質。焼土粒少量、炭化物・ローム粒微量混入。床面崩落土。
第12層	黒褐色土	10YR2/3	内壕堆積土。
第13層	暗褐色土	10YR3/3	内壕堆積土。
第14層	黒褐色土	10YR2/3	内壕堆積土。
第15層	褐 色 土	10YR4/6	内壕堆積土。

図70　第9号住居跡と出土遺物

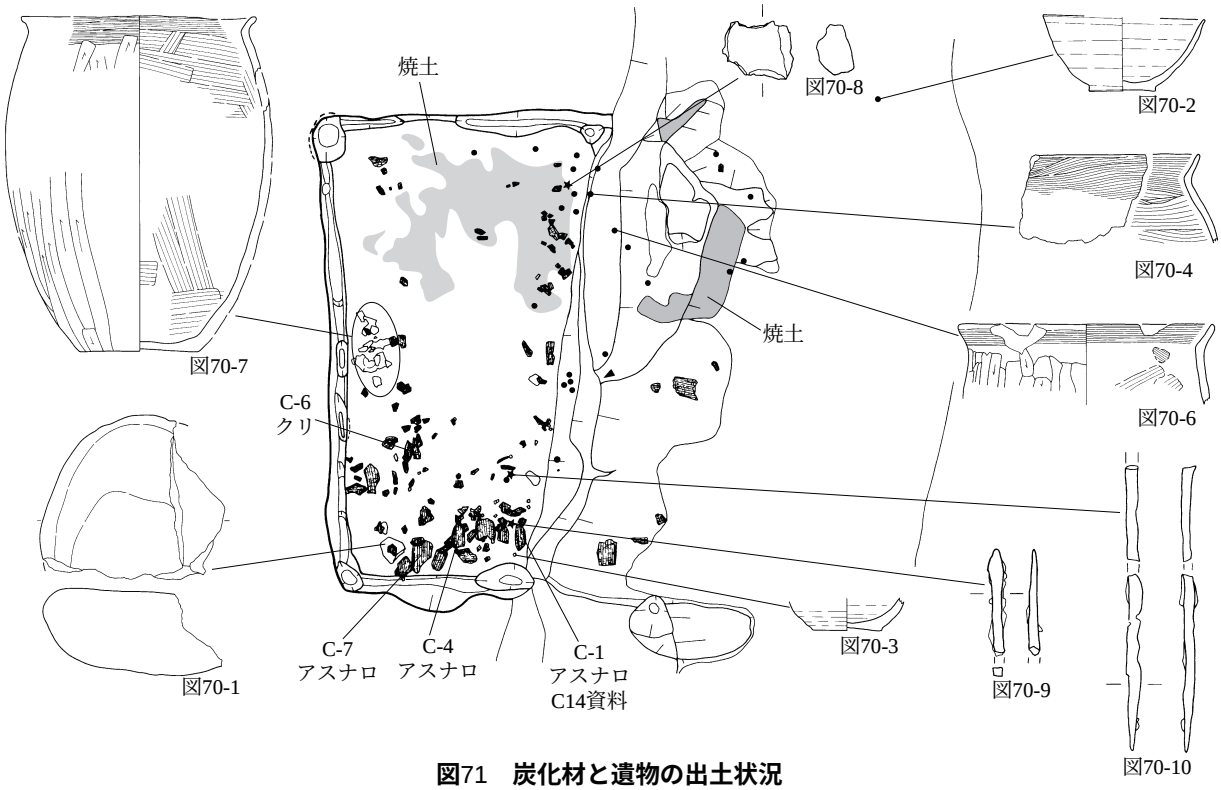


図71　炭化材と遺物の出土状況

［壁溝］東壁の一部が途切れている部分があるが、壁直下に幅約10㎝、深さ７～10㎝の壁溝が巡っている。

［柱穴・ピット］北壁の両隅及び壁溝内に壁柱穴と思われるピット状の落ち込みが見られた。おそらく、四隅の主柱と壁柱穴で建つ構造と思われる。

［炭化材］床面から床面直上にかけて炭化材が出土した。大半は10㎜に満たない小さな炭化材であるが、西壁付近では比較的大きな板材（現状で厚さ20～40㎜）が出土した。出土状況から、腰板の可能性が考えられる。遺存状況の良好な炭化材４点について樹種同定を行った結果、腰板と考えられたものはアスナロ、ほかはクリという結果を得ている（第９章第５節参照）。

［出土遺物］床面及び床面直上から85点、堆積土・崩落した床面上や掘り方などから55点の土師器片（総重量2300ｇ）が出土した。接合するものは少ない。須恵器は７点（38ｇ）の出土で、器種には坏・甕の小破片がある。また、床面から鉄鏃の破片（鏃先、柄）２点、不明鉄器１点が出土した。この他に、縄文時代前期前葉の土器15点（212ｇ）と石器（削器・剥片）３点が出土した。

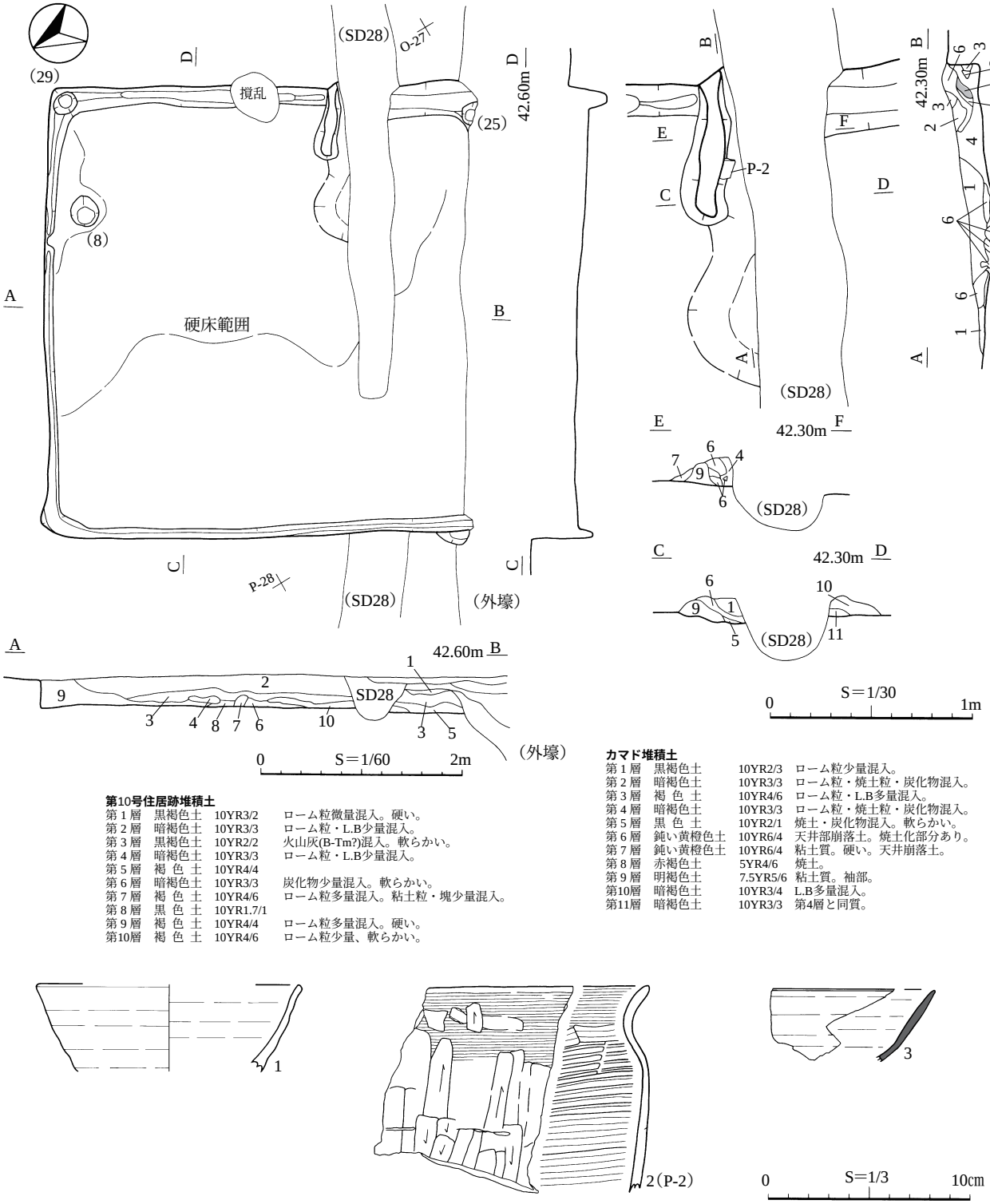
［小結］全体の半分を内壕の構築時に削平された住居跡である。床面崩落部分の調査から、東壁にカマドが構築されていた可能性がうかがわれ、方形の住居跡とするとやや南側に偏在していたものと思われる。焼失家屋で、炭化材の検出状況は良くないが、樹種同定ではアスナロとクリの２種類が確認された。出土遺物からは10世紀前半頃の構築と思われる。なお、炭化材の炭素年代（β法、補正年代）は1310±60（ｙＢＰ）で、やや古い年代となっている。（畠山）

第10号住居跡（ＳＩ10）（図72）

［位置・確認］壕の北側、Ｎ・Ｏ－27・28グリッドに位置している。北側には第１号住居跡、南側に

は第９号住居跡が隣接して検出されている。南壁の一部とカマドの大部分を削平されている。
［重複］外壕及び第28号溝跡と重複し、これらよりも古い。
［平面形・規模］残存部から、平面形はほぼ方形を呈するものと思われる。規模は、北壁4.46mで、残存している東壁は4.21m、西壁は4.20mである。また、東西の長軸は4.45m、残存している南北軸は4.13mであり、南壁のごく一部を削平されたと考えられる。残存床面積は17.83㎡である。
［壁・床面］基本層序の第Ⅵ層上部までを掘りくぼめ、第Ⅴ層の浮石塊や第Ⅵ層のブロックを主体に、平坦に整地して床面を構築している。床面は全体に硬いが、とくに東側の範囲が硬く踏みしめられている。壁高は、西壁50㎝前後、北壁30㎝前後、東壁20㎝前後である。
［堆積土］10層に分層できた。上位では暗褐色土、中位では黒褐色土、下位では褐色土を主体としているが、全体にローム粒や大小のロームブロックを含み、人為堆積の様相を呈している。また、中位の第３層には、汚染された白頭山火山灰の小ブロックが混入している（火山灰分析では、白頭山苫小牧テフラ起源のガラスのほかに、十和田ａテフラ起源と十和田八戸テフラ起源のガラスの混入が認められており、汚染されたものであることが明らかになっている）。
［カマド］東壁の南寄りに検出された。大部分を破壊されており、左側の一部分しか検出できなかっのので、カマド本体の状況は不明である。カマド本体は褐色粘土（第Ⅵ層）と灰白色粘土を主体としている。残存部から、燃焼部の奥行きは約70㎝であるが、幅は40～50㎝の間であろう。また、袖の前面には前庭部があり、２～３㎝低くなっている。おそらく楕円形に近い形状と思われる。煙道部は不明であるが、残存部から判断して、煙道の短い半地下式の構造と推測される。
［壁溝］幅10～20㎝、深さ10～18㎝で、壁直下に巡っている。掘り方の調査ではカマド下にも壁溝が掘られていたのを確認している。
［柱穴・ピット］床面から１個、東壁の両隅から２個検出した。このうち、壁隅のピットは柱穴の可能性があるが、北西隅では検出できなかった。なお、南西隅で検出した小ピットは（深さ16㎝）本住居に伴わない可能性がある。
［出土遺物］土師器片119点（958ｇ）、須恵器片３点（坏、47ｇ）、ミニチュア土器の破片１点、羽口片１点が出土した。ほとんどが破片で、完形に接合する例はない。なお、須恵器には第24号住居跡出土の破片と接合しているものがあるが、これの底部には刻書が描かれている（当該住居跡で掲載）。このほかに、縄文時代前期の土器片189点（2287ｇ）、石器９点（石匙・削器・剥片等）が出土した。
［小結］白頭山火山灰と見られた火山灰は汚染されており、かつブロック状に混入している状況から、住居の構築時期は10世紀中葉以降と考えられる。（畠山）

第12号住居跡（ＳＩ12）（図73）
［位置・確認］調査区南側で壕の外側、Ｊ・Ｋ－９グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より方形プランで確認した。また、確認時にカマドと思われる焼土や粘土範囲を確認している。
［重複］第28号住居跡、第61号土坑より新しい。
［平面形・規模］平面形は方形で、規模は、東壁3.25m、西壁3.25m、南壁は2.95m、北壁2.8mである。軸長は南北軸が3.2m、東西軸が2.9mとなり、南北軸が長軸になる。床面積は約9.03㎡である。主軸方位は真北から東に約130度傾いている。



第10号住居跡堆積土

第１層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒微量混入。硬い。
第２層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・L.B少量混入。
第３層	黒褐色土	10YR2/2	火山灰(B-Tm?)混入。軟らかい。
第４層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・L.B少量混入。
第５層	褐　色　土	10YR4/4	
第６層	暗褐色土	10YR3/3	炭化物少量混入。軟らかい。
第７層	褐　色　土	10YR4/6	ローム粒多量混入。粘土粒・塊少量混入。
第８層	黒　色　土	10YR1.7/1	
第９層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒多量混入。硬い。
第10層	褐　色　土	10YR4/6	ローム粒少量、軟らかい。

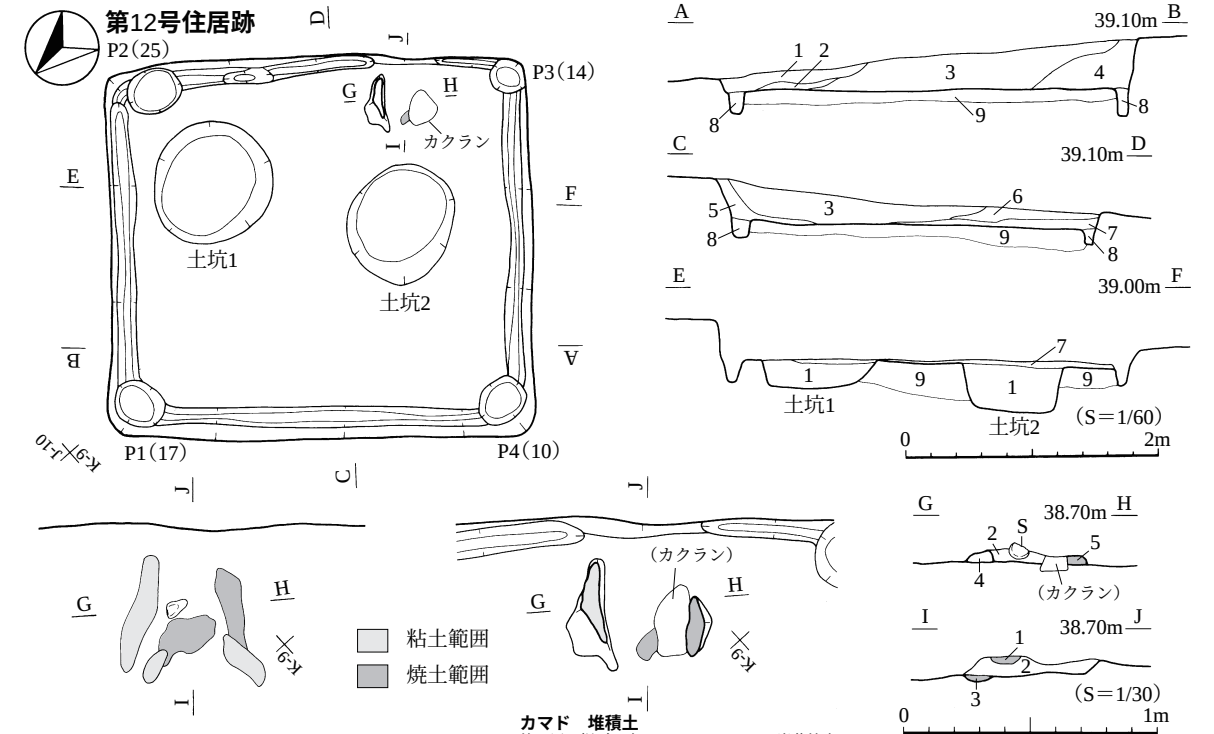
カマド堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量混入。
第２層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・焼土粒・炭化物混入。
第３層	褐　色　土	10YR4/6	ローム粒・L.B多量混入。
第４層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・焼土粒・炭化物混入。
第５層	黒　色　土	10YR2/1	焼土・炭化物混入。軟らかい。
第６層	鈍い黄橙色土	10YR6/4	天井部崩落土。焼土化部分あり。
第７層	鈍い黄橙色土	10YR6/4	粘土質。硬い。天井崩落土。
第８層	赤褐色土	5YR4/6	焼土。
第９層	明褐色土	7.5YR5/6	粘土質。袖部。
第10層	暗褐色土	10YR3/4	L.B多量混入。
第11層	暗褐色土	10YR3/3	第4層と同質。

図72　第10号住居跡と出土遺物

［壁・床面］壁高は東壁15㎝、西壁35㎝、南壁10㎝、北壁40㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。
［堆積土］黒褐色土を主体として９層に分層された。各層共にロームブロックを含む。第８層は壁溝の堆積土で、第９層は貼り床層である。
［カマド］東壁の南側で、壁辺の約１／３の所より検出された。堆積土は褐色土を主体として５層に分層された。第３層が火床面、第４層が袖部になる。堆積土内には天井部の被熱部分と思われる焼土が若干堆積しているが、構築材として使用した粘土の出土は非常に少ない。住居確認時に、粘土等が確認されており、削平されている事も考えられるが、カマド破壊が行われ、他所へ廃棄された事も考えられる。
　袖はにぶい黄橙色の粘土で作られており、芯材等は検出されなかった。袖の遺存状態は悪く左袖のみの検出である。残存している袖の規模は15×40㎝である。カマドの中軸線上で、径10㎝の火床面が検出された。被熱している深さは約３㎝である。燃焼部規模は右袖及び煙道が検出されていないため不明であるが、火床面から煙道口までの長さは約50㎝である。煙道は検出されなかったが残存部から判断して、煙道の短い半地下式の構造と推測される。
［壁溝］カマドを除いて巡る壁溝が検出された。規模は、幅、深さ共に10～15㎝である。
［柱穴・ピット］５個の小穴が検出された。配置からＰ１・２・３・４が主柱穴と考えられる。
［その他の施設］床面から２基の土坑が検出された。いずれも、住居の中軸線よりもカマド側に位置している。土坑１の平面形は円形で、規模は開口部が径１m、底径が65×80㎝で、深さは24㎝である。黒色土とロームの混合土が堆積土の主体を占めており、人為堆積の状況を示している。
土坑２も平面形は円形で、規模は開口部径が95×85㎝、底径が65×80㎝で、深さは約40㎝である。ロームブロック主体の土が堆積土の主体を占めており、人為堆積の状況を示している。本土坑は、床面を若干下げてから検出しており、住居に伴わない可能性も考えられる。
［出土遺物］土師器40点（360ｇ）、須恵器片１点（30ｇ）が出土している。１は土師器甕で、２・３は土師器坏である。その他に、縄文時代前期中葉の土器が16点（148ｇ）出土している。
［小結］出土遺物より、構築年代は10世紀代と考えられる。（小山）

第13号住居跡（ＳＩ13）（図73）
［位置・確認］調査区最南端で壕の外側、Ｊ・Ｋ－５グリッドに位置している。床面のみの検出である。
［重複］第25号住居跡、第22号溝状土坑より新しい。また、床面の南側が、現代の道路により削平されている。
［平面形・規模］削平により全体形は不明であるが、方形を基調としたものと考えられる。床面の規模は、削平を受けていない北壁側で4.7m、現存している東壁は2.8m、西壁は1.4mである。計測できた東西軸は4.4mで、現存している床面積は10.01㎡である。住居の主軸方位は真北から東へ約115度傾いている。
［床面］床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。床面の一部に0.8×2.5mの不整形な硬化範囲が検出された。
［堆積土］４層に分層された。床面のみの検出であるため、貼り床層である第２層が主体になる。第



第12号住居跡　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/3	ローム塊、ローム粒少量
第２層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量
第３層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒多量、ローム塊、炭化物少量
第４層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量、ローム塊少量
第５層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒、ローム塊少量
第６層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量
第７層	黒褐色土	10YR2/3	ローム塊、ローム粒少量
第８層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量
第９層	褐　色　土	10YR4/6	ロームとの混合土、掘り方

カマド　堆積土

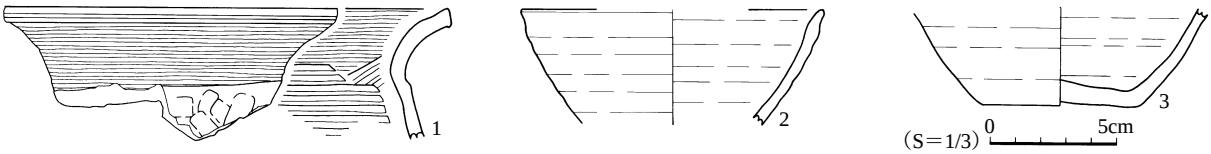
第１層	褐　色　土	10YR4/4	崩落焼土
第２層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒、焼土粒微量
第３層	明褐色土	7.5YR5/6	火床面
第４層	にぶい黄橙色土	10YR6/3	袖
第５層	明褐色土	7.5YR5/6	崩落焼土

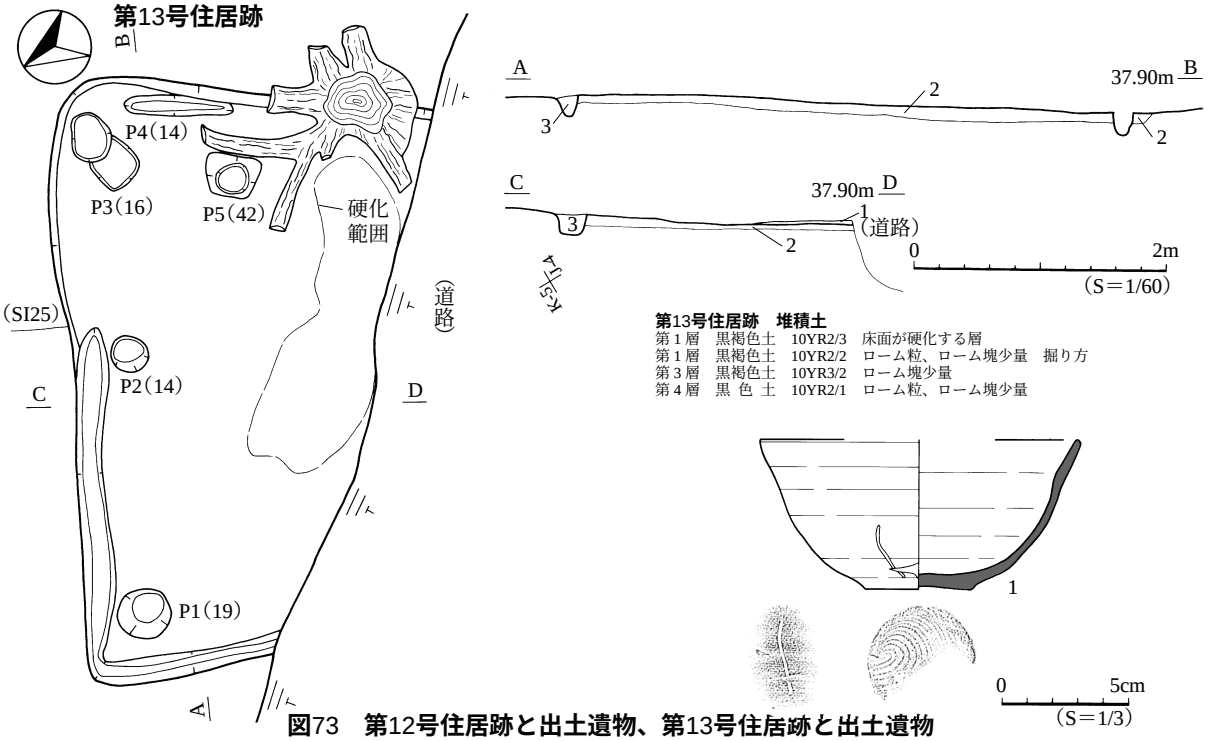
土坑1　堆積土

第１層	明黄褐色土	10YR6/8	黒色土とロームの混合土

土坑2　堆積土

第１層	褐　色　土	10YR4/6	ロームの混合土





第13号住居跡　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/3	床面が硬化する層
第１層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒、ローム塊少量　掘り方
第３層	黒褐色土	10YR3/2	ローム塊少量
第４層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒、ローム塊少量

図73　第12号住居跡と出土遺物、第13号住居跡と出土遺物

１層は硬化面、第３・４層は壁溝の堆積土である。
［カマド］検出されなかった。
［壁溝］西壁から北壁と、東壁の一部から壁溝が検出された。規模は、幅15～20㎝、床面からの深さは約15㎝である。
［柱穴・ピット］５個の小穴が検出された。主柱穴は不明であるが、Ｐ１～３が配置から主柱穴になる可能性が考えられる。
［出土遺物］出土しなかった。
［小結］詳細な構築年代は不明であるが、住居構造より10世紀代のものと考えられる。（小山）

第14号住居跡（ＳＩ14）（図74～76）
［位置・確認］調査区最南端で壕の外側、Ｎ－10グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より、不整形範囲で強く被熱している焼土と、その上位に多量の遺物が散在している状況で確認した。焼土の規模は100×120㎝である。
［重複］床面の大半が、現代の道路により削平されている。
［平面形・規模］全体形は不明であるが、方形を基調としたものと考えられる。検出できた壁は北壁、東壁の一部で、現存している規模は北壁2.4m、東壁0.6mである。現存している床面積は6.66㎡で、主軸方位は真北から東に約120度傾いている。
［床面］床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、褐色土のロームを埋め戻して平坦に整地している。
［堆積土］黒褐色土を主体として２層に分層された。２層には焼土粒が多量に含まれている。
［カマド］カマドは東壁の北側に構築されている。堆積土は褐色土を主体として11層に分層された。殆どが崩落焼土層である。第７層が火床面、第８層が袖部になる。
　袖の端部には芯材として、甕が倒立した状態で使用されている。甕は計３個体使用され、同一個体のものを打ち欠いて、左右に分け使用しているものもある（図75-３）。また、右袖は別々な個体の甕を２重にして使用している。芯材に使用されている３は、カマドの手前側から出土した破片と接合している。その他にも、カマド出土遺物と手前側より出土した遺物が接合しており、カマドは手前方向へ向かって崩れた若しくは壊された可能性が考えられる。袖の遺存状態は比較的良好で、両袖共に20×75～85㎝の規模で検出された。燃焼部のほぼ中央付近から土師器の坏が倒立した状態で検出された。支脚と考えられる。支脚直下は強く被熱しており、使用時の状態で検出されたと考えられる。支脚を頂点として、不整形な火床面が検出された。規模は30×60㎝で、被熱している深さは約５㎝である。燃焼部規模は40×95㎝である。カマドは、床面に土を盛り構築されており、燃焼部のレベルが床面より若干高くなっている。煙道は検出されなかったが残存部から判断して、煙道の短い半地下式の構造と推測される。
［壁溝・柱穴・ピット］検出されなかった。
［炭化材］カマド脇の壁際から板材が出土した。検出状況から腰板と思われ、樹種同定ではトネリコ属と同定された。
［出土遺物］土師器片255点（7.8kg）が出土している。須恵器は出土しなかった。図75に接合状況を

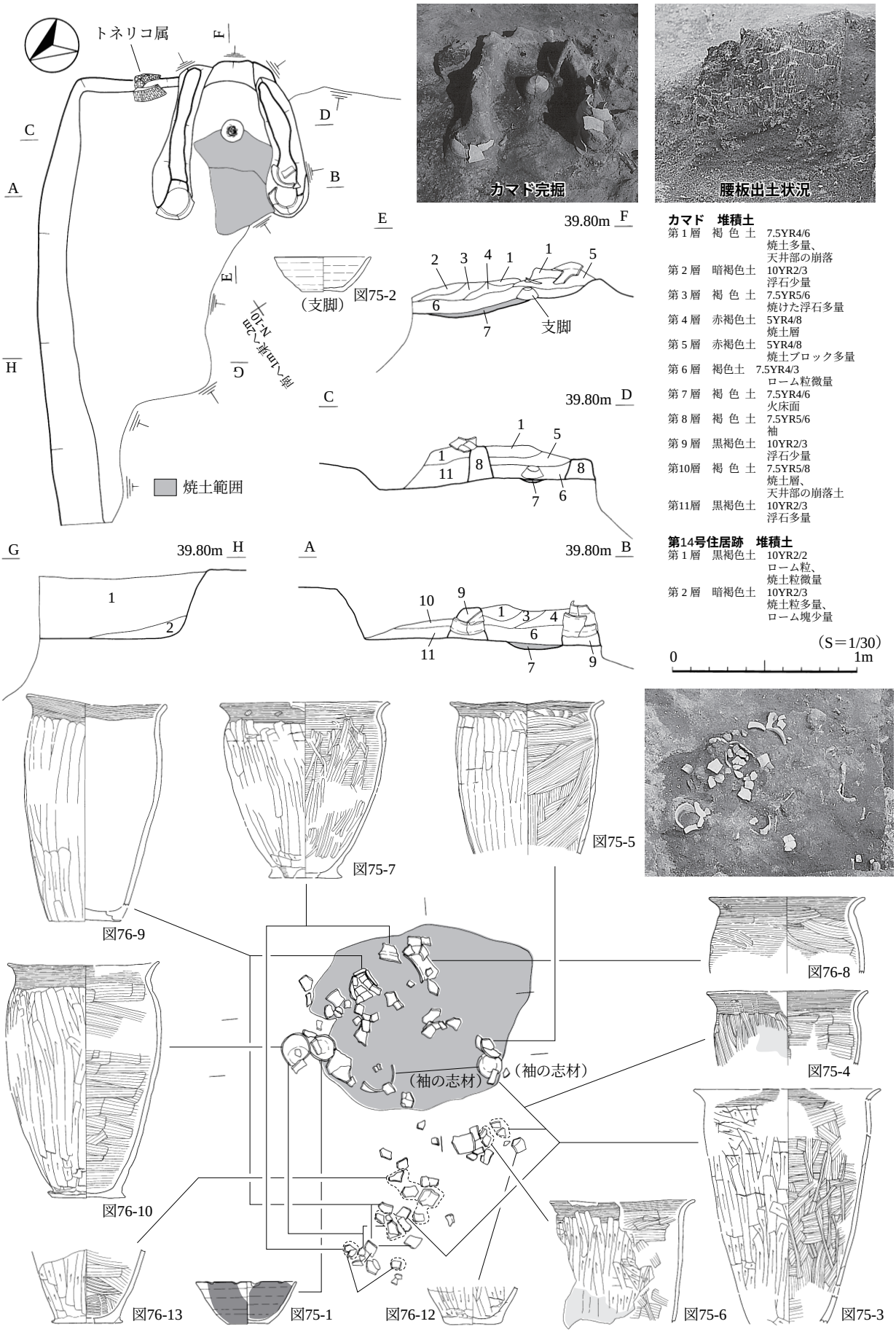

トネリコ属
焼土範囲
（支脚）
図75-2
支脚
カマド完掘
腰板出土状況
カマド　堆積土
第１層　褐 色 土　7.5YR4/6　焼土多量、天井部の崩落
第２層　暗褐色土　10YR2/3　浮石少量
第３層　褐 色 土　7.5YR5/6　焼けた浮石多量
第４層　赤褐色土　5YR4/8　焼土層
第５層　赤褐色土　5YR4/8　焼土ブロック多量
第６層　褐色土　7.5YR4/3　ローム粒微量
第７層　褐 色 土　7.5YR4/6　火床面
第８層　褐 色 土　7.5YR5/6　袖
第９層　黒褐色土　10YR2/3　浮石少量
第10層　褐 色 土　7.5YR5/8　焼土層、天井部の崩落土
第11層　黒褐色土　10YR2/3　浮石多量
第14号住居跡　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒、焼土粒微量
第２層　暗褐色土　10YR2/3　焼土粒多量、ローム塊少量
（S＝1/30）
0
1m
図75-5
図75-7
図76-9
図76-8
図75-4
（袖の志材）
（袖の志材）
図76-10
図76-13
図75-1
図76-12
図75-6
図75-3

図74　第14号住居跡

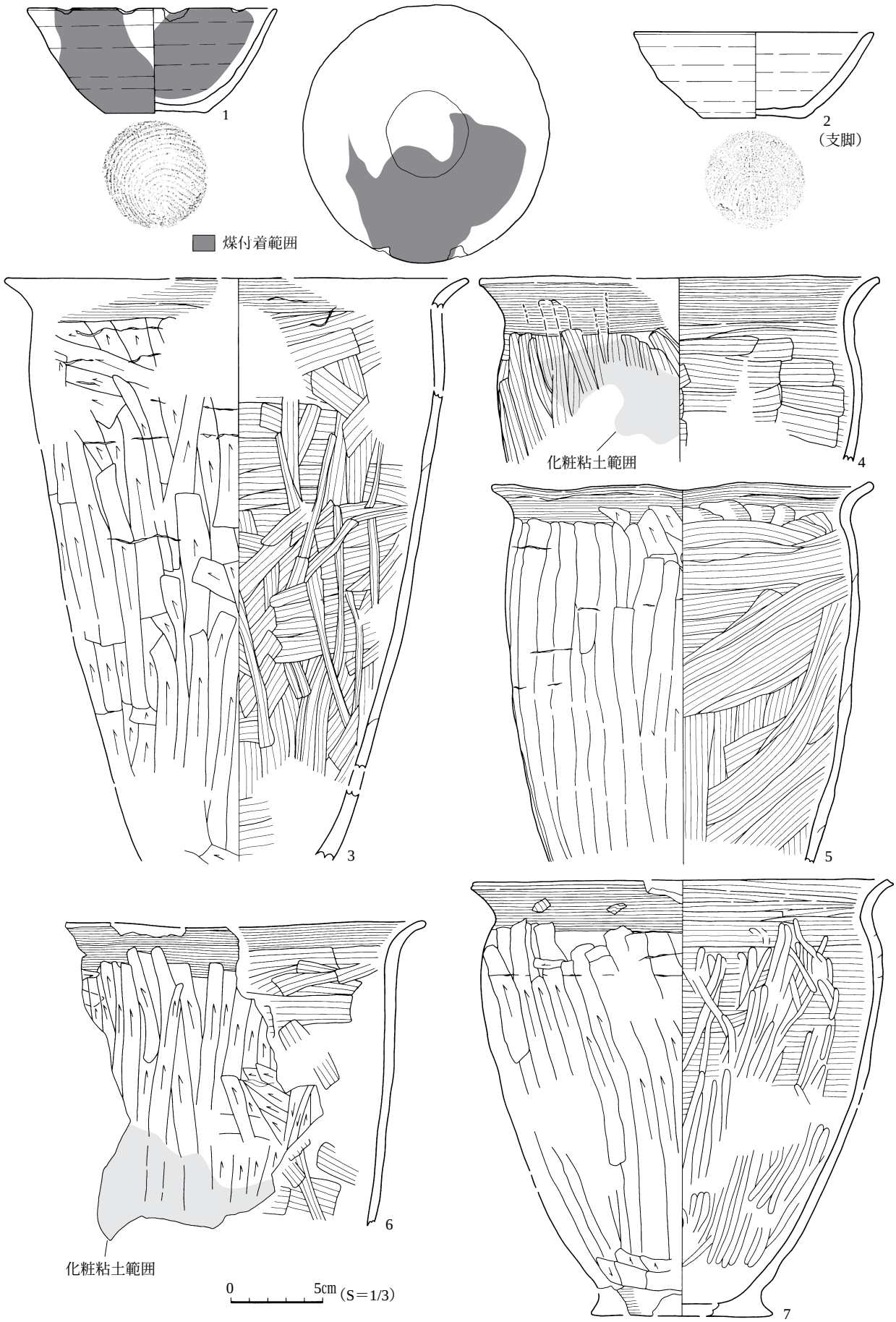


図75　第14号住居跡　出土遺物（1）

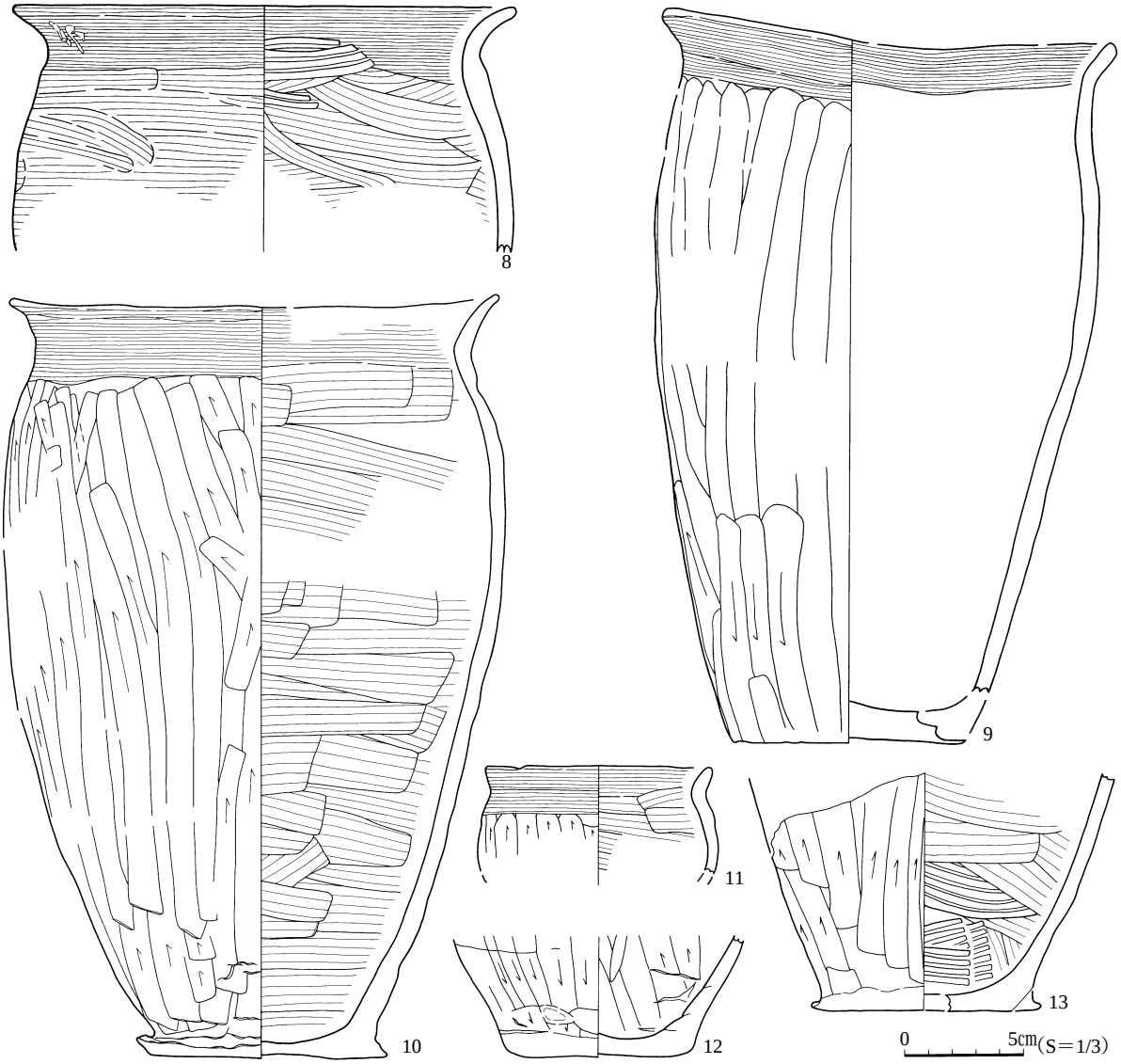


図76　第14号住居跡　出土遺物（2）

図示している。なお、10は第65号住居跡より出土した破片とも接合している。１は左袖の脇から出土した土師器坏で、灯明具に再利用されている。２は支脚に使用されていた土師器坏である。いずれも、ロクロ整形で底面に回転糸切り痕が見られる。３～５は袖の芯材に使用されていた土師器甕である。口縁部に最大径を持ち、胴部が直線的になる器形である。４は頸部に弱い段を有している。７・８は口縁部に最大径を持ち、胴部に膨らみを持つ器形である。８は頸部に弱い段を有している。９～11は口縁部と胴部に最大径を持つ器形である。底部形状は、張り出すもの（図７・10・13）と、そうでないもの（２・５）が見られる。

［小結］袖や支脚に使用した遺物から、構築年代は９世紀前半と考えられる。（小山）

第15号住居跡（ＳＩ15）（図77～79）

［位置・確認］調査区南側で壕の外側、Ｋ～Ｍ－９～11グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より方形プランとして確認した。

［重複］第19号住居跡、第124号土坑、第42号溝状土坑より新しい。

［平面形・規模］平面形は方形で、規模は北東壁7.2m、南西壁7.1m、南東壁6.8m、北西壁6.9mになる。軸長は北東-南西軸が6.6m、北西-南東軸が6.6mで、ほぼ正方形になる。床面積は約47.52㎡である。主軸方位は真北から東に約145度傾いている。

［壁・床面］壁高は、南東壁が最も高く75㎝で、北東壁と南西壁は20～70㎝で、南東壁は20㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、明黄褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。

［堆積土］暗褐色土と褐色土を主体にして14層に分層された。第４、第９層中には白頭山火山灰（肉眼観察による）がブロック状に混入している。ロームブロックが大量に含まれており人為堆積の状況を示している。第13層は壁溝の堆積土、第14層は掘り方となる。

［カマド］南東壁の南側で、壁辺の約１／３の所より検出された。本カマドは、粘土の出土量が少ない。遺構確認面とカマド検出面の差が殆ど無く、削平されている可能性もあるが、カマド破壊が行われ、他所へ廃棄された可能性も考えられる。堆積土は暗褐色土を主体に15層に分層される。

袖はにぶい黄橙色の粘土で作られており、芯材等は検出されなかった。袖の遺存状態は比較的良好で、両袖共に10～15×90～100㎝の規模で残存している。袖の壁面は被熱し、赤変している。カマドの中軸線上で、燃焼部の中央付近より支脚が検出された。支脚には甕の底部が用いられている。支脚と火床面が接しており、使用時のまま残されたと考えられる。火床面の規模は50×60㎝で、被熱している深さは約10㎝である。燃焼部規模は60×110㎝で、燃焼部底面は煙道へ向かって緩やかに立ち上がっている。燃焼部底面が床面より１段高くなっており、本カマドは床面に土を盛り構築されたと考えられる。煙道は検出されなかったが残存部から判断して、煙道の短い半地下式の構造と推測される。

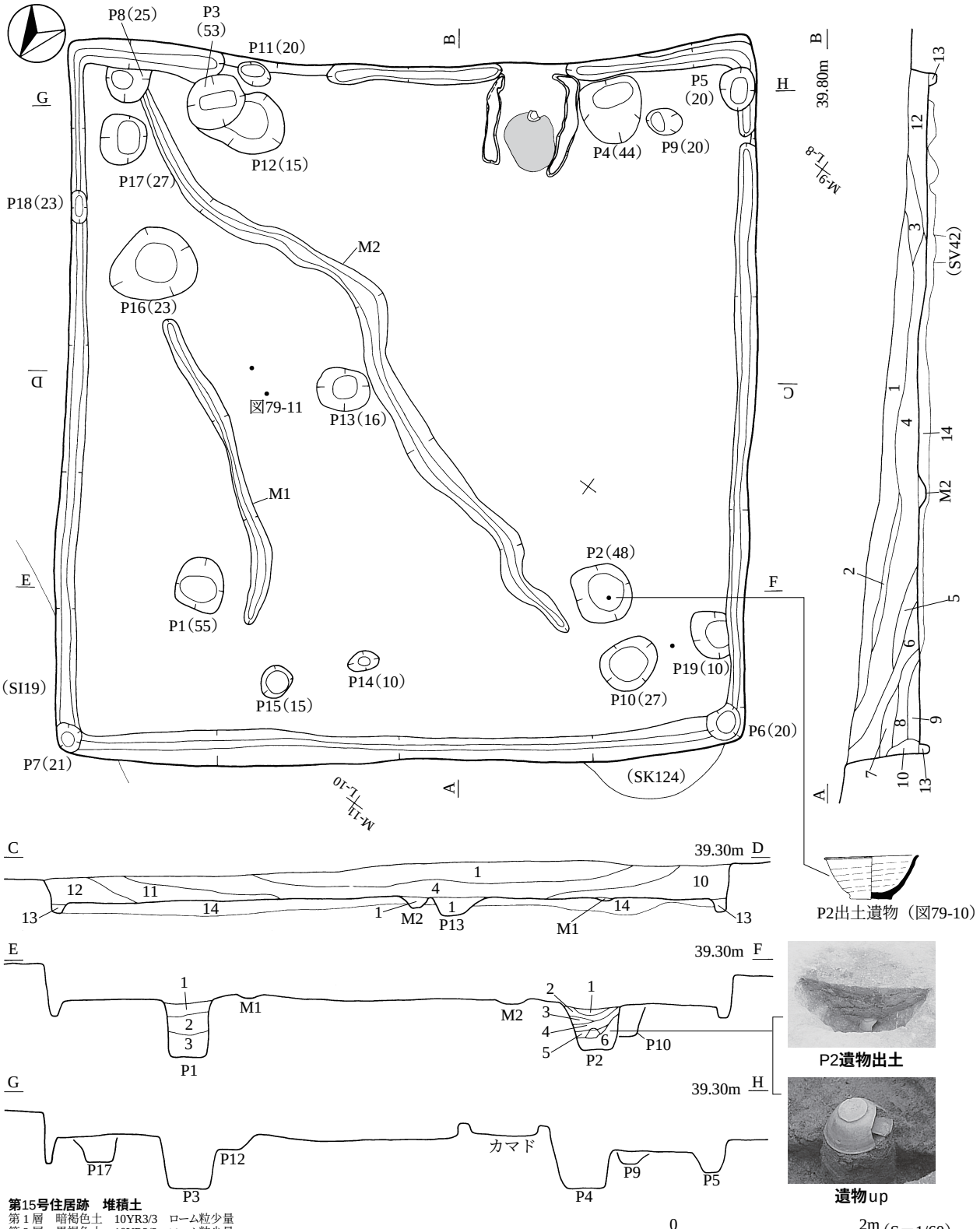
［壁溝］カマドを除いて巡る壁溝が検出された。規模は幅15～25㎝、深さ10～15㎝である。

［柱穴・ピット］18個の小穴が検出された。深さ、配置からＰ１～４が主柱穴と考えられる。Ｐ２の堆積土下位より、須恵器の坏が出土した。坏は倒立し、土器の底面がほぼ水平になった状態で出土した。Ｐ２の堆積土はロームとの混合土が主体を占め、人為的に埋め戻された状況を示しており、埋没過程のある段階で、坏を設置し、再度埋め戻したと考えられる。主柱穴を埋める際に、儀式的なことが行われた可能性が考えられる。

壁溝内から検出されたＰ５・６・７は検出位置から対応するものと考えられる。南東壁側のＰ３・Ｐ４の外側には、深さ20㎝ほどのＰ９・17が位置する。検出位置から対応するものと考えられる。

［その他の施設］床面上より２条の溝が検出された。Ｍ１は主柱穴と思われるＰ１付近から南東側へ、長さ3.2m、幅10～20㎝、深さ５㎝で伸びている。Ｍ２は、壁の東隅から西隅にかけて蛇行しながら伸びており、規模は長さ７m、幅15～35㎝、深さ10～15㎝である。床面を区画する間仕切り溝と考えられる。

［出土遺物］土師器片410点（６kg）、須恵器片32点（485ｇ）、ミニチュア土器が２点出土している。遺構間の接合状況を見ると、土師器は近接している第20号住居跡出土の甕（図87-13）と接合しており、須恵器は壕内に位置している第４号住居跡のものと接合している（図63-８）。



第15号住居跡　堆積土

第１層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒少量
第２層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒少量
第３層　褐　色　土　10YR4/6　ローム粒少量
第４層　暗褐色土　10YR3/4　B-Tmブロック状に混入
第５層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒少量
第６層　褐　色　土　10YR4/6　ローム粒多量、ローム塊少量
第７層　褐　色　土　10YR4/4　ロームとの混合土
第８層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒少量
第９層　褐　色　土　10YR4/6　B-Tmブロック状に混入
第10層　褐　色　土　10YR4/4　壁の崩落土
第11層　褐　色　土　10YR4/4　ローム粒、ローム塊少量
第12層　褐　色　土　10YR4/6　ローム主体の層
第13層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒少量
第14層　黄褐色土　10YR5/6　ローム主体の層、掘り方層

M1　堆積土

第１層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒少量

M2　堆積土

第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒少量、粘土粒微量

P1　堆積土

第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒、ローム塊少量
第２層　褐　色　土　10YR4/6　ローム粒、ローム塊少量
第３層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒、ローム塊少量

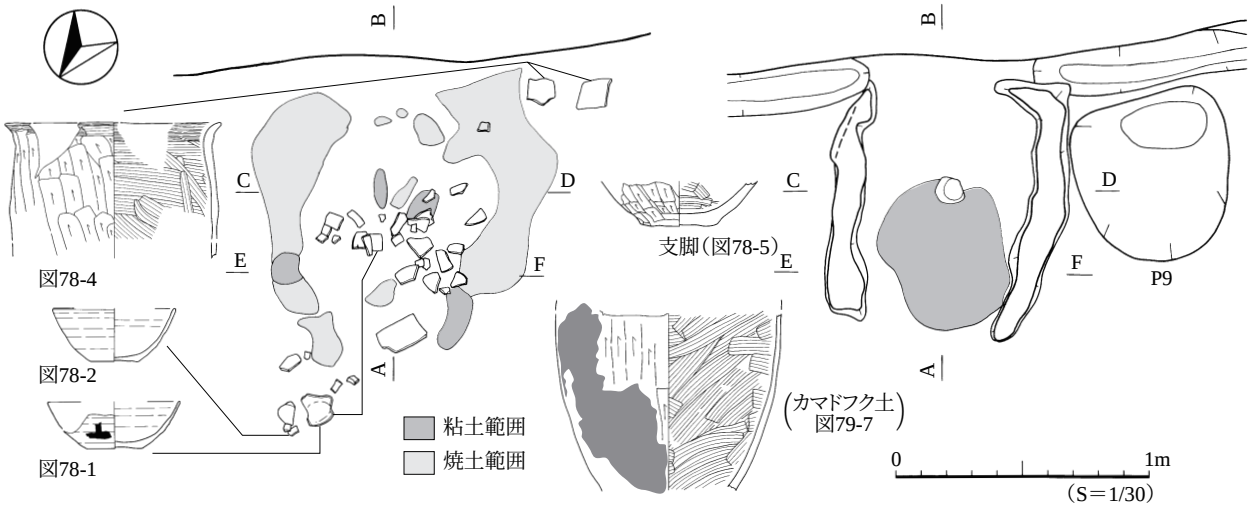
P2　堆積土

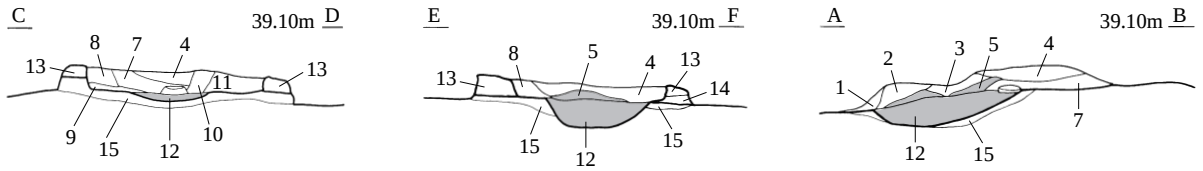
第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒、ローム塊少量
第２層　黒褐色土　10YR2/3　ローム塊少量
第３層　褐　色　土　10YR4/6　ロームとの混合土
第４層　褐　色　土　10YR4/4　ロームとの混合土
第５層　褐　色　土　10YR4/6　ロームとの混合土

P13　堆積土

第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒、ローム塊少量

図77　第15号住居跡（1）





カマド　堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒微量
第２層	にぶい黄橙色土	10YR7/4	崩落粘土
第３層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量
第４層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒、焼土粒少量
第５層	褐色土	7.5YR4/4	崩落焼土
第６層	にぶい黄橙色土	10YR7/4	崩落粘土
第７層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒微量
第８層	褐色土	10YR4/6	ローム粒多量
第９層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒微量
第10層	褐色土	10YR4/4	ローム粒少量
第11層	暗褐色土	10YR3/4	ローム塊、粘土粒少量
第12層	明赤褐色土	5YR5/8	火床面
第13層	にぶい黄橙色土	10YR7/4	袖部
第14層	褐 色 土	10YR4/4	焼土粒少量
第15層	暗褐色土	10YR3/4	ローム塊、ローム粒多量

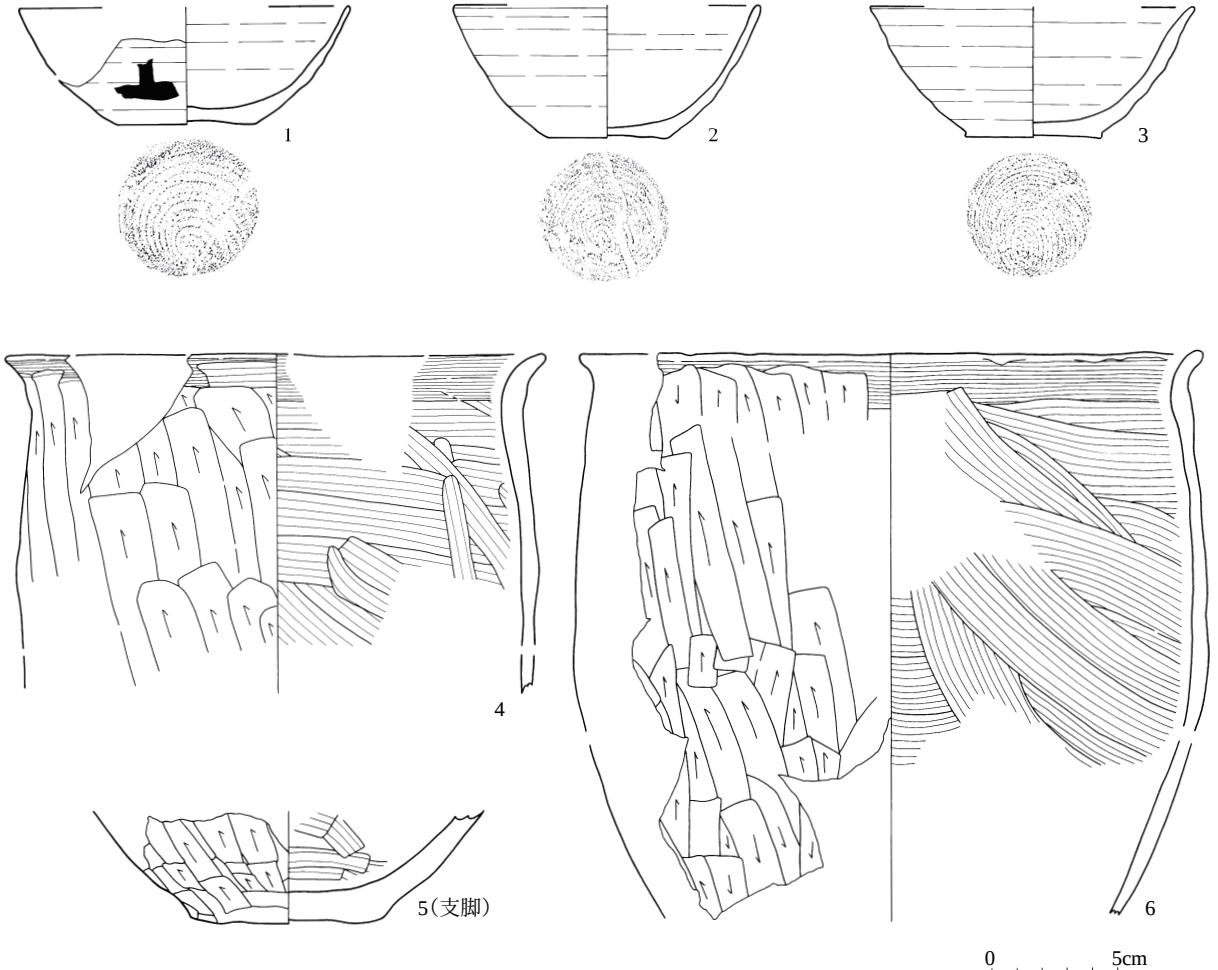


図78　第15号住居跡（2）、出土遺物（1）

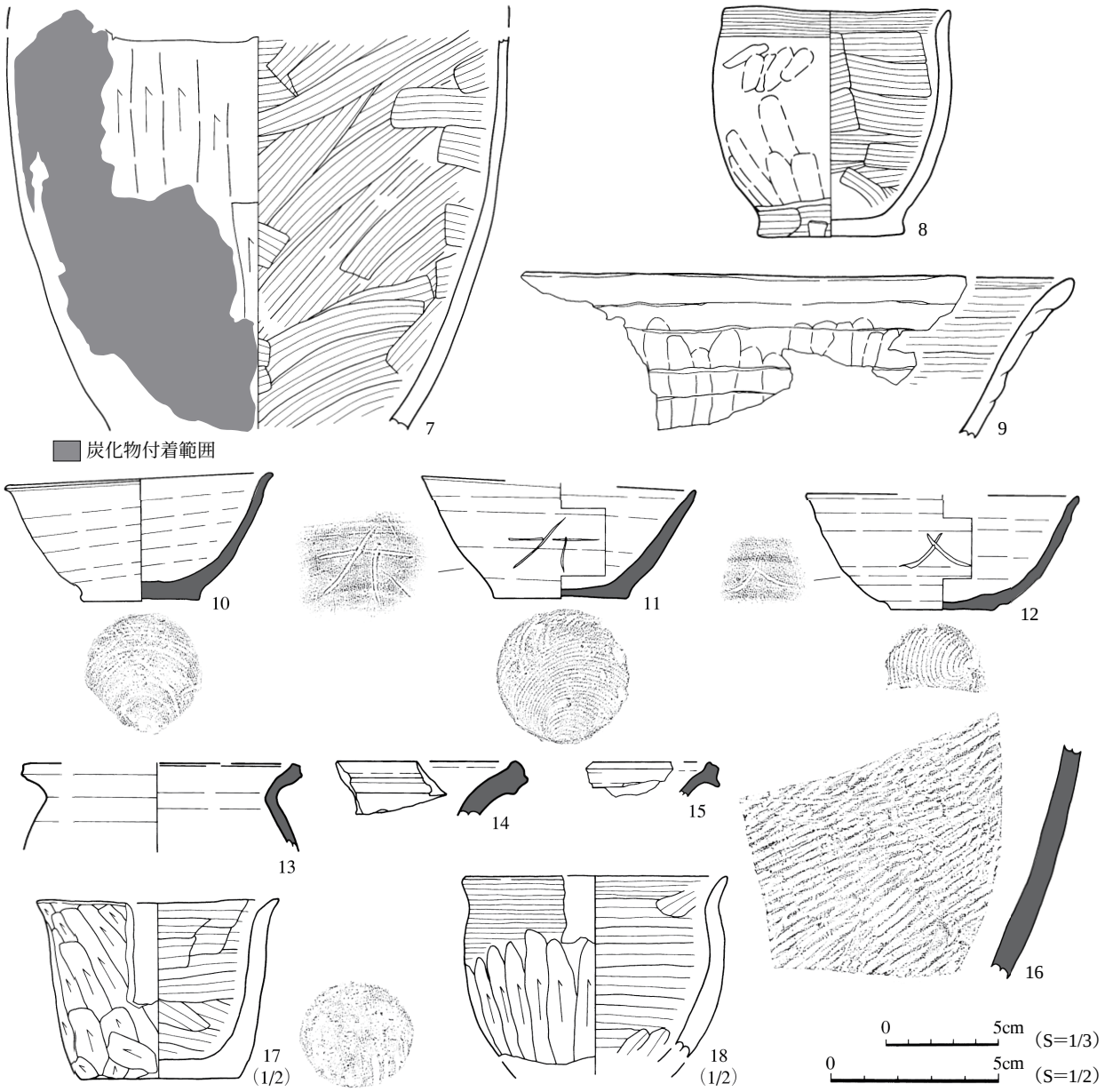


図79　第15号住居跡　出土遺物（2）

１～３はロクロ成形され、内外面が無調整になる土師器坏である。１・２はカマドから出土したもので、１は底部付近に墨書が、２は内面にタール状の付着物が見られる。２は灯明具に転用された可能性が考えられる。４～８は土師器甕である。４・５は口径部の屈曲が弱く、最大径が口縁部と胴部に見られる器形である。６は支脚に用いられていた底部片である。８は小型の甕で、底部に木葉痕がみられる。９は堝である。10～12は須恵器坏で、11・12にヘラ記号が記されている。13は須恵器鉢で、産地同定分析により、五所川原産との結果を得ている。17・18はミニチュア土器である。その他に縄文時代前期中葉の土器が1,320ｇほど出土している。

［小結］白頭山火山灰と遺物から構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

第16号住居跡（ＳＩ16・17）（図80・81）

［位置・確認］壕の東側、Ｋ・Ｌ－16～18グリッドに位置している。内壕と外壕とに挟まれた場所にあり、壕に破壊されている。調査当初は２軒の住居跡が重複しているものと考え、ＳＩ16・ＳＩ17の仮番号を付していたが、調査の結果ＳＩ17は当該住居の張り出し施設と判断された。

［重複］西側を第25号溝跡と内壕、東側を外壕、住居の中央付近で第32号土坑と重複しており、これらより古い。また、北側では第18号住居跡と重複し、これよりも新しい。北東側では、縄文時代の第30号溝状ピットとも重複している。

［平面形・規模］方形を基調とするが、東西壁は壕に切られている。北壁は残存長3.9m、南壁は残存長3.7mを確認した。南北軸は6.0mの規模である。残存床面積は23.62㎡であるが、方形と仮定すると、張り出し部分を含めた面積は約38㎡前後と推定される。主軸方位は北から東へ119度傾いている。

［壁・床面］壁高は北壁で20㎝、南壁で24～30㎝である。基本層序の第Ⅴ層を床面とし、全体に平坦で、硬い。また、住居中央の第32号土坑周辺にはローム質の明褐色土の貼床（第６層）が施されている。

［堆積土］14層に分層したが、大半は第１層～第３層で占められる。第１層はローム粒やロームブロックを主体とする黄褐色土、第２層はそれらを少量含む暗褐色土、第３層はローム粒やロームブロックを多量に含む褐色土で、５㎝前後の厚さで広く堆積している。第12層～第15層は掘り方の堆積土である。なお、第２層には白頭山火山灰と思われる小ブロックを含んでいるが、火山灰分析では風化した十和田八戸テフラ起源のガラスであったことが明らかになっている。資料採取あるいは分析資料の選別の点でミスがあった可能性がある。また、張り出し部分の第９層で採取した資料は、大部分が白頭山苫小牧テフラ起源のガラスで、十和田ａテフラと十和田八戸テフラ起源のガラスも混入していたことが明らかになっている。このことから、第２層には汚染された白頭山火山灰の混入があったものと考えられる。

［カマド］東壁の南寄りの場所に構築されているが、遺存状況は悪い。わずかに、袖の痕跡と火床面を検出できただけである。

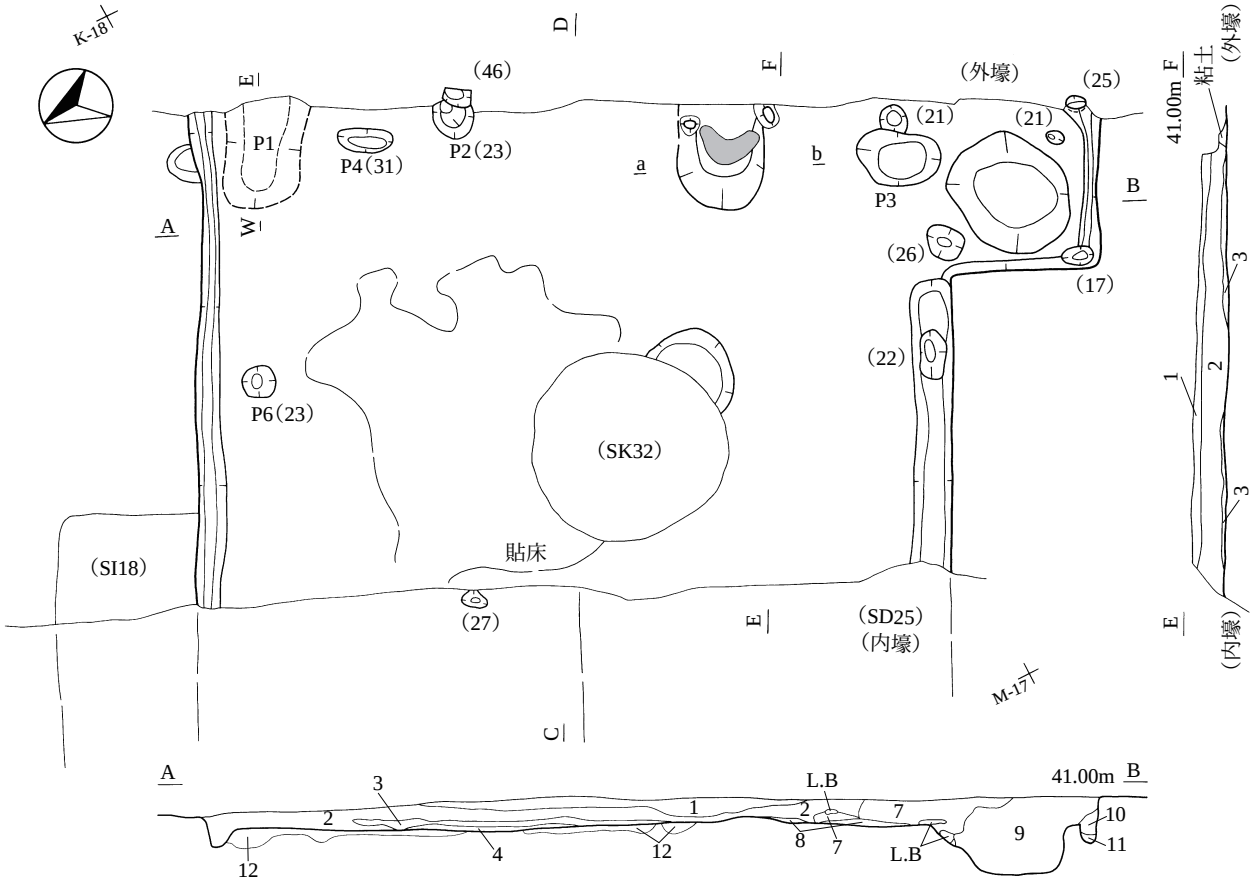
［壁溝］幅20～30㎝、深さ10～20㎝の壁溝が検出された。なお、掘り方での調査では、張り出し施設を区切るように壁溝が検出されている。

［柱穴・ピット］住居内から６個、張り出し施設から４個のピットを検出した。このうち主柱穴の可能性のあるのはＰ２とＰ４の２個である。また、張り出し施設では三隅のピットが柱穴と思われる。

［張り出し施設］南壁東側に方形の張り出し施設を検出した。残存の幅（東西）1.32m、奥行き（南北）1.16mである。内部には径93㎝、深さ39㎝の不整円形の土坑を検出した。土坑の断面形は堝底状で、覆土から釘状鉄製品１点が出土した。

［その他の施設］北東の壁際と南東の張り出し施設の近くに土坑を検出した。北東壁際の土坑（Ｐ１）は、壕構築の際に破壊されているが、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。短軸60㎝、残存長軸85㎝、深さ48㎝である。最終的には埋められていた土坑である。張り出し施設の近くに検出した土坑（Ｐ３）は、43×66㎝の楕円形で、深さ15㎝の規模である。

［出土遺物］覆土から床面にかけて土師器片190点（1873ｇ）、須恵器片11点（230ｇ）が出土した。このうち、床面から床面直上にかけてのものは60点ほどであり、とくにカマド近辺に多い。土師器には



第16号住居跡堆積土

第1層　黄褐色土　10YR5/6　ローム粒・L.B多量混入。B-Tm微量混入。ピンクローム主体。
第2層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒・L.B少量混入。B-Tmブロック状に微量、焼土微量混入。
第3層　褐 色 土　10YR4/6　ローム粒・L.B多量混入。炭化物・焼土微量混入。
第4層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量混入。硬い。
第5層　褐 色 土　7.5YR4/6　焼土。やや硬い。
第6層　明褐色土　7.5YR5/8　ローム質。やや硬い。
第7層　暗褐色土　10YR3/4　L.B少量混入。やや軟らかい。
第8層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒・L.B少量混入。硬い。
第9層　黒色土(10YR1.7/1)、黒褐色土(10YR3/2)、暗褐色土(10YR3/3)、褐色土(10YR4/4)、黄褐色土(10YR5/6)などの土の混合土。これらの土がブロック状に入り交じっている。B-Tmもブロック状に混入している。
第10層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量混入。
第11層　黄褐色土　10YR5/6　ローム質。
第12層　黄褐色土　10YR5/6　掘り方。
第13層　褐 色 土　10YR4/4　掘り方。SI18の掘り方の可能性もある。
第14層　褐 色 土　10YR4/6　掘り方。SI18の掘り方の可能性もある

P1堆積土

第1層　褐 色 土　10YR4/6　ローム粒・L.B多量混入。硬く締まりあり。
第2層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒微量混入。軟らかく締まりなし。
第3層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量混入。硬く締まりあり。
第4層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒少量、炭化物微量混入。
第5層　褐 色 土　10YR4/4　ローム主体。やや硬く、締まりややなし。

カマド堆積土

第1層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒・焼土少量混入。硬く締まりあり。
第2層　暗褐色土　7.5YR3/4　焼土多量、ローム粒少量、炭化物微量混入。硬く締まりあり。
第3層　黄褐色土　10YR5/6　粘土質。非常に硬く、締まりあり。
第4層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒多量、焼土少量混入。やや軟らかく、しまりなし。
第5層　鈍い黄橙色土　10YR6/4　灰白色粘土の被熱したもの。硬い。
第6層　暗褐色土　10YR3/4　粘土質。袖?。ローム粒多量混入。硬い。
第7層　黒褐色土　10YR2/3　焼土粒・炭化物少量混入。やや軟らかく、しまりあり。
第8層　赤褐色土　5YR4/6　硬い。
第9層　暗褐色土　7.5YR3/4　焼土少量混入。やや硬く、締まり無し。
第10層　鈍い黄橙色土　10YR6/4　灰白色粘土。カマド材。硬い。

図80　第16号住居跡

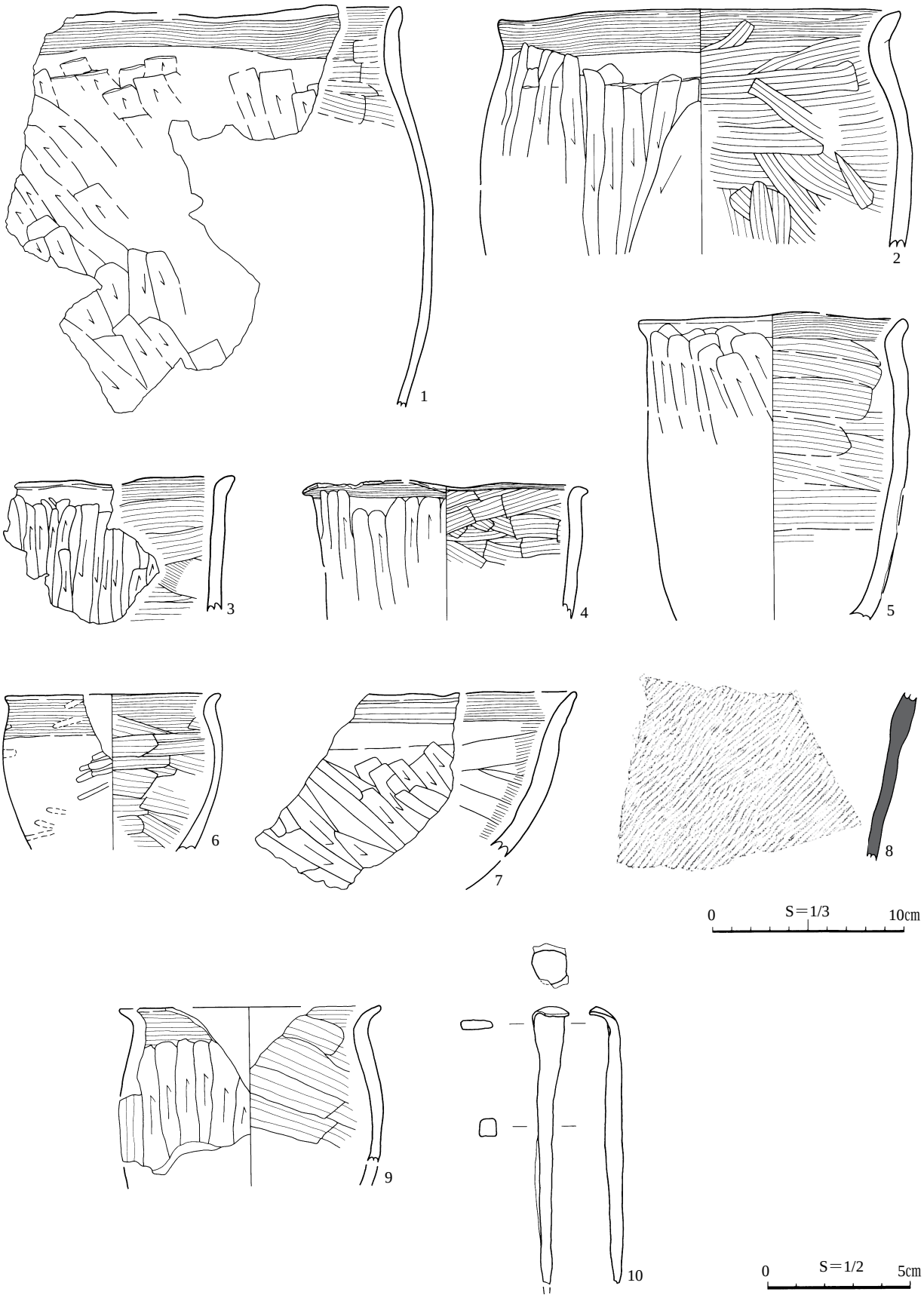


図81　第16号住居跡　出土遺物

坏や甕・堝、須恵器には甕の破片10点と坏１点がある。接合するものは少ないが、床面中央で検出された第32号土坑や外壕、遺構外から出土したものと接合している例がある。また、張り出し施設からは釘状鉄製品と鉄錆片２点が出土した。このほかに、縄文時代前期前葉の土器片が104点（1118ｇ）出土している。

［小結］規模の不明な住居跡であるが、一方の軸長が６ｍであるので、本遺跡内でも比較的大きな部類に入る。また、南側に張り出し施設を持つことも特徴にあげられる。出土遺物は廃棄あるいは流れ込みによるものが多く、接合するものはほとんどない。堆積土に含まれていたる火山灰はサンプリングエラーの可能性があるが、もう一方の資料では汚染された白頭山火山灰であることが明らかになっている。このことから、本住居跡の構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（畠山）

第18号住居跡（ＳＩ18）（図82）

［位置・確認］壕の東側、Ｌ－17・18グリッドに位置しており、内壕の両端に検出された。

［重複］第25号溝跡、内壕、第32号土坑、第16号住居跡と重複し、これらの遺構より古い。なお、これらの遺構の新旧関係は、記述した順に、第25号溝跡が最も新しく、本住居跡が最も古い。

［平面形・規模］平面形は方形を呈し、東壁4.07m、西壁3.98m、南壁4.02m、北壁3.91mである。長軸（南北）は4.01m、短軸3.94mである。推定床面積は、15.14㎡である。主軸方位は、北から東へ116度傾いている。

［壁・床面］基本層序の第Ⅵ層を掘り込んで、床面を構築している。壁高は西壁で63㎝、他の遺構との重複が見られなかった東壁北側で30㎝である。第16号住居跡床面からは15㎝下位にある。

［堆積土］西壁の一部分しか確認できなかった。南西隅の壁際では黒褐色土、中央付近ではローム粒やロームブロックを多量に含んだ黒褐色土、褐色土、暗褐色土の堆積が見られた。また、第１層には白頭山火山灰（肉眼観察による）の混入が見られたが、床面直上や掘り方内にも小ブロックとして見られた。

［カマド］東壁の南寄りのところに、70×74㎝の規模で円形に広がっている焼土を検出した。火床面といえるほど焼けているわけではないが、カマドが構築されていた場所と考えられる。

［壁溝］幅10～20㎝、深さ15～25㎝の壁溝を検出した。残存部から、全周していた可能性がある。

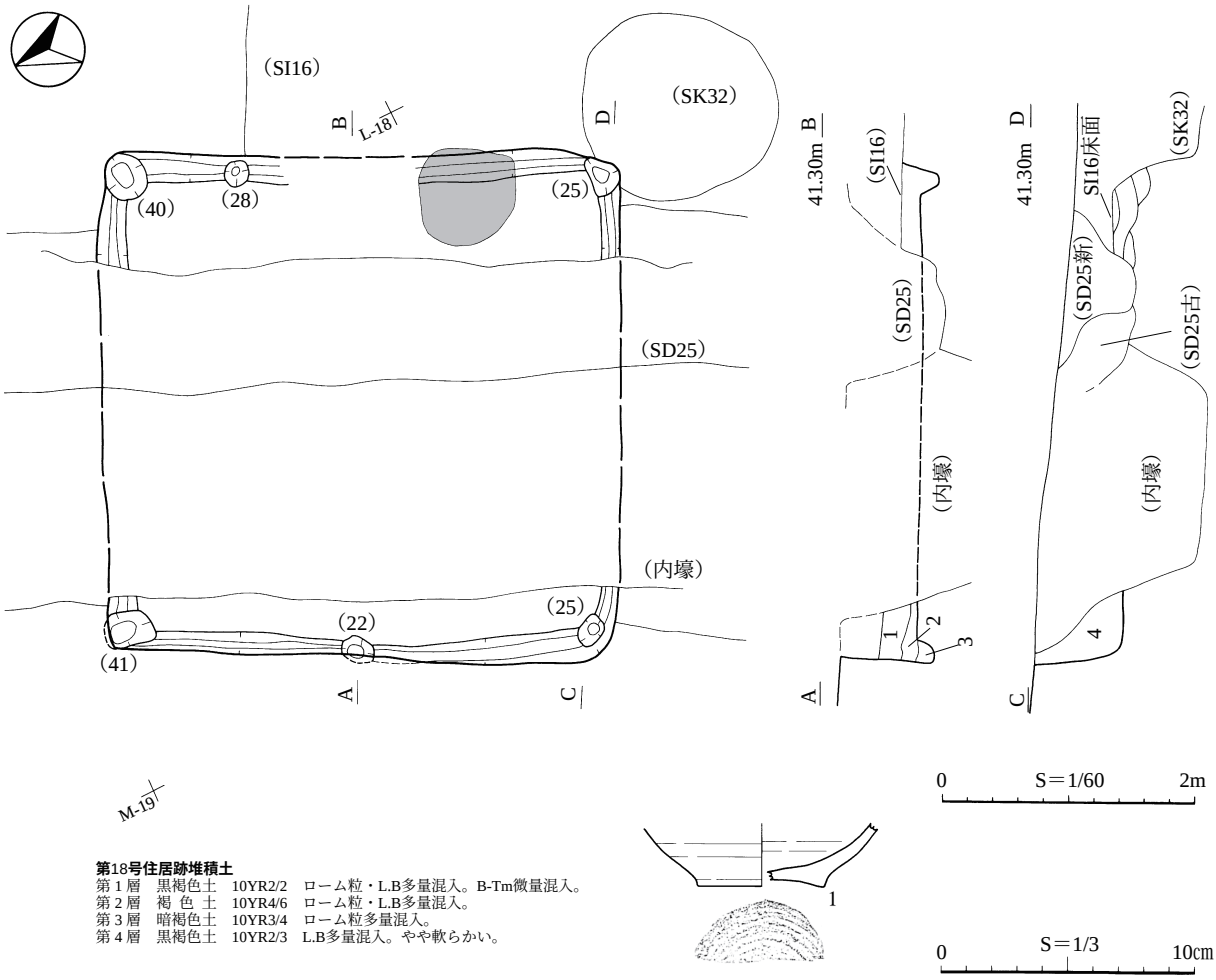
［柱穴・ピット］四隅及び壁溝内に検出した。

［出土遺物］住居内から土師器14点（355ｇ）のほか、縄文時代前期前葉の土器40点（474ｇ）と剥片１点が出土した。

［小結］大部分を壕により切られているが、規模のわかる住居跡である。残存部から四隅に柱穴が配置される構造で、カマドは東側にあったと考えられる。白頭山火山灰の混入状態から、10世紀中葉以降の住居跡と思われる。（畠山）

第19号住居跡（ＳＩ19）（図83）

［位置・確認］調査区南側で壕の外側、Ｋ・Ｌ－10～12グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より方形プランで確認した。また、住居確認時に東壁の南側より、カマドと思われる焼土、粘土の不整形プランを確認している。



第18号住居跡堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒・L.B多量混入。B-Tm微量混入。
第２層　褐 色 土　10YR4/6　ローム粒・L.B多量混入。
第３層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒多量混入。
第４層　黒褐色土　10YR2/3　L.B多量混入。やや軟らかい。

図82　第18号住居跡と出土遺物

参考図　平安時代竪穴住居跡の分布

［重複］第20号、第27号住居跡、第128号土坑より新しく、第15号住居跡より古い。
［平面形・規模］平面形は方形で、規模は東壁4.0m、西壁4.4m、南壁4.4m、北壁4.4mになる。軸長は東西軸が4.5m、南北軸が4.3mとなり、東西軸が長軸となる。床面積は約18.92㎡である。主軸方位は真北から東に約120度傾いている。
［壁・床面］南東側へ下る緩斜面地に構築されているため、壁高は、西壁が最も高く40㎝で、北壁と南壁は４～35㎝になる。東壁は３～８㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、明黄褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。
［堆積土］暗褐色土を主体にして５層に分層された。第３層は壁溝、第４層、第５層は掘り方となる。
［カマド］住居確認時に検出した粘土範囲を掘り進めた結果、東壁の南側で、壁辺の約１／４の所よりカマドが検出された。住居確認時に、粘土範囲が検出されており、カマド材の多くは削平を受けていると考えられる。堆積土は粘土や焼土を主体に７層に分層された。第６層は火床面、第７層は袖部になる。
　袖は床面に直接褐色の粘土を盛り構築されている。芯材等は検出されなかった。遺存状態は比較的良好で、両袖共に10～15×70㎝の規模で残存している。袖の壁面から、被熱し赤変している範囲を確認した。支脚等は検出されなかった。火床面は40×40㎝の規模で、約５㎝の深さで被熱している。燃焼部規模は45×75㎝で、燃焼部底面は煙道へ向かって緩やかに立ち上がっている。煙道は検出されなかったが残存部から判断して、煙道の短い半地下式の構造と推測される。
［壁溝］底面を全周している壁溝が検出された。規模は幅15～20㎝、深さ10～20㎝である。
［柱穴・ピット］３個の小穴が検出された。主柱穴等は不明である。
［その他の施設］床面上から土坑が２基検出された。土坑１は断面形が皿状になるもので、規模は開口部が90×105㎝、底部が45×55㎝で、深さは約12㎝である。土坑２も断面形が皿状になるもので、規模は開口部が、75×90㎝、底部が65×85㎝で、深さは約８㎝である。
［出土遺物］土師器片116点（1,023ｇ）、須恵器片３点（225ｇ）が出土している。１はカマド付近から出土した土師器坏で、内外面にタール状の付着物が見られる。灯明具として再利用されたと考えられる。２は須恵器甕で産地同定分析により、五所川原産と判明している。また、ＳＫ96出土の（図152-15）と胎土が似ており、同一個体と思われる。そのほかに、縄文時代の遺物としては、前期中葉の土器片79ｇ、削器が１点出土している。
［小結］白頭山火山灰（肉眼観察による）が二次堆積している第20号住居跡より新しい事より、構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

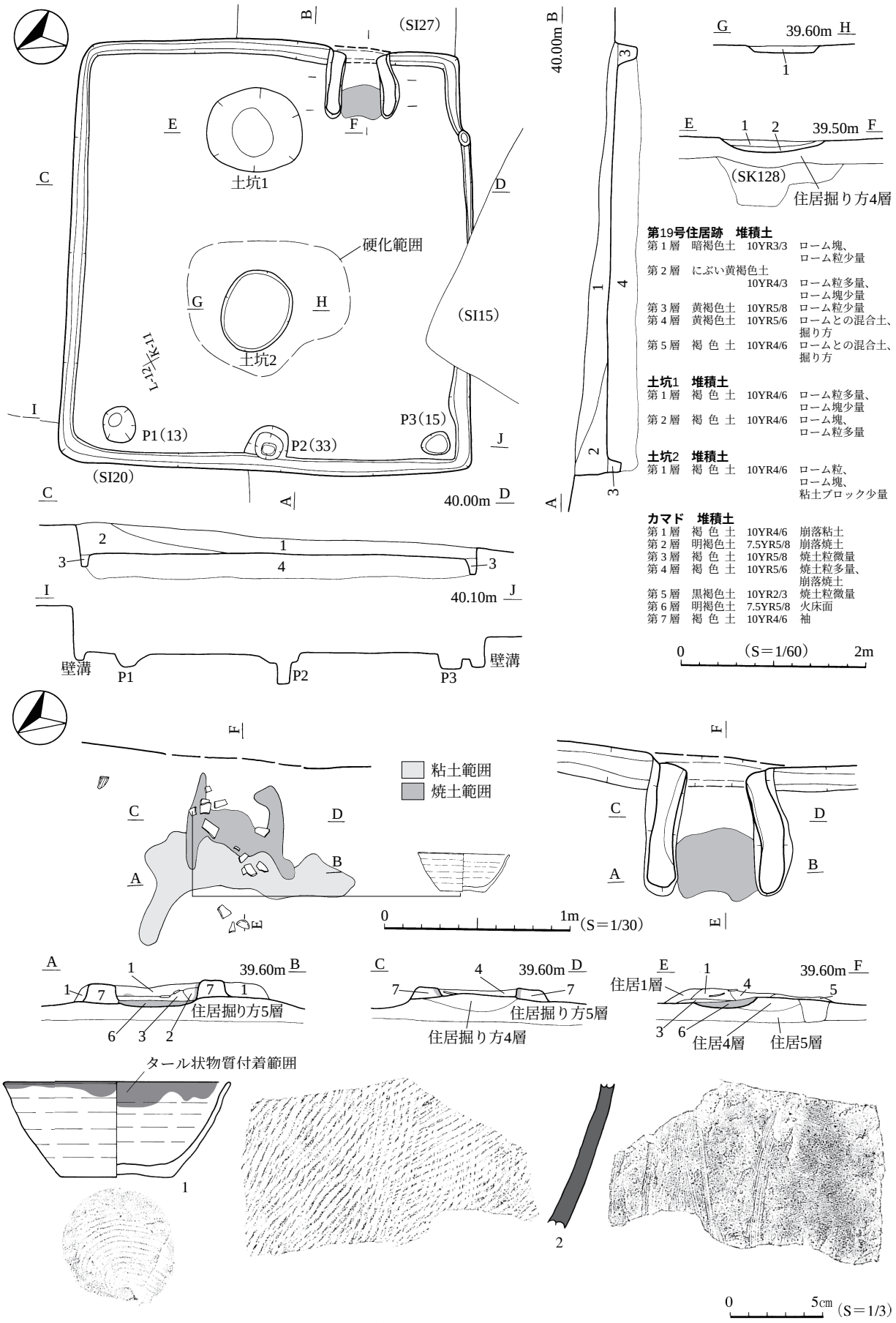


図83　第19号住居跡と出土遺物

第20号住居跡（ＳＩ20）（図84～89）

［位置・確認］調査区南側で壕と重複するＫ～Ｍ－12～14グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より方形プランで確認した。同時に東壁の南側より、焼土、粘土範囲を確認した。

［重複］外壕、第26号溝跡、第19号住居跡より古く、第123号土坑より新しい。

［平面形・規模］重複により全体形は不明であるが、方形を基調とするものと考えられる。西壁は検出されず、現存している規模は、東壁5.8m、南壁6.1m、北壁5.8mである。また、南壁の東側から、張り出し部が検出された。張り出し部の東壁は第19号住居跡と重複しており、検出されなかった。西壁は1.1mで、現存している南壁は約2.0mである。重複の影響を受けていない南北軸の軸長は6.7mで、張り出し部を含めると、約7.9mになる。残存している床面積は約（40.71㎡）で、張り出し部を含めると（42.95㎡）である。主軸方位は真北から東に約120度傾いている。

［壁・床面］南東側に下る緩斜面地に構築されているため、壁高は東壁側が最も低く、１～10㎝である。北壁と南壁の壁高は10～40㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。

［堆積土］暗褐色土を主体にして11層に分層された。第10層は壁溝、第11層は掘り方となる。ピット４・15の堆積土中には白頭山火山灰（肉眼観察による）がブロック状になり混入している。

［カマド］東壁の南側で、壁辺の約１／３の所よりカマドが検出された。住居確認時に粘土範囲が検出されており、カマド材としての粘土は大半が削平を受けている可能性が考えられる。堆積土は崩落粘土や崩落焼土を主体に12層に分層された。第９層から第11層は袖の構築材となり、第20層は火床面となる。

袖は床面に黒褐色や暗褐色の土を盛ってから、にぶい黄褐色の粘土が盛られ構築されている。芯材等は検出されなかった。袖の遺存状態は比較的良好で、右袖は幅10×115㎝、高さ約５㎝の規模で、左袖は幅20×80㎝、高さ10㎝の規模で残存している。袖の壁面に、被熱し赤変している範囲が確認された。土師器甕の底部が倒立した状態で検出された。支脚と考えられる。位置が右袖側に寄ることから、もう一つ支脚があった可能性が考えられる。火床面が検出されたが、土層で確認すると左袖の下まで伸びている。このことから、本カマドは作り替えが行われた可能性も考えられる。燃焼部内に拡がっている火床面規模は、20×30㎝であるが、全体規模は25×50㎝で、約４㎝の深さで被熱している。燃焼部規模は45×90㎝で、燃焼部底面は煙道へ向かって緩やかに立ち上がっている。煙道は検出されなかったが残存部から判断して、煙道の短い半地下式の構造と推測される。

［壁溝］底面を全周している壁溝が検出された。規模は幅10～20㎝、深さ10～15㎝である。

［柱穴・ピット］床面から20個の小穴が検出された。位置、規模などからＰ１～Ｐ４が主柱穴になると考えられる。Ｐ２～４より柱痕が検出された。柱痕は、ほかにもＰ４に隣接しているＰ５からも検出されている。

［その他の施設］カマド付近の床面より住居の長軸線上に沿う２条の溝が検出された。間仕切り溝と考えられる。溝１は５×15×240㎝の規模で両端に深さ10㎝ほどの小穴が伴っている。溝２は、溝１と平行するように検出されたが、長さ110㎝のところで、立ち上がりを検出できなくなった。幅、深さは、共に溝１とほぼ同規模である。

［出土遺物］堆積土中及び床面直上より、土師器片700点（12.1kg）、須恵器片50点（1.6kg）、ミニチュ

ア土器３点、鉄器12点、鉄滓・鉄塊が９点、鉄付着礫が１点、砥石が２点出土している。特筆されるのは鉄製品の多さである。床面付近より出土した遺物は、破片での出土が多く、離れた地点と接合するものも見られる。また、堆積土を構成する土は殆どがロームとの混合土である事から、遺物は廃棄されたものと考えられる。

図86-１～10は土師器坏である。１はＰ８の堆積土中より正立した状況で出土した（図85）。ロクロ成形され、内面にはミガキ調整と黒色処理が施されている。４もＰ20の堆積土中より正立した状態で出土したものである。ロクロ成形で、内外面には調整が施されていない。６は底部付近にヘラ記号が記されている。９は底部片で、見込み部分に渦巻き状の段差が見られる。耳皿の可能性も考えられる。10は高台付坏である。破損品であるため正確な法量は不明であるが、残存部から推測される法量は本遺跡で一般的に見られる坏より大きめである。図87-12～図88-23は土師器甕である。復元されたものは、口縁部と胴部に最大径を持ち、頸部の屈曲が弱い器形になる。13は外面に化粧粘土が付着している。19・20は底面に木葉痕が、21は簾状の圧痕がみられる。24・25はミニチュア土器で、25は胴部にヘラ記号が記されている。

図88-26～29は須恵器坏である。26は底部付近にヘラ記号が記されている。27はＰ20の堆積土中より出土したもので、産地同定分析により、五所川原産と判明している。図88-30は鉢の胴部片で肩部付近にヘラ記号が記されている。図88-31～35は須恵器壺である。35は産地同定分析により、産地不明と判明している。図88-36～89-39は須恵器甕である。37は第54号溝跡より出土している図175-22と胎土が似ており同一個体と思われる。39は第65号住居跡より出土したものと接合するほか、第16号住居跡、第32号土坑より出土したものと、胎土が似ており、同一個体と思われる。

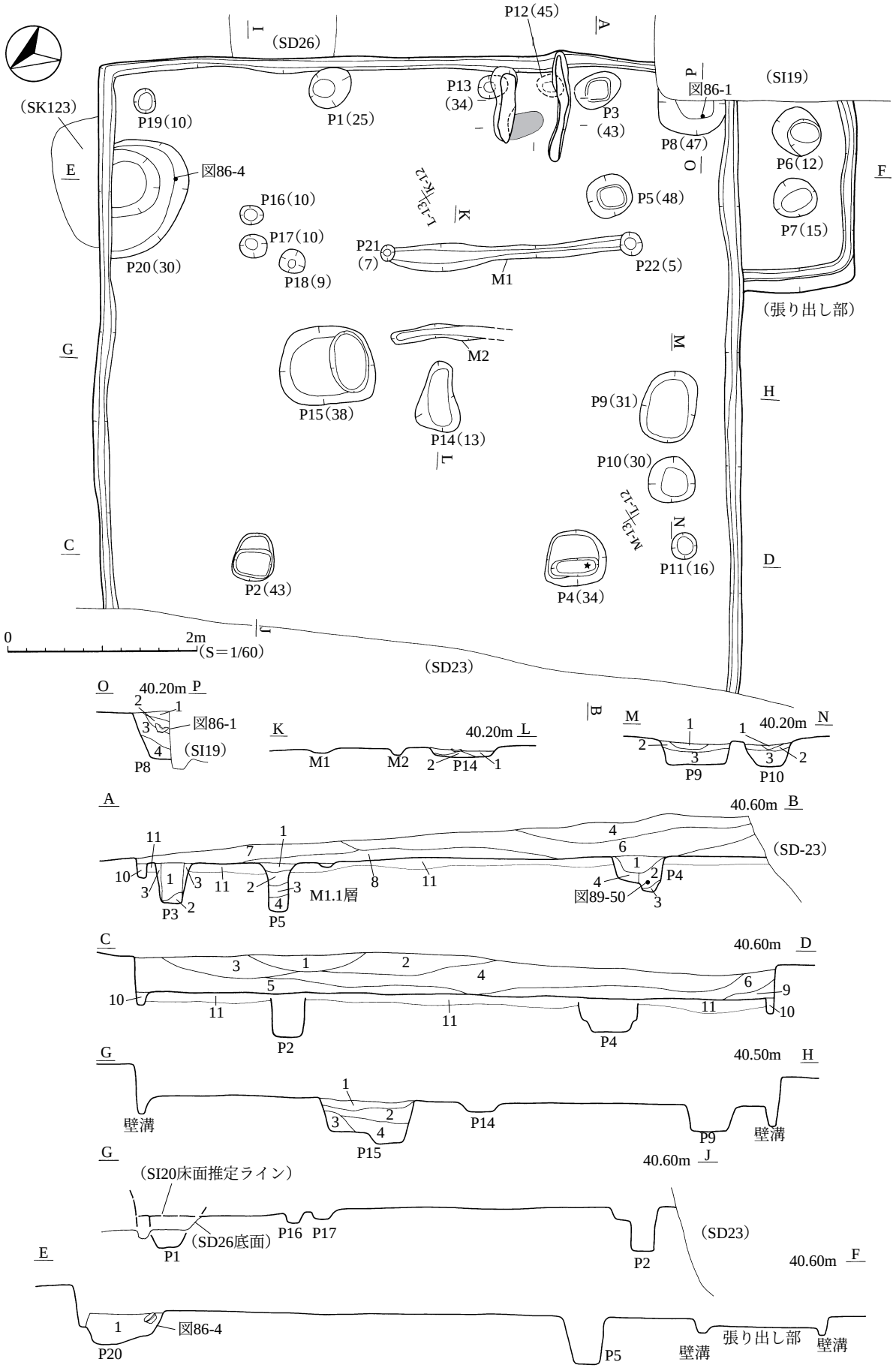
図89-40～51は鉄製品である。40・41は鏃先、42・43は鏃の柄、44・45は刀子、46・47は軸、49は塝、50は責め金具、48・51は不明鉄製品である。50は主柱穴と思われるＰ４より出土したもので、他は床面直上より出土している（図85）。51は形状が特殊で、これについての詳細は第９章第２節で述べているため、そちらを参照されたい。

図89-52は鉄が付着している礫である。Ｐ15の検出面より出土した。本石器は土師器片と接して出土しており（図85）、他の遺物と同様に廃棄された状況を示している。

縄文時代のものとしては前期中葉の土器片402ｇ、石匙、剥片、石錘などの石器も出土している。［小結］火山灰の堆積状況と遺物から構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。また、カマド確認面より出土した炭化物について行った炭素年代（ＡＭＳ法、補正年代）の結果も、1100±40（ｙＢＰ）で、想定された年代が示されている（第９章第２節参照）。

本遺構は鉄製品の出土が際だって多く、鉄の付着している礫も出土している。しかし、遺構内からは鍛冶に関連した施設は検出されておらず、鍛造剥片も出土していないことから、本遺構で鉄生産が行われた可能性は低いと考えられる。住居規模も大きい事から鉄製品を保持する事ができる特別な存在の人が居住していた可能性も考えられる。また、南西端の主柱穴であるＰ４内より鉄製の責め金具が出土している。相関性があるかは不明であるが、隣接している第15号住居跡の同位置の主柱穴より、土師器の坏が略完形で出土しており、この位置の柱穴に特別な意味があった可能性も考えられる。

（小山）



P12（45）
（SD26）
（SK123）
P19（10）
P1（25）
P13
（34）
P3
（43）
図86-1
（SI19）
P8（47）
P6（12）
図86-4
P16（10）
P5（48）
P7（15）
P17（10）
P21
（7）
P22（5）
P20（30）
P18（9）
M1
（張り出し部）
M2
P15（38）
P9（31）
P14（13）
P10（30）
P11（16）
P2（43）
P4（34）
0
2m
（S＝1/60）
（SD23）
40.20m
図86-1
（SI19）
P8
M1
M2
P14
P9
P10
40.60m
（SD-23）
M1.1層
P3
P5
図89-50
P4
P2
40.50m
壁溝
P15
P14
P9
壁溝
40.60m
（SI20床面推定ライン）
（SD26底面）
P1
P16
P17
P2
（SD23）
40.60m
図86-4
P20
P5
壁溝
張り出し部
壁溝

図84　第20号住居跡

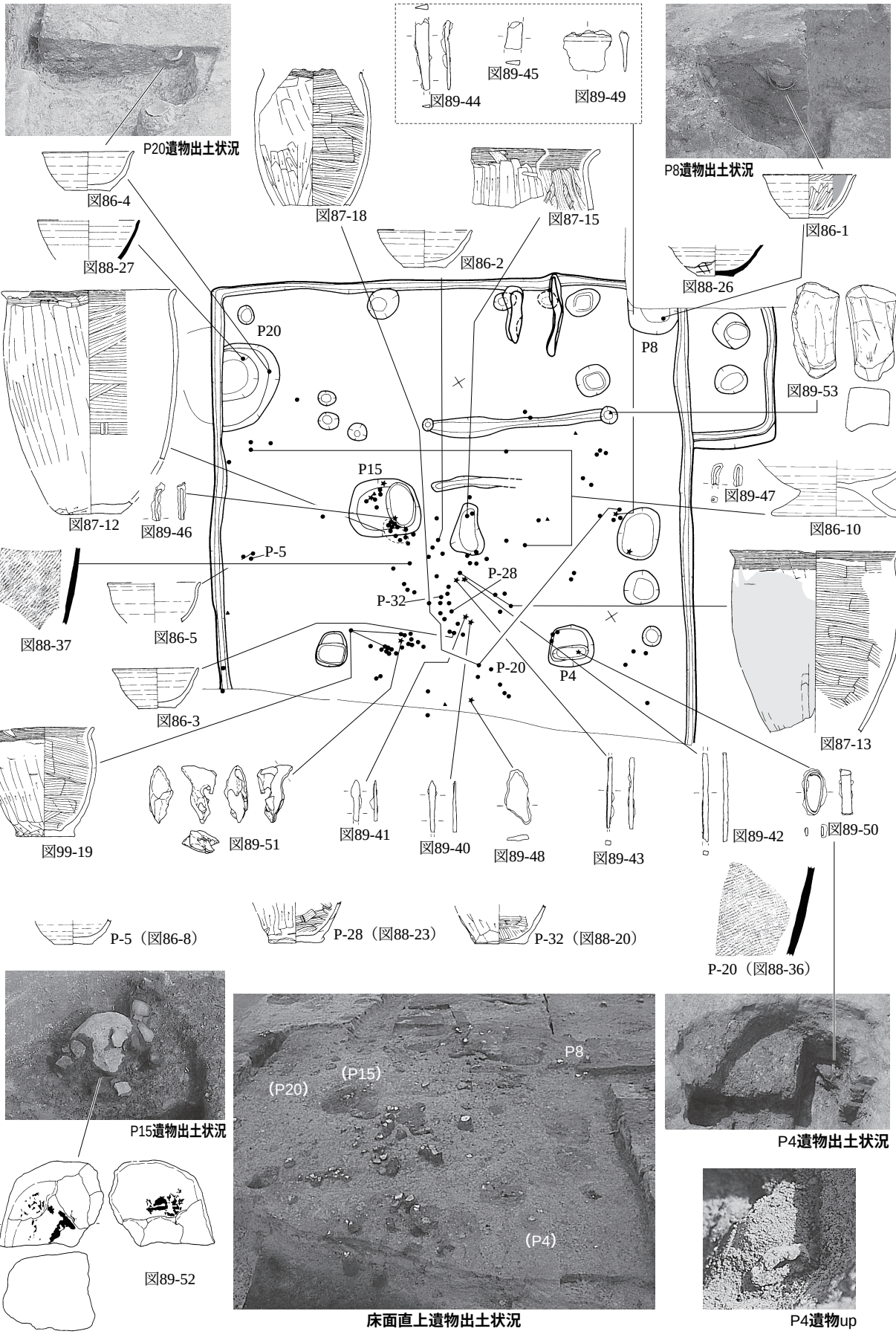
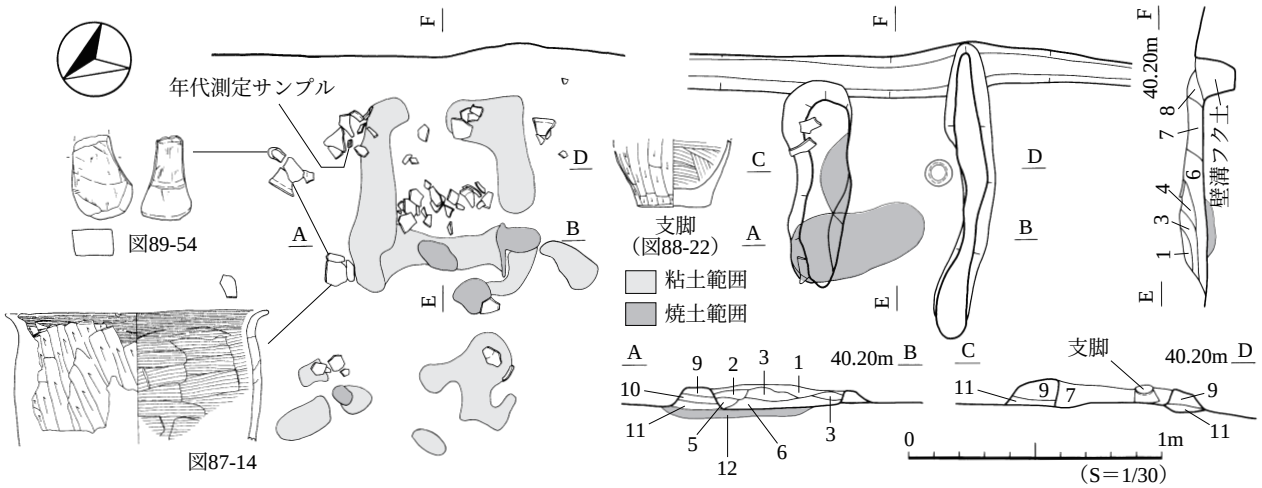


図85　第20号住居跡　遺物出土状況



カマド　堆積土
第１層　にぶい黄褐色土　10YR5/4　崩落粘土
第２層　褐　色　土　10YR4/4　ローム粒、焼土粒微量
第３層　褐　色　土　10YR4/6　崩落焼土
第４層　暗褐色土　10YR3/3　粘土粒、焼土粒微量
第５層　褐　色　土　10YR4/4　袖の崩落土
第６層　暗褐色土　10YR3/4　焼土粒微量
第７層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量
第８層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒微量
第９層　にぶい黄褐色土　10YR5/4　袖の粘土層
第10層　黒褐色土　10YR3/2　粘土塊、焼土粒微量
第11層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒微量
第12層　明褐色土　7.5YR5/8　火床面

第20号住居跡　堆積土
第１層　褐　色　土　10YR4/6　ローム塊微量
第２層　褐　色　土　10YR4/4　ローム塊多量、粘土塊微量
第３層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒少量
第４層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒、粘土塊多量、ローム塊少量
第５層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒、ローム塊少量
第６層　暗褐色土　10YR3/3　ローム塊多量、黒色土ブロック少量
第７層　褐　色　土　10YR4/4　ローム塊、粘土塊少量
第８層　暗褐色土　10YR2/3　ローム粒多量、ローム塊、炭化物少量
第９層　褐　色　土　10YR4/6　ローム粒少量
第10層　暗褐色土　10YR2/3　ローム粒少量
第11層　褐　色　土　10YR4/4　ロームとの混合土、貼り床層

P3　堆積土
第１層　褐　色　土　10YR4/4　ローム粒、ローム塊少量
第２層　黄褐色土　10YR5/6　ローム粒少量
第３層　褐　色　土　10YR4/6　ローム粒少量

P4　堆積土
第１層　黒　色　土　10YR2/1　B-Tm火山灰粒状に混入
第２層　褐　色　土　10YR4/6　ロームとの混合土
第３層　明黄褐色土　10YR6/8　ロームとの混合土
第４層　黄褐色土　10YR5/8　ロームとの混合土

P5　堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒、炭化物微量
第２層　褐　色　土　10YR4/6　ローム粒、ローム塊少量
第３層　褐　色　土　10YR4/4　ローム粒、炭化物少量
第４層　褐　色　土　10YR4/6　ローム粒少量

P8　堆積土
第１層　褐　色　土　10YR4/4　ローム粒微量
第２層　褐　色　土　10YR4/6　ローム塊多量、土師器坏略完形品出土
第３層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒、炭化物微量
第４層　褐　色　土　10YR4/6　ローム塊多量、ローム粒、炭化物少量

P9　堆積土
第１層　にぶい黄橙色土　10YR5/4　ローム粒微量
第２層　褐　色　土　10YR4/4　ローム塊少量、粘土塊微量
第３層　明黄褐色土　10YR6/8　ロームとの混合土

P10　堆積土
第１層　明黄褐色土　10YR6/4　ローム層
第２層　褐　色　土　10YR4/4　ローム塊少量、粘土塊微量
第３層　明黄褐色土　10YR6/8　ロームとの混合土

P14　堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒少量
第３層　褐　色　土　10YR4/6　ローム塊多量

P15　堆積土
第１層　黒　色　土　10YR2/1　B-Tm火山灰粒状に混入
第２層　暗褐色土　10YR3/4　ロームとの混合土
第３層　褐　色　土　10YR4/6　ロームとの混合土
第４層　褐　色　土　10YR4/4　ロームとの混合土

P20　堆積土
第１層　褐　色　土　10YR4/6　ロームとの混合土

M1　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量

M2　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量

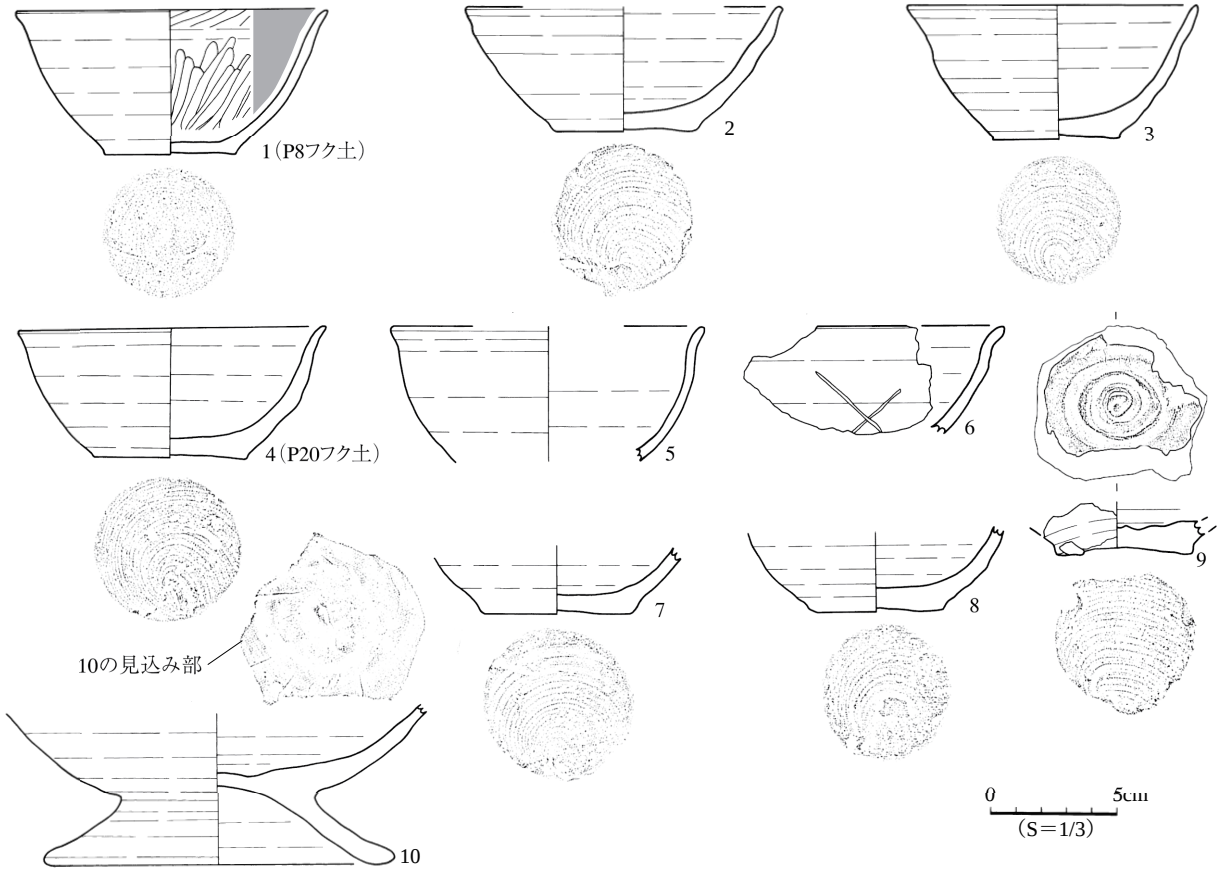


図86　第20号住居跡 カマドと出土遺物（1）

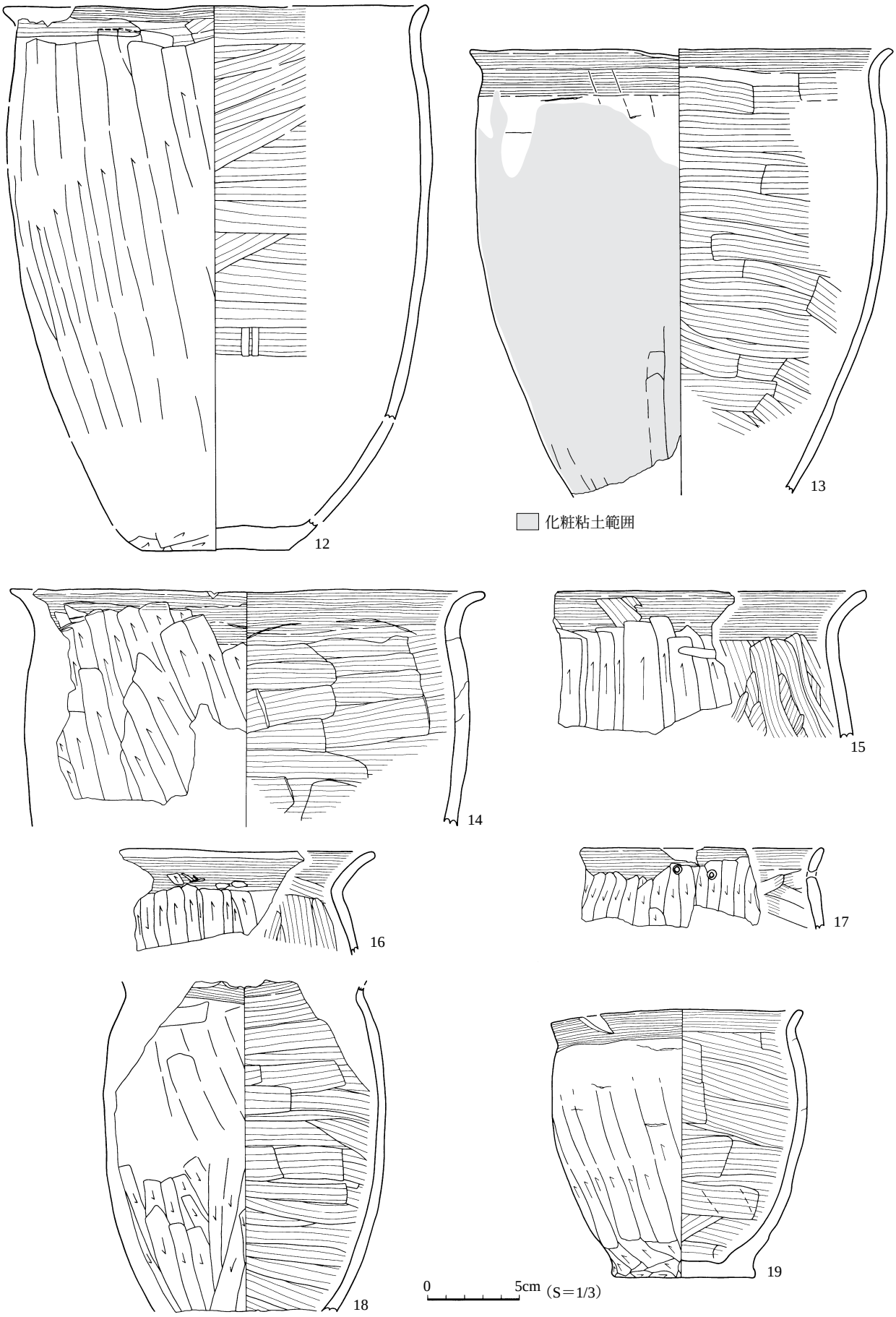


図87　第20号住居跡　出土遺物（2）

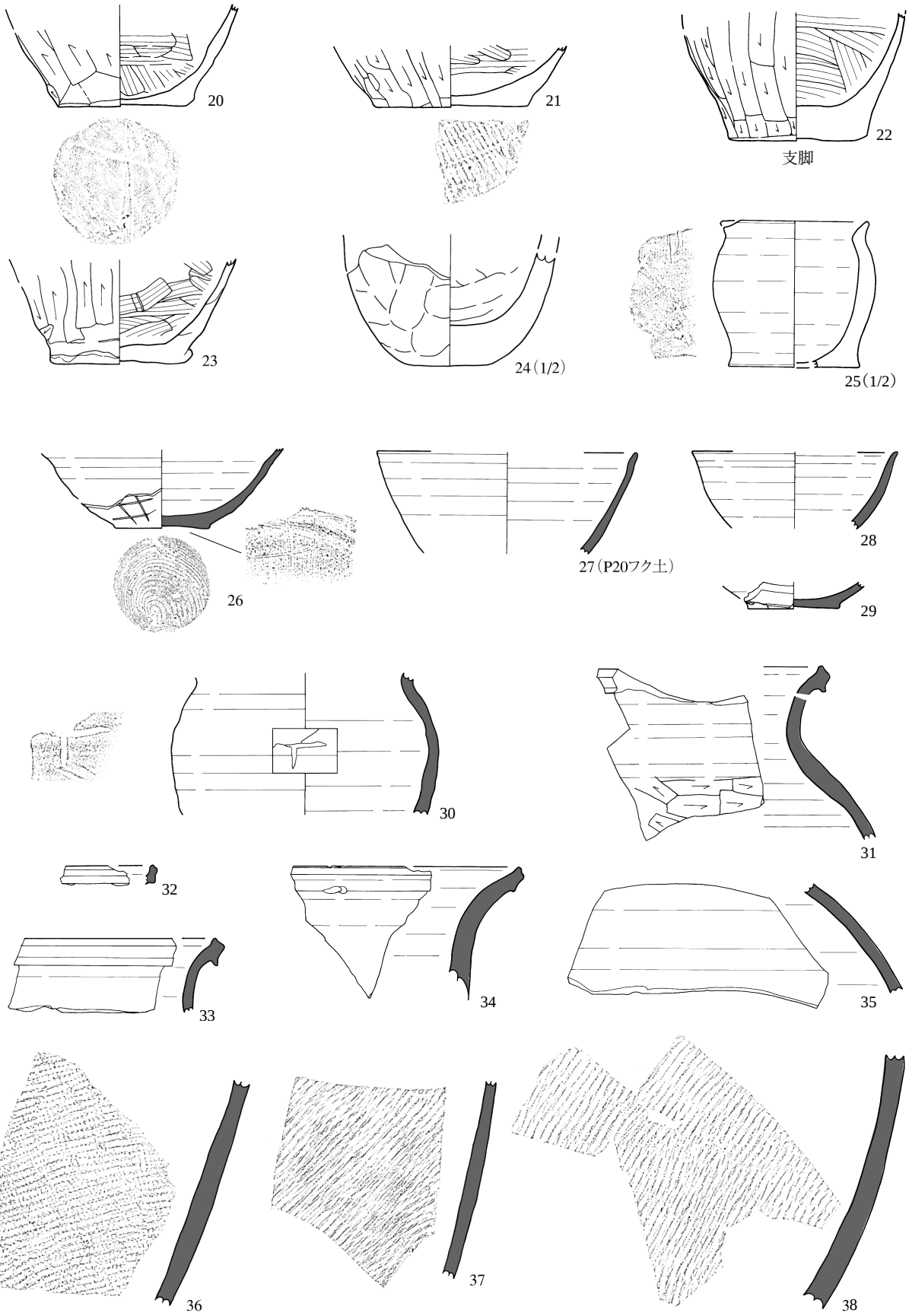


図88　第20号住居跡　出土遺物（3）

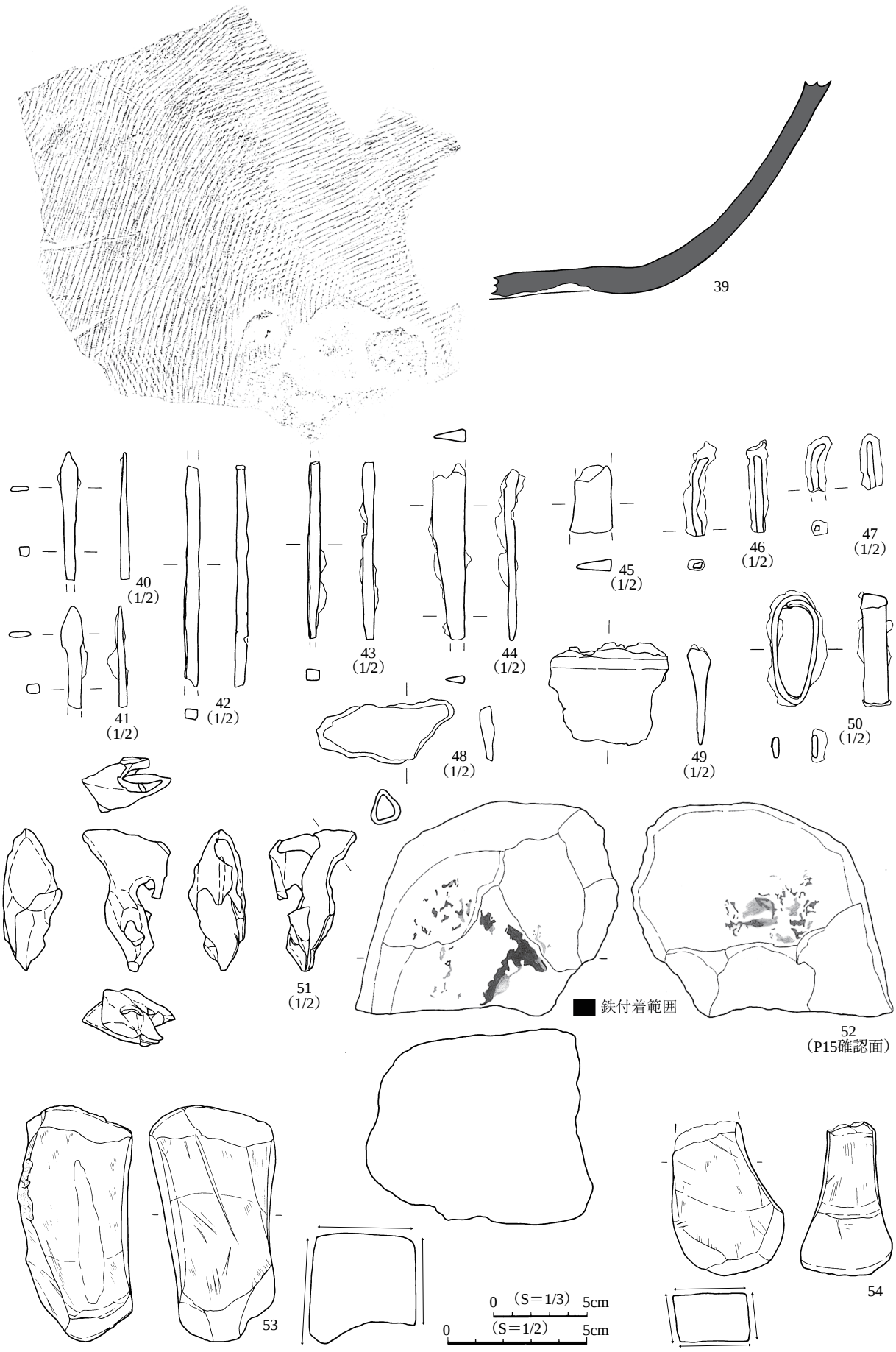


図89　第20号住居跡　出土遺物（4）

第21号住居跡（ＳＩ21）（図90）

［位置・確認］調査区南端で壕の外側、Ｊ・Ｋ－７・８グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より長方形プランとして確認した。

［重複］第31号溝跡より古く、第23号溝状土坑より新しい。

［平面形・規模］北側で壁の立ち上がりが検出されたが、ほとんどが床面のみの検出である。その床面も重複や斜面により大部分が削平されている。全体形は不明であるが、方形を基調としたものと考えられる。現存している床面規模は北側4.1m、西側2.6mで、床面積は（7.07㎡）である。

［壁・床面］検出された北壁の壁高は約８㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。

［堆積土］４層に分層された。第１層に白頭山火山灰（肉眼観察による）がブロック状に混入している。

［カマド］検出されなかった。

［壁溝］幅20～25㎝、深さ１5㎝の規模で、所々切れながら検出された。

［柱穴・ピット］４個の小穴が検出された。主柱穴は不明であるが、Ｐ１が配置から主柱穴の一部になる可能性も考えられる。

［出土遺物］土師器片４点（25ｇ）、縄文時代前期中葉の土器片172ｇが出土している。

［小結］堆積土に白頭山火山灰がブロック状に堆積していることから、構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

第22号住居跡（ＳＩ22）（図90）

［位置・確認］調査区最南端で壕の外側、Ｌ・Ｍ－７・８グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より長方形プランとして確認した。

［重複］床面の大半が現代の道路により削平されている。

［平面形・規模］削平等を受けていない北壁の規模は3.2mで、現存している西壁は1.5m、東壁は1.0mである。東西軸の軸長は、3.25mである。現存している床面積は（6.43㎡）である。

［壁・床面］壁高は最大で北壁20㎝、東壁８㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。

［堆積土］黒褐色土の単層でロームブロックやローム粒が混入している。

［カマド］検出されなかったが、東壁の壁際から15×20㎝の不整形範囲で、焼土と粘土が検出された。カマドの崩落土である可能性が考えられる。

［壁溝］検出されなかった。

［その他の施設］土坑が１基検出された。平面形は円形で、上場規模は1.1×1.0m、下場規模は0.7×0.6mで、深さは50㎝である。堆積土は３層に分層されるが、どの層にもロームブロックが多量に混入しており、一気に埋められたような状況を示している。

［柱穴・ピット］総数２個の小穴を検出した。配置等から主柱穴と考えられる。

［出土遺物］出土しなかった。

［小結］遺物が出土しないため、詳細な年代は不明であるが、平面形が方形を基調とすること、掘り方を持つことなどから平安時代のものと考えられる。（小山）

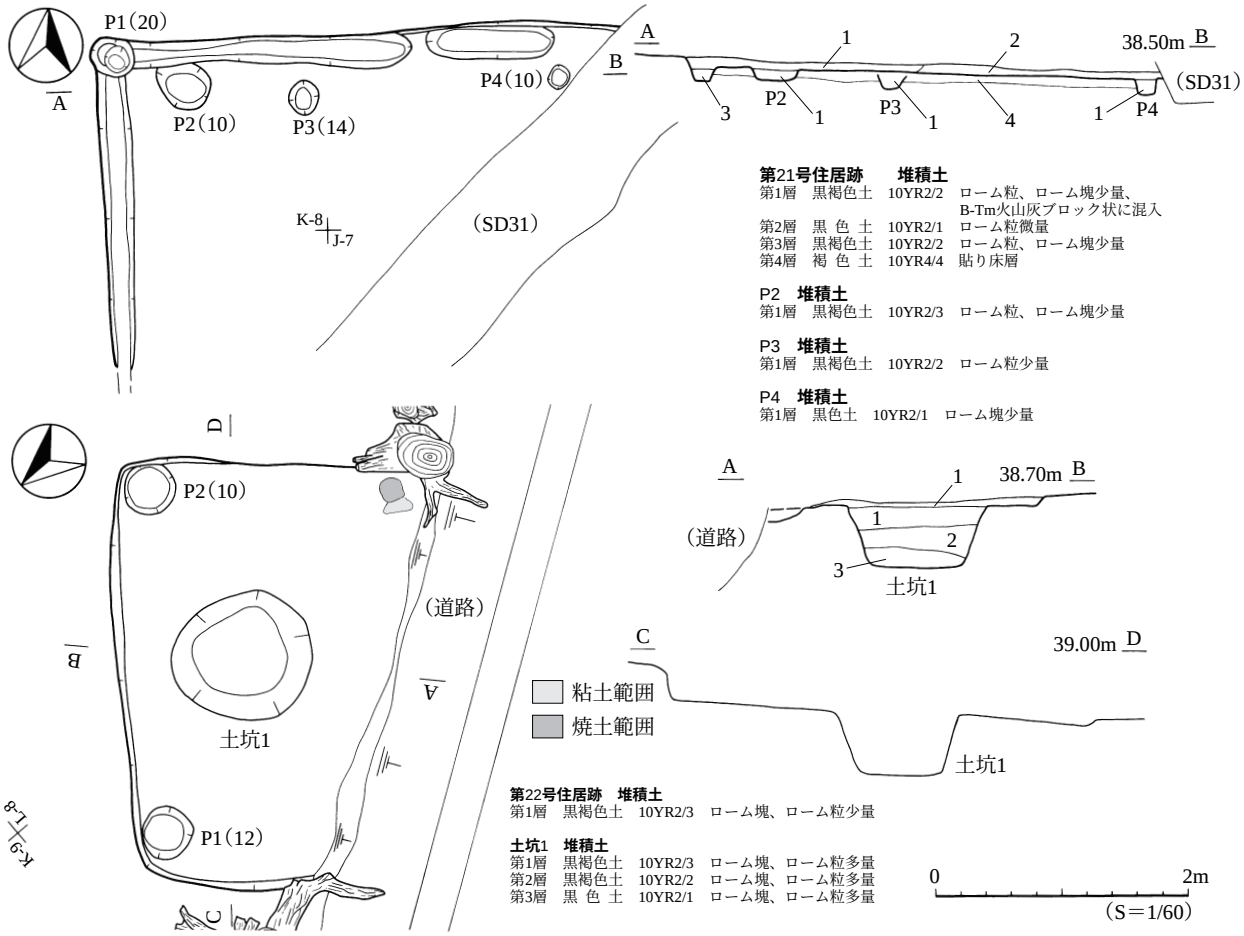


図90　第21号・22号住居跡

第23号住居跡（ＳＩ23）（図91・92）

［位置・確認］壕の北東側、内壕と外壕に挟まれたＫ－22・23グリッドに位置している。北側には、第24号住居跡が隣接して検出されている。

［重複］内壕と重複し、これより古い。

［平面形・規模］平面形は方形で、東壁4.25m、西壁4.22m、南壁4.15m、北壁4.22m、長軸（東西）4.30m、短軸4.16mである。床面積は16.23㎡である。主軸方位は北から103度東へ傾いている。

［壁・床面］壁高は東壁35㎝、西壁75㎝、南壁42㎝、北壁35㎝である。床面はほぼ平坦であるが、中央付近がいくぶん高くなっている。基本層序の第Ⅵ層上面まで掘り込み、ローム粒混じりの暗褐色土を１㎝程度の厚さで貼って、床面を構築している。

［堆積土］13層に分層された。このうち第３層～第12層はほぼ同質の層で、ローム粒やロームブロックの混入の度合いで土色が異なっている。大部分は暗褐色や黒褐色系の色調であるが、壁際や床面近くには大きなロームブロックが多く褐色系の色調となっている。また、汚染された白頭山火山灰（火山灰分析結果による）の小ブロックも点在して見られる。人為堆積と思われる。第13層は掘り方埋土である。

［カマド］東壁の南寄りに場所に構築されており、遺存状態は良好である。カマド本体は灰白色の粘土とローム質の粘土を用い、少量の土師器片を芯材として用いている。また、前庭部を含むカマド周辺には厚さ２㎝のロームを貼り付けており、非常に硬く踏みしめられている。燃焼部は幅35㎝、奥行

き68㎝である。火床面は35×40㎝の円形で、７㎝ほど窪んでいる。煙道部の構造は半地下式で、煙道の短いものである。煙道底面はやや急角度で立ち上がり、壁からは47㎝のびている。煙出孔はその内側につくられており、壁に接する場所にある。煙出孔の大きさは径22㎝×25㎝で、検出面からの深さは15㎝である。

［壁溝］幅15～20㎝、深さ14～30㎝の壁溝が壁直下に巡っている。掘り方の調査では、カマド脇の土坑（Ｐ３）下部からも検出されたが、カマド下部には掘り込まれていなかった。

［柱穴・ピット］住居内から２個、壁隅と壁溝内から８個のピットを検出した。このうち、柱穴と考えられるのは三隅と壁中央に位置するピットである。南西隅では削平されて確認できなかったが、四隅の主柱と壁中央の柱で構成される柱穴配置と考えられる。

［その他の施設］東壁のカマド北側に短軸63㎝、長軸1.05㎝の楕円形の土坑が検出された。壁からは40㎝外側に張り出している。底面には凹凸が認められ、最も深い場所で34㎝である。

［出土遺物］土師器片219点（5465ｇ）、須恵器４点（96ｇ）が出土した。大半がカマドを中心とする東側からの出土である。土師器は甕の破片が多く、完形に復原できたものはない。また、第44号住居跡の床面から床面直上にかけて出土したものと接合しているものもある。図92-１は「キ」に似た刻書が描かれている須恵器の坏である。このほかに、縄文時代前期の土器片130点（1331ｇ）や石器19点（削器・剥片、石鋸・石錘等）が出土している。

［小結］平面形が方形の一般的なサイズの住居である。カマドは東壁の南寄りの場所にあり、煙出孔は壁に接する位置に構築されている。火山灰分析では、白頭山火山灰と思われた資料には十和田ａテフラ起源の火山ガラスの混入も見られ、汚染されていることが明らかになっている。この汚染された白頭山火山灰の混入状況から、構築年代は10世紀中葉以降と思われるが、カマド火床面の直上から出土した炭化物について行った炭素年代（ＡＭＳ法、補正年代）は1160±40（ｙＢＰ）で、想定より古い年代が示されている（第９章第２節参照）。（畠山）

第24号住居跡（ＳＩ24）（図93・94）

［位置・確認］壕の北側、Ｊ～Ｌ－24～26グリッドに位置している。南側には第23号住居跡が隣接している。

［重複］第１号溝跡、外壕と重複しており、これらより古い。

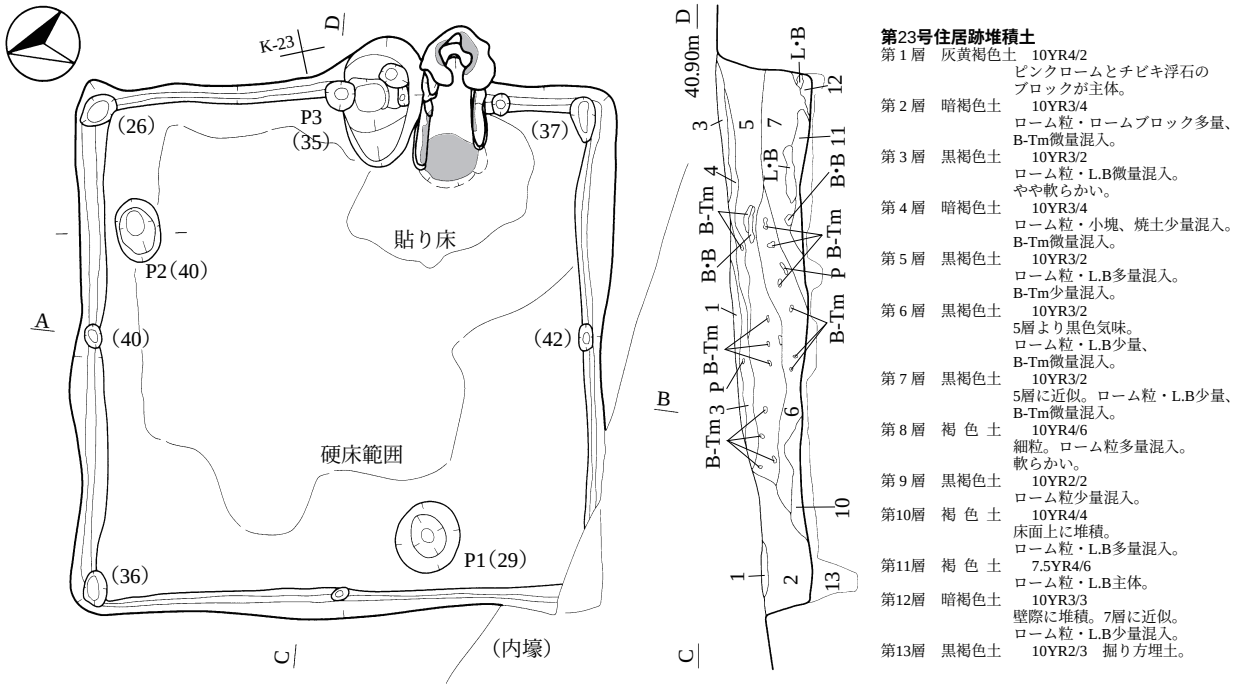
［平面形・規模］平面形は方形で、規模は東壁6.86m、北壁6.75m、残存部分の西壁4.5mである。長軸（東西）は6.80mであり、短軸は6.7mと推定される。推定床面積は約36㎡である。主軸方位は北から東へ110度傾いている。

［壁・床面］緩傾斜地に立地していることとや重複から壁・床面ともに西側の部分しか確認できなかった。壁高は西壁40㎝、東壁８㎝である。基本層序の第Ⅳ～Ⅴ層を掘り込み、ローム粒を含む暗褐色土や黒褐色土を踏み固めて床面を構築している。

［堆積土］３層しか確認できなかった。大半がローム粒やロームブロックを含んだ黒褐色土である。

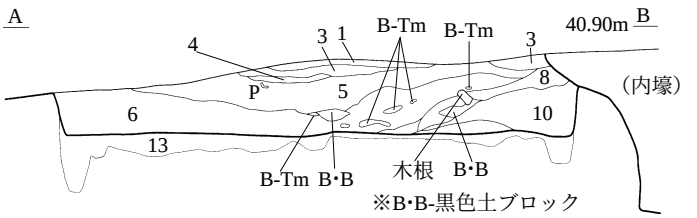
［カマド］東壁の北寄り、壁辺の約１／３の場所に構築されている。粘土と焼土粒・塊が散乱した状態で確認され、その下位から50×65㎝の楕円形の火床面を検出した。煙道部は確認できなかった。

［壁溝］東壁の中央付近を除き、幅25～48㎝、深さ30㎝前後の壁溝を検出した。



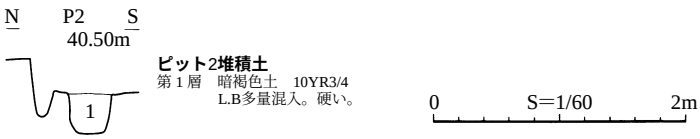
第23号住居跡堆積土

第1層	灰黄褐色土	10YR4/2	ピンクロームとチビキ浮石のブロックが主体。
第2層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・ロームブロック多量、B-Tm微量混入。
第3層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒・L.B微量混入。やや軟らかい。
第4層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・小塊、焼土少量混入。B-Tm微量混入。
第5層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒・L.B多量混入。B-Tm少量混入。
第6層	黒褐色土	10YR3/2	5層より黒色気味。ローム粒・L.B少量、B-Tm微量混入。
第7層	黒褐色土	10YR3/2	5層に近似。ローム粒・L.B少量、B-Tm微量混入。
第8層	褐 色 土	10YR4/6	細粒。ローム粒多量混入。軟らかい。
第9層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量混入。
第10層	褐 色 土	10YR4/4	床面上に堆積。ローム粒・L.B多量混入。
第11層	褐 色 土	7.5YR4/6	ローム粒・L.B主体。
第12層	暗褐色土	10YR3/3	壁際に堆積。7層に近似。ローム粒・L.B少量混入。
第13層	黒褐色土	10YR2/3	掘り方埋土。



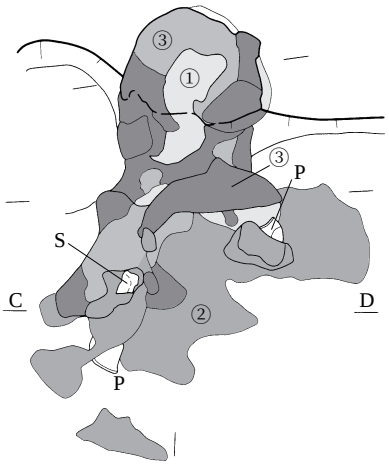
カマド堆積土

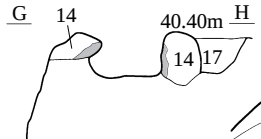
第1層	褐 色 土	10YR4/4	ローム粒少量混入。
第2層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒微量混入。
第3層	暗褐色土	10YR3/4	ローム塊、粘土塊少量混入。
第4層	灰黄褐色土	10YR4/2	粘土質。硬い。
第5層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	粘土質。硬い。
第6層	黄褐色土	10YR5/6	粘土質。ローム粒混入。
第7層	明黄褐色土	10YR6/8	粘土質。一部被熱。軟らかい。
第8層	褐 色 土	10YR4/4	ローム粒混入。
第9層	褐 色 土	10YR4/6	ローム粒、被熱した粘土塊混入。
第10層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒、焼土粒混入。硬い。
第11層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒混入。
第12層	灰黄褐色土	10YR5/2	粘土質。とても硬い。
第13層	黒褐色土	7.5YR3/2	粘土、灰、炭化物混入。
第14層	橙 色 土	7.5YR6/6	粘土質。袖。硬く、締まりあり。
第15層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	粘土質。とても硬い。貼床?。
第16層	明褐色土	7.5YR5/8	粘土質。硬い。貼床の一部?。
第17層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒混入。軟らかく、脆い。



ピット2堆積土
第1層　暗褐色土　10YR3/4
L.B多量混入。硬い。

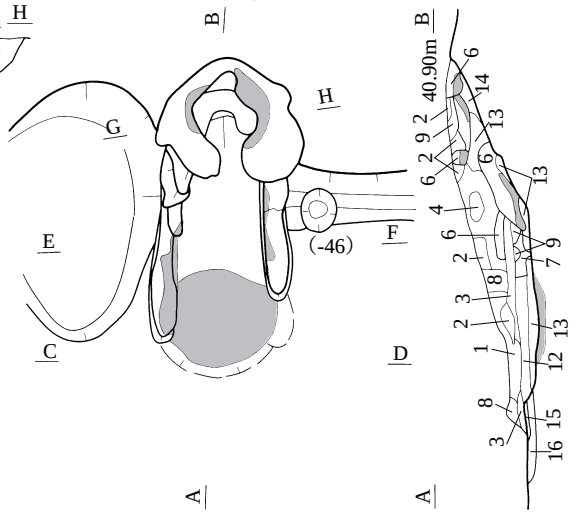
カマド確認状況

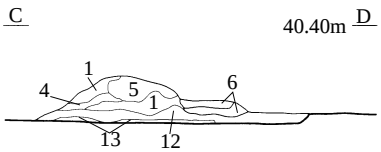




カマド確認状況
① 褐色土　10YR4/4
カマド層序第1層相当
② 灰黄褐色土　10YR4/2
カマド層序第4層相当
③ 黄褐色土　10YR5/6
カマド層序第6層相当

カマド完掘





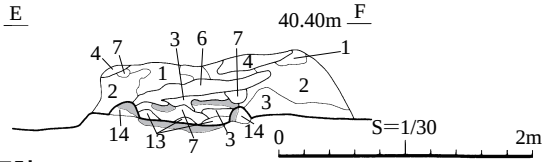
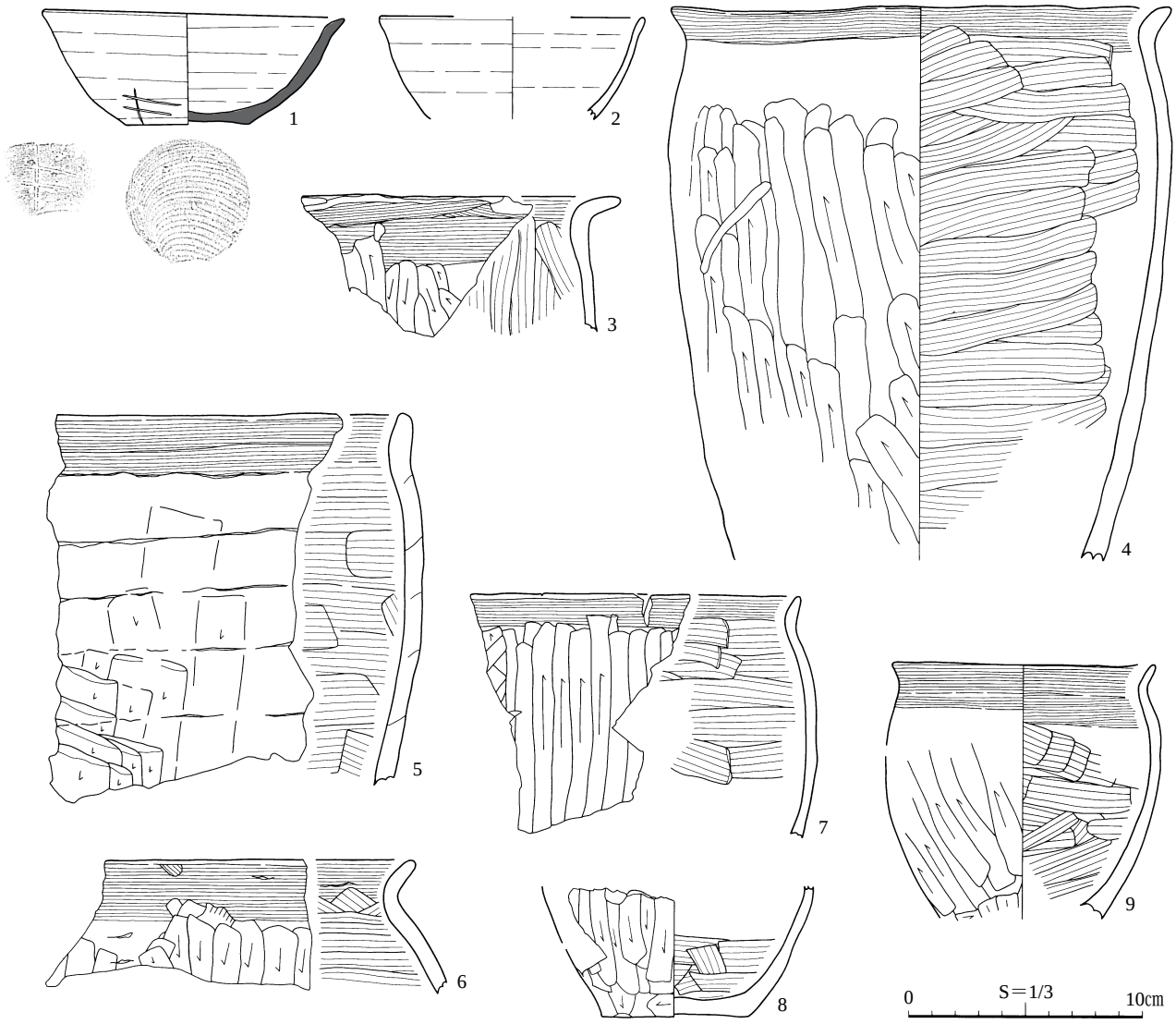


図91　第23号住居跡



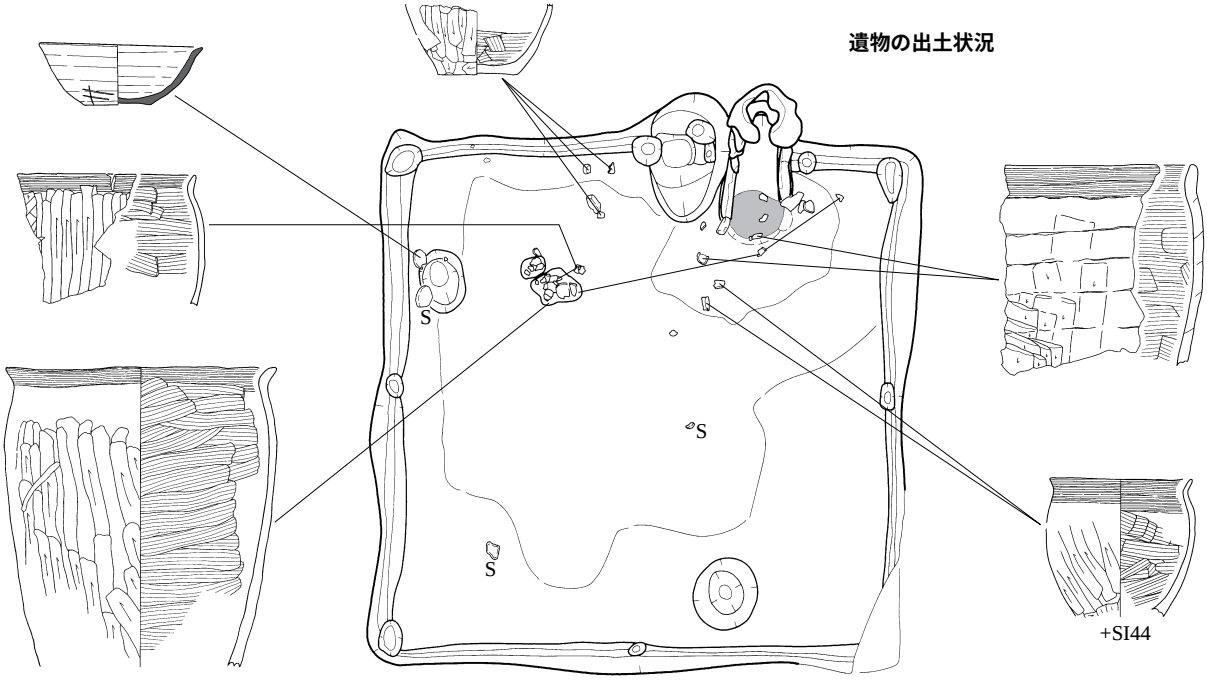
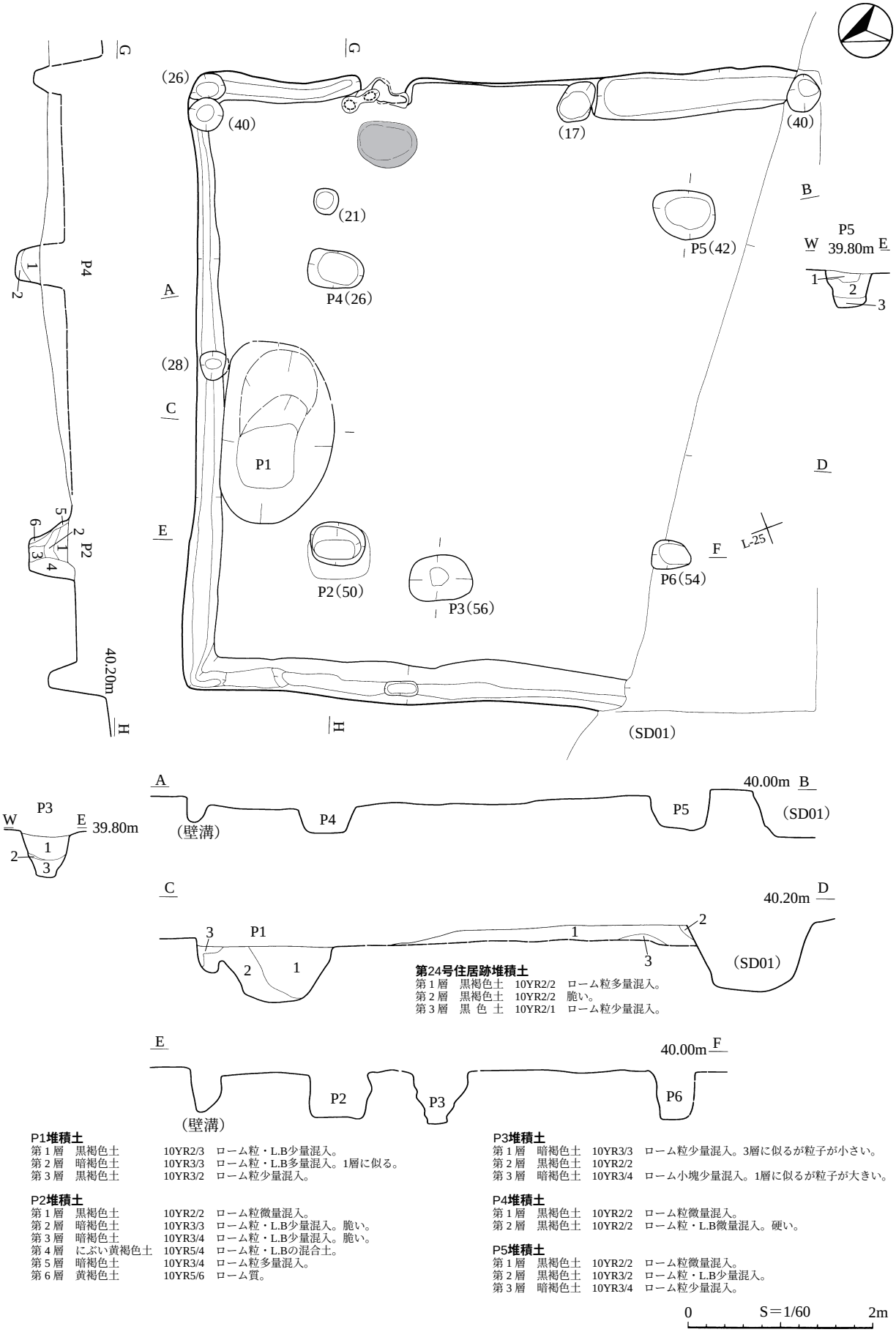


図92　第23号住居跡　出土遺物と出土状況



第24号住居跡堆積土
第1層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒多量混入。
第2層　黒褐色土　10YR2/2　脆い。
第3層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒少量混入。

P1堆積土
第1層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒・L.B少量混入。
第2層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒・L.B多量混入。1層に似る。
第3層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒少量混入。

P2堆積土
第1層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒微量混入。
第2層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒・L.B少量混入。脆い。
第3層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒・L.B少量混入。脆い。
第4層　にぶい黄褐色土　10YR5/4　ローム粒・L.Bの混合土。
第5層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒多量混入。
第6層　黄褐色土　10YR5/6　ローム質。

P3堆積土
第1層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒少量混入。3層に似るが粒子が小さい。
第2層　黒褐色土　10YR2/2
第3層　暗褐色土　10YR3/4　ローム小塊少量混入。1層に似るが粒子が大きい。

P4堆積土
第1層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒微量混入。
第2層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒・L.B微量混入。硬い。

P5堆積土
第1層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒微量混入。
第2層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒・L.B少量混入。
第3層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒少量混入。

0　S＝1/60　2m

図93　第24号住居跡

［柱穴・ピット］床面から６個、壁溝内から６個のピットを検出した。主柱穴と考えられるのは住居の内側に位置するＰ２・Ｐ４～Ｐ６の４個である。また、壁隅と壁構内に検出されたものも柱穴と考えられる。内側の４本柱と壁柱、隅柱が組み合わさる柱穴配置と考えられる。

［その他の施設］北壁際に短軸1.20m、長軸1.98mの楕円形の土坑（Ｐ１）を検出した。底面は西側に偏っており、深さ62㎝である。

［出土遺物］土師器242点（2854ｇ）、須恵器12点（坏、壺197ｇ）、ミニチュア土器３点、土玉２点、鉄器１点（刀子）が出土した。土師器は破片が多く、接合したものはほとんどない。須恵器には坏と壺の破片がある。図94-６は第10号住居跡出土のものと接合したもので、ヘラ記号が記されている。また、７は胎土分析による産地同定では、産地不明とされている。ミニチュア土器の10には、文字とも記号ともとれる稚拙なヘラ書きが描かれている。土玉の２は穴のない小さな丸玉で、おそらく土鈴に使用されたものと思われる。この他に、縄文時代前期前葉の土器片105点（1408ｇ）と石器５点（削器、半円状扁平打製石器等）が出土している。

［小結］壁辺の長さが６m以上もあり、本遺跡では比較的大型の部類に入る住居跡である。柱穴配置は住居の内側に位置する４本柱と壁柱が組み合わさる構造と思われる。（畠山）

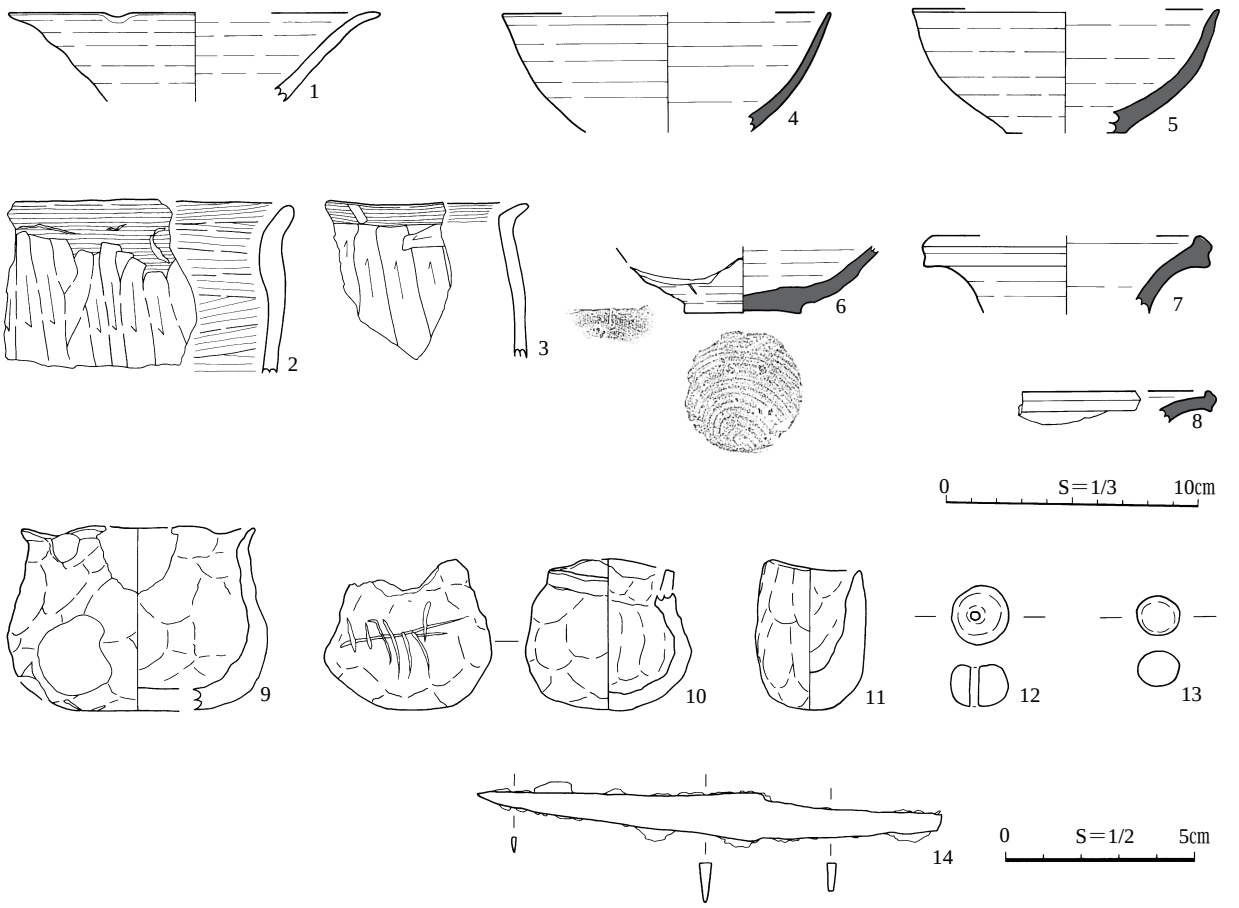


図94　第24号住居跡　出土遺物

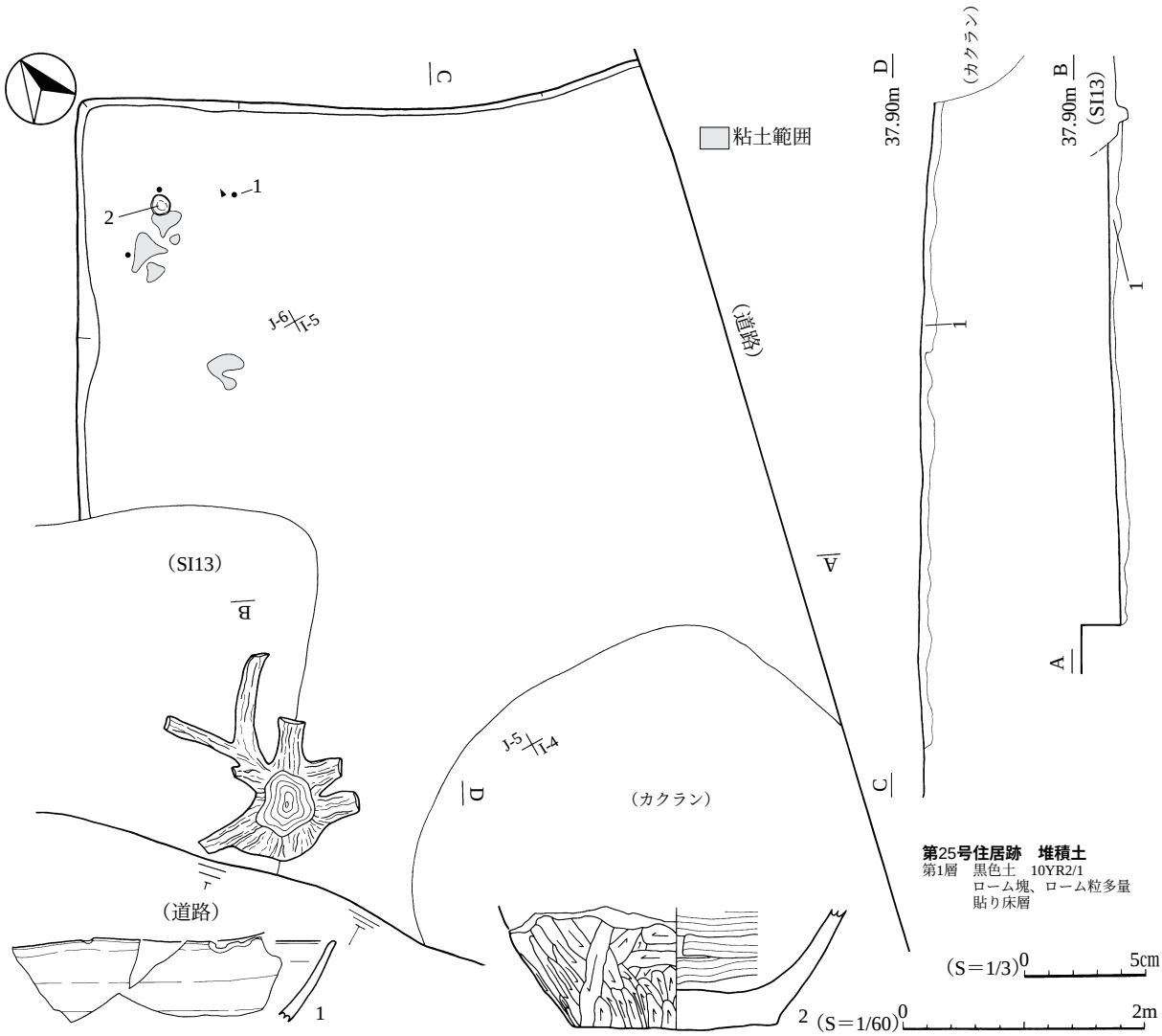


図95　第25号住居跡と出土遺物

第25号住居跡（ＳＩ25）（図95）

［位置・確認］調査区最南端で壕の外側、Ｉ・Ｊ－４・５グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より長方形プランとして確認した。本遺構は床面のみの検出である。

［重複］第13号住居跡より古く、床面の東側と南側大半が現代の道路により削平されている。

［平面形・規模］全体形は不明であるが、方形を基調としたものと考えられる。現存している床面規模は、北壁側4.6m、西壁側3.4mである。残存部が少なく、軸長、主軸の方位などは計測していない。

［床面］床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、黒色土と黄褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。硬化面等は検出されなかった。

［堆積土］単層で、掘り方層である。

［カマド］検出されなかった。北西端付近より幅30㎝前後の不整形な粘土範囲が検出されたが、検出位置等により、カマドに伴う施設である可能性は低いと考えられる。

［壁溝］検出されなかった。

［柱穴・ピット］検出されなかった。

［出土遺物］土師器片11点（474ｇ）が出土したほか、縄文土器片7.6ｇ、石槍１点が出土している。

［小結］詳細な構築年代は不明であるが、立地、平面形より平安時代の遺構と判断した。（小山）

第26号住居跡（ＳＩ26）（図96、97）

［位置・確認］調査区南側で壕の内側、Ｎ・Ｏ－15・16グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より方形プランとして確認した。

［重複］第４号住居跡、内壕より古い。なお、本遺構は拡張されており、新しい方から記載していく。

（新段階）

［平面形・規模］重複により全体形は不明であるが、方形を基調としたものと考えられる。規模は、重複の影響を受けていない北西壁で5.3mである。現存している南西壁は4.9m、北東壁は3.4mである。北東-南西軸は5.2mである。残存している床面積は約（22.09）㎡である。主軸方位は真北から西に約40度傾いている。

［壁・床面］壁高は北西壁で約35㎝、南西壁で10㎝、北東壁で約30㎝である。基本層序第Ⅴ層を掘り込んで床面とするほか、古段階の住居を平坦に埋め戻し床面としている。

［堆積土］黒褐色土を主体に６層に分層された。第３層は堆積土の主体を占める土層で、ロームブロックが含まれている。第６・７層は古段階住居の堆積土で、新段階の住居では床面となる。

［カマド］北西壁のほぼ中央より検出された。地下式のカマドである。堆積土は27層に分層された。燃焼部内には粘土や焼土が堆積しており、直下に崩落している状況が伺える。また、本カマドからは支脚が２つ検出されたが、支脚の上位には粘土は崩落しておらず、掛け口部分が開いた状態で崩落したと考えられる。

袖は床面に直接、黄褐色の粘土を盛り作られている。芯材等は検出されなかった。袖の遺存状態は良好で、左袖は30×70㎝、右袖は10×50㎝の規模で残存している。左袖の内側に被熱し赤変している範囲を確認した。煙道は地下式で約110㎝の長さで壁外に伸びている。煙道底面は煙出孔へ向かい緩やかに傾斜し、内傾しながら立ち上がっている。煙出孔は規模が30×35㎝で、壁から約75㎝離れた位置に構築されている。煙出孔の底面までの深さは、確認面から約40㎝である。支脚はカマド底面より５㎝ほど浮いた状態で検出された。支脚を支える土は強く被熱しており、使用時の状態で検出されたと考えられる。支脚１は約14×15㎝の扁平な礫を使用し、支脚２は底径約８㎝の甕の底部を使用している。火床面は第４号竪穴住居跡に切られるため全体規模は不明であるが、径約45㎝、深さは約５㎝で被熱している。燃焼部規模は55×95㎝である。

［壁溝］検出されなかった。

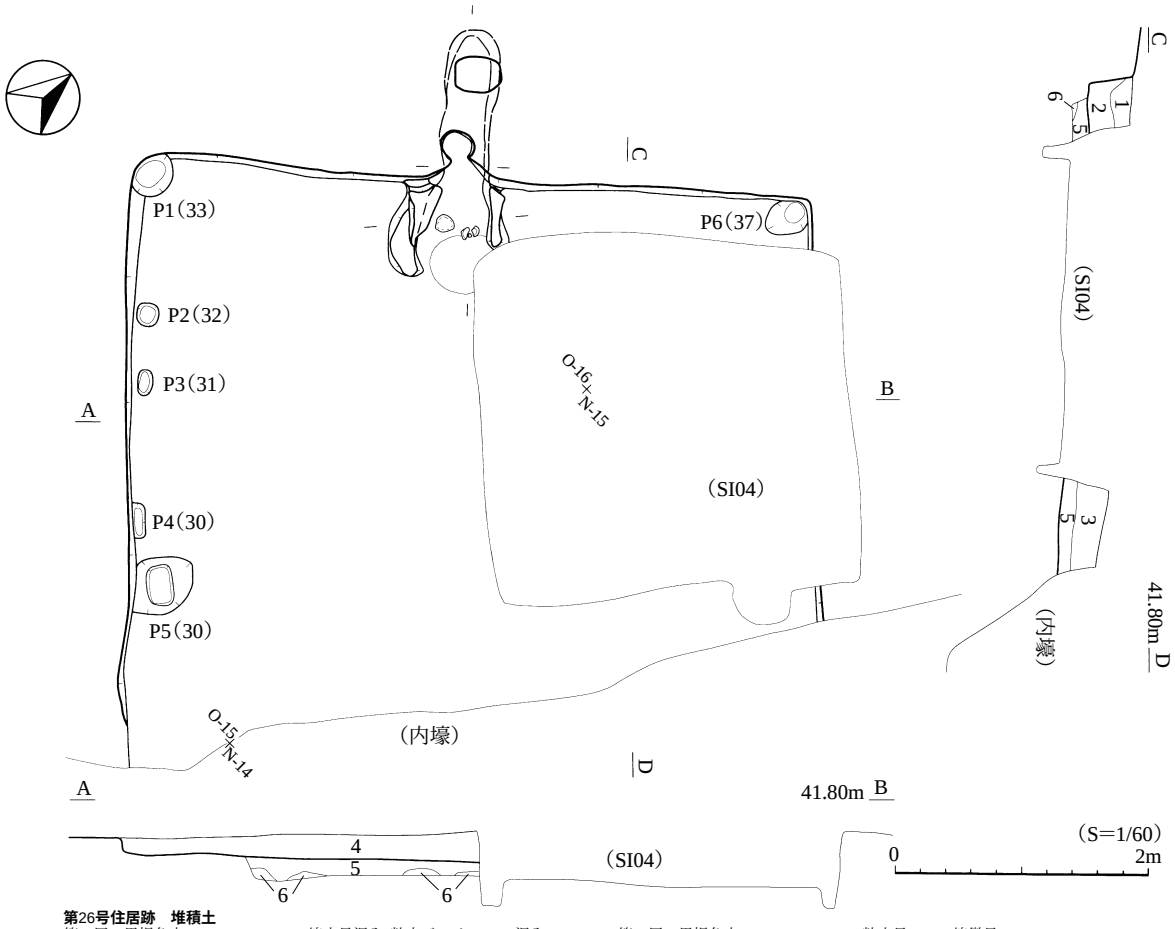
［柱穴・ピット］６個の小穴が検出された。深さ、配置からＰ１・６が主柱穴と考えられる。

（古段階）

［平面形・規模］重複により全体形は不明であるが、方形を基調としたものと考えられる。壁長は、重複の影響を受けていない北西壁で4.2mである。現存している南西壁は4.3m、北東壁は3.4mである。北東-南西軸は4.1mである。現存している床面積は約（16.63㎡）である。

［壁・床面］壁は、新段階の床面より約20㎝の深さで掘り込まれている。本段階の床面は調査時に一気に掘り方まで掘り下げたため、状況等は不明である。ただ、掘り方には凹凸があることから、床を貼って使用していたものと考えられる。

［カマド］煙道、袖等は検出されなかったが、煙出孔と思われる径25㎝ほどの施設が、壁から約40㎝離れた位置より検出された。明確な火床面は検出されなかったが、土層で観察すると新段階の右袖下



第26号住居跡　堆積土

第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム塊少量混入、粘土ブロック(φ20㎜)混入、層下位に黒色土が厚さ3㎝で堆積
第２層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量、ローム塊微量
第３層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒多量
第４層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒少量、ローム塊微量
第５層　黒褐色土　10YR2/2　ローム塊、粘土ブロック少量、層の上位に黒色土堆積、(古段階の堆積土で、新段階の貼り床層になる)
第６層　褐 色 土　10YR4/4　掘り方

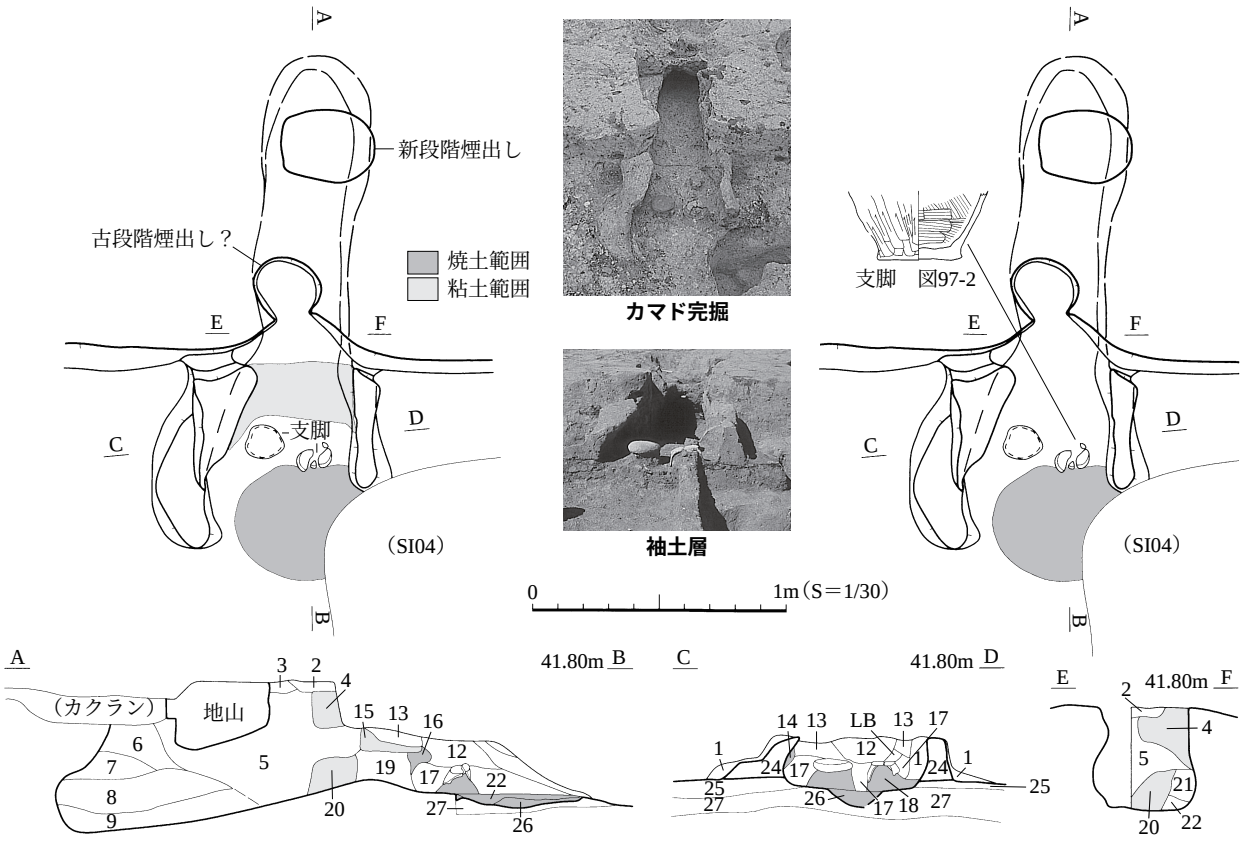


図96　第26号住居跡（新段階）

第26号住居跡カマド　堆積土

第１層　褐　色　土　10YR4/6　崩落粘土
第２層　黒 褐 色 土　10YR2/3　ローム粒微量
第３層　にぶい黄橙色土　10YR6/3　粘土ブロック層
第４層　黄 橙 色 土　10YR8/6　地山の崩落土
第５層　黒 褐 色 土　10YR2/3　粘土粒、粘土ブロック(φ5-30㎜)、ローム粒少量
第６層　褐　色　土　10YR4/4　ロームが粉状になり、全体に混入する
第７層　暗 褐 色 土　10YR3/4　ローム粒微量
第８層　褐　色　土　10YR4/4　ロームが粉状になり、全体に混入する。
　第6層と似るが、それよりもロームの混入度合は少ない。
第９層　黒　色　土　10YR2/1　ローム粒多量
第10層　黒　色　土　10YR2/1　ローム粒少量
第11層　暗 褐 色 土　10YR3/3　ローム粒微量
第12層　黒 褐 色 土　10YR2/3　ローム粒多量、焼土粒、炭化物微量
第13層　暗 褐 色 土　10YR3/4　ローム粒多量
第14層　明 褐 色 土　7.5YR5/6　崩落焼土
第15層　黄 橙 色 土　10YR8/6　地山の崩落土
第16層　明 褐 色 土　7.5YR5/6　崩落焼土
第17層　明 褐 色 土　7.5YR5/6　焼土粒多量、ローム粒、炭化物微量
第18層　明 褐 色 土　7.5YR5/6　支脚台になる部分、強い被熱を受ける
第19層　にぶい黄橙色土　10YR6/4　天井の崩落土
第20層　黄 橙 色 土　10YR8/6　地山の崩落土
第21層　暗 褐 色 土　10YR3/4　ローム粒微量
第22層　暗 褐 色 土　10YR3/4　ロームとの混合土
第23層　赤 褐 色 土　5YR4/8　火床面
第24層　黄 褐 色 土　10YR5/6　袖部、袖の内側に強い被熱が認められる
第25層　黒　色　土　10YR2/1　ローム塊(φ10-20㎜)少量、掘り方
第26層　褐　色　土　7.5YR4/6　古段階カマドの火床面か?
第27層　明 黄 褐 色 土　10YR6/8　ロームとの混合土、掘り方

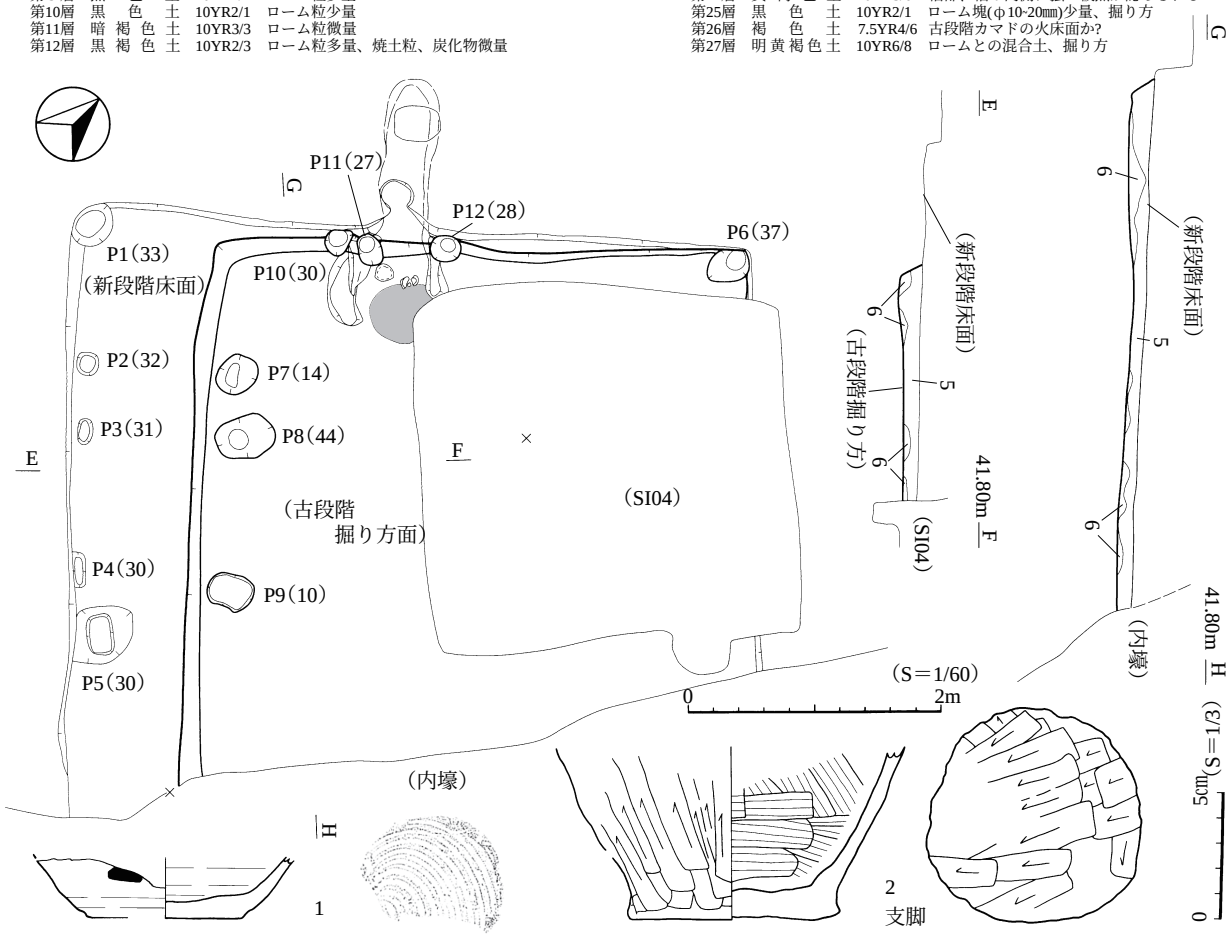


図97　第26号住居跡（古段階）と出土遺物

より焼土層が検出されており、この部分が火床面であった可能性が考えられる。煙出孔と火床面の位置より、ほぼ同位置にカマドが構築されていたと考えられる。その場合、古段階のカマドは、壁辺のちょうど１／３の位置に構築されていたと考えられる。

［壁溝］検出されなかった。

［柱穴・ピット］６個の小穴が検出された。主柱穴は不明である。

［出土遺物］新段階、古段階あわせて、土師器片50点（630ｇ）が出土している。１は土師器坏で墨書が見られる。２は支脚に用いられていた土師器甕である。その他に縄文時代の遺物として前期中葉の土器片が71ｇ、削器が１点出土している。

［小結］本遺構のカマドは本遺跡で唯一の地下式のカマドで、カマドの軸方向も北西向きである。なお、本遺構はカマドの位置を変えずに、北東壁を基準として１方向ないしは２方向へ拡張している。詳細な年代は不明であるが、煙道部の構造から遺跡内でも古い時期になると思われる。（小山）

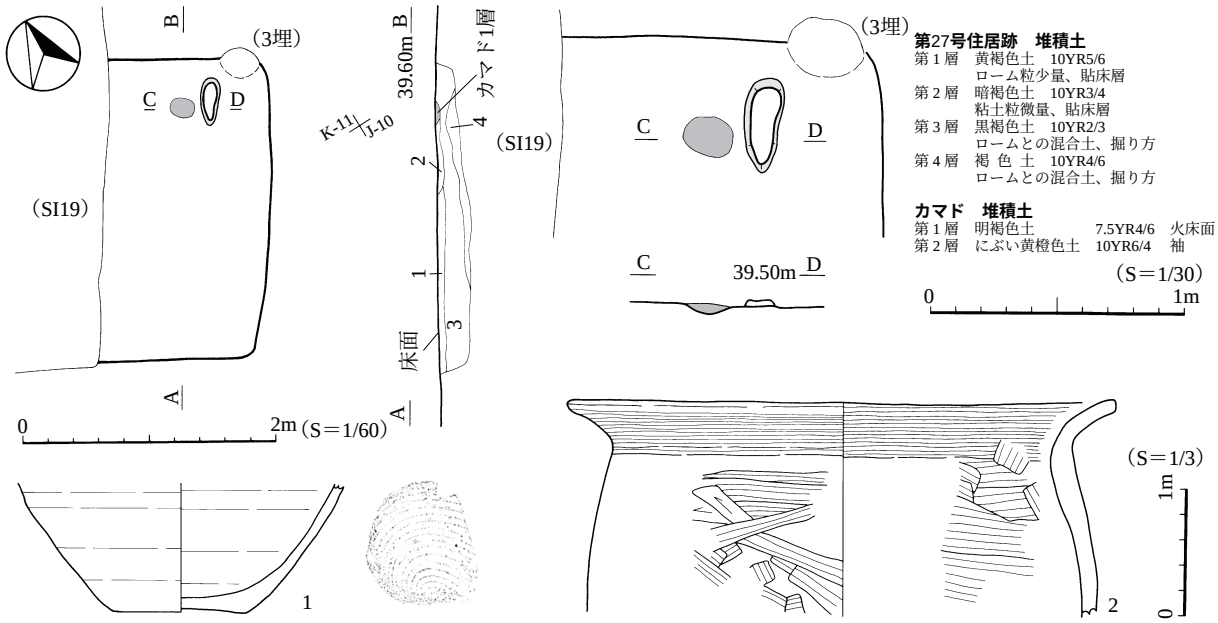


図98　第27号住居跡と出土遺物

第27号住居跡（ＳＩ27）（図98）

［位置・確認］調査区南側で壕の外側、Ｋ－10・11グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より長方形プランとして確認した。本遺構は床面のみの検出である。

［重複］第19号住居跡、第３号埋設土器より古い。

［平面形・規模］重複により全体形は不明であるが、方形を基調とするものと考えられる。規模は重複の影響を受けていない東辺が2.3mで、現存している北辺は1.2m、南辺は1.2m、南北軸長は2.4mである。残存している床面積は（3.00㎡）で、主軸方位は真北から東に約35度傾いている。

［壁・床面］壁は検出されなかった。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。

［堆積土］暗褐色土を主体にして４層に分層された。貼り床及び掘り方層である。

［カマド］北壁の東側より検出された。住居確認時に火床面と袖の一部が検出されており、大部分が削平されている。袖はにぶい黄橙色の粘土で作られており、芯材等は検出されなかった。袖の遺存状態は悪く、右袖のみの検出である。規模は25×75㎝で、高さは約３㎝である。煙道、支脚等は検出されなかった。火床面は15×20㎝の規模で、約５㎝の深さで被熱している。本カマドは床面に直接粘土を盛り構築されている。

［壁溝・柱穴・ピット］検出されなかった。

［柱穴・ピット］検出されなかった。

［出土遺物］土師器片49点（590ｇ）、須恵器片１点（3.5ｇ）が出土している。他に縄文時代の遺物として、前期中葉の土器片が38ｇ、削器が１点出土している。

［小結］カマドの向きが本遺跡で唯一北向きである。詳細な時期は不明であるが、重複より10世紀中葉以前には廃棄されていた遺構と考えられる。（小山）

第29号住居跡（ＳＩ29）（図99・100）

［位置・確認］壕の北西側、Ｑ－29・30グリッドに位置している。大半が調査区域外にあるため、北東側の一部しか検出できなかった。北側には第30号住居跡が隣接している。

［重複］なし。

［平面形・規模］検出したのは東壁と北壁のおよそ半分である。東壁は5.23mで、北壁は3.45mを検出した。主軸方位は北から東へ125度傾いている。

［壁・床面］壁高は北壁８㎝、東壁10～20㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘り込み、平坦に整地している。東壁添いに、硬い床面を検出した。

［堆積土］７層に分層した。堆積土の大半はローム粒やロームブロックを多量に含んだ暗褐色土で占められており、人為堆積の様相を呈している。第７層は掘り方の堆積土である。

［カマド］東壁の南寄り、壁辺の約１／４の場所に構築されている。天井部は袖の両外側及び焚き口方向へ崩落した状況を示している。カマドは灰白色粘土を主体に、焼土ブロックを混入させたものを用いて構築されている。燃焼部の幅は焚き口部で55㎝、煙道口で30㎝で、奥に行くにしたがい幅が狭くなっている。長さは97㎝である。火床面は36×44㎝の大きさで、４㎝の厚さで被熱している。支脚は検出されなかった。煙道部は半地下式の構造で、幅25㎝、長さ42㎝である。これには、幅約60㎝、長さ40㎝、深さ５㎝ほどの浅い方形状の掘り方が伴っている。煙出孔は確認状況やセクションから推定して径20㎝前後の規模と思われ、壁に近接していた可能性が高い。

［壁溝］検出されなかった。

［柱穴・ピット］壁に沿って８個のピットを検出した。壁柱穴が並ぶタイプの柱穴配置と考えられる。東壁の柱穴間の間隔は、Ｐ１・Ｐ８・Ｐ５・Ｐ４の順に1.20m・1.55m・2.25mとなっている。Ｐ５とＰ４の間にはカマドが設置されているため広くなっているが、カマドの中軸線は1.2m前後にあるので、壁辺を四分割した部分にカマドと柱穴が並んでいることになる。また、西壁のＰ１とＰ３の間隔は2.55m、Ｐ１とＰ２とは2.25mである。東壁と近似した値であり、やや規則的な壁柱穴の配置となっている。なお、Ｐ１とＰ２、Ｐ４とＰ９はそれぞれ近接して検出され、改築の可能性が考えられる。

［出土遺物］土師器片50点（1054ｇ）、須恵器片４点（壺・甕、148ｇ）が出土した。カマド付近からの出土が多い。図100-１土師器坏は破片資料であるが、口縁部の内外にタール状の物質が付着しており、灯明具に再利用されている可能性がある。７は約10m離れた第３号溝跡や25m離れた場所から出土した破片と接合している。このほかに、縄文時代前期の土器片（総重量3218ｇ）、石器11点（削器、敲石等）が出土した。

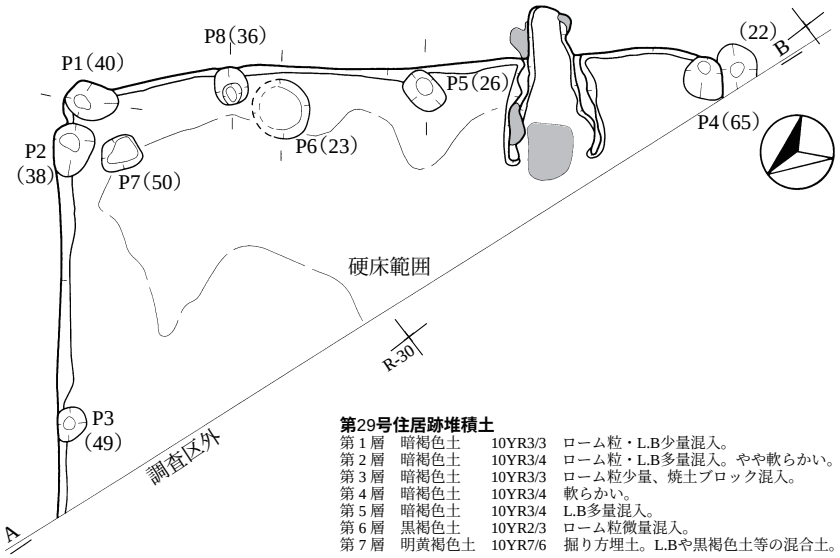
［小結］北東側しか検出されなかったが、一辺が５mほどで、壁柱穴で建つ構造の住居と思われる。カマドは半地下式で、煙出孔は壁に近接した場所に構築されている。（畠山）

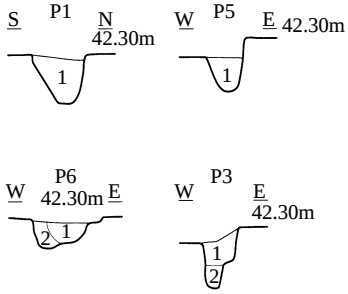
第30号住居跡（ＳＩ30）（図101）

［位置・確認］壕の北側、Ｐ・Ｑ－31･32グリッドに位置している。南側に第29号住居跡、北側に第32号・33号住居跡が隣接している。緩傾斜地にあり、上部に耕作時の撹乱を受けている。

［重複］縄文時代の第31号・38号住居跡と重複している。

［平面形・規模］平面形はほぼ方形を呈し、規模は東壁3.52m、西壁3.65m、南壁3.37m、北壁3.47m、





第29号住居跡堆積土

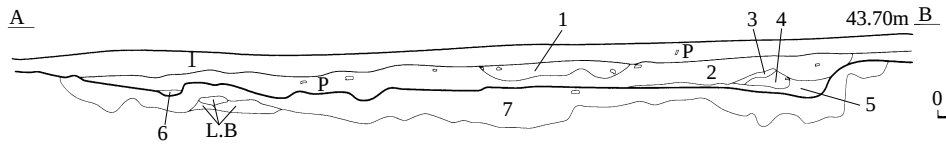
第1層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・L.B少量混入。
第2層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・L.B多量混入。やや軟らかい。
第3層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量、焼土ブロック混入。
第4層	暗褐色土	10YR3/4	軟らかい。
第5層	暗褐色土	10YR3/4	L.B多量混入。
第6層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒微量混入。
第7層	明黄褐色土	10YR7/6	掘り方埋土。L.Bや黒褐色土等の混合土。

P1堆積土
第1層 暗褐色土 10YR3/4

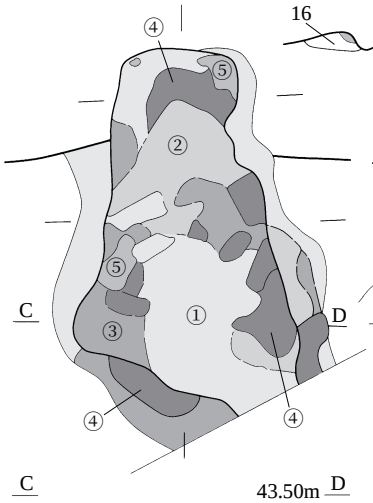
P5堆積土
第1層 褐 色 土 10YR4/6

P6堆積土
第1層 暗褐色土 10YR3/3
第2層 褐 色 土 10YR4/6

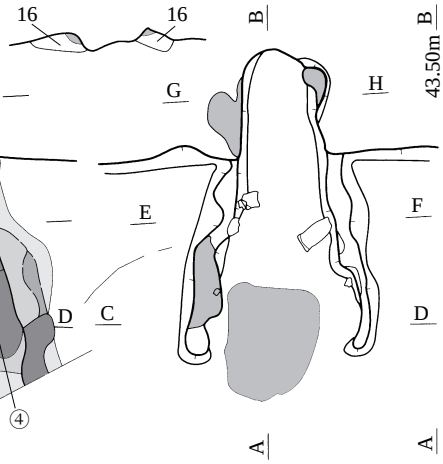
P8堆積土
第1層 黒褐色土 10YR3/2
第2層 褐 色 土 10YR4/6



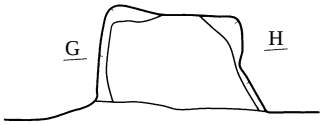
カマド確認状況



カマド完掘

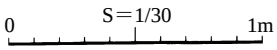


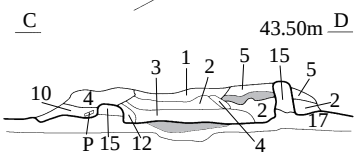
カマド煙道部掘り方

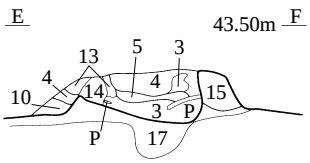


カマド堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/3	ローム粒・焼土粒微量混入。
第2層	褐 色 土	10YR4/4	灰白色粘土混入。
第3層	暗褐色土	7.5YR3/4	灰混入。
第4層	褐 色 土	10YR4/4	灰白色粘土混入。
第5層	褐 色 土	7.5YR4/3	天井崩落土。灰白色粘土主体。
第6層	褐 色 土	10YR4/4	ローム粒・L.B混入。
第7層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・焼土粒微量混入。
第8層	褐 色 土	10YR4/4	ローム粒・焼土塊微量混入。
第9層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・焼土粒微量混入。
第10層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・L.B混入。
第11層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量混入。
第12層	褐 色 土	7.5YR4/6	ローム粒少量混入。
第13層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒微量混入。
第14層	黒 色 土	10YR1.7/1	
第15層	褐 色 土	10YR4/4	袖。灰白色粘土主体。
第16層	暗褐色土	10YR3/4	煙道部掘り方埋土。
第17層	暗褐色土	10YR3/4	掘り方埋土。







カマド確認状況

①	黒褐色土	10YR2/3	
②	暗褐色土	10YR3/4	
③	褐 色 土	10YR4/4	
④	にぶい黄橙色土	10YR6/4	粘土質。
⑤	赤褐色土	5YR4/8	焼土。

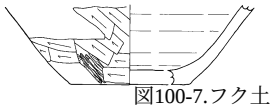


図100-7.フク土

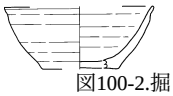


図100-2.掘り方

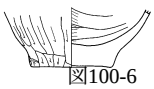


図100-6

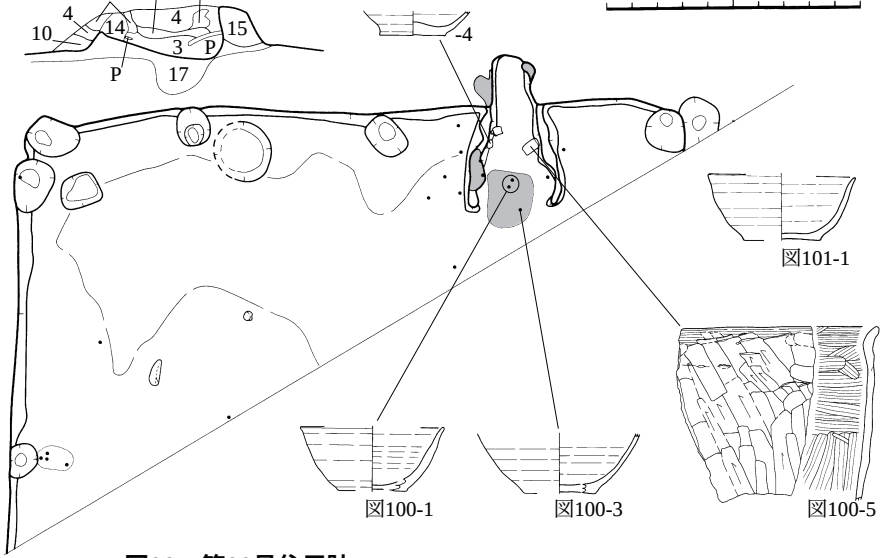


図101-1

図100-1

図100-3

図100-5

図99　第29号住居跡

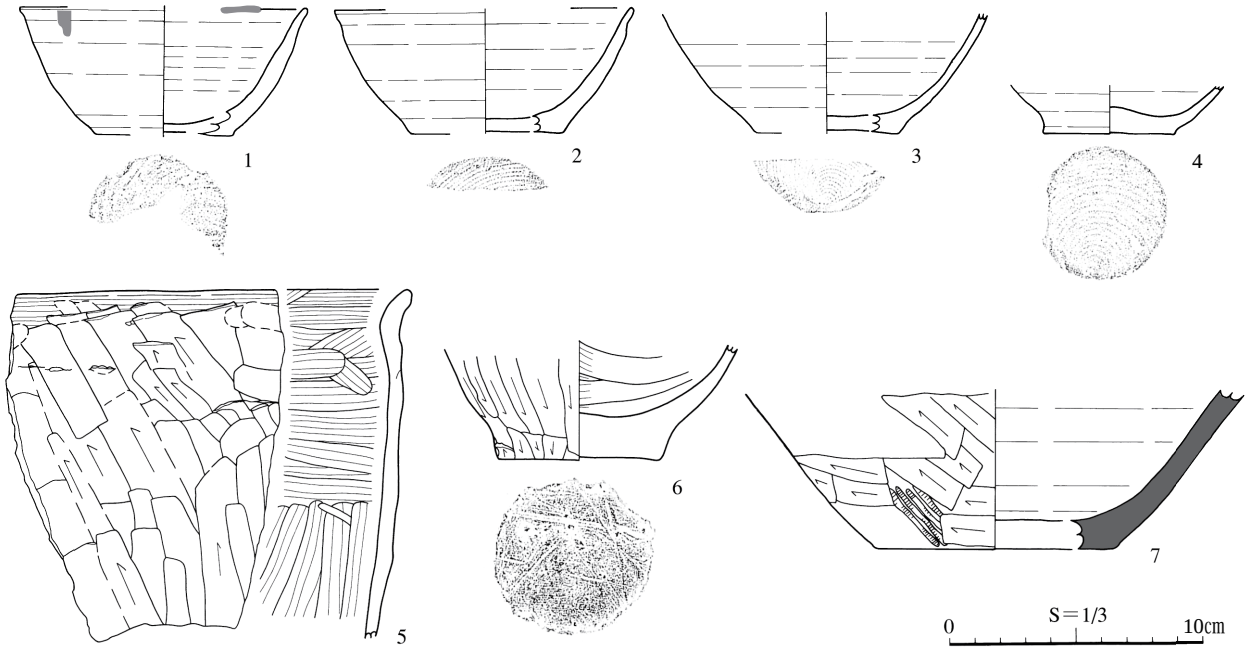
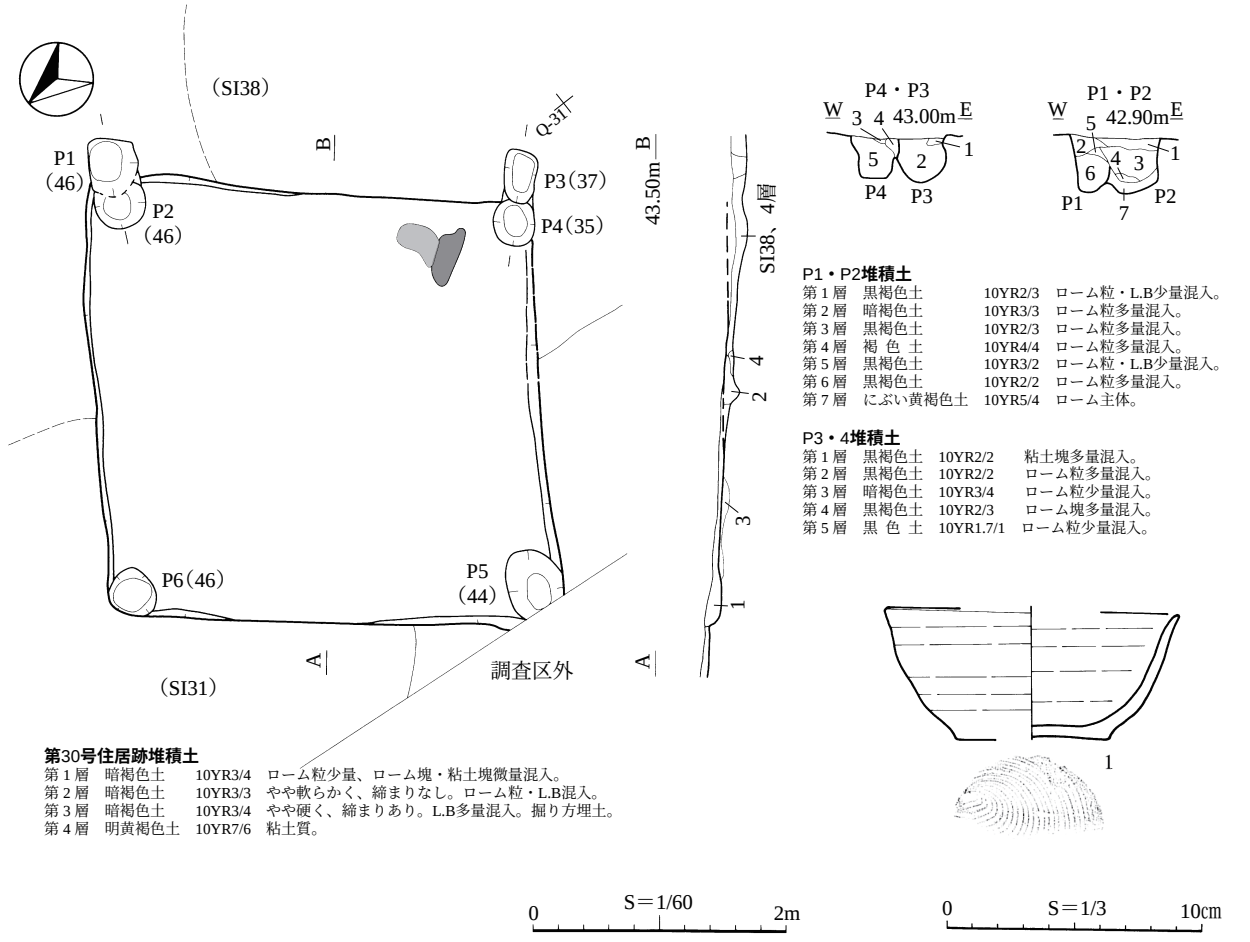


図100　第29号住居跡と出土遺物



P1・P2堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・L.B少量混入。
第２層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒多量混入。
第３層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒多量混入。
第４層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒多量混入。
第５層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒・L.B少量混入。
第６層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量混入。
第７層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	ローム主体。

P3・4堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/2	粘土塊多量混入。
第２層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量混入。
第３層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量混入。
第４層	黒褐色土	10YR2/3	ローム塊多量混入。
第５層	黒　色　土	10YR1.7/1	ローム粒少量混入。

第30号住居跡堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量、ローム塊・粘土塊微量混入。
第２層	暗褐色土	10YR3/3	やや軟らかく、締まりなし。ローム粒・L.B混入。
第３層	暗褐色土	10YR3/4	やや硬く、締まりあり。L.B多量混入。掘り方埋土。
第４層	明黄褐色土	10YR7/6	粘土質。

図101　第30号住居跡と出土遺物

長軸（南北）3.52m、短軸3.45mである。床面積は11.63㎡の小型の住居跡である。主軸方位は北から129度東へ傾いている。
［壁・床面］東壁10㎝、南壁７㎝、北壁４㎝で、東壁は緩傾斜地のためと撹乱のため検出できなかった。床面はローム粒やロームブロックを含んだ土で踏み固められている。平坦で、若干の硬さがある。
［堆積土］４層に分層された。掘り込みの浅い住居のため、第１層のローム粒を含んだ暗褐色土を西側で確認しただけである。なお、第３・４層は掘り方の堆積土である。
［カマド］東壁の南寄り、壁辺の約１／４の場所に火床面と粘土を検出した。カマドのあった場所と考えられる。火床面は20×32㎝の不整形で壁から20㎝離れている。煙道部は検出できなかった。
［壁溝］検出できなかった。
［柱穴・ピット］四隅に６個のピットを検出した。東壁の両端ではピットが重複して検出されているが、Ｐ２・Ｐ４～６の壁隅４個が主柱穴と考えられる。東壁隅の重複しているピット（Ｐ１・Ｐ３）については、掘立柱建物跡が付随する可能性もあるが、他の場所では柱穴を確認することはできず、確証を得ることが出来なかった。
［出土遺物］土師器片10点（115ｇ）、須恵器片１点（壺、５ｇ）、縄文時代前期の土器片240点（2784ｇ）と石器３点（削器・剥片等）が出土した。図101-１は掘り方からの出土である。
［小結］四隅に柱穴をもつ構造の小型の住居跡である。（畠山）

第32号住居跡（ＳＩ32）（図102）
［位置・確認］壕の北側、Ｏ・Ｐ－31･32グリッドに位置している。南側に第30号住居跡、北側に33号、36号住居跡が隣接して検出されている。
［重複］縄文時代の第39号住居跡と重複している。
［平面形・規模］平面形は方形で、東壁3.00m、西壁3.00m、南壁3.14m、北壁3.03m、長軸3.16m、短軸3.00mである。床面積は8.83㎡で、主軸方位は北から115度東へ傾いている。
［壁・床面］壁高は東壁12㎝、西壁52㎝、南壁37㎝、北壁23㎝である。基本層序の第Ⅵ層上面を床面としている。ほぼ平坦で、カマドのある東側半分が硬く踏みしめられている。
［堆積土］７層に分層した。大半がローム粒やロームブロックを多量に含む暗褐色土で、汚染された白頭山火山灰（分析結果による）の小ブロックを含んでいる。人為堆積である。
［カマド］東壁の南寄り、壁辺の約１／４の位置に構築されている。黒色系と褐色系の土を盛って土台とし、その上に灰白色粘土を用いてマドを構築している。燃焼部は幅40㎝、焚き口からの長さ80㎝（カマド本体は奥行き50㎝）である。火床面は26×29㎝の不整円形で、底面は強く被熱している。支脚は検出されなかった。煙道部は半地下式の構造で、幅22㎝、長さ14㎝である。確認面における観察では壁の外側50㎝までカマド材が見られたので、この範囲内に煙出孔がつくられていたものと思われる。おそらく、壁に近接した場所にあったと思われる。
［壁溝］検出されなかった。
［柱穴・ピット］カマドの北側に２個、南東隅に１個のほか、深さ10㎝前後の小ピット４個が壁際に検出された。柱穴配置は不明であるが、南東壁隅のピット（Ｐ３）とカマド北側のピット（Ｐ１）は柱穴の可能性が高い。

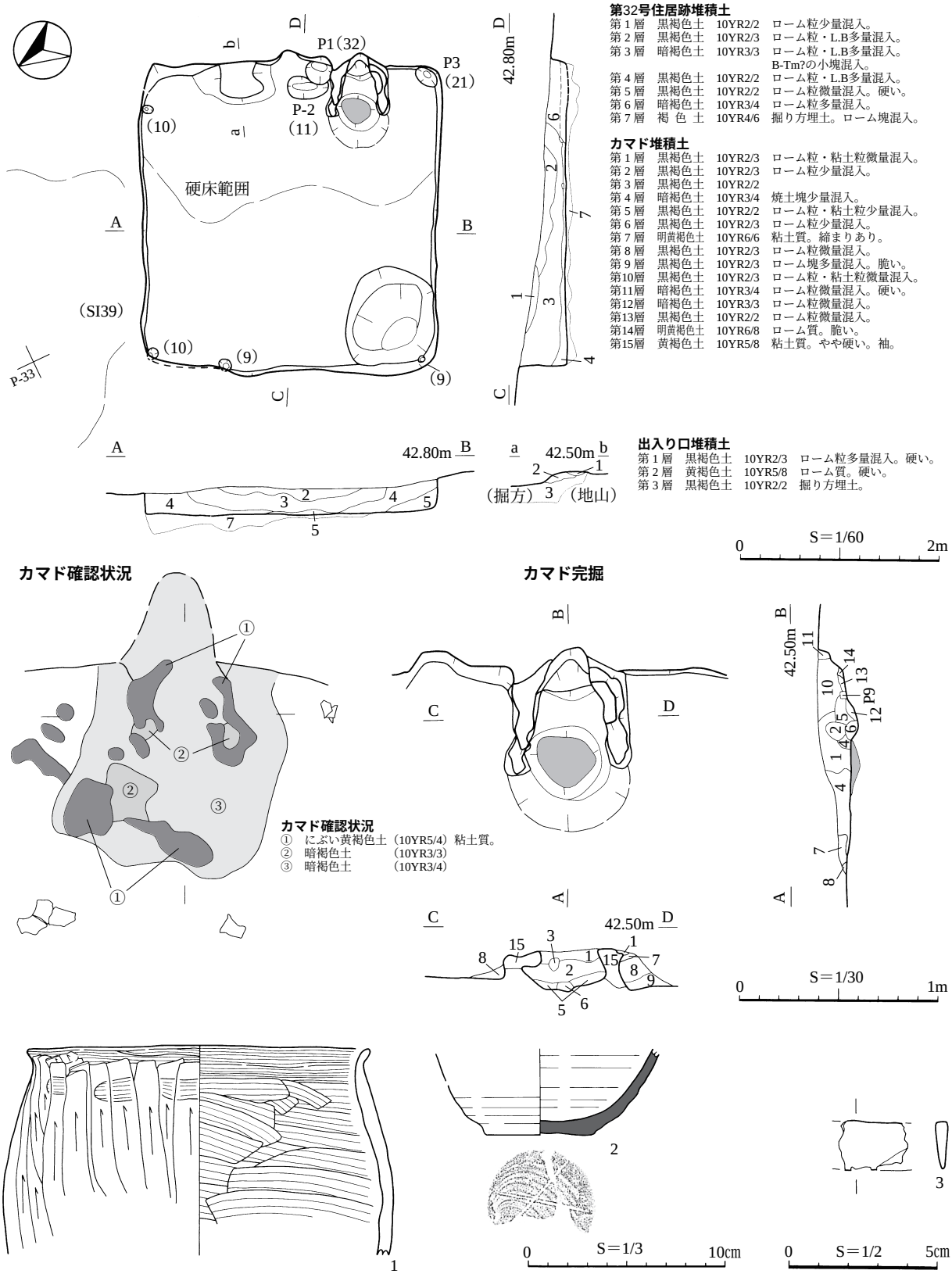


図102　第32号住居跡と出土遺物

［出入り口］東壁の北寄りの場所に出入り口と考えられる施設を検出した。カマドの北側に位置している。幅82㎝、奥行き43㎝で、床面からの高さ11㎝である。掘り方の堆積土（黄褐色土）の上に黒色土と黄褐色土を貼り付けて、硬く踏み締めている。
［その他の施設］南西隅に短軸90㎝、長軸111㎝、深さ14㎝の土坑を検出した。最深部は壁隅寄りにある。
［出土遺物］土師器片30点（582ｇ）、須恵器片８点（甕・坏、523ｇ）、鉄器（刀子片？）１点、縄文時代前期の土器片118点（1488ｇ）と剥片１点が出土した。なお、床面から出土した須恵器甕の破片は頸部に刻書が見られるもので、第36号住居跡カマド及び第３号溝跡（O-33）から出土したものと接合している（第36号住居跡で掲載、図108-９）。
［小結］一辺が３ｍ程度の小型の住居跡で、東壁に出入り口とカマドを設置している。柱穴配置は確認できなかったが、壁際に垂木穴程度の小穴が検出されている。（畠山）

第33号住居跡（ＳＩ33）（図103・104）
［位置・確認］壕の北側、Ｑ－33・34グリッドに位置している。西側は調査区域にのびており、北東隅の部分しか調査できなかった。南側に第30号・32号、東側に第36号、北側に第35号住居跡が隣接している。
［重複］南側で、縄文時代の第34号住居跡と重複している。
［平面形・規模］全体の平面形・規模は不明である。調査した部分では、北壁3.57m、東壁4.37mを検出した。検出した部分の床面積は7.8㎡で、主軸方位は北から132度東へ傾いている。
［壁・床面］基本層序の第Ⅴ層下部まで掘り込んでいる。壁高は北壁15㎝、東壁19㎝である。床面は平坦で、全体に硬い。
［堆積土］４層に分層した。壁際にはロームブロックを主体とする黄褐色系の土の堆積が見られ、その上位に厚くローム粒やロームブロックを多量に含んだ暗褐色土（第１層）が堆積している。人為堆積で、第１層には白頭山火山灰（分析結果による）の小ブロックが混入している。
［カマド］東壁の北寄りに構築されている。確認状況では下方に崩落した状況を呈していたが、焚き口部の左袖部分は確認されなかった。カマドは粘土を主体に構築されており、芯材は使用していない。燃焼部の前方に幅1.03m、奥行き50㎝、深さ３㎝の前庭部を設けている。燃焼部は幅43㎝、長さ72㎝（カマド本体の奥行きは61㎝）で、煙道部側で幅が狭くなっている。火床面は32×34㎝の不整形で、５㎝の厚さまで被熱していた。支脚は検出されなかった。煙道部は半地下式の構造で、幅25㎝、長さ50㎝である。末端部が煙出孔と思われ、底面はやや窪んでいる。
［壁溝］幅15㎝前後、深さ10～20㎝の壁溝を検出した。
［柱穴・ピット］北東隅に１個検出した。柱穴と思われる。深さ45㎝である。
［出土遺物］土師器36点（837ｇ）、須恵器４点（坏、140ｇ）、刀子１点（破片）、台石１点が出土した。カマド内及びカマド周辺からの出土が多い。また、このほかに縄文時代前期の土器片238点（3565ｇ）と石器８点（石匙、削器、剥片、敲石等）が出土した。
［小結］カマドが壁辺の約１／３の場所にあったとすれば、４ｍ前後の規模の住居跡と思われる。白頭山火山灰の混入状況から、10世紀中葉以降に構築されたと思われる。（畠山）

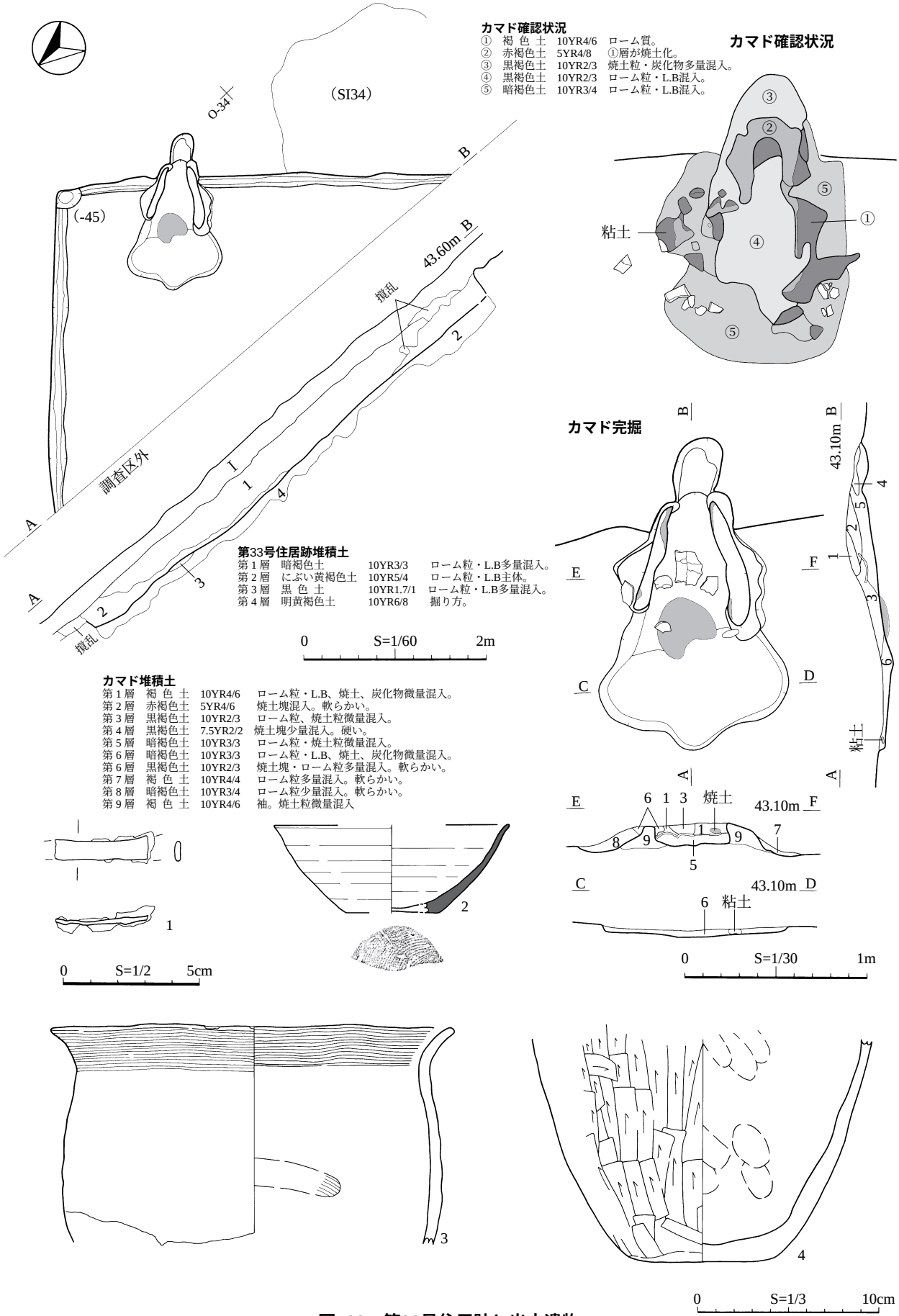


図103　第33号住居跡と出土遺物

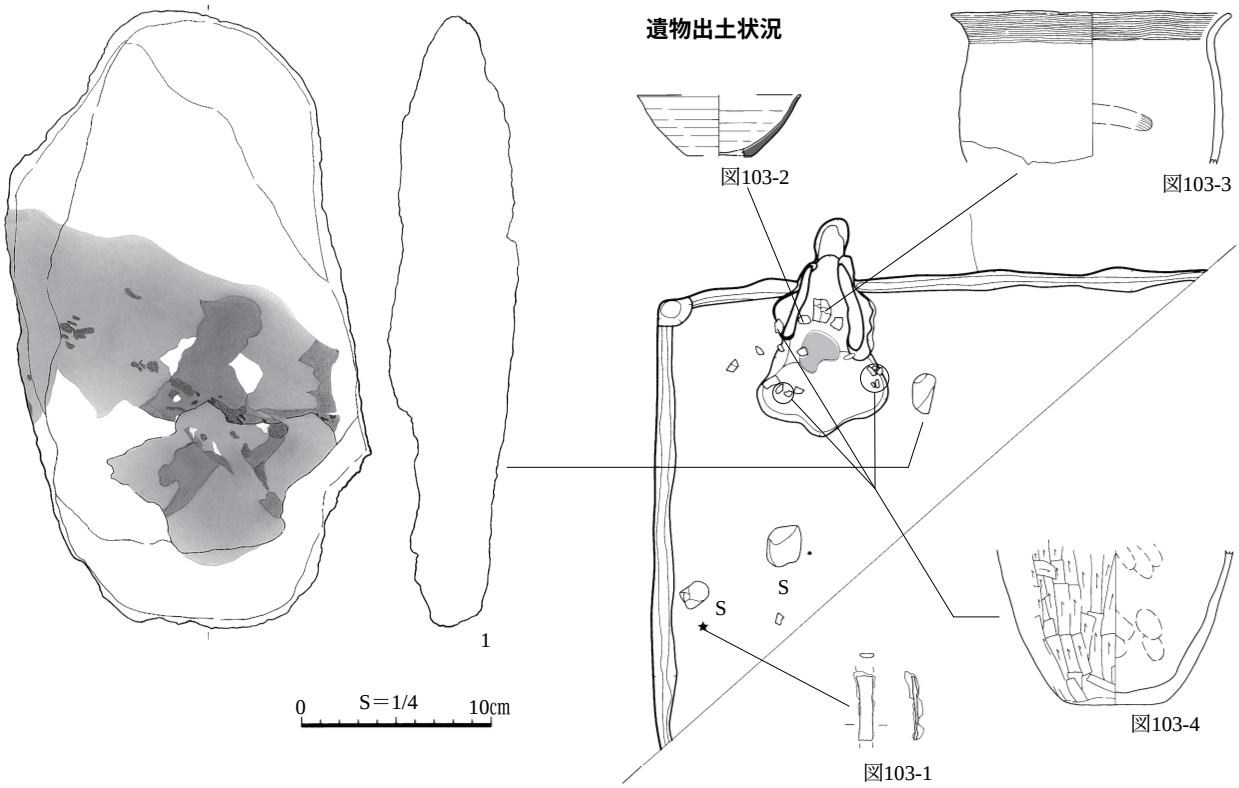


図104　第33号住居跡出土遺物と出土状況

第35号住居跡（ＳＩ35）（図105）

［位置・確認］壕の北側、Ｐ・Ｑ－35グリッドに位置している。集落の北端に位置する住居で、北側には平安時代の遺構がほとんど見られなくなる。南側には第35号・36号住居跡が隣接している。

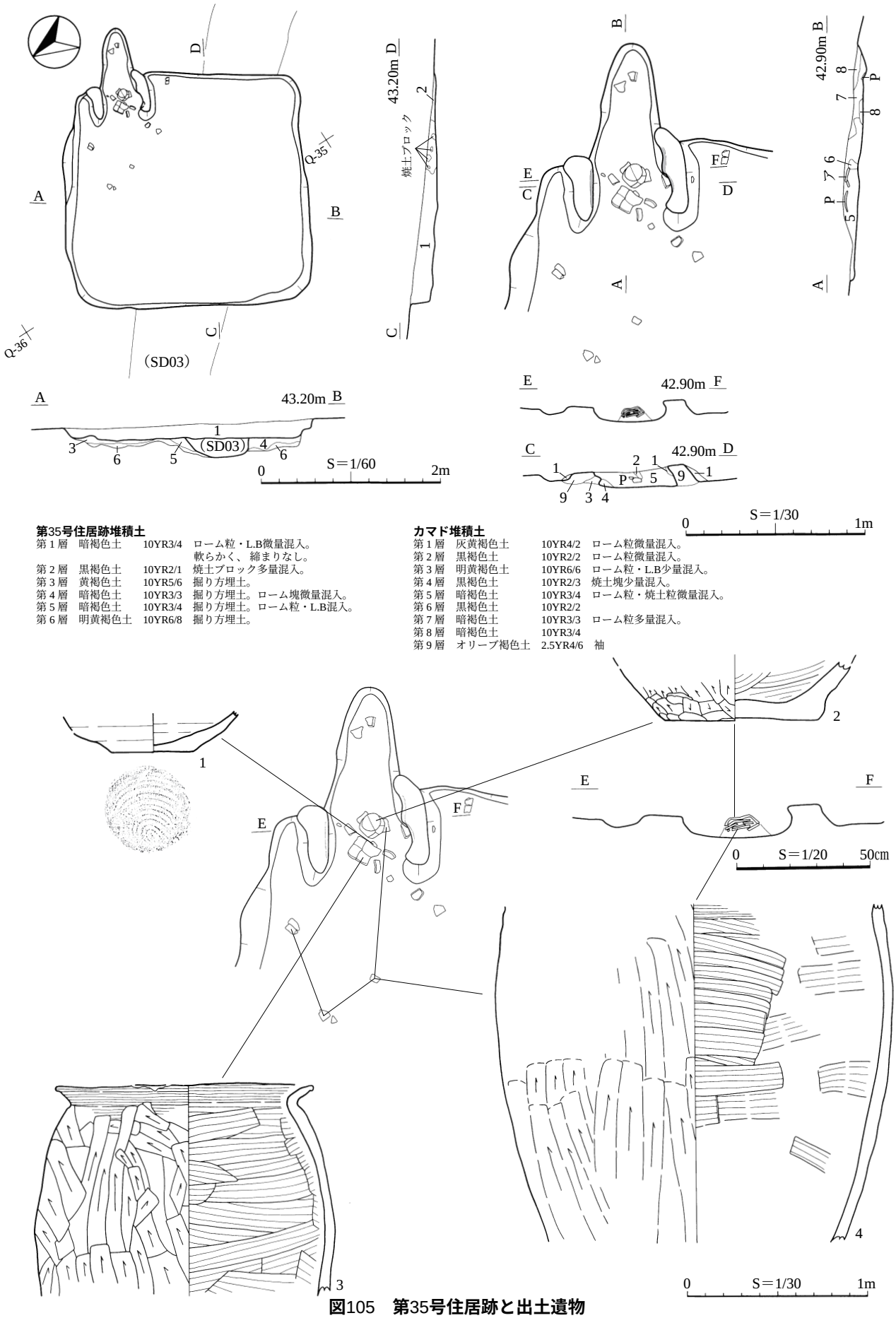
［重複］平安時代の第３号溝跡と重複し、これよりも新しい。

［平面形・規模］平面形は方形を呈し、規模は東壁2.51m、西壁2.62m、南壁2.50m、北壁2.45m、長軸2.74m、短軸2.65m（南北）である。床面積は6.10㎡で、主軸方位は北から119度東へ傾いている。

［壁・床面］掘り込みの浅い住居跡で、壁高は東壁２㎝、西壁25㎝、南壁20㎝、北壁６㎝である。基本層序の第Ⅴ層上面を床面とし、平坦である。

［堆積土］６層に分層したが、第３層から第６層は掘り方の堆積土である。住居内の堆積土は暗褐色土で、白頭山火山灰（肉眼観察による）の小ブロックを微量含んでいる。また、西側のカマド周辺では焼土粒や焼土ブロックを多量に含んだ黒褐色土の堆積が見られた。

［カマド］東壁北寄りの場所、壁際に近接して構築されている。袖部分のみの検出で、天井部の崩落は確認できなかった。袖は灰白色粘土でつくられ、芯材は用いていない。燃焼部は幅38㎝、長さ（本体の奥行き）50㎝で、火床面は確認できなかった。また燃焼部からは数点の土師器（137・139）と支脚と見られる土器（土師器甕、138・140）が検出された。支脚と思われる土器は、底面から２～３㎝浮いたところに、土師器甕の破片５点を重ね、その上に別個体の甕の底部を上にして被せている。ここから出土した土器片は、カマド前方の床面や床面直上から出土した土器片とも接合している。煙道部は半地下式の構造で、幅37㎝、長さ55㎝である。末端部がいくぶん窪んでおり、ここに煙出孔がつくられていたものと思われる。



第35号住居跡堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・L.B微量混入。 軟らかく、締まりなし。
第２層	黒褐色土	10YR2/1	焼土ブロック多量混入。
第３層	黄褐色土	10YR5/6	掘り方埋土。
第４層	暗褐色土	10YR3/3	掘り方埋土。ローム塊微量混入。
第５層	暗褐色土	10YR3/4	掘り方埋土。ローム粒・L.B混入。
第６層	明黄褐色土	10YR6/8	掘り方埋土。

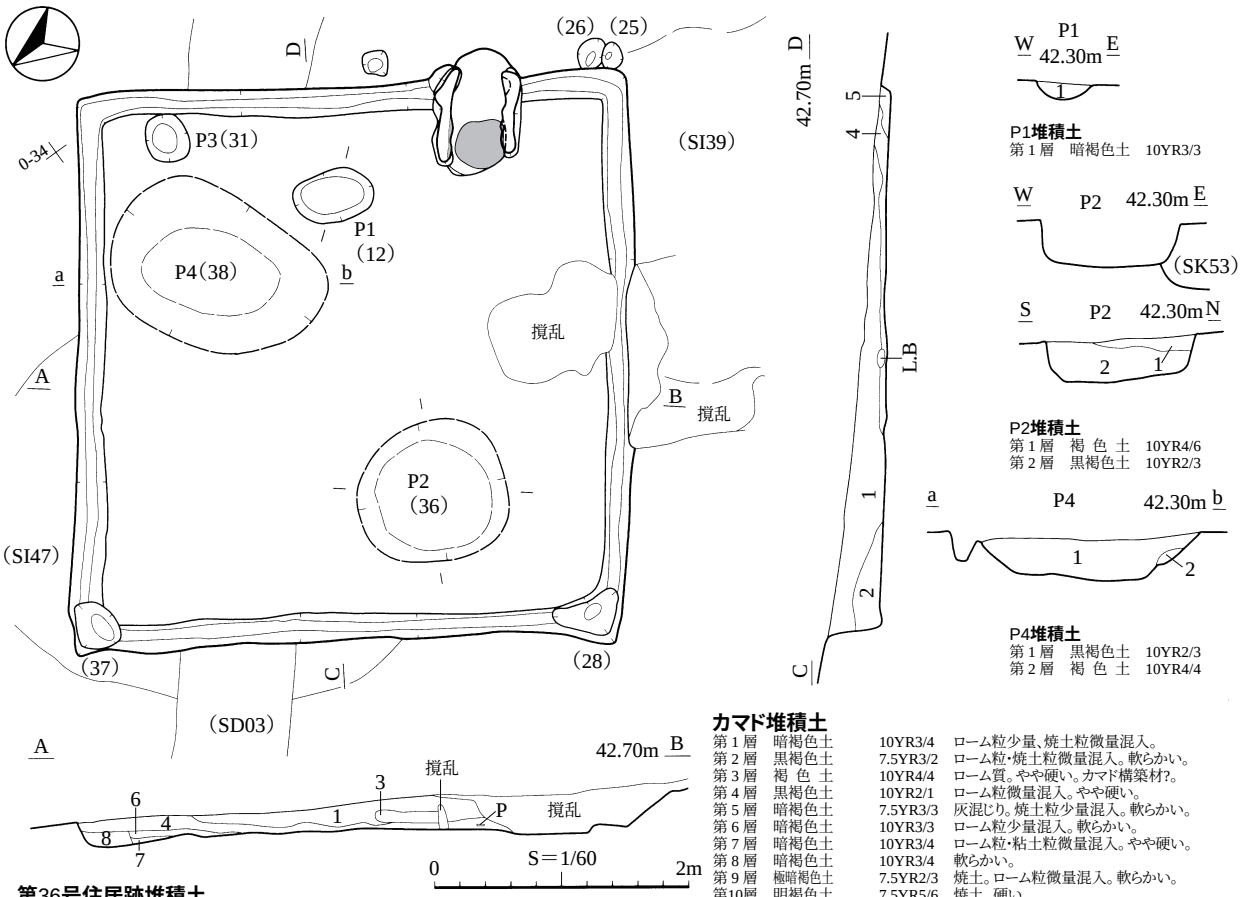
カマド堆積土

第１層	灰黄褐色土	10YR4/2	ローム粒微量混入。
第２層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量混入。
第３層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム粒・L.B少量混入。
第４層	黒褐色土	10YR2/3	焼土塊少量混入。
第５層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・焼土粒微量混入。
第６層	黒褐色土	10YR2/2	
第７層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒多量混入。
第８層	暗褐色土	10YR3/4	
第９層	オリーブ褐色土	2.5YR4/6	袖

図105　第35号住居跡と出土遺物

［壁溝］検出されなかった。
［柱穴・ピット］検出されなかった。
［出土遺物］土師器片71点（889ｇ）のほか、縄文時代前期の土器片89点（894ｇ）と削器１点が出土した。図105-２は伏せられていた土師器の甕底部、４は重ねられた土師器片とカマド近辺から出土した胴部片、３は２の土器の手前に出土した口縁部片、１の坏底部片は３の下から出土したものである。
［小結］第３号溝跡が利用されなくなった後に構築されたもので、壁の一辺が３ｍに満たない小型の住居跡である。カマド内で出土した土器は、支脚の可能性も考えられるが、カマド祭祀に伴って意図的に置かれた可能性もある。すなわち、住居の廃棄に伴って、カマド天井部を破壊し、その後に燃焼部内の支脚の位置に上記のように土器を置き、余った土器片を住居内に廃棄した可能性がある。重複及び白頭山火山灰の検出状況から10世紀中葉以降に構築されたものと思われる。（畠山）

第36号住居跡（ＳＩ36）（図106・108）
［位置・確認］壕の北側、Ｏ・Ｐ－33・34グリッドの緩斜面上に位置している。南側に第32号住居跡、西側に33号･35号住居跡が隣接している。
［重複］平安時代の第３号溝跡と重複し、これよりも新しい。また、縄文時代の第39号・47号住居跡、第49号・53号土坑とも重複している。なお、第49号・53号土坑は住居床下から検出された。
［平面形・規模］平面形は方形を呈している。規模は東壁34.37m、西壁4.30m、南壁4.46m、北壁4.38m、長軸4.45m、短軸（東西）4.38mである。床面積は18.31㎡で、主軸方位は北から125度東へ傾いている。
［壁・床面］西側の一部が撹乱を受けており、壁と床面が破壊されている。基本層序の第Ⅴ層を掘り込んで構築されており、壁高は東壁８㎝、西壁44㎝、南壁30㎝、北壁20㎝である。床面はほぼ平坦であるが、東側が若干低くなっている。また、カマド近辺及び第３号溝跡の上面は硬く踏みしめられている。
［堆積土］８層に分層したが、大半が第１層の暗褐色土と第４層の褐色土である。ともに、ローム粒やロームブロックを多量に含んでいる。また、これらの層と第３層、第７層には白頭山火山灰（分析結果による）の小ブロックを含んでいる。全体に人為堆積の様相を呈している。
［カマド］東壁の南寄りの場所に検出した。確認状況ではカマドの左右と前方へ崩落したような状況を呈している。カマドは粘土質のロームと灰白色粘土を用いており、カマド本体は壁外へ若干張り出してつくられている。芯材には土師器片や須恵器片（甕口縁部）が用いられている。燃焼部は幅42㎝、長さ100㎝（カマド本体からは91㎝）である。火床面は37×40㎝の円形で、厚さ15㎝まで被熱していた。支脚は検出されなかった。煙道部は壁外に23㎝の長さしか検出されなかった。確認状況及びセクションでの観察から、煙出孔は壁に近接して構築されていたものと考えられる。
［壁溝］幅約20㎝、深さ10～23㎝の壁溝が壁直下に巡っている。掘り方の調査では、カマドの下位にも検出されている。
［柱穴・ピット］住居内では北東隅近くに１個と西壁の両隅、住居外のカマド近辺に３個のピットを検出した。いずれも柱穴の可能性がある。
［その他の施設］床面から１基（Ｐ１）、床下から２基の土坑（Ｐ２・Ｐ４）を検出した。Ｐ１は41×

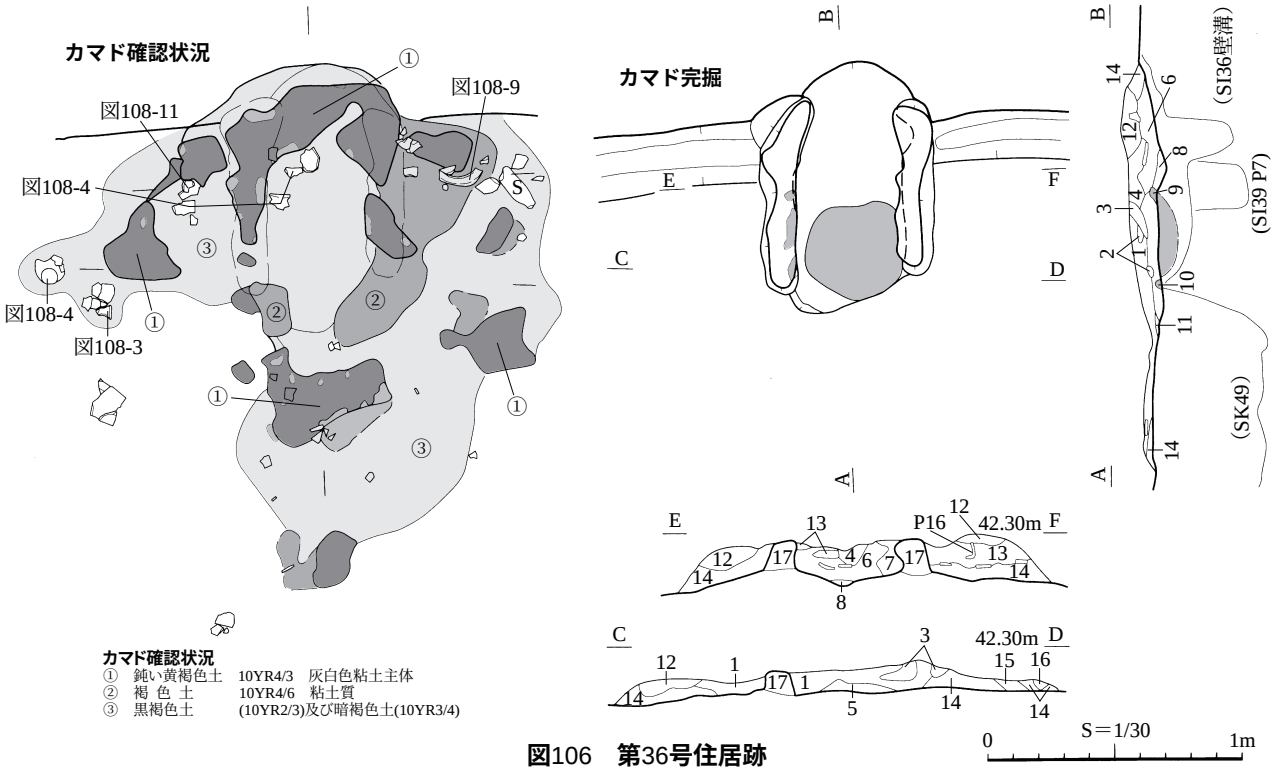


第36号住居跡堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒多量混入。B-Tm少量混入。
第２層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒･L.B少量混入。
第３層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒･B-Tm少量混入。軟らかい。
第４層	褐 色 土	10YR4/4	ローム粒･L.B多量混入。ローム質土。
第５層	暗褐色土	10YR3/3	下部にローム粒･L.B少量混入。
第６層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量、B-Tm微量混入。
第７層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量混入。
第８層	褐 色 土	10YR4/4	ローム粒少量混入。

カマド堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量、焼土粒微量混入。
第２層	黒褐色土	7.5YR3/2	ローム粒･焼土粒微量混入。軟らかい。
第３層	褐 色 土	10YR4/4	ローム質。やや硬い。カマド構築材?。
第４層	黒褐色土	10YR2/1	ローム粒微量混入。やや硬い。
第５層	暗褐色土	7.5YR3/3	灰混じり。焼土粒少量混入。軟らかい。
第６層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量混入。軟らかい。
第７層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒･粘土粒微量混入。やや硬い。
第８層	暗褐色土	10YR3/4	軟らかい。
第９層	極暗褐色土	7.5YR2/3	焼土。ローム粒微量混入。軟らかい。
第10層	明褐色土	7.5YR5/6	焼土。硬い。
第11層	暗褐色土	10YR3/4	やや硬い。
第12層	鈍い黄褐色土	10YR4/3	灰白色粘土主体。ローム粒･粘土塊混入。
第13層	褐 色 土	7.5YR4/4	粘土質。硬い。カマド構築材?。
第14層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量混入。やや硬い。
第15層	鈍い黄褐色土	10YR4/3	ローム粒多量混入。軟らかい。
第16層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム質。硬い。
第17層	黄褐色土	10YR5/6	いわゆる灰白色粘土。袖。



カマド確認状況

①	鈍い黄褐色土	10YR4/3	灰白色粘土主体
②	褐 色 土	10YR4/6	粘土質
③	黒褐色土	(10YR2/3)及び暗褐色土(10YR3/4)	

図106　第36号住居跡

62㎝の楕円形で、深さ12㎝と浅く、小さい。Ｐ２は112×120㎝の楕円形を呈し、深さ36㎝である。Ｐ４は122×173㎝の楕円形を呈し、深さ38㎝である。ともに埋められていた土坑で、堆積土からは縄文土器と土師器片が出土した。

［出土遺物］土師器片86点（2124ｇ）、須恵器片19点（坏、壺、甕、545ｇ）、ミニチュア土器２点（１点は完形）、鉄器１点（刀子片）、台石１点のほか、縄文時代前期の土器片744点（9922ｇ）、石器20点（石鏃、石匙、石錘等）が出土した。大半が破片資料である。図108-６の須恵器の壺底部は土坑（Ｐ２）から出土したが、ここから約10m離れた場所（K-33）で出土したものと接合している。８は刻書が見られる須恵器の坏、９は頚部に刻書が見られる須恵器の甕である。９はカマドの脇から出土したが、第32号住居跡及び第３号溝跡（O-33）から出土したものと接合している。胎土分析による産地同定では、五所川原産との結果がでている。

［小結］第35号住居跡と同様、第３号溝跡の上に構築された住居跡で、やや標準サイズの規模である。東壁側の柱穴が隅からずれた位置にあるが、四隅の柱穴配置と考えられる。重複から、10世紀中葉以降の住居跡と考えられる。（畠山）

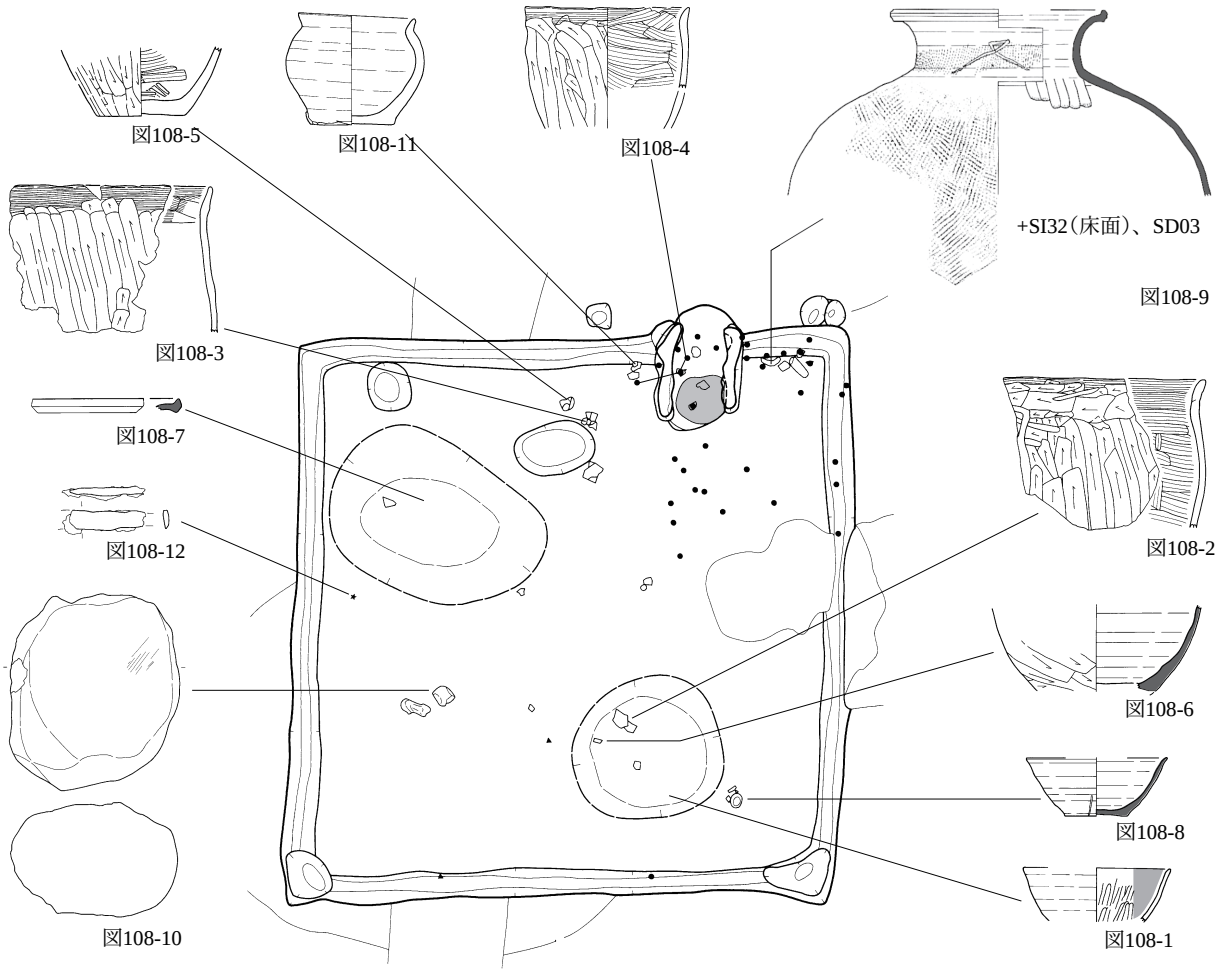


図107　遺物出土状況

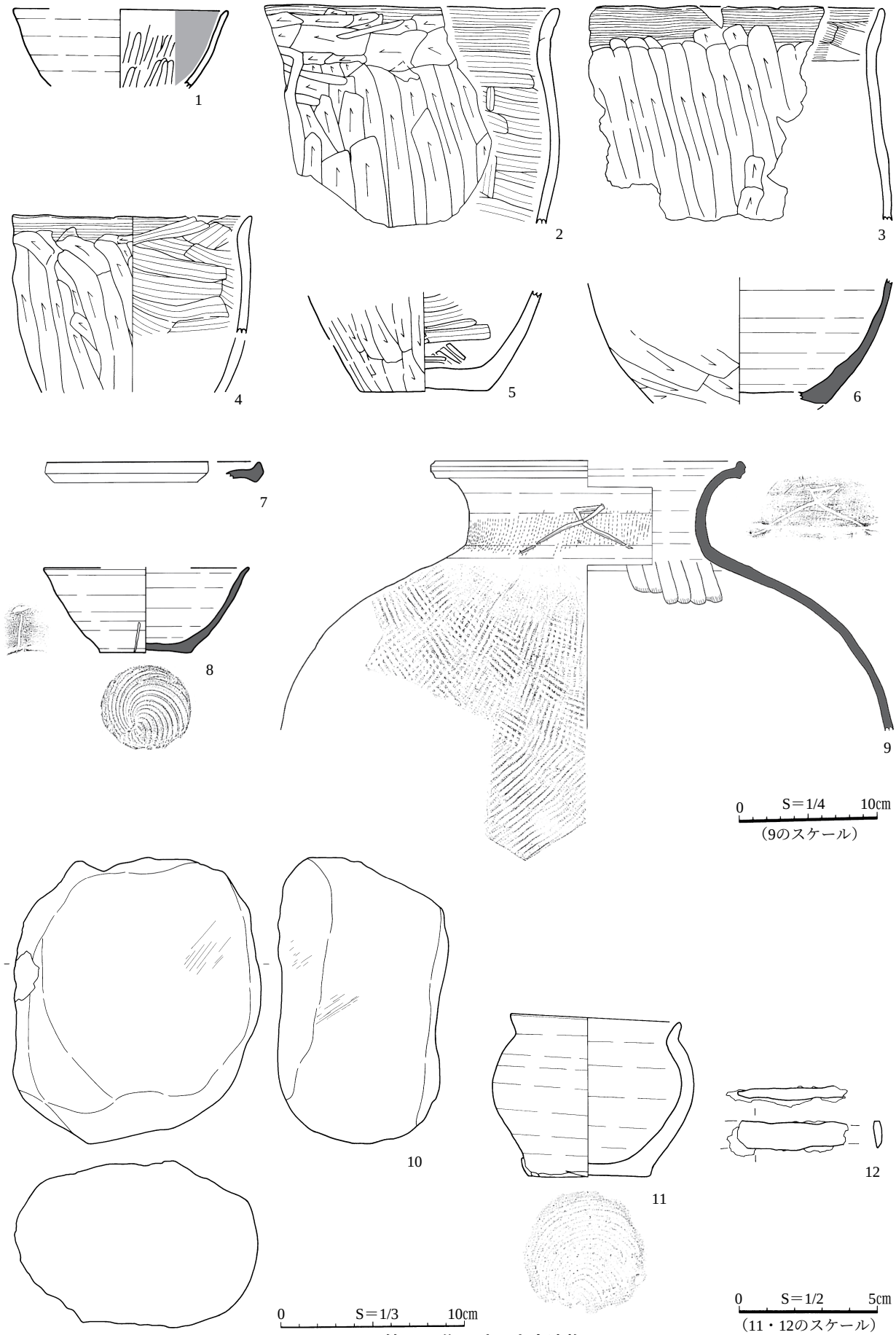


図108　第36号住居跡　出土遺物

第44号住居跡（ＳＩ44）（図109）

［位置・確認］壕の北東側、Ｇ・Ｈ－20・21グリッドに位置している。南側には多数の住居跡が重複して検出されており、本住居跡はその北端にあたる。緩斜面上にあることや町道造成時に削平されていることから、東壁は検出できなかった。

［重複］第46号住居跡と重複し、これより新しい。

［平面形・規模］東壁を検出できなかったことから、全体の平面形は不明である。西壁は6.42m、残存する南壁5.2m、同北壁4.0mである。また、南北軸は6.28mである。床面積は不明であるが（残存床面積は33.18㎡）、方形と仮定すると41㎡前後の規模と思われる。主軸方位も不明であるが、カマドが東壁にあるとすると北から90度東へ傾いていることになる。

［壁・床面］基本層序の第Ⅴ層を掘り込んで構築している。壁高は西壁28㎝、南壁12㎝、北壁３㎝である。床面はほぼ平坦であるが、北側がいくぶん低くなっている。

［堆積土］２層に分層したが、大半は暗褐色土で占められている。

［カマド］検出できなかったが、東壁にあると思われる。

［壁溝］調査できた部分では、幅20㎝前後、深さ７～20㎝である。

［柱穴・ピット］床面から３個、壁溝から１個、壁隅から２個検出した。このうち、Ｐ１・Ｐ３は主柱穴と考えられる。おそらく、主柱穴の配置は４本柱と考えられ、これと壁隅の柱とで構成されるものと思われる。

［その他の施設］南西隅に短軸77㎝、長軸91㎝、深さ20㎝の楕円形を呈する土坑（Ｐ４）を検出した。

［出土遺物］土師器片108点（1557ｇ）、須恵器片７点（149ｇ）、ミニチュア土器破片１点、砥石１点のほか、縄文時代前期の土器片42点（568ｇ）、石器３点（剥片、敲石）が出土した。図44-４及び５の須恵器坏には刻書が見られる。

［小結］東側のおよそ半分が破壊されて全体の形状・規模は不明であるものの、壁の一片が６m以上の比較的大きな規模の住居跡である。（畠山）

第45号住居跡（ＳＩ45）（図110）

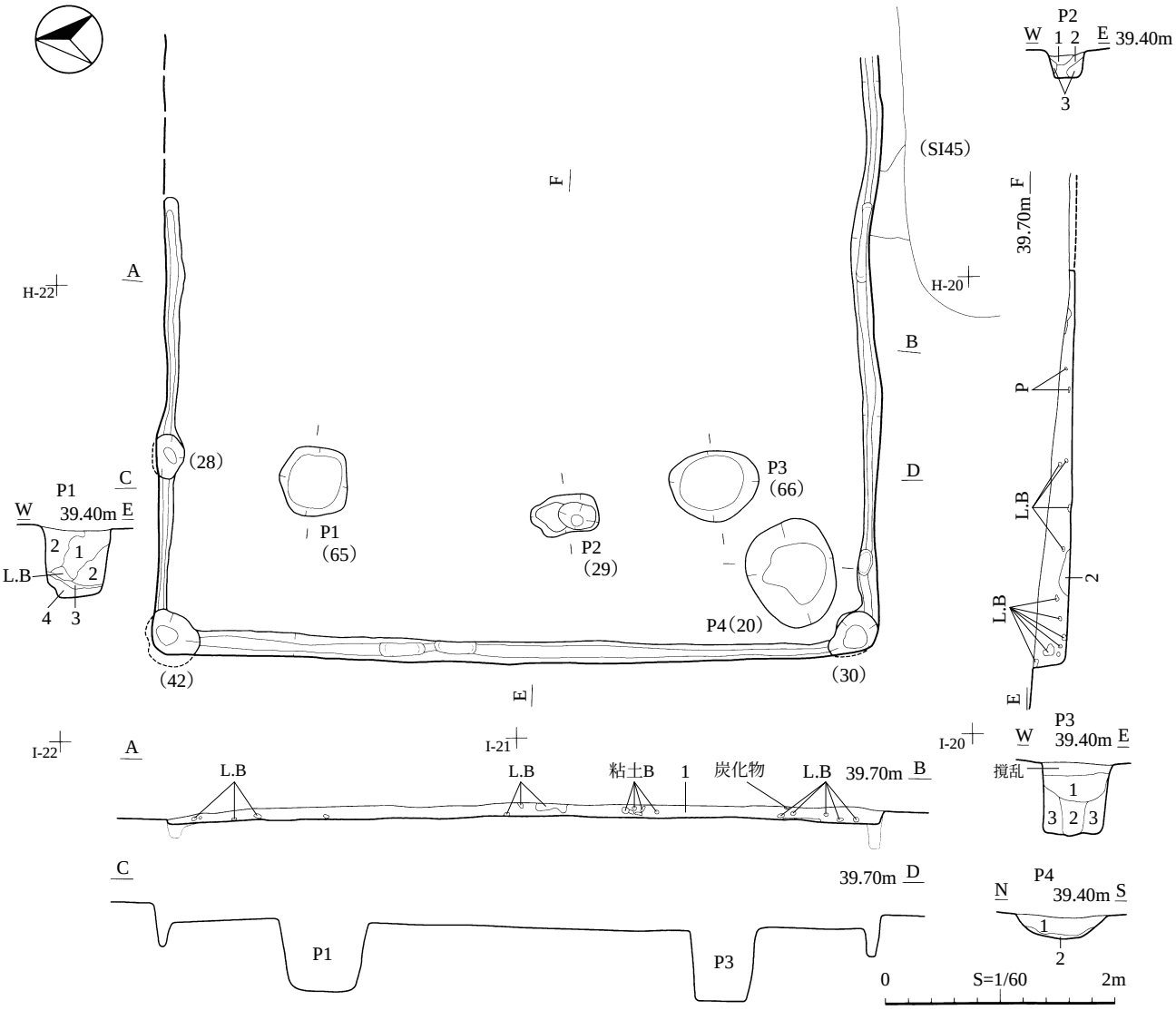
［位置・確認］壕の東側、Ｆ・Ｇ－18・19グリッドに位置している。住居跡が重複して検出された区域の北側に位置し、町道の造成によって東側の部分はかなり削平されている。

［重複］第46号・68号・51～53号号住居跡、第32号溝跡、第83号土坑及び縄文時代の第39号溝状ピットと重複している。本住居跡は第51号住居および第83号土坑より古く、他の遺構よりも新しい。なお、本住居跡周辺の遺構の新旧関係は以下の通りである。

第52号？第53号住居跡→第46号住居跡→（第68号住居跡）（拡張？）→ 第45号住居跡→第83号土坑
第44号住居跡
↓
第55号住居跡 ← 第54号住居跡 → 第51号住居

［平面形・規模］平面形は長方形を呈している。西壁5.85m、北壁4.35m、残存する東壁4.0m、南壁2.3mを検出した。また、長軸（南北）5.82m、短軸は4.53mで、推定床面積は22.45㎡である。主軸方位は北から84度東へ傾いている。

［壁・床面］緩傾斜地に立地しているため、東壁は検出できなかった。壁高は西壁55㎝、北壁25㎝、



第44号住居跡堆積土

第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム塊、粘土塊少量混入。
第２層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒少量混入。

P1堆積土

第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒少量混入。
第２層　黄褐色土　10YR5/6　ローム質。
第３層　黒 色 土　10YR2/1　脆い。
第４層　にぶい黄褐色土　7.5YR5/4　ローム質。脆い。

P2堆積土

第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒微量混入。
第２層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒微量混入。
第３層　黄褐色土　10YR5/6　ローム質。

P3堆積土

第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒少量混入。
第２層　褐 色 土　10YR4/4　ややローム質。脆い。
第３層　黄褐色土　10YR5/6　ローム質。

P4堆積土

第１層　褐色土　7.5YR4/3　ローム粒多量混入。
第２層　褐色土　7.5YR4/4　ローム質。

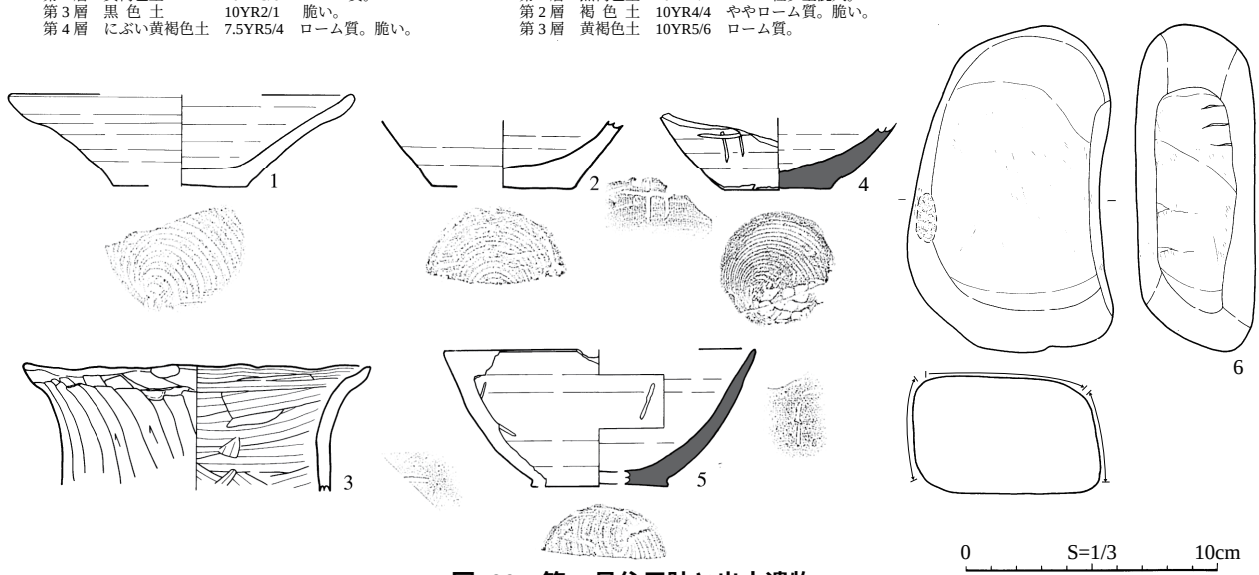
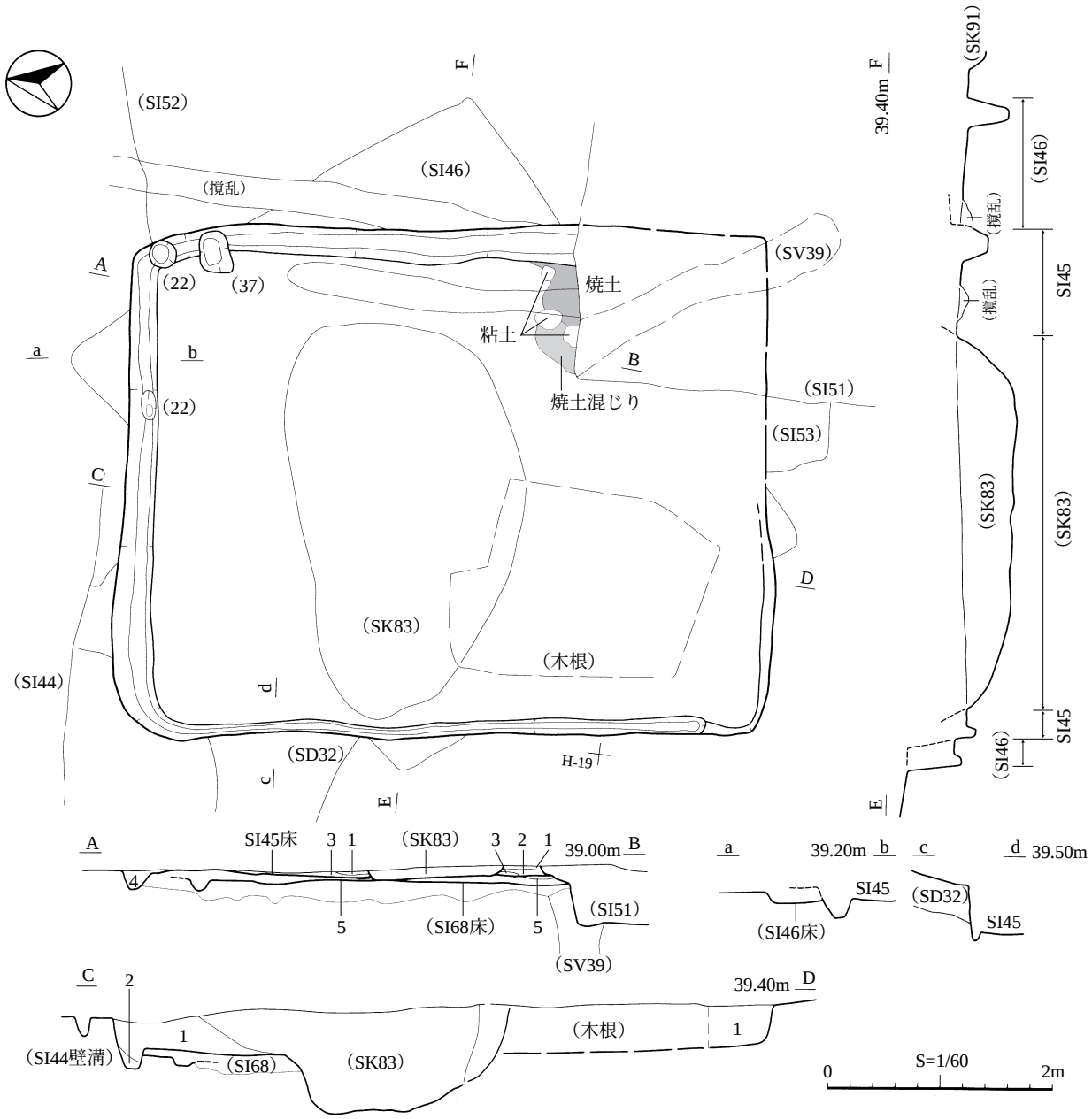


図109　第44号住居跡と出土遺物



第45号住居跡堆積土(A-B)
第1層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量、焼土粒微量混入。
第2層　黄褐色土　10YR5/8　ローム質。硬い。

第45号住居跡堆積土(C-D)
第1層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒混入。硬い。
第2層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　硬い。
第3層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒多量、L.B少量混入。硬い。
第4層　黒褐色土　10YR2/3　壁溝堆積土。L.B少量混入。やや軟らかい。
第5層　暗褐色土　10YR3/3　貼床。ローム粒少量混入。硬い。

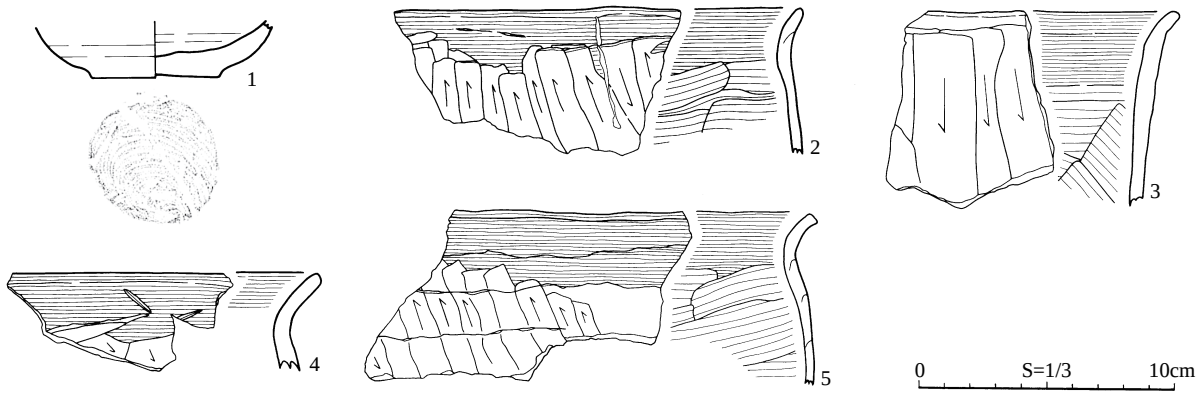


図110　第45号住居跡と出土遺物

残存する南壁36㎝である。床面はほぼ平坦である。重複している他の住居跡床面より高い位置に構築されているが、第53号住居跡の床面より低い位置にある。
［堆積土］５層に分層できた。大半が黒褐色土である。
［カマド］東壁の南寄り、壁辺の１／３のところに位置している。重複と道路造成による撹乱により、遺存状態はきわめて悪く、火床面と粘土を検出できたにすぎない。
［壁溝］東・西・北壁で検出した。幅15～30㎝で、深さ６～20㎝である。
［柱穴・ピット］北東隅の壁溝で３個のピットを検出したのみで、柱穴配置は不明である。
［出土遺物］土師器片183点（2510ｇ）、須恵器５点（甕、60ｇ）のほか、縄文時代前期の土器片（506ｇ）、石器２点（削器・剥片）が出土した。破片のみで、接合したものはない。
［小結］東西壁に長軸を持つ長方形の住居跡である。方形のものが多い中で、希少な例である。重複関係では、新しい方の時期に属している。（畠山）

第46号住居跡（ＳＩ46）（図111）
［位置・確認］壕の東側、Ｆ・Ｇ－18・19グリッドに位置している。住居跡が密集して検出された区域の北側にあり、第45号住居跡により大部分を破壊されている。焼失家屋である。
［重複］第44号・第45号・51号～53号・68号住居跡、第83号土坑及び縄文時代の第39号溝状ピットと重複している。本住居跡は第44号・45号・第51号住居跡および第83号土坑より古い。また、明確にはできなかったが、第68号住居跡が第45号住居跡の拡張前のものである可能性もあるので、これが正しければ当該住居よりも古いことになる。また、第52号・53号住居跡とは新旧関係は不明であるが、これらよりは新しい可能性がある。
［平面形・規模］四隅での確認であるが、平面形はややゆがみのある長方形を呈している。東壁4.32ｍ、西壁4.32ｍ、南壁5.03ｍ、北壁4.82ｍで、長軸（東西）5.02ｍ、短軸4.20ｍである。推定床面積は20.03㎡である。主軸方位は北から53度西へ傾いている。
［壁・床面］残存部分の壁高は南西隅９㎝、北西隅12㎝、北東隅で12㎝である。
［堆積土］黒褐色土の堆積が見られただけである。北西隅の部分では炭化材が見られた。
［カマド］北壁の中央部に位置している。第45号住居跡にカマドの大部分を、第44号住居跡に煙出孔の一部を破壊されている。検出したのは煙出孔の部分で、北壁は強く焼けている。残存部から、煙道部の長さは壁から1.58ｍで、煙出孔の深さは約50㎝である。煙道部の構造は不明であるが、おそらく煙道底面は煙出孔に向かって次第に低くなっていくタイプの地下式の構造と考えられる。
［壁溝］南東隅の一部と北西壁、南西隅で検出した。幅10～20㎝、深さ約10㎝である。
［柱穴・ピット］南東隅で２個のピットを検出しただけである。
［出土遺物］土師器２点（12ｇ）が出土しただけである。
［小結］また、北壁の中央にカマドが構築されている住居跡で、本遺跡では希少な例である。（畠山）

第48号住居跡（ＳＩ48）（図112）
［位置・確認］調査区の南端Ｇ・Ｈ－５・６グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より方形になる床面を確認した。同時に東壁の南側より、カマドと思われる焼土、粘土の不整形プランを確認した。

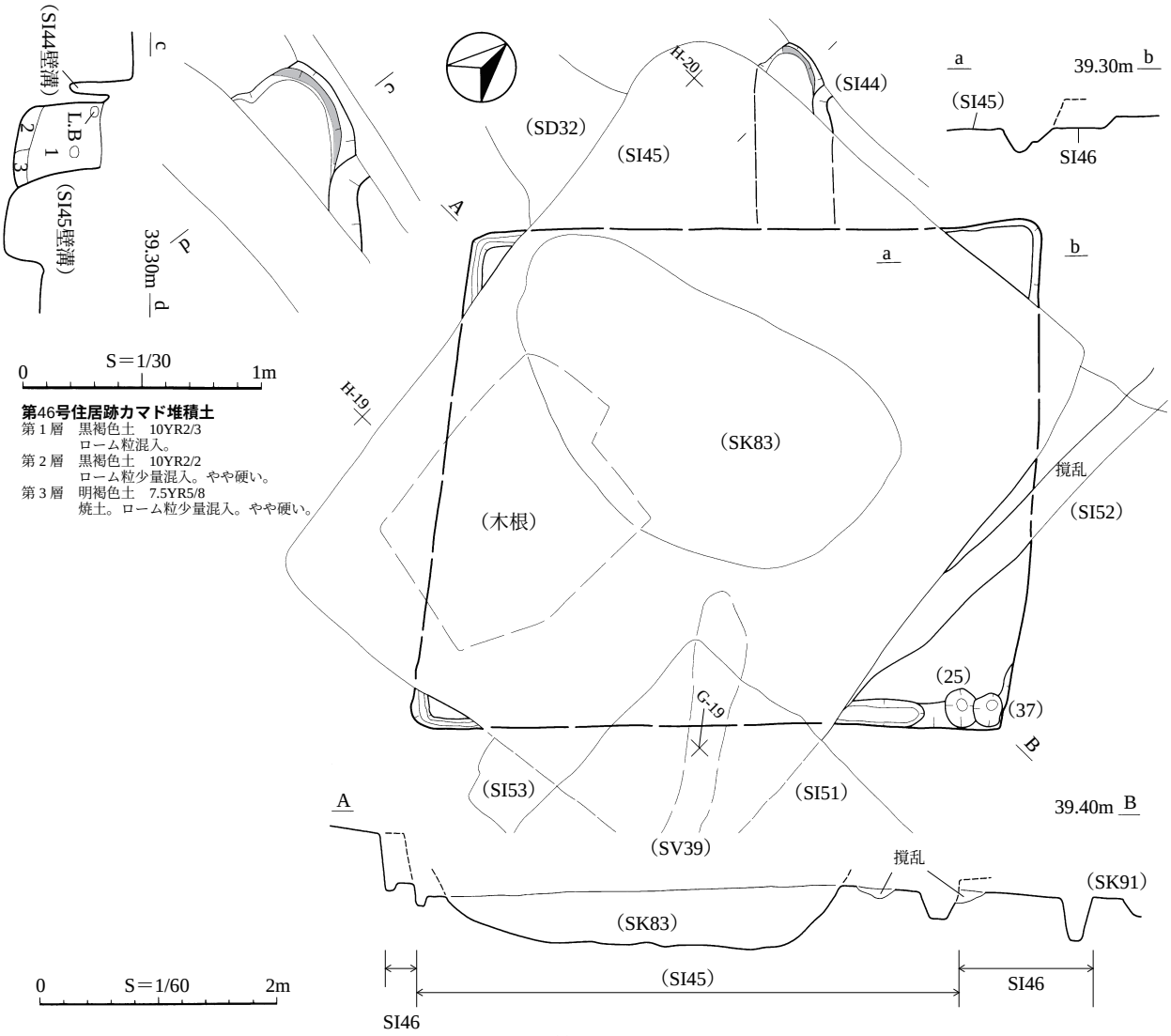


図111　第46号住居跡

［重複］近・現代の溝跡と重複し、本遺構の方が古い。

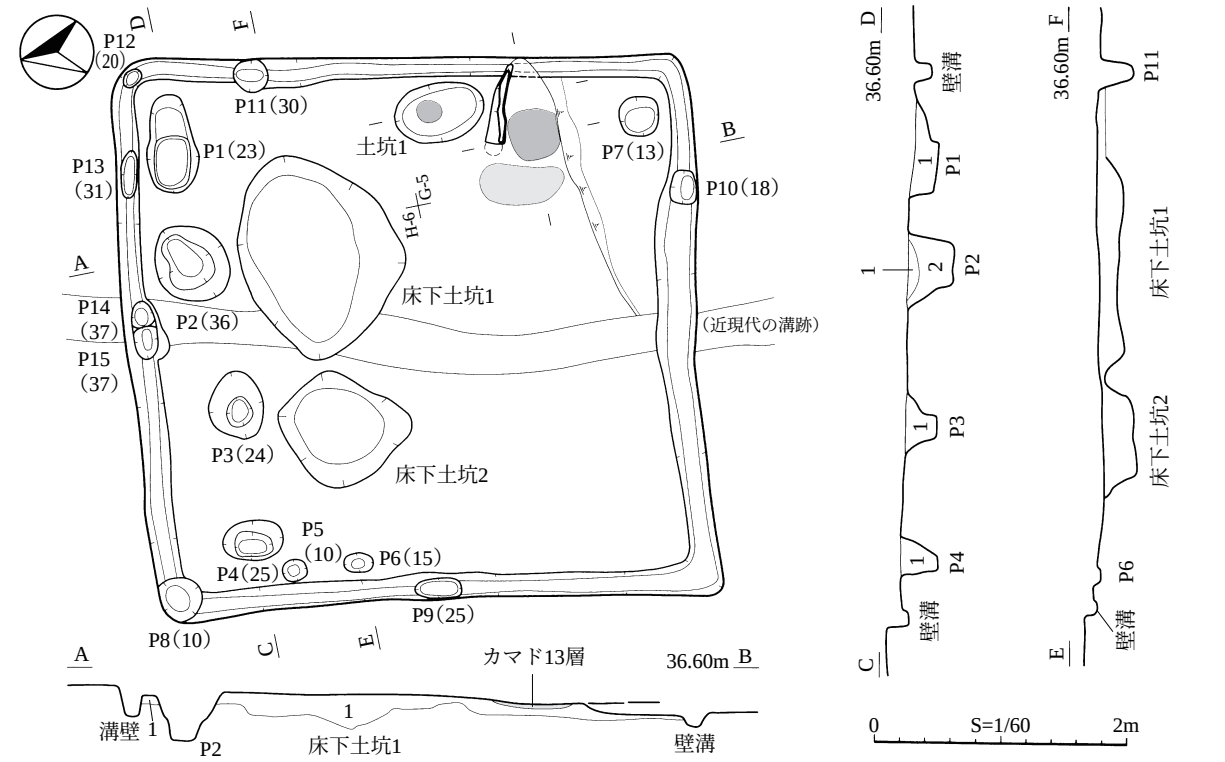
［平面形・規模］平面形は方形である。規模は東側4.5、西側4.4m、南側4.3m、北側4.55mになる。軸長は、東西軸が4.2m、南北軸が4.5mで南北軸が長軸方向になる。床面積は約22.09㎡である。主軸方位は真北から東に約105度傾いている。

［壁・床面］壁は検出されなかった。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、黒色土と黄褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。

［堆積土］掘り方層のみである。

［カマド］東壁の南側で、壁辺の約１／３の所よりカマドが検出された。右側半分は削平されている。確認時に検出された粘土や焼土は、カマド範囲だけでなく、左側や手前に拡がっている。堆積土は粘土や焼土を主体に13層に分層された。第10層が火床面、第11層が袖構築材となる。

袖は床面に黒色土を盛り、その上に、黄褐色の粘土を貼り構築されており、芯材等は検出されなかった。規模は幅15×65㎝、高さ約３㎝である。火床面は40×40㎝ の規模で残存し、10㎝の深さで被熱している。支脚等は検出されなかった。現存している燃焼部規模は42×80㎝で、燃焼部底面は煙道へ向かって緩やかに立ち上がっている。火床面の手前より楕円形の粘土範囲が検出された。規模は30×



第48号住居跡　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ロームとの混合土、貼り床層で、床下土坑1、2の堆積土となる

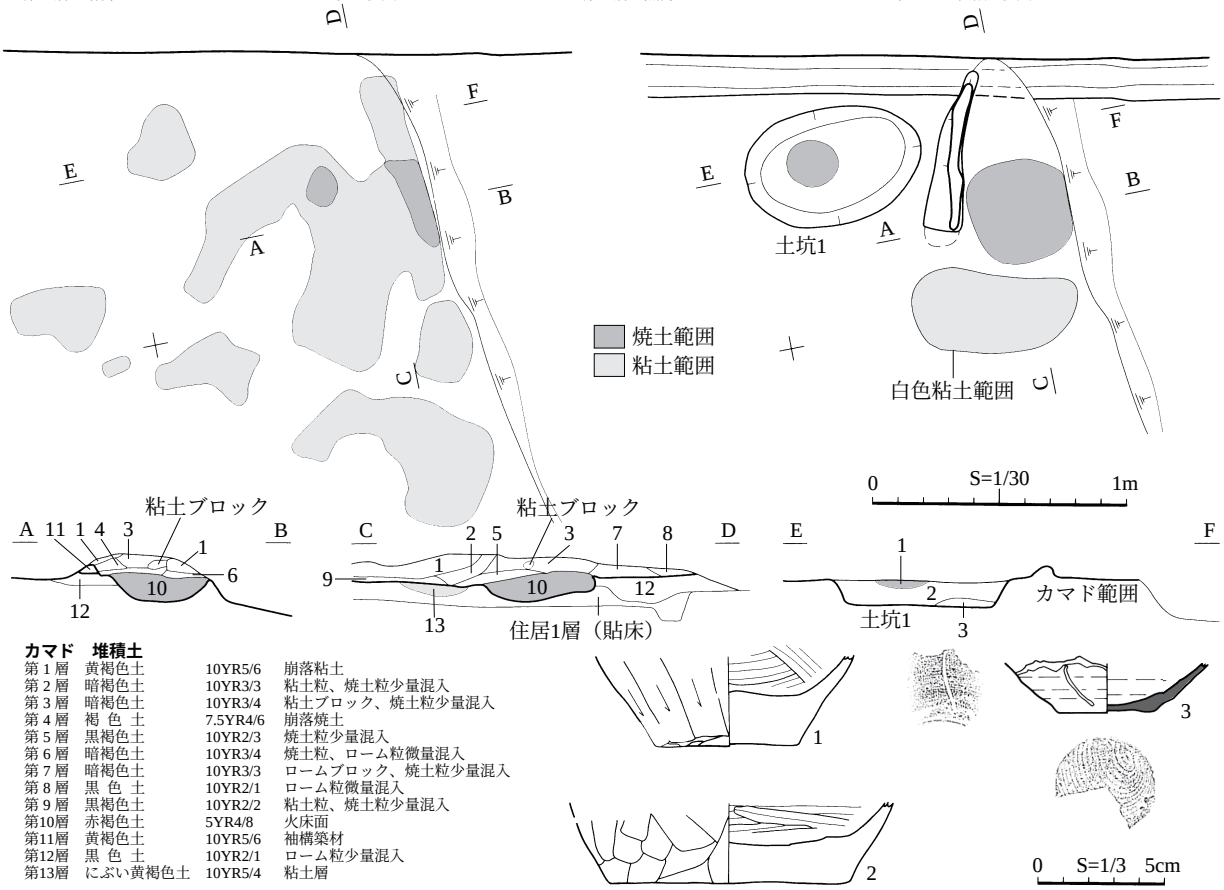
P1　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒、粘土ブロック少量混入

P2　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒微量混入
第２層　暗褐色土　10YR3/3　ロームブロック少量混入

P3　堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/4　ロームとの混合土

P4　堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/4　ロームブロック、ローム粒少量混入

土坑1　堆積土
第１層　褐 色 土　10YR4/6　焼土層
第２層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒少量混入
第３層　黒褐色土　10YR2/3　ロームブロック、ローム粒微量混入



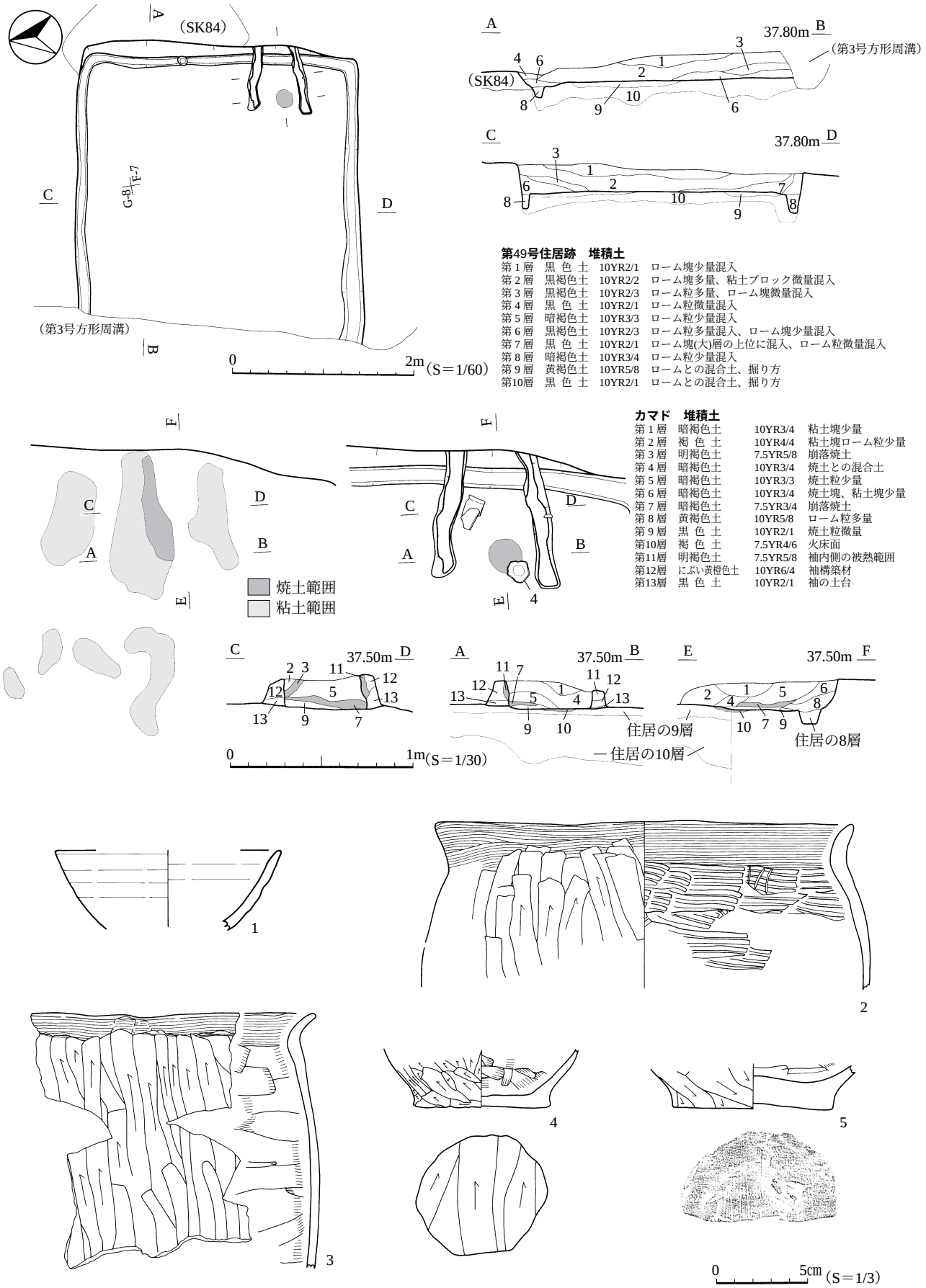
カマド　堆積土

第１層	黄褐色土	10YR5/6	崩落粘土
第２層	暗褐色土	10YR3/3	粘土粒、焼土粒少量混入
第３層	暗褐色土	10YR3/4	粘土ブロック、焼土粒少量混入
第４層	褐 色 土	7.5YR4/6	崩落焼土
第５層	黒褐色土	10YR2/3	焼土粒少量混入
第６層	暗褐色土	10YR3/4	焼土粒、ローム粒微量混入
第７層	暗褐色土	10YR3/3	ロームブロック、焼土粒少量混入
第８層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量混入
第９層	黒褐色土	10YR2/2	粘土粒、焼土粒少量混入
第10層	赤褐色土	5YR4/8	火床面
第11層	黄褐色土	10YR5/6	袖構築材
第12層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量混入
第13層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	粘土層

図112　第48号住居跡と出土遺物

65㎝で、４㎝の厚さで堆積している。被熱はしておらず、用途などは不明である。煙道は検出されなかったが残存部から判断して、煙道の短い半地下式の構造と推測される。
［壁溝］底面を全周している壁溝が検出された。規模は、幅15～30㎝、深さ10～15㎝である。
［柱穴・ピット］床面から７個、壁溝から８個の計15個の小穴が検出された。Ｐ１・Ｐ７が配置から主柱穴の一部になると考えられる。また、壁溝内より検出されたＰ９・Ｐ10・Ｐ11も配置から対応するものと考えられる。
［その他の施設］カマドの左脇から土坑を１基検出した。規模は、開口部で45×70㎝、底面で35×60㎝で、深さは10㎝である。遺物等は出土しなかったが、堆積土上位から円形に被熱している範囲が検出された。規模は径20㎝、深さ約３㎝である。土が強く赤変しており、廃棄されたというよりも、土坑埋没後に火を焚いた状況を示している。また、床下から２基の土坑が検出された。床下土坑１の規模は開口部で、125×165㎝、底面で85×140㎝で、深さは10㎝である。床下土坑２の規模は開口部で90×110㎝、底面で60×70㎝で、深さは20㎝である。２基共に底面に起伏がみられる。これらは住居の掘り方土が堆積土となっており、掘り方を掘る際に構築された可能性が考えられる。
［出土遺物］土師器片80点（1,016ｇ）、須恵器片８点（188ｇ）が出土している。図112-３は須恵器坏で底部付近にヘラ記号が記されている。その他に縄文土器片が5.8ｇ出土している。
［小結］火山灰が検出されておらず、詳細な構築年代は不明であるが、カマド脇に土坑が構築されているなど、本遺跡で検出されている10世紀中葉以降の住居跡と同じ属性を有しており、当該期になる可能性も考えられる。（小山）

第49号住居跡（ＳＩ49）（図113）
［位置・確認］調査区の南端Ｆ・Ｇ－７・８グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より方形プランを確認した。同時に東壁の南側より、カマドと思われる焼土、粘土の不整形プランを確認した。
［重複］第84号土坑より新しく、第３号方形周溝よりも古い。
［平面形・規模］重複により住居の西壁は検出されなかったが、平面形は方形と考えられる。規模は重複の影響を受けていない東壁が3.0ｍで、現存している南壁と北壁は、南壁3.15ｍ、北壁は2.9ｍである。南北軸の軸長は3.1ｍで、現存している東西軸は3.0ｍで、床面積は約（9.10㎡）である。主軸方位は真北から東に約100度傾いている。
［壁・床面］壁高は、東壁約20㎝、南壁約26㎝、北壁約30㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、黒色土と黄褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。
［堆積土］黒褐色土を主体にして10層に分層された。主体を占める第２層に多量のロームブロックが含まれており、人為堆積の状況を示している。第９・10層は掘り方層となる。
［カマド］東壁の南側で、壁辺の約１／３の所よりカマドが検出された。カマド確認時に検出された粘土や焼土は、カマド範囲だけでなく、左側や手前に拡がっている。堆積土は粘土や焼土を主体にして13層に分層された。第10層が火床面、第11層、12層が袖構築粘土材となり、第13層が袖の土台になる層である。
　袖は床面に黒色土を盛り、その上に、黄褐色の粘土を貼り構築される。右袖にて土師器片を芯材に使用している状況が確認された。袖の遺存状態は良好で、両袖共に10×70㎝程の範囲で、高さは最大



第49号住居跡　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR2/1	ローム塊少量混入
第２層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊多量、粘土ブロック微量混入
第３層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒多量、ローム塊微量混入
第４層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量混入
第５層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量混入
第６層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒多量混入、ローム塊少量混入
第７層	黒 色 土	10YR2/1	ローム塊(大)層の上位に混入、ローム粒微量混入
第８層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量混入
第９層	黄褐色土	10YR5/8	ロームとの混合土、掘り方
第10層	黒 色 土	10YR2/1	ロームとの混合土、掘り方

カマド　堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/4	粘土塊少量
第２層	褐 色 土	10YR4/4	粘土塊ローム粒少量
第３層	明褐色土	7.5YR5/8	崩落焼土
第４層	暗褐色土	10YR3/4	焼土との混合土
第５層	暗褐色土	10YR3/3	焼土粒少量
第６層	暗褐色土	10YR3/4	焼土塊、粘土塊少量
第７層	暗褐色土	7.5YR3/4	崩落焼土
第８層	黄褐色土	10YR5/8	ローム粒多量
第９層	黒 色 土	10YR2/1	焼土粒微量
第10層	褐 色 土	7.5YR4/6	火床面
第11層	明褐色土	7.5YR5/8	袖内側の被熱範囲
第12層	にぶい黄橙色土	10YR6/4	袖構築材
第13層	黒 色 土	10YR2/1	袖の土台

図113　第49号住居跡と出土遺物

20㎝程の規模で残存している。また、両袖共に壁面が被熱し赤変している。火床面は、径20㎝、深さ３㎝で被熱している。支脚等は検出されなかった。燃焼部規模は45×75㎝である。燃焼部底面は平坦で、煙道口で約20㎝の高さで立ち上がっている。煙道は検出されなかったが残存部から判断して、煙道の短い半地下式の構造と推測される。

［壁溝］底面を全周している壁溝が検出された。規模は幅10～25㎝、深さ10～20㎝である。

［柱穴・ピット・その他の施設］検出されなかった。

［出土遺物］土師器片95点（1.8kg）が出土している。

［小結］出土遺物から構築年代は10世紀代と考えられる。（小山）

第50号住居跡（ＳＩ50）（図114）

［位置・確認］調査区の南端Ｅ・Ｆ－９～11グリッドに位置している。

［重複］第79号溝跡より新しく、第88号土坑、第26・31号溝跡より古い。

［平面形・規模］住居の東辺は、一部壁溝と思われる溝が検出できたのみである。全体形は不明であるが、方形を基調とするものと考えられる。規模は全て検出できた西壁で6.05m、現存している壁長は、東側0.6m、南壁3.0m、北壁5.8mである。軸長は南北軸が6.0m、東西軸が5.5mで、南北軸が長軸となる。現存している床面積は約（34.16）㎡である。主軸方位は真北から東に約115度傾いている。

［壁・床面］検出できた西壁は約33㎝で、北壁と南壁はこの高さから東側へ向かい徐々に低くなり、壁の半分ほどの位置で検出されなくなる。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、黒色土と黄褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。床面の広い範囲で貼り床が検出された。これを剥いだところピットが検出された事より、本遺構は建て替え若しくは拡張している可能性が考えられる。

［堆積土］黒色土を主体にして５層に分層された。本遺構より採取した火山灰を分析しており、十和田a火山灰が汚染されたものとの結果を得ている。

［カマド］東辺の南側から、不整形に拡がっている粘土範囲と焼土範囲が検出された。焼土範囲は強く被熱しており火床面の一部と考えられる。火床面は黒色土を主体とした層の上から検出されており、本カマドも盛り土して構築されていたと考えられる。

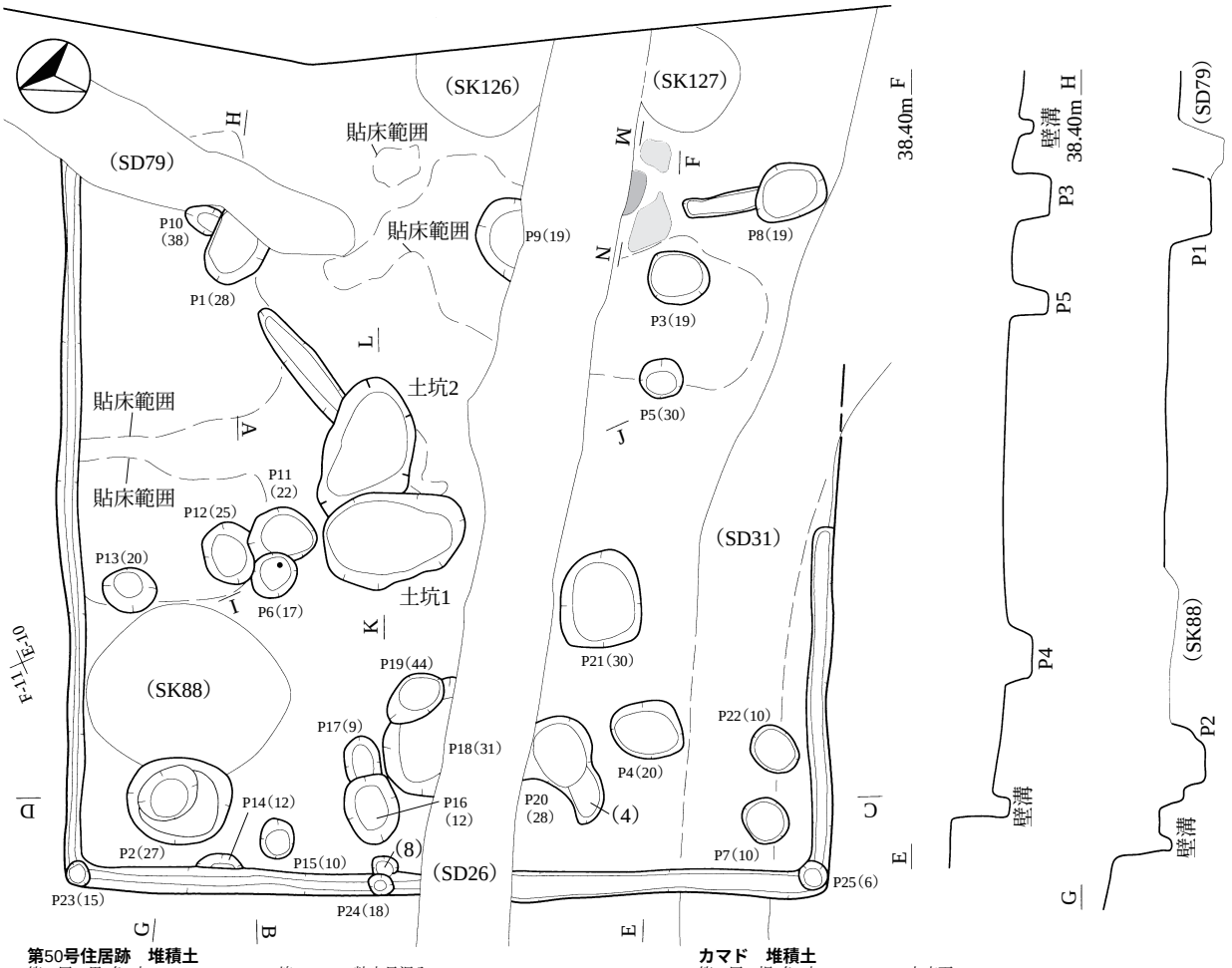
［壁溝］幅15～20㎝、深さ10～20㎝で構築され、南辺と東辺からは一部しか検出されなかった。

［柱穴・ピット］床面から総数24個の小穴が検出された。位置や深さからＰ１～４が主柱穴になるものと考えられる。Ｐ６からは甕の底部が倒立した状態で出土している。

［その他の施設］床面から２基の土坑が検出された。土坑１の規模は開口部80×115㎝、底部60×100㎝で、深さは約27㎝である。土坑２の規模は開口部70×120㎝、底部55×90㎝で、深さは約27㎝である。２基共に、底面に起伏が認められる。また、土坑２に切られる形で間仕切り溝と思われる溝が検出された。25×100㎝、深さ10㎝の規模で住居の北東端の方へ伸びている。

［出土遺物］土師器片181点（2.9kg）須恵器片８点（350ｇ）砥石が１点出土している。

［小結］十和田a火山灰のみが二次堆積しており、構築年代は10世紀前葉以降と考えられる。（小山）



第50号住居跡　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR2/1　ローム塊、ローム粒少量混入
第２層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒多量混入、ローム塊少量混入
第３層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量混入
第４層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒少量混入、周溝
第５層　褐 色 土　10YR4/6　ロームとの混合土、掘り方層

焼土範囲
粘土範囲

カマド　堆積土
第１層　褐 色 土　7.5YR4/6　火床面
第２層　黒褐色土　10YR3/1　焼土ブロック、ローム塊、ローム粒少量混入

P6　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量混入
第２層　褐 色 土　10YR4/6　ロームとの混合土

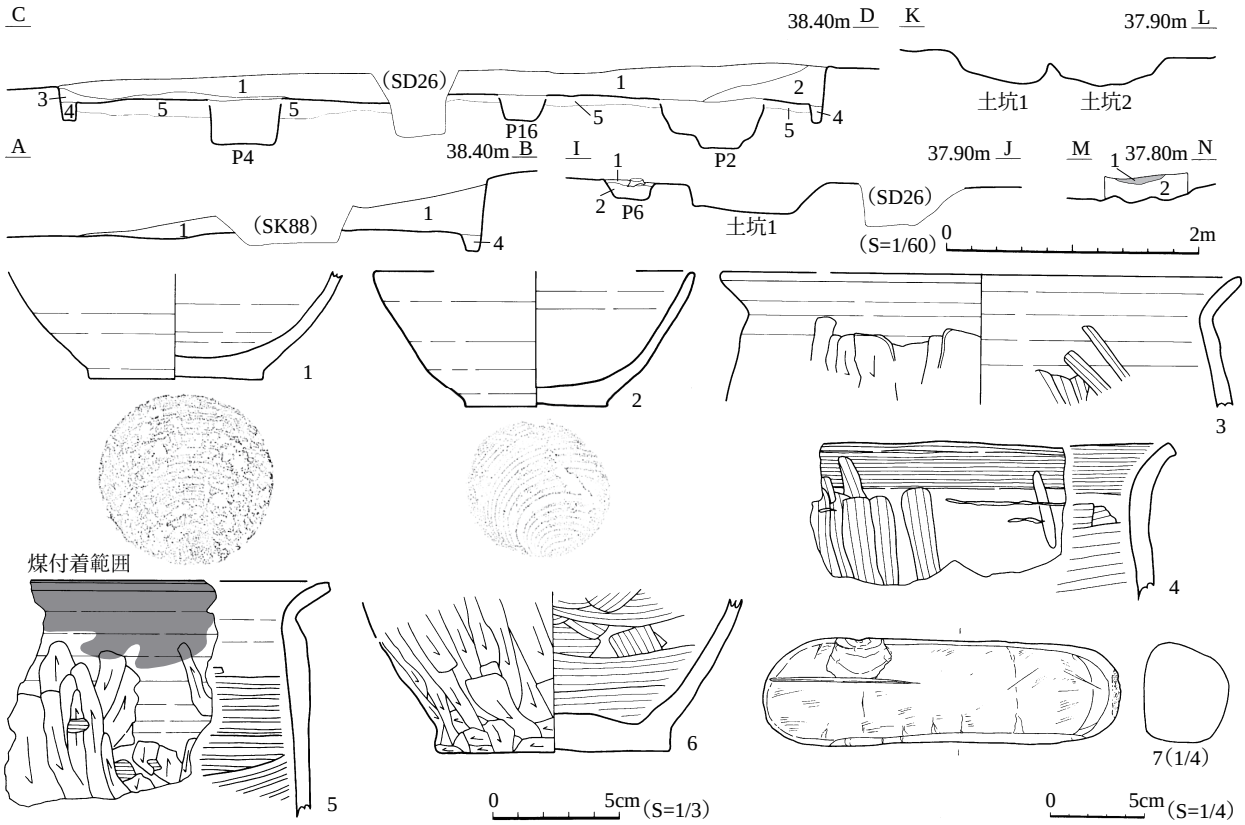


図114　第50号住居跡と出土遺物

第51号住居跡（ＳＩ51）（図115）

［位置・確認］壕の東側、住居跡が密集して検出された区域のＦ・Ｇ－18グリッドに位置している。

［重複］第45号・46号・53号・54号・68号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。また、床面から縄文時代の第39号・40号溝状ピットとも重複している。なお、本住居跡を中心とした新旧関係は以下の通りである。

第52号？第53号住居跡→第46号住居跡→（第68号住居跡）（拡張？）→ 第45号住居跡→第83号土坑
第44号住居跡
↓
第55号住居跡 ← 第54号住居跡 → 第51号住居（本住居）

［平面形・規模］平面形は長方形を呈している。東壁4.36m、西壁4.64m、南壁4.08m、北壁4.45mで、長軸（南北）4.43m、短軸4.25mである。床面積は19.90㎡で、主軸方位は北から87度東へ傾いている。

［壁・床面］緩斜面に位置しているため、東壁は検出されなかった。壁高は西壁40㎝、南壁16㎝、北壁８㎝である。基本層序の第Ⅴ層を床面とし、硬く踏みしめられている。

［堆積土］10層に分層したが、第１・２層が本住居跡の主な堆積土である。ローム粒やロームブロックを含む暗褐色土で占められている。なお、第４・５層は壁溝の、第６・７層はピット２の、第８・９層は隣接する第54号住居跡の堆積土であり、第10層は掘り方の堆積土である。第10層は南壁際でのみ見られたもので、第54号住居跡の掘り方とも考えられる。

［カマド］検出されなかった。東壁際の北寄りの場所に検出した焼土がカマド火床面の可能性がある。

［壁溝］東壁南寄りの部分で途切れているが、ほぼ全周している。幅10～20㎝、深さ15～25㎝である。

［柱穴・ピット］床面から９個のピットと四隅から検出した。深さ、配置から主柱穴は四隅にあったと考えられる。

［その他の施設］中央付近と南東隅に土坑を検出した（Ｐ１・Ｐ２）。Ｐ１は56×68㎝の楕円形で、深さ48㎝である。Ｐ２は58×77㎝の隅丸方形で、深さ48㎝である。

［出土遺物］土師器片66点（917ｇ）、須恵器22点（741ｇ）、ミニチュア土器片１点のほか、縄文時代前期の土器片（143ｇ）が出土した。須恵器は坏と甕が出土しているが、図115-３の壺は胎土分析による産地同定では、産地不明としながらも五所川原産の可能性が示唆されているが、胎土・器形等からは五所川原産と考えられる。

［小結］重複関係からは、比較的新しい時期の住居跡といえる。標準サイズの住居跡で、主柱は四隅にある構造である。（畠山）

第52号住居跡（ＳＩ52）（図116）

［位置・確認］壕の東側、Ｆ－19・20グリッドに位置している。住居跡が密集して検出された区域の北側にあたる。上部は削平されていたため、掘り方での調査である。

［重複］第45号・46号・51号・68号住居跡、第91号土坑、第３号溝跡と重複している。このうち、第３号溝との新旧関係は不明であるが、他の遺構よりは古い可能性が高い。

［平面形・規模］壁溝のみの検出であるため、平面形・規模は不明である。北壁部分で3.1mを検出した。

［壁・床面］壁・床面ともに検出できなかった。

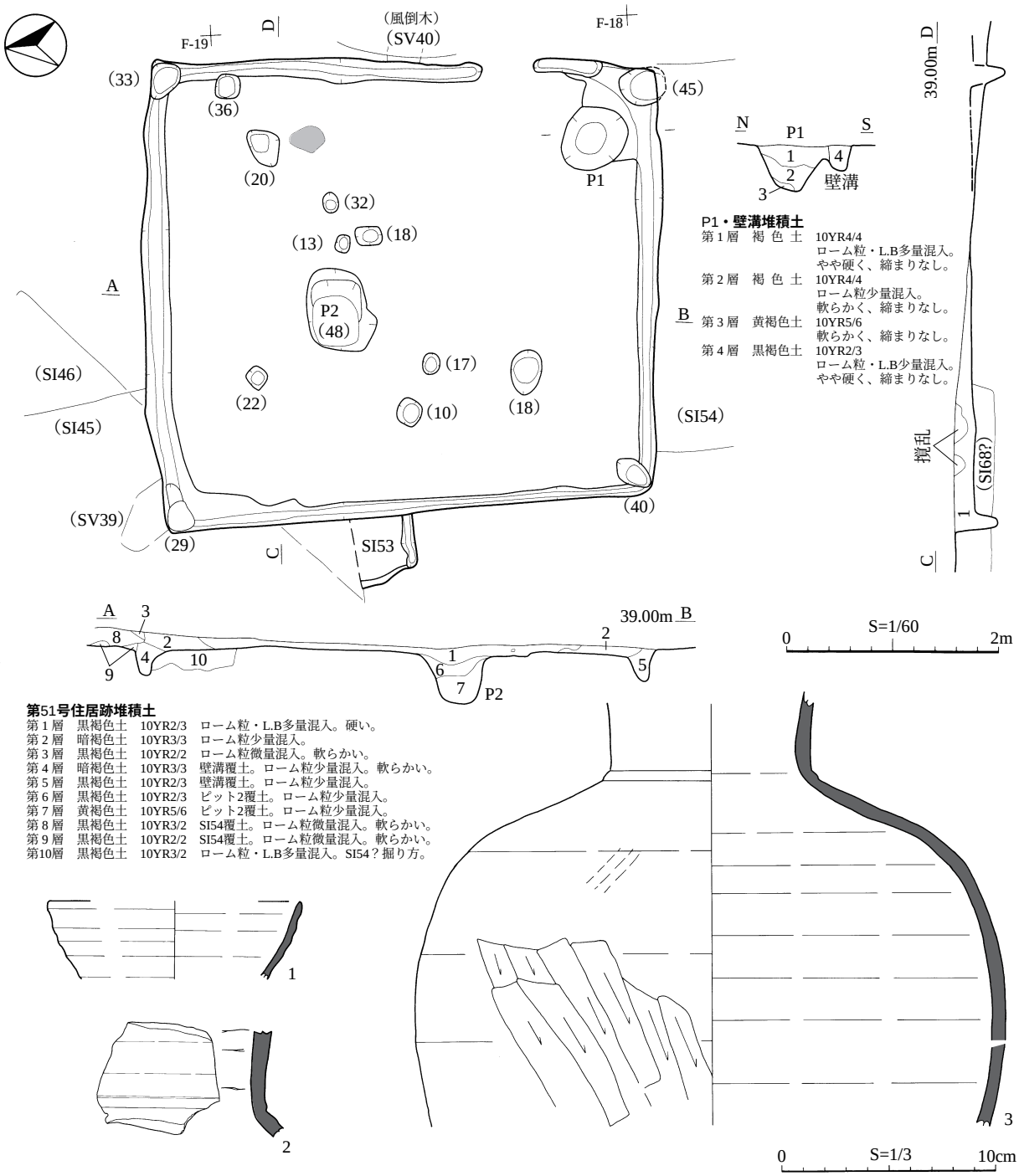


図115　第51号住居跡と出土遺物

［堆積土］不明である。

［カマド］検出できなかった。

［壁溝］北壁に幅20㎝、深さ１～20㎝の壁溝を検出した。

［柱穴・ピット］壁溝に２個、住居内と思われる部分で２個のピットを検出したが、本住居にかかわるかどうかは不明である。

［出土遺物］なし。

［小結］壁・床とも確認できなかったが、北側に検出した壁溝の存在で住居跡とした。（畠山）

第53号住居跡（ＳＩ53）（図116）

［位置・確認］壕の東側、Ｆ－19グリッドに位置している。住居跡が密集して検出された区域の北側に位置しているが、重複により大半を破壊されている。

［重複］第45号・46号・51号・68号住居跡と重複している。第45号住居跡と第51号住居跡に切られ、南西隅の部分しか検出されなかった。

［平面形・規模］平面形・規模とも不明である。

［壁・床面］壁高は18㎝である。第45号住居跡の床面とは１～２㎝高い。また、第51号住居跡床面とは20㎝の比高差があり、本住居跡が高い位置にある。

［堆積土］黒褐色土の堆積土を確認している。

［カマド］検出できなかった。

［壁溝］南壁に幅10㎝、深さ４㎝の壁溝を検出した。

［柱穴・ピット］検出されなかった。

［出土遺物］土師器６点（112ｇ）と縄文時代の土器片１点が出土しただけである。（畠山）

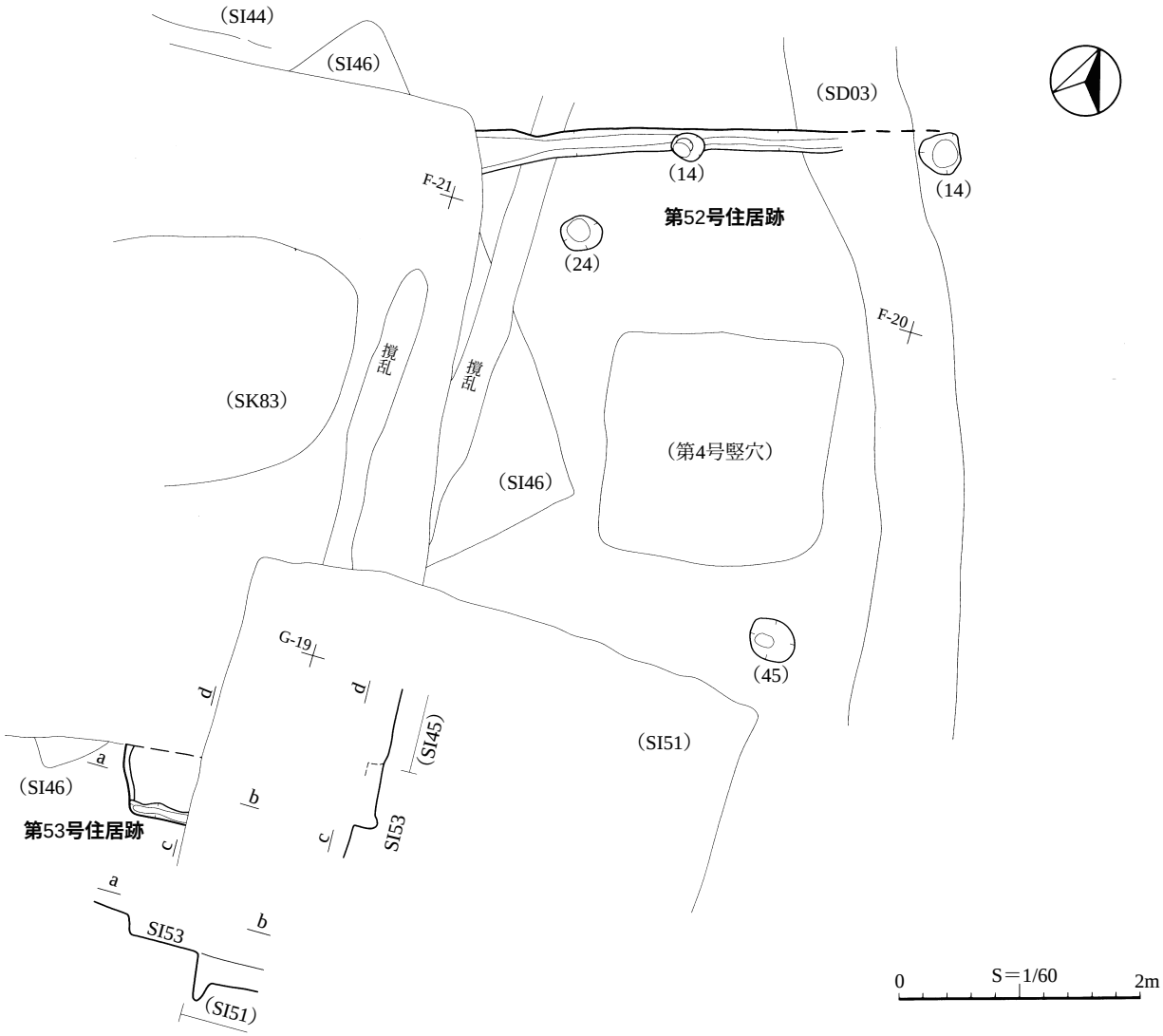


図116　第52号・53号住居跡

第54号住居跡（ＳＩ54）（図117）

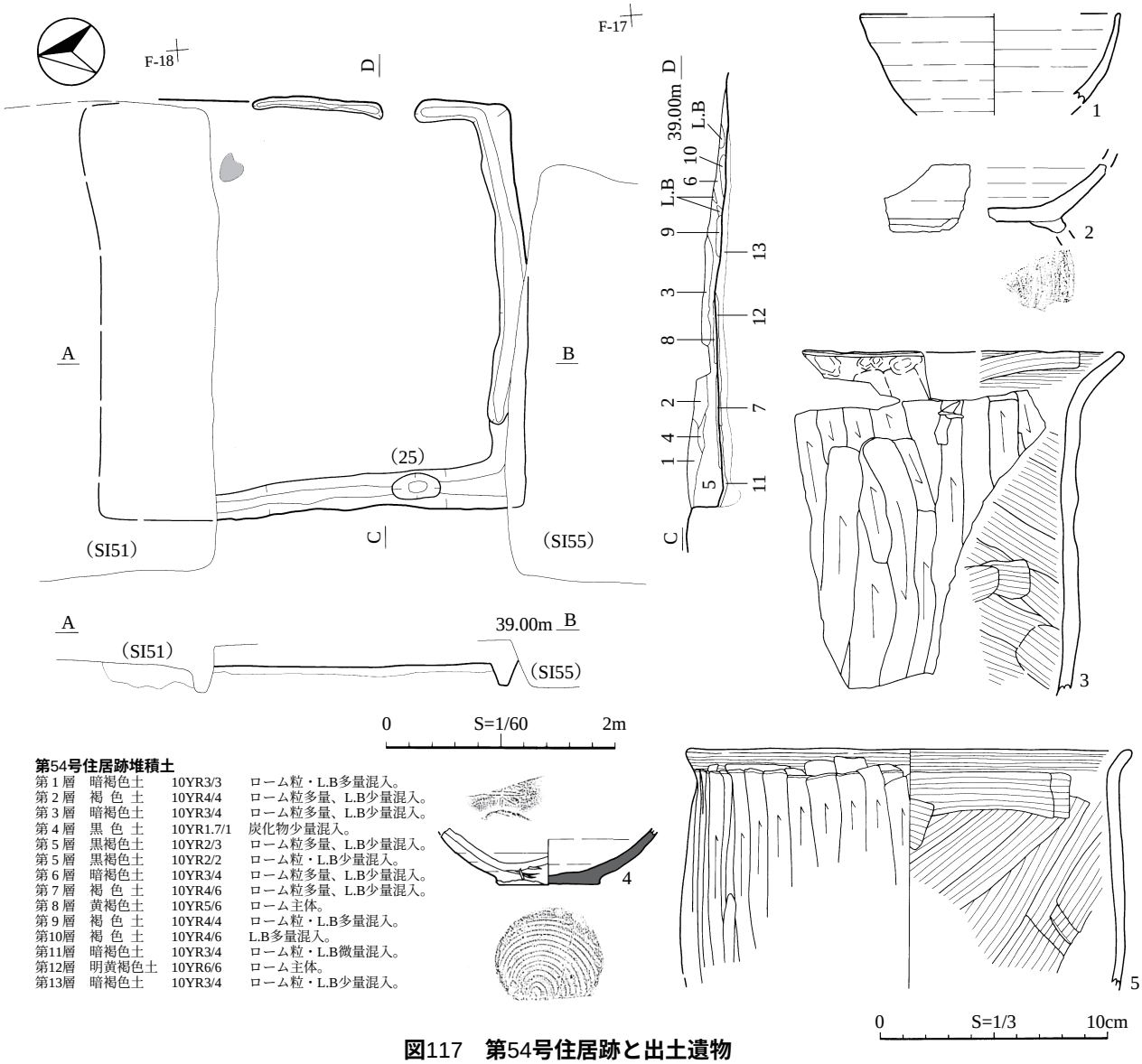
［位置・確認］壕の東側、Ｆ－17グリッドに位置している。住居跡が密集した区域の中間に位置している。

［重複］北側を第51号住居跡に、南側を第55号住居跡に切られている。

［平面形・規模］南壁の一部及び北壁を破壊されているが、掘り方を検出できたことから、おおよその規模を推定することができた。平面形はほぼ方形を呈し、東壁3.7m（推定）、西壁3.7m（推定）、南壁3.54m、北壁3.7m（推定）で、長軸（南北）3.57m（推定）、短軸3.64mである。推定床面積は8.83㎡で、主軸方位は北から97度東へ傾いている。

［壁・床面］重複により北壁と南壁の一部が、また緩斜面のため東壁を検出できなかった。壁高は西壁で30㎝である。基本層序の第Ⅴ層を床面とし、貼床を施している部分もある。

［堆積土］13層に分層できた。堆積土の大半はローム粒やロームブロックを含んだ褐色土であり、人為堆積の様相を呈している。



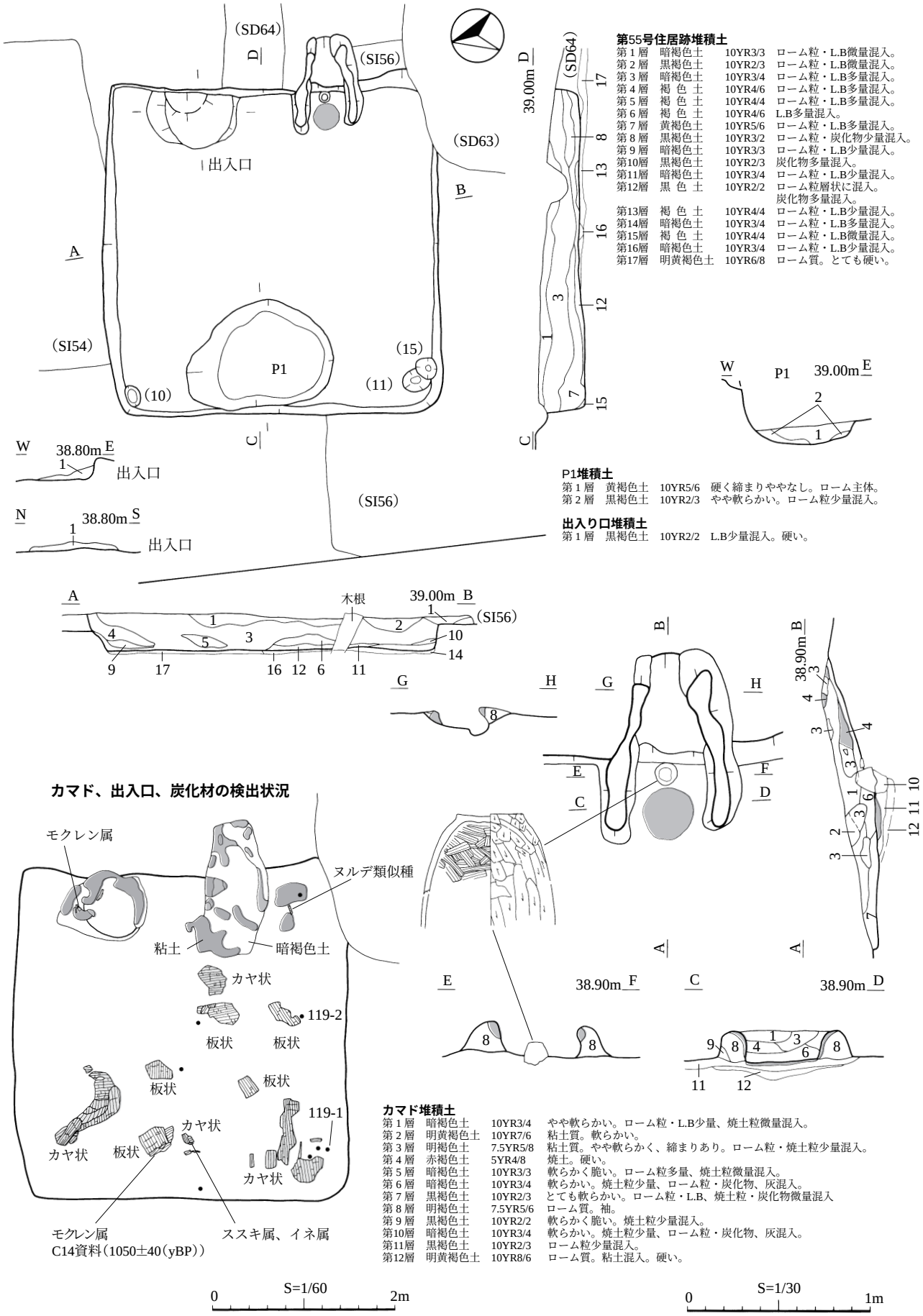
第54号住居跡堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・L.B多量混入。
第２層	褐 色 土	10YR4/4	ローム粒多量、L.B少量混入。
第３層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒多量、L.B少量混入。
第４層	黒 色 土	10YR1.7/1	炭化物少量混入。
第５層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒多量、L.B少量混入。
第５層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒・L.B少量混入。
第６層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒多量、L.B少量混入。
第７層	褐 色 土	10YR4/6	ローム粒多量、L.B少量混入。
第８層	黄褐色土	10YR5/6	ローム主体。
第９層	褐 色 土	10YR4/4	ローム粒・L.B多量混入。
第10層	褐 色 土	10YR4/6	L.B多量混入。
第11層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・L.B微量混入。
第12層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム主体。
第13層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・L.B少量混入。

図117　第54号住居跡と出土遺物

［カマド］東壁北寄りの場所に焼土を検出した。壁からは約50㎝離れているが、カマドの火床面と思われる。
［壁溝］東壁側で途切れている部分があるが、重複部分を除いた壁直下に幅10～30㎝、深さ９～15㎝の壁溝を検出した。
［柱穴・ピット］西壁の壁溝内に１個検出しただけで、柱穴配置は不明である。
［出土遺物］土師器片75点(1310ｇ)、須恵器片６点（坏、106ｇ）のほか、縄文時代前期の土器片（12ｇ）と石器１点（礫器）が出土した。図117-４は刻書が見られる須恵器の坏である。（畠山）

第55号住居跡（ＳＩ55）（図118・119）
［位置・確認］壕の東側、F・G－16・17グリッドに位置している。住居跡が密集して検出された区域のほぼ中央部に位置している。焼失家屋である。
［重複］第54号・第56号住居跡及び第４号方形周溝・第64号溝跡と重複している。新旧関係は第４号方形周溝より古いが、他の遺構よりは新しい。
［平面形・規模］平面形は、ほぼ方形を呈している。規模は東壁3.55m（推定）、西壁3.45m、南壁3.70m（推定）、北壁3.60mで、長軸（南北）3.65m、短軸3.53mである。床面積は11.82㎡、主軸方位は北から99度東へ傾いている。
［壁・床面］壁高は東壁25㎝、西壁53㎝、南壁43㎝、北壁43㎝である。基本層序の第Ⅴ層を床面とし、平坦で、硬い。重複している第54号住居跡床面とは23㎝、第56号住居跡とは33㎝の比高差があり、本住居跡の床面はこれらの住居跡よりも低い位置に構築されている。
［堆積土］17層に分層した。大半はローム粒やロームブロックを多量に含む暗褐色土で、下位に褐色土や黄褐色土が堆積している。また、床面から床面直上にかけては黒色土が広範に見られ、炭化材が出土している。
［カマド］東壁の南寄りに位置しており、遺存状況は良好である。カマドは粘土で構築されている。燃焼部は幅40㎝、長さ（奥行き）45㎝の規模である。火床面は径28㎝の円形を呈し、壁際に近い場所には土師器甕の底部を転用した支脚が設置されている。煙道部は半地下式の構造で、幅40㎝、長さ60㎝である。
［壁溝］検出されなかった。
［柱穴・ピット］西壁の両隅に浅いピットを検出した。柱穴と思われる。おそらく、四隅に柱が建つ構造と思われる。
［出入り口］東壁北寄りの場所に検出した。黒褐色土を幅約１m、長さ50㎝の半円状に盛土してスロープを構築しており、上面は非常に硬い。
［その他の施設］西壁際の中央に、楕円形の土坑を検出した。規模は短軸1.25m、長軸1.60m、深さ29㎝である。
［炭化材］床面から床面直上にかけて、炭化材とカヤ状の炭化物が検出された。炭化材には板状のものと小さな棒状の丸材とがある。遺存状態は非常に悪く、材の特徴や上屋構造を把握できる状況にはない。棒状の丸材は樹種同定ではモクレン属、ヌルデ類似種、カヤ状の炭化物はススキ属、イネ属と同定された。このうち、ススキ属やイネ属は部分的に出土しているが、それぞれに厚さやワラの向き



第55号住居跡堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・L.B微量混入。
第２層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・L.B微量混入。
第３層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・L.B多量混入。
第４層	褐　色　土	10YR4/6	ローム粒・L.B多量混入。
第５層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒・L.B多量混入。
第６層	褐　色　土	10YR4/6	L.B多量混入。
第７層	黄褐色土	10YR5/6	ローム粒・L.B多量混入。
第８層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒・炭化物少量混入。
第９層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・L.B少量混入。
第10層	黒褐色土	10YR2/3	炭化物多量混入。
第11層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・L.B少量混入。
第12層	黒　色　土	10YR2/2	ローム粒層状に混入。 炭化物多量混入。
第13層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒・L.B少量混入。
第14層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・L.B多量混入。
第15層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒・L.B微量混入。
第16層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・L.B少量混入。
第17層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム質。とても硬い。

P1堆積土

第１層	黄褐色土	10YR5/6	硬く締まりややなし。ローム主体。
第２層	黒褐色土	10YR2/3	やや軟らかい。ローム粒少量混入。

出入り口堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/2	L.B少量混入。硬い。

カマド堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/4	やや軟らかい。ローム粒・L.B少量、焼土粒微量混入。
第２層	明黄褐色土	10YR7/6	粘土質。軟らかい。
第３層	明褐色土	7.5YR5/8	粘土質。やや軟らかく、締まりあり。ローム粒・焼土粒少量混入。
第４層	赤褐色土	5YR4/8	焼土。硬い。
第５層	暗褐色土	10YR3/3	軟らかく脆い。ローム粒多量、焼土粒微量混入。
第６層	暗褐色土	10YR3/4	軟らかい。焼土粒少量、ローム粒・炭化物、灰混入。
第７層	黒褐色土	10YR2/3	とても軟らかい。ローム粒・L.B、焼土粒・炭化物微量混入
第８層	明褐色土	7.5YR5/6	ローム質。袖。
第９層	黒褐色土	10YR2/2	軟らかく脆い。焼土粒少量混入。
第10層	暗褐色土	10YR3/4	軟らかい。焼土粒少量、ローム粒・炭化物、灰混入。
第11層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量混入。
第12層	明黄褐色土	10YR8/6	ローム質。粘土混入。硬い。

図118　第55号住居跡

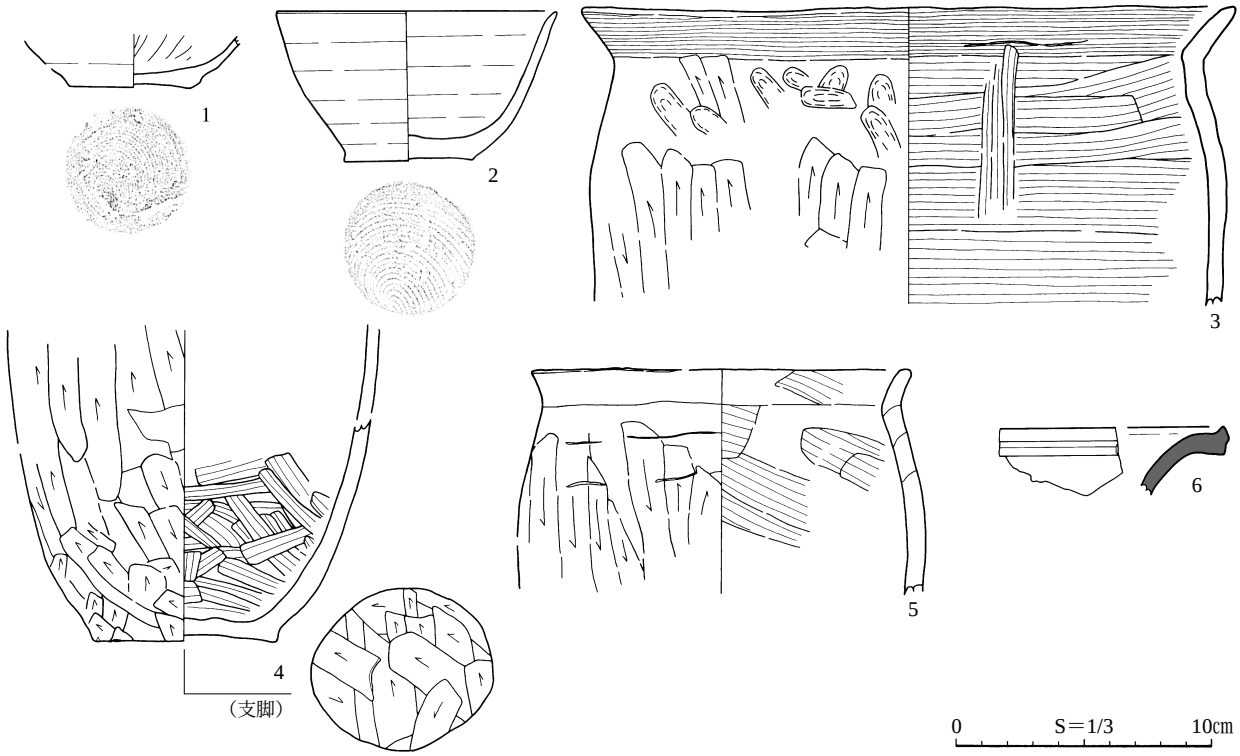


図119　第55号住居跡　出土遺物

が異なっている。これががどのように利用されていたか不明であるが、敷物ではないようである。

［出土遺物］土師器110点（2672ｇ）、須恵器５点（68ｇ）のほか、縄文時代前期の土器片（23ｇ）、石器４点（剥片、石鋸、敲石等）が出土した。

［小結］一辺が約3.5mの住居跡で、東壁に出入り口とカマドを設置している。第32号住居跡でも、出入り口が検出され、同じ構造となっている。床面から出土した炭化材（C-2）の炭素年代（ＡＭＳ法、補正年代）は、1050±40（ｙＢＰ）であった（第９章第２節参照）。（畠山）

第56号住居跡（ＳＩ56）（図120・121）

［位置・確認］壕の東側側、Ｆ・Ｇ－15・16グリッドに位置している。住居跡が密集している区域の中央付近に位置している。焼失家屋である。

［重複］第55号・57号・58号住居跡、第４号方形周溝と重複している。新旧関係は、第55号住居跡、第４号方形周溝より古く、第57号・58号住居跡より新しい。なお、この中で最も新しいのは第４号方形周溝で、最も古いのは第58号住居跡である。なお、周辺で検出した遺構の新旧関係は以下の通りである。

第64号溝跡　　第３号溝跡
↓　　↓
第58号住居跡→第57号住居跡→第56号住居跡→第55号住居跡→第４号方形周溝
↑　　↑
第54号住居跡　　第65号住居跡

［平面形・規模］残存部から推定して、平面形は方形を呈するものと推測される。規模は北壁が5.50mであるが、東壁と西壁が5.8m、南壁が5.7m前後と推定される。また、長軸5.8m、短軸5.7m前後と

推定される。推定床面積は約33㎡、主軸方位は北から98度東へ傾いている。

［壁・床面］壁高は北東隅13㎝、北東壁10㎝、南壁12㎝である。床面は全体に硬く、平坦であるが、町道が通っていたため、轍の跡が見られている。基本層序の第Ⅴ層を床面としている。

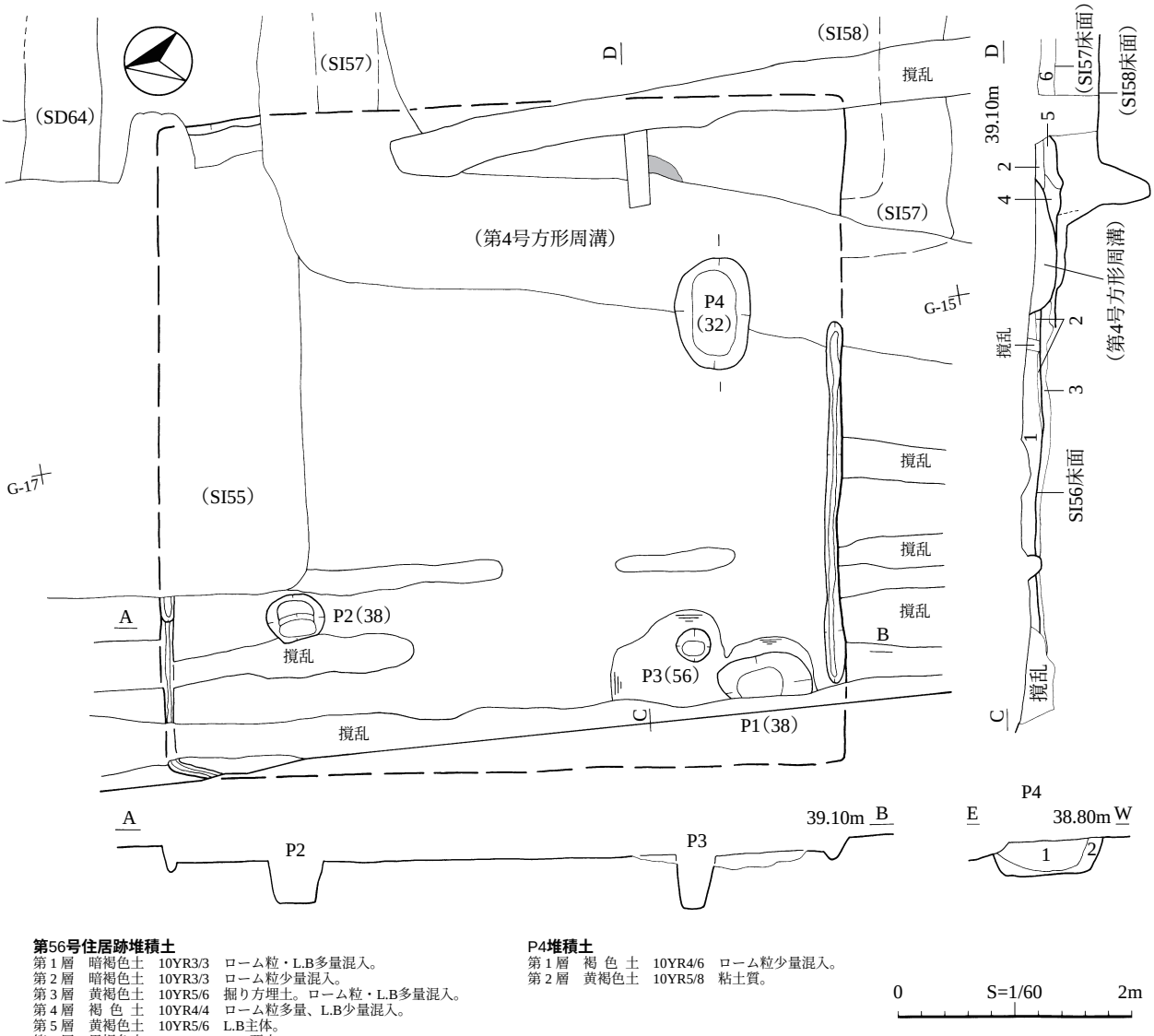
［堆積土］５層に分層した。堆積土の大半はローム粒やロームブロックを含む暗褐色土であり、人為堆積と考えられる。また、第３～５層は掘り方の堆積土である。

［カマド］第４号方形周溝と調査時のトレンチにより破壊されているが、東壁の南寄りのところで焼土を検出した。カマドの火床面と考えられる。煙道部は検出できなかった。

［壁溝］北西側と南壁西側で検出した。幅・深さとも10㎝前後の規模である。

［柱穴・ピット］４個のピットを検出した。このうち、柱穴と考えられるのはＰ２・Ｐ３である。おそらく４本柱の配置と思われるが、重複や撹乱により、東側の２本については明確にはできなかった。

［その他の施設］南西隅及び南壁の中央付近の壁に近接した場所で土坑を検出した。Ｐ１は上部に撹乱を受けているが、推定の規模は50×80㎝前後で、平面形は楕円形と思われる。Ｐ４は65×96㎝の楕円形で、深さ35㎝である。



第56号住居跡堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒・L.B多量混入。
第２層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒少量混入。
第３層　黄褐色土　10YR5/6　掘り方埋土。ローム粒・L.B多量混入。
第４層　褐 色 土　10YR4/4　ローム粒多量、L.B少量混入。
第５層　黄褐色土　10YR5/6　L.B主体。
第６層　黒褐色土　10YR4/3　SI57覆土。

P4堆積土
第１層　褐 色 土　10YR4/6　ローム粒少量混入。
第２層　黄褐色土　10YR5/8　粘土質。

図120　第56号住居跡

［炭化材］床面から床面直上にかけて小さな炭化材あるいは粉状の炭化物混じりの焼土を検出した。炭化材には本来の形状がわかるものはほとんどない。

［出土遺物］土師器117点（1578ｇ）、須恵器35点（777ｇ）、砥石１点のほか、縄文時代の土器片（23ｇ）が出土した。図121-９は、胎土分析による産地同定では、五所川原産という結果が出ている。

［小結］炭化材の遺存状況は悪いが焼失家屋であり、本遺跡でも大型の部類に入る住居跡である。

（畠山）

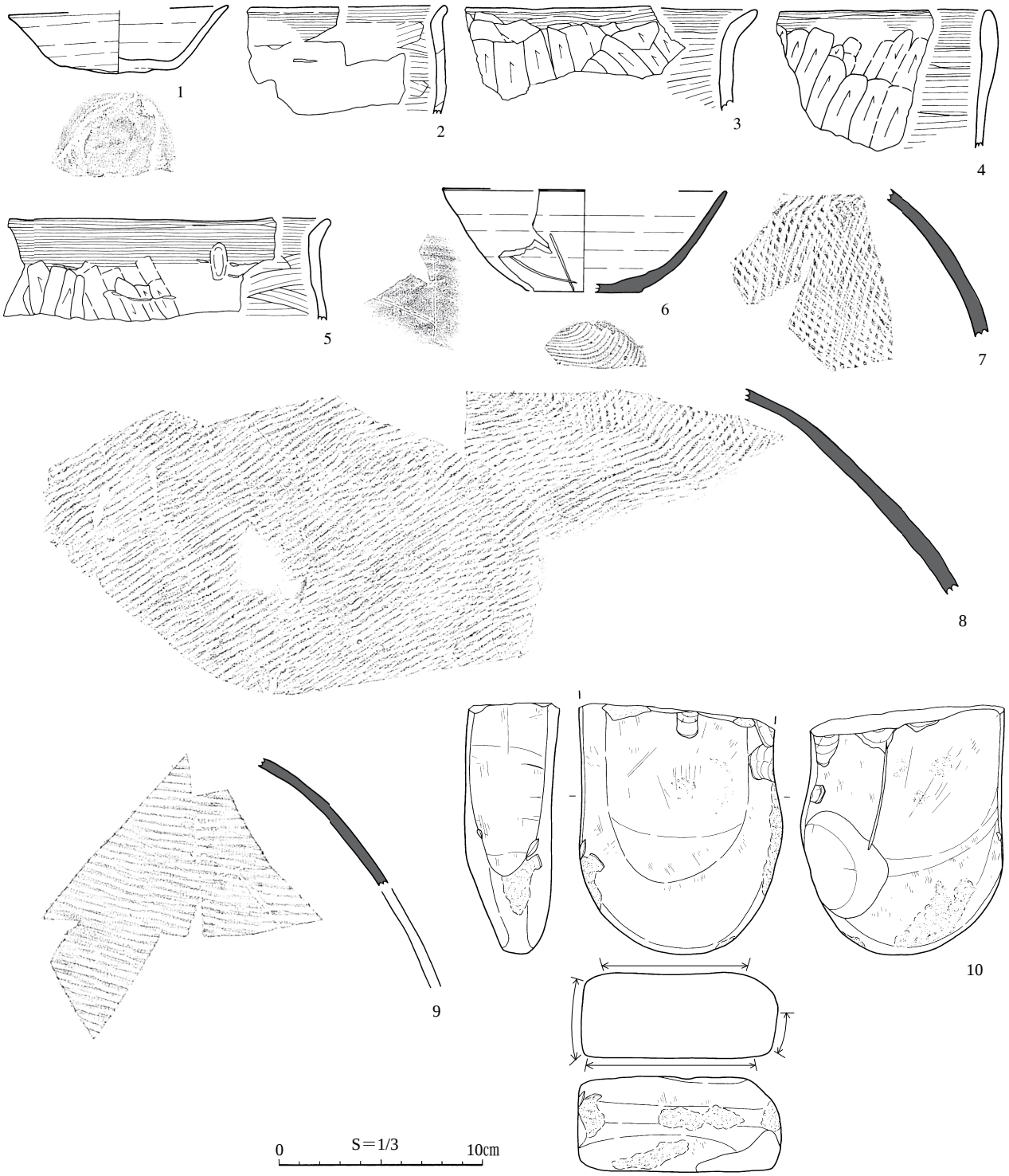


図121　第56号住居跡　出土遺物

第57号住居跡（ＳＩ57）（図122）

［位置・確認］壕の東側、Ｅ・Ｆ－15・16グリッドに位置している。住居跡が密集して検出された区域の中央付近に位置している。

［重複］第56号・58号・70号住居跡及び第４号方形周溝と重複し、新旧関係は以下の通りである。

第70号住居跡→第58号住居跡→第57号住居跡（本住居跡）→第56号住居跡→第４号方形周溝

［平面形・規模］重複や緩傾斜地に立地し、掘り込みが浅いため、東壁及び北壁は検出できなかった。残存部分から推定して、平面形は長方形を呈するものと思われる。規模は西壁5.33mであるが、南壁は4.52m前後と推定される。推定床面積は約24㎡前後と思われる。主軸方位は、北から94度東へ傾いている。

［壁・床面］重複により壁を検出できたのは、南壁の西側だけであり、ここでの壁高は12㎝である。床面の大半は第58号住居跡の堆積土中に構築されている。また、本住居跡の床面は第56号住居跡床面より８㎝低い位置にあり、第58号住居跡よりも40㎝高い位置にある。

［堆積土］10層に分層できた。部分的に黄褐色土や褐色土が見られるが、堆積土の大半は黒褐色土である。

［カマド］住居内の南東側に、灰白色粘土や焼けた粘土塊が見られ、この辺りにカマドがあったと考えられる。遺存状況はきわめて不良で、火床面は小さな痕跡でしか確認できなかった。東壁の南寄りの場所に位置していたものと考えられる。

［壁溝］南壁と北壁の一部に検出できただけである。壁高の規模は幅10㎝前後、深さ約10㎝である。

［柱穴・ピット］壁際に12個のピットを検出した。柱穴配置は不明であるが、四隅と壁柱穴で構成されていた可能性がある。

［その他の施設］床面の中央付近に楕円形の土坑を検出した。短軸64㎝、長軸80㎝、深さ32㎝である。

［出土遺物］土師器片25点（402ｇ）、須恵器片３点（23ｇ）のほか、縄文時代前期の土器片（28ｇ）が出土した。（畠山）

第58号住居跡（ＳＩ58）（図123・124）

［位置・確認］壕の東側、Ｅ・Ｆ－15・16グリッドに位置している。住居跡が密集して検出された区域の中央付近に位置し、第57号住居跡の真下に検出した。

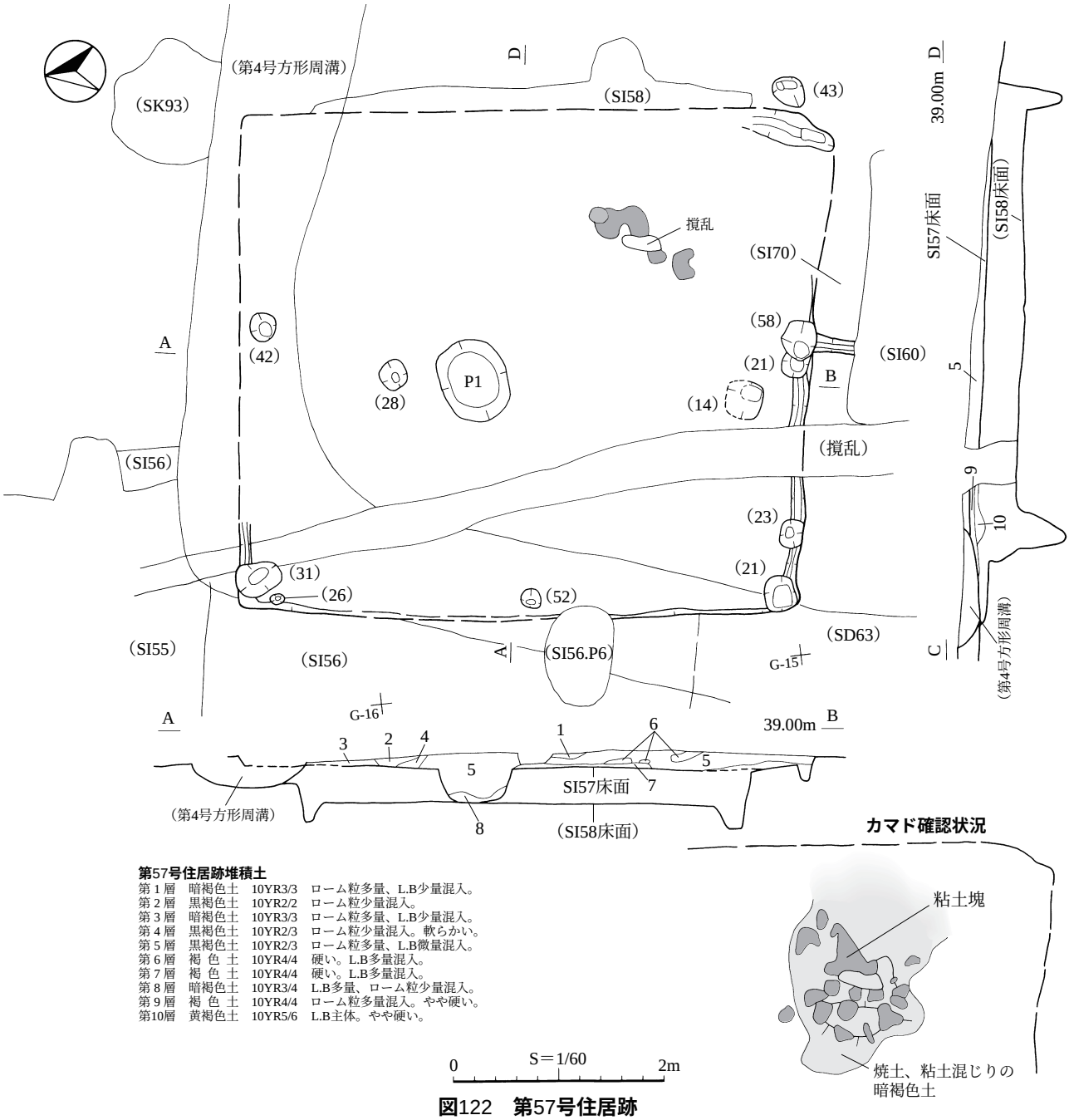
［重複］第56号・57号住居跡、第４号方形周溝と重複し、これらの遺構よりも古い。

［平面形・規模］平面形は方形を呈している。規模は東壁4.30m、西壁4.28m、南壁4.44m、北壁4.30mで、長軸（東西）4.59m、短軸4.31mである。床面積は17.77㎡で、主軸方位は北から94度東へ傾いている。

［壁・床面］壁高は東壁30㎝、南壁46㎝、西壁55㎝、北壁32㎝である。床面には若干の凹凸があるが、ほぼ平坦である。

［堆積土］10層に分層された。堆積土の大半はロームブロックを含む褐色土（第１層、第８層）と暗褐色土（第２層）である。人為堆積で、堆積土に白頭山火山灰（肉眼観察による）の小ブロックを含んでいる。

［カマド］東壁の南寄り、壁辺の約１／３の場所に位置している。人為的に破壊されたような状況で



第57号住居跡堆積土

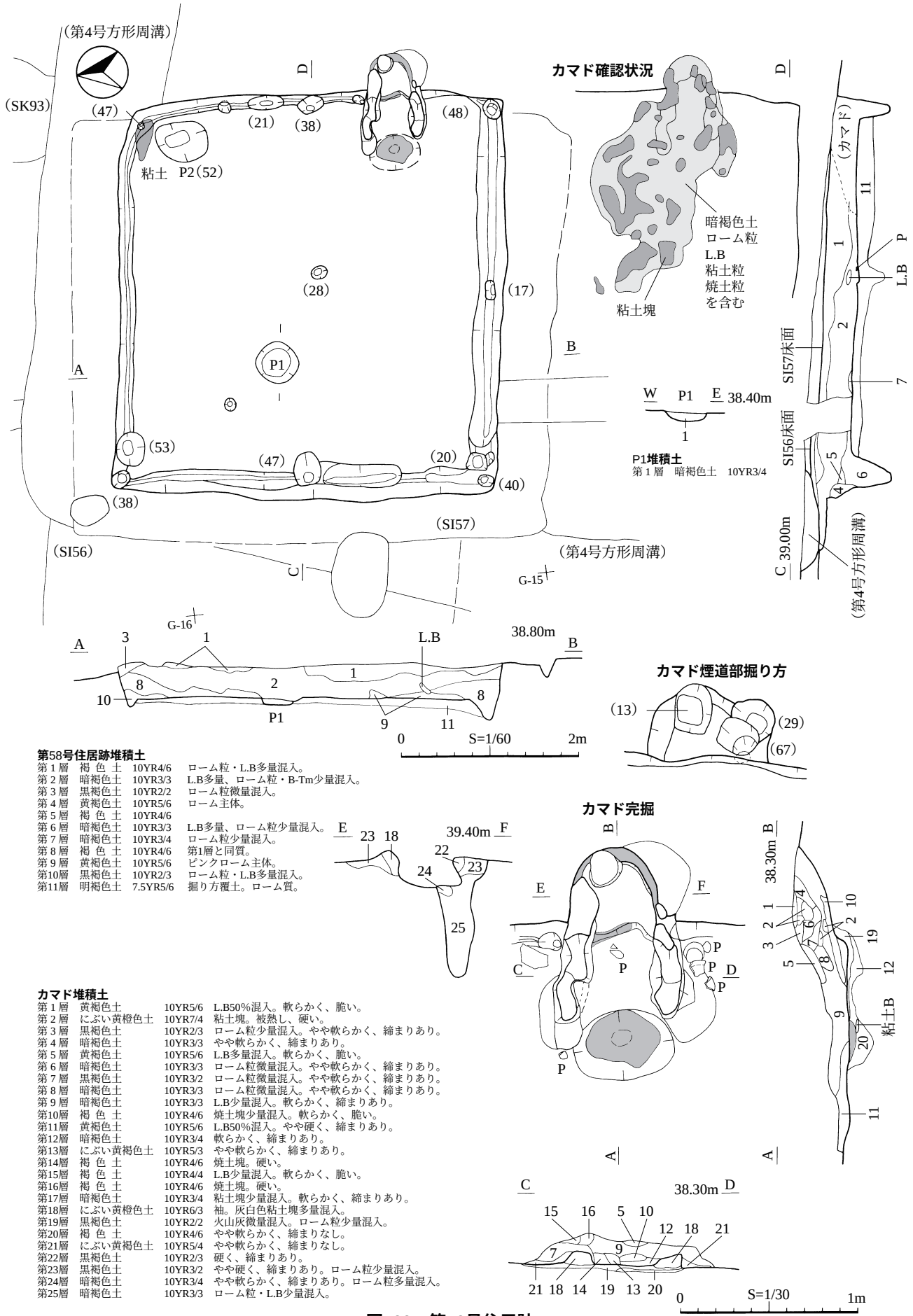
第１層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒多量、L.B少量混入。
第２層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒少量混入。
第３層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒多量、L.B少量混入。
第４層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量混入。軟らかい。
第５層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒多量、L.B微量混入。
第６層　褐　色　土　10YR4/4　硬い。L.B多量混入。
第７層　褐　色　土　10YR4/4　硬い。L.B多量混入。
第８層　暗褐色土　10YR3/4　L.B多量、ローム粒少量混入。
第９層　褐　色　土　10YR4/4　ローム粒多量混入。やや硬い。
第10層　黄褐色土　10YR5/6　L.B主体。やや硬い。

図122　第57号住居跡

検出され、カマド材として用いられた灰白色粘土や焼土のブロックが、カマドの左（北）側から住居跡の中央近くまで散在して確認された。また、焚き口の袖部分は数㎝の厚みしか確認できず、人為的に破壊されたことを裏付けている。燃焼部は焚き口部で幅45㎝であるが、煙道口ではいくぶん狭くなっている。長さ（奥行き）は80㎝であるが、焚き口部からは60㎝である。火床面は30×41㎝の不整円形で、いくぶん窪んでいる。支脚は検出されなかった。煙道部は幅34㎝、長さ34㎝である。先端部には径約20㎝、深さ２㎝の浅い窪みが見られ、煙出孔の底部と考えられる。なお、煙道部の掘り方には、深さ67㎝のピットが検出されている。

［壁溝］東壁のカマド南側の部分を除いてほぼ全周している。幅10～25㎝、深さ10～25㎝である。

［柱穴・ピット］床面から４個、壁溝から13個のピットを検出した。このうち、柱穴と考えられるのは四隅と壁の中間に検出されたピットである。また、床面中央付近に深さ９㎝の浅いピット（Ｐ１）、



第58号住居跡堆積土

第１層	褐　色　土	10YR4/6	ローム粒・L.B多量混入。
第２層	暗褐色土	10YR3/3	L.B多量、ローム粒・B-Tm少量混入。
第３層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量混入。
第４層	黄褐色土	10YR5/6	ローム主体。
第５層	褐　色　土	10YR4/6	
第６層	暗褐色土	10YR3/3	L.B多量、ローム粒少量混入。
第７層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量混入。
第８層	褐　色　土	10YR4/6	第1層と同質。
第９層	黄褐色土	10YR5/6	ピンクローム主体。
第10層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・L.B多量混入。
第11層	明褐色土	7.5YR5/6	掘り方覆土。ローム質。

カマド堆積土

第１層	黄褐色土	10YR5/6	L.B50%混入。軟らかく、脆い。
第２層	にぶい黄橙色土	10YR7/4	粘土塊。被熱し、硬い。
第３層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量混入。やや軟らかく、締まりあり。
第４層	暗褐色土	10YR3/3	やや軟らかく、締まりあり。
第５層	黄褐色土	10YR5/6	L.B多量混入。軟らかく、脆い。
第６層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒微量混入。やや軟らかく、締まりあり。
第７層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒微量混入。やや軟らかく、締まりあり。
第８層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒微量混入。やや軟らかく、締まりあり。
第９層	暗褐色土	10YR3/3	L.B少量混入。軟らかく、締まりあり。
第10層	褐　色　土	10YR4/6	焼土塊少量混入。軟らかく、脆い。
第11層	黄褐色土	10YR5/6	L.B50%混入。やや硬く、締まりあり。
第12層	暗褐色土	10YR3/4	軟らかく、締まりあり。
第13層	にぶい黄褐色土	10YR5/3	やや軟らかく、締まりあり。
第14層	褐　色　土	10YR4/6	焼土塊。硬い。
第15層	褐　色　土	10YR4/4	L.B少量混入。軟らかく、脆い。
第16層	褐　色　土	10YR4/6	焼土塊。硬い。
第17層	暗褐色土	10YR3/4	粘土塊少量混入。軟らかく、締まりあり。
第18層	にぶい黄橙色土	10YR6/3	袖。灰白色粘土塊多量混入。
第19層	黒褐色土	10YR2/2	火山灰微量混入。ローム粒少量混入。
第20層	褐　色　土	10YR4/6	やや軟らかく、締まりなし。
第21層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	やや軟らかく、締まりなし。
第22層	黒褐色土	10YR2/3	硬く、締まりあり。
第23層	黒褐色土	10YR3/2	やや硬く、締まりあり。ローム粒少量混入。
第24層	暗褐色土	10YR3/4	やや軟らかく、締まりあり。ローム粒多量混入。
第25層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・L.B少量混入。

図123　第58号住居跡

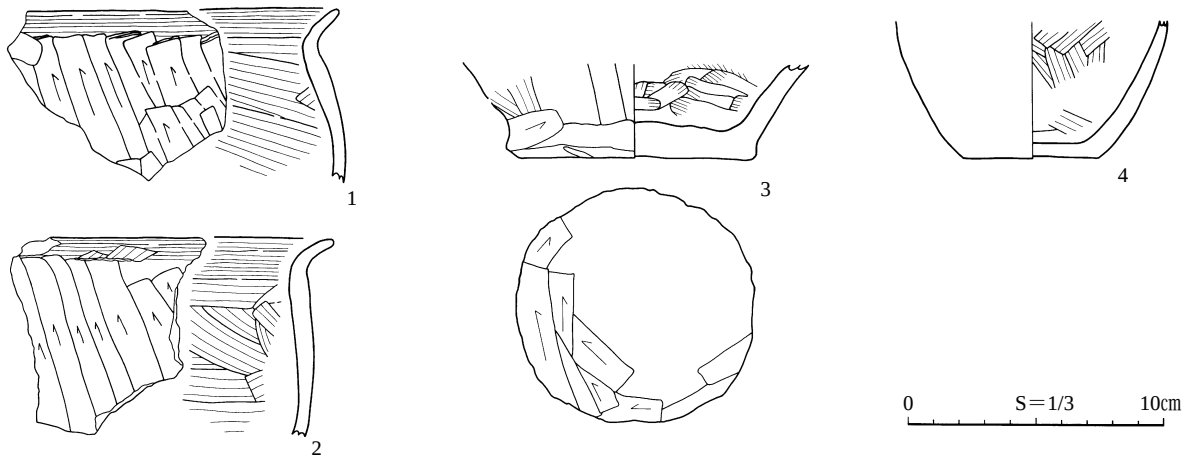


図124　第58号住居跡　出土遺物

北東隅に深さ52㎝のピット（Ｐ２）を検出した。Ｐ２は柱穴の可能性もあるが、Ｐ１は何かの施設跡と考えられる。

［出土遺物］土師器片47点（1114ｇ）と縄文時代前期の土器片（293ｇ）が出土した。

［小結］柱穴は四隅と中間の柱を基本とする配置であり、半地下式のカマドをもっている。カマドの検出状況から、カマド破壊が行われた可能性が高い。出土遺物は少なく、住居の廃棄の際に整理された状況がうかがわれる。堆積土に見られた白頭山火山灰は二次的なものと考えられることから、本住居跡の構築時期は10世紀中葉以降と考えられる。（畠山）

第59号住居跡（ＳＩ59）（図125）

［位置・確認］南側調査区の東よりで、壕の外側、Ｆ－14グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より方形に巡っている壁溝を確認した。

［重複］第65号、第66号住居跡、第４号方形周溝より古い。第60号住居跡とは不明である。

［平面形・規模］重複により全体形は不明であるが、方形を基調としたものと考えられる。現存している壁長は、西壁1.1m、北壁1.6mである。残存率が少ないため、軸長及び床面積は計測していない。

［壁・床面］壁高は、西壁７㎝、北壁30㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、黄褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。

［堆積土］土層観察用のベルトを設定しなかったため不明である。

［カマド・柱穴・ピット］検出されなかった。

［壁溝］幅10～15㎝、深さ5～10㎝で構築されている。

［出土遺物］土師器片36点（270ｇ）、須恵器片１点（46ｇ）が出土している。いずれも少破片である。その他に縄文時代前期中葉の土器片１点が出土している。

［小結］現存している規模が小さく、出土遺物も少ないため、詳細な時期は不明であるが、重複から10世紀代に構築された住居跡と考えられる。（小山）

第60号住居跡（ＳＩ60）（図125）

［位置・確認］南側調査区の東寄りで、壕の外側、Ｅ・Ｆ－14グリッドに位置している。基本層序第

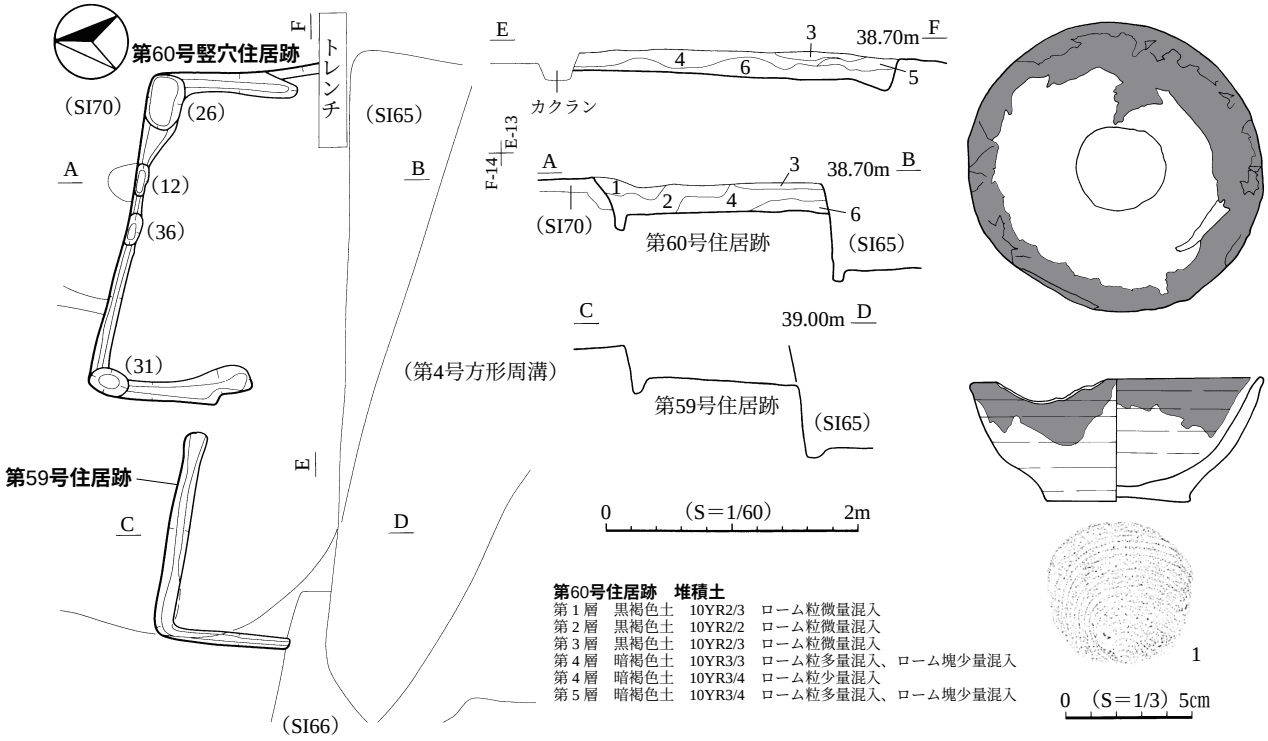


図125　第59号・60号住居跡と出土遺物

Ⅴ層より壁溝のプランを確認した。

［重複］第70号住居跡より新しく、第65号住居跡、第４号方形周溝より古い。第59号住居跡とは不明である。

［平面形・規模］重複により全体形は不明であるが、方形を基調としたものと考えられる。現存している規模は、東壁1.1m、西壁1.3m、北壁2.5mで、東西軸長は2.3mである。残存部分が少なく床面積は計測していない。

［壁・床面］壁高は、東壁10㎝、西壁７㎝、北壁25㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、黄褐色土のロームを用いて、平坦に整地している。

［堆積土］黒褐色土を主体にして５層に分層される。

［カマド・柱穴・ピット］検出されなかった。

［壁溝］幅10㎝、深さ約10㎝で構築されている。

［出土遺物］土師器片７点（190ｇ）が出土している。１は床面直上より出土した土師器坏で、口縁部に再加工が施され、内外面の口縁付近にタール状の付着物が認められることにより、灯明具として再利用されたものと考えられる。

［小結］詳細な時期は不明であるが、重複から10世紀代に構築された住居跡と考えられる。（小山）

第62号住居跡（ＳＩ62）（図126）

［位置・確認］南側調査区の東よりで、壕の外側にあたるＧ－12・13グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より不整形プランとして確認した。

［重複］第67号住居跡、第92号土坑、第112号土坑より新しい。

［平面形・規模］平面形は長方形で、壁長は東壁2.6m、西壁2.5m、北壁2.0mである。南壁は第27号

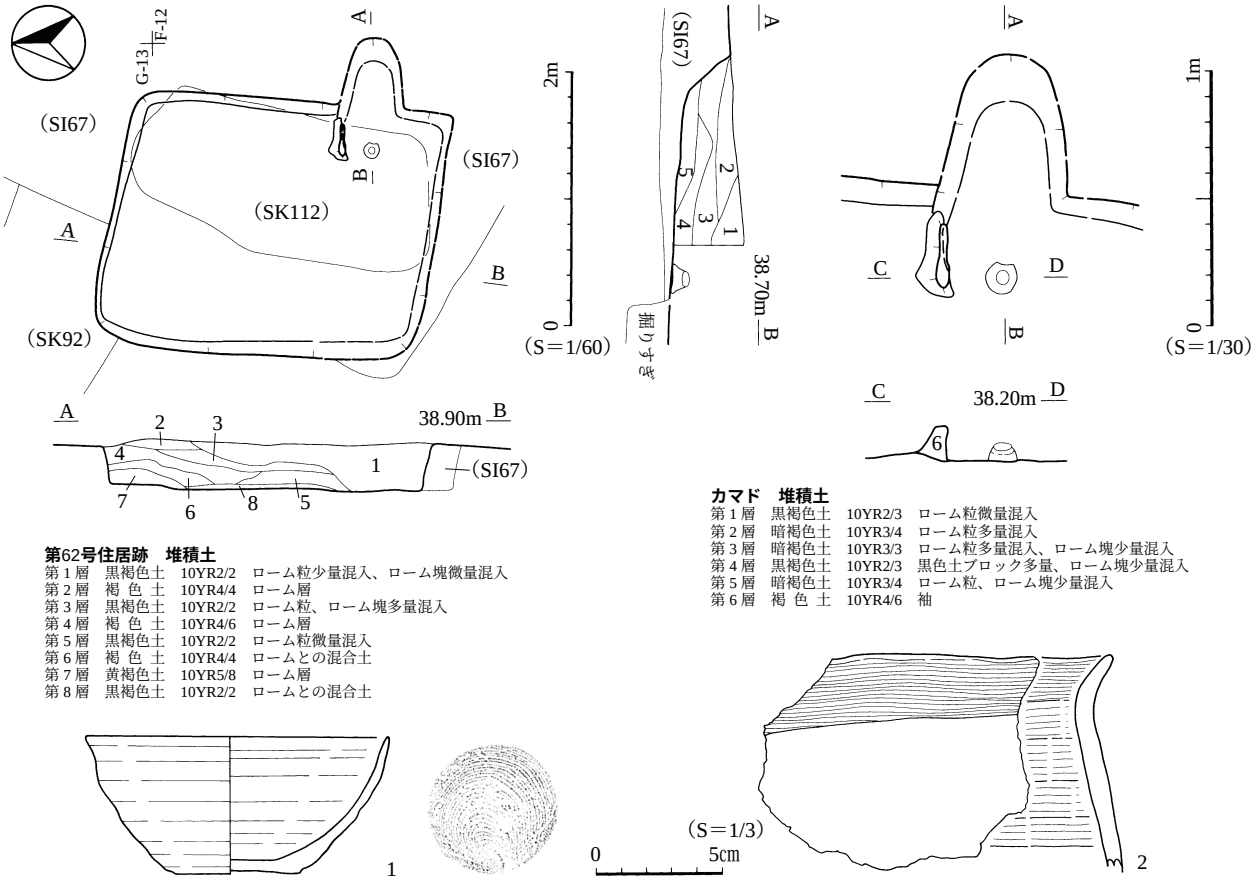


図126　第62号竪穴住居跡と出土遺物

住居跡の壁面まで掘りすぎたため検出できなかった。軸長は東西軸が1.8m、土層から起こした推定の南北軸は2.5mとなり、南北軸が長軸となる。床面積は約4.53㎡である。主軸方位は真北から東に約90度傾いている。

［壁・床面］壁高は東壁30㎝、西壁25～30㎝、北壁30～36㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、黄褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。

［堆積土］黒褐色土を主体にして８層に分層された。ロームとの混合土が堆積土の主体を占めており、人為的に埋め戻された状況を示している。

［カマド］東壁の南側で、壁辺の約１／３の所よりカマドが検出された。カマド周辺及び煙道の堆積土からは、粘土が殆ど検出されなかった。持ち去られた可能性も考えられる。堆積土は黒褐色土を主体にして６層に分層された。袖の遺存状態は悪く左袖のみの検出である。14×35㎝、高さ15㎝の規模で残存している。袖は褐色土の粘土により構築され、内側に被熱し赤変している範囲を確認した。煙道は半地下式で、55㎝の長さで壁外へ伸びている。煙道底面はほぼ平坦で、煙出しで斜めに立ち上がっている。確認面からの深さは約20㎝である。燃焼部中央付近より坏が倒立した状態で検出された。支脚と考えられる。火床面は検出されなかった。袖、火床面が検出されず、燃焼部規模は不明であるが、支脚から煙道口までの長さは約35㎝である。

［周溝・柱穴・ピット］検出されなかった。

［出土遺物］土師器片45点（905ｇ）、須恵器片１点（9.5ｇ）が出土している。１は支脚に用いられた

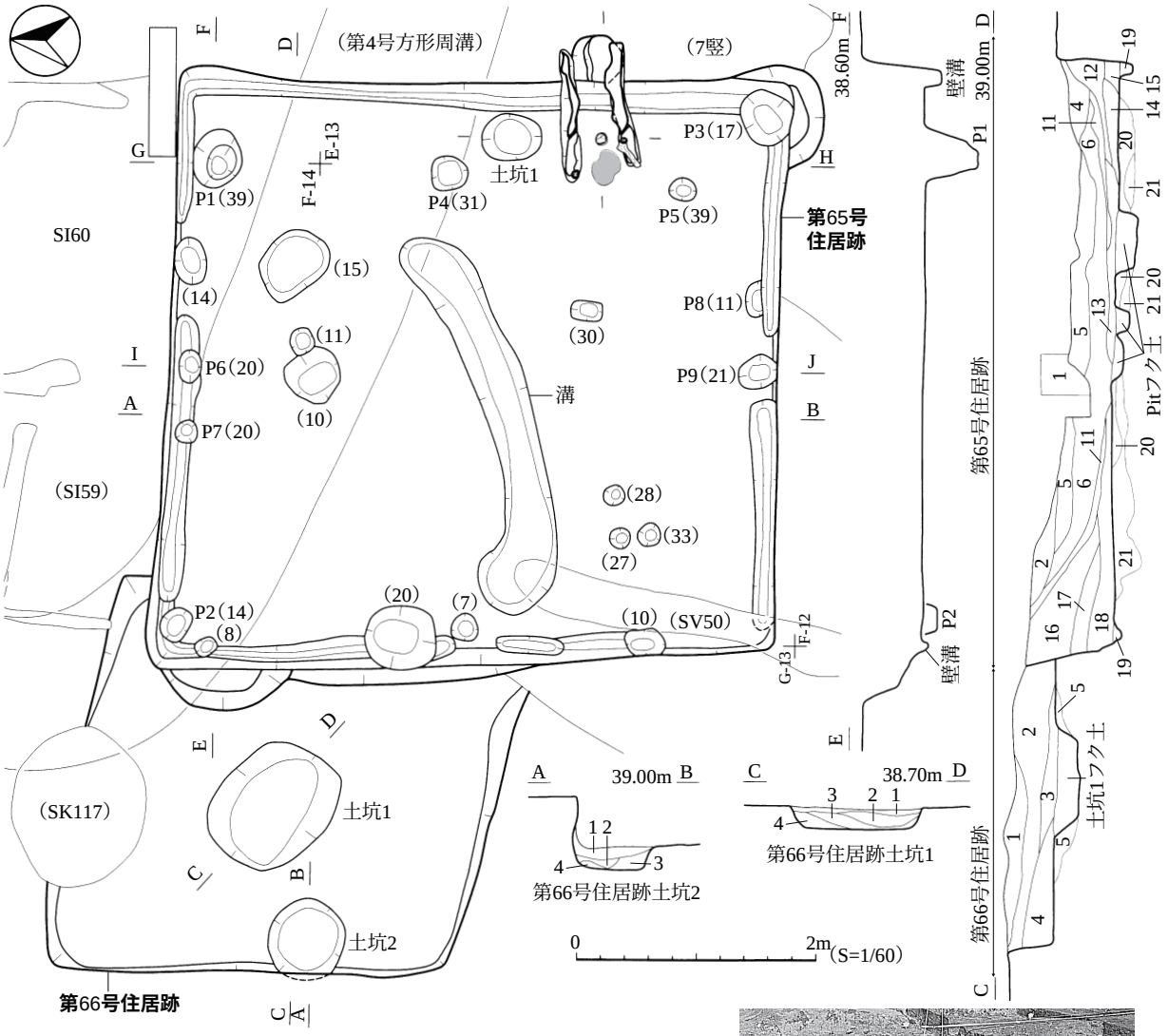
土師器坏で、ロクロ成形されるものである。
［小結］白頭山火山灰（肉眼観察）が二次堆積している第67号住居跡より新しいことより、構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

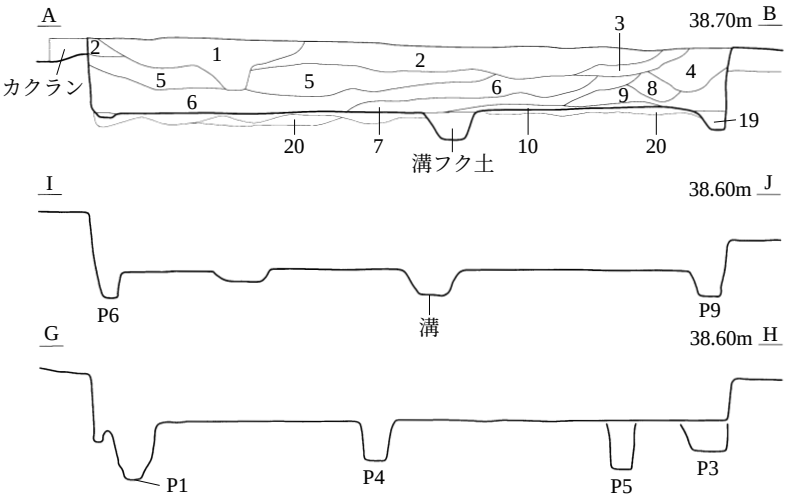
第65号住居跡（ＳＩ65）（図127～129）
［位置・確認］南側調査区の東よりで、壕の外側にあたるＥ～Ｇ－13・14グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より方形プランとして確認した。
［重複］第59号、第60号、第64号、第66号、第67号竪穴住居跡、第50号溝状土坑より新しく、第４号方形周溝より古い。
［平面形・規模］平面形は方形である。壁長は、東壁5.1m、西壁5.2m、南壁4.7m、北壁5.0mである。軸長は南北軸が5.0m、東西軸が4.8mで、南北軸が長軸となる。床面積は約23.76㎡である。主軸方位は真北から東に約90度傾いている。
［壁・床面］壁高は最大で東壁50㎝、西壁75㎝、南壁50㎝、北壁50㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、黄褐色土のロームを埋め戻して、平坦に整地している。
［堆積土］黒褐色土を主体にして21層に分層された。ロームブロックを多く含む層や、ロームとの混合土が多く、人為的に埋められた状況を示している。第20、第21層は掘り方層となる。
［カマド］東壁の南側で、壁辺の約１／３の所よりカマドが検出された。にぶい黄橙色の粘土や、焼土がカマドの範囲内や、カマドの左側に拡がっている状況で確認した。堆積土は黒褐色土を主体にして13層に分層された。第10層が火床面、第11～13層が袖構築材となる。第13層は袖の土台になる盛り土層である。
　袖の遺存状態は良好で、両袖が検出された。両袖共に黒褐色土の土を盛り、その上に黄褐色の粘土が貼り付けられている。規模は右袖13×100㎝、左袖15×110㎝で、高さは最大で約30㎝になる。芯材等は検出されなかった。両袖共に内側に被熱し赤変している範囲を確認した。煙道は半地下式で、40㎝の長さで壁外へ伸びている。
　甕の底部を倒立させたものが燃焼部のほぼ中央から検出された。支脚の可能性が考えられるが、土層で観察すると、燃焼部底面から５㎝ほど浮いた状態で検出されている。本遺跡では、他にも底面から浮いた状態で支脚が検出されているが、支脚が設置される土は被熱しており、使用時の状態のままであることを示している。しかし、本遺構の場合、土は被熱しておらず、積極的に支脚とは認定しにくい。同位置でのカマドの作り替え、カマド祭祀に関わる廃棄行為などが想定される。
　火床面は径50×60㎝ の規模で、４㎝の深さで被熱している。燃焼部規模は40×80㎝である。燃焼部底面は煙道口で一旦落ち込み、煙道と約10㎝の比高差がみられる。煙道底面はほぼ平坦で、煙出しで、約10㎝の高さで、ほぼ垂直に立ち上がっている。
［壁溝］床面を全周している壁溝が検出された。規模は幅10～15㎝、深さ5～15㎝である。
［柱穴・ピット］床面から総数21個の小穴が検出された。床面の隅から検出されたＰ１～３が主柱穴になると考えられる。南西端からは検出されていないが、第50号溝状土坑と重複しており、確認できなかった事も考えられる。他に、カマドの脇から検出したＰ４・５が、深さ及び配置から対応するものと考えられる。また、Ｐ６～９も対応するものと考えられる。

［その他の施設］カマド脇から土坑を検出した。規模は開口部軸長が、40×50㎝で、底面は径30㎝で、深さは約10㎝である。本土坑の上位には30×50㎝、厚さ10㎝程の不整形な範囲で粘土が堆積している。そのほかに、床面のほぼ中央より東西に延びている溝が検出された。間仕切り溝と考えられる。規模は40×325㎝で、深さ20㎝である。
［出土遺物］土師器片483点（約8.3kg）、須恵器片31点（3.6kg）、羽口片が１点、鉄塊が１点、ミニチュア土器が１点出土している。遺構間の接合状況としては須恵器の甕が第20号住居跡出土のものと接合する（図89-39）。また、接合はしなかったが、図129-11は第16号（図81-８）、20号住居跡、第32号土坑（図151-５）より出土したものと同一個体と考えられる。39は甕の口縁部である。器形のゆがみが大きく頸部には窯壁の溶着痕がみられるほか、頸部にヘラ記号が記されている。産地同定分析により産地不明と判明している。また、図129-８は外面に格子状のタタキ痕が、内面には当て具痕が見られ、産地同定分析により五所川原産と判明している。
［小結］白頭山火山灰（肉眼観察による）が二次堆積している第67号住居跡より新しいことより、構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

第66号住居跡（ＳＩ66）（図127・129）
［位置・確認］南側調査区の東よりで、壕の外側にあたるＦ・Ｇ－13・14グリッドに位置している。基本層序第Ⅴ層より不整形プランで確認した。
［重複］第59号住居跡より新しく、第65、第67号住居跡、第117号土坑、第４号方形周溝より古い。
［平面形・規模］重複により全体形は不明であるが、方形を基調としたものと考えられる。規模は、重複の影響を受けていない西壁と北壁は3.3m、現存している南壁は2.4mである。南北軸は3.3mで、床面積は（9.23㎡）である。
［壁・床面］壁高は、西壁45㎝、南壁約35㎝、北壁約20～40㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、黄褐色土のロームを用いて、平坦に整地している。
［堆積土］暗褐色土を主体に５層に分層された。全層にロームブロックが含まれており、人為堆積の状況を示している。第５層は掘方層である。
［カマド・壁溝・柱穴・ピット］検出されなかった。
［その他の施設］床面より２基の土坑が検出された。土坑１は床面ほぼ中央から検出され、規模は開口部で90×110㎝、底面で55×90㎝で、深さは20㎝である。土坑２は西壁よりから検出され、規模は開口部で65×70㎝、底面で径50㎝で、深さは約22㎝である。
［出土遺物］土師器片76点（951ｇ）、須恵器片４点（108ｇ）が出土している。接合状況としては、12が第85号土坑より出土したものと接合している。また、接合はしていないが、13が第56号住居跡より出土した図121-６と同一個体と考えられる。12は須恵器壺の口縁部片で、頸部に刻書が見られ、13は須恵器坏である。14は土師器坏で、内面にミガキ調整、黒色処理が施されている。
［小結］重複、出土遺物より構築年代は10世紀代と考えられる。（小山）

第67号住居跡（ＳＩ67）（図130）
［位置・確認］南側調査区の東よりで、壕の外側にあたるＦ・Ｇ－12・13グリッドに位置している。





第65・66号住居跡重複確認状況

第66号住居跡　堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/4	ローム塊、ローム粒多量、粘土塊微量
第２層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒多量、ローム塊少量
第３層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒多量、ローム塊少量
第４層	黄褐色土	10YR5/6	ロームとの混合土
第５層	明黄褐色土	10YR6/8	ロームとの混合土、掘り方

第66号住居跡土坑1　堆積土

第１層	黄褐色土	10YR5/8	ローム層
第２層	黒褐色土	10YR2/3	ロームとの混合土
第３層	黄褐色土	10YR5/8	ロームとの混合土
第４層	褐　色　土	10YR4/6	ロームとの混合土

第66号住居跡土坑2　堆積土

第１層	黄褐色土	10YR5/8	ローム塊、ローム粒微量
第２層	黄褐色土	10YR5/8	炭化物微量
第３層	黒褐色土	10YR2/3	ロームとの混合土
第４層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒、焼土粒微量

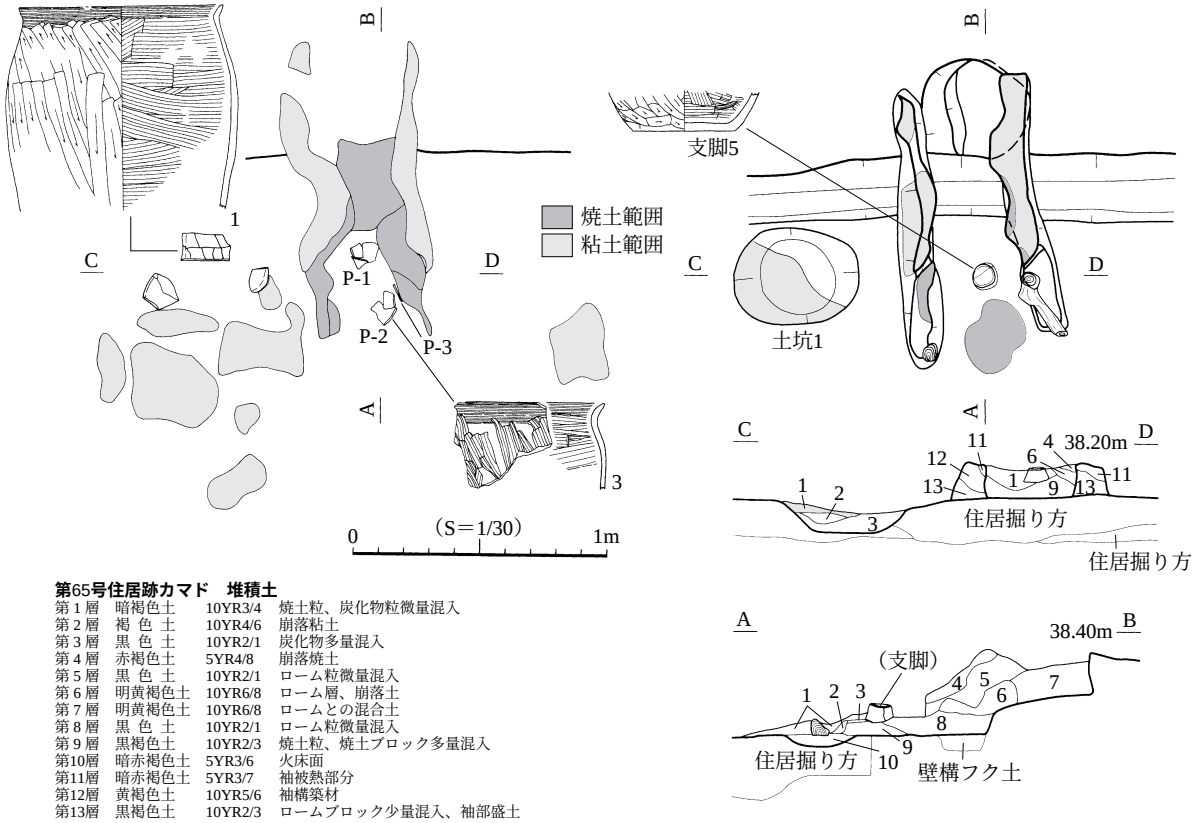
第65号住居跡　堆積土

第１層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒、炭化物微量
第２層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量、ローム塊微量
第３層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒、炭化物微量
第４層	黒褐色土	10YR2/3	ローム塊少量、ローム粒微量
第５層	暗褐色土	10YR3/4	ローム塊、ローム粒多量
第６層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒、ローム塊少量
第７層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量、ローム塊少量
第８層	褐　色　土	10YR4/4	ロームとの混合土
第９層	黒褐色土	10YR2/3	ローム塊、ローム粒多量
第10層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒少量
第11層	黒　色　土	10YR2/1	炭化物層
第12層	褐　色　土	10YR4/6	ロームとの混合土
第13層	明黄褐色土	10YR6/8	ロームとの混合土
第14層	黒　色　土	10YR2/1	ローム粒少量
第15層	褐　色　土	10YR4/6	ローム粒微量
第16層	褐　色　土	10YR4/6	ローム塊少量
第17層	褐　色　土	10YR4/4	ローム粒少量、ローム塊微量
第18層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒多量、ローム塊少量
第19層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量
第20層	黒褐色土	10YR2/3	ロームとの混合土、掘り方
第21層	明黄褐色土	10YR6/8	ロームとの混合土、掘り方

第65号住居跡土坑1　堆積土

第１層	灰　白　色	10YR8/1	白色粘土層
第２層	褐　色　土	10YR4/6	粘土層
第３層	黒　色　土	10YR2/1	ローム塊、ローム粒多量

図127　第65・66号住居跡



第65号住居跡カマド　堆積土

第1層	暗褐色土	10YR3/4	焼土粒、炭化物粒微量混入
第2層	褐 色 土	10YR4/6	崩落粘土
第3層	黒 色 土	10YR2/1	炭化物多量混入
第4層	赤褐色土	5YR4/8	崩落焼土
第5層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量混入
第6層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム層、崩落土
第7層	明黄褐色土	10YR6/8	ロームとの混合土
第8層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量混入
第9層	黒褐色土	10YR2/3	焼土粒、焼土ブロック多量混入
第10層	暗赤褐色土	5YR3/6	火床面
第11層	暗赤褐色土	5YR3/7	袖被熱部分
第12層	黄褐色土	10YR5/6	袖構築材
第13層	黒褐色土	10YR2/3	ロームブロック少量混入、袖部盛土

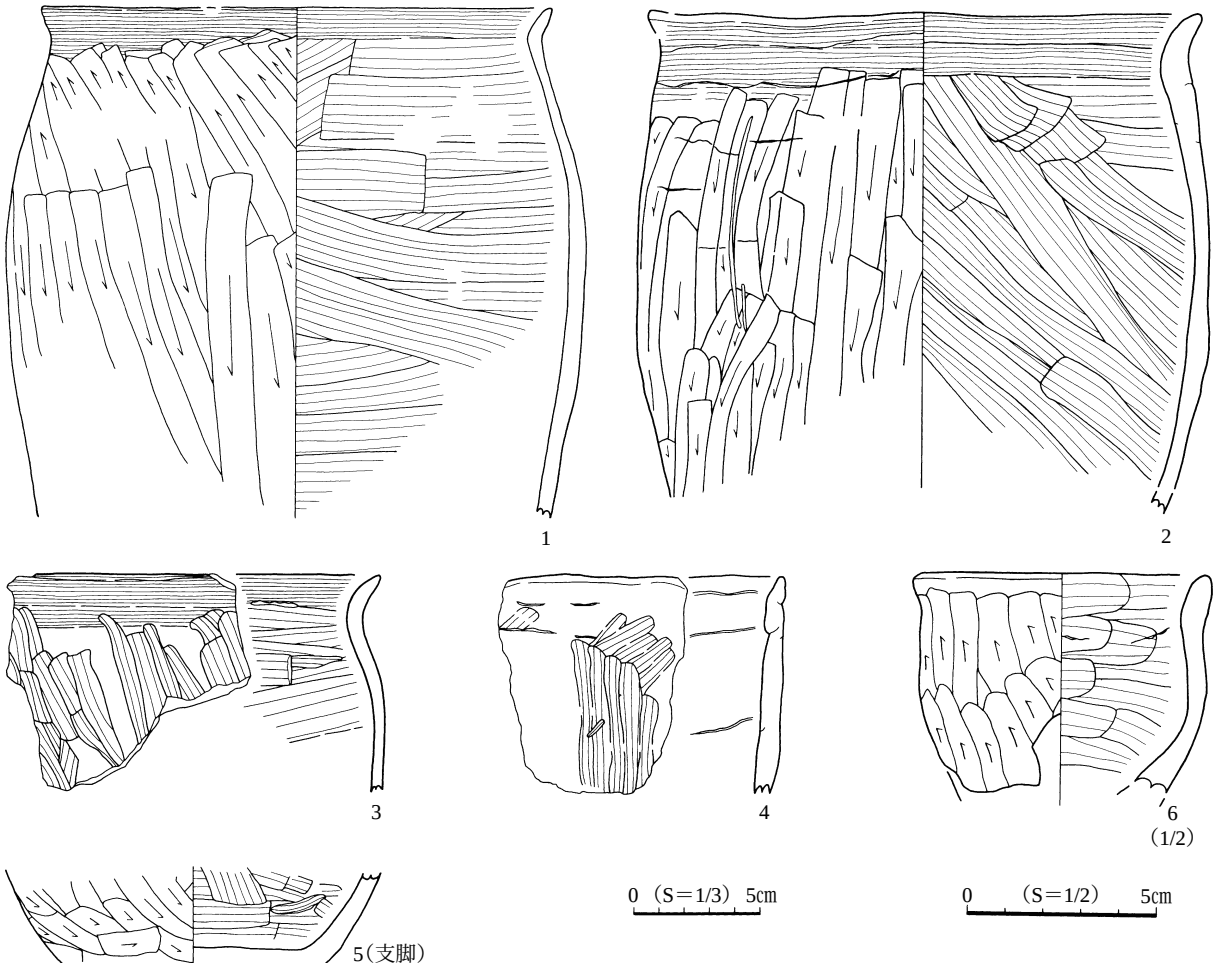
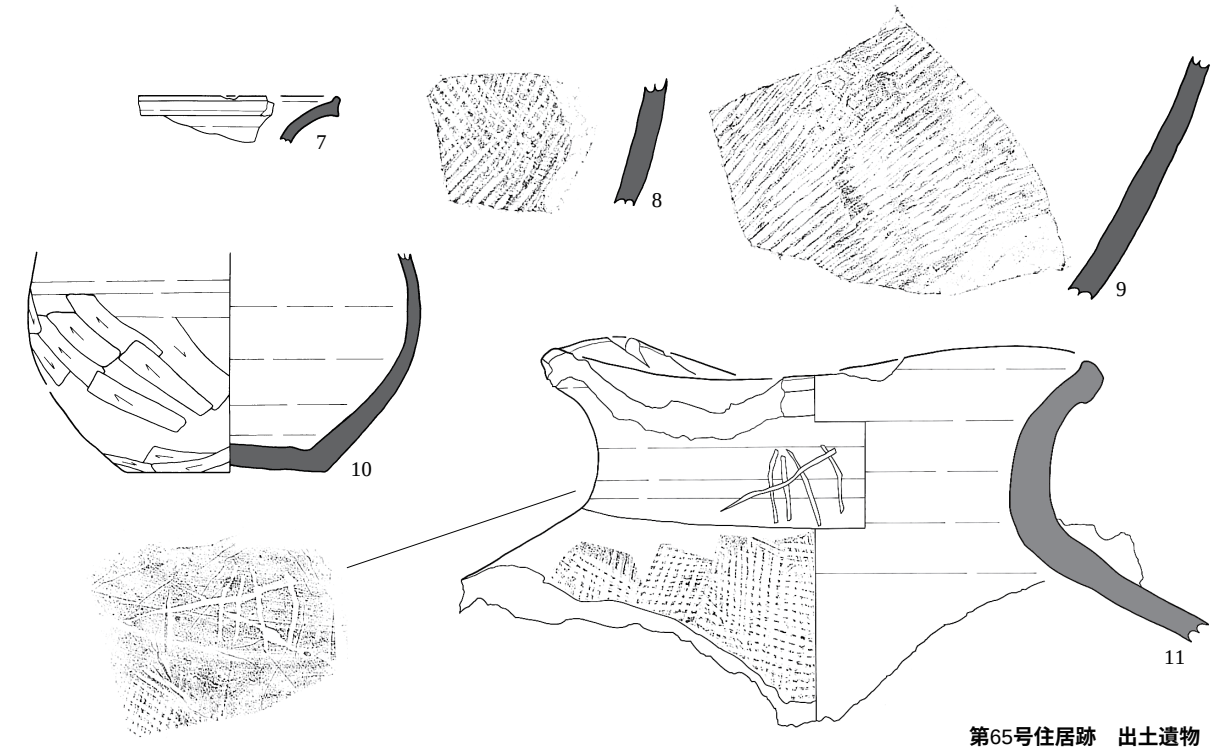


図128　第65号住居跡 カマドと出土遺物



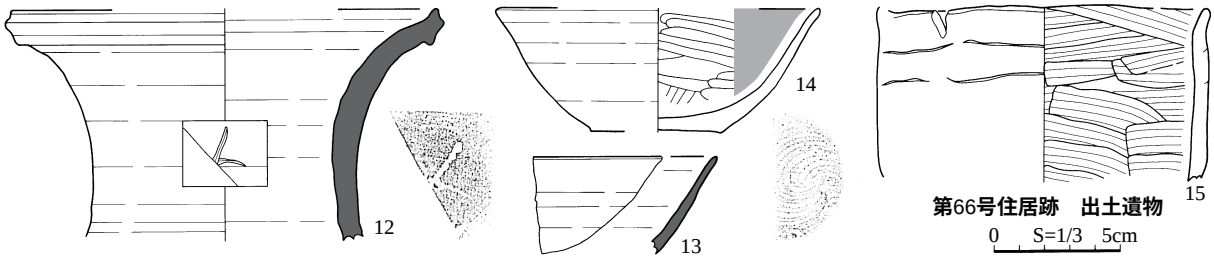


図129　第65・66号住居跡　出土遺物

基本層序第Ⅴ層より不整形プランとして確認した。

［重複］第66号住居跡、第92号、第112号土坑、第50号溝状土坑より新しく、第62号、第65号住居跡より古い。

［平面形・規模］重複により全体形は不明であるが、平面形は長方形と考えられる。規模は、重複の影響を受けていない南壁で3.8m、現存している東壁は4.5m、西壁は5.0mである。長軸は南北方向となるが、重複のため不明である。東西軸長は3.75mである。現存している床面積は約（14.33）㎡である。主軸方位は真北から東に約125度傾いている。

［壁・床面］壁高は最大で東壁23㎝、西壁50㎝、南壁26㎝である。床面は基本層序の第Ⅴ層を掘りくぼめた後に、黄褐色土のロームを用いて、平坦に整地している。

［堆積土］暗褐色土を主体にして11層に分層された。第２、第４層中には白頭山火山灰（肉眼観察による）が小ブロック状に混入している。第10、第11層は掘り方層となる。

［カマド］東壁の南側よりカマドが検出された。にぶい黄橙色の粘土や、焼土範囲が検出され、確認した。粘土や焼土はカマド範囲内にしか見られず、ほぼ直下に崩落している状況が伺える。堆積土は黒褐色土を主体に13層に分層された。第８層が火床面、第９～13層が袖構築材となる。このうち第13層は袖の土台になる層である。

袖の遺存状態は良好で、両袖共に検出出来た。左袖は褐色土のローム質土を土台とし、その上に、

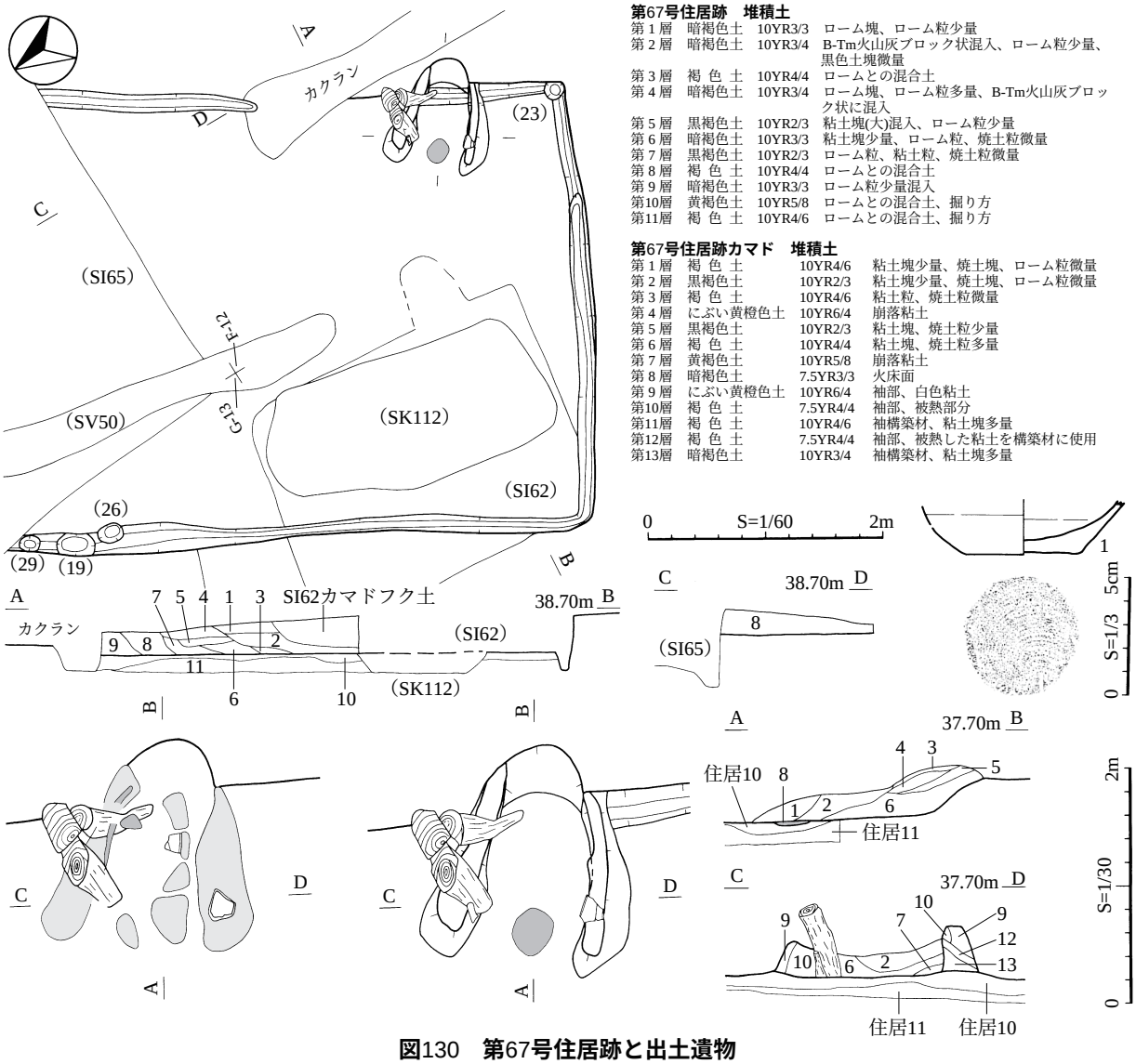


図130　第67号住居跡と出土遺物

にぶい黄橙色の粘土を貼り付けている。一方、右袖は、黒褐色土の土を土台とし、その上に粘土を貼り付けている構造である。規模は右袖25×80㎝、左袖20×80㎝で、高さは最大で25㎝になる。芯材等は検出されなかった。両袖共に内側に被熱し赤変している範囲を確認した。煙道は半地下式で、20㎝の長さで壁外へ伸びている。支脚等は検出されなかった。火床面は径20㎝ の規模で検出された。２㎝の深さで被熱している。燃焼部規模は50×70㎝である。底面は燃焼部から煙道口にかけては、ほぼ平坦であるが、煙道口で比高差約15㎝で斜めに立ち上がっている。

［壁溝・柱穴・ピット］底面を全周している壁溝が検出された。規模は、幅10～20㎝、深さ20～25㎝である。床面からピット等は検出されなかった。

［出土遺物］土師器片が49点（875ｇ）出土している。

［小結］白頭山火山灰がブロック状に混入しており、構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

第68号住居跡（ＳＩ68）（図131）

［位置・確認］壕の東側、Ｆ・Ｇ－19グリッドに位置している。住居跡が密集して検出された区域の北側に位置し、第45号住居跡の下位から検出された。

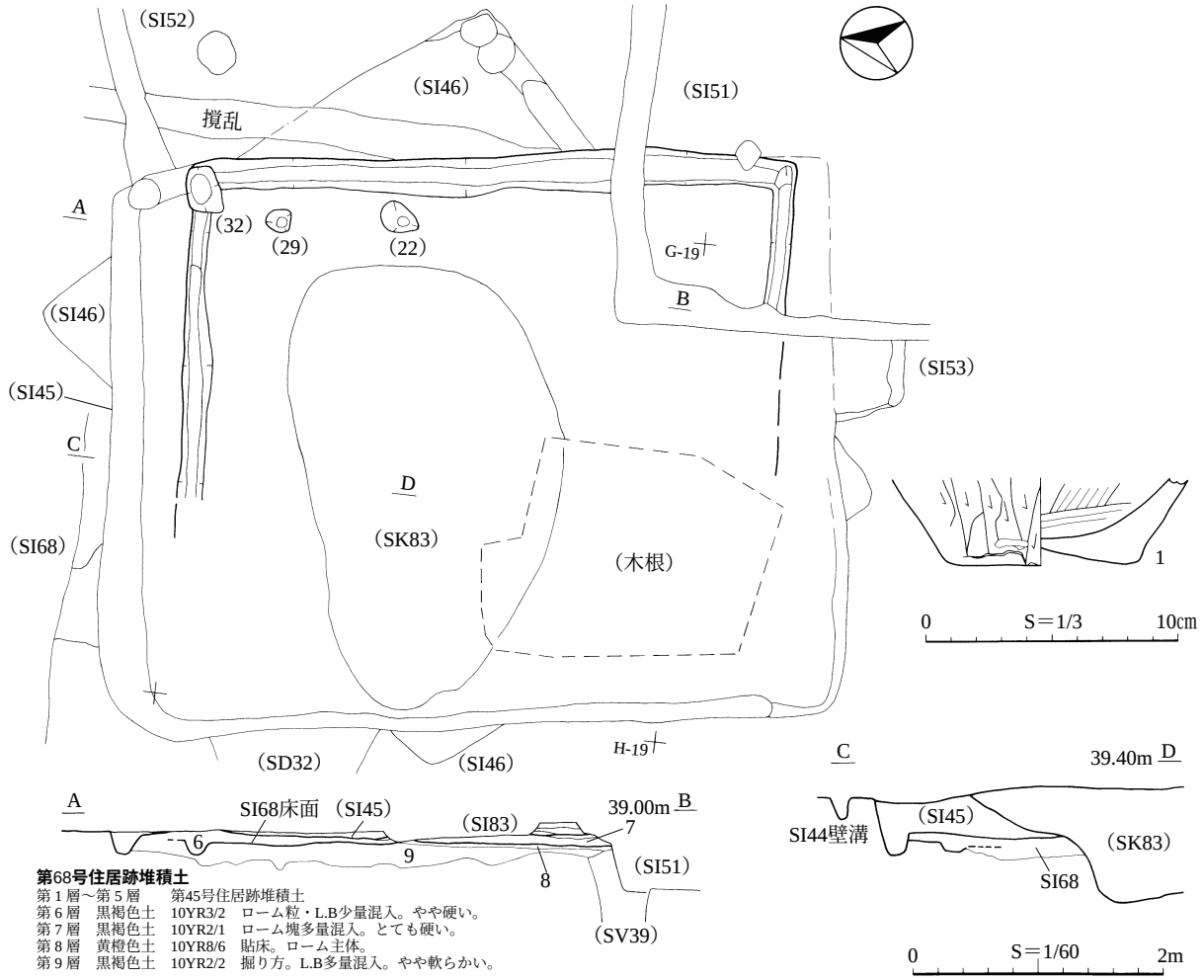


図131　第68号住居跡と出土遺物

［重複］第45号・46号・52号及び第83号土坑と縄文時代の第39号溝状ピットと重複している。このうち、第45号・52号住居跡と第83号土坑より古いことは確認できたが、他の遺構との新旧関係は確認できなかった。

［平面形・規模］平面形・規模とも不明である。第45号住居跡の内側にあり、東壁は同じ位置にある。東壁の長さは4.80mである。北壁は60㎝内側にあり、2.6mを検出した。南壁は約30㎝内側にあり約1.2mを検出した。床面積、主軸方位は不明である。

［壁・床面］壁は確認できなかった。床面は東側部分の一部を確認できただけである。南東側の床面にはロームの貼床を施している。

［堆積土］３層を確認した。ほとんどが黒褐色土であり、ローム粒やロームブロックを含んでいる。

［カマド］検出できなかった。

［壁溝］東側の部分で確認した。概ね幅20～30㎝、深さ10㎝である。

［柱穴・ピット］北東隅のほかに２個のピットを検出した。柱穴配置は不明であるが、北東隅に検出したものは柱穴の可能性が高い。

［出土遺物］土師器片５点（177ｇ）と縄文時代前期の土器片（27ｇ）が出土した。

［小結］独立した遺構番号を付したが、本住居跡が第45号住居跡の中にあり、東壁を共有して検出されたことから、第45号住居跡の拡張前の住居跡の可能性が高い。（畠山）

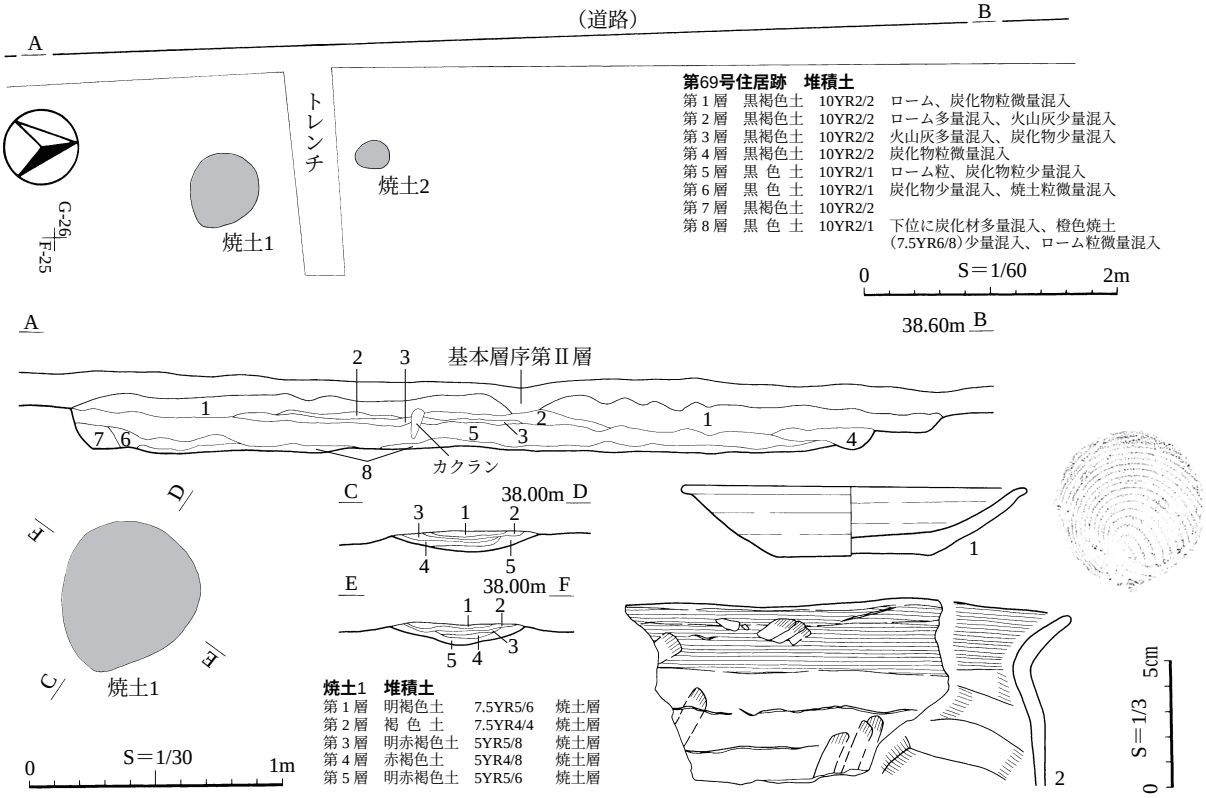


図132　第69号住居跡と出土遺物

第69号住居跡（ＳＩ69）（図132）

［位置・確認］南側調査区の東より、Ｇ－26～28グリッドに位置している。Ｇ－26グリッド付近より南北に近接する２つの焼土範囲を確認した。それらの約60㎝西側に設けられた作業用通路の壁面で、土層を観察したところ、Ｇ－26～28グリッドの範囲内から住居跡と考えられる土層が確認された。これらのことから、この場所に存在した住居の大部分が削平されたものと判断し、第69号住居跡として以下に述べる。

［重複］なし。

［平面形・規模］平面形および主軸方位は不明であるが、本遺跡から検出された住居跡群と同様に方形状を呈し、東西に軸をとるものと思われる。残存している規模は南北6.34m、東西2.40mである。

［壁・床面］作業用通路で確認された壁高は、北壁が16㎝で、南壁が32㎝である。両壁とも緩く立ち上がっているが、南壁は内湾して立ち上がっている。床面は比較的平坦で、貼床は認められない。

［堆積土］黒褐色土を主体として８層に分層された。第２層には白頭山火山灰（肉眼観察による）がブロック状に混入しており、二次的に堆積したと考えられる。第８層には炭化材が多量に含まれている。

［焼土］焼土が２基検出された。焼土１の規模は53×61㎝の楕円形で、18㎝の厚さで被熱している。レンガ状に固化しており、位置関係からカマドの火床面に相当すると考えられる。焼土２は26×28㎝の楕円形で、４㎝の厚さで被熱している。

［出土遺物］土師器片20点（370ｇ）が出土している。図132-１は土師器皿である。

［小結］火山灰の堆積状況から構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。また、床面と思われる層位には炭化材が多量に認められており、焼失家屋であった可能性が考えられる。（工藤・小山）

第70号住居跡（ＳＩ70）（図133）

［位置・確認］］壕の東側、Ｆ－14グリッドに位置している。住居跡が密集して検出された区域の南側に位置し、第60号住居跡と第57号住居跡との間に検出された。第57号住居跡の張り出し部の可能性もあったが、若干の段差が見られたため単独の住居跡と判断した。

［重複］第60号・57号住居跡と重複しており、本住居跡が古い。なお、周辺には多数の遺構が検出されているが、本住居跡は古い段階のものと思われる。

［平面形・規模］壁溝のみの検出であり、平面形・規模・主軸方位は不明である。

［壁・床面］西壁の一部を検出した。壁高は12㎝である。床面は壁溝から東に検出したＰ１の近辺までしか確認できなかった。基本層序の第Ⅴ層を床面としている。

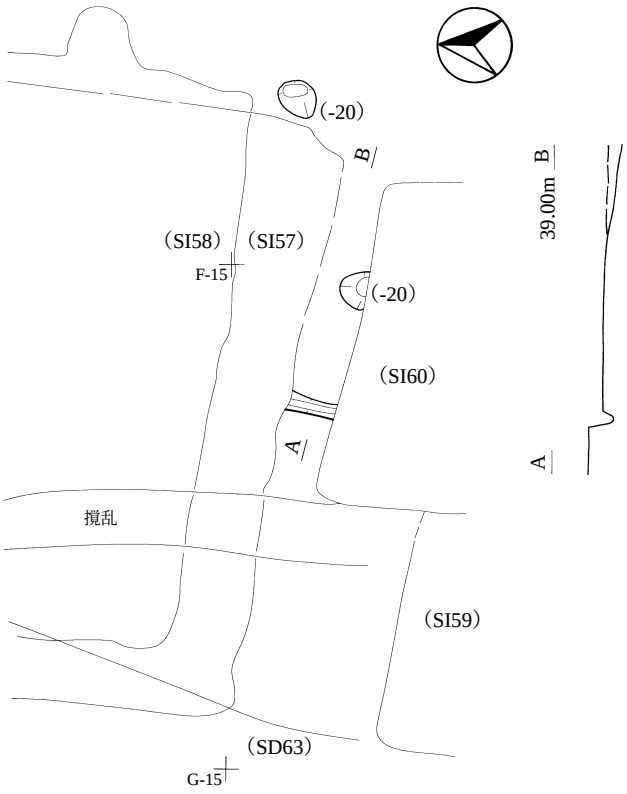


図133　第70号住居跡

［堆積土］確認できなかった。

［カマド］検出できなかった。

［壁溝］検出した壁溝の幅14㎝、深さ８㎝である。

［柱穴・ピット］２個のピットを検出したが、本住居に伴うかどうかは不明である。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。（畠山）

第３節　竪穴遺構

土坑や、住居跡として調査した遺構の中で、以下の特徴を持つものを竪穴遺構として抽出した。

１　土坑よりも規模が大きく、平面形が方形になるもので、かつ、住居跡のように柱穴やカマドを持たないもの。（土坑に近いもの）

２　住居跡のような壁溝や、焼土が検出されているが、カマド、柱穴が検出されず、積極的に住居と認定できないもの。（住居跡に近いもの）

抽出した遺構数は７基である。分類基準に沿って遺構名を変更した。以下に順に記載していく。

第１号竪穴遺構（ＳＫ19）（図134・135）

［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｑ・Ｒ－17・18グリッドに位置している。

［重複］第６号住居跡、第33号溝状土坑より新しい。

［平面形・規模］平面形は長方形で、規模は東壁2.95m、西壁2.80m、南壁1.85m、北壁2.15mである。開口部軸長は235×305㎝、底面軸長は210×285㎝となり、長軸は北西－南東軸となる。長軸方向は真北から東へ約130度傾いている。

［壁・底面］壁は底面からやや開きながら立ち上がっている。壁高は東壁50㎝、西壁60㎝、南壁55㎝、北壁45㎝である。底面はほぼ平坦である。

［堆積土］暗褐色土を主体として６層に分層された。全層中にロームブロック、粘土ブロックが多量に混入しており、人為堆積の状況を示している。

［出土遺物］堆積土中から土師器片９点（85ｇ）、須恵器片３点（64ｇ）が出土した。図135-１は土師器坏で、底面にヘラ記号が記されている。その他に、縄文時代の土器片８点（185ｇ）が出土した。

［小結］十和田a火山灰が二次堆積している第６号住居跡より新しいことより、構築年代は10世紀前葉以降と考えられる。

第２号竪穴遺構（ＳＫ22）（図134・135）

［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｐ・Ｑ－19・20グリッドに位置している。

［平面形・規模］平面形は方形で、規模は東壁2.3m、西壁2.1m、南壁2.5m、北壁2.5mである。開口部軸長は250×260㎝、底面軸長は240×240㎝となり、長軸は南西－北東軸となる。長軸方向は真北から東へ約70度傾いている。

［壁・底面］壁は底面からやや開きながら立ち上がっている。調査時に一気に掘り方まで掘り進めたため、底面までの深さを確認できるのは土層観察用ベルトを設けていた東壁側と西壁側のみである。東壁、西壁ともに、底面までの深さは15㎝である。掘り方までの深さは、東壁40㎝、西壁30㎝、南壁20㎝、北壁25㎝である。底面は土層で判断する限り平坦である。

［堆積土］暗褐色土を主体として２層に分層された。第２層は掘り方層である。

［出土遺物］堆積土中から土師器片69点（954ｇ）、須恵器片７点（80ｇ）が出土した。本遺構より出土した遺物は、第４号住居跡より出土した図63-６・10と接合しているほか、図示しなかったが、内壕より出土した須恵器と接合しているものもある。図135-４は、須恵器壺の口縁部片である。口唇が

外傾し、端部が平坦になる器形で、産地同定分析により産地不明と判明している。その他に、縄文時代前期中葉、後期前葉の土器片が33点（395ｇ）、削器４点が出土している。
［小結］詳細な構築年代は不明であるが、出土遺物、接合状況より、10世紀代の可能性が考えられる。

第３号竪穴遺構（ＳＫ21）（図134・135）
［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｒ－16グリッドに位置している。
［重複］第６号住居跡より新しい。
［平面形・規模］平面形は不整方形で、壁長は東壁1.5m、西壁1.8m、南壁1.4m、北壁1.8mである。開口部軸長は205×170㎝、底面軸長は180×150㎝になり、長軸は北西－南東軸となる。長軸方向は真北から東へ約110度傾いている。
［壁・底面］壁は底面からやや開きながら立ち上がっている。壁高は東壁30㎝で、西壁40㎝、南壁40㎝、北壁25㎝である。底面はほぼ平坦である。
［堆積土］７層に分層された。ロームブロック、粘土ブロックが多量に混入しており、人為堆積の状況を示している。このうち、第５層は炭化物層である。
［出土遺物］堆積土中より土師器片89点（1,126ｇ）、ミニチュア土器が３個体出土している。図135-５・６は土師器坏で、５は底面直上より正立した状態で出土したものである。
［小結］十和田a火山灰が二次堆積している第６号住居跡より新しいことより、構築年代は10世紀前葉以降と考えられるが、第５層より採取した炭化物について行った炭素年代（ＡＭＳ法、補正年代）は、1140±40（ｙＢＰ）で、想定より古い年代が示されている（第９章第２節参照）。

第４号竪穴遺構（ＳＫ91）（図134・135）
［位置］調査区南側で、壕の外側にあたる、Ｆ－19グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は方形で、規模は東壁1.75m、西壁1.50m、南壁1.90m、北壁1.90mである。開口部軸長は190×195㎝、底面軸長は180×180㎝になる。ほぼ方形であるため、長軸を南北軸とすると、南北軸は真北から西へ20度傾いている。
［壁・底面］壁は底面からやや開きながら立ち上がっている。壁高は東壁３㎝、西壁15㎝、南壁５㎝、北壁10㎝である。掘り方底面までの最大深さは、西壁で25㎝である。底面はほぼ平坦である。
［堆積土］黒褐色土の単層でロームブロックが少量混入している。
［その他の施設］底面より60×65㎝の不整形範囲で焼土が検出された。廃棄されたものか、使用に伴うものかは不明である。焼土の直下及び直上から遺物が出土している。
［出土遺物］堆積土中より土師器片39点（486ｇ）、須恵器片１点（7.8ｇ）が出土した。その他に、縄文時代前期中葉の土器片が５点（40ｇ）が出土している。
［小結］詳細な構築年代は不明であるが、出土遺物より10世紀代の可能性が考えられる。

第５号竪穴遺構（ＳＫ102）（図134）
［位置］調査区南側の東側にあたる、Ｅ－11・12グリッドに位置している。覆土の大半が削平されており、底面付近で検出された。

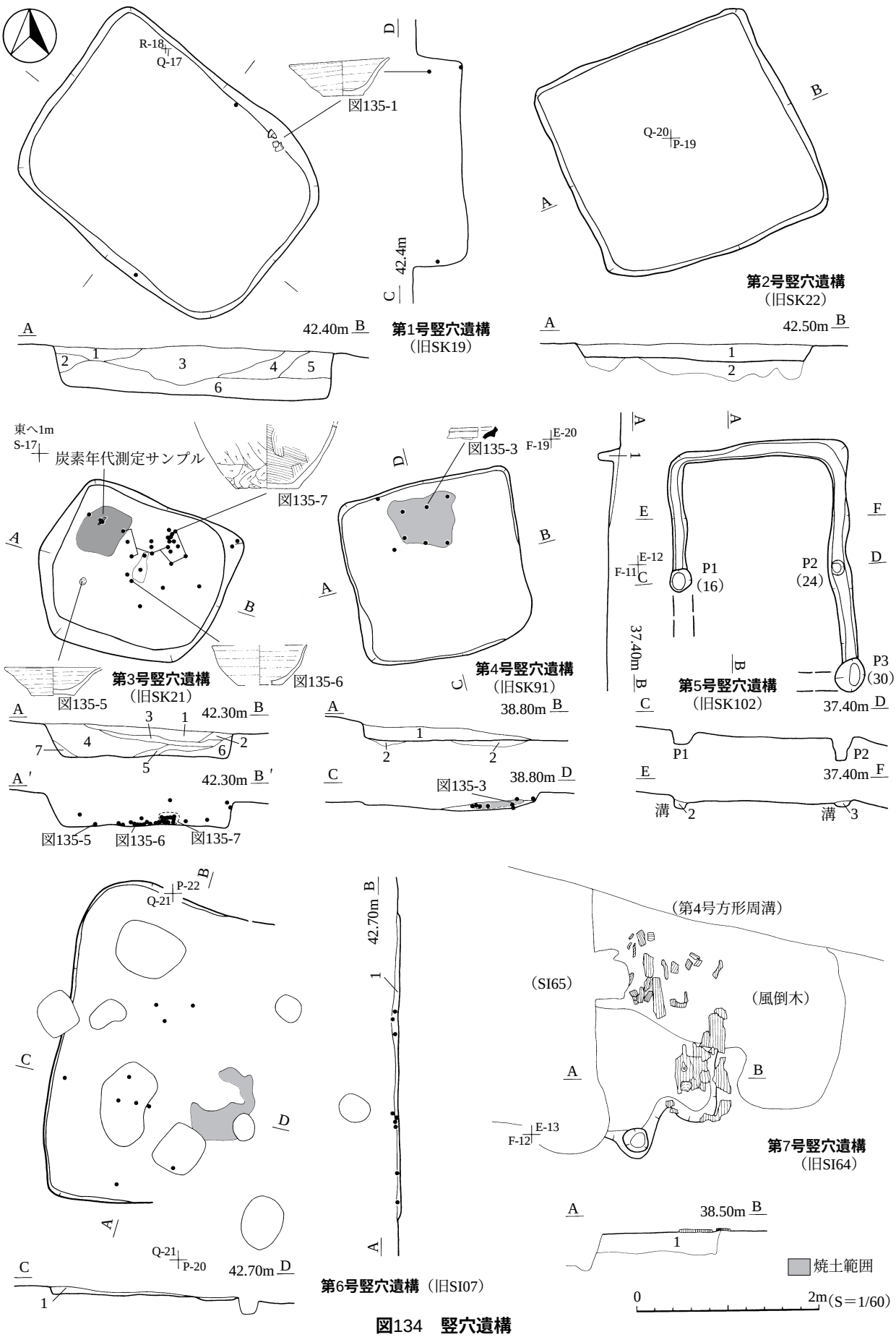

R-18
Q-17
図135-1
D
C
42.4m
A
42.40m B
1
2
3
4
5
6
第1号竪穴遺構
（旧SK19）
Q-20
P-19
B
A
第2号竪穴遺構
（旧SK22）
A
42.50m B
1
2
東へ1m
S-17
炭素年代測定サンプル
図135-7
A
B
第3号竪穴遺構
（旧SK21）
図135-5
図135-6
A
42.30m B
3
1
7
4
6
2
5
A′
42.30m B′
図135-5
図135-6
図135-7
図135-3
F-19
E-20
D
C
B
A
第4号竪穴遺構
（旧SK91）
A
38.80m B
1
2
2
C
図135-3
38.80m D
A
1
E
F
E-12
F-11
C
P1
（16）
P2
（24）
D
37.40m
B
P3
（30）
第5号竪穴遺構
（旧SK102）
C
37.40m D
P1
P2
E
37.40m F
溝
2
溝
3
P-22
Q-21
B
C
D
A
Q-21
P-20
42.70m D
1
C
1
42.70m B
1
A
第6号竪穴遺構（旧SI07）
（第4号方形周溝）
（SI65）
（風倒木）
A
B
E-13
F-12
第7号竪穴遺構
（旧SI64）
A
38.50m B
1
焼土範囲
0
2m（S＝1/60）

図134　竪穴遺構

第１号竪穴遺構（SK-19）　**堆積土**
第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒、粘土塊微量
第２層　黄褐色土　10YR5/6　ローム粒、粘土塊微量
第３層　暗褐色土　10YR3/4　ローム塊多量混入、ローム粒、粘土塊微量
第４層　黄褐色土　10YR5/6　ローム塊多量、粘土塊微量
第５層　褐　色　土　10YR4/6　ローム塊、粘土塊少量
第６層　黄褐色土　10YR5/8　ローム塊多量

第２号竪穴遺構（SK-22）　**堆積土**
第１層　暗 褐 色 土　10YR3/3　ローム塊、黒色土塊多量
第２層　明黄褐色土　10YR5/6　ロームとの混合土、掘り方

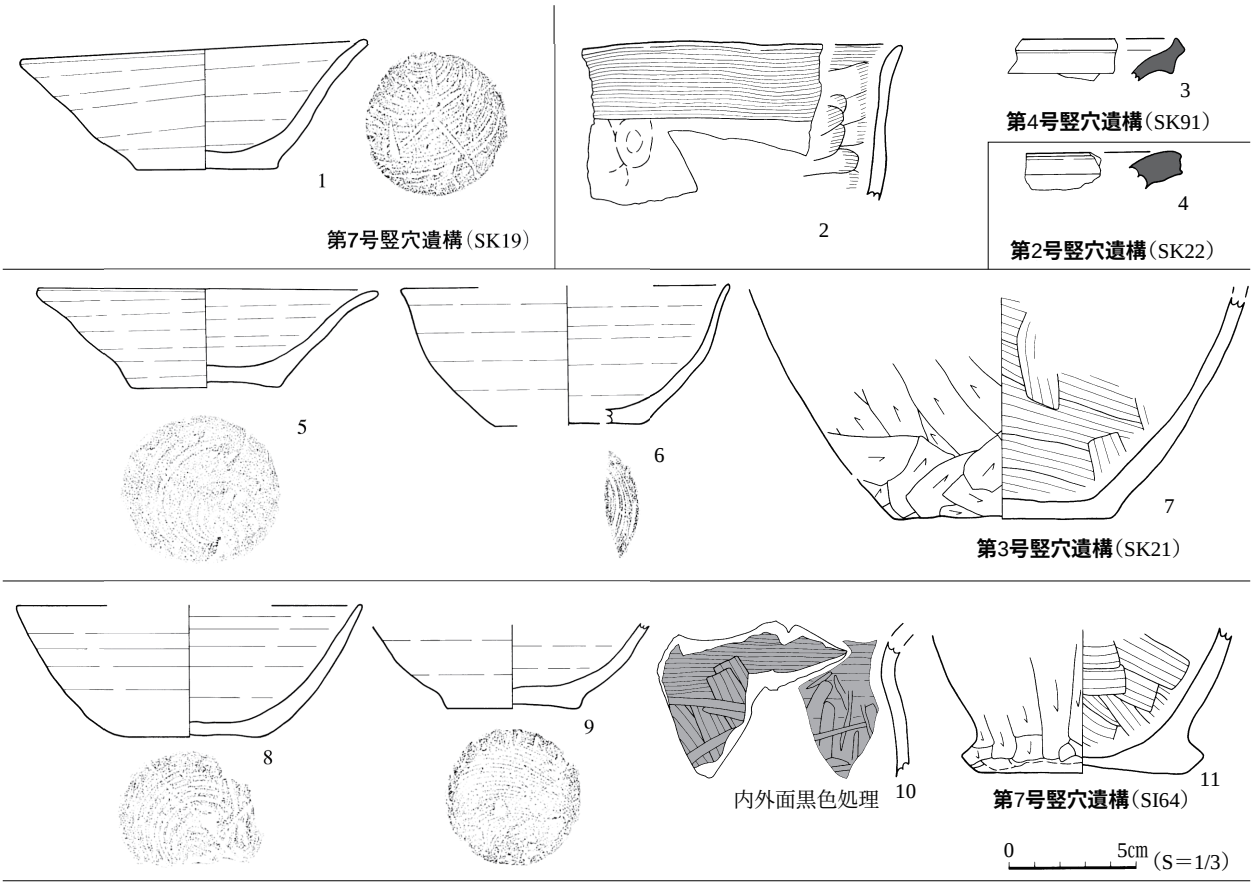
第３号竪穴遺構（SK-21）　**堆積土**
第１層　暗 褐 色 土　10YR3/4　ローム塊少量
第２層　黒 褐 色 土　10YR2/3　ローム粒微量
第３層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　ローム塊、炭化物ブロック微量
第４層　褐　色　土　10YR4/4　ローム塊多量混入
第５層　黒　色　土　10YR2/1　炭化物層
第６層　黒 褐 色 土　10YR2/2　ローム塊、ローム粒微量混入
第７層　褐　色　土　10YR4/4　壁の崩落土

第７号竪穴遺構（SI-64）　**堆積土**
第１層　褐　色　土　10YR4/4　ロームとの混合土

第4号竪穴遺構（SK-91）　**堆積土**
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム塊、ローム粒少量
第２層　褐 色 土　7.5YR4/6　焼土層
第３層　褐 色 土　10YR4/6　ロームとの混合土、貼り床層

第5号竪穴遺構（SK-102）　**堆積土**
第１層　暗褐色土　10YR3/3　ローム塊、ローム粒少量
第２層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒少量混入
第３層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒微量混入

第6号竪穴遺構（SI-7）　**堆積土**
第１層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒微量混入
第２層　明褐色土　7.5YR5/8　焼土層



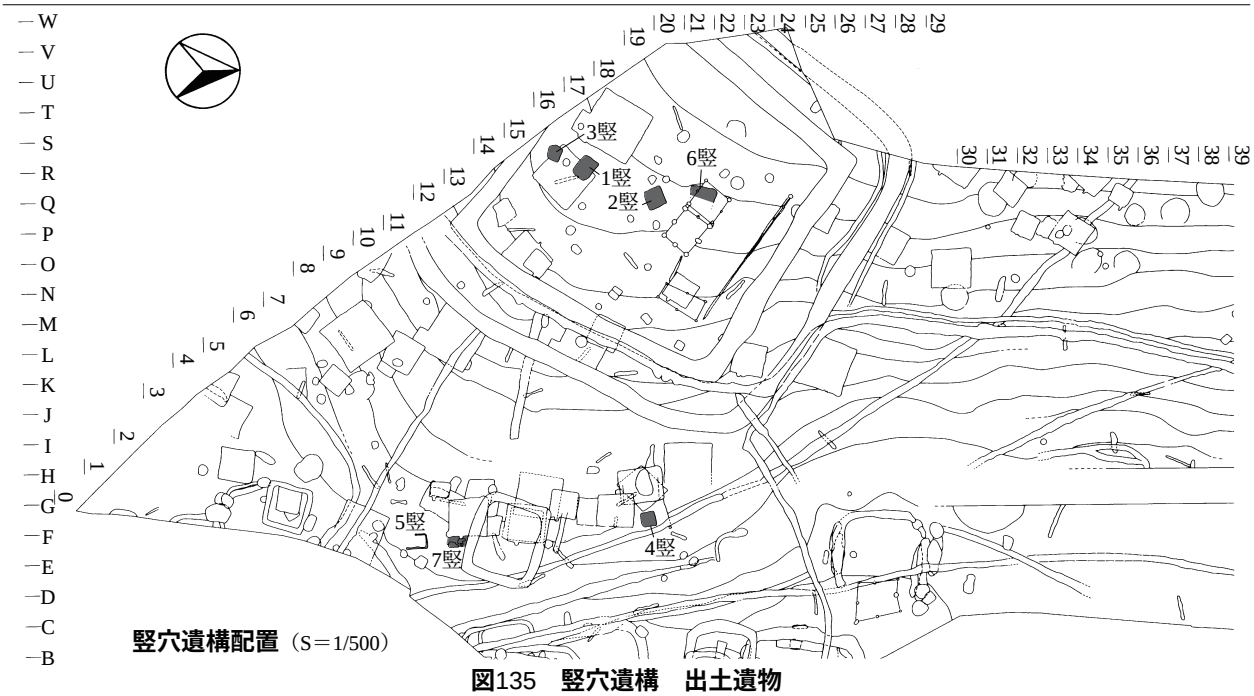


図135　竪穴遺構　出土遺物

［平面形・規模］南壁と西壁の一部が検出されなかったため、全体形は不明であるが、長方形になると思われる。現存している壁長は東壁2.75m、西壁1.50m、北壁1.95mで、東西軸の軸長は開口部で、1.95m、底面で1.60mである。長軸方向はほぼ真北になる。
［壁・底面］壁は検出されなかった。底面はほぼ平坦である。
［溝、小穴］溝は幅15～20㎝、深さ５～10㎝で巡っている。溝内から３個の小穴が検出された。Ｐ１・２は位置から対応するものと考えられる。
［堆積土・出土遺物］３層に分層され、遺物は出土しなかった。
［小結］小型の住居跡の可能性も考えられるが、カマドが検出されず、竪穴遺構に含めた。詳細な構築年代は不明である。

第６号竪穴遺構（ＳＩ07）（図134）
［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｐ・Ｑ－20・21グリッドに位置している。
［重複］壕の内側に拡がっている小穴群と重複し本遺構の方が古い。
［平面形・規模］西側から東側へ下る緩斜面地に構築されており、遺構の東側は斜面のため大半が削平されている。その為、全体形は不明であるが、方形を基調としたものと考えられる。規模は、全てを検出できた西壁で3.5m、現存している北壁は1.3m、南壁は0.9mで、南北軸は3.4mである。
［壁・底面］最も残りの良い西壁で、壁高は10㎝である。壁は底面から開くように立ち上がっている。
［堆積土］暗褐色土の単層で、ローム粒が微量に混入している。
［その他の施設］底面より不整形に被熱している範囲が検出された。規模は、50×80㎝で、深さ約５㎝で被熱している。
［出土遺物］縄文時代前期中葉の土器片が17点（280ｇ）が出土している。
［小結］平面形が方形を基調とすることより、平安時代の遺構と考えられる。遺物の出土がなく詳細な構築年代は不明である。

第７号竪穴遺構（ＳＩ64）（図134・135）
［位置］南側調査区の東よりで、壕の外側にあたるＥ－14グリッドに位置している。
［重複］第65号住居跡、第63号溝跡より古い。
［平面形・規模・壁・床面・堆積土］炭化材のみの検出で、床面及び壁面等は検出されなかった。その為、平面形、規模等は不明である。
［カマド・柱穴・ピット］検出されなかった。
［出土遺物］土師器片59点（1200ｇ）が出土した。図135-10は土師器甕で、内面にミガキ調整が施された後黒色処理が施されている。
［小結］検出された板材の厚さは現状で２～５㎝である。樹種同定を行った結果、使用している木材はクリである事が判明している。また、炭素年代測定（AMS法、補正年代）にかけており、1070±60（ｙＢＰ）という結果を得ている。床面の大半が削平されており、炭化材のみが検出された遺構な為、詳細な構築年代は不明である。自然科学的分析結果より10世紀代と考えられる。（小山）

第４節　掘立柱建物跡

平安時代と考えられる掘立柱建物跡は４棟検出された。壕に囲われた内側と、道路跡を挟んで東側の地点より検出されている。

第１号掘立柱建物跡（ＳＢ05)（図136）

［位置・重複］調査区の南側、壕の内側にあたるＭ・Ｎ－20・21グリッドに位置している。第８号住居跡よりも新しい。第２、第３号掘立柱建物跡や小穴群が隣接している。

［規模・柱間寸法］東西１間、南北２間の建物と思われる。規模は南北柱列のＰ２-４が６ｍ、Ｐ１-５が5.65ｍで、東西柱列のＰ４-５が2.80ｍ、Ｐ１-２が2.1ｍである。長軸方向はＮ－30°－Ｅである。各柱穴間の寸法は南北柱列のＰ２-４の間がそれぞれ３ｍ、Ｐ１-５の間が3.15、2.5ｍである。

調査時に柱穴の深さを計測しておらず、断面図を作成できなかったが、20～30㎝前後の深さであったと記憶している。

［出土遺物］出土しなかった。

［小結］長軸の傾きが、壕の東辺と同じであり、壕と同時存在していた可能性が考えられる。（小山）

第２号掘立柱建物跡（ＳＢ01)（図137）

［位置・重複］調査区の南側、壕の内側にあたるＯ・Ｐ－20・21グリッドに位置している。第３号掘立柱建物跡と接しており、合わせて１つの建物跡になる可能性も考えられるが、ここでは、別遺構として記載することにする。

［規模・柱間寸法］北西-南東２間、北東-南西２間の建物と思われる。規模は北西-南東柱列のＰ５-７が4.8ｍ、Ｐ１-３が4.6ｍで、北東-南西柱列は各４ｍである。長軸方向はＮ－50°－Ｗである。各柱穴間の寸法は北西-南東柱列のＰ５-７の間が2.4ｍ、Ｐ１-３が2.3ｍで、北東-南西柱列のＰ１-７が２ｍ、Ｐ３-５が２ｍである。各柱穴の確認面からの深さは50㎝前後であるが、Ｐ３のみ75㎝と深くなっている。

［出土遺物］出土しなかった。

［小結］長軸の傾きが、壕の北辺と同じであり、壕と同時存在していた可能性が考えられる。（小山）

第３号掘立柱建物跡（ＳＢ021)（図137）

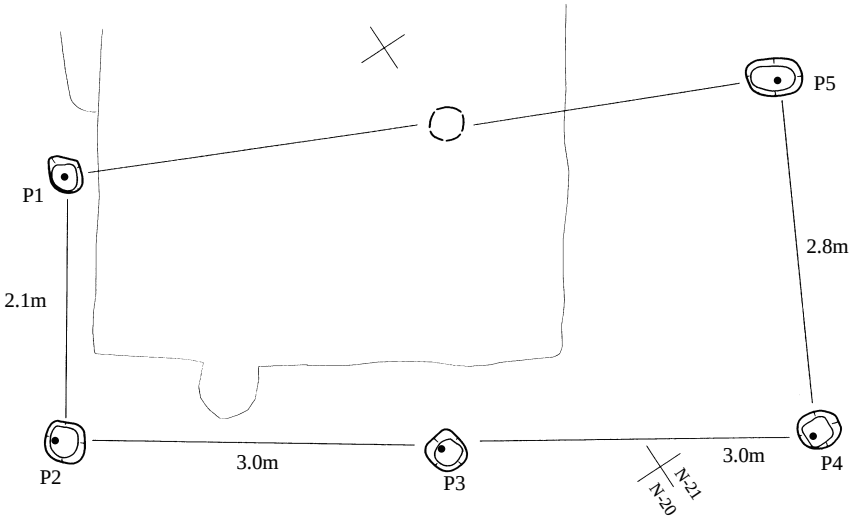
［位置・重複］調査区の南側、壕の内側にあたるＰ・Ｑ－21・22グリッドに位置している。第２号掘立柱建物跡、第２号柱列と近接している。

［規模・柱間寸法］北西-南東２間、北東-南西１間の建物と思われる。規模は北西-南東柱列は各3.8ｍで、北東-南西柱列は各４ｍである。長軸方向はＮ－50°－Ｗである。各柱穴間の寸法は北西-南東柱列はいずれも1.9ｍで、北東-南西柱列は各２ｍである。各柱穴の確認面からの深さは、均一ではなく、Ｐ１、Ｐ４は50㎝前後と深くなっているが、後は20～30㎝ほどの深さである。

［出土遺物］出土しなかった。

［小結］長軸の傾きが、壕の北辺と同じであり、壕と同時存在していた可能性が考えられる。（小山）

壕内掘立柱建物跡、柱列配置図（S＝1/400）



第1号掘立柱建物跡

0　2m（S＝1/60）

図136　壕内掘立柱建物跡・柱列配置、第1号掘立柱建物跡

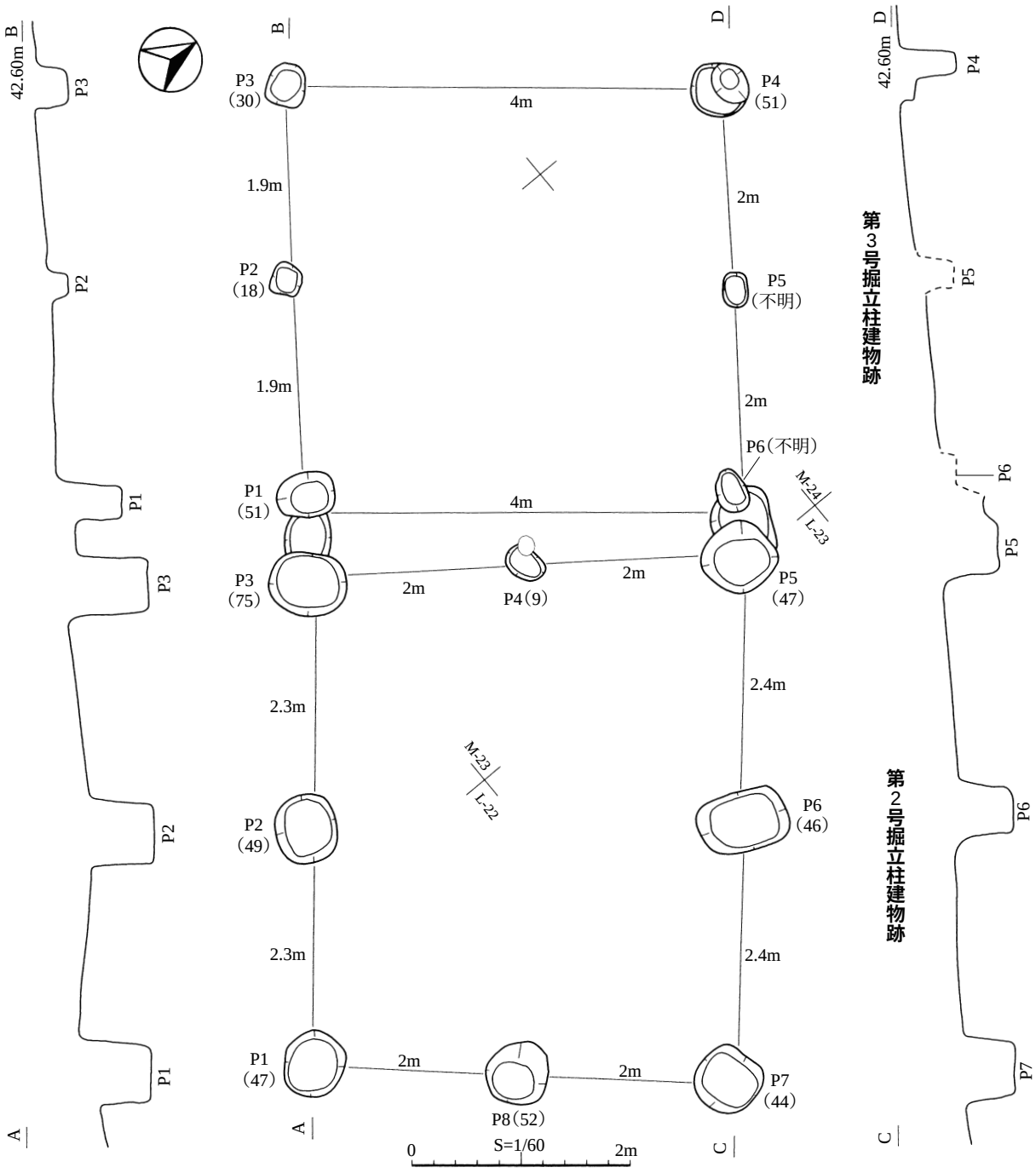
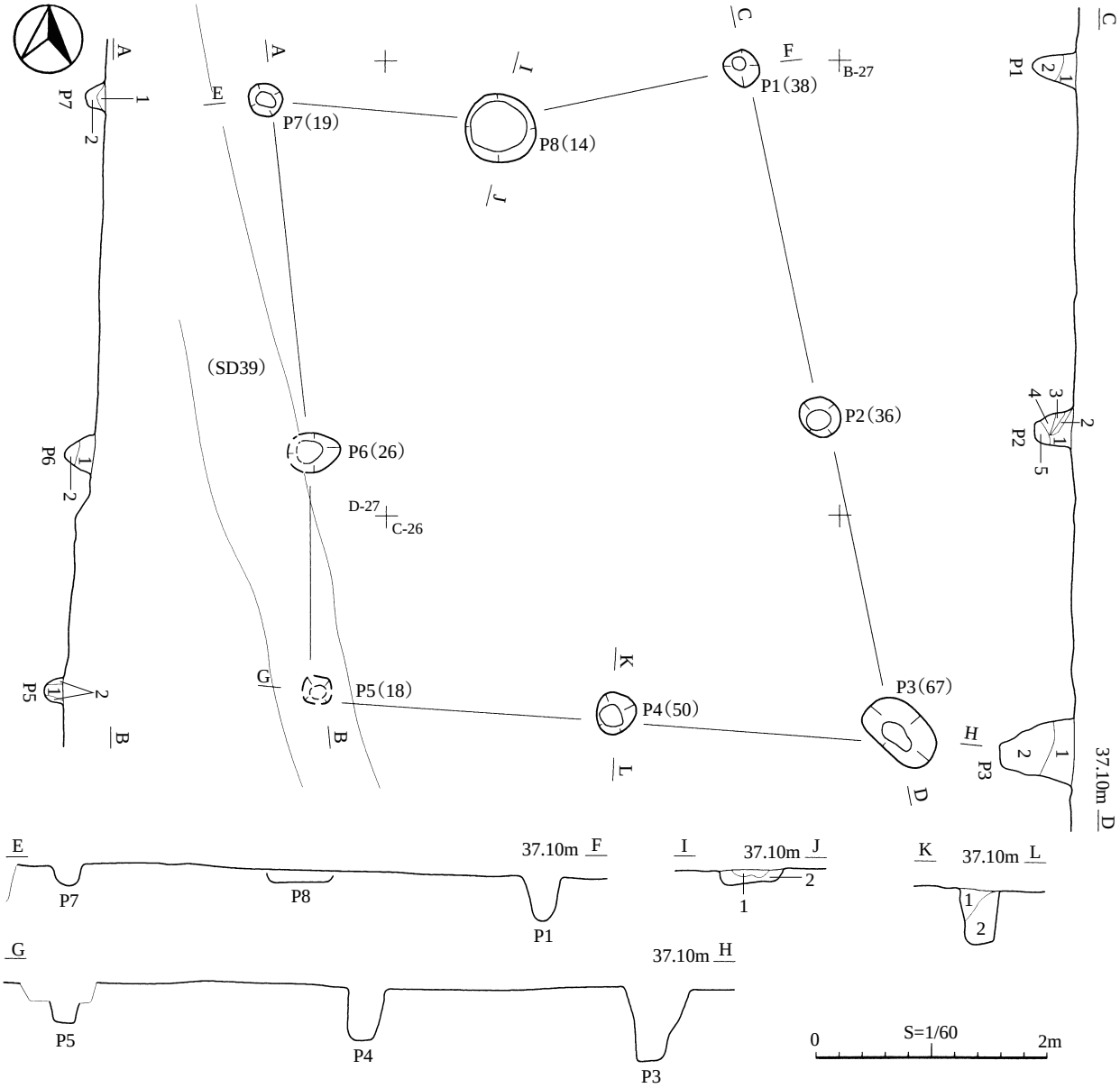


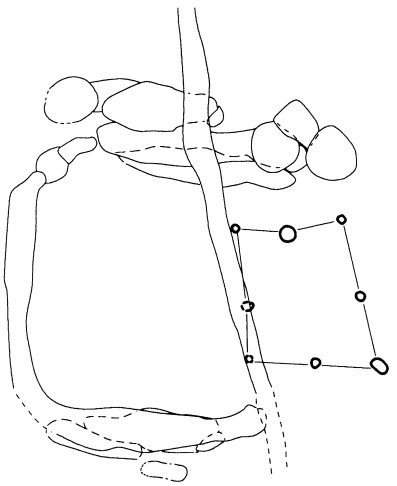
図137　第2号・3号掘立柱建物跡

第４号掘建柱建物跡（ＳＢ02）（図138）

［位置・重複］調査区の南側、道路跡よりも東側の、Ｂ・Ｃ－26～28グリッドに位置している。第39号溝跡と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］東西２間、南北２間の建物である。規模は北側柱列4.23m、南側柱列5.17m、東側柱列6.02m、西側柱列5.20mで、長軸方向はＮ－９°－Ｗである。柱間寸法は北側柱列が西から2.04m、2.24m、南側柱列が西から2.65m、2.53m、西側柱列が北から3.09m、2.12m、東側柱列が北から3.17m、2.84mである。各柱穴の規模（長軸×短軸×深さ）および平面形は、ピット１が31×29×38㎝の





周辺の遺構（1/300）

P1　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR2/1　ローム多量
第２層　黒 色 土　10YR2/1　ローム微量

P2　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム、炭化物少量
第２層　黒褐色土　10YR2/2　炭化物微量
第３層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒微量
第４層　黒褐色土　10YR2/2
第５層　黒褐色土　10YR2/2　ローム塊多量

P3　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR2/1　ローム塊多量、炭化物少量
第２層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒少量

P4　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒、ローム塊多量
第２層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒少量

P5　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム塊多量
第２層　黒 色 土　10YR2/1

P6　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒多量、炭化物粒少量

P7　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒少量
第２層　暗褐色土　10YR3/4

P8　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR2/1　ローム塊多量、ローム粒、ローム微量
第２層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒、ローム少量

図138　第4号掘立柱建物跡

隅丸長方形、ピット２が38×34×36㎝の楕円形、ピット３が61×43×67㎝の隅丸長方形、ピット４が37×35×50㎝の不整円形、ピット５が（25）×（25）×（18）㎝の隅丸方形、ピット６が（48）×35×26㎝の不整楕円形、ピット７が31×29×19㎝の不整円形、ピット８が63×60×14㎝の円形である。
［堆積土］いずれの柱穴も黒色ないし黒褐色土を主体とし、ロームや炭化物を混入する。
［出土遺物］堆積土中より、2点（13.3ｇ）の須恵器が出土している。
［その他］本遺構は位置関係から、近接する遺構群（第96・98・99・100・103・114号土坑、第65・67・70号溝跡）のいずれかとセット関係を有し、当該期の近隣の遺跡に多くみられる建物跡となる可能性が考えられる。（工藤・小山）

第５節　柱列

２基の検出である。壕の内側に拡がっているピット群の中にはまだ組めるものもあると思われるが、ここでは、規格性が認められた２基について記載する。

第１号柱列（図139）
［位置・重複］調査区の南側、壕の内側にあたるM～Ｐ－21～24グリッドに位置している。内壕の北辺に沿って構築されている。
［規模・柱間寸法］本遺構は幅50㎝程の溝を掘り込み溝の中に各柱穴が構築されている。溝の幅は約50㎝で、確認面からの深さは５㎝程である。Ｐ５より南東側は調査しておらず、正確な溝の長さは不明であるが、想定される長さは20ｍと思われる。各柱穴間の寸法は、Ｐ１からみて2.0×2.6×2.5×1.2である。Ｐ５より南東側にも構築されていると考えられる。長軸方向はＮ－50°－Ｗである。
［出土遺物］出土しなかった。
［小結］軸方向及び立地より、内壕、第１～第３号掘立柱建物跡と同時存在していた可能性が考えられる。また、溝が掘り込まれており、柵であった可能性も考えられる。（小山）

第２号柱列（図139）
［位置・重複］調査区の南側、壕の内側にあたるＯ－22グリッドに位置している。長軸の向きは、第１号柱列に直交し、第３号掘立柱建物跡の短軸と同じ向きになっており、第１号柱列のＰ４と第３号掘立柱建物跡のＰ３を結ぶように検出された。
［規模・柱間寸法］Ｐ１からＰ４間の寸法は、0.7×1.2×1.0ｍで、軸方向はＮ－30°－Ｅである。
［出土遺物］出土しなかった。
［小結］軸の傾き、立地より、近接している第１～３号掘立柱建物跡、第１号柱列、壕跡と同時存在していた可能性が考えられる。（小山）

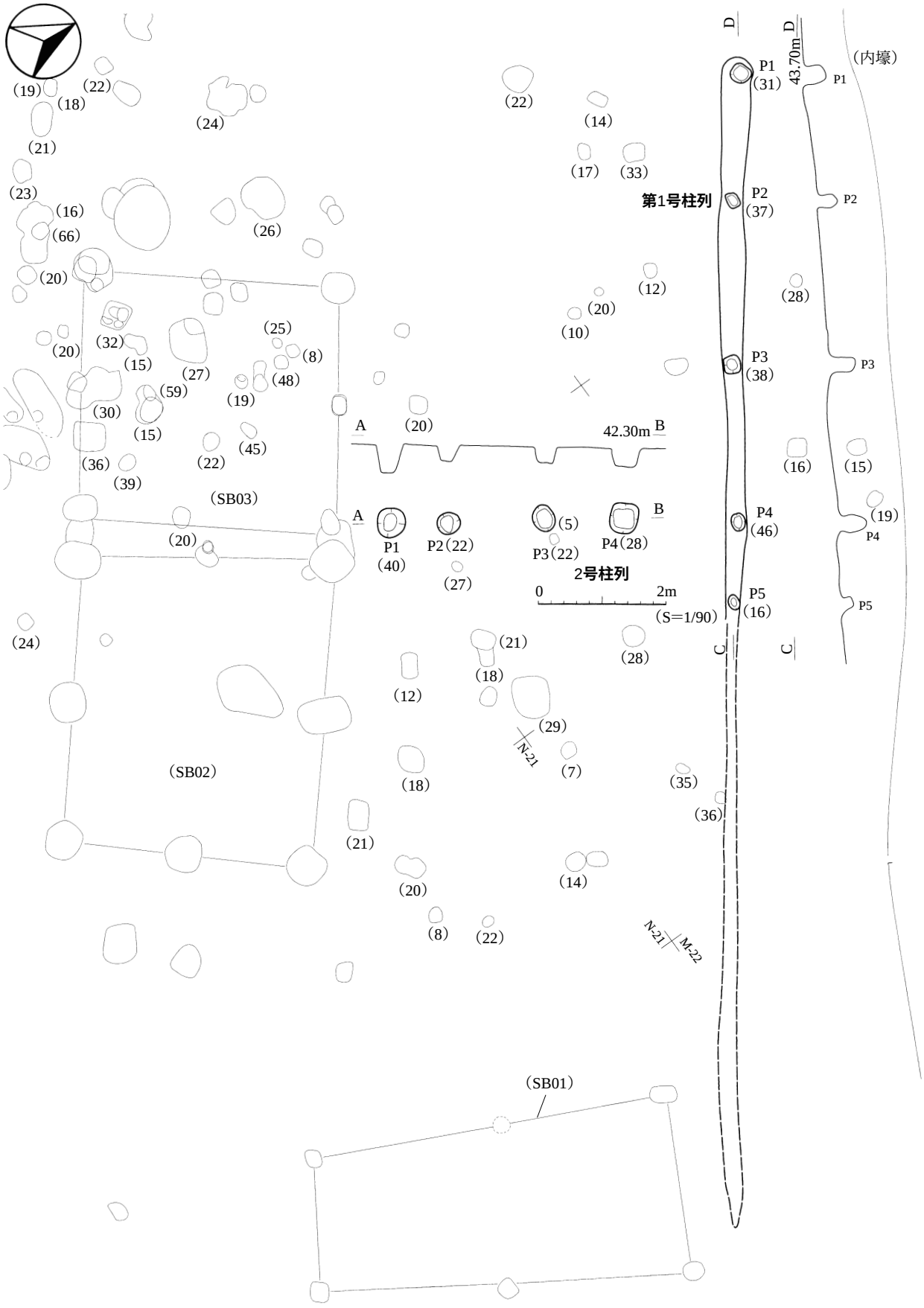


図139　第1号・2号柱列

第６節　井戸跡（図140）

井戸跡は４基検出された。いずれも、住居跡が検出された場所からは離れた場所にあり、沢筋や低地に構築されている。

第１号井戸跡（ＳＥ01）

［位置］調査区北側の低地、Ｐ－82グリッドに位置している。周辺には第５号掘立柱建物跡や第２号方形周溝（ＳＤ52）、第65号土坑（ＳＫ65）が検出されている。

［平面形・規模］検出面における平面形は円形であるが、確認面から40㎝ほど下がった辺りからは不整形で、底面まで筒状に掘り込まれている。開口部の規模は223×234㎝、底面の規模は123×130㎝、深さ131㎝である。

［壁・底面］壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、確認面から40㎝の辺りで急に広がっている。底面は平坦である。

［堆積土］９層に分層された。黒色土を主体とし、中位には焼土の薄層（第６層）、第８層にはロームの薄層がレンズ状に見られた。また、第２層直下及び第３層と５層との境には降下火山灰がレンズ状に堆積しているのが観察された。分析では、前者は十和田八戸テフラの風化物、後者は白頭山火山灰との結果が示されている。

［遺物］堆積土から土師器２点（４ｇ）、須恵器１点（14ｇ）が出土した。

［小結］沢地形にあたる低地に位置し、それほど深くなくても水が湧き出る場所である。最も近くにある住居跡は高屋敷館遺跡南西地区で検出された住居跡であり、ここからは50ｍほど離れている。本遺跡よりは当該遺跡との関連が考えられる。白頭山火山灰の堆積状況からは、この火山灰の降下前に廃棄されていたと考えられる。なお、井戸跡から出土した炭化材の炭素年代（補正年代、ＡＭＳ法）は1160±40（ｙＢＰ）であった。

第２号井戸跡（ＳＫ04）

［位置］調査区の中央付近、Ｋ－47グリッドに位置している。

［平面形・規模］検出面における平面形は楕円形であるが、確認面から若干下がったところから底部までは長方形に掘り込まれている。開口部の規模は155×180㎝、確認面から若干下がったところでは100×125㎝、底面では83×105㎝で、深さ158㎝である。

［壁・底面］壁は垂直に近く掘り込まれ、底面は平坦である。

［堆積土］５層に分層された。黒色土を主体とし、ローム粒やロームブロック、十和田ａ火山灰を含んでいる。十和田ａ火山灰は第1層では粉状あるいは小ブロック状に、第２層では薄く、レンズ状に堆積している。

［遺物］堆積土から、土師器１点（36ｇ）、須恵器１点（甕、16ｇ）のほか、板状の炭化材が出土した。図140-１は須恵器甕の胴部片であるが、胎土分析による産地同定では産地不明（Ｂ産地）という結果が出ている。また、出土した炭化材の樹種はクリ、ＡＭＳ法による炭素年代（補正年代）は1180±40（yBP）の結果が得られている。

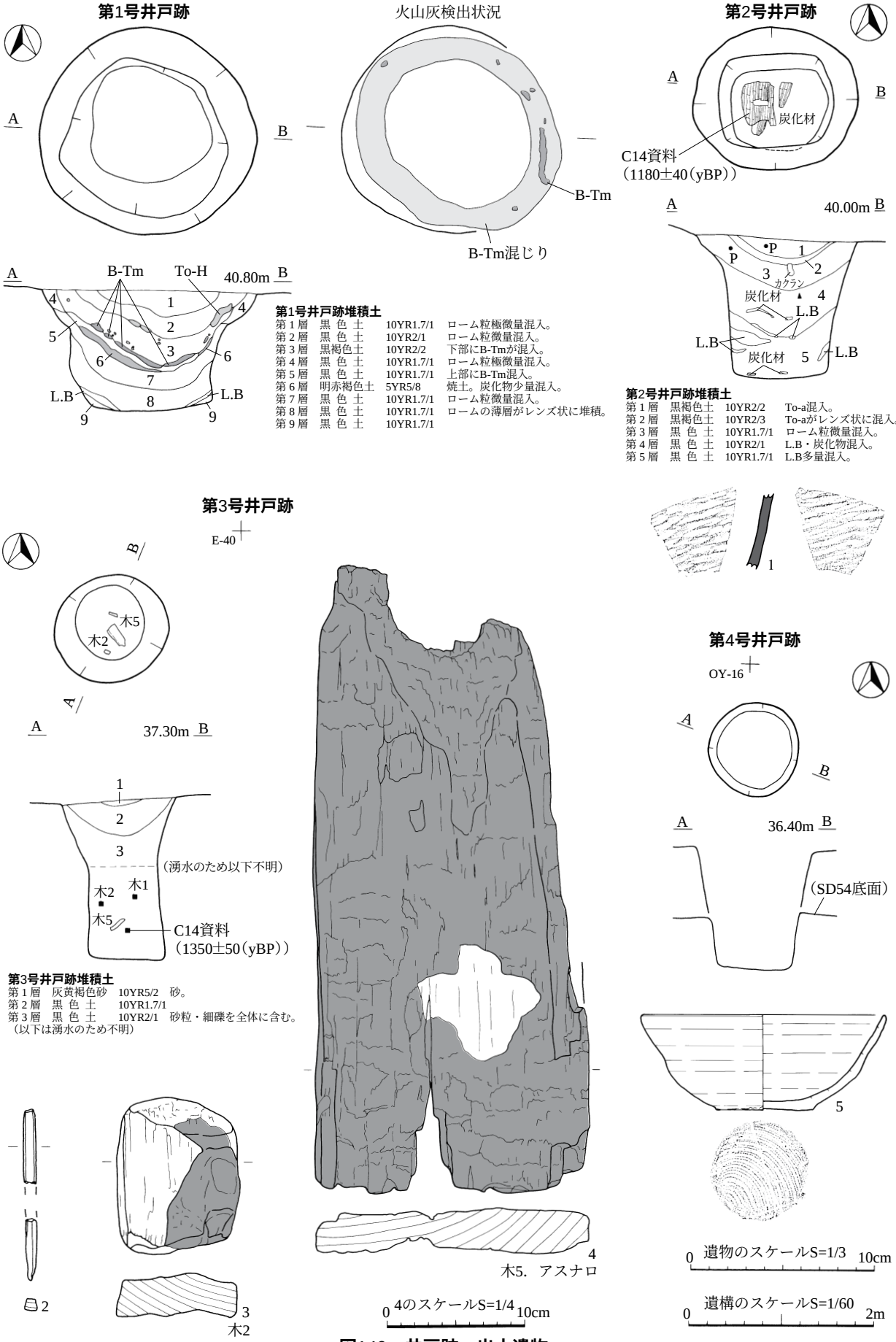


図140　井戸跡　出土遺物

［小結］調査区中央付近の沢地形の場所で検出され、住居跡が検出された場所からは50mほど北に位置している。出土した炭化材は本遺構が埋没する過程で混入したしたものと思われ、本遺構とは直接関係がない。火山灰の堆積状況からは、少なくとも10世紀初頭には廃棄されていたものと考えられる。

第３号井戸跡（ＳＥ03）

［位置］調査区中央付近の低地、Ｅ－40グリッドに位置している。

［平面形・規模］平面形は円形で、中程まではやや広く、中程から底面まで筒状に掘り込まれている。開口部の規模は113×123㎝、底面の規模は73×78㎝、深さ174㎝である。

［壁・底面］壁は垂直に近く立ち上がり、底面は平坦である。

［堆積土］湧水が激しく、確認面から70㎝の辺りまでしか確認できなかった。３層が確認され、黒色土が主体となっている。

［遺物］箸に似た小さな端材（図140-１）と板材３点（２・３）とが出土した。２には焼け焦げの痕跡が見られる。また、３の樹種はアスナロである。

［小結］低地に構築された井戸跡で、住居跡が検出された場所からは60mほど離れている。出土した木材等は埋没する過程で混入したと思われる。また、ほぼ同レベルで出土した他の板材のＡＭＳ法による炭素年代は1350±50（ｙＢＰ）であった。

第４号井戸跡（ＳＫ111）

［位置］調査区南東側の低地、０Ｘ・０Ｙ－16グリッドに位置している。周辺には多数の溝跡が検出されている。

［重複］第54号溝跡よりも新しい。

［平面形・規模］平面形は円形で、筒状に掘り込まれている。開口部の規模は96×100㎝、底面の規模は79×82㎝である。深さは135㎝である。

［壁・底面］壁は垂直に近く立ち上がり、底面は平坦である。

［堆積土］セクションは実測していないが、混入物の少ない黒褐色土を主体としている。

［遺物］堆積土から略完形の土師器の坏が１点出土した。

［小結］低地に構築された井戸跡で、住居跡が検出されている場所からは21m離れている。

（畠山）

第７節　土　坑

立地、形態、出土遺物等により平安時代の土坑とされたものは総数88基である。検出順に記載していく。

第３号土坑（ＳＫ03）（図141）

［位置］壕の北側、Ｎ－31グリッドに位置している。南側には第１号住居跡、西側には第32号、36号住居跡、北側には第３号溝跡が隣接して検出されている。

［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部の軸長は100×120㎝、底面の軸長は97×100㎝、深さ37㎝である。

［断面形・底面］断面形は逆台形であるが、北西壁が袋状に掘り込まれている。底面には凹凸が見られている。

［堆積土］６層に分層された。上位と下位に黒褐色土が見られ、その間に焼土や焼土塊を含む暗褐色土（第２層）が水平に堆積している。出土遺物は少ないが、この層の前後で平安時代や縄文時代の土器が出土している。全体にローム粒や小さなロームブロックを含み、人為堆積の様相を呈している。

［遺物］土師器７点（114ｇ）、縄文土器８点（73ｇ）が出土した。

［小結］壁や底面は丁寧に構築されている様子が見られない土坑である。いわゆるゴミ穴的な機能の土坑と思われる。（畠山）

第11号土坑（ＳＫ11）（図141）

［位置］調査区の中央付近、Ｌ－38グリッドに位置している。北東側には道跡が検出されている。

［平面形・規模］平面形は長方形で、開口部の軸長は103×129㎝、底面の軸長は92×113㎝、深さ９㎝の浅い土坑である。

［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面には小さな凹凸が激しい。

［堆積土］１層のみの確認で、ローム粒を含む黒色土堆積が見られた。

［遺物］遺物は出土しなかった。

［小結］平安時代に一般的な、浅い方形土坑である。（畠山）

第16号土坑（ＳＫ16）（図141）

［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｏ－17グリッドに位置している。

［平面形・規模］平面形は隅丸方形で、軸長は開口部100×145㎝、底面80×120㎝、深さは底面まで15㎝、掘り方底面まで30㎝である。

［断面形・底面］断面形は浅箱型になる。底面は東側へ向かって比高差10㎝ほどで傾斜しているが、概ね平坦である。

［堆積土］黒褐色土を主体として２層に分層された。第２層は掘り方になる。

［遺物］土師器片１点（3.2ｇ）、縄文時代前期中葉の土器片２点（57ｇ）が出土した。

［小結］平安時代に一般的な、浅い方形土坑である。（小山）

第17号土坑（ＳＫ17）（図141）

［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｏ・Ｐ－17グリッドに位置している。

［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部120×130㎝、底面50×65㎝、深さは45㎝である。

［断面形・底面］断面形は箱型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒褐色土を主体として５層に分層された。第４層にはロームブロックが多量に含まれている。

［遺物］堆積土中から土師器片が20点（224ｇ）が出土した。

［小結］出土遺物、堆積土の状況より平安時代の遺構と判断した。（小山）

第18号土坑（ＳＫ18）（図141・149）

［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｒ・Ｓ－20・21グリッドに位置している。

［平面形・規模］平面形は楕円形、軸長は開口部140×170㎝、底面110×135㎝、深さ35㎝である。

［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒褐色土を主体として７層に分層された。全層中に焼土・炭化物が含まれており、人為堆積の状況を示している。遺物は第２～３層中に含まれている。

［遺物］堆積土中から土師器片42点（291ｇ）、須恵器片５点（88ｇ）が出土した。図149-１は土師器坏で、内面に内黒処理が施されている。その他に縄文土器片が13点（135ｇ）が出土している。

［小結］出土遺物、堆積土の状況より平安時代の遺構と判断した。（小山）

第20号土坑（ＳＫ20）（図141）

［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｒ－16・17グリッドに位置している。

［重複］第６号住居跡より新しい。

［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部90×100㎝、底面45×55㎝、深さは60㎝である。

［断面形・底面］断面形は基本的には深箱型である。しかし、底面から30㎝ほど立ち上がった所に段が見られる。底面には起伏が見られる。

［堆積土］暗褐色土を主体として３層に分層された。全層中にロームブロックを多量に含まれており、人為堆積の状況を示している。

［遺物］堆積土中から土師器片10点（65ｇ）、縄文土器片２点（８ｇ）が出土した。

［小結］十和田a火山灰が二次堆積している第６号住居跡より新しいことより、構築年代は10世紀前葉以降と考えられる。隣接している第１号、第３号竪穴遺構と同様な堆積状況を示しており、遺構配置などから、これらの遺構と同時存在していた可能性が考えられる。（小山）

第23号土坑（ＳＫ23）（図141・149）

［位置］壕の内側、Ｒ－20グリッドに位置している。南側には第３号住居跡、東側には竪穴遺構（ＳＫ22）や土坑（ＳＫ40・43）が隣接して検出されている。

［平面形・規模］平面形は不整楕円形で、開口部の軸長は90×105㎝、底面の軸長は93×110㎝、深さ62㎝である。

［断面形・底面］断面形はフラスコ型で、壁面や底面にはひび割れや凹凸が見られる。

［堆積土］７層に分層された。上位と下位に基本土層の第Ⅴ層起源の浮石質の黄褐色土の堆積が見られ、その間に暗褐色土や黒褐色土の堆積が見られる。人為的な様相が見られる堆積状態である。
［遺物］堆積土から土師器片２点（坏、15ｇ）、縄文土器13点（113ｇ）が出土した。
［小結］断面形がフラスコ型の土坑であり、一見、縄文時代のものも思われる土坑である。覆土中から縄文土器に加え土師器坏も出土していることから、平安時代に構築されたものと判断される。（畠山）

第24号土坑（ＳＫ24）（図141）
［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｓ－17グリッドに位置している。
［重複］第３号住居跡より新しい。
［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部75×90㎝、底面50×50㎝、深さは20㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅鉢型で、底面は起伏が見られる。
［堆積土］黒褐色土の単層で、ロームブロックが少量含まれている。
［遺物］堆積土中から縄文土器が２点（15.7ｇ）が出土した。
［小結］白頭山火山灰（肉眼観察による）が二次堆積している第３号住居跡より新しいことより、それ以降に構築された土坑と言える。（小山）

第25号土坑（ＳＫ25）（図141）
［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｑ－22グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は円形、開口部径は170㎝、底面の軸長は130×150㎝、深さは40㎝である。
［断面形・底面］断面は浅箱型で、底面は平坦である。
［堆積土］黒褐色土を主体として４層に分層された。第３層中より出土した火山灰を分析にかけたところ十和田a火山灰、白頭山火山灰が混在しており、汚染されたものという結果が得られた。
［遺物］土師器３点（26.2ｇ）、縄文時代中期～後期の土器片が３点（266ｇ）が出土した。
［小結］汚染された火山灰が含まれていることより、構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

第26号土坑（ＳＫ26）（図141）
［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｑ－22グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は隅丸方形で、軸長は開口部90×130㎝、底面70×105㎝、深さ15㎝で、掘り方底面まで20㎝である。
［断面形・底面］断面は浅箱型で、底面は平坦である。
［堆積土］黒褐色土を主体として２層に分層された。第２層は掘り方層である。
［遺物］堆積土中から縄文時代後期前葉の土器が５点（53.1ｇ）が出土した。
［小結］平安時代に一般的な、浅い方形土坑である。（小山）

第27号土坑（ＳＫ27）（図141）
［位置］Ｌ・Ｍ－16グリッドに位置している。内壕と外壕との間にあり、北側には第16号住居跡が隣接して検出されている。

［重複］時期不明の第25号溝跡と平安時代の第27号土坑と重複している。新旧関係は第25号溝跡よりも古く、第27号溝跡よりも新しい。
［平面形・規模］平面形は長楕円形である。開口部の軸長は第25号溝跡に切られて不明であるが、長軸は現存で128㎝、短軸は96㎝である。また、底面の軸長は77×80㎝、深さ60㎝である。
［断面形・底面］断面形は箱型であるが、北壁は袋状に掘り込まれている。また、土坑の東側は階段状に掘り込まれている。
［堆積土］２層に分層された。第1層は暗褐色土でローム粒の混入はあまり見られない。第２層も暗褐色土であるが、ローム粒やローム塊を多量に含み、白頭山火山灰の小ブロックも少量混入している。
［遺物］遺物は出土しなかった。
［小結］白頭山火山灰の二次堆積が見られることから、この火山灰の降下後に構築されたものと思われる。（畠山）

第28号土坑（ＳＫ28）（図141）
［位置］壕の内側、Ｌ・Ｍ－20グリッドに位置している。内壕に近接して検出された。
［平面形・規模］平面形は方形で、開口部の軸長は113×118㎝、底面の軸長は97×109㎝、深さ27㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］３層に分層された。全体に黒褐色土の堆積が見られたが、第３層には多量のロームブロックが含まれている。
［遺物］縄文時代前期と後期の破片が７点（37ｇ）が出土した。
［小結］覆土中から縄文時代の土器片しか出土しなかったが、形態から平安時代の土坑と考えられる。（畠山）

第30号土坑（ＳＫ30）（図141）
［位置］壕の内側、Ｌ・Ｍ－19グリッドに位置している。北西には第８号住居跡、南東には第18号住居跡が隣接して検出されている。
［平面形・規模］平面形は長方形で、開口部の軸長は100×148㎝、底面の軸長は89×131㎝、深さ16㎝の浅い土坑である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型であるが、東壁がややなだらかに立ち上がっている。底面は平坦である。
［堆積土］３層に分層された。壁際にローム質の褐色土、その上部に硬い黒褐色土が堆積している。
［遺物］遺物は出土しなかった。
［小結］形態から、平安時代に構築されたものと思われる。（畠山）

第32号土坑（ＳＫ32）（図141・149・151・152）
［位置］内壕と外壕との間、Ｌ－17グリッドに位置し、第16号住居跡の調査中に検出した。
［重複］第16号住居跡と重複し、これより新しい。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部の軸長は152×154㎝、底面の軸長は113×122㎝、深さ74㎝

である。
［断面形・底面］断面形は箱型で、立ち上がりは急である。底面には若干の凹凸が見られ、北西隅には22㎝の深さのピットが掘り込まれている。
［堆積土］壁際での観察であるが、３層に分層された。上部に白頭山火山灰の小ブロックを含む暗褐色土、中位から下位では褐色土の堆積が見られた。
［遺物］堆積土中から土師器20点（983ｇ）、須恵器６点（坏、壺、甕、1,148ｇ）、鉄器（手鎌？、図152-19）１点、縄文土器４点（38ｇ）、被熱した礫１点が出土した。土師器片は第16号住居跡のカマド周辺から出土したものと接合関係にあるものもある。図149-4は灯明具に利用された坏である。図151-３の須恵器は、胎土分析による産地同定では、産地不明という結果が出ている。
［小結］堆積土中に若干の遺物が廃棄されている土坑で、接合関係から第16号住居跡に伴う可能性も考えられるが、貼床やピットを切って構築されていることから住居跡よりも新しいものと判断した。
（畠山）

第33号土坑（ＳＫ33）（図142・151）
［位置］調査区南側で壕の外側にあたる、Ｊ－８グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部110×140㎝、底面90×105㎝、深さは60㎝である。
［断面形・底面］断面形は深箱型で、底面は平坦である。
［堆積土］黒褐色土を主体として８層に分層された。第１～３層、第５層中に白頭山火山灰（肉眼観察による）がブロック状に混入している。第４層は廃棄粘土の層である。
［遺物］堆積土中から土師器片38点（584ｇ）、須恵器片１点（10ｇ）、縄文土器片３点（13.3ｇ）が出土した。
［小結］火山灰がブロック状に混入している事より、構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

第34号土坑（ＳＫ34）（図142）
［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｐ－19グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部(80)×95㎝、底面65×80㎝、深さは20㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面は平坦である。
［堆積土］黒褐色土を主体として２層に分層された。
［遺物］堆積土中より土師器片５点（46.1ｇ）、縄文土器片１点（2.5ｇ）、剥片が１点出土した。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第35号土坑（ＳＫ35）（図142）
［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｏ・Ｐ－19・20グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、軸長は開口部90×120㎝、底面65×105㎝、深さ10㎝である。
［断面形・底面］断面は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］黒褐色土の単層で、層の下部にロームブロックが混入している。
［遺物］出土しなかった。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第36号土坑（ＳＫ36）（図142）

［位置］南側調査区で壕の内側にあたる、Ｎ－19グリッドに位置している。

［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部85×95㎝、底面70×75㎝、深さは15㎝である。

［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒褐色土の単層で、層の下部にロームブロックが少量混入している。

［遺物］出土しなかった。

［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第37号土坑（ＳＫ37）（図142）

［位置］調査区南側で壕の外側にあたる、Ｊ・Ｋ－８グリッドに位置している。

［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部80×100㎝、底面55×75㎝、深さは23㎝である。

［断面形・底面］断面は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒褐色土を主体として２層に分層された。第２層はローム主体の層である。

［遺物］出土しなかった。

［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第38号土坑（ＳＫ38）（図142）

［位置］調査区南側で壕の外側にあたる、Ｋ－８・９グリッドに位置している。

［平面形・規模］平面形は楕円形で、軸長は開口部95×140㎝、底面60×100㎝、深さ25㎝である。

［断面形・底面］断面は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］暗褐色土を主体として３層に分層された。全層にロームブロックが混入しており人為堆積の状況を示している。

［遺物］出土しなかった。

［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第39号土坑（ＳＫ39）（図142）

［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｐ－17グリッドに位置している。

［平面形・規模］平面形は円形に近い隅丸方形で、軸長は開口部90×95㎝、底面75×75㎝、深さは15㎝である。

［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒褐色土の単層で、ロームブロックが多量に混入している。

［遺物］出土しなかった。

［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第40号土坑（ＳＫ40）（図142）

［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｑ－19・20グリッドに位置している。

［平面形・規模］本遺構は１回大きく掘り込まれており、そこに土が貼られ、壁が構築されている。

つまり、掘り方の中に土坑が収まるものである。平面形は不整円形で、軸長は開口部100×105㎝、底面80×100㎝で、深さは底面まで13㎝、掘り方底面まで25㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］黒褐色土を主体として２層に分層される。第２層は掘り方層になる。
［遺物］出土しなかった。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第42号土坑（ＳＫ42）（図142）
［位置］調査区南側で壕と壕の間にあたる、Ｎ－13グリッドに位置する。
［平面形・規模］平面形は円形に近い隅丸方形で、軸長は開口部90×95㎝、底面80×90㎝で、深さは15㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］黒褐色土の単層で、壁際にロームブロックが集中している。
［遺物］出土しなかった。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第43号土坑（ＳＫ43）（図142）
［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｑ－20グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部90×95㎝、底面70×70㎝で、深さは10㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］暗褐色土を主体として２層に分層された。第２層はローム主体の層になる。
［遺物］出土しなかった。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第44号土坑（ＳＫ44）（図142）
［位置］調査区南側で壕の外側にあたる、Ｍ－12グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部135×140㎝、底面50×60㎝、深さは20㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］暗褐色土の単層で、ローム粒が少量混入している。
［遺物］縄文土器片が１点（16.7ｇ）が出土した。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第45号土坑（ＳＫ45）（図142）
［位置］壕の外側、Ｇ・Ｈ－17グリッドに位置している。北から東側には多数の住居跡（第44号～46号、第51号、53号～56号）が重複して検出されている。
［平面形・規模］平面形は長方形で、開口部の軸長は97×158㎝、底面の軸長は92×152㎝、深さ20㎝である。

［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面は平坦である。
［堆積土］堆積土は１層のみで、シルト質の黒褐色土の堆積が確認された。
［遺物］縄文時代前期の土器２点が出土した。
［小結］縄文時代の土器片が出土しているが、土坑の形態から平安時代の土坑と考えられる。（畠山）

第46号土坑（ＳＫ46）（図142）
［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｍ・Ｎ－18グリッドに位置している。
［重複］第47号土坑より新しい。
［平面形・規模］平面形は長方形で、軸長は開口部85×135㎝、底面70×120㎝で、深さは30㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］黒褐色土を主体として２層に分層された。第１層に白頭山火山灰（肉眼観察による）が粒状に混入している。
［遺物］土師器片１点（4.1ｇ）、縄文土器片が19点（166ｇ）、剥片が２点出土した。
［小結］火山灰がブロック状に混入していることより構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

第47号土坑（ＳＫ47）（図142）
［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｍ・Ｎ－18グリッドに位置している。
［重複］第46号土坑より古い。
［平面形・規模］平面形は長方形で、重複の影響を受けていない北東－南西軸の軸長は、開口部で130㎝、底面で120㎝である。深さは10㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］黒褐色土の単層で、ロームブロックを多量に含んでいる。
［遺物］出土しなかった。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第48号土坑（ＳＫ48）（図142）
［位置］調査区南側で壕の内側にあたる、Ｍ－18グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部75×85㎝、底面65×75㎝で、深さは20㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］黒褐色土を主体として２層に分層された。第２層にロームブロックが多量に含まれている。
［遺物］出土しなかった。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第50号土坑（ＳＫ50）（図143）
［位置］壕の外側、Ｎ－28グリッドに位置している。南側には第10号住居跡、北側には第１号住居跡が隣接して検出されている。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部の軸長は133×147㎝、底面の軸長は88×93㎝、深さ28㎝で

ある。
［断面形・底面］断面形は鍋底状で、底面は中央でやや深くなり、若干の凹凸が認められる。
［堆積土］４層に分層された。大半がローム粒や小さなロームブロックを含む黒褐色土で、第1層や第３層には白頭山火山灰（第９章第４節参照）の小ブロックを含んでいる。
［遺物］土師器14点（134ｇ）、須恵器１点（４ｇ）、縄文土器40点（523ｇ）が出土した。
［小結］浅い円形の土坑である。堆積土に白頭山火山灰の小ブロックを含んでいることから、この火山灰の降下後に構築、廃棄されたものと思われる。（畠山）

第54号土坑（ＳＫ54）（図143・149・151・152）
［位置］調査区南側の東端にあたるＣ－18グリッドに位置している。
［重複］第41号溝跡より新しい。
［平面形・規模］隅丸方形で、軸長は開口部130×165㎝、底面110×110㎝、深さは40㎝である。
［断面形・底面］断面形は箱型で、底面は起伏が見られる。
［堆積土］黒色土を主体として10層に分層された。第１・３・５・８層は焼土層で廃棄された状況を示している。
［遺物］土師器片95点（1.9kg）、須恵器片16点（732ｇ）、羽口片が１点、鉄製品が２点、ミニチュア土器の底部片が１点出土した。図149-７～９は土師器坏で、９は器面が摩滅している。図150-７の底面には菊花状の調整が施されている。８は第51号住居跡より出土したものと接合した。図152-20･21は全体形が不明であるが紡軸と考えられる。
［小結］白頭山火山灰がブロック状に含まれている41溝より新しいことから、10世紀中葉以降に構築された遺構と考えられるが、第10層より採取した炭化物について行った炭素年代（ＡＭＳ法、補正年代）は、1190±60（ｙＢＰ）で、想定より古い年代が示されている（第９章第２節参照）。（小山）

第55号土坑（ＳＫ55）（図143）
［位置］調査区南側の東側にあたる、Ｄ－20グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部75×90㎝で、底面60×75㎝、深さは20㎝である。
［断面形・底面］断面は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］黒色土を主体として３層に分層された。第２層は灰、炭化物の層で廃棄された状況を示している。また、底面より焼土が10×25㎝のブロック状で検出された。底面は被熱しておらず、焼土塊は廃棄されたものと考えられる。
［遺物］出土しなかった。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第56号土坑（ＳＫ56）（図143・149）
［位置］調査区南側の東側にあたる、Ｅ－20グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部90×110㎝で、底面55×55㎝、深さは40㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒褐色土を主体として４層に分層された。第１層に白頭山火山灰（肉眼観察による）が粒状に混入している。
［遺物］土師器片３点（193ｇ）が出土した。図149-３は土師器の小型甕である。
［小結］白頭山火山灰が二次堆積しており、構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

第57号土坑（ＳＫ57）（図143）
［位置調査区南側の東側にあたる、Ａ－23グリッドに位置している。
［重複］第35号溝跡より新しい。
［平面形・規模］平面形は隅丸方形で、軸長は開口部75×95㎝で、底面55×85㎝、深さ15㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］暗褐色土を主体として２層に分層された。第２層にはロームブロックが多量に混入している。
［遺物］出土しなかった。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第58号土坑（ＳＫ58）（図143）
［位置］調査区南側の東側にあたる、Ａ・Ｂ－21・22グリッドに位置している。
［重複］第34号溝跡より古く、第37号溝跡より新しい。
［平面形・規模］平面形は長方形で、軸長は開口部115×310㎝、底面110×295㎝、深さ50㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］単層で、ロームとの混合土層である。
［遺物］土師器片16点（64ｇ）、剥片が２点出土した。
［小結］白頭山火山灰が二次堆積している37溝より新しい事から、構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

第59号土坑（ＳＫ59）（図143）
［位置］調査区南側の東端にあたる、Ａ－20・21グリッドの調査区際に位置している。
［重複］第34号、第35号溝跡より古い。
［平面形・規模］調査区外へ伸びており、全体形は不明であるが、円形を基調としたものと考えられる。現存している底面の軸長は（160㎝）である。
［断面形・底面］断面形は箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］黒色土を主体として３層に分層された。第３層はロームとの混合土層である。
［遺物］出土しなかった。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第60号土坑（ＳＫ60）（図143）
［位置］調査区南側の南端にあたる、Ｈ－10グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部90×110㎝で、底面40×40㎝、深さは35㎝である。

［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］暗褐色土を主体として４層に分層された。第２層にはロームブロックが多量に混入している。第３層はローム層で、壁の崩落土と考えられる。
［遺物］出土しなかった。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第61号土坑（ＳＫ61）（図143）
［位置］調査区南側で壕の外側にあたる、Ｊ－９グリッドに位置している。
［重複］第12号住居跡より古く、第28号住居跡より新しい。
［平面形・規模］重複により全体形を検出できなかったが、不整形になると思われる。現存している開口部軸長は120×140㎝である。底面は重複の影響を受けておらず、軸長は55×65㎝である。深さは25㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面には起伏が見られる。
［堆積土］黒褐色土の単層で、ロームブロックが多量に含まれている。
［遺物］堆積土中より土師器片が12点（54ｇ）が出土した。
［小結］形態から平安時代のものと考えられる。（小山）

第63号土坑（ＳＫ63）（図143・150・151）
［位置］調査区南側の東端にあたる、Ａ・Ｂ－14グリッドに位置している。
［重複］第46号、47号溝跡より新しい。
［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部150×155㎝、底面125×125㎝、深さ75㎝である。
［断面形・底面］断面形は深箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］黒褐色土を主体として５層に分層された。第１層と第４層には白頭山火山灰（肉眼観察による）が粒状に混入している。第２～４層は炭化物層で、廃棄されたものと考えられる。
［遺物］堆積土中より土師器片161点（2.3㎏）、須恵器片５点（195ｇ）、縄文土器片２点、弥生土器片１点、羽口片１点が出土した。
［小結］火山灰が粒状に混入していることより、構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

第64号土坑（ＳＫ64）（図143）
［位置］内壕と外壕とに挟まれたＳ・Ｔ－25グリッドに位置している。
［平面形・規模］一部区域外にあるが、平面形は長方形と考えられる。開口部の軸長は126×（130＋α）㎝、底面の軸長は98×（105＋α）㎝である。深さは30㎝である。
［断面形・底面］断面形は箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］３層に分層された。第１層は焼土で、第２層は焼土粒を含む黒褐色土である。焼土は締まりのあるもので、火を焚いた痕跡と考えられる。これらは土坑の南西上部に検出された。堆積土の大半はローム粒や小さなロームブロックを含んだ黒褐色土で、人為堆積と考えられる。
［遺物］土師器８点（159ｇ）、須恵器１点（５ｇ）、縄文土器２点（11ｇ）が出土した。

［小結］土坑を埋めた後に、火を焚いた可能性もある。墓の可能性がないかどうか、焼土と土坑との関係が気にかかる遺構である。（畠山）

第66号土坑（ＳＫ66）（図143）

［位置］調査区南側の東端にあたる、Ａ・Ｂ－15・16グリッドに位置している。

［重複］第47号溝跡より古い。

［平面形・規模］重複により全体形は不明であるが、楕円形を基調とするものと考えられる。現存している規模は開口部で（120㎝）、底面で（55㎝）で、深さは35㎝である。

［断面形・底面］断面形は不整形で、底面に段が見られる。底面は平坦である。

［堆積土］黒色土を主体として４層に分層された。第１層には白頭山火山灰（肉眼観察による）がブロック状に混入している。

［遺物］遺物は出土しなかった。

［小結］白頭山火山灰が二次堆積しており、構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

第67号土坑（ＳＫ67）（図144）

［位置］調査区南側の東側にあたる、Ｂ－17グリッドに位置している。

［重複］第39号溝跡より古く、第41号溝跡とは不明である。

［平面形・規模］重複により全体形は不明であるが、楕円形を基調とするものと考えられる。重複の影響を受けていない軸長は、開口部で115㎝、底面で70㎝である。深さは底面まで35㎝、掘り方底面まで40㎝である。

［断面形・底面］断面形は箱型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒褐色土を主体として４層に分層された。第１層には白頭山火山灰（肉眼観察による）が粒状に混入している。第４層は掘り方層である。

［遺物］遺物は出土しなかった。

［小結］白頭山火山灰が二次堆積しており、構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

第70号土坑（ＳＫ70）（図144）

［位置］調査区南側の南端にあたる、Ｇ・Ｆ－５グリッドに位置している。

［重複］第71・72号土坑、第56・57号溝跡より新しい。

［平面形・規模］平面形は楕円形である。時間的都合により、重複順に掘り進める事が出来ず、規模は土層から計測している。開口部〈150×180㎝〉、底面〈100×110㎝〉で、深さは70㎝である。

［断面形・底面］断面形は深箱型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒色土を主体として４層に分層された。底面直上より、20×60㎝の焼土ブロックが検出された。底面が被熱しておらず廃棄されたものと考えられる。

［遺物］堆積土中から土師器片11点（173ｇ）、縄文土器片４点（34ｇ）が出土した。

［小結］重複、形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第71号土坑（ＳＫ71）（図144）

［位置］調査区南側の南端にあたる、Ｇ、Ｆ－５グリッドに位置している。

［重複］第70号土坑より古く、第72号土坑、第56、57号溝跡より新しい。

［平面形・規模］重複により全体形は不明であるが、円形を基調とすると考えられる。現存している規模は開口部150㎝、底面120㎝で、深さは底面まで25㎝、掘り方底面まで30㎝である。

［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］第72号土坑と重複しているにもかかわらず、両土坑の上位に堆積する層は土色、土質、混入物などほぼ同じで、壁の立ち上がりを確認することが出来なかった。同時に埋没した可能性が考えられる。

［遺物］遺物は出土しなかった。

［小結］重複、形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第72号土坑（ＳＫ72）（図144・151・152）

［位置］調査区南側の南端にあたる、Ｆ－５グリッドに位置している。

［重複］第70号・71号土坑より古く、第56・57号溝跡より新しい。

［平面形・規模］平面形は楕円形で、規模は開口部240×340㎝で、底面215×300㎝で、深さは、底面までが75㎝で、掘り方底面まで90㎝である。

［断面形・底面］断面形は深箱型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒色土を主体に８層に分層された。第８層は掘り方層である。

［遺物］堆積土中より、土師器片49点（802ｇ）、須恵器片１点（85ｇ）、縄文土器８点（95ｇ）が出土した。図151-10は須恵器壺の底部片で、底部に菊花状の調整が施されている。図152-22は石製の平玉で、貫通孔が施されている。

［小結］重複、形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第74号土坑（ＳＫ74）（図144）

［位置］調査区南側の東端にあたる、Ａ－15グリッドに位置している。

［重複］第47号溝跡より古い。

［平面形・規模］重複により全体形は不明であるが、円形を基調とするものと考えられる。重複の影響を受けていない軸長は、開口部105㎝、底面60㎝で、深さは25㎝である。

［断面形・底面］断面形は深箱型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒色土を主体として５層に分層された。第２層はロームとの混合土層である。

［遺物］堆積土中より、土師器片13点（140ｇ）、縄文土器片２点（65ｇ）が出土した。

［小結］重複、形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第75号土坑（ＳＫ75）（図144）

［位置］調査区南側の東端にあたる、Ａ・Ｂ－22グリッドに位置している。

［重複］第35号、第36号溝跡より古く、第37号溝跡より新しい。

［平面形・規模］平面形は楕円形である。現存している底面軸長は115×160㎝で、深さは85㎝である。
［断面形・底面］断面形は深箱型で、底面はほぼ平坦である。
［遺物］遺物は出土しなかった。
［小結］形態、重複等から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第76号土坑（ＳＫ76）（図144）
［位置］調査区南側の東端にあたる、Ａ－22グリッドに位置している。
［重複］第36号溝跡より古く、第37号溝跡より新しい。
［平面形・規模］重複により全体形は不明であるが、円形を基調としたものと考えられる。重複の影響を受けていない底面軸長は45×65㎝で、深さは60㎝である。
［断面形・底面］断面形は深箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］土層観察ベルト設定しておらず不明である。調査時の所見ではロームとの混合土層が主体を占めていたと記憶している。
［遺物］遺物は出土しなかった。
［小結］形態、重複等から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第77号土坑（ＳＫ77）（図144）
［位置］調査区南側の東端にあたる、Ａ－22グリッドに位置している。
［重複］第36号溝跡より古く、第78号土坑、第37号溝跡より新しい。
［平面形・規模］重複により全体形は不明であるが、楕円形を基調としたものと考えられる。底面の規模は径90㎝である。深さは60㎝である。
［断面形・底面］断面形は深箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］ロームとの混合土が主体を占め８層に分層された。人為堆積の状況を示している。
［遺物］遺物は出土しなかった。
［小結］形態、重複等から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第78号土坑（ＳＫ78）（図144）
［位置］調査区南側の東端にあたる、Ａ－22グリッドの調査区際に位置している。
［重複］第34号、第36号溝跡、第77号土坑より古い。
［平面形・規模］調査区外へ伸びており全体形は不明であるが、円形を基調としたものと考えられる。現存している底面軸長は（170㎝）である。深さは55㎝である。
［断面形・底面］断面形は深箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］黒色土を主体として４層に分層された。
［遺物］遺物は出土しなかった。
［小結］形態、重複等から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第79号土坑（ＳＫ79）（図145・150）

［位置］調査区南側の南端にあたる、Ｇ－６・７グリッドに位置している。

［重複］第３号方形周溝より古く、第56号・57号溝跡より新しい。

［平面形・規模］平面形は楕円形で、軸長は開口部135×180㎝、底面110×135㎝で、深さは85㎝である。

［断面形・底面］断面形は深箱型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒褐色土を主体として12層に分層された。第１・４・７層には白頭山火山灰（肉眼観察による）が粒状に混入している。第８・10・12層はローム層で、廃棄されたものと考えられる。

［遺物］堆積土中から土師器片29点（392ｇ）、須恵器片１点（2.4ｇ）が出土した。

［小結］白頭山火山灰が二次堆積しており、構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

第80号土坑（ＳＫ80）（図145）

［位置］調査区南側の南端にあたる、Ｇ・Ｈ－８グリッドに位置している。

［平面形・規模］平面形は不整円形で、規模は開口部310×385㎝、底面270×305㎝で、深さ60㎝である。

［断面形・底面］断面形は深箱型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］明黄褐色土を主体として５層に分層された。全層、ロームとの混合土で、人為堆積の状況を示している。

［遺物］堆積土中より土師器片９点（245ｇ）、須恵器片１点（2.4ｇ）が出土した。

［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第81号土坑（ＳＫ81）（図145）

［位置］調査区の中央付近の低地、Ｅ－31グリッドに位置している。

［重複］第62号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

［平面形・規模］平面形は隅丸台形で、開口部の軸長は142×180㎝、底面の軸長は121×166㎝、深さ18㎝である。

［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面には凹凸が見られる。

［堆積土］２層に分層された。第１層は黒色土、第２層はローム粒やロームブロックを含む黒褐色土である。

［遺物］土師器５点（21ｇ）が出土した。

［小結］方形基調の土坑であることや、土師器片の出土から平安時代の土坑と考えられる。（畠山）

第82号土坑（ＳＫ82）（図145）

［位置］調査区の中央付近の低地、Ｃ・Ｄ－30グリッドに位置している。

［平面形・規模］平面形は不整楕円形で、開口部の軸長は139×258㎝、底面の軸長は105×214㎝、深さ34㎝である。

［断面形・底面］断面形は箱型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］４層に分層された。第１層から第３層は黒色土で、第1層には白頭山火山灰の小ブロックが、第２層には粉状の白頭山火山灰の混入が見られた。第４層は褐色土で、ローム粒やロームブロックの

混入が見られた。
［遺物］土師器８点（68ｇ）、ミニチュア土器の破片５点、縄文土器１点（２ｇ）が出土した。
［小結］不整楕円形を呈しているものの、方形基調の土坑と思われる。出土遺物や白頭山火山灰が混入していることから平安時代の土坑と考えられる。（畠山）

第83号土坑（ＳＫ83）（図145・149・152）
［位置］壕の外側の緩傾斜地、Ｇ－19グリッドに位置している。周辺には多数の住居跡が重複して検出されている。
［重複］第45号・46号・68号住居跡と重複し、これらより新しい。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部の軸長は204×354㎝、底面の軸長は152×243㎝、深さ95㎝である。
［断面形・底面］断面形は深箱型で、壁面には凹凸が見られる。底面はほぼ平坦である。
［堆積土］５層に分層されたが、全体にローム粒やロームブロックを含んだ黒褐色土で、人為堆積の状況を呈している。また、堆積土中に白頭山火山灰の小ブロックを含んでいる。
［遺物］土師器118点（2,594）、須恵器２点（19ｇ）、縄文土器22点（220ｇ）、被熱した礫１点が出土した。土師器には、坏、甕、堝、ミニチュア土器等がある。図149-11は灯明具に再利用された土師器の坏である。15は内面調整にミガキが施され、黒色処理された小型甕である。
［小結］本土坑は、重複している住居跡が埋まりきってから掘り込まれたものと思われ、上部から掘り込み面が確認されている。人為堆積で、多量の遺物が出土している。（畠山）

第84号土坑（ＳＫ84）（図145）
［位置］調査区南側の南端にあたる、Ｆ－７・８グリッドに位置している。
［重複］第49号住居跡より古い。
［平面形・規模］平面形は方形で、軸長は開口部140×180㎝、底面130×160㎝で、深さは15㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］黒色土を主体として２層に分層された。
［遺物］遺物は出土しなかった。
［小結］重複、形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第85号土坑（ＳＫ85）（図145）
［位置］調査区南側の南端にあたる、Ｆ－８グリッドに位置している。
［重複］第３号方形周溝より新しい。
［平面形・規模］平面形は惰円形で、軸長は開口部130×230㎝、底面110×200㎝で、深さは45㎝である。
［断面形・底面］断面形は箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］黒褐色土を主体として５層に分層される。第２層以下にはロームブロックが混入しており、下位にいくにつれて、その割合は多くなる。
［遺物］堆積土中よりから土師器片１点（21.2ｇ）、須恵器片２点（196ｇ）が出土した。

［小結］重複、形態等から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第86号土坑（ＳＫ86）（図146）

［位置］調査区南側の南端にあたる、Ｅ－８グリッドの調査区際に位置している。

［重複］第31号溝跡より新しい。

［平面形・規模］調査区外へ伸びており全体形は不明であるが、円形を基調とするものと考えられる。現存している軸長は開口部195㎝、底面120㎝で、深さは底面まで65㎝、掘り方底面まで80㎝である。

［断面形・底面］断面形は深箱型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒色土を主体として10層に分層された。第２層と第５層には白頭山火山灰（肉眼観察による）が粒状に混入している。第９・10層は掘り方層になる。

［遺物］遺物は出土しなかった。

［小結］火山灰が粒状に混入していることより、構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

第88号土坑（ＳＫ88）（図146）

［位置］調査区南側の南端にあたる、Ｆ－10グリッドに位置している。

［重複］第50号住居跡より新しい。

［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部150×135㎝、底面125×120㎝で、深さは25㎝である。

［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面は平坦である。

［堆積土］黒色土を主体として３層に分層された。第２層は粘土層で、廃棄されたと考えられる。

［遺物］遺物は出土しなかった。

［小結］重複、形態等より帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第89号土坑（ＳＫ89）（図146）

［位置］調査区南側の南端にあたる、Ｇ－６グリッドに位置している。

［重複］第３号方形周溝より古い。

［平面形・規模］重複の影響により全体形は不明であるが、円形を基調とするものと考えられる。重複の影響を受けていない軸長は開口部80㎝、底面60㎝である。深さは30㎝である。

［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面は平坦である。

［堆積土］黒色土を主体として２層に分層される。

［遺物］出土しなかった。

［小結］重複、形態等から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第92号土坑（ＳＫ92）（図146・151）

［位置］壕の外側、Ｇ－13グリッドに位置している。

［重複］第67号住居跡と重複し、これより古い。

［平面形・規模］平面形は長円形あるいは隅丸長方形と思われる。開口部の規模は短軸116×（197＋α）㎝である。底面の規模は短軸77×（160＋α）㎝である。深さは40㎝である。

［断面形・底面］短軸の断面形は箱型であるが、長軸はやや緩やかに立ち上がっている。底面は平坦である。
［堆積土］４層に分層されたが、全体にローム粒やロームブロックを含み、人為堆積の様相を呈している。
［遺物］土師器５点（34ｇ）、須恵器10点（甕、106ｇ）のほか、縄文時代前期の土器片３点（35ｇ）と半円状扁平打製石器１点が出土した。
［小結］重複関係から、平安時代の土坑と考えられる。（畠山）

第96号土坑（ＳＫ96）(図146・150・152）
［位置］調査区南側の東側にあたるＣ－28グリッドに位置している。
［重複］第98号土坑、第66号溝跡より新しい。
［平面形・規模］不正楕円形で、軸長は開口部201×217㎝、底面129×150㎝で、深さは56㎝である。
［断面形・底面］断面形は箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］黒色土を主体として７層に分層された。多量のロームと、上層に若干の焼土粒が混入している。遺物は中位から底面にかけて多く出土している。
［遺物］堆積土中から土師器片107点（３kg)、須恵器片16点（1.1kg)、縄文土器片１点（8.2ｇ)、砥石が１点出土した。図150-６は土師器の坏で、内面にミガキ調整、黒色処理が施されている。また、内外面にタール状の付着物が見られ、灯明具に再利用されたものと考えられる。図150-８は把手付き土器の把手部分である。
　図152-18は須恵器の壺で産地同定分析により五所川原産と判明した。16も須恵器の壺で頸部にヘラ記号が記されている。図152-15は須恵器の甕で火襷痕が見られる。接合はしなかったが、第19号住居跡より同一個体と思われるものが出土している。
［小結］重複、形態などから帰属時期は平安時代と考えられる。（工藤・小山）

第97号土坑（ＳＫ97）（図146）
［位置］調査区南側の南端にあたる、Ｅ－11グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部90×115㎝、底面75×85㎝、深さは15㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］褐色土の単層で、ロームブロックを多量に含んでいる。
［遺物］遺物は出土しなかった。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第98号土坑（ＳＫ98）（図146）
［位置］調査区南側の東側にあたるＣ－28・29グリッドに位置している。
［重複］第96号土坑より古く、第99号土坑、第66号溝跡より新しい。
［平面形・規模］重複により不明であるが、不整長方形になると思われる。軸長は開口部134×（178）㎝、底面100×（181）㎝で、深さは79㎝である。

［断面形・底面］基本的に断面形は箱形になるが、北壁の一部で若干オーバーハングしている。底面は北から南に向かって傾斜し、北側には82×86㎝、深さ39㎝の不整方形の掘り込みが認められる。
［堆積土］６層に分層された。黒色土を主体とし、ローム粒・ロームブロックが多量に混入している。
［遺物］堆積土中より土師器片４点（311ｇ）、ミニチュア土器の破片が１点出土した。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第99号土坑（ＳＫ99）（図146・150）
［位置］調査区南側の東側にあたるＣ・Ｄ－28グリッドに位置している。
［重複］第98号土坑より古く、第66・71号溝跡より新しい。
［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部(180)×202㎝、底面93×144㎝、深さは60㎝である。
［断面形・底面］断面形は深箱形で、底面はやや起伏がある。
［堆積土］黒色土を主体として11層に分層された。全層に多量のローム粒が混入している。
［遺物］土師器片68点（1.5kg）、須恵器片３点（55ｇ）、縄文土器２点（8.9ｇ）、鉄塊が１点出土した。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（工藤・小山）

第100号土坑（ＳＫ100）（図146）
［位置］調査区南側の東側にあたる、Ｄ－28・29グリッドに位置している。
［重複］第65号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。
［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部(49)×79㎝、底面24×31㎝、深さは46㎝である。
［断面形・底面］断面形は箱形で、底面は平坦である。
［堆積土］本遺構は第65号溝跡北側末端部を掘り上げた段階で確認したため、土層図は作成していない。調査時の観察所見では黒褐色土を主体とし、上層にロームおよびロームブロックが混入していた。
［遺物］出土しなかった。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（工藤・小山）

第101号土坑（ＳＫ101）（図146）
［位置］調査区南側の東側にあたるＥ・Ｆ－28・29グリッドに位置している。
［重複］第62・70号溝跡より新しい。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、軸長は開口部177×217㎝、底面108×150㎝、深さは53㎝である。
［断面形・底面］断面形は箱形で、底面には若干の起伏がみられる。
［堆積土］黒色土を主体として４層に分層された。上位にはローム粒や灰白色粘質土、下位にはロームブロックが混入している。
［遺物］堆積土中から土師器片が３点（47ｇ）、須恵器片が１点（28ｇ）、縄文土器が４点（36ｇ）出土した。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（工藤・小山）

第103号土坑（ＳＫ103）（図146）

［位置］調査区南側の東側にあたる、Ｅ・Ｆ－28グリッドに位置している。

［重複］第67号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

［平面形・規模］重複により全体形は不明であるが、円形を基調とするものと考えられる。開口部の軸長は、長軸は重複のため不明、短軸125㎝、底面の軸長は42×29㎝、深さは45㎝である。

［断面形・底面］断面形は深箱形で、底面はやや丸みを帯びる。

［堆積土］２層に分層された。第１層はローム層で、第２層は黒色土でローム、ロームブロックが混入している。

［遺物］出土しなかった。

［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（工藤・小山）

第104号土坑（ＳＫ104）（図147）

［位置］調査区南側の東端にあたる、Ａ－15グリッドに位置している。

［重複］第47号溝跡より古い。

［平面形・規模］平面形は不明である。残存している底面軸長は45㎝で、深さは最大40㎝である。

［断面形・底面］断面形は箱型になると思われ、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒色土を主体にして４層に分層された。第１層には白頭山火山灰（肉眼観察による）がブロック状に混入している。

［遺物］遺物は出土しなかった。

［小結］白頭山火山灰が二次堆積しており、構築年代は10世紀中葉以降と考えられる。（小山）

第105号土坑（ＳＫ105）（図147）

［位置］調査区南側の東端にあたる、Ａ－15グリッドに位置している。

［重複］第47号溝跡より古い。

［平面形・規模］残存部が少なく平面形は不明である。残存している底面軸長は70㎝で、深さは最大で、底面まで55㎝、掘り方底面まで65㎝である。

［断面形・底面］断面形は箱型になると思われ、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒褐色土を主体にして６層に分層された。第２層は焼土層で、廃棄されたものと考えられる。第６層は掘り方層になる。

［遺物］遺物は出土しなかった。

［小結］重複等から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第106号土坑（ＳＫ106）（図147）

［位置］調査区南側の東端、Ａ－15グリッドに位置している。第47号溝跡の底面から検出された。

［重複］第47号溝跡より古い。

［平面形・規模］平面形は円形で、底面軸長は60×70㎝で、深さは15㎝である。

［断面形・底面］断面形は箱型になると思われ、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒褐色土の単層で、ロームブロックが多量に含まれている。
［遺物］遺物は出土しなかった。
［小結］重複から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第107号土坑（ＳＫ107）（図147）
［位置］調査区南側の東端、Ａ－16グリッドに位置している。第47号溝跡の底面から検出された。
［重複］第47号溝跡より古い。
［平面形・規模］調査区外へ伸びるため全体形は不明であるが、円形を基調とするものと考えられる。残存している底面の軸長は90㎝で、深さは15㎝である。
［断面形・底面］残存部が少なく断面形は不明である。底面はほぼ平坦である。
［堆積土］黒褐色土の単層で、ロームブロックが多量に含まれている。
［遺物］遺物は出土しなかった。
［小結］重複から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第108号土坑（ＳＫ108）（図147）
［位置］調査区南側の東側にあたるＤ・Ｅ－26グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は円形で、径は開口部85～90㎝、底面34～37㎝で、深さは43㎝である。
［断面形・底面］断面形は箱形で、底面は平坦である。
［堆積土］黒色土の単層で、少量のローム粒・ロームブロックが混入している。
［遺物］堆積土中から土師器片４点（41ｇ）が出土した。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（工藤・小山）

第110号土坑（ＳＫ110）（図147）
［位置］調査区南側の東端で、ＪＲ防風林区の０Ｙ-18グリッドに位置している。
［重複］第54号溝跡より古い。
［平面形・規模］調査区外へ伸びており、全体形は不明であるが、円形を基調とするものと考えられる。残存している底面軸長は105㎝で、深さは60㎝である。
［断面形・底面］断面形は深箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］黒色土を主体にして２層に分層された。
［遺物］遺物は出土しなかった。
［小結］重複から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第112号土坑（ＳＫ112）（図147）
［位置］調査区南側の東側にあたる、Ｇ－12・13グリッドに位置している。
［重複］第62号、第67号住居跡より古い。
［平面形・規模］平面形は長方形で、軸長は開口部110×240㎝、底面80×180㎝で、深さは30㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面は起伏が見られる。

［堆積土］黒褐色土を主体にして３層に分層された。３層共にロームとの混合土であり人為堆積の状況を示している。
［遺物］堆積土中から土師器片が２点（23ｇ）出土した。
［小結］重複、形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第113号土坑（ＳＫ113）（図147）
［位置］調査区南側の東側にあたる、Ｄ・Ｅ－11・12グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は不整円形で、軸長は開口部150×160㎝、底面100×130㎝で、深さ30㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面は起伏が見られる。
［堆積土］黒色土を主体にして３層に分層された。第３層はロームとの混合土である。
［遺物］堆積土中から土師器片５点（49ｇ）、須恵器片１点（１ｇ）が出土した。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第114号土坑（ＳＫ114）（図147）
［位置］調査区南側の東側にあたる、Ｄ－25グリッドに位置している。
［重複］第67号溝跡より古く、第69号溝跡との新旧関係は不明である。
［平面形・規模］平面形は重複により不明であるが、不整長方形になると思われる。残存部の軸長は開口部(53)×(120)㎝、底面29×92㎝で、深さは86㎝である。
［断面形・底面］断面形は箱形になると思われ、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］第69号溝跡東側末部を掘り上げた段階で本遺構を確認したため、土層図は作成していないが、調査時の観察所見では黒色土を主体とし、少量のロームブロックが混入していた。
［遺物］遺物は出土しなかった。
［小結］重複、形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（工藤・小山）

第115号土坑（ＳＫ115）（図147）
［位置］調査区南側の東側にあたる、Ｄ・Ｅ－25グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部および底面の長軸は、トレンチで消失したため不明である。開口部の短軸66㎝、底面の短軸は46㎝、深さは17㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱形で、底面は平坦である。
［堆積土］黒色土を主体として２層に分層された。少量の粘土が混入している。
［遺物］堆積土中から土師器２点（125ｇ）が出土した。
［小結］形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（工藤・小山）

第116号土坑（ＳＫ116）（図147・150・151）
［位置］調査区南側の東端で、ＪＲ防風林区の、０Ｘ－17グリッドに位置している。
［重複］第78号溝跡より古い。
［平面形・規模］調査区外へ伸びるため、全体形は不明であるが、円形を基調とするものと考えられ

る。残存している底面軸長は(110㎝)で、深さは底面まで35㎝、掘り方底面まで50㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面は平坦である。
［堆積土］黒色土を主体にして３層に分層された。第３層は掘り方層になる。
［遺物］堆積土中から土師器片14点（327ｇ）、須恵器片９点（314ｇ）が出土した。
［小結］重複、形態等から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第117号土坑（ＳＫ117）（図147）
［位置］調査区南側の東側にあたる、Ｇ－14グリッドに位置している。
［重複］第63号溝跡より古く、第66号住居跡より新しい。
［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部110×135㎝、底面80×100㎝で、深さは55㎝である。
［断面形・底面］断面形は箱型である。底面はほぼ平坦で、底面から２個の小穴を検出した。また、北側の壁面が一部被熱している。
［堆積土］暗褐色土を主体にして６層に分層された。第２層は焼土層で、第６層は白色粘土層である。いずれも廃棄されたものと考えられる。
［遺物］堆積土中から土師器片42点（175ｇ）、縄文土器片（26.7ｇ）が出土した。
［小結］本遺構は壁面が被熱し、底面に小穴が掘り込まれており、他の土坑とは異なった特徴を有している。用途として、鍛冶に関連したものが想定されるが、それを裏付けるような遺物は出土していない。よって具体的な用途は不明である。重複関係、形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第118号土坑（ＳＫ118）（図147）
［位置］壕の外側、Ｄ－21グリッドに位置している。
［重複］道跡と重複している。新旧関係は明確にできなかったが、道跡よりも新しい可能性が高い。
［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部の軸長は100×133㎝、底面の軸長は82×1116㎝、深さ29㎝の浅い土坑である。
［断面形・底面］断面形は箱型で、底面は平坦である。
［堆積土］暗褐色土と黄褐色土の２層に分層されたが、ともにロームブロックを多量に含む層で、人為堆積である。
［遺物］遺物は出土しなかった。
［小結］土坑の形態や土層の堆積状況、遺構の立地から平安時代に構築されたものと判断される。
（畠山）

第119号土坑（ＳＫ119）（図147）
［位置］調査区南側の東端で、ＪＲ防風林区の、０Ｙ－15・16グリッドに位置している。第78号溝跡の底面より検出された。
［重複］第78号溝跡より古い。
［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部70×85㎝、底面50×55㎝で、深さは15㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面は平坦である。

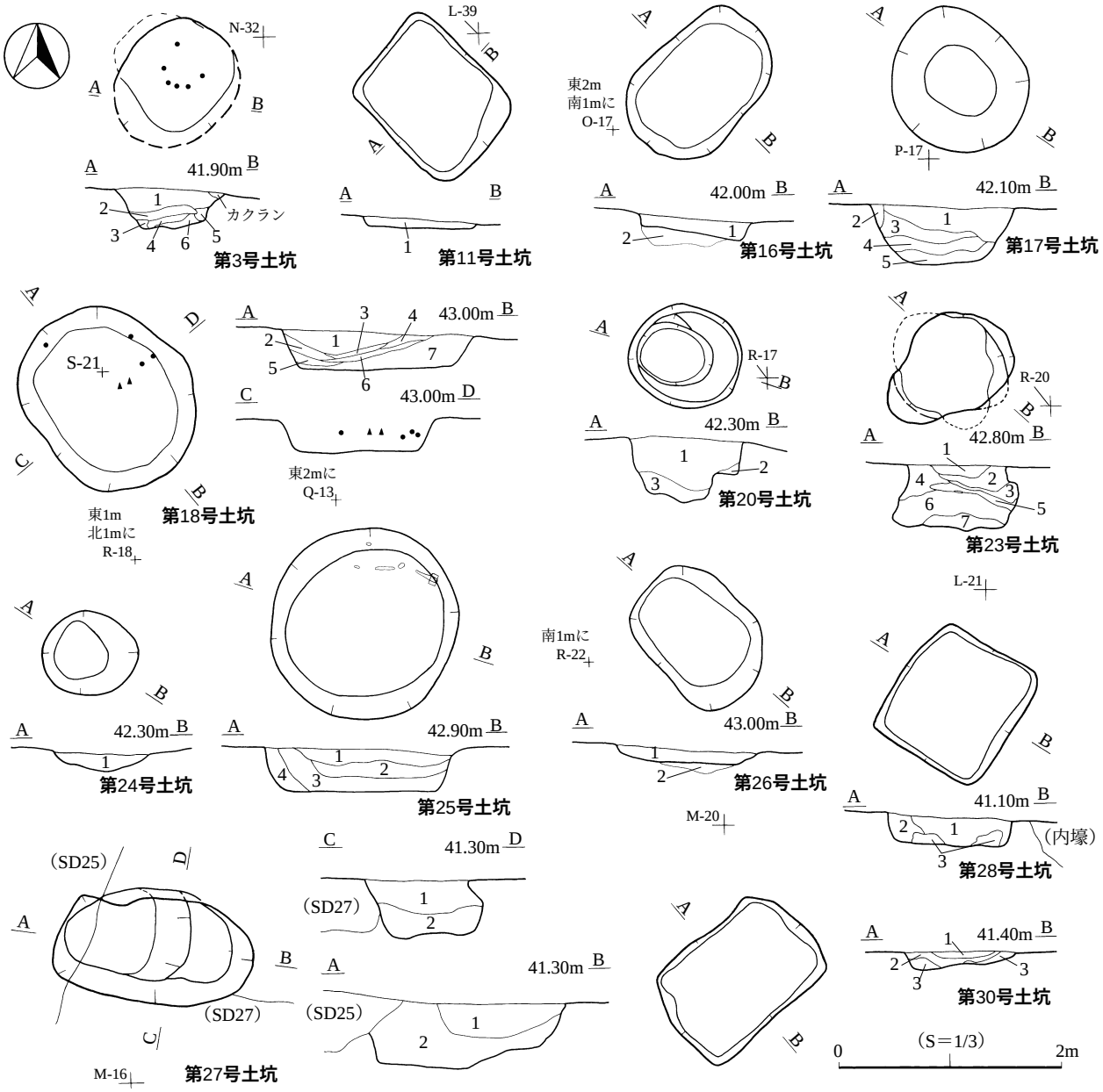
［堆積土］黒色土を主体にして２層に分層された。第２層はロームとの混合土層である。
［遺物］遺物は出土しなかった。
［小結］重複、形態等から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第120号土坑（ＳＫ120）（図147）
［位置］調査区南側の東側にあたるＢ－24グリッドに位置している。
［重複］第36号溝跡より古い。
［平面形・規模］重複により平面形は不明である。開口部の軸長は、長軸（191）㎝、短軸は重複により不明、底面の軸長は19×156㎝、深さは77㎝である。
［断面形・底面］断面形は重複により不明である。底面は起伏が見られる。
［堆積土］８層に分層された。黒色土を主体とし、堆積土中位には焼土ブロックが混入している。
［遺物］遺物は出土しなかった。
［小結］重複、形態等から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第121号土坑（ＳＫ121）（図147）
［位置］調査区南側の東側にあたる、Ａ・Ｂ－24グリッドに位置している。
［重複］第36・37号溝跡より古い。
［平面形・規模］重複により大部分が削平されているが、方形ないし長方形を基調とするものと思われる。重複の影響を受けていない軸長は、開口部150㎝、底面130㎝で、深さは30㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱形で、底面は平坦であるが、東側はテラス状に５㎝程度高くなっている。
［堆積土］黒色土を主体として３層に分層された。各層にローム粒が多量に混入している。
［遺物］堆積土中から縄文土器が７点（128ｇ）出土した。
［小結］重複、形態から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第124号土坑（ＳＫ124）（図148）
［位置］調査区南側の壕の外側にあたる、Ｍ－10グリッドに位置している。
［重複］第15号住居跡より古い。
［平面形・規模］重複により平面形は不明であるが、円形を基調とするものと考えられる。計測できた軸長は、開口部1.35m、底面1.00mで、深さは25㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型になると思われ、底面は、重複によりほとんど検出されなかった。
［遺物］出土しなかった。
［小結］重複、形態等から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第125号土坑（ＳＫ125）（図148）
［位置］調査区南側の東端で、ＪＲ防風林区の、０Ｙ－18グリッドに位置している。
［重複］第51号溝状土坑より新しい。
［平面形・規模］調査区外へ伸びており全体形は不明であるが、方形を基調とするものと考えられる。



第3号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒少量
第２層　暗褐色土　10YR3/4　焼土粒・ローム粒少量
第３層　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒・焼土粒微量
第４層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒少量
第５層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒少量
第６層　暗褐色土　10YR4/4　L.B多量

第11号土坑　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒少量

第16号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム微量
第２層　黒褐色土　10YR2/3　ロームとの混合土、掘り方

第17号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒微量
第２層　黄褐色土　10YR5/6　ローム粒微量
第３層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒粉状に混入
第４層　褐 色 土　10YR4/6　L.B多量、層上部に炭化物少量
第５層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒少量

第18号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒・炭化物・焼土微量
第２層　黄褐色土　10YR5/6　炭化物微量
第３層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒微量、遺物を含む層
第４層　黒 色 土　10YR2/1　炭化物、焼土粒微量
第５層　暗褐色土　10YR3/4　L.B少量、炭化物微量
第６層　黒 色 土　10YR2/1　炭化物少量、L.B微量
第７層　褐 色 土　10YR4/4　ローム粒微量

第20号土坑　堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/3　L.B多量、炭化物少量
第２層　暗褐色土　10YR3/4　L.Bが層の下部に集中、崩落土
第３層　暗褐色土　10YR3/3　L.B多量

第23号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　7.5YR3/2　ローム粒少量
第２層　黄褐色土　10YR5/8　Ⅴ層起源の浮石主体
第３層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒微量
第４層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒少量
第５層　黒褐色土　7.5YR3/2　焼土粒・塊少量
第６層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量
第７層　黄褐色土　10YR5/6　Ⅴ層起源の浮石主体

第24号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR3/2　L.B少量

第25号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒少量
第２層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒少量
第３層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒多量、B-Tm塊状に混入
第４層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒少量

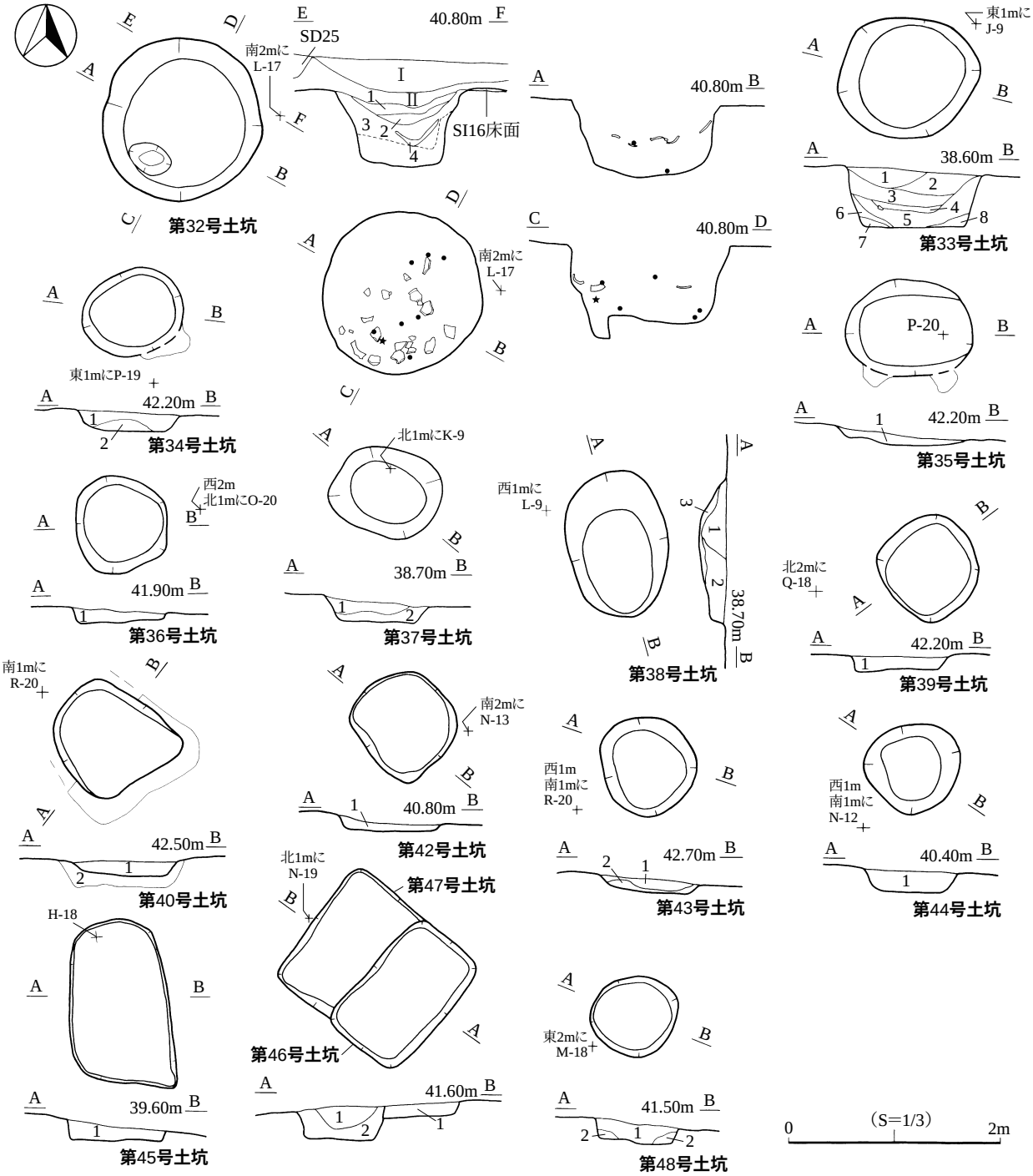
第26号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　L.B少量
第２層　明黄褐色土　10YR6/8　ロームとの混合土、掘り方

第27号土坑　堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/3　L.B微量
第２層　暗褐色土　10YR3/3　L.B多量、B-Tm少量

第28号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　L.B少量
第２層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量
第３層　黒褐色土　10YR2/3　L.B多量

第30号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量、硬い
第２層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量
第３層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒多量

図141　平安時代の土坑（1）



第32号土坑　堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒少量、火山灰少量
第２層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒少量、脆い
第３層　褐　色　土　10YR4/4　ローム粒少量、軟らかい
第４層　明褐色土　7.5YR5/6　ローム質、粘性強い

第33号土坑　堆積土
第１層　褐　色　土　10YR4/4　L.B少量、B-Tm塊微量
第２層　黒 褐 色 土　10YR3/2　B-Tm塊・ローム粒微量
第３層　黒　色　土　10YR2/1　B-Tm塊・L.B少量
第４層　にぶい黄橙色土　10YR7/3　廃棄粘土の層
第５層　黒 褐 色 土　10YR3/2　B-Tm塊多量、ローム粒微量
第６層　明黄褐色土　10YR6/6　壁の崩落土
第７層　黒　色　土　10YR1.7/1　ローム粒微量
第８層　黒　色　土　10YR2/1　ローム粒床面近くに多量

第34号土坑　堆積土
第１層　黒 褐 色 土　10YR2/2　ローム粒多量、L.B少量
第２層　明黄褐色土　10YR6/8　ローム主体の層

第35号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　L.B少量、ローム粒微量

第36号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　L.B少量、炭化物微量

第37号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒多量、L.B少量
第２層　黄褐色土　10YR5/6　ローム主体の層

第38号土坑　堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒多量、L.B少量
第２層　暗褐色土　10YR3/3　L.B・ローム粒多量
第３層　にぶい黄褐色土　10YR4/3　L.B・ローム粒多量

第39号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　L.B、ローム粒多量

第40号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　L.B、ローム粒多量
第２層　黄褐色土　10YR5/6　ローム主体の層、掘り方

第42号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量、壁際にL.B多量

第43号土坑　堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/3　L.B壁際に多量、ローム粒少量
第２層　黄褐色土　10YR5/6　ローム主体

第44号土坑　堆積土
第１層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒少量

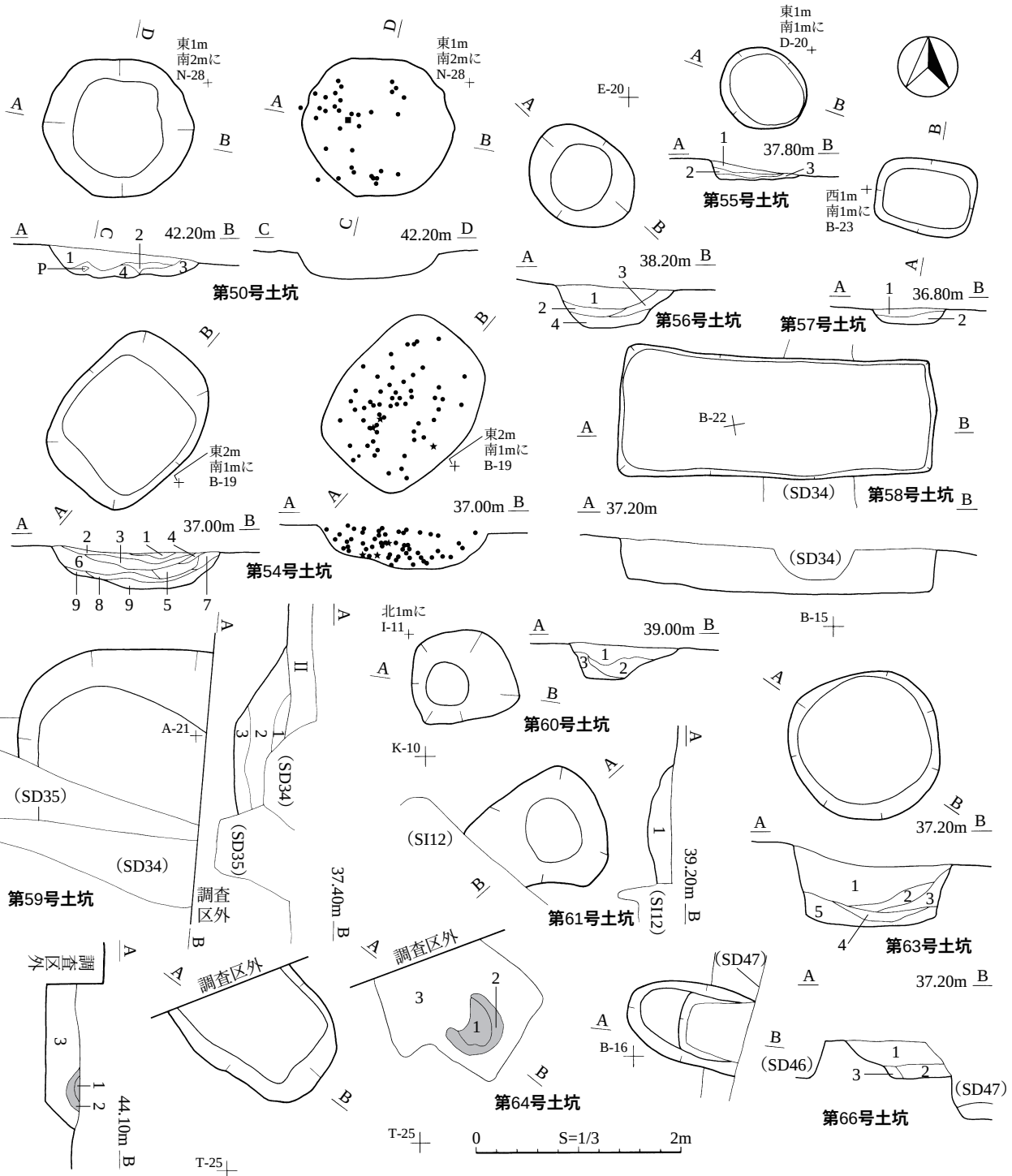
第45号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒・焼土粒微量

第46号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒・B-Tm粒微量
第２層　黄褐色土　10YR5/6　ローム粒・L.B多量

第47号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒・L.B多量

第48号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量
第２層　黄褐色土　10YR5/6　ローム粒・L.B多量

図142　平安時代の土坑（2）



第50号土坑　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・B-tm塊少量
第２層	黒褐色土	10YR2/2	硬い
第３層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量、B-tm微量
第４層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒微量

第54号土坑　堆積土

第１層	褐 色 土	10YR4/4	廃棄焼土の層
第２層	黒 色 土	10YR1.7/1	焼土粒微量
第３層	明褐色土	7.5YR5/8	廃棄焼土の層
第４層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒・焼土粒微量
第５層	明褐色土	7.5YR5/8	廃棄焼土の層
第６層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒・焼土粒微量
第７層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒、焼土粒・塊微量
第８層	明褐色土	7.5YR5/8	廃棄焼土の層
第９層	黒 色 土	10YR2/1	焼土塊微量

第55号土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第２層	黒 色 土	10YR2/1	灰・炭化物の廃棄層
第３層	黒 色 土	10YR1.7/1	焼土粒微量、底面直上から廃棄焼土塊

第56号土坑　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量、B-Tm粒微量
第２層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量
第３層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量、炭化物微量
第４層	黒褐色土	10YR2/3	L.B・ローム粒少量、炭化物微量

第57号土坑　堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量
第２層	黒 色 土	10YR2/1	L.B多量

第58号土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR2/1	L.B大量

第59号土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第２層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒・L.B微量
第３層	明黄褐色土	10YR6/8	ロームとの混合土、掘り方

第60号土坑　堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量
第２層	暗褐色土	10YR3/3	L.B・ローム粒少量
第３層	褐 色 土	10YR4/6	ローム層、崩落土の可能性あり

第61号土坑　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/2	L.B・ローム粒多量、焼土塊微量

第63号土坑　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量、B-Tm粒微量
第２層	黒 色 土	10YR2/1	廃棄炭化物・焼土層、焼土塊少量
第３層	黒 色 土	10YR2/1	廃棄炭化物層、B-Tm塊微量
第４層	黒 色 土	10YR1.7/1	廃棄炭化物層、ローム粒・焼土粒少量
第５層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量

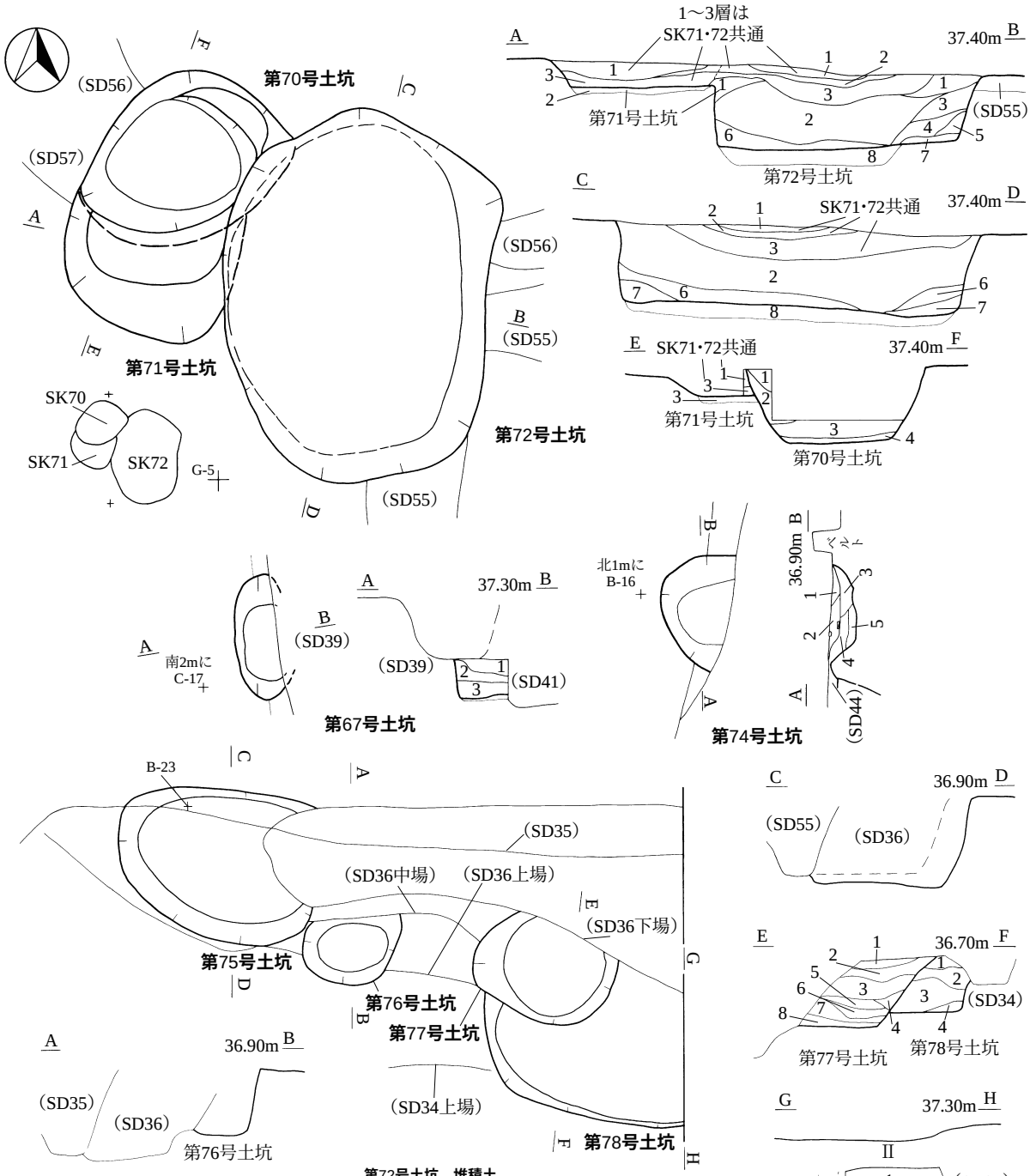
第64号土坑　堆積土

第１層	明赤褐色土	5YR5/8	焼土
第２層	黒褐色土	10YR2/2	焼土粒・ローム粒少量
第３層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒多量

第66号土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR1.7/1	B-Tm塊状に混入
第２層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第３層	黒 色 土	10YR2/1	L.B少量

図143　平安時代の土坑（3）



第67号土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR2/1	B-Tm粒微量
第２層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒微量
第３層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒少量
第４層	褐 色 土	10YR4/6	ロームとの混合土、掘り方

第70号土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第２層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒･L.B少量
第３層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒･L.B多量
第４層	黒褐色土	10YR2/3	焼土塊･ローム粒少量、60×20㎝の廃棄焼土検出

第71･72号土坑　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒･L.B微量
第２層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒多量
第３層	黒 色 土	10YR2/1	L.B･ローム粒少量

第71号土坑　堆積土

第１層	黄褐色土	10YR5/6	L.B(大)混入、壁土が第72号土坑堆積土側に崩落したもの
第２層	褐 色 土	10YR4/6	黄色ロームとの混合土、掘り方

第72号土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第２層	黒 色 土	10YR1.7/1	L.B･ローム粒微量
第３層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量
第４層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量、L.B(30×120㎜)混入
第５層	黒褐色土	10YR2/2	L.B多量
第６層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第７層	黄褐色土	10YR5/6	ローム主体の層
第８層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ロームとの混合土、掘り方

第74号土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第２層	黄褐色土	10YR5/6	ロームとの混合土
第３層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量、L.B微量
第４層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒･L.B微量
第５層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒多量、L.B微量

第77号土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR2/1	L.B少量
第２層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第３層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒･L.B多量
第４層	黒 色 土	10YR2/1	L.B(大)
第５層	明黄褐色土	10YR6/6	ロームとの混合土
第６層	褐 色 土	10YR4/6	ロームとの混合土
第７層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒･L.B多量
第８層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量

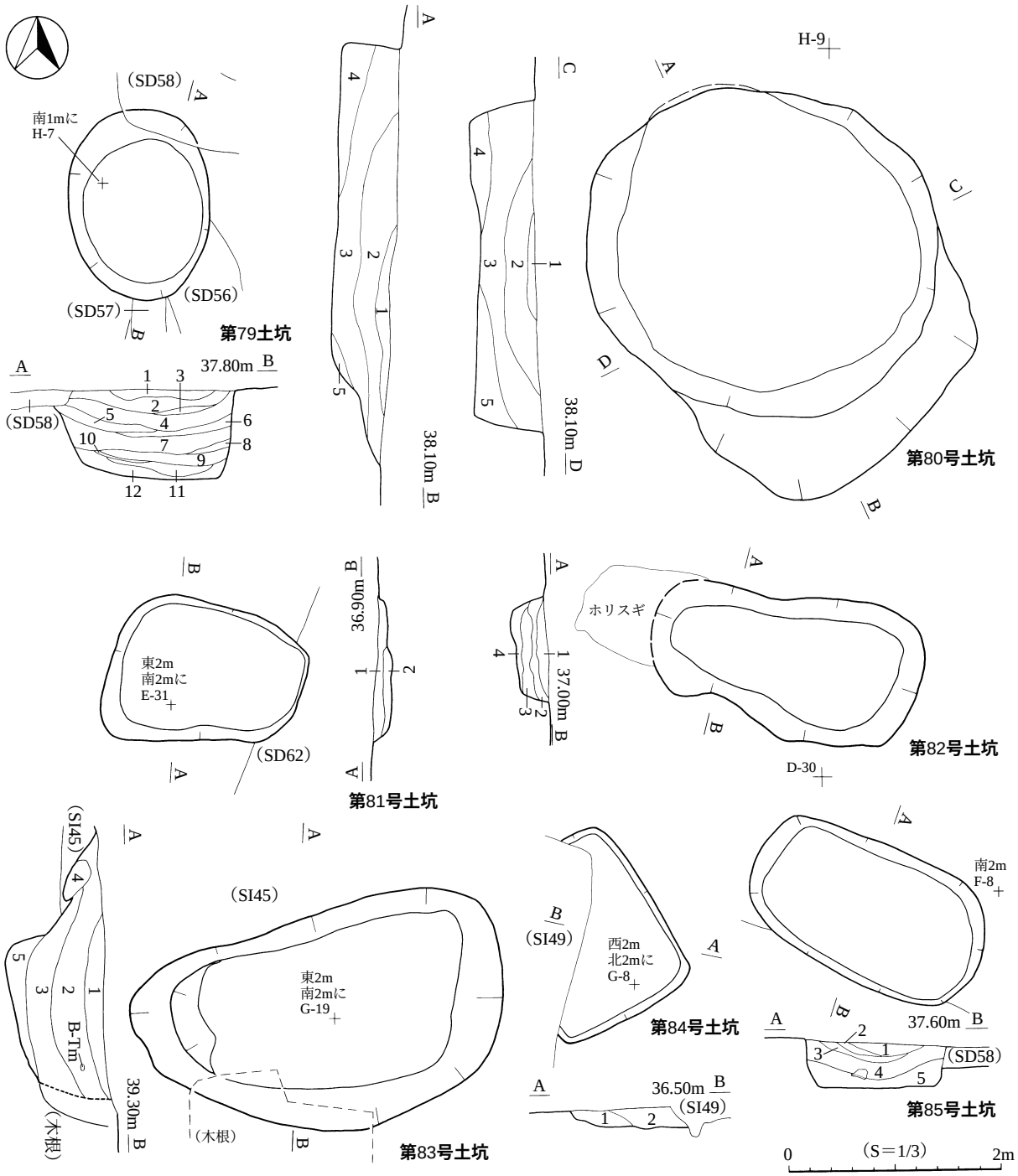
第78号土坑　E-F　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第２層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム崩落土
第３層	黒 色 土	10YR2/1	L.B少量、ローム粒微量
第４層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量

第78号土坑　G-H　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第２層	褐 色 土	10YR4/4	ロームとの混合土
第３層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第４層	黄褐色土	10YR5/8	壁の崩落土
第５層	黄褐色土	10YR5/6	ロームとの混合土

図144　平安時代の土坑（4）



第79号土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒・B-Tm粒微量
第2層	黒褐色土	10YR2/2	L.B少量
第3層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第4層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒・B-Tm粒微量
第5層	暗褐色土	10YR3/4	L.BがSD-58との重複部分に多量
第6層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第7層	暗褐色土	10YR3/3	L.B壁際に多量、ローム粒少量、B-Tm粒微量
第8層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム層
第9層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第10層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム層
第11層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第12層	黄橙色土	10YR7/8	ロームとの混合土

第80号土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	L.B・ローム粒多量
第2層	明黄褐色土	10YR6/8	L.B・粘土塊多量、黒色土塊少量
第3層	明黄褐色土	10YR7/6	L.B・粘土塊多量、黒色土塊少量
第4層	にぶい黄褐色土	10YR5/3	L.B多量、粘土塊微量
第5層	明黄褐色土	10YR6/8	L.B・粘土塊少量

第81号土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量、硬い
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒・塊を多量、硬い

第82号土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR1.7/1	B-tm塊状に混入、ローム粒少量
第2層	黒 色 土	10YR2/1	粉状のB-tm、ローム粒微量
第3層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒多量
第4層	褐 色 土	10YR4/2	ローム粒・塊少量

第83号土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・塊少量、硬い
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量、B-tmの小塊混入、上部が特に硬い
第3層	黒褐色土	10YR2/3	L.B少量、B-tm塊混入
第4層	黄褐色土	10YR5/8	シラス質
第5層	黒褐色土	10YR2/2	L.Bと黒褐色土との混合土

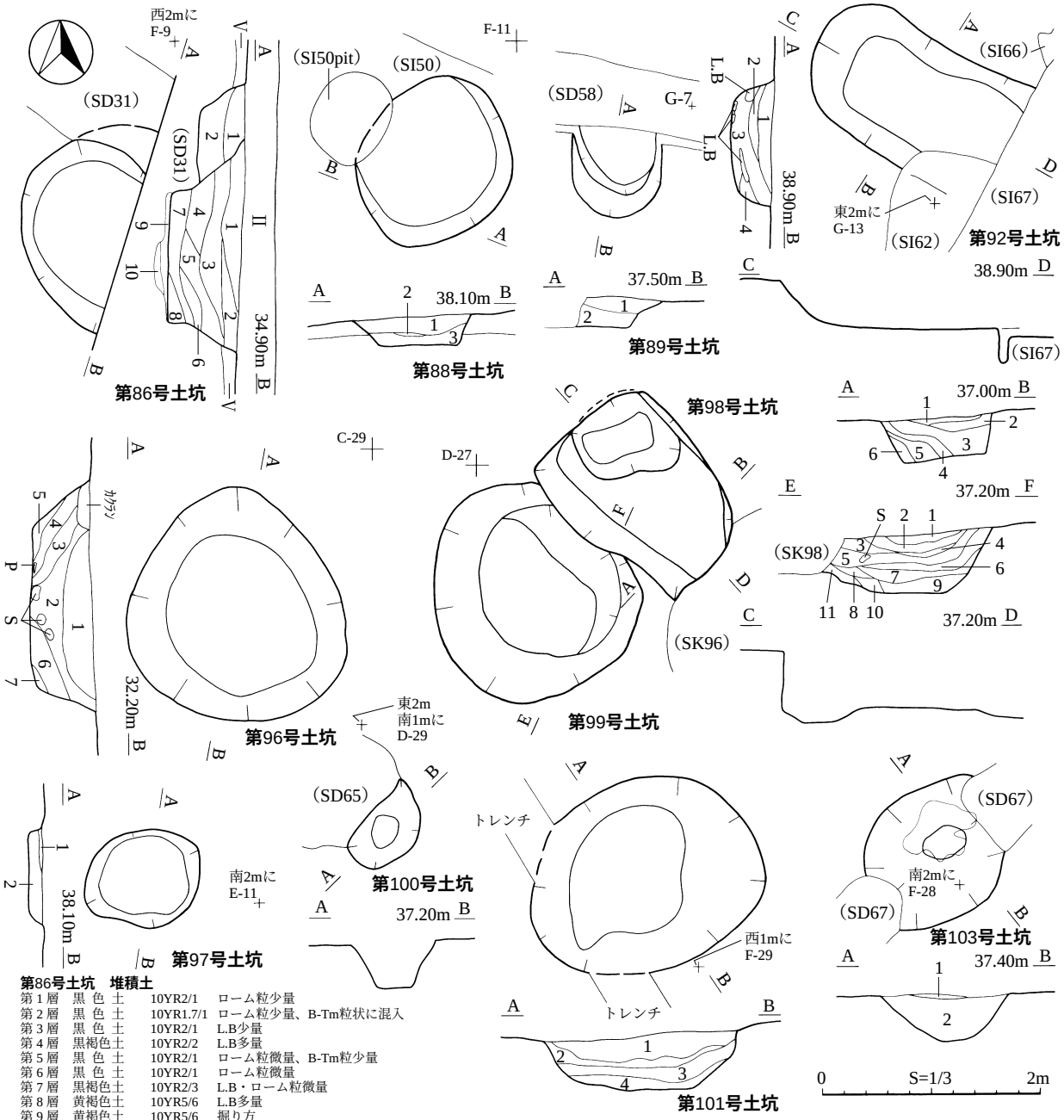
第84号土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量
第2層	褐 色 土	10YR4/6	L.B・ローム粒多量

第85号土坑　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒少量
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量、L.B（大）混入
第3層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第4層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量、L.B微量
第5層	黒褐色土	10YR3/2	L.B・ローム粒少量

図145　平安時代の土坑（5）



第86号土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量
第２層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒少量、B-Tm粒状に混入
第３層	黒 色 土	10YR2/1	L.B少量
第４層	黒褐色土	10YR2/2	L.B多量
第５層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量、B-Tm粒少量
第６層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第７層	黒褐色土	10YR2/3	L.B・ローム粒微量
第８層	黄褐色土	10YR5/6	L.B多量
第９層	黄褐色土	10YR5/6	掘り方
第10層	明黄褐色土	10YR7/6	掘り方

第88号土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第２層	黒 色 土	10YR2/1	粘土ブロック(大)
第３層	黒褐色土	10YR2/2	L.B、ローム粒多量

第89号土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第２層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量、L.B微量

第92号土坑　堆積土

第１層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・塊少量
第２層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・塊少量
第３層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量
第４層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒・塊微量

第96号土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒・ローム・赤褐色焼土(5YR4/8)少量、炭化物微量
第２層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒少量、焼土粒・炭化物微量
第３層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒・炭化物微量
第４層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第５層	黒 色 土	10YR1.7/1	L.B少量
第６層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量、炭化物微量
第７層	黒 色 土	10YR2/1	L.B少量

第97号土坑　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量
第２層	褐 色 土	10YR4/4	L.B・ローム粒多量

第98号土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒・炭化物粒微量
第２層	黒 色 土	10YR1.7/1	L.B多量、炭化物粒微量
第３層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒・炭化物粒微量
第４層	黒褐色土	10YR3/1	暗褐色土（10YR3/4）多量
第５層	黒 色 土	10YR2/1	ローム微量
第６層	黒褐色土	10YR3/1	ローム多量、炭化物微量

第99号土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR2/1	ローム・焼土粒微量
第２層	黒 色 土	10YR1.7/1	L.B少量、焼土粒微量
第３層	黒 色 土	10YR2/1	ローム多量、焼土粒・炭化物微量
第４層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第５層	黒 色 土	10YR2/1	灰黄褐色粘質土(10YR4/2)多量、ローム、焼土粒微量
第６層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒・ローム微量
第７層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	層全体にローム多量
第８層	黒褐色土	10YR2/2	ローム少量
第９層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒・焼土粒微量
第10層	黒 色 土	10YR2/1	層全体にローム多量
第11層	黒褐色土	10YR2/2	層全体にローム多量

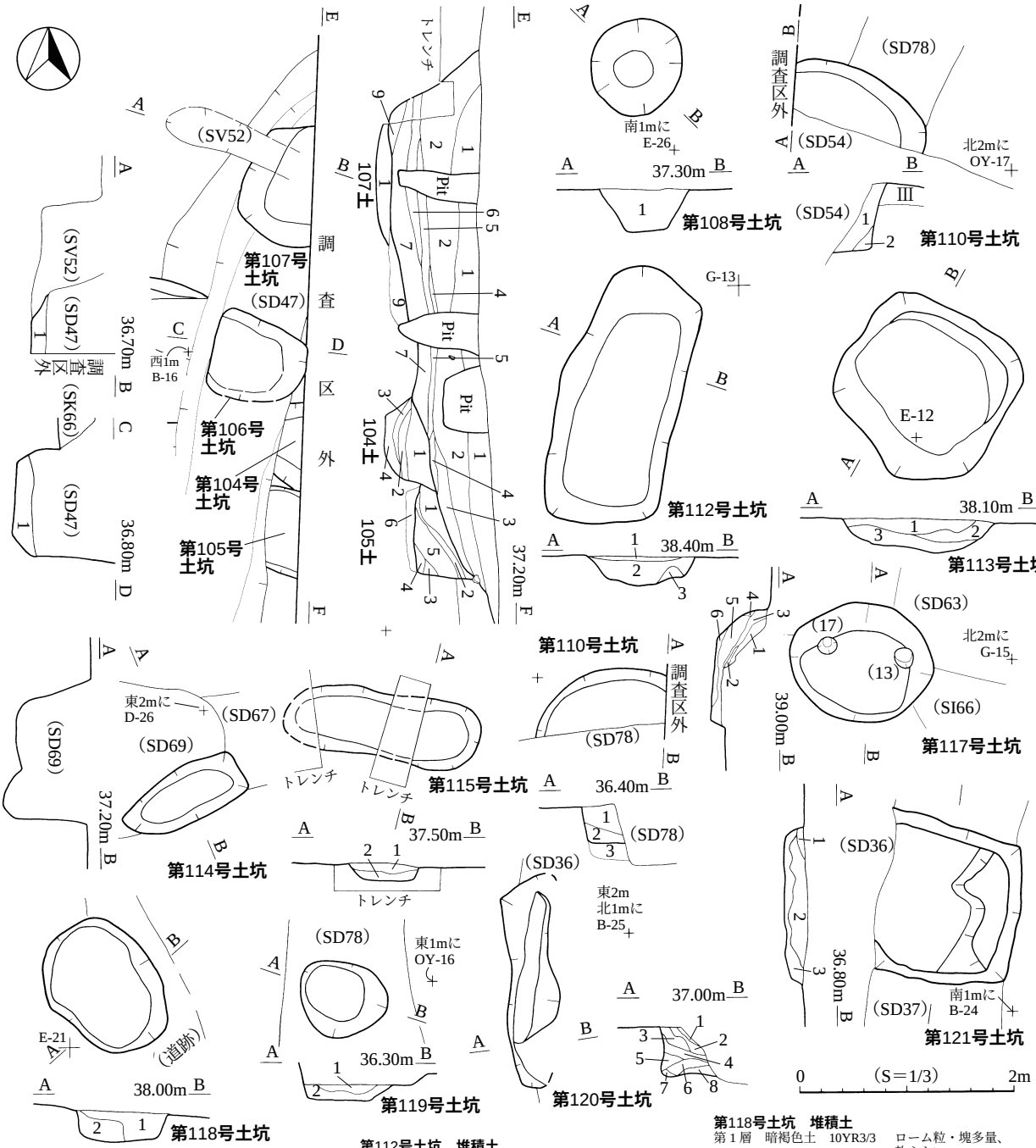
第101号土坑　堆積土

第１層	黒 色 土	10YR1.7/1	灰白色粘質土（10YR8/2）・ローム粒少量
第２層	黒 色 土	10YR1.7/1	φ5㎝大の白色粘質土塊(10YR8/2)多量、ローム粒少量
第３層	黒 色 土	10YR1.7/1	
第４層	黒 色 土	10YR1.7/1	L.B多量

第103号土坑　堆積土

第１層	灰黄褐色土	10YR4/2	灰？　SD-67にも同質の堆積土有
第２層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒・L.B少量

図146　平安時代の土坑（6）



第104号土坑　堆積土

第1層	黒色土	10YR1.7/1	B-Tm塊状に混入
第2層	黒色土	10YR2/1	ローム粒微量
第3層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量
第4層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量

第105号土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量、L.B微量
第2層	橙色土	10YR5/8	廃棄焼土層
第3層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第4層	明黄褐色土	10YR6/6	崩落土
第5層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量
第6層	明黄褐色土	10YR6/6	ロームとの混合土、掘り方

第106号土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR3/1	L.B多量

第107号土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR3/2	粘質土・L.B多量

第108号土坑　堆積土

第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒・L.B少量

第110号土坑　堆積土

第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒少量
第2層	褐色土	10YR4/4	L.B多量

第112号土坑　堆積土

第1層	褐色土	10YR4/4	ロームとの混合土
第2層	黒褐色土	10YR2/3	ロームとの混合土
第3層	黄褐色土	10YR5/6	ローム層

第113号土坑　堆積土

第1層	黒色土	10YR2/1	L.B多量、ローム粒少量
第2層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒微量
第3層	黄褐色土	10YR5/6	ロームとの混合土

第115号土坑　堆積土

第1層	黒色土	10YR2/1	にぶい黄褐色粘質土（10YR5/4）多量
第2層	黒色土	10YR1.7/1	にぶい黄褐色粘質土（10YR5/4）微量

第116号土坑　堆積土

第1層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第2層	黒色土	10YR2/1	ローム粒微量
第3層	黒褐色土	10YR2/3	ロームとの混合土、掘り方

第117号土坑　堆積土

第1層	黄褐色土	10YR5/8	ローム層
第2層	橙色土	10YR5/8	焼土層
第3層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・焼土粒微量
第4層	黄褐色土	10YR6/8	ローム層
第5層	暗褐色土	10YR3/4	ロームとの混合土
第6層	黒色土	10YR1.7/1	白色粘土が薄く層状に、ローム粒微量

第118号土坑　堆積土

第1層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・塊多量、軟らかい
第2層	黄褐色土	10YR5/6	ローム粒・塊多量、軟らかく締まりない

第119号土坑　堆積土

第1層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第2層	褐色土	10YR4/4	ロームとの混合土

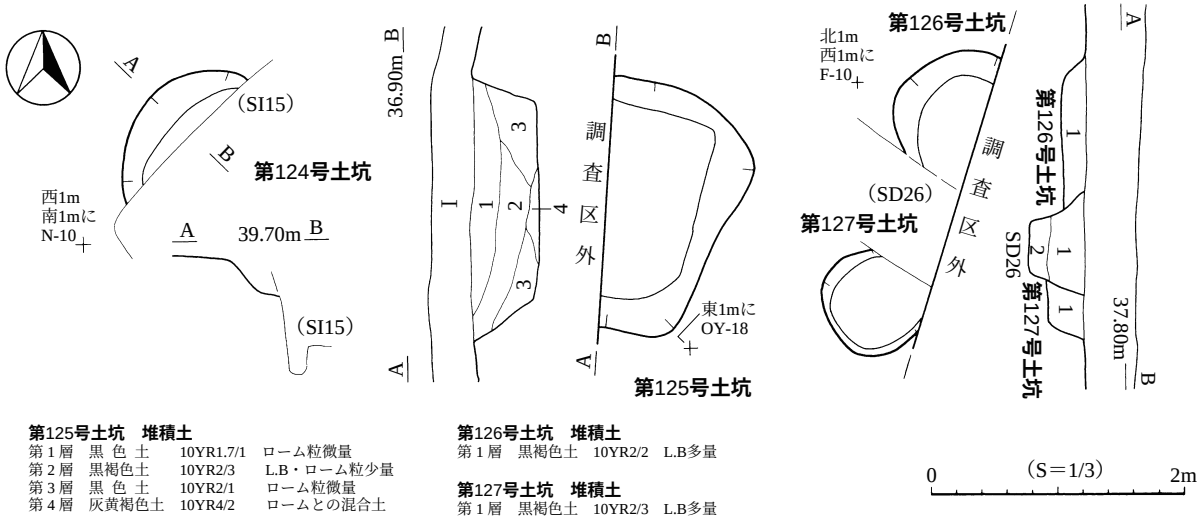
第120号土坑　堆積土

第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒・焼土粒・炭化物粒微量
第2層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒・焼土粒微量
第3層	黒色土	10YR2/1	焼土粒少量、炭化物粒微量
第4層	黒色土	10YR2/1	暗褐色焼土（7.5YR3/4）多量、ローム粒少量、炭化物粒微量
第5層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒・焼土粒微量
第6層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第7層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第8層	黒色土	10YR1.7/1	ローム多量

第121号土坑　堆積土

第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒微量
第2層	黒色土	10YR2/1	ローム多量、ローム粒少量
第3層	黒色土	10YR2/1	層全体にローム多量

図147　平安時代の土坑（7）



第125号土坑　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム粒微量
第２層　黒褐色土　10YR2/3　L.B・ローム粒少量
第３層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第４層　灰黄褐色土　10YR4/2　ロームとの混合土

第126号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　L.B多量

第127号土坑　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　L.B多量

図148　平安時代の土坑（8）

残存している軸長は開口部200㎝、底面155㎝で、深さは60㎝である。

［断面形・底面］断面形は箱型で、底面は平坦である。

［堆積土］黒色土を主体にして４層に分層された。第４層はロームとの混合土層である。

［遺物］遺物は出土しなかった。

［小結］重複、形態等から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第126号土坑（ＳＫ126）（図148）

［位置］調査区南側の南端にあたる、Ｅ－９グリッドの調査区際に位置している。

［重複］第26号溝跡より古い。

［平面形・規模］調査区外へ伸びており、全体形は不明であるが、円形を基調としたものと考えられる。残存している軸長は、開口部（70㎝）、底面(50㎝)である。深さは20㎝である。

［断面形・底面］断面形は浅箱型になると思われ、底面は平坦である。

［堆積土］黒褐色土の単層で、ロームブロックが多量に含まれている。

［遺物］出土しなかった。

［小結］重複、形態等から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

第127号土坑（ＳＫ127）（図148）

［位置］調査区南側の南端にあたる、Ｅ－９グリッドの調査区際に位置している。

［重複］第26号溝跡より古い。

［平面形・規模］調査区外へ伸びており、全体形は不明であるが、円形を基調としたものと考えられる。重複等の影響を受けていない軸長は、開口部80㎝、底面70㎝で、深さは25㎝である。

［断面形・底面］断面形は浅箱型になると思われ、底面は平坦である。

［堆積土］黒褐色土の単層で、ロームブロックが多量に含まれている。

［遺物］出土しなかった。

［小結］重複、形態等から帰属時期は平安時代と考えられる。（小山）

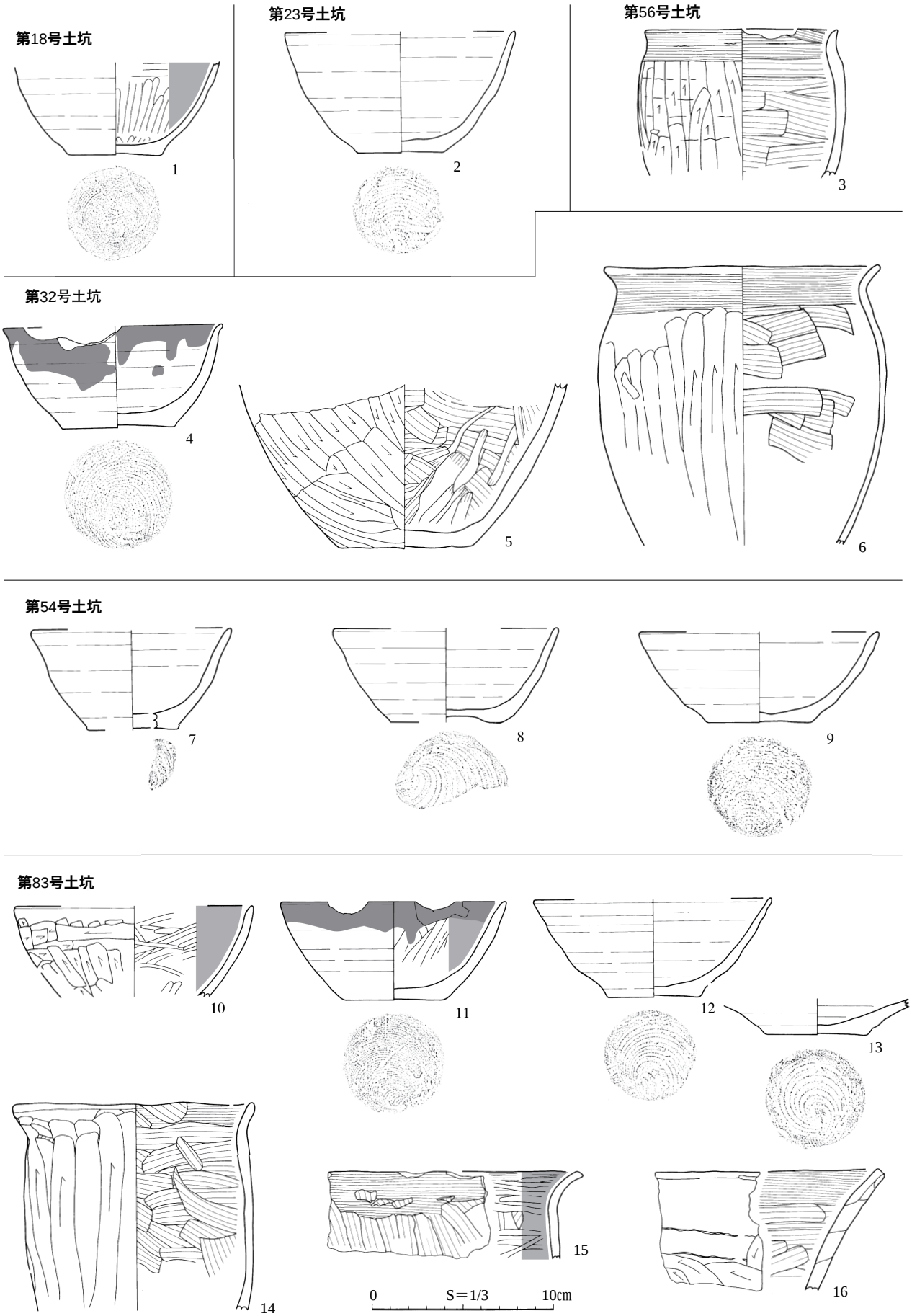


図149　平安時代の土坑出土土師器（1）

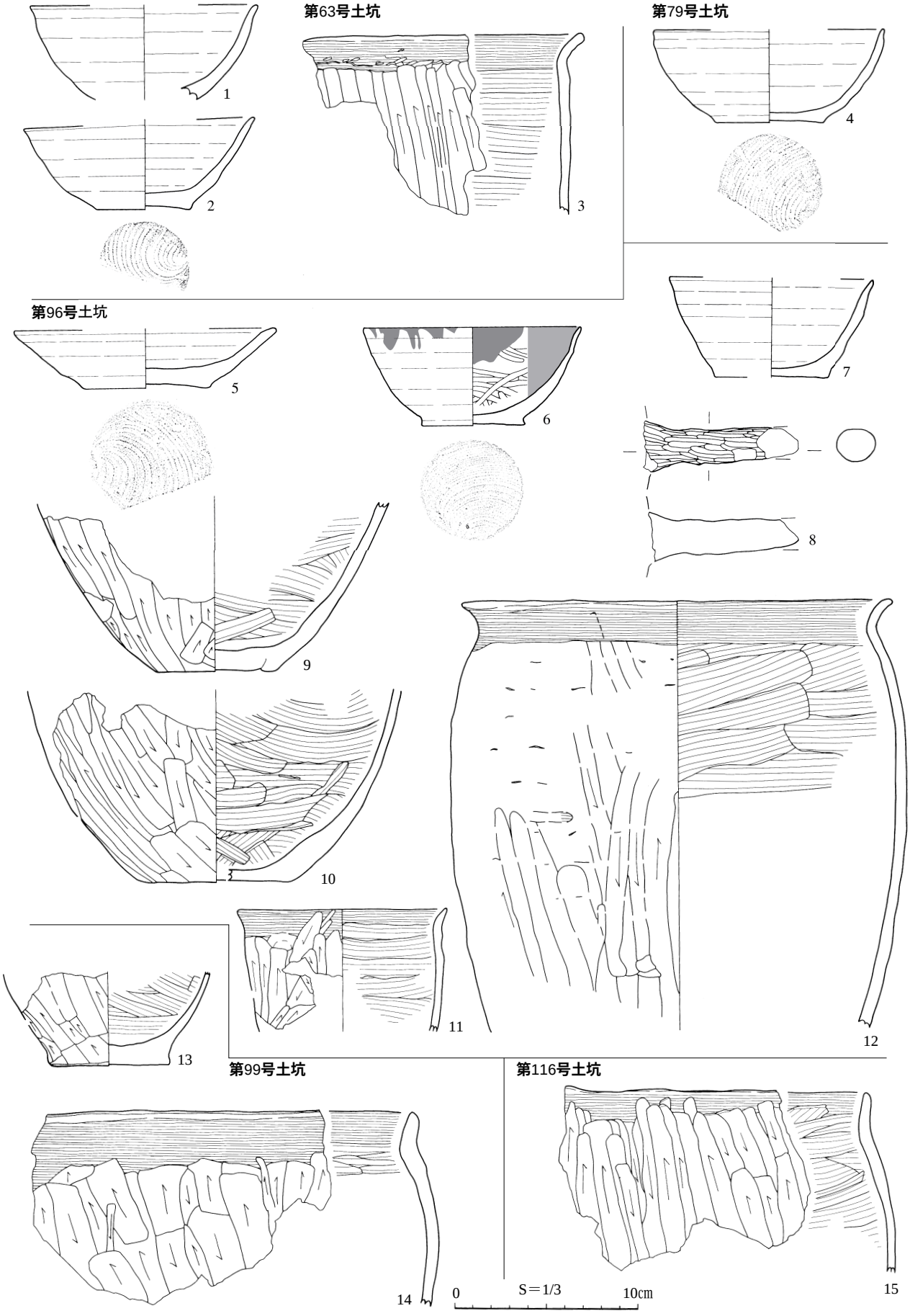


図150　平安時代の土坑出土土師器（2）

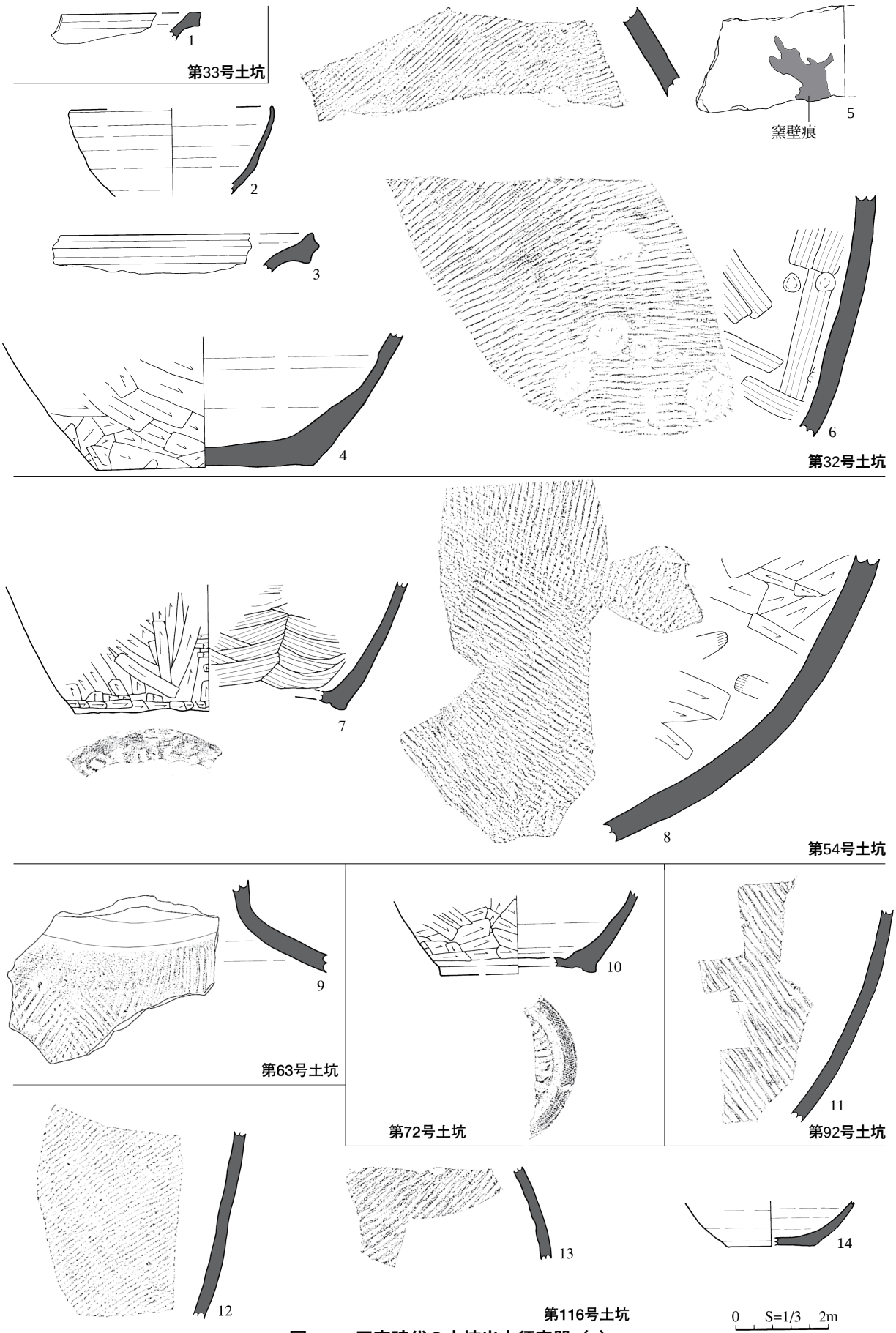
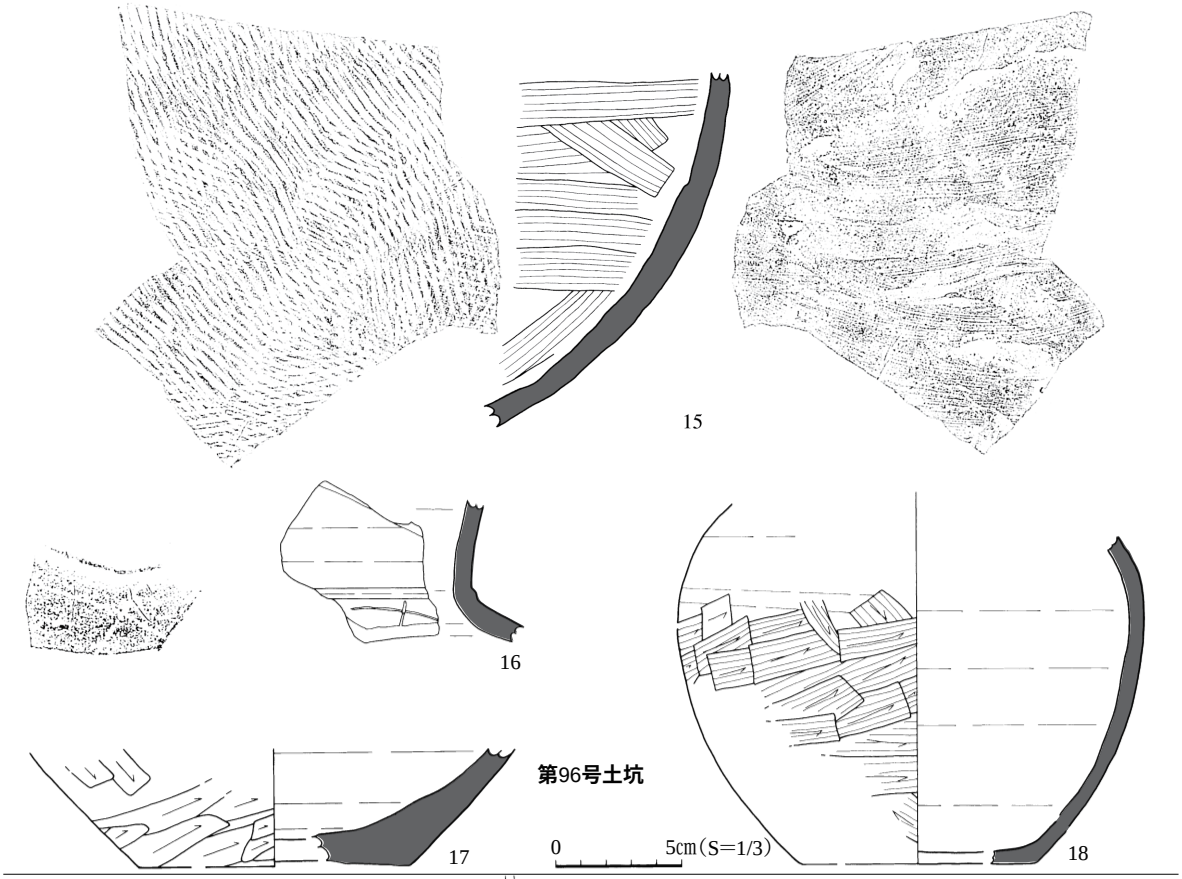


図151　平安時代の土坑出土須恵器（1）



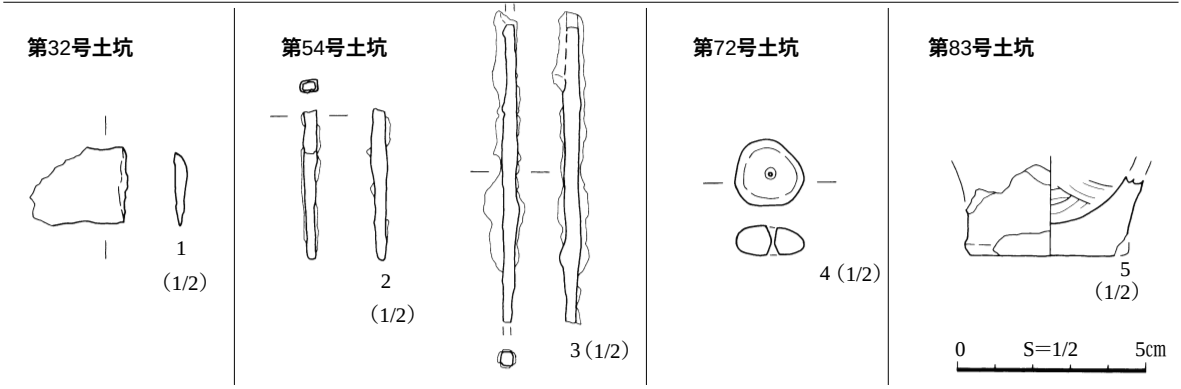


図152　平安時代の土坑出土須恵器（2）、鉄器、石製品等

第８節　円形・方形周溝（図153）

第１号円形周溝（ＳＤ12）

［位置］調査区の北側の低地、Ｉ・Ｊ－74・75グリッドに位置している。撹乱のため、東側で不明な部分がある。

［重複］なし。

［平面形・規模］幅32～50㎝、深さ27㎝の溝が円形に巡っている。溝の内径は東西が3.66m、南北が3.85mである。溝の北側は開口している。撹乱によってその規模は不明であるが、現状では86㎝である。溝の内側には、何も検出されなかった。

［堆積土］３層に分層された。ローム粒を含んだ黒褐色土の堆積が見られた。

［出土遺物］なし。（畠山）

第２号方形周溝（ＳＤ52）

［位置］調査区北端の高屋敷館遺跡南西地区との境界付近のＫ～Ｍ－80・81グリッドに位置している。南側には第５号掘立柱建物跡や第１号井戸跡、第65号土坑が隣接している。

［重複］なし。

［平面形・規模］幅約50㎝、深さ16㎝の溝が長方形に巡っている。溝の内径は、短軸（南北）5.36m、長軸8.54mである。東側は開口しており、その幅は126㎝である。

［堆積土］場所によって若干の違いがあるが、黒色土が主体となっている。

［出土遺物］堆積土から土師器２点（32ｇ）が出土した。(畠山）

第３号方形周溝（ＳＤ58）

［位置］南側調査区の南端付近、Ｆ・Ｇ－７・８グリッドに位置している。

［重複］第85号土坑より古く、第49号住居跡、第79号土坑、第89号土坑よりも新しい。また、南辺のほぼ中央付近より第２号土器埋設遺構が検出された。溝の堆積土を掘り込んでいる層を確認できず、新旧関係は不明である。

［平面形・規模］幅70㎝、底面までの深さ15～20㎝の溝が方形に巡っている。また、掘り方底面より15㎝ほど埋め戻して底面が構築されている。開口部は見られなく、閉じたものとなっている。南北軸4.6m、東西軸4.7mで、ほぼ正方形に巡っている。溝の断面形は皿状あるいは逆台形状である。南北軸の方向はＮ－12°－Ｅで、東西軸の方向はＮ－80°－Ｗである。

［堆積土］黒褐色土が主体となっており、ローム粒やロームブロックを含んでいる。

［出土遺物］堆積土から、土師器17点（188ｇ）、縄文土器１点（14ｇ）が出土している。

［小結］第２号埋設土器遺構の遺構掘り込み面は確認できなかった。これにより、土器が設置されたまま埋没した可能性も考えられる。白頭山火山灰が二次堆積している第79号土坑より新しいことより、少なくとも10世紀中葉以降の年代が考えられる。（小山）

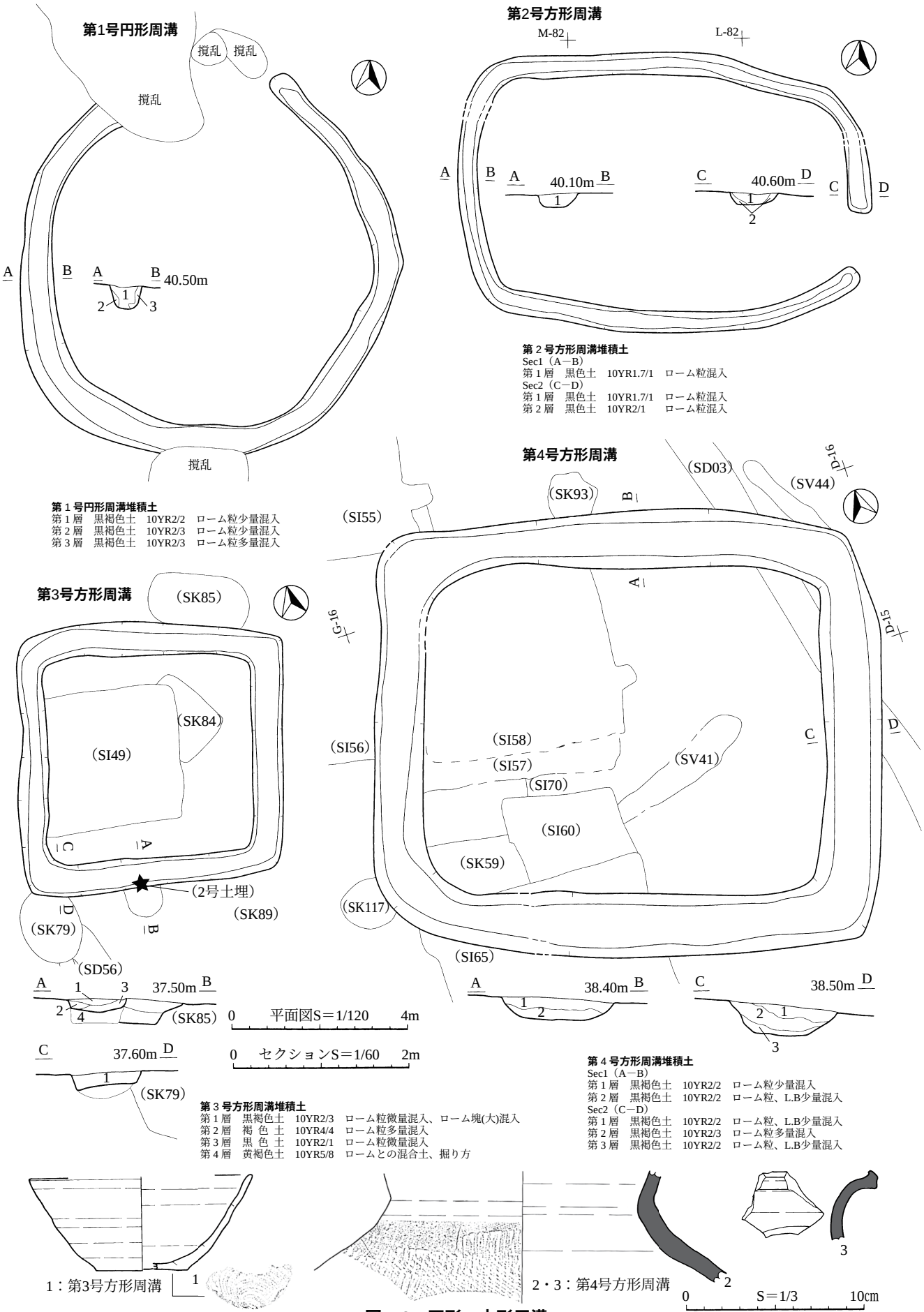

第1号円形周溝
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
A
B
A
B
40.50m
1
2
3
第1号円形周溝堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒少量混入
第２層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量混入
第３層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒多量混入
第2号方形周溝
M-82
L-82
A
B
A
40.10m
B
1
C
40.60m
D
C
D
1
2
第２号方形周溝堆積土
Sec1（A－B）
第１層　黒色土　10YR1.7/1　ローム粒混入
Sec2（C－D）
第１層　黒色土　10YR1.7/1　ローム粒混入
第２層　黒色土　10YR2/1　ローム粒混入
第3号方形周溝
（SK85）
（SK84）
（SI49）
（2号土埋）
（SK89）
（SK79）
（SD56）
C
A
D
B
G-16
A
1
3
37.50m
B
2
4
（SK85）
C
37.60m
D
1
（SK79）
第３号方形周溝堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量混入、ローム塊(大)混入
第２層　褐 色 土　10YR4/4　ローム粒多量混入
第３層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量混入
第４層　黄褐色土　10YR5/8　ロームとの混合土、掘り方
第4号方形周溝
（SD03）
（SV44）
D-16
（SK93）
B
（SI55）
A
D-15
G-16
（SI56）
（SI58）
（SI57）
（SI70）
（SV41）
C
D
（SI60）
（SK59）
（SK117）
（SI65）
A
38.40m
B
1
2
C
38.50m
D
2
1
3
0　平面図S＝1/120　4m
0　セクションS＝1/60　2m
第４号方形周溝堆積土
Sec1（A－B）
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒少量混入
第２層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒、L.B少量混入
Sec2（C－D）
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒、L.B少量混入
第２層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒多量混入
第３層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒、L.B少量混入
1：第3号方形周溝
1
2・3：第4号方形周溝
2
3
0　S＝1/3　10㎝

図153　円形・方形周溝

第４号方形周溝（ＳＤ63）

［位置］壕の東側の緩斜面上、Ｄ～Ｇ－13～16グリッドに位置している。

［重複］平安時代の多数の住居跡（第55号～60号、65号・66号）や第17号土坑、第３号溝跡及び時期の不明な第93号土坑と重複している。新旧関係は時期の不明な第93号土坑より新しいが、他の平安時代の遺構よりも新しい。

［平面形・規模］幅112㎝、深さ35㎝の溝が方形に巡っている。開口部は見られなく、閉じたものとなっている。短軸7.40m、長軸9.20mの大きなものである。溝の断面形は皿状あるいは逆台形状である。長軸方向はＮ－108°－Ｅである。

［堆積土］黒褐色土が主体となっており、ローム粒やロームブロックを含んでいる。

［出土遺物］堆積土から土師器88点（793ｇ）、須恵器７点（231ｇ）、縄文土器６点（86ｇ）が出土している。大半が重複している遺構からの流れ込みと思われる。(畠山）

［小結］重複関係から、少なくとも10世紀中葉以降の新しい年代が考えられる。（畠山）

第９節　溝　跡

第３号溝跡（ＳＤ03）（図155・175）

［位置］調査区の東南隅Ｄ－12グリッドから壕跡の北東隅５ｍ離れたところを通り、Ｑ－36グリッドまで位置している。北西側では平安時代の住居跡に切られる部分もあるが、おおむね住居跡群の外側（東側）を巡るように検出されている。北西では等高線に対して斜交し、南東では並行して検出されている。レベル的には北西から南東に向かって低くなっている。本遺構の東側には、３～10m離れて並行するように道跡が検出されている。

［重複］南東側では第４号方形周溝に、北西側では第35号、36号住居跡に切られている。また、遺跡を南北に縦断している時期不明の第１号・２号溝跡にも切られている。縄文時代の住居跡や溝状土坑とも重複している。

［規模］幅80～140㎝で、長さ約90mを検出した。深さは50～60 ㎝である。

［堆積土］場所によって若干の違いはあるが、堆積土の大半はローム粒を少量含んだ黒褐色土で、底面にはロームブロックが堆積している。また、確認面上で白頭山火山灰が見られるところもある。

［出土遺物］堆積土から土師器26点（540ｇ）、須恵器７点（539ｇ）のほか、縄文時代前期の土器片331点（4,841g）、剥片石器８点（石匙・削器等）や礫石器２点（半円状扁平打製石器、多角柱状礫）が出土した。図175-３は須恵器壺の口縁部片は須恵器壺の胴部片で、産地同定分析により、産地不明と判明している。２は須恵器甕の胴部片で、縄文時代に帰属する第４号土坑より同一個体と思われる破片が出土している。

［小結］斜面に沿って、北西から南東へと延びている長い溝跡である。白頭山火山灰は一次堆積と思われることから、10世紀中頃にはすでに埋まっていたものと思われる。（畠山）

第９号溝跡（ＳＤ09）（図156・172・175・177）

［位置］調査区の中央付近、Ｈ－33～36グリッドの低地に位置し、等高線に並行して検出された。町道や畑地の耕作により一部しか確認できなかった。西側には道跡が隣接している。

［重複］縄文時代の第９号溝状土坑と重複している。

［規模］検出面では幅約88㎝、深さ20～30㎝の規模であるが、地表面からのセクション観察では幅98㎝、深さ55㎝もあり、比較的大きな溝跡といえる。長さ約15ｍを検出した。途中で二つの溝に別れ、5.5ｍほどで再び合流して、東の低地へ向きをかえている。

［堆積土］堆積土の大半は黒色土や黒褐色土であり、二次堆積と思われる白頭山火山灰を含んでいる。

［出土遺物］堆積土から土師器６点（84ｇ）、須恵器６点（84ｇ）のほか、砥石、被熱礫、縄文時代の石鋸、半円状扁平打製石器が出土した。図175-６・７は須恵器壺の口縁部片で、産地同定分析により、五所川原産と判明している。（畠山）

第17号溝跡（ＳＤ17）（図159）

［位置］Ｈ～Ｌ－52・53グリッドに位置している。斜面に直交して検出され、東西に長い溝跡であるが、東側は削平が激しいため検出できなかった。

［重複］なし。

［規模］幅約70㎝、深さ22㎝で、長さ8.0ｍを検出した。底面は凹凸が激しく、西から東側へと低くなっている。

［堆積土］堆積土の大半は黒色土と黒褐色土であり、白頭山火山灰（第９章第４節参照）を含んでいる。

［出土遺物］堆積土から土師器１点（23ｇ）が出土した。（畠山）

第26号溝跡（ＳＤ26）（図157・172・177）

［位置］Ｅ－９グリッドからＬ－14グリッドまで位置しており、東側へ下る斜面に直交して検出されている。外壕より先は検出されなかった。

［重複］外壕より古く、第20号、第50号住居跡、第126号、第127号土坑、第37号、38号溝状土坑より新しい。

［規模］幅約90㎝、深さ40㎝で、長さ約36ｍを検出した。底面はほぼ平坦で、西から東側へと低くなっている。断面形は浅箱型である。

［堆積土］場所により違いが見られるが、堆積土の大半は黒色土と黒褐色土であり、ロームブロック、ローム粒のほか、粘土ブロックなども含まれている。

［出土遺物］土師器24点(246ｇ)、須恵器２点(97ｇ)、縄文土器５点(60ｇ)、砥石１点が出土した。

（小山）

第27号溝跡（ＳＤ27）（図157）

［位置］Ｉ～Ｍ－15グリッドに位置している。東側へ下る斜面に直交して検出され、東西に長い溝跡である。溝の東端はＩ－15付近でほぼ垂直に立ち上がっている。

［重複］内壕、外壕、第25号溝跡、第27号土坑より古く、第17号溝状土坑より新しい。

［規模］幅約1.2ｍ、深さ30～50㎝で、長さ約16.8ｍを検出した。底面は平坦で、西から東側へと低く

なっている。断面形は浅箱型である。
［堆積土］堆積土の大半は黒色土で、白頭山火山灰（肉眼観察による）がブロック状に含まれている。
［出土遺物］堆積土から土師器88点（1.8kg）、縄文土器11点（134ｇ）、砥石１点が出土した。（小山）

第31号溝跡（ＳＤ31）（図158・175）
［位置］Ｅ～Ｋ－７～９グリッドに位置している。Ｇ－９グリッド付近で湾曲し、そこから南西方向へ向かい直線的に伸びている。
［重複］第21号、50号住居跡より新しく第21号溝状土坑より新しく、堆積土に白頭山火山灰（肉眼観察による）がブロック状に含まれている第86号土坑より古い。
［規模］幅は約90～110㎝、深さは約10㎝である。第86号土坑と重複している部分では底面から15㎝程の深さで掘り方が掘り込まれているのが確認された。長さは東側調査区より10mほど北西方向へ伸び、そこから、屈曲して南東方向へ約23mほど伸びている。底面はほぼ平坦で、断面形は浅箱型である。
［堆積土］堆積土は黒色土の単層で、ローム粒、ローム塊が含まれている。
［出土遺物］堆積土から土師器14点（110ｇ）、須恵器４点（139ｇ）、縄文土器１点（６ｇ）が出土した。（小山）

第32号溝跡（ＳＤ32）（図158）
［位置］外壕の北東側、Ｈ－19グリッドに位置している。斜面に直交して東へのびるが、住居跡に切られているので、これより東側は不明である。
［重複］第45号住居跡と重複し、これより古い。
［規模］西側は幅50㎝、深さ10㎝であるが、東側へとしだいに広く、深くなっている。東側の住居跡と重複している部分では幅134㎝、深さ35㎝である。
［堆積土］２層に分層できた。第１層は黒褐色土で、第２層は明黄褐色土である。第２層は掘り方の可能性がある。
［出土遺物］土師器７点（69ｇ）、縄文時代前期の土器片10点（155ｇ）が出土した。（畠山）

第34号溝跡（ＳＤ34）（図159・177）
［位置］Ａ－22～23グリッドに位置している。調査区外へ伸びており、全体形は不明であるが、検出された部分では、方形に巡っている。本遺構の周辺にはピット群が拡がっている。
［重複］第58・59・78号土坑、第36・37号溝跡より新しい。
［規模］幅約70～100㎝、深さ40～50㎝で巡っている。溝の内側で計測した南北軸は4.6mである。底面は平坦で、断面形は浅箱型である。
［堆積土］堆積土は３層に分層されたが、いずれも黒色土を基調としている。
［出土遺物］堆積土から土師器51点（495ｇ）、須恵器１点（60ｇ）、縄文土器７点（43ｇ）、削器、剥片が26点が出土した。
［小結］本遺構は重複しているどの遺構よりも新しい。また、現存している平面形は方形で、断面形は浅箱型になっている。このような属性から方形周溝になる可能性も考えられる。（小山）

第35号溝跡（ＳＤ35）（図159・172・177）

［位置］Ａ・Ｂ－20～23グリッドに位置している。調査区外へ伸びており全体形は不明であるが、検出された部分では方形に巡っている。本遺構の周辺にはピット群が拡がっている。

［重複］第34号溝跡、第57号土坑より古く、第36、37号溝跡より新しい。

［規模］幅約85～165㎝、深さ約80㎝で巡っている。溝の内側で計測した南北軸は7.5ｍである。底面は開口部と比較すると幅狭である。それが断面形にも反映されており、断面形はＶ字状になっている。底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒色土を基調とした土が堆積している。底面近くでは砂が互層になり堆積しており、埋没過程の最初の段階で水が溜まっていた可能性が考えられる。

［出土遺物］堆積土から土師器281点（2.3㎏）、須恵器９点（294ｇ）、ミニチュア土器片６点、縄文土器35点（269ｇ）弥生土器数点、削器、剥片が66点、多角柱状の礫が１点出土した。その他に、馬の上顎付近の骨が出土した。出土位置は検出面付近であり、本遺構に廃棄されたものかは明確に言えない。

［小結］本遺構の特徴は、断面形状である。周辺より検出されている溝跡には見られないものである。また、伴うかは不明であるが、本遺跡で唯一の骨が出土しており、特別な用途を持っていた可能性も考えられる。（小山）

第36号溝跡（ＳＤ36）（図160・172・175）

［位置］Ａ・Ｂ－22～26グリッドに位置している。調査区外へ伸びており全体形は不明であるが、検出された部分では方形に巡っている。

［重複］第37・38号溝跡、第75・76・77・78・120号土坑より新しく、第35号溝跡より古い。

［規模］幅約160㎝、深さ70～100㎝で巡っている。溝の内側で計測した南北軸は約13.6ｍと非常に長くなっている。底面は南北辺では平坦であるが、東西辺の南側と北側は、共に凹凸が激しく、特に南側では多数の土坑と重複している。断面形は深箱型である。

［堆積土］堆積土中にはロームブロックが大量に含まれており、人為堆積の状況を示している。

［出土遺物］堆積土から土師器196点（2.7㎏）、須恵器10点（568ｇ）、ミニチュア土器片２点、縄文土器24点（188ｇ）、剥片１点が出土した。図175-９は赤焼きの須恵器坏である。10は須恵器壺の口縁部片で、産地同定分析により五所川原産と判明している。（小山）

第37号溝跡（ＳＤ37）（図161）

［位置］Ａ・Ｂ－21～23グリッドに位置している。重複により削平されている部分が多く、全体形は不明であるが、近接している溝と同様に、方形に巡っていると思われる。

［重複］第34・35・36号溝跡、第58・75・76号土坑よりも古い。

［規模］幅約120㎝、深さ40㎝で巡っている。底面は平坦で、断面形は浅箱型である。

［堆積土］堆積土の大半は黒色土で、白頭山火山灰（肉眼観察による）がブロック状に混入している。

［出土遺物］堆積土から土師器９点（91ｇ）、鉄製品１点、縄文土器11点（313ｇ）、削器、剥片などが４点出土した。（小山）

第38号溝跡（ＳＤ38）（図160）

［位置］Ａ・Ｂ－23～25グリッドに位置している。

［重複］第１・36号溝跡より古く、第121号土坑より新しい。

［規模］第36号溝跡に沿って南北に直線的に延びている。重複により全体の規模は不明であるが、現存している部分で全長6,24m、幅114～134㎝、深さ9～31㎝である。

［堆積土］黒色土が主体になっており、ローム粒、ロームブロックが混入している。

［出土遺物］なし。（小山）

第40号溝跡（ＳＤ40）（図162・172）

［位置］Ｂ～Ｄ－16～25グリッドに位置している。南北に直線的に伸びている。

［重複］第39・41・46号溝跡より古い。

［規模］幅約100㎝、深さ70㎝で、長さ約36mを検出した。底面は平坦で、断面形は深箱型である。

［堆積土］Ｃ－18～20グリッドから白頭山火山灰（肉眼観察による）が自然堆積している状況で検出された。火山灰は覆土の最上位に堆積しており、埋没過程の最終段階で降下したものと考えられる。

［出土遺物］堆積土から土師器203点（3.0kg）、須恵器２点（17ｇ）、縄文土器13点（237ｇ）、削器１点、被熱礫が２点出土した。図172-11は土師器坏で内面にミガキ調整と黒色処理が施されている。

［小結］白頭山火山灰が覆土の上位に自然堆積しており、構築年代は10世紀前半以前と考えられる。（小山）

第41号溝跡（ＳＤ41）（図162・163・172・175・177）

［位置］Ａ・Ｂ－16～19グリッドに位置している。調査区外へ伸びているため、全体形は不明であるが、Ｌ字状に屈曲して検出された。

［重複］第39号溝跡より古く、第40号溝跡、第47号溝状土坑よりも新しい。

［規模］幅約120～150㎝、深さ約80㎝で検出された。長さは、屈曲している部分まで約７mで、屈曲部からは約12m伸びて終結している。底面は平坦で、断面形は深箱型である。

［堆積土］堆積土内に焼土や粘土等が大量に廃棄されており、人為堆積の状況を示している。また、白頭山火山灰（肉眼観察による）がブロック状に混入している。

［出土遺物］堆積土から土師器416点（5.9ｇ）、須恵器５点（34ｇ）、ミニチュア土器片６点、土製品１点、鉄製品２点、羽口片２点、縄文土器29点（452ｇ）が出土した。図172-15は土師器坏で内面に、ミガキ調整と黒色処理が施されている。図177-５はミニチュア土器の完形品である。（小山）

第42号溝跡（ＳＤ42）（図162）

［位置］Ｃ－16グリッドに位置している。斜面に直交して検出された。

［重複］第39号溝跡より古い。

［規模］幅約70㎝、深さ約25㎝で、現存している長さは1.7mである。底面は平坦で、断面形は浅箱型である。

［堆積土］黒色土の単層である。

［出土遺物］堆積土から土師器24点（208ｇ）、縄文土器３点（6.1ｇ）が出土した。（小山）

第43号溝跡（ＳＤ43）（図164・175）

［位置］Ｂ－13～15グリッドに位置している。重複により全体形は不明であるが、コの字状に巡るように検出された。

［重複］第39号溝跡より古く、第44・45号溝跡より新しい。

［規模］幅約50～70㎝、深さ約20㎝で、現存している長さは約9.3mである。底面は平坦で、断面形は浅箱型である。

［堆積土］堆積土の大半は黒色土である。

［出土遺物］土師器24点（288ｇ）、須恵器３点（37ｇ）、縄文土器３点（32ｇ）が出土した。（小山）

第44号溝跡（ＳＤ44）（図164・177）

［位置］Ｂ－14グリッドに位置している。

［重複］第39・43号溝跡より古い。

［規模］幅約40㎝、深さ15㎝で、現存している長さは約2.8mである。底面には若干凹凸が見られるが、概ね平坦である。断面形は浅箱型である。

［堆積土］黒色土の単層である。

［出土遺物］なし。（小山）

第45号溝跡（ＳＤ45）（図164）

［位置］Ｂ－13グリッドに位置している。調査区際より検出されており、遺構の大半が調査区外へ伸びており、検出されたのはわずかである。

［重複］第43号溝跡より古い。

［規模］現存している幅は約40㎝、長さは70㎝である。深さは約25㎝である。底面には平坦で、断面形は浅箱型である。

［堆積土］黒褐色土の単層である。

［出土遺物］出土しなかった。

［第43・44・45号溝跡の小結］第43号溝跡の東西辺と、第44号溝跡の軸方向はほぼ同じである。また平面形はコの字状を基本としている事より、この３条の溝は同一のもので、徐々に拡張されていった可能性が考えられる。（小山）

第46号溝跡（ＳＤ46）（図165・167・175・177）

［位置］Ａ－14～16グリッドに位置している。また、約８ｍほど離れたＪＲ防風林区よりも配置、断面形などから本遺構と同一と思われる遺構が検出されている。調査区外へ伸びているため全体形は不明であるがコの字状になると考えられる。

［重複］第47号溝跡、第63号土坑よりも古く、第40号溝跡よりも新しい。

［規模］幅約70㎝、深さは底面まで約20㎝で、掘り方底面まで30㎝である。検出されている溝の内側で計測した長さは約10.2mである。底面は平坦で、断面形は浅箱型である。

［堆積土］堆積土の大半は黒色土である。

［出土遺物］堆積土から土師器226点（3.1kg）、須恵器２点（25ｇ）、ミニチュア土器片２点、鉄製品１点、鉄滓４点、縄文土器29点（3163ｇ）が出土した。（小山）

第47号溝跡（ＳＤ47）（図165・173）

［位置］Ａ－14～16グリッドに位置している。遺構の大半が調査区外へ伸びているため全体形は不明であるが、Ａ－16グリッド付近で屈曲するように検出されているため、近接して検出されている他の溝と同様にコの字状になる可能性も考えられる。

［重複］第46号溝跡、第63・66・74・104・105・106・107号土坑より新しい。

［規模］幅約130㎝、深さは底面まで約70㎝、掘り方底面まで90㎝である。検出されている長さは10.2ｍである。底面はほぼ平坦で断面形は深箱型である。

［堆積土］堆積土中には焼土やロームブロックが大量に含まれており、人為堆積の状況を示している。

［出土遺物］堆積土から土師器206点（3.6kg）、須恵器片８点（404ｇ）、鉄製品１点、縄文土器30点（866ｇ）が出土した。図173-４は土師器の耳皿と思われる破片である。（小山）

第48号溝跡（ＳＤ48）（図166・173・175）

［位置］ＪＲ防風林区の０Ｘ・０Ｙ－22グリッドに位置している。

［重複］なし。

［規模］幅約180㎝、深さ80㎝で、長さ3.2ｍを検出した。底面は平坦で、断面形は深箱型である。

［堆積土］堆積土の大半は黒色土と黒褐色土であり、白頭山火山灰（肉眼観察による）がブロック状に含まれている。

［出土遺物］土師器71点（974ｇ）、須恵器片４点（137ｇ）、縄文土器３点（40ｇ）が出土した。（小山）

第49号溝跡（ＳＤ49）（図166）

［位置］ＪＲ防風林区の０Ｘ・０Ｙ－21・22グリッドに位置している。

［重複］なし。

［規模］幅約50～80㎝、深さ約15㎝で、長さ6.0ｍを検出した。底面には若干凹凸が見られるものの、概ね平坦である。断面形は浅箱型である。

［堆積土］土層図は作成していないが、調査時の所見では黒色土を主体としていたと記憶している。

［出土遺物］なし。（小山）

第50号溝跡（ＳＤ50）（図166・173・176）

［位置］ＪＲ防風林区の０Ｘ・０Ｙ－21・22グリッドに位置している。

［重複］なし。

［規模］幅約170㎝、深さ約100㎝で、長さ4.2ｍを検出した。底面は平坦で断面形は深箱型である。

［堆積土］堆積土の大半は黒色土で、白頭山火山灰（肉眼観察による）がブロック状に含まれている。

［出土遺物］堆積土から土師器252点（4.0kg）、須恵器片34点（1.4kg）、ミニチュア土器片４点、縄文土器４点（68ｇ）が出土した。図173-８土師器の堝片である。図176-28は須恵器甕の胴部片で、第67号溝跡から、同一個体と思われる破片が出土している。（小山）

第51号溝跡（ＳＤ51）（図166）
［位置］ＪＲ防風林区の０Ｘ・０Ｙ－19グリッドに位置している。
［重複］なし。
［規模］幅約120㎝、深さ35㎝で、長さ4.4ｍを検出した。底面は平坦で、断面形は浅箱型である。
［堆積土］堆積土の大半は黒色土と黒褐色土である。
［出土遺物］なし。（小山）

第54号溝跡（ＳＤ54）（図167・173・175～177）
［位置］ＪＲ防風林区の０Ｘ・０Ｙ－16・17グリッドに位置している。
［重複］第77・78号溝跡、第110号土坑より新しく、第４号井戸跡より古い。
［規模］幅約170㎝、深さは底面まで約85㎝、掘り方底面まで100㎝で、長さ4.3ｍを検出した。底面は平坦で、断面形は深箱型である。
［堆積土］堆積土の大半は黒色土と黒褐色土である。
［出土遺物］堆積土から土師器385点（5.9kg）、須恵器片36点（1.5kg）、鉄滓１点、縄文土器片32点(948ｇ)、半円状扁平打製石器が１点出土した。図173-13は内面にタール状物質が付着しており、灯明具に転用している可能性も考えられる。（小山）

第55号溝跡（ＳＤ55）（図168）
［位置］Ｆ－３～５グリッドに位置している。調査区外へ伸びており全体形は不明であるが、コの字状になると考えられる。
［重複］第72号土坑より古い。
［規模］幅約80㎝、深さ10㎝で、検出されている溝の内側で計測した長さは約4.8ｍである。底面は平坦で、断面形は浅箱型である。
［堆積土］黒色土の単層である。
［出土遺物］土師器15点（125ｇ）、須恵器１点（17ｇ）、縄文土器５点（48ｇ）が出土した。（小山）

第56号溝跡（ＳＤ56）（図168）
［位置］Ｇ－５～７グリッドに位置している。
［重複］第70・71・79号土坑より古い。
［規模］幅約75㎝、深さ15㎝で、長さ4.0ｍを検出した。底面は平坦で、断面形は浅箱型である。
［堆積土］土層図は作成していないが、調査時の所見では黒色土の単層であったと記憶している。
［出土遺物］なし。（小山）

第57号溝跡（ＳＤ57）（図168・173）
［位置］Ｇ－５～７グリッドに位置している。
［重複］第70・71・79号土坑より古い。
［規模］幅約50㎝、深さ15㎝で、長さ4.4ｍを検出した。底面は平坦で、断面形は浅箱型である。

［堆積土］土層図は作成していないが、調査時の所見では黒色土の単層であったと記憶している。
［出土遺物］堆積土から土師器12点（193ｇ）が出土した。（小山）

第60号溝跡（ＳＤ60）（図166）
［位置］ＪＲ防風林区のＯＸ－20グリッドに位置している。調査区外へ伸びているため全体形は不明である。検出された平面形はＬ字状になっている。
［重複］なし。
［規模］幅約40㎝、深さ30㎝で、東西辺２ｍ、南北辺長さ1.6ｍを検出した。底面は平坦で、断面形は浅箱型である。
［堆積土］土層図は作成していないが、調査時の所見では黒色土の単層であったと記憶している。
［出土遺物］なし。（小山）

第61号溝跡（ＳＤ61）（図169）
［位置］Ｅ・Ｆ－32・33グリッドの低地に位置している。西側は町道があるため、調査できなかった。
［重複］なし。
［規模］幅54㎝、深さ66㎝で、長さ4.44ｍを検出した。
［堆積土］４層に分層されたが、上部のロームブロックを含む層と下部の黒色土とに二分される。自然堆積の後に、人為的に埋め戻されたものと思われる。
［出土遺物］ なし。（畠山）

第64号溝跡（ＳＤ64）（図169・174・176）
［位置］Ｅ・Ｆ－16グリッドに位置している。西側は第55号住居跡との重複により不明である。
［重複］第55号住居跡と重複し、これより古い。また、東端では第45号溝状土坑とも重複している。
［規模］幅66㎝、深さ42㎝で、長さ5.6ｍを検出した。
［堆積土］５層に分層された。上部には黒褐色土、下部には暗褐色土の堆積が見られるが、西側（住居跡と重複している部分）の底面にはローム質の明黄褐色土が堆積している。
［出土遺物］堆積土から、土師器64点（1,341ｇ）、須恵器４点（79ｇ）、縄文時代前期の土器片１点（12ｇ）と剥片１点が出土した。（畠山）

第65号溝跡（ＳＤ65）（図170・173・176）
［位置］Ｃ・Ｄ‐28・29グリッドに位置している。
［重複］第100号土坑、第39・67号溝跡と重複し、第39号溝跡より古く、第67号溝跡より新しい。第100号土坑との新旧関係は不明である。
［規模］東西に直線的に延びており、全長4,62ｍ、幅112～198㎝、深さ38～51㎝である。
［堆積土］５層に分層された。黒色土を主体としてロームブロックが混入している。
［出土遺物］堆積土から土師器31点（914ｇ）、須恵器７点（271ｇ）、縄文土器４点（89ｇ）が出土した。図173-23は把手付き土器の把手部である。

［その他］本遺構は位置関係から、近接している遺構群（第４号掘立柱建物跡、第96・98・99・100・103・114号土坑、第67号溝跡）のいずれかとセット関係を有し、建物跡となる可能性が考えられる。また、重複関係にある第100号土坑と本遺構は、覆土に明確な差異は認められず、両遺構の位置関係は建物跡外周溝とその末端に付設される土坑に類似することから、同時期に存在した可能性が考えられる。（工藤・小山）

第67号溝跡（ＳＤ67）（図170・174・176・177）

［位置］Ｃ・Ｄ－25・26、Ｅ－25・26・28、Ｆ－25～28グリッドに位置している。

［重複］第103・114号土坑、第39号溝跡と重複し、第39号溝跡より古く、第114号土坑、第68・69・72号溝跡より新しい。第103号との新旧関係は不明である。

［規模］平面形はコの字状になる。規模は、溝の内側で計測した南北軸は9.3m、幅64～166㎝、深さ13～58㎝である。本遺構の東西辺は北側も南側も、埋め戻した後に再度掘り込んでいる形跡が認められる。一見すると重複しているように考えられたため、個別の遺構名を付して調査したが、同一遺構のものと捉え、本遺構にまとめた。その為、東西辺の底面は凹凸が見られる。南北辺の底面は平坦である。断面形は箱型である。

［堆積土］黒褐色土を主体として、ローム粒・ロームブロックが混入している。南北辺の北側より、灰のようなものが0.7×3.5mの不整形範囲で拡がっている。火山灰分析により、十和田－八戸テフラであることが判明している。

［出土遺物］堆積土から土師器188点（5.2kg）、須恵器10点(754ｇ)、ミニチュア土器片３点、土製品２点が出土している。図174-６は土師器坏で内面に、ミガキ調整と黒色処理が施されている。図177-12、15は土鈴と思われる。

［その他］本遺構は位置関係から、近接している遺構群（第４号掘立柱建物跡、第96・98・99・100・103・114号土坑、第65号溝跡）のいずれかとセット関係を有し、建物跡となる可能性が考えられる。また、本遺構と重複している第103号土坑と本遺構の覆土に明確な差異が認められず、本遺構１層と同質の堆積土が第103号土坑にも認められており、両遺構は同時期に存在した可能性が考えられる。

（工藤・小山）

第73号溝跡（ＳＤ73）（図171・174）

［位置］Ｄ・Ｅ－21・22、Ｆ－22グリッドに位置している。

［重複］なし。

［規模］南北‐東西に湾曲しながら延びており、全長7.04m、幅44～108㎝、深さ９～26㎝である。

［堆積土］３層に分層された。黒色土を主体とし、北側に焼土が混入している。

［出土遺物］堆積土から土師器52点（945ｇ）、縄文土器56点（842ｇ）が出土した。（工藤・小山）

第74号溝跡（ＳＤ74）（図171）

［位置］０Ｚ～Ｂ－24・25グリッドに位置している。

［重複］なし。

［平面形・規模］東西に蛇行しながら調査区域外へ延びている。検出された部分の規模は、全長6.04

m、幅20～146㎝、深さ８～33㎝である。
［堆積土］４層に分層された。上半には二次堆積と思われる白頭山火山灰が含まれている。
［出土遺物］堆積土から土師器７点（68ｇ）、須恵器１点（210ｇ）が出土した。（工藤・小山）

第77号溝跡（ＳＤ77）（図167・174・176・177）
［位置］ＪＲ防風林区の０Ｘ・０Ｙ－16・17グリッドに位置している。
［重複］第54・78号溝跡、第110号土坑より古い。
［規模］幅約60㎝、深さ50㎝で、現存している長さは3.1mである。底面は平坦で、断面形は浅箱型である。
［堆積土］黒色土の単層である。
［出土遺物］堆積土から土師器63点（943ｇ）、須恵器１点（210ｇ）、ミニチュア土器片１点が出土した。図176-32は須恵器甕の口縁部片で、産地同定分析により産地不明と判明した。（小山）

第78号溝跡（ＳＤ78）（図167・174）
［位置］ＪＲ防風林区の０Ｘ・０Ｙ－15～17グリッドに位置している。調査区外へ伸びているため全体形は不明であるがコの字状になると思われる。
［重複］第54号溝跡、第110号土坑より古く、第46・77号溝跡、第119号土坑より新しい。
［規模］幅約100～130㎝、深さは底面まで50㎝、掘り方底面まで60㎝で、溝の内側で計測した南北軸は8.6mである。底面は平坦で、断面形は浅箱型である。
［堆積土］堆積土の大半は黒色土であり、ローム粒が含まれている。
［出土遺物］土師器43点(574ｇ)、須恵器１点(88ｇ)、縄文土器片４点(236ｇ)が出土した。（小山）

第79号溝跡（ＳＤ79）（図171・174）
［位置］Ｄ・Ｅ－10・11グリッドに位置している。
［重複］第50号住居跡より新しい。
［規模］幅約80㎝、深さ25㎝で、長さ4.6mを検出した。底面は凹凸が激しく、西から東側へと低くなっている。
［堆積土］黒褐色土の単層で、ロームブロックが多量に含まれている。
［出土遺物］土師器15点（372ｇ）、須恵器１点（11ｇ）、縄文土器１点（3.8ｇ）が出土した。（小山）

第80号溝跡（ＳＤ61）（図166）
［位置］ＪＲ防風林区の０Ｘ－22グリッドに位置している。
［重複］なし。
［規模］幅約80㎝、深さ30㎝で、長さ3.3mを検出した。底面は平坦で、断面形は箱型である。
［堆積土］土層図は作成していないが、調査時に所見では黒色土を基調としていたと記憶している。
［出土遺物］なし。（小山）

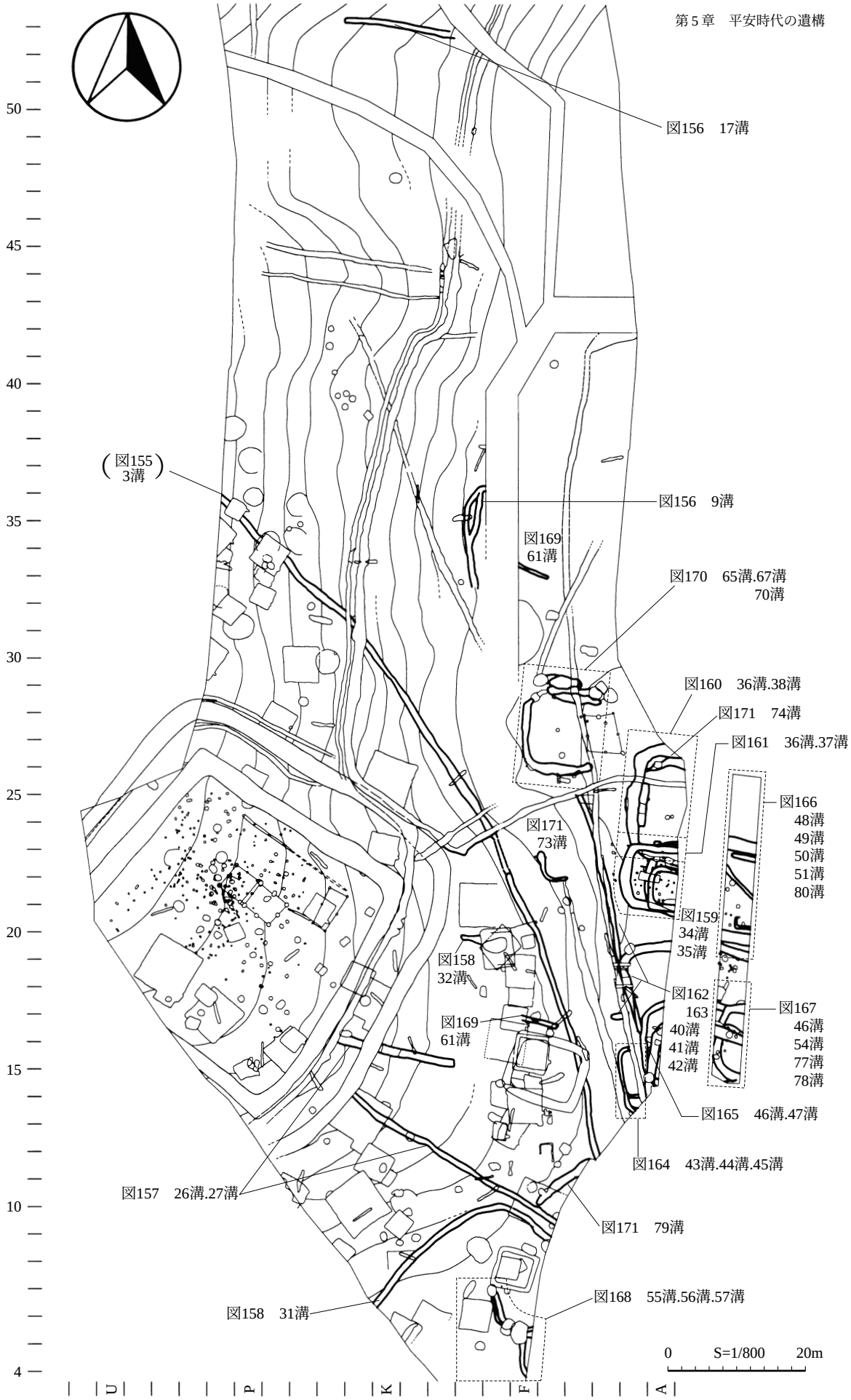


図154　平安時代の溝跡遺構配置

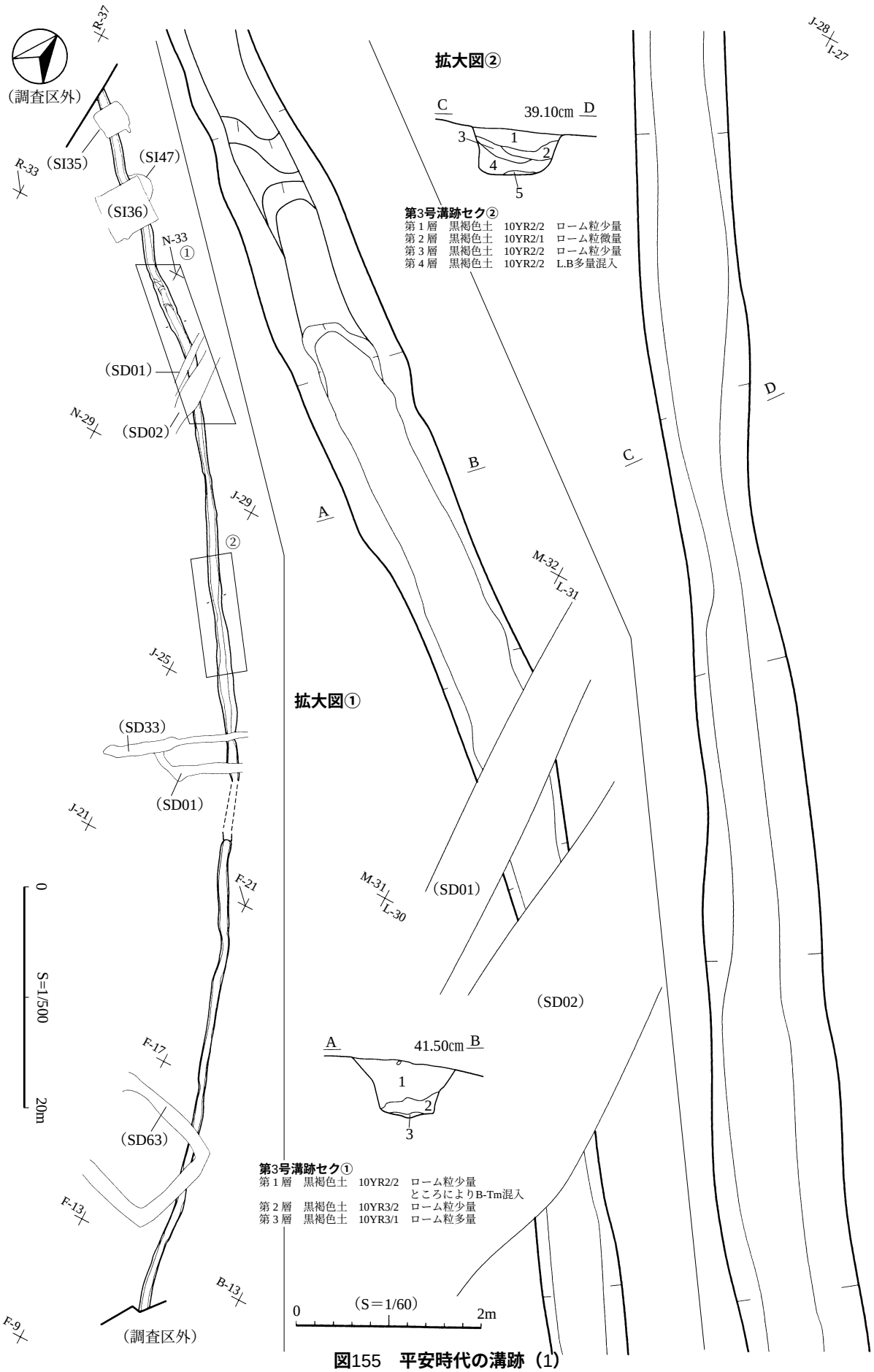


図155　平安時代の溝跡（1）

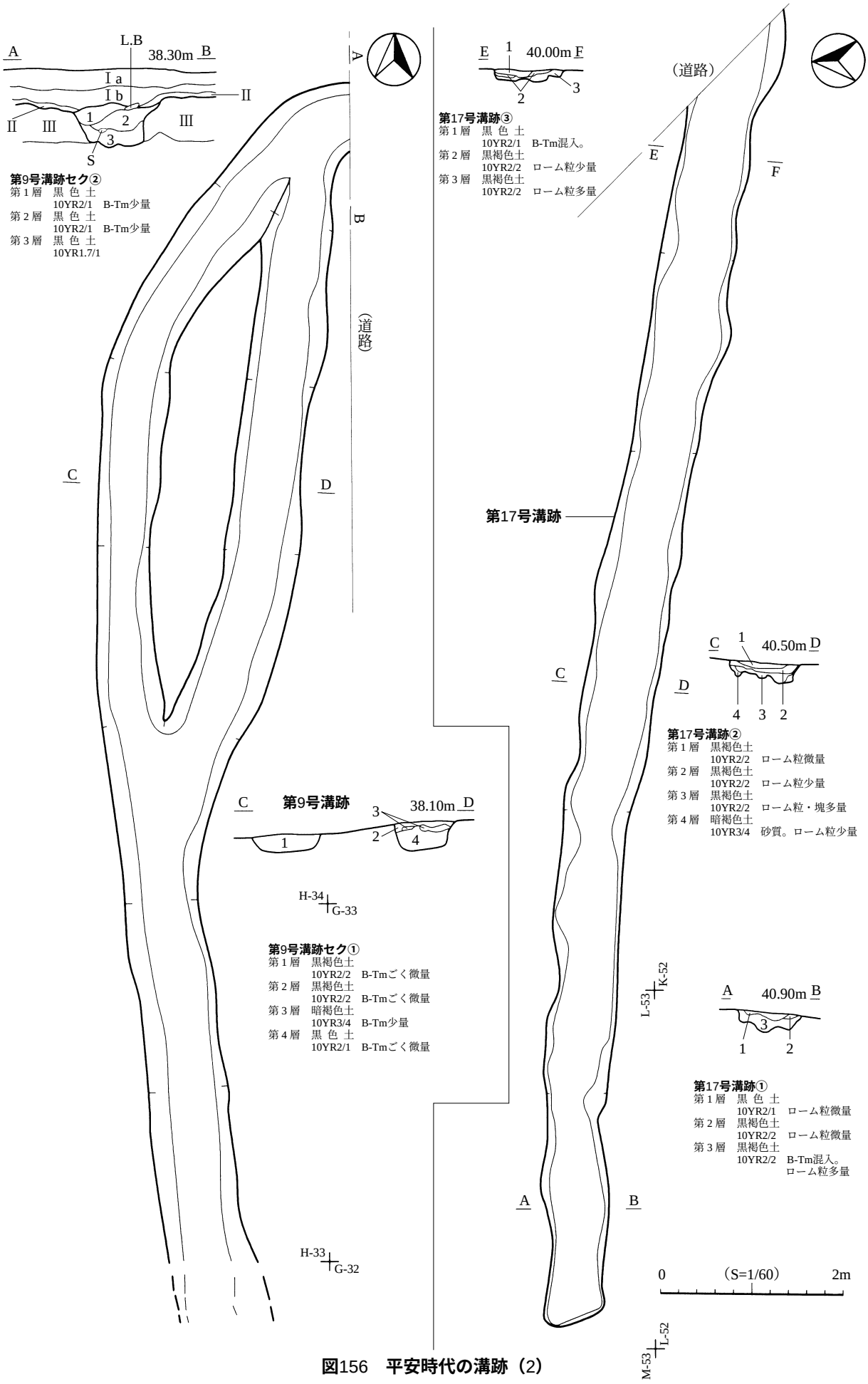
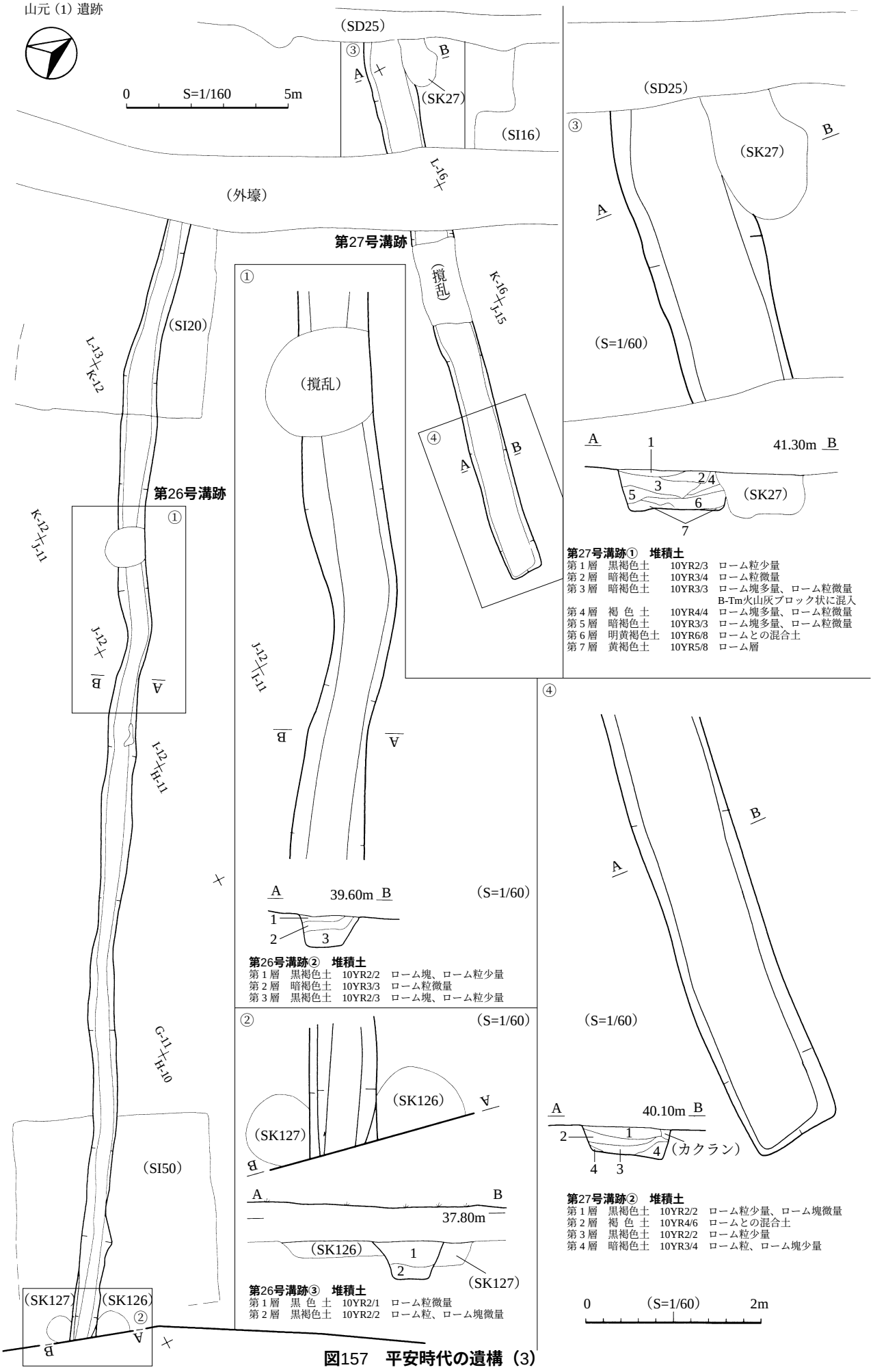


図156　平安時代の溝跡（2）



第27号溝跡① 堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量
第2層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒微量
第3層	暗褐色土	10YR3/3	ローム塊多量、ローム粒微量 B-Tm火山灰ブロック状に混入
第4層	褐 色 土	10YR4/4	ローム塊多量、ローム粒微量
第5層	暗褐色土	10YR3/3	ローム塊多量、ローム粒微量
第6層	明黄褐色土	10YR6/8	ロームとの混合土
第7層	黄褐色土	10YR5/8	ローム層

第26号溝跡② 堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊、ローム粒少量
第2層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒微量
第3層	黒褐色土	10YR2/3	ローム塊、ローム粒少量

第26号溝跡③ 堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒、ローム塊微量

第27号溝跡② 堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量、ローム塊微量
第2層	褐 色 土	10YR4/6	ロームとの混合土
第3層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量
第4層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒、ローム塊少量

図157 平安時代の遺構 (3)

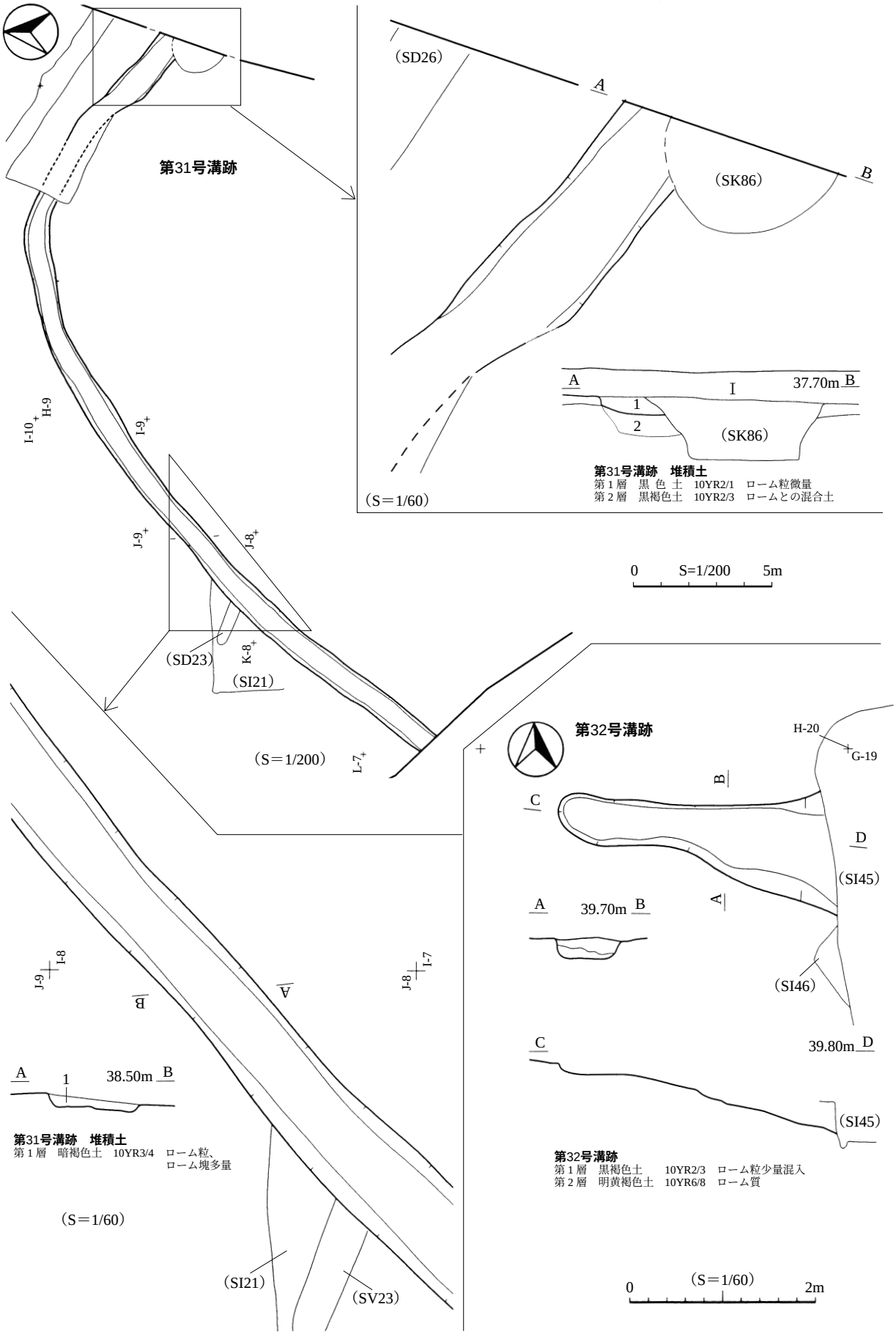
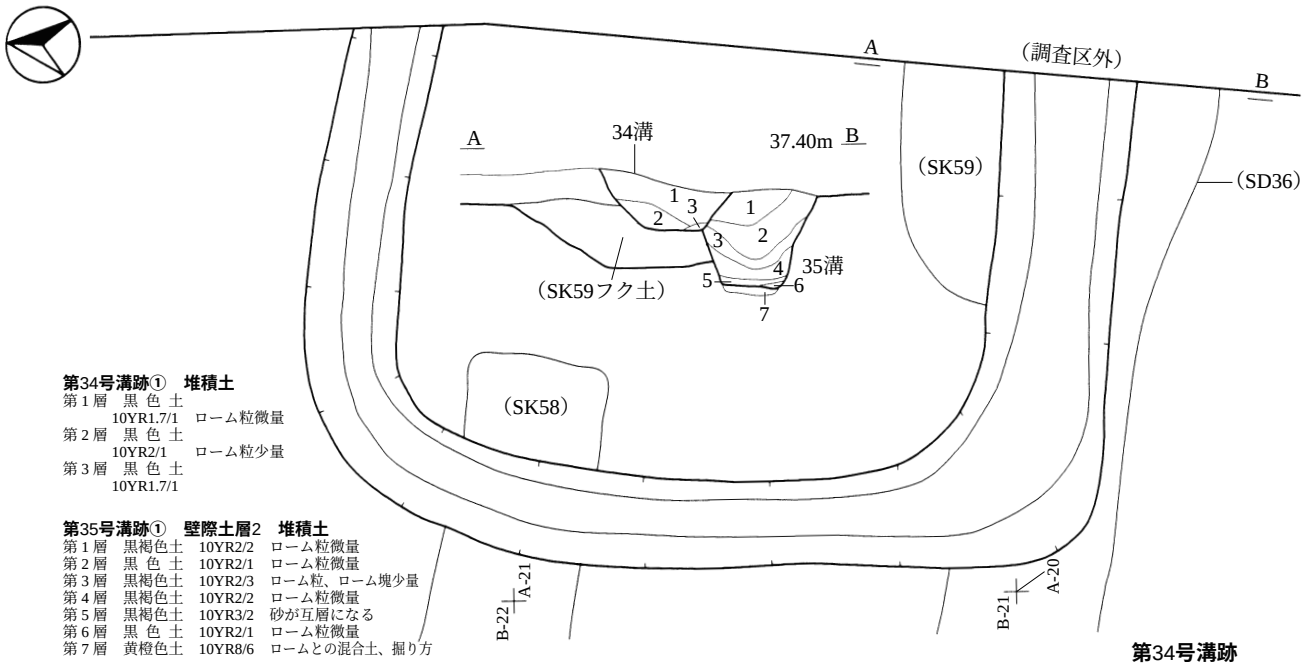


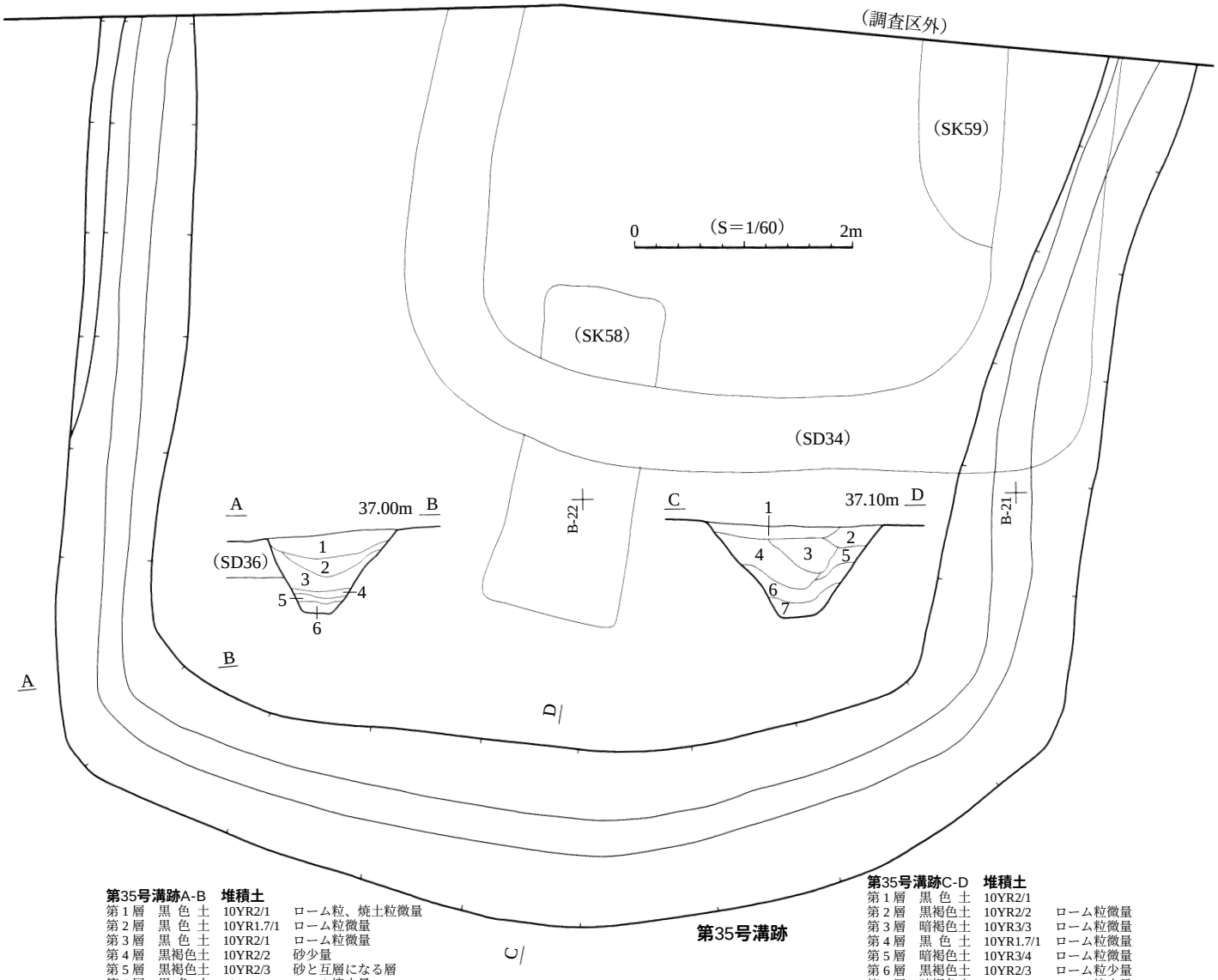
図158　平安時代の溝跡（4）



第34号溝跡①　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム粒微量
第２層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒少量
第３層　黒 色 土　10YR1.7/1

第35号溝跡①　壁際土層2　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒微量
第２層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第３層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒、ローム塊少量
第４層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒微量
第５層　黒褐色土　10YR3/2　砂が互層になる
第６層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第７層　黄橙色土　10YR8/6　ロームとの混合土、掘り方

第34号溝跡



第35号溝跡A-B　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒、焼土粒微量
第２層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム粒微量
第３層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第４層　黒褐色土　10YR2/2　砂少量
第５層　黒褐色土　10YR2/3　砂と互層になる層
第６層　黒 色 土　10YR2/1　ローム塊少量

第35号溝跡C-D　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR2/1
第２層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒微量
第３層　暗褐色土　10YR3/3　ローム粒微量
第４層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム粒微量
第５層　暗褐色土　10YR3/4　ローム粒微量
第６層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量
第７層　暗褐色土　10YR3/4　ローム塊少量

第35号溝跡

図159　平安時代の溝跡（5）

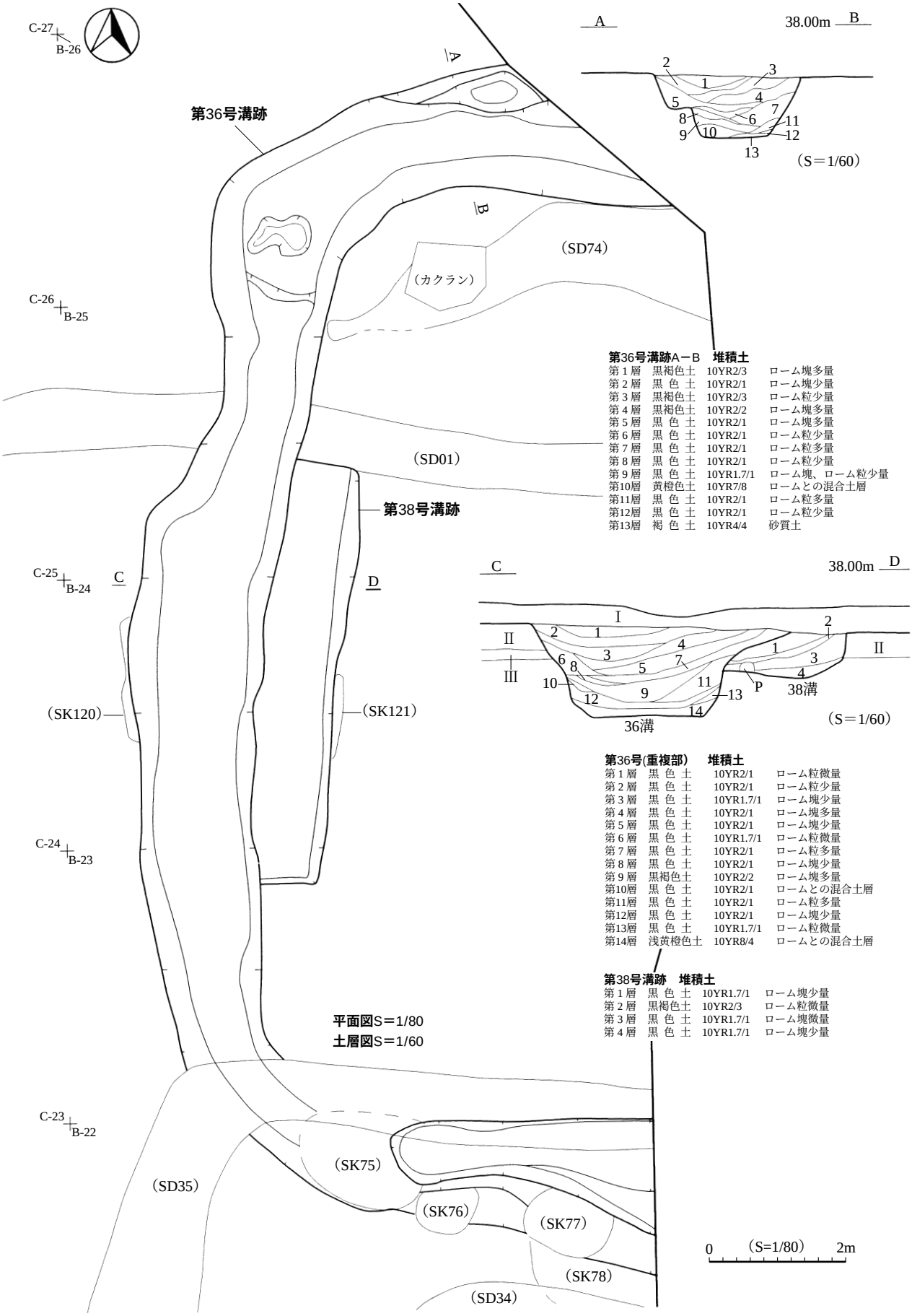
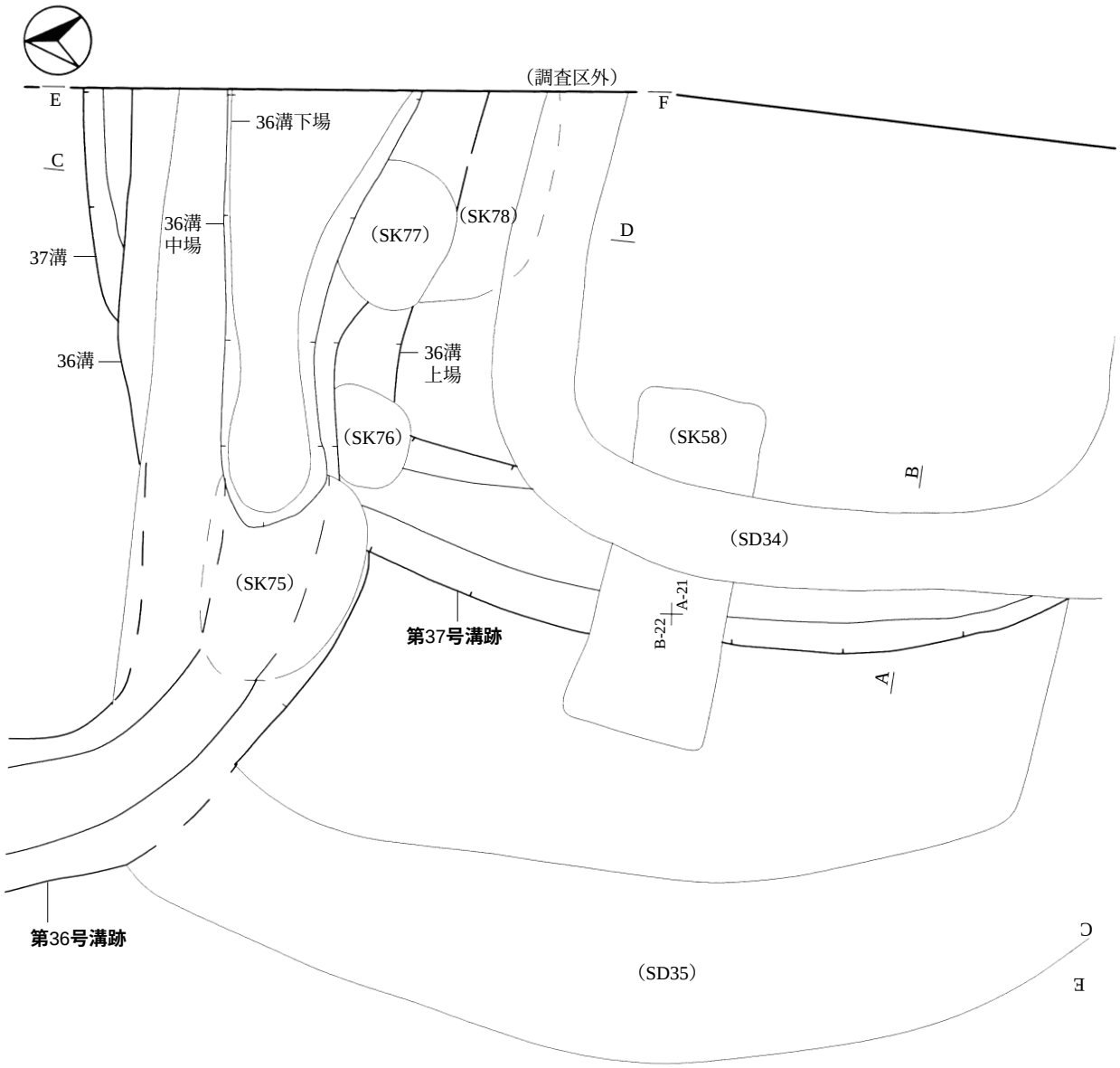
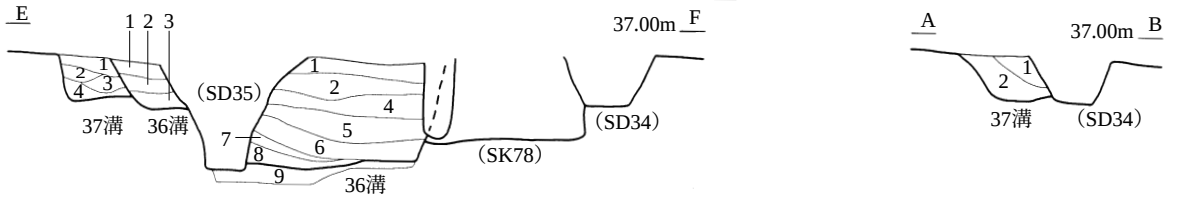
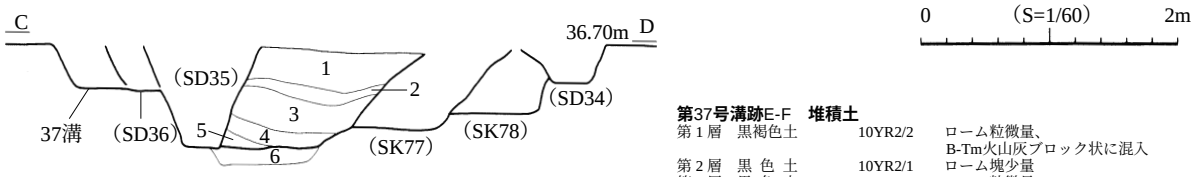


図160　平安時代の溝跡（6）







第37号溝跡A-B　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒、ローム塊微量
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量、ローム塊少量

第36号溝跡C-D　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒、ローム塊多量
第2層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒多量、ローム塊少量
第3層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒、ローム塊多量
第4層	黒 色 土	10YR2/1	砂と互層になる層
第5層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒多量混入
第6層	褐 色 土	10YR4/6	ロームとの混合土、掘り方

第37号溝跡E-F　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量、 B-Tm火山灰ブロック状に混入
第2層	黒 色 土	10YR2/1	ローム塊少量
第3層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第4層	黒 色 土	10YR2/1	ローム塊多量

第36号溝跡E-F　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第2層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第3層	黒 色 土	10YR2/1	ローム塊多量
第4層	褐 色 土	10YR4/4	ロームとの混合土
第5層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量、ローム塊少量
第6層	褐 色 土	10YR4/6	ロームとの混合土
第7層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	砂質土層
第8層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第9層	黄褐色土	10YR5/8	ロームとの混合土、掘り方

図161　平安時代の溝跡（7）

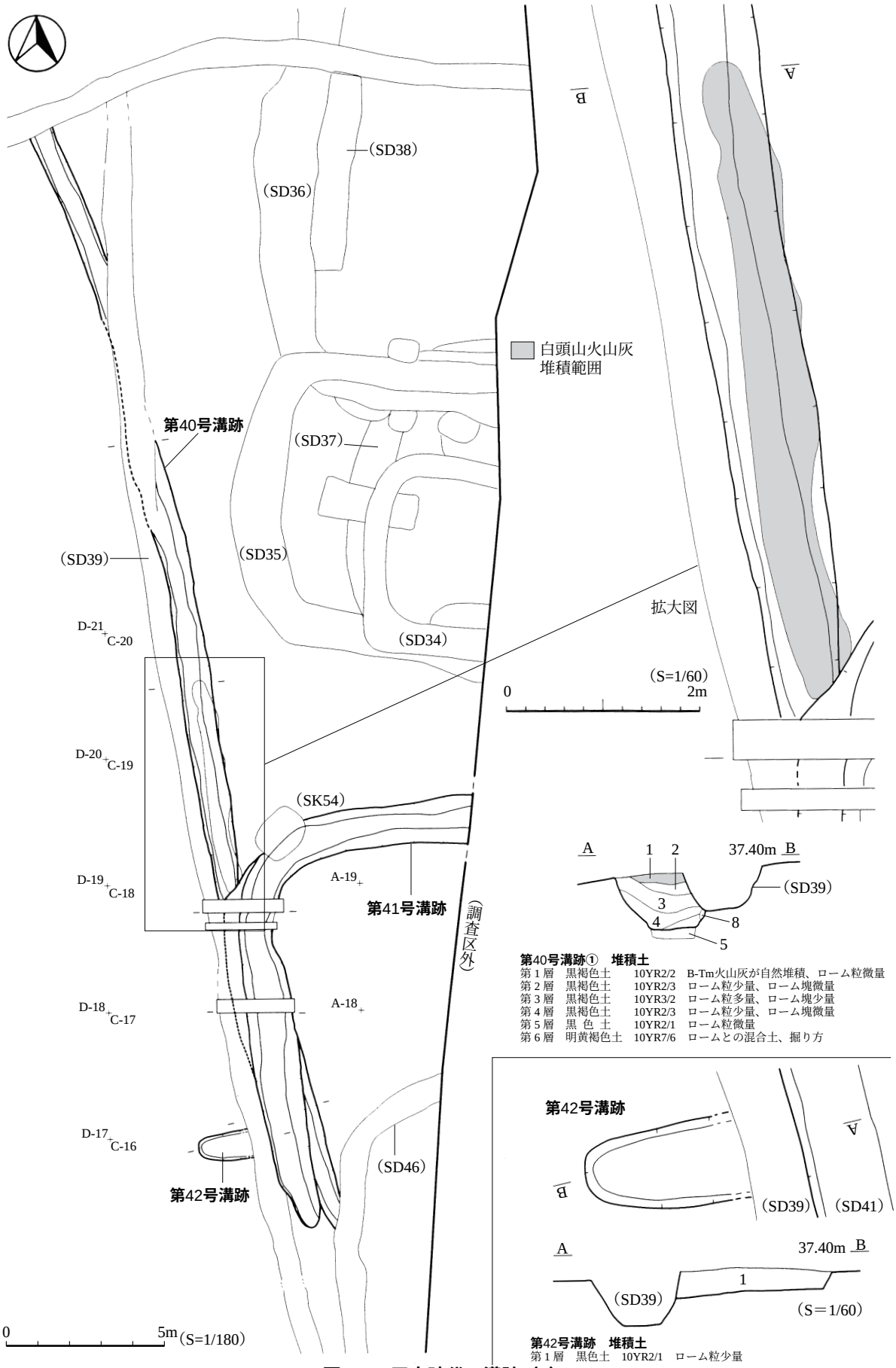
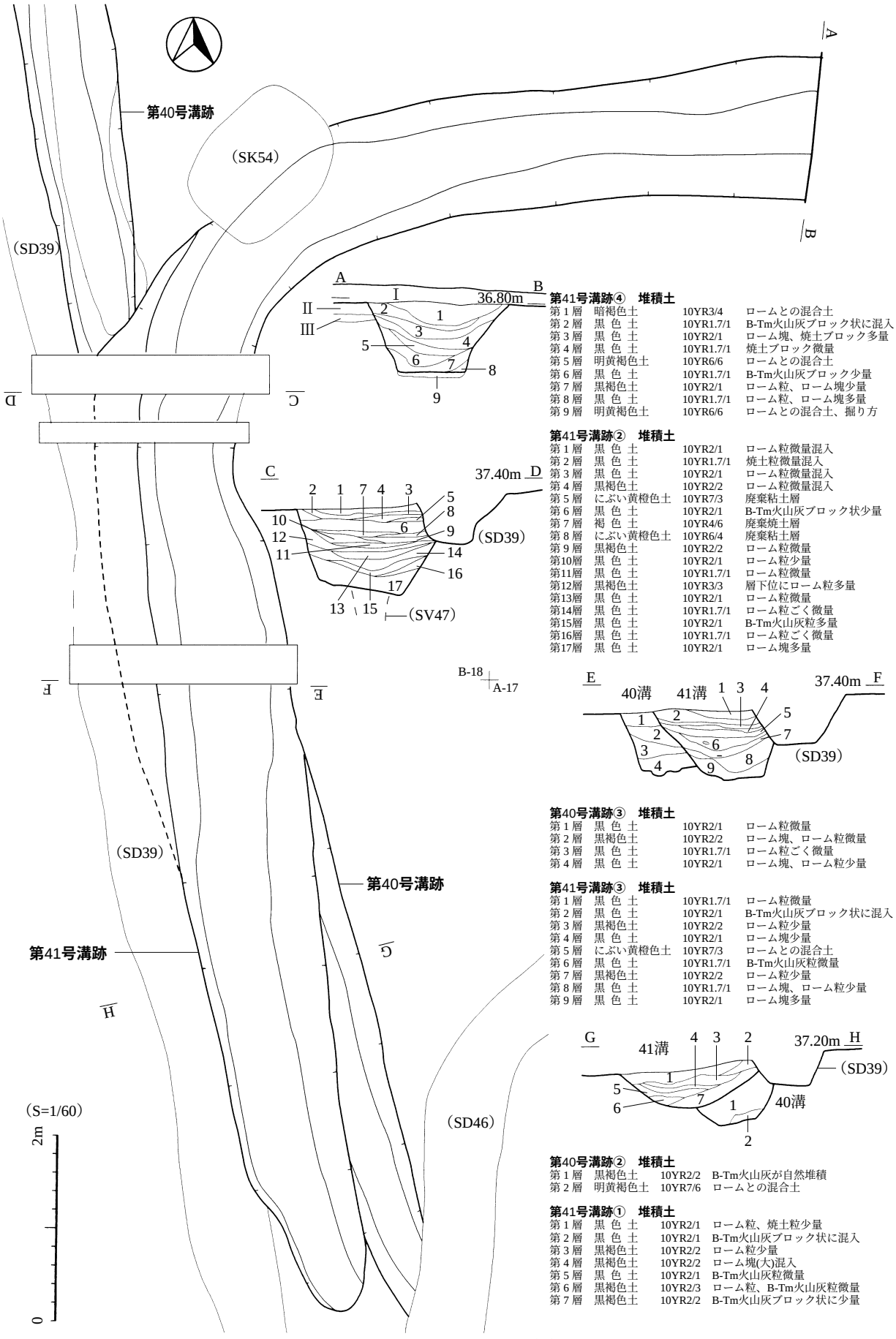


図162　平安時代の溝跡（8）



第41号溝跡④　堆積土

第1層	暗褐色土	10YR3/4	ロームとの混合土
第2層	黒 色 土	10YR1.7/1	B-Tm火山灰ブロック状に混入
第3層	黒 色 土	10YR2/1	ローム塊、焼土ブロック多量
第4層	黒 色 土	10YR1.7/1	焼土ブロック微量
第5層	明黄褐色土	10YR6/6	ロームとの混合土
第6層	黒 色 土	10YR1.7/1	B-Tm火山灰ブロック少量
第7層	黒褐色土	10YR2/1	ローム粒、ローム塊少量
第8層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒、ローム塊多量
第9層	明黄褐色土	10YR6/6	ロームとの混合土、掘り方

第41号溝跡②　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量混入
第2層	黒 色 土	10YR1.7/1	焼土粒微量混入
第3層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量混入
第4層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量混入
第5層	にぶい黄橙色土	10YR7/3	廃棄粘土層
第6層	黒 色 土	10YR2/1	B-Tm火山灰ブロック状少量
第7層	褐 色 土	10YR4/6	廃棄焼土層
第8層	にぶい黄橙色土	10YR6/4	廃棄粘土層
第9層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量
第10層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量
第11層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第12層	黒褐色土	10YR3/3	層下位にローム粒多量
第13層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第14層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒ごく微量
第15層	黒 色 土	10YR2/1	B-Tm火山灰粒多量
第16層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒ごく微量
第17層	黒 色 土	10YR2/1	ローム塊多量

第40号溝跡③　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊、ローム粒微量
第3層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒ごく微量
第4層	黒 色 土	10YR2/1	ローム塊、ローム粒少量

第41号溝跡③　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第2層	黒 色 土	10YR2/1	B-Tm火山灰ブロック状に混入
第3層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量
第4層	黒 色 土	10YR2/1	ローム塊少量
第5層	にぶい黄橙色土	10YR7/3	ロームとの混合土
第6層	黒 色 土	10YR1.7/1	B-Tm火山灰粒微量
第7層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量
第8層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム塊、ローム粒少量
第9層	黒 色 土	10YR2/1	ローム塊多量

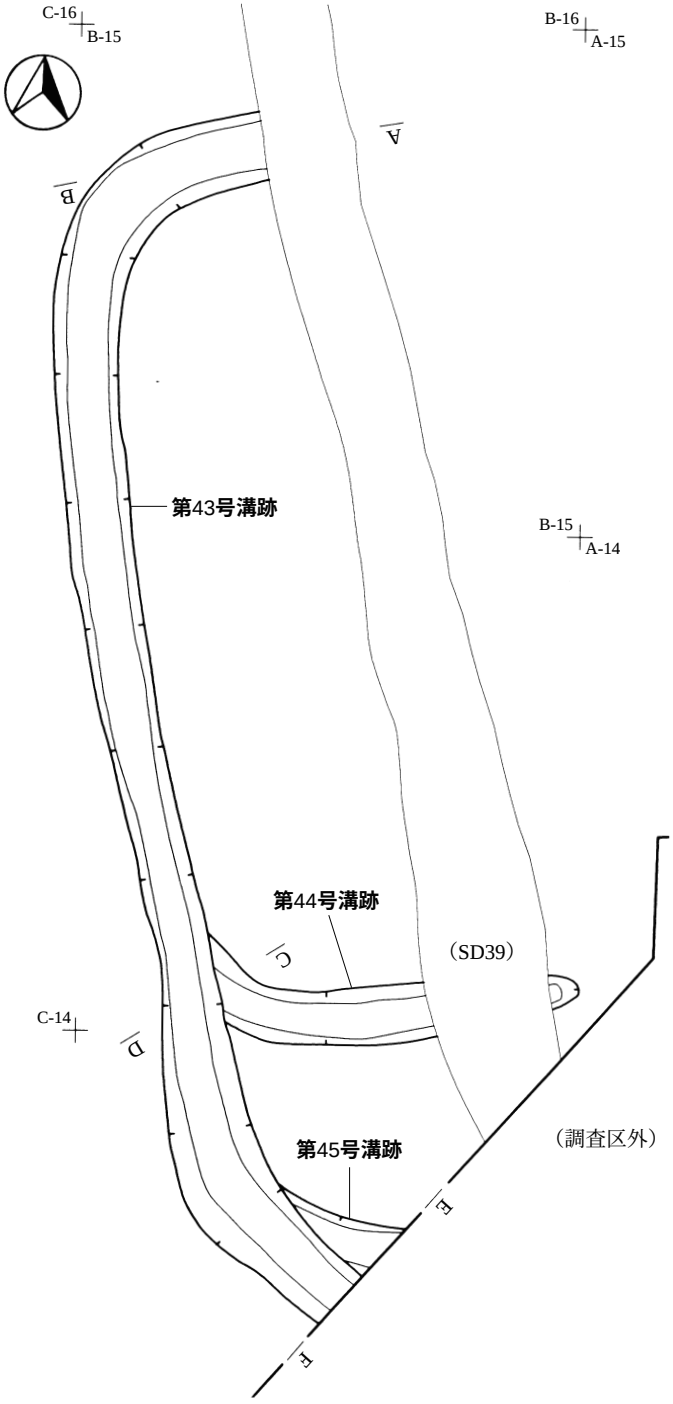
第40号溝跡②　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/2	B-Tm火山灰が自然堆積
第2層	明黄褐色土	10YR7/6	ロームとの混合土

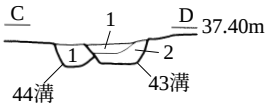
第41号溝跡①　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒、焼土粒少量
第2層	黒 色 土	10YR2/1	B-Tm火山灰ブロック状に混入
第3層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量
第4層	黒褐色土	10YR2/2	ローム塊(大)混入
第5層	黒 色 土	10YR2/1	B-Tm火山灰粒微量
第6層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒、B-Tm火山灰粒微量
第7層	黒褐色土	10YR2/2	B-Tm火山灰ブロック状に少量

図163　平安時代の溝跡（9）

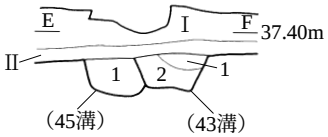


第43号溝跡①　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量



第43号溝跡②　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第２層　褐 色 土　10YR4/6　ロームとの混合土

第44号溝跡　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒微量



第43号溝跡③　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第２層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒多量、ローム塊少量

第45号溝跡　堆積土
第１層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量

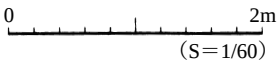
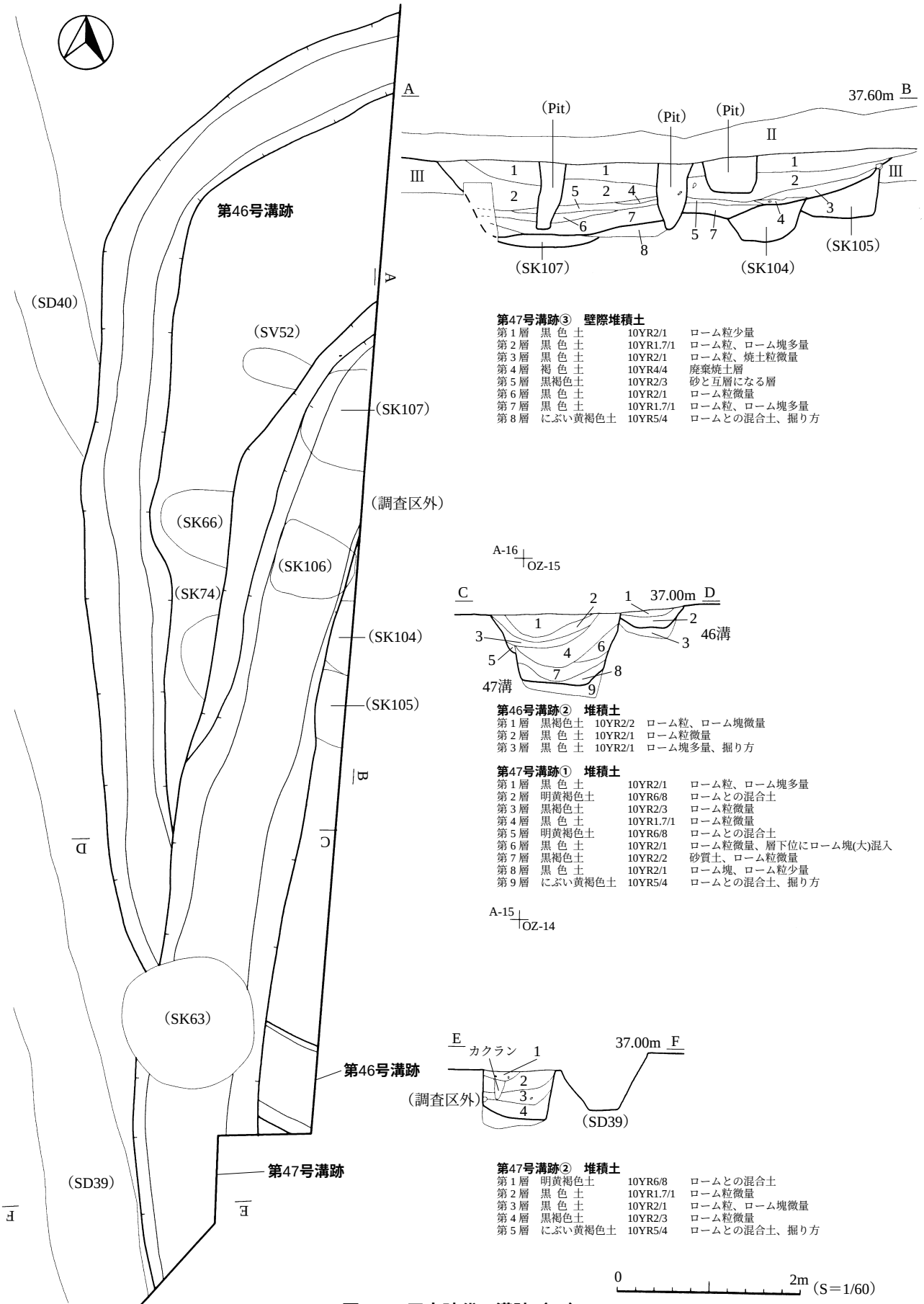


図164　平安時代の溝跡（10）



第47号溝跡③　壁際堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量
第2層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒、ローム塊多量
第3層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒、焼土粒微量
第4層	褐 色 土	10YR4/4	廃棄焼土層
第5層	黒褐色土	10YR2/3	砂と互層になる層
第6層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第7層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒、ローム塊多量
第8層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	ロームとの混合土、掘り方

第46号溝跡②　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒、ローム塊微量
第2層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第3層	黒 色 土	10YR2/1	ローム塊多量、掘り方

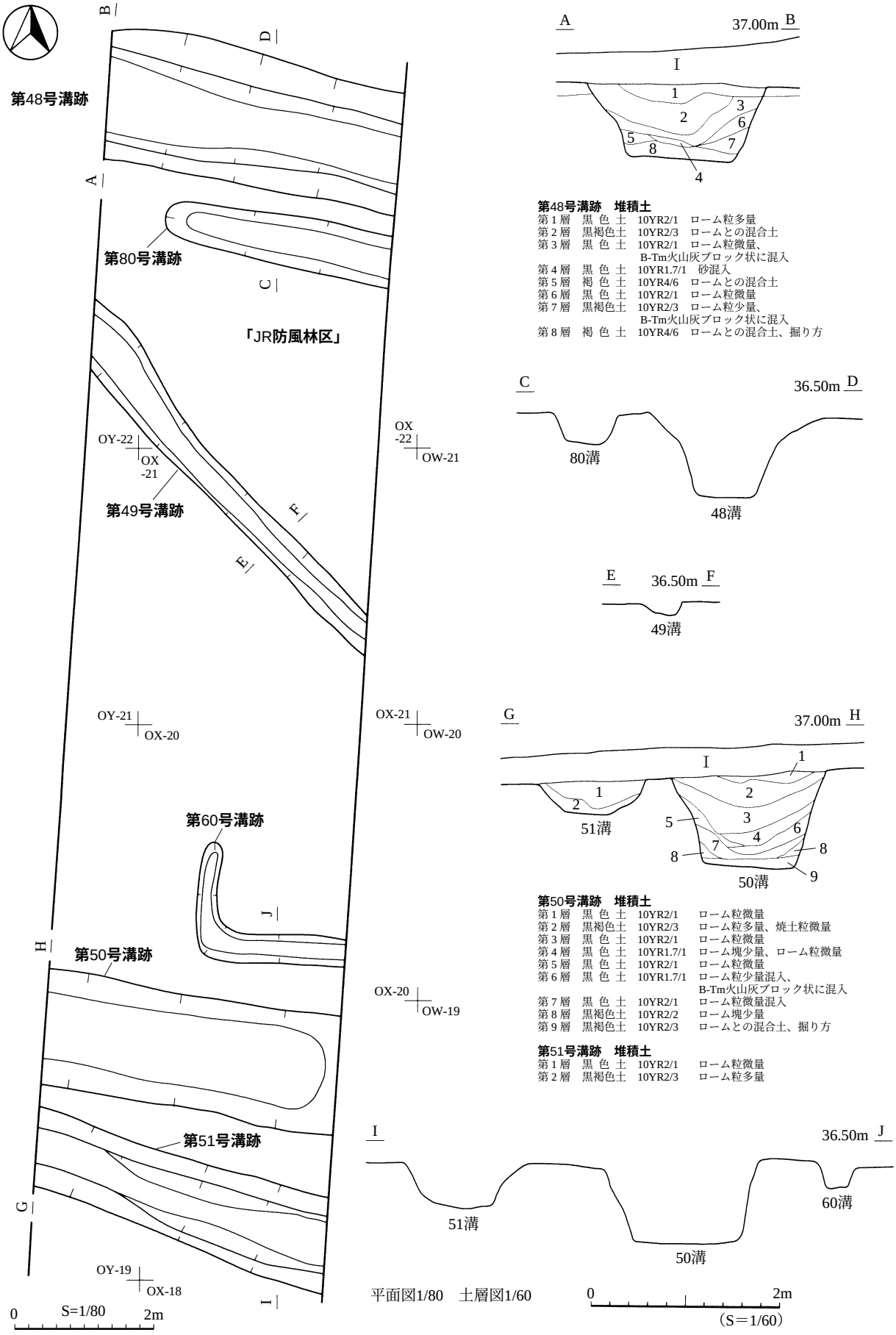
第47号溝跡①　堆積土

第1層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒、ローム塊多量
第2層	明黄褐色土	10YR6/8	ロームとの混合土
第3層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒微量
第4層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第5層	明黄褐色土	10YR6/8	ロームとの混合土
第6層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量、層下位にローム塊(大)混入
第7層	黒褐色土	10YR2/2	砂質土、ローム粒微量
第8層	黒 色 土	10YR2/1	ローム塊、ローム粒少量
第9層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	ロームとの混合土、掘り方

第47号溝跡②　堆積土

第1層	明黄褐色土	10YR6/8	ロームとの混合土
第2層	黒 色 土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第3層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒、ローム塊微量
第4層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒微量
第5層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	ロームとの混合土、掘り方

図165　平安時代の溝跡（11）

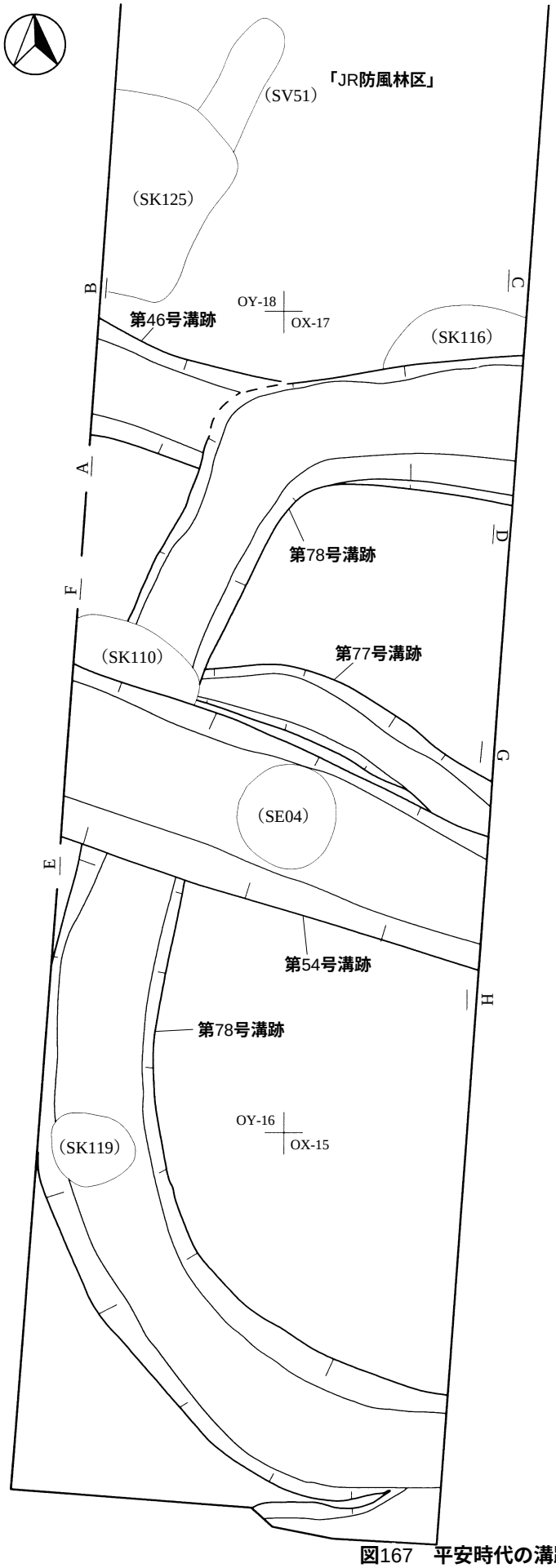


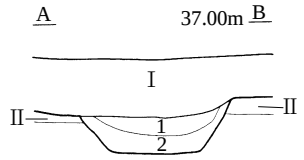
第48号溝跡　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒多量
第２層　黒褐色土　10YR2/3　ロームとの混合土
第３層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量、B-Tm火山灰ブロック状に混入
第４層　黒 色 土　10YR1.7/1　砂混入
第５層　褐 色 土　10YR4/6　ロームとの混合土
第６層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第７層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒少量、B-Tm火山灰ブロック状に混入
第８層　褐 色 土　10YR4/6　ロームとの混合土、掘り方

第50号溝跡　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第２層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒多量、焼土粒微量
第３層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第４層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム塊少量、ローム粒微量
第５層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第６層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム粒少量混入、B-Tm火山灰ブロック状に混入
第７層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量混入
第８層　黒褐色土　10YR2/2　ローム塊少量
第９層　黒褐色土　10YR2/3　ロームとの混合土、掘り方

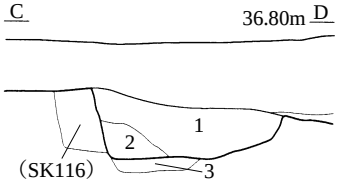
第51号溝跡　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第２層　黒褐色土　10YR2/3　ローム粒多量

図166　平安時代の溝跡（12）

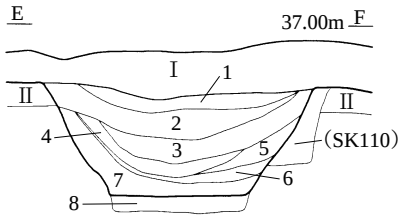




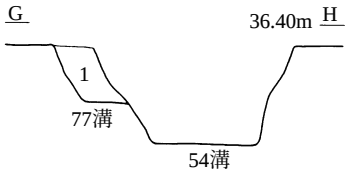
第46号溝跡(防風林)　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第２層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒少量、ローム塊微量



第78号溝跡　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム粒微量
第２層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量、焼土粒微量
第３層　黒褐色土　10YR2/3　ロームとの混合土、掘り方



第54号溝跡　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第２層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム粒多量、ローム塊少量
第３層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒少量
第４層　褐 色 土　10YR4/4　ロームとの混合土
第５層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム粒微量
第６層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒少量
第７層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第８層　褐 色 土　10YR4/6　ロームとの混合土



第77号溝跡　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム粒微量

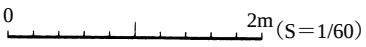


図167　平安時代の溝跡（13）

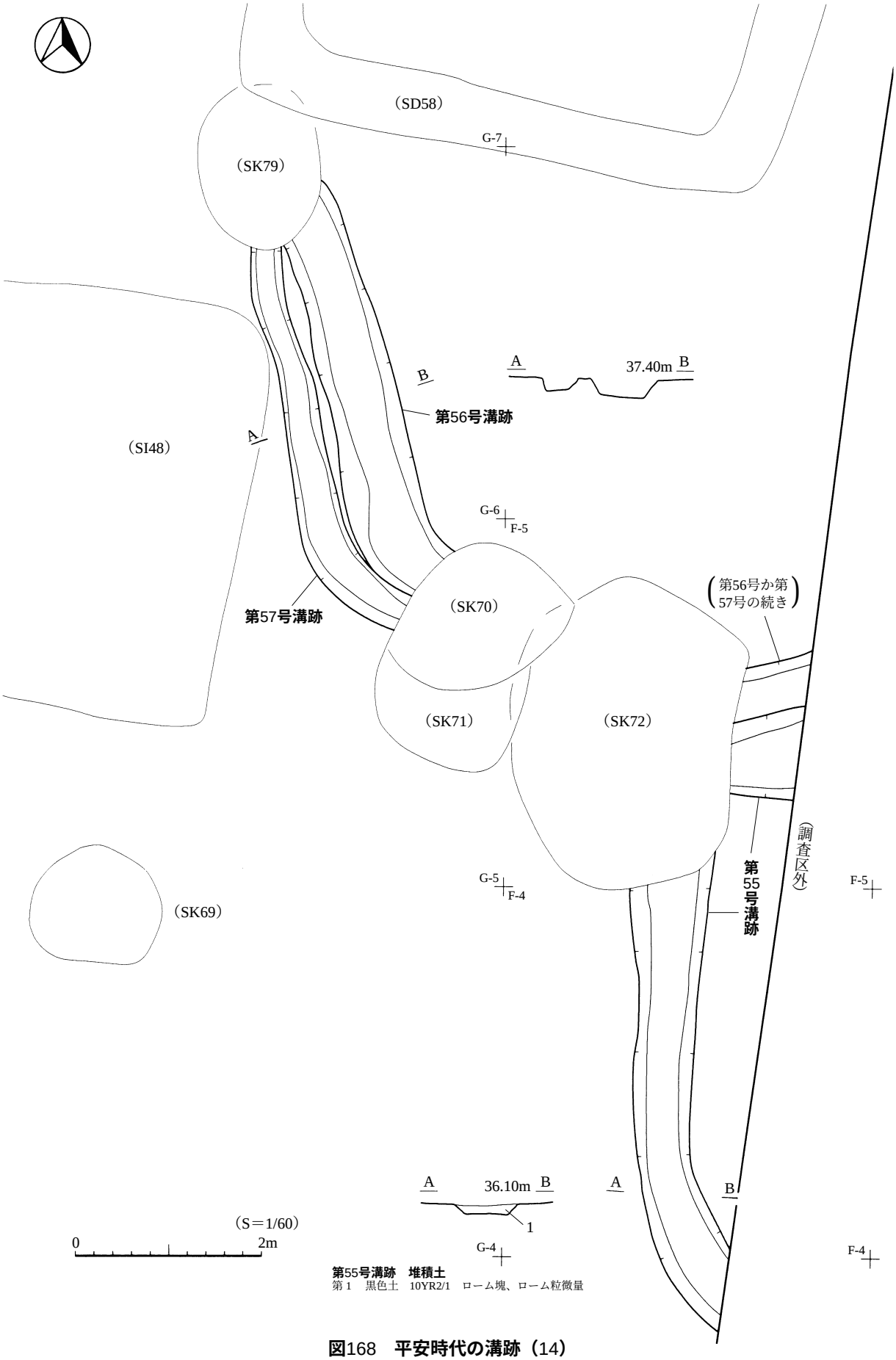
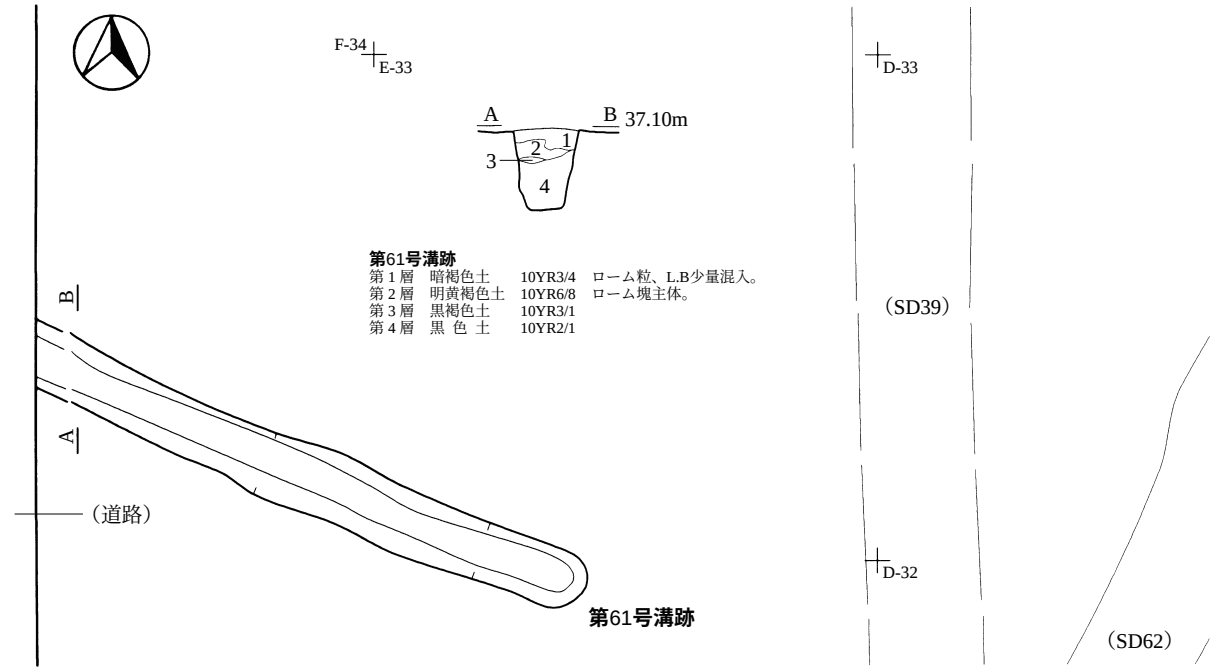
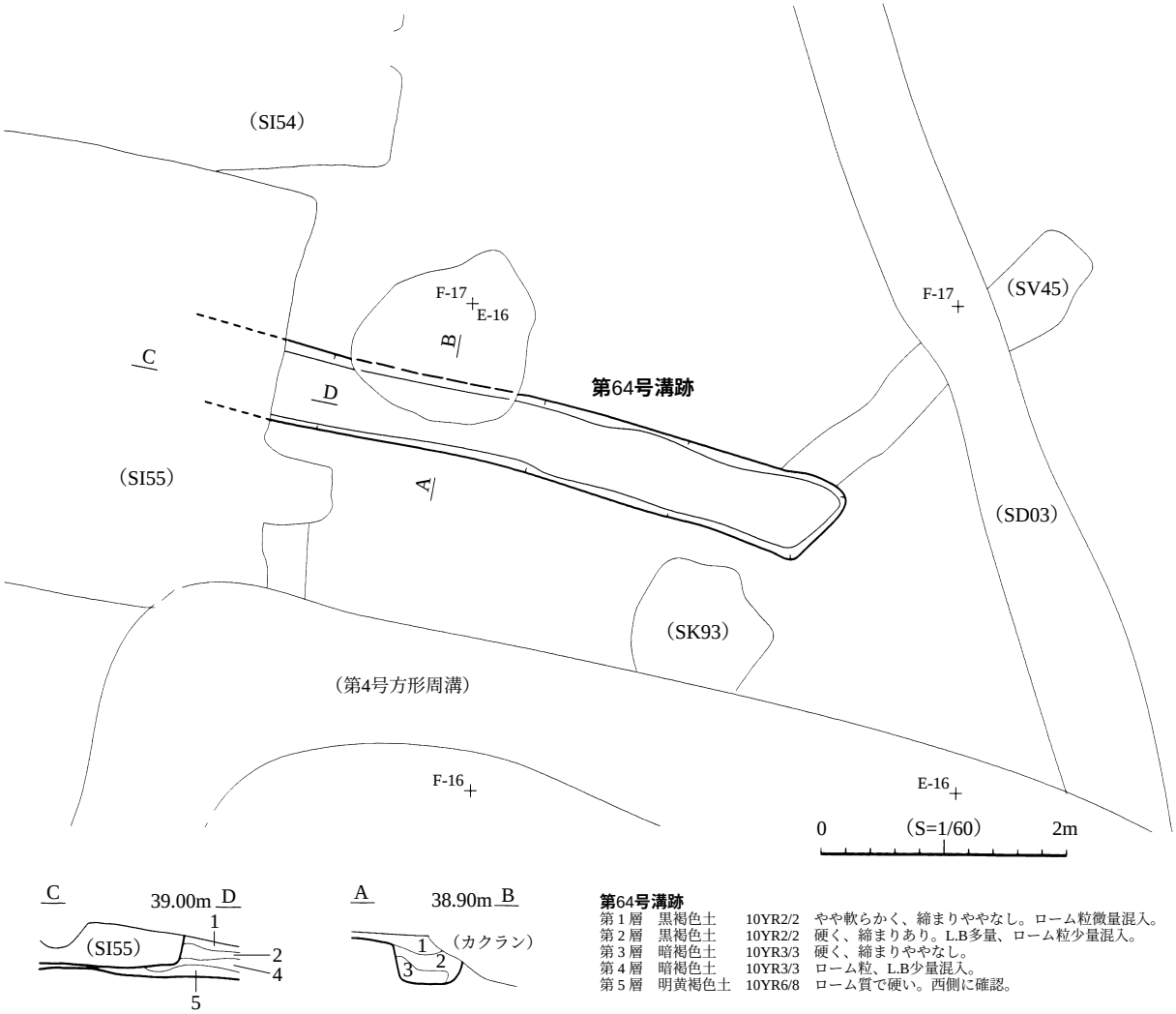


図168　平安時代の溝跡（14）



第61号溝跡

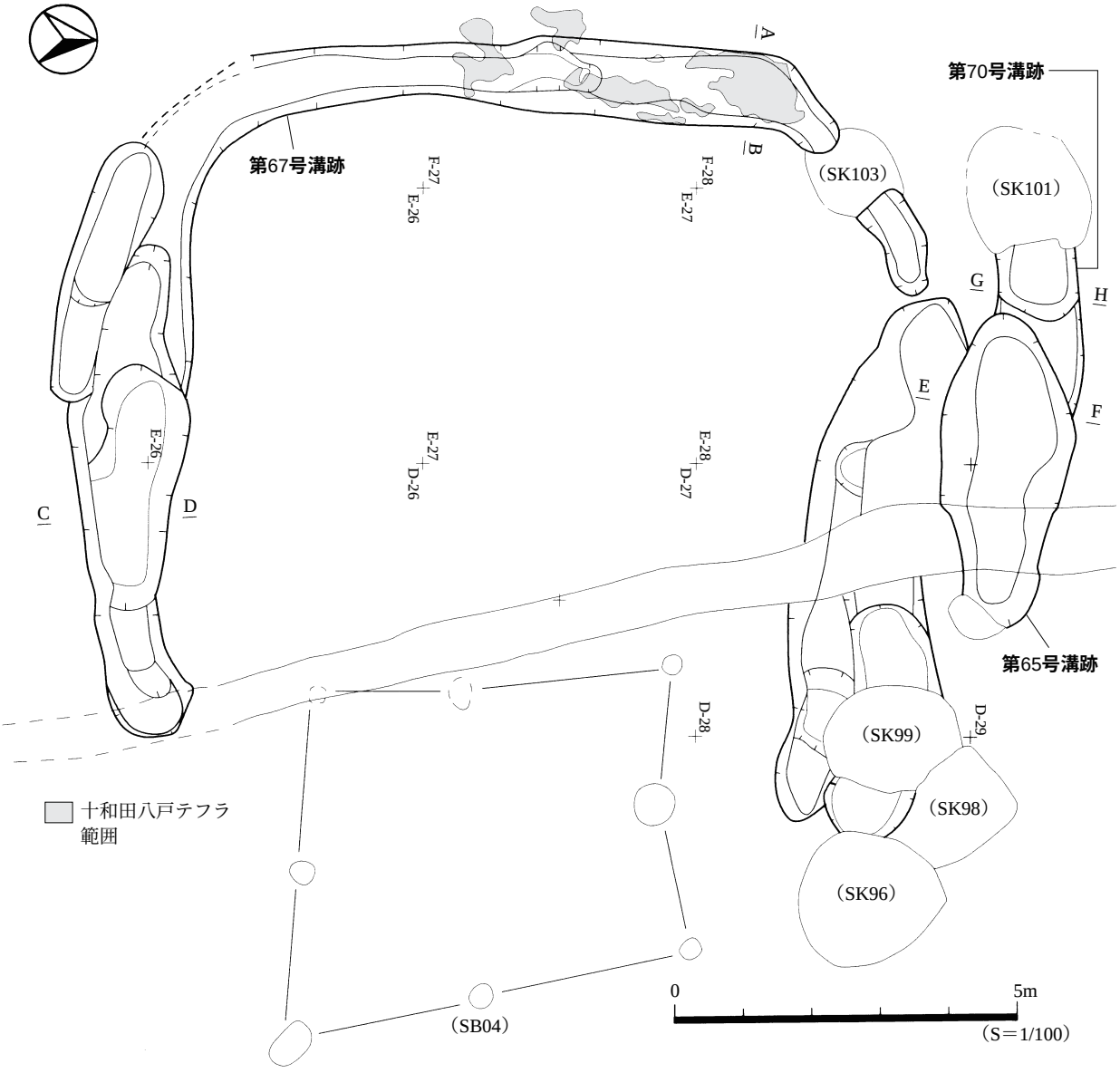
第１層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒、L.B少量混入。
第２層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム塊主体。
第３層	黒褐色土	10YR3/1	
第４層	黒 色 土	10YR2/1	

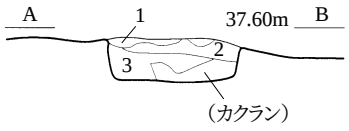


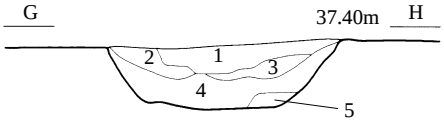
第64号溝跡

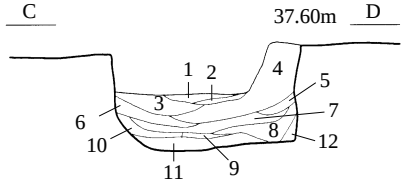
第１層	黒褐色土	10YR2/2	やや軟らかく、締まりややなし。ローム粒微量混入。
第２層	黒褐色土	10YR2/2	硬く、締まりあり。L.B多量、ローム粒少量混入。
第３層	暗褐色土	10YR3/3	硬く、締まりややなし。
第４層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒、L.B少量混入。
第５層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム質で硬い。西側に確認。

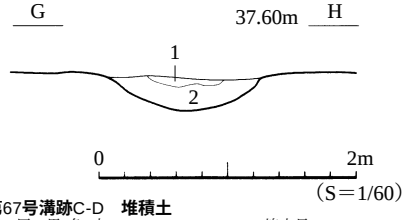
図169　平安時代の溝跡（15）











第65号溝跡　堆積土
第１層　黄褐色土　10YR5/8　ロームとの混合土層
第２層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第３層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム粒、粘土塊微量
第４層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第５層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム塊(大)混入

第67号溝跡A-B　堆積土
第１層　灰黄褐色土　10YR4/2　ローム質土
第２層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第３層　黒 色 土　10YR2/1　粘土塊少量

第70号溝跡　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム塊少量
第２層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒、炭化物微量

第67号溝跡C-D　堆積土
第１層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム塊少量
第２層　黒 色 土　10YR2/1　炭化物微量
第３層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒少量
第４層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム粒少量
第５層　黒 色 土　10YR1.7/1　ローム塊少量
第６層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒少量、ローム塊微量
第７層　黒褐色土　10YR2/3　ローム塊微量
第８層　黒 色 土　10YR2/1　ローム塊微量
第９層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒微量
第10層　黒 色 土　10YR2/1　ローム粒微量
第11層　黒 色 土　10YR2/1　ロームとの混合土層
第12層　浅黄橙色土　10YR8/4　ロームとの混合土層

図170　平安時代の溝跡（16）

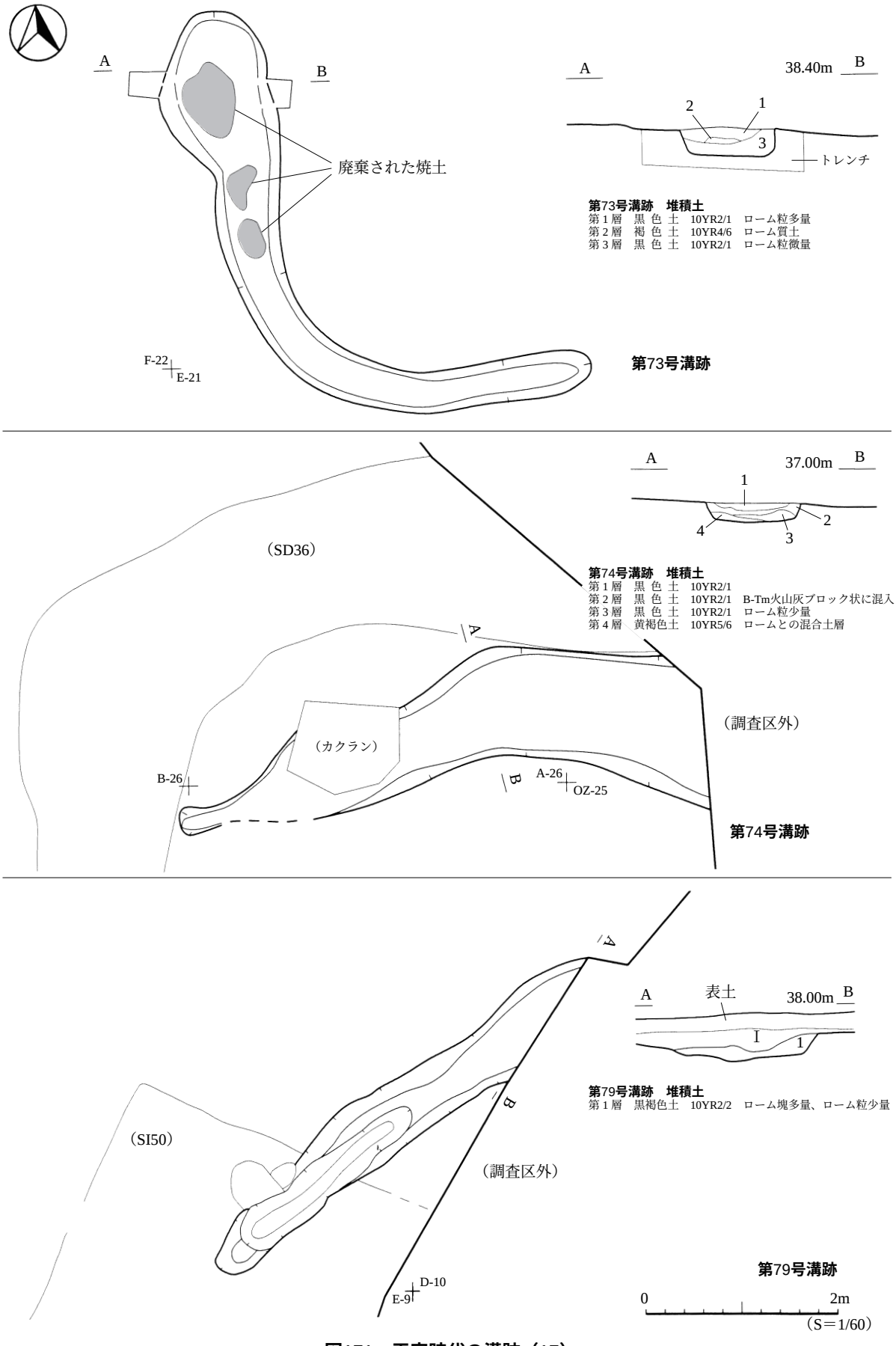


図171　平安時代の溝跡（17）

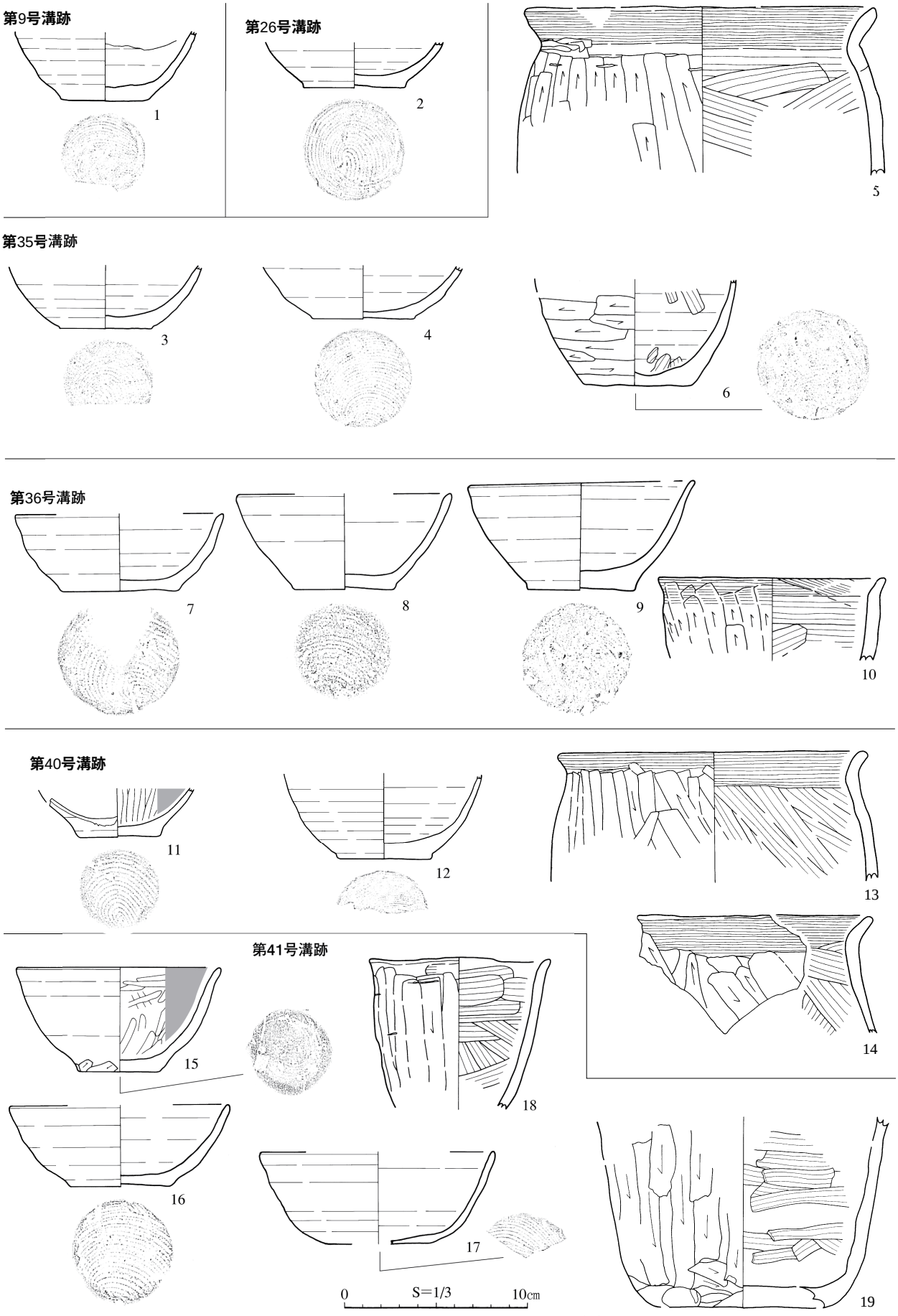
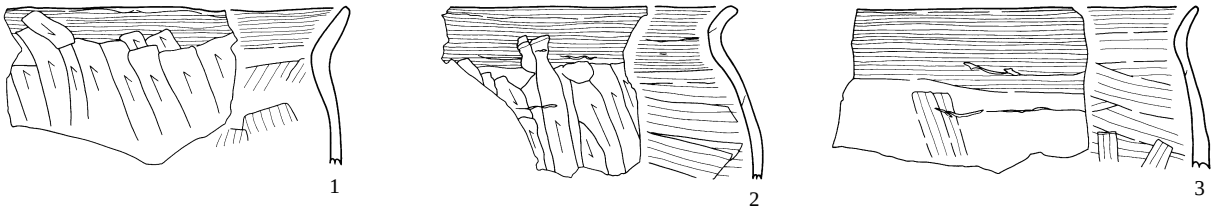
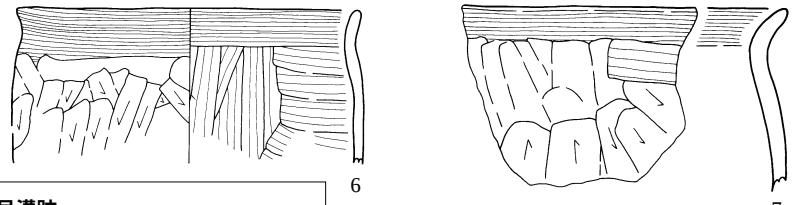


図172　平安時代の溝跡出土土師器（1）

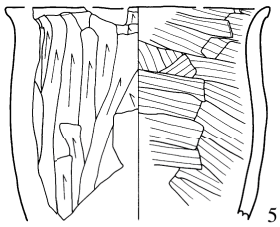
第47号溝跡



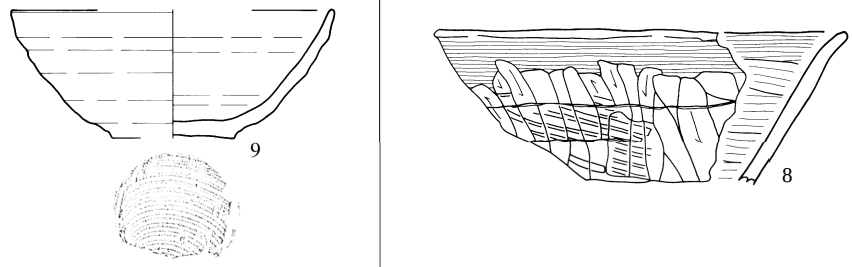
第50号溝跡



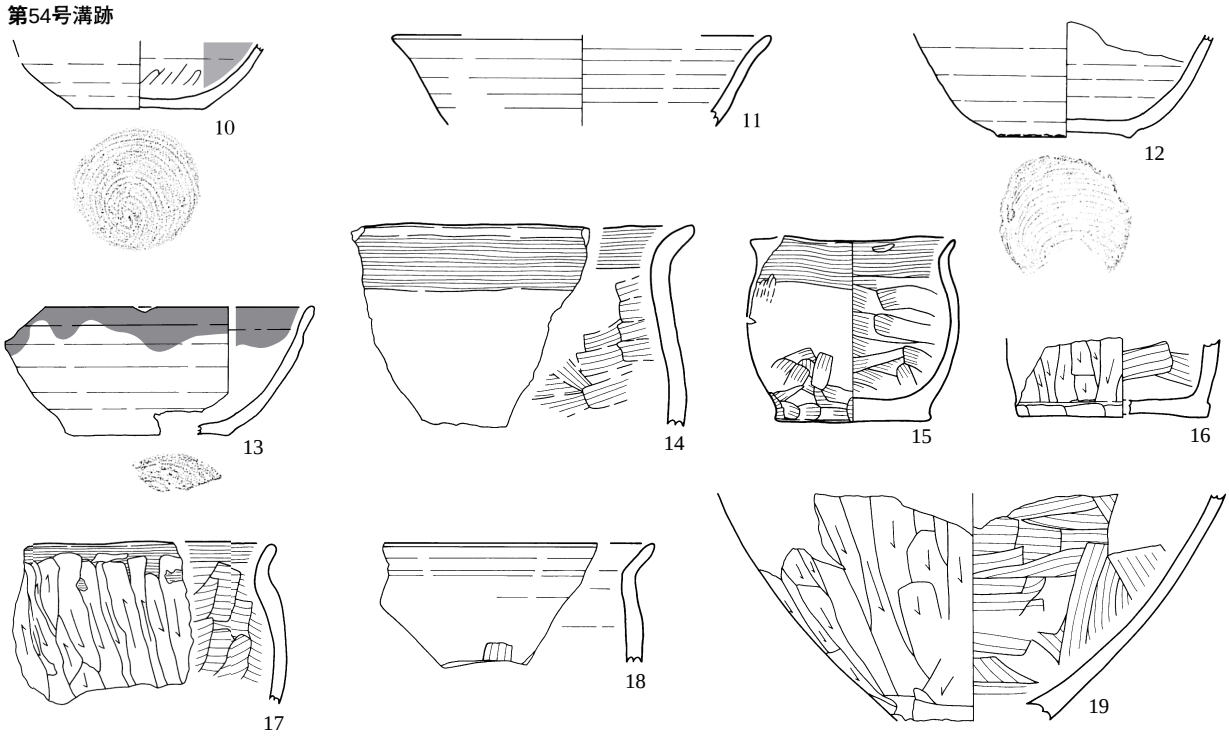
第48号溝跡



第57号溝跡



第54号溝跡



第65号溝跡

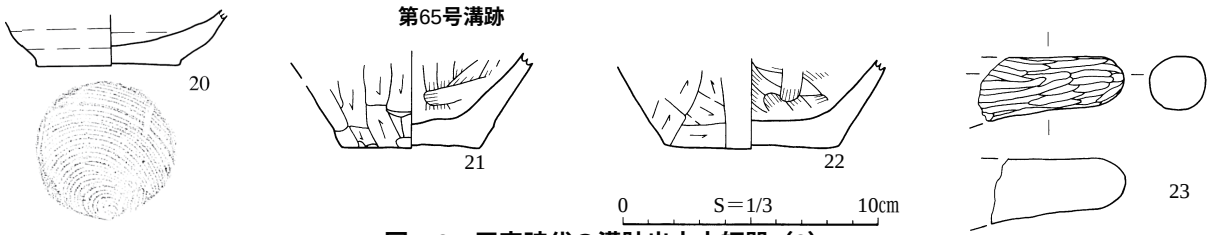


図173　平安時代の溝跡出土土師器（2）

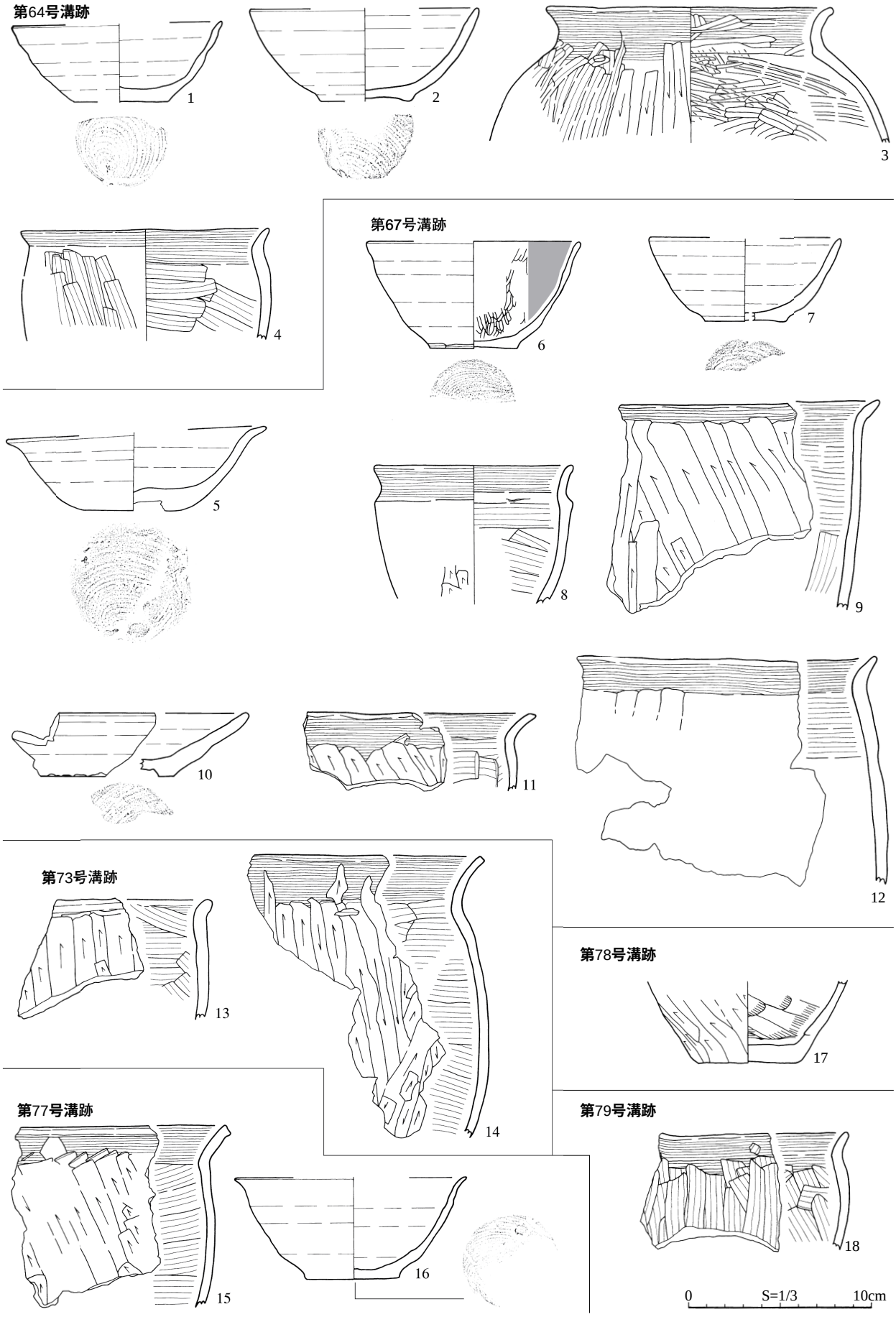


図174　平安時代の溝跡出土土師器（3）

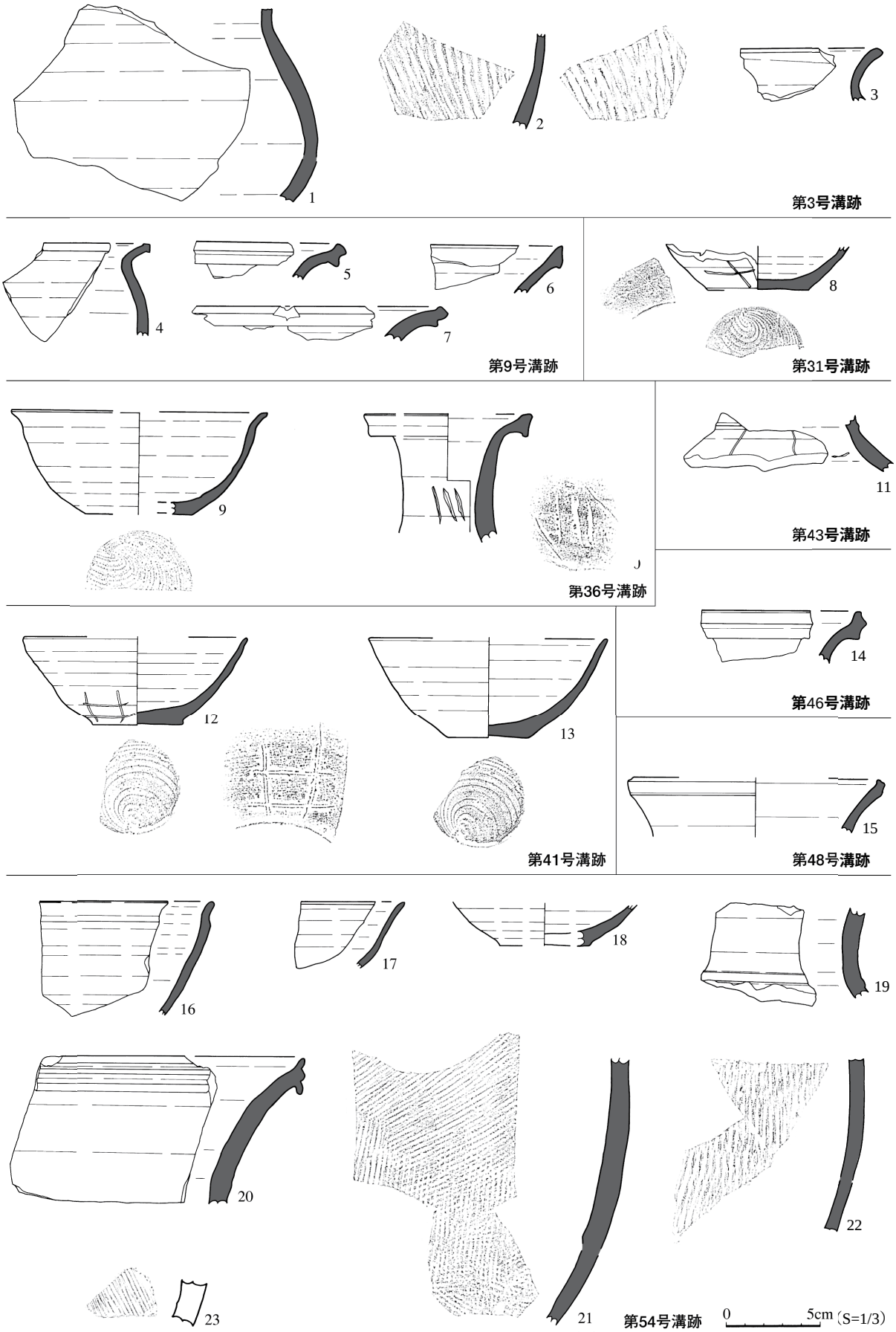


図175　平安時代溝跡出土須恵器（1）

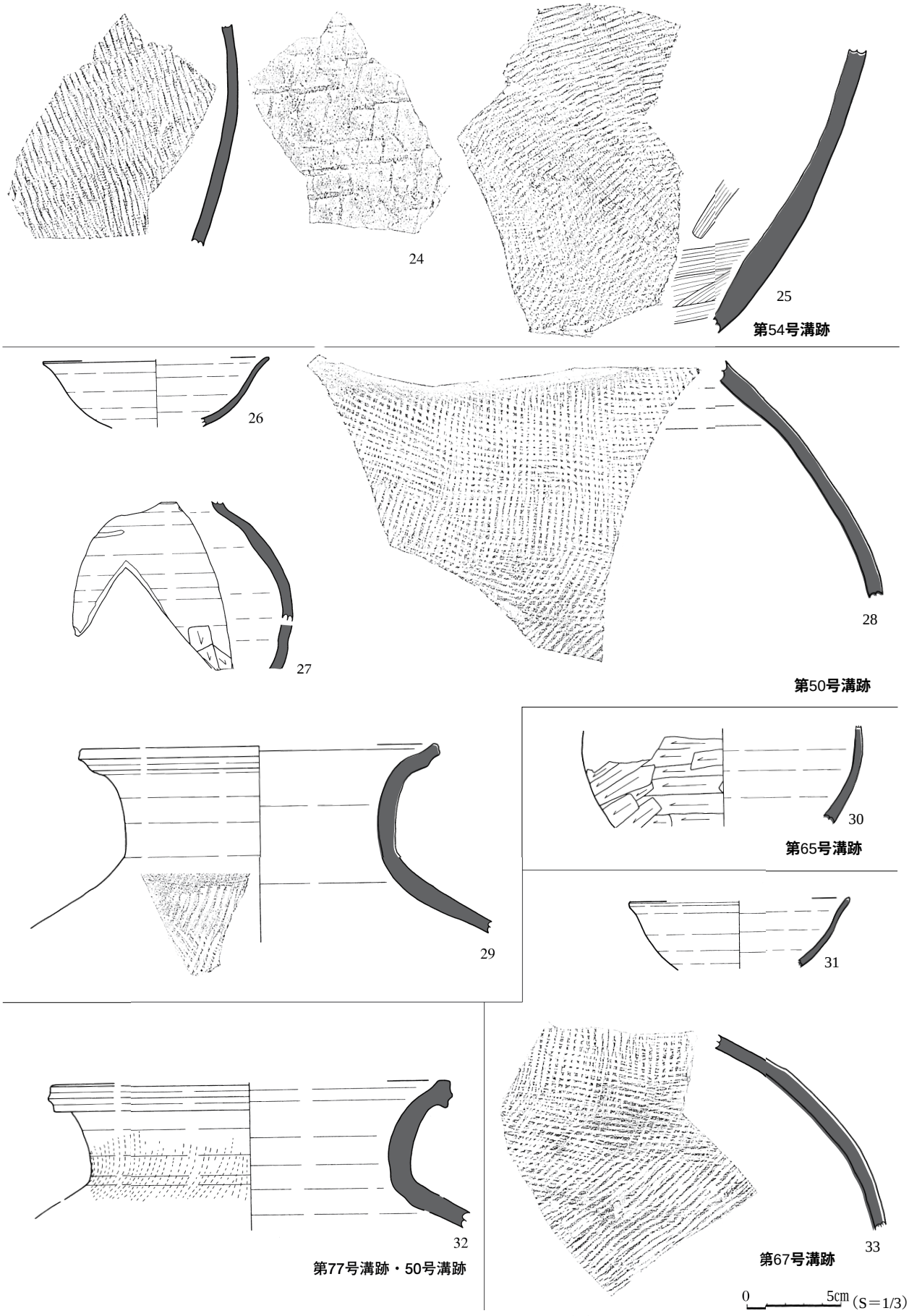


図176　平安時代溝跡出土須恵器（2）

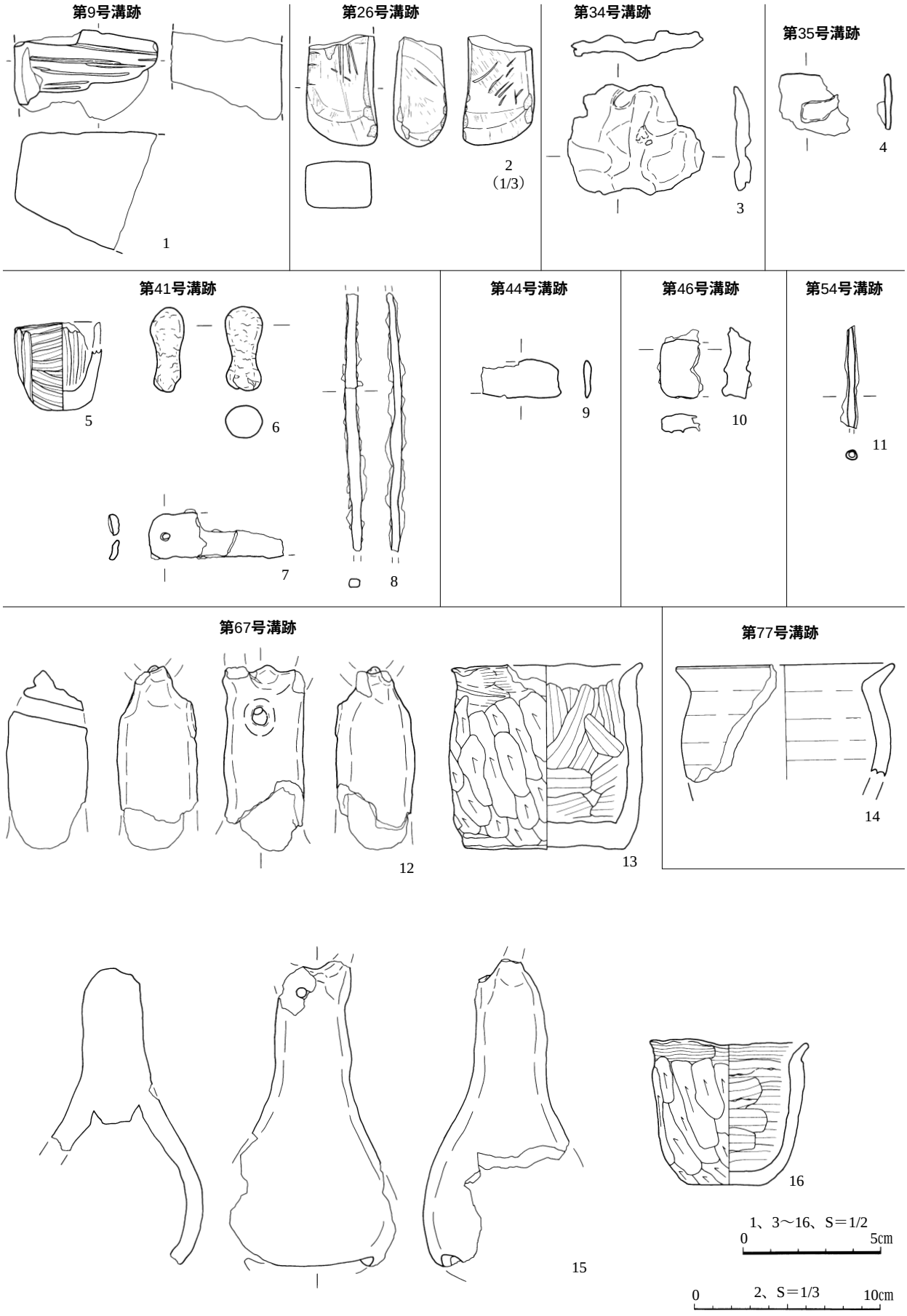


図177　平安時代の溝跡出土遺物（石器・ミニチュア土器・土製品・金属製品）

第10節　道　跡（ＳＸ01）（図178）

［位置］調査区の東南隅Ｂ－13グリッドから北西隅のＴ－77グリッドまで、遺跡を南北に縦断するように検出されている。調査区の東南では住居跡群と低地の溝跡群との間に検出され、13ラインから30ラインまでは第３号溝跡と並行している。30ラインを過ぎたあたりから緩やかな傾斜面を斜めに横切り、北側に位置する高屋敷館遺跡方面へと続く。

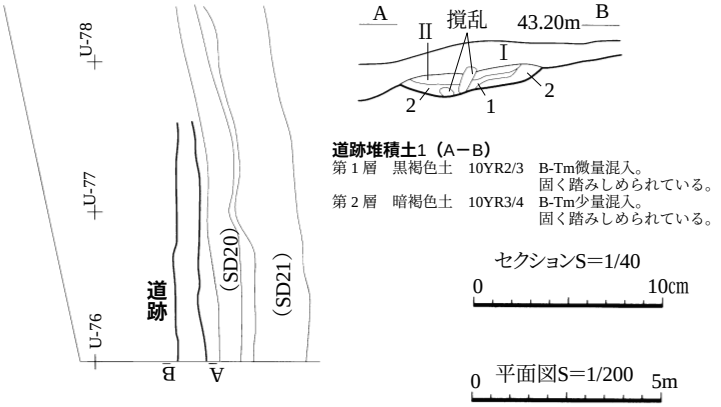
［重複］時期が不明な第１号・２号溝跡よりも古い。平安時代の第45号、47号溝跡よりは新しい。また、第118号土坑との新旧関係は不明であるが、これよりも古い可能性が高い。

［規模・構造］おおむね幅70～100㎝であるが、遺存状態が良好なところでは1.4～1.7mのところがあり、本来はこのくらいの規模のところもあったと思われる。底面は約10㎝窪んでおり、硬く踏みしめられている。確認できなかった部分もあるが、約300mを検出した。

［堆積土］場所によって若干の違いがあるが、黒褐色土や暗褐色土の堆積が見られ、上部には白頭山火山灰（第９章第４節参照）が堆積している。場所によっては硬化面が２面見られところもあり（セクション３）、なかには、道跡の底面に火山灰が密着しているように、硬く踏みしめられているところも見られた。

［出土遺物］堆積土及び火山灰の上から土師器８点（122ｇ）、縄文土器３点（32ｇ）が出土した。

［小結］かつては野尻（３）遺跡や高屋敷館遺跡でも検出され、今回の調査でも本遺跡や隣接する高屋敷遺跡南西地区の調査でも検出された。上限は不明であるが、白頭山火山灰の堆積及び硬化面の観察からは、白頭山火山灰の降下以後のある時期までは利用されていたことが考えられる。（畠山）



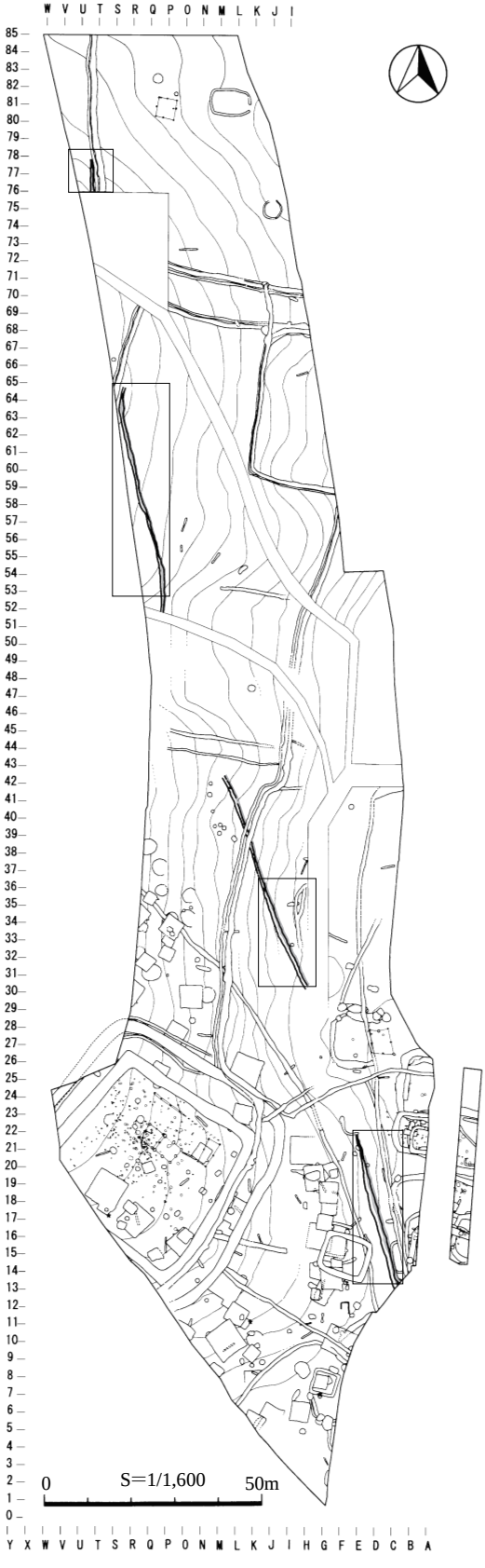
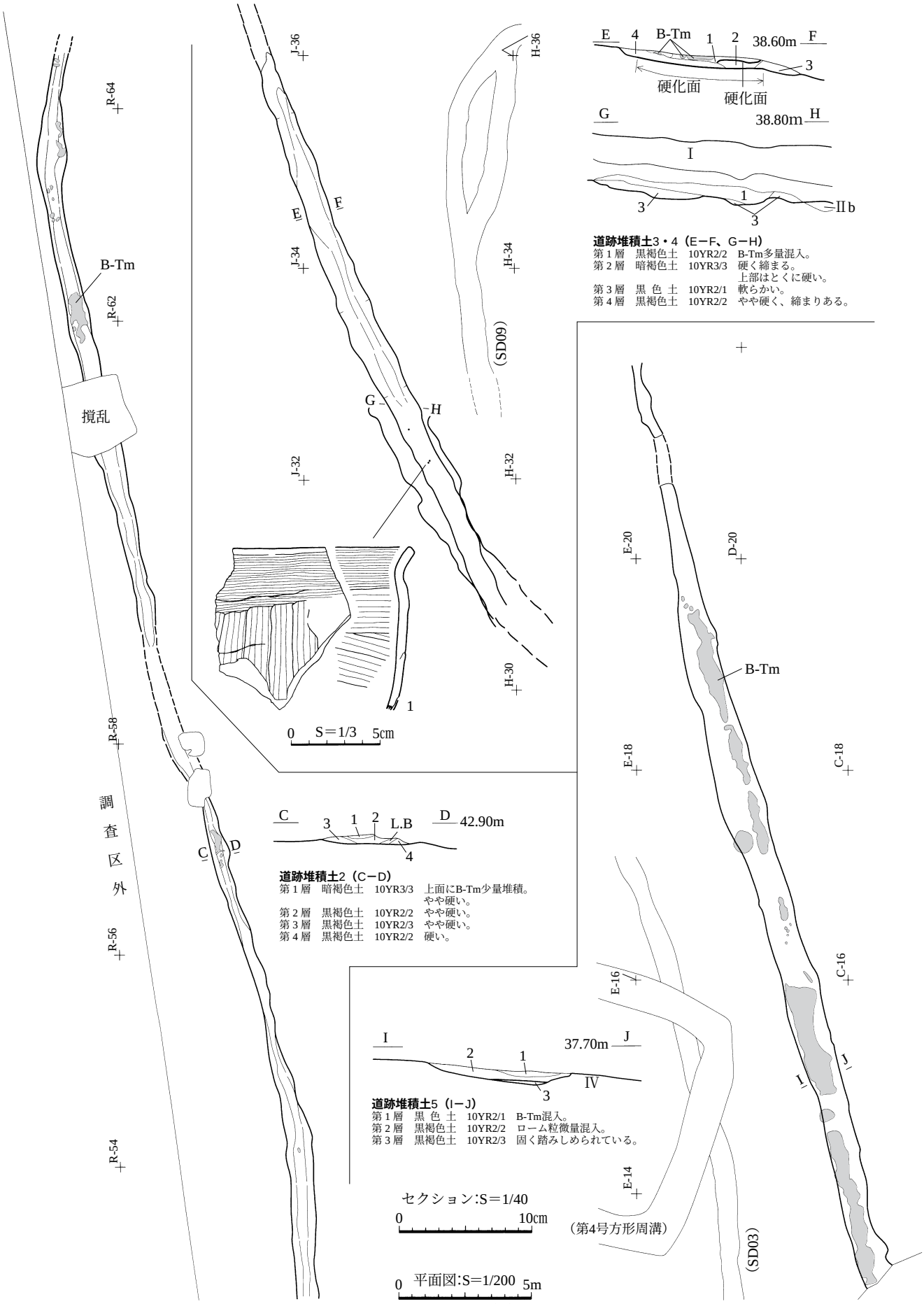


図178　道跡（1）



道跡堆積土3・4（E－F、G－H）
第1層　黒褐色土　10YR2/2　B-Tm多量混入。
第2層　暗褐色土　10YR3/3　硬く締まる。
　　上部はとくに硬い。
第3層　黒 色 土　10YR2/1　軟らかい。
第4層　黒褐色土　10YR2/2　やや硬く、締まりある。

道跡堆積土2（C－D）
第1層　暗褐色土　10YR3/3　上面にB-Tm少量堆積。
　　やや硬い。
第2層　黒褐色土　10YR2/2　やや硬い。
第3層　黒褐色土　10YR2/3　やや硬い。
第4層　黒褐色土　10YR2/2　硬い。

道跡堆積土5（I－J）
第1層　黒 色 土　10YR2/1　B-Tm混入。
第2層　黒褐色土　10YR2/2　ローム粒微量混入。
第3層　黒褐色土　10YR2/3　固く踏みしめられている。

図179　道跡（2）

第11節　土器埋設遺構

第２号土器埋設遺構（図180）

［位置・重複］Ｇ－７グリッドに位置している。第３号方形周溝との新旧関係は不明である。

［土器・堆積土］土師器の甕が胴部付近で２つに割られており、口縁部側の中に、底部側が倒立した状態で埋められている。第３号方形周溝の堆積土を掘り込む線は確認できなかった。

［小結］第３号方形周溝より新しいことを確認できず、同時に埋没した可能性も考えられる。その為、本遺構の年代は10世紀中葉以降と考えられる。

第３号土器埋設遺構（図180）

［位置・重複］Ｋ－11グリッドに位置している。第27号住居跡より新しい。

［土器・掘り方・堆積土］土師器の甕と、土師器の小型甕と須恵器坏が使用されている。土師器の甕の中に須恵器坏を入れ込み、更にその中に、小型の甕を横にして置かれている。掘り方は円形に掘り込まれており、規模は径30㎝、深さ15㎝である。小型甕内の堆積土は、掘り方の堆積土とほぼ同様であるが、土に締まりがない。

［小結］第27号住居よりも新しい事より、10世紀代には構築されていたと考えられる。（小山）

第12節　性格不明遺構

第１号性格不明遺構（ＳＸ02）（図180）

［位置］Ｅ・Ｆ－26グリッドに位置している。

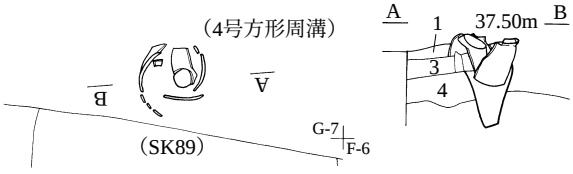
［構造］本遺構の構造は、古代の竪穴住居跡に付設されるカマドと酷似する。袖部および煙道部は黒色土（Ⅱb層）を３～５㎝程掘り込んだ後、にぶい黄褐色粘土を盛って構築されている。煙道部南西側の一部と南側は粘土が検出されなかったが、本来は粘土が盛られ、両袖と繋がるものと推定される。煙道は半地下式で、煙道底面は燃焼部から中央に向かい３㎝程高まり、煙出しに向かい３㎝程下る。燃焼部中央には土師器甕が支脚として据えられている。主軸方位はＮ－130°－wである。

［平面形・規模］袖部に相当する粘土が北西側で37×63㎝、南東側で18×46㎝の範囲で検出され、南西側に煙道部に相当する粘土が32×42㎝の範囲で検出された。また、両袖のほぼ中央に火床面に相当する焼土が33×35㎝の不整方形で検出された。

［堆積土］８層に分層された。１～３層は天井部の崩落土と思われる。４層は袖部構築粘土である。５層と11層は焼土層であるが、11層はレンガ状に固化しており、火床面に相当する。

［出土遺物］土師器片12点（195ｇ）が出土した。図180-６は支脚に使用されていたもので小型の土師器甕である。

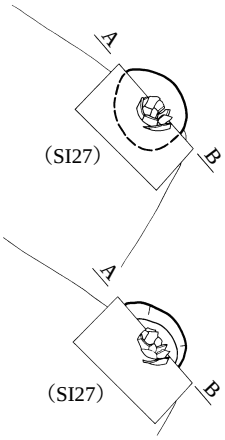
［小結］本遺構の周辺からは住居跡の痕跡は検出されていない。また、本遺跡の竪穴住居跡ではカマドはほぼ東ないし南東壁に付設されるのに対し、本遺構は主軸方位をＮＥ－ＳＷにとることから、単独での機能が考えられる。（工藤・小山）

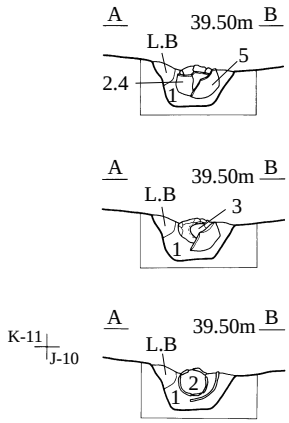


第２号土器埋設　堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒微量、ローム塊(大)混入
第２層	褐 色 土	10YR4/4	ローム粒多量
第３層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒微量
第４層	黄褐色土	10YR5/8	ロームとの混合土、掘り方

第2号土器埋設遺構

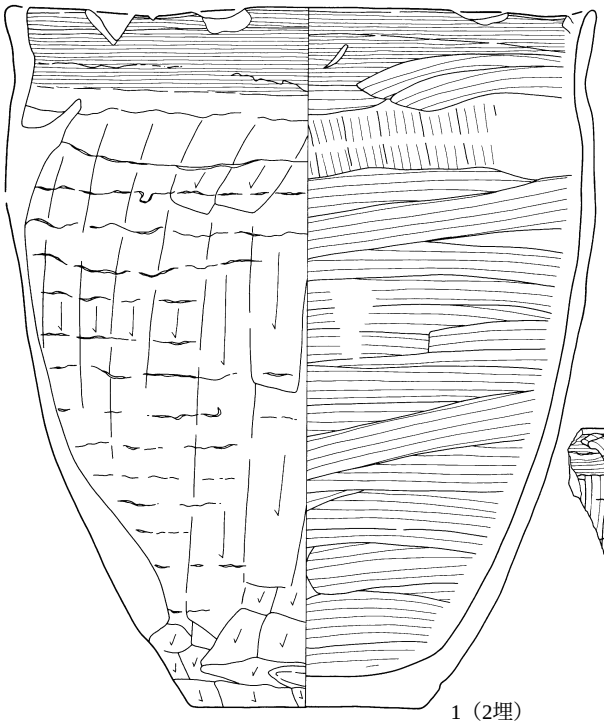




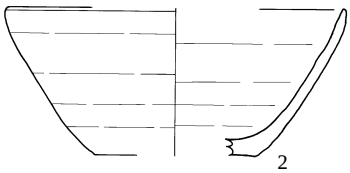
第3号土器埋設遺構

第３号土器埋設　堆積土

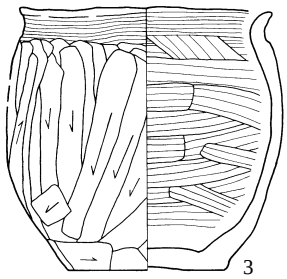
第１層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒微量
第２層	暗褐色土	10YR3/4	1層とほぼ同じだが、1層よりも締まりがない。



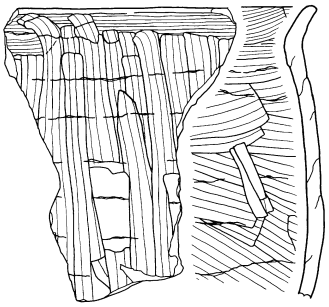
1（2埋）



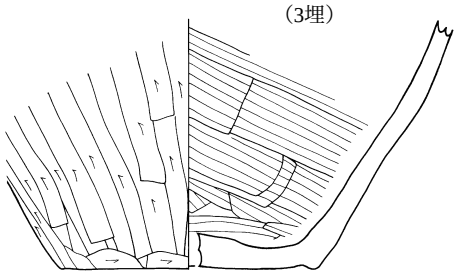
2
（3埋）



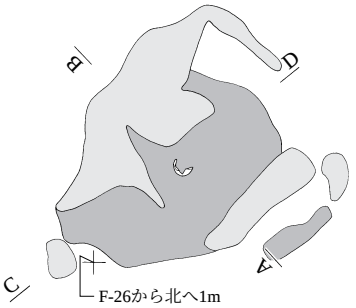
3
（3埋）



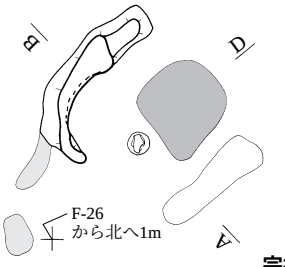
4
（3埋）



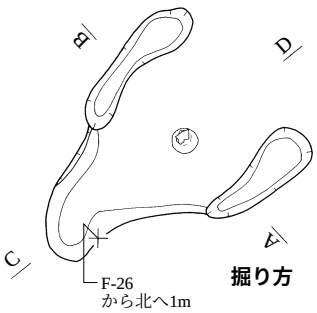
5
（3埋）



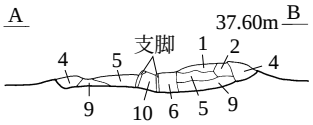
粘土範囲
焼土範囲

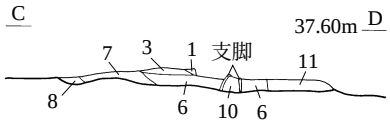


完掘時



掘り方

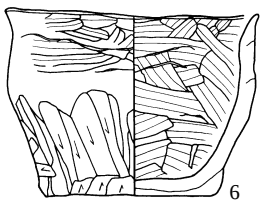




第２号性格不明（カマド状）遺構　堆積土

第１層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	黒色土（10YR2/1）少量混入
第２層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	粘質土。橙色焼土（5YR6/8）多量混入
第３層	黒 褐 色 土	10YR2/2	焼土粒、炭化物粒少量　※1～3層は天井部崩落土
第４層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	炭化物粒微量混入　※袖部
第５層	明赤褐色土	5YR5/8	焼土層　※燃焼部
第６層	黒　色　土	10YR1.7/1	
第７層	黒　色　土	10YR2/1	橙色焼土（7.5YR6/8）多量混入
第８層	黒　色　土	10YR2/1	にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）多量、明赤褐色焼土（7.5YR5/8）少量　※6～8層は煙道部堆積土
第９層	黒　色　土	10YR1.7/1	褐色焼土（7.5YR6/8）多量混入　※掘り方
第10層	黒　色　土	10YR2/1	※支脚転用土師器内堆積土
第11層	明赤褐色土	5YR5/8	焼土層、レンガ状に固化　※火床面

第2号性格不明遺構



6

（S＝1/30）　0　1m

（S＝1/3）　0　5㎝

図180　土器埋設遺構、性格不明遺構

第６章　平安時代の遺構外出土遺物

第１節　土師器

遺構外からは、およそ11,400点、106,500ｇの土師器の破片が出土した。大半が、住居跡や土坑、溝跡などの遺構が検出された調査区南側からの出土である。ほとんどが破片であり、しかも細片も相当数ある。接合するものは少なく、完形に復原されたものは１個体もない。

図181-11は刻書の見られる土師器坏の細片、14は灯明具に利用された土師器の細片、18は高台付の底部片である。また、図181-４は、内面が黒色処理された小型の壷型土器での破片である。（畠山）

第２節　須恵器、須恵器片利用の円盤

遺構外からは、およそ860点、16kgの須恵器の破片が出土した。土師器同様、大半が調査区南側からの出土である。

図182-１～10は坏で、１・４・６に刻書が施されている。

11～32は壷で14・15・19・24・29は産地同定分析により五所川原産、22は不明ａと判明している。25～28にヘラ記号が記されている。31・32は底部片で菊花状の調整が施されている。34の外面に見られるタタキ目は条が細く、胎土も五所川原産のものとは異なる。産地同定分析はしていないが、五所川原産ではないと考えられる。35は壷の底部片に周縁加工が施されている円盤状の土製品である。

（小山）

第３節　石器

砥石が４点出土した。石材はいずれも細粒凝灰岩が使用されている。仕上げ砥と考えられる。

（小山）

第４節　鉄製品

鉄製品が９点（図183－５～13）と銅滓が2点（14・15）出土している。

５は、雁又鏃の篦被部と考えられる破片で、関は台状である。

６は、鍋の破片で内耳の接着部分が残存している外面は「く」の字状にやや湾曲している。

７は、刀子の刃部破片である。

８～10は、刃部状の破片と考えられるもので、８は手鎌の可能性が高い。９は肉厚の破片で、９は腐食のためか内部が３層に剥離しかけている。10は薄片である。

11～13は棒状の破片で、12・13は鉄部分はほとんど残存しておらず、土との錆化物として残っている。13には木部の痕跡が錆として認められる。

14・15は銅滓と考えられる薄片で、表面には被熱によると考えられる起伏があり、緑青が確認できる。

（白鳥）

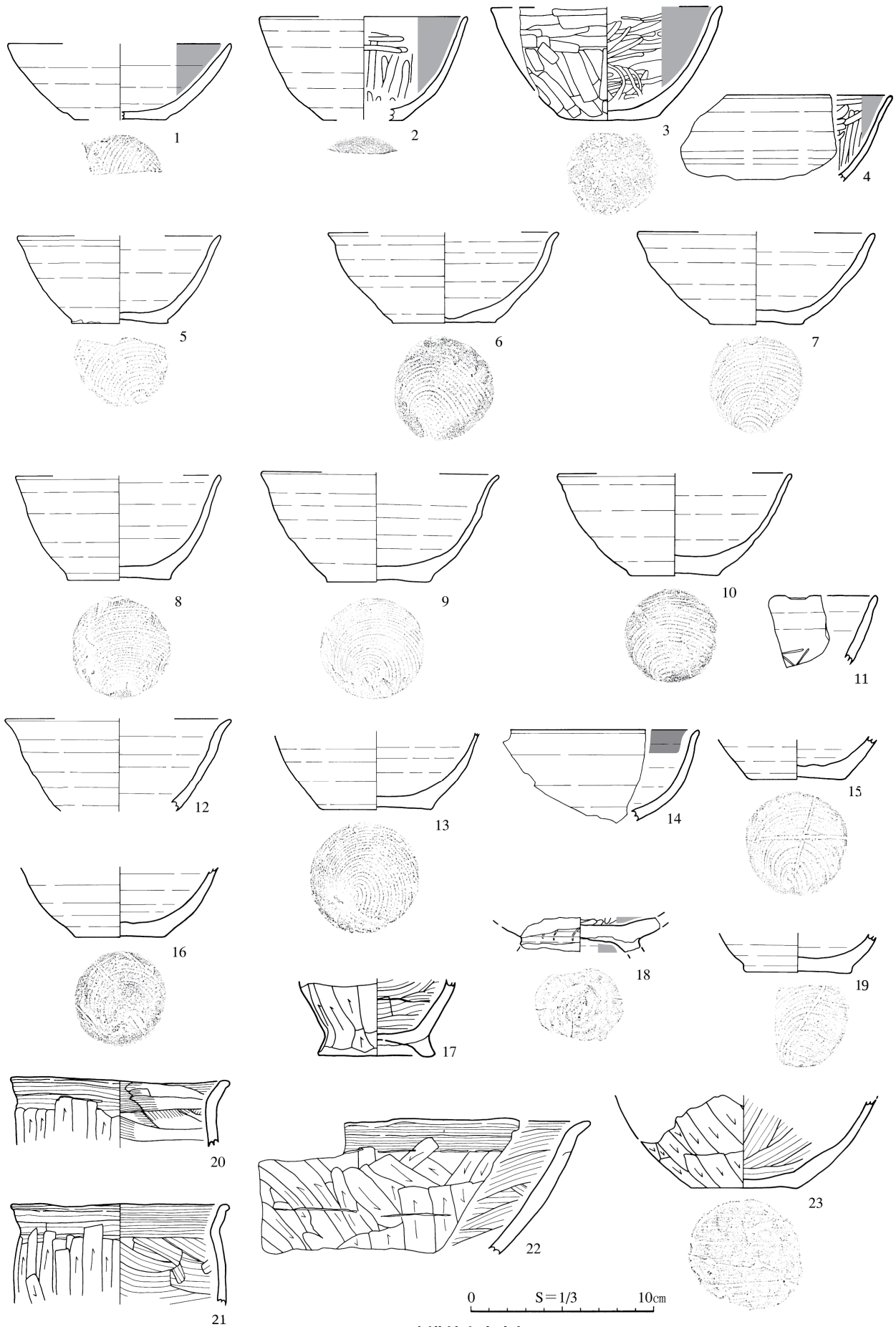


図181　遺構外出土土師器

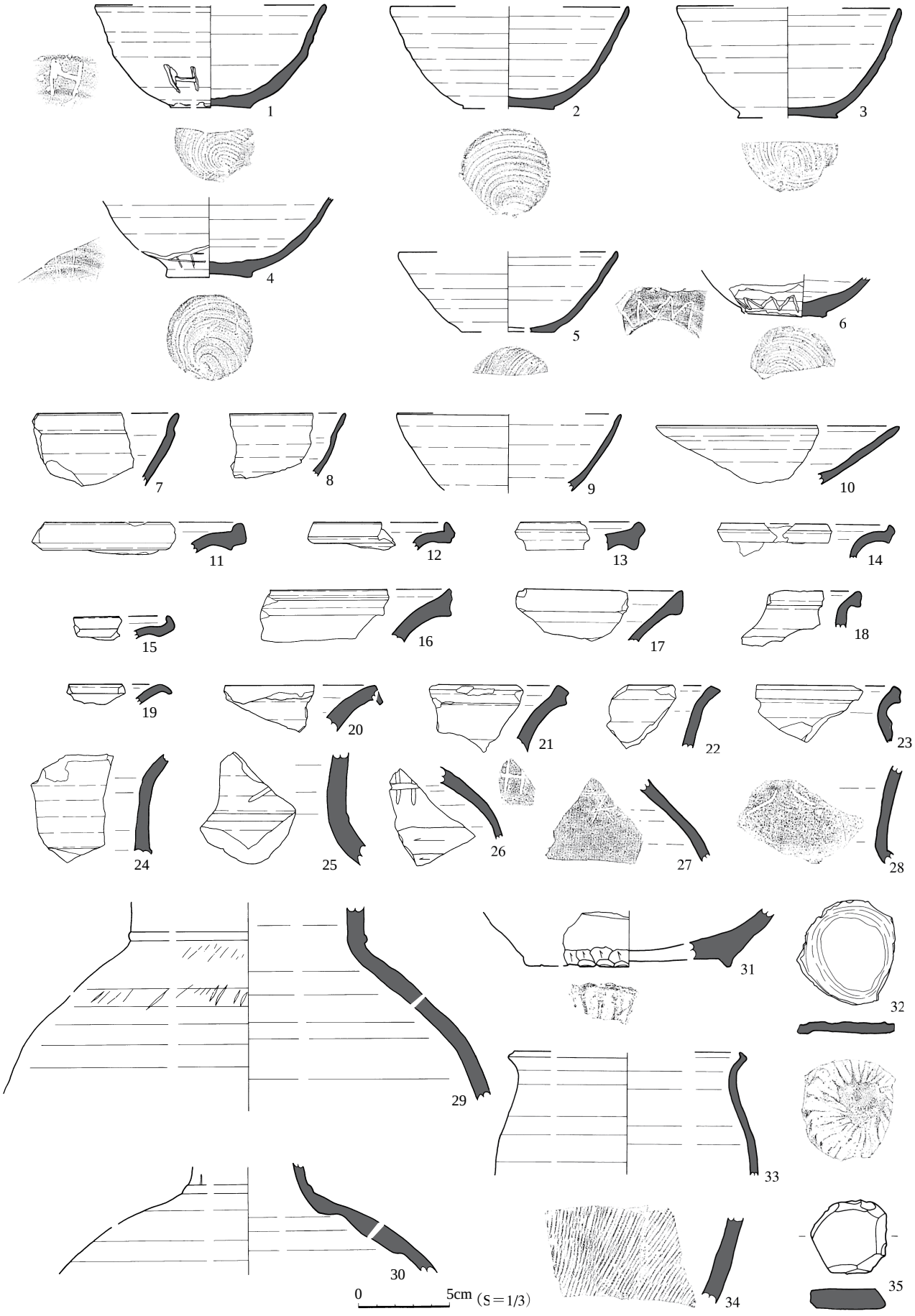


図182　遺構外出土須恵器

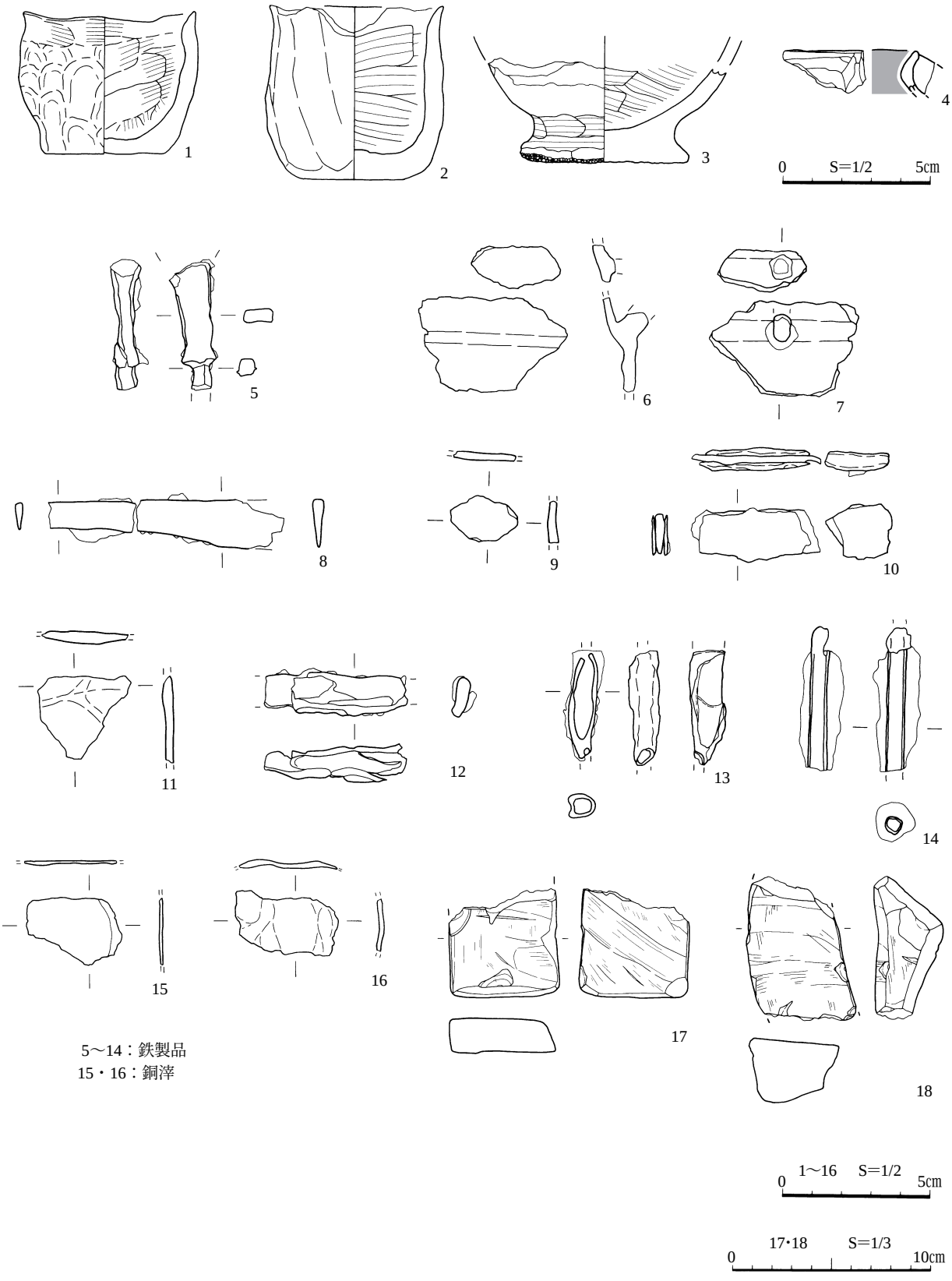


図183　遺構外出土遺物（ミニチュア土器・金属製品・砥石）

第７章　時期不明の遺構と遺物

時期の不明な遺構としては、掘立柱建物跡１棟、土坑13基、焼土遺構１基、溝跡25条、小穴群２ヶ所がある。調査中及び室内整理においても、構築時期の判断がつかなかった遺構である。大半は平安時代以降の遺構と思われるが、中には、縄文時代や平安時代の可能性のあるものも存在する。出土遺物については、平安時代以降のものについて扱うが、大半は近世・近代のものである。

第１節　時期不明の遺構

１　掘立柱建物跡

第５号掘立柱建物跡（図184）

［位置・重複］調査区の北側、高屋敷館遺跡南西地区に隣接したＯ・Ｐ－80・81グリッドに位置している。東側に第２号方形周溝、北側に第65号土坑、北西側に第１号井戸跡が隣接している。

［規模・柱間寸法］東西２間、南北２間の建物と思われる。規模は北側柱列で4.18m、東側柱列で4.61mである。長軸方向はＮ－11°－Ｅである。各柱列間の寸法は北側柱列で西から1.96m、2.22m、西

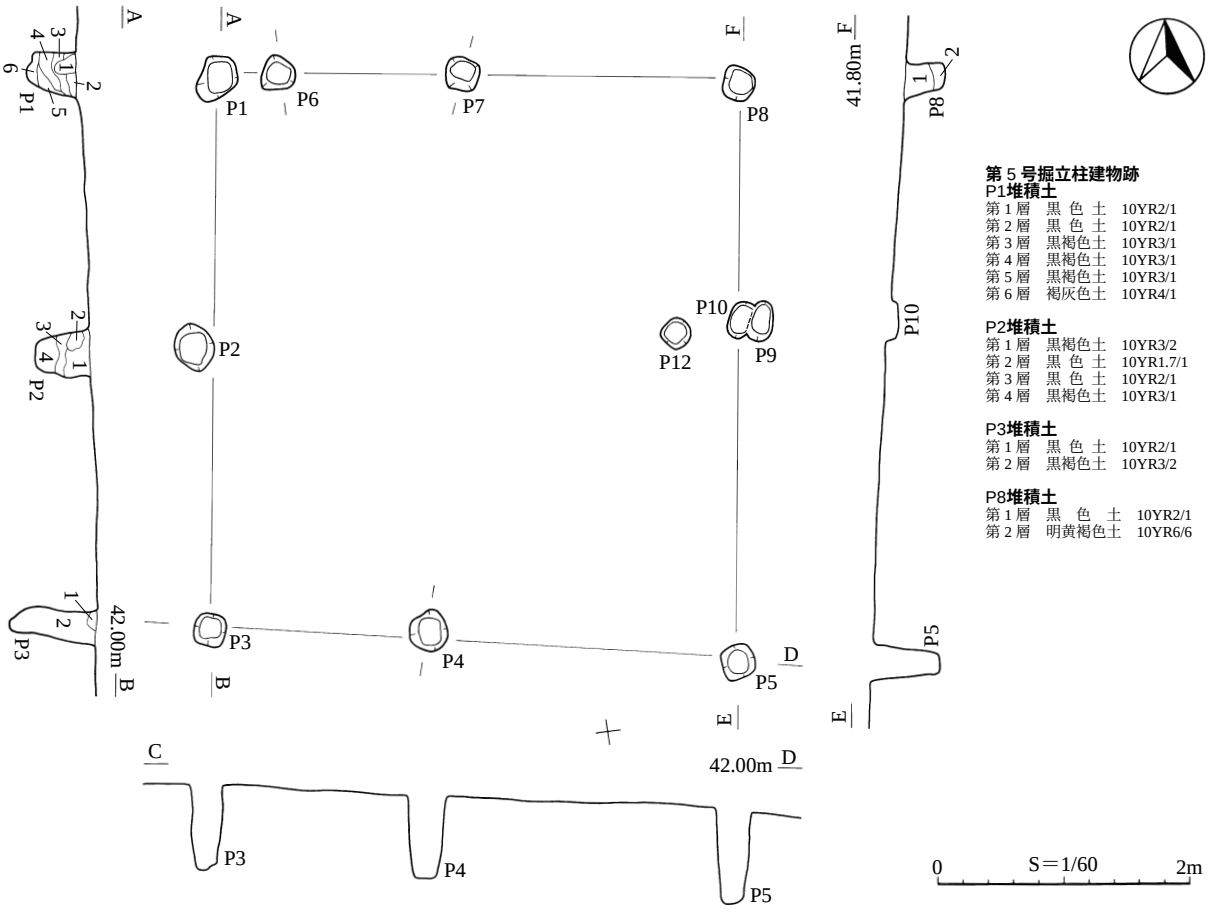


図184　第5号掘立柱建物跡

側柱列は北から2.2m、2.20mである。東側柱列は中央のＰ10が他の柱穴よりも浅いのが気になるが、北から1.93m、2.68mである。
［出土遺物］出土しなかった。
［小結］時期が不明であるが、平安時代の可能性がある。（畠山）

２　土坑

第５号土坑（ＳＫ５）（図186）
［位置］調査区の北側、高屋敷館遺跡に近いＫ・Ｌ－68グリッドに位置している。
［重複］第10号･11号溝跡と重複し、これらよりも古い。
［平面形・規模］平面形は隅丸長方形である。上部を削平されているが、現状で、開口部軸長は85×170㎝、底面の軸長は46×153㎝、深さ60㎝である。
［断面形・底面］断面形は箱型で、底面は平坦である。
［堆積土］３層に分層された。上位から第1層黒褐色土、第２層暗褐色土、第３層褐色土の順に堆積しており、第２層には基本土層の第Ⅴ層起源の浮石ブロックが多量に混入し、人為堆積の様相を呈している。
［遺物］出土しなかった。
［小結］単独で検出されたが、形状から墓坑の可能性も考えられる土坑である。（畠山）

第６号土坑（ＳＫ６）（図186）
［位置］調査区の中央付近、Ｍ－40グリッドに位置している。縄文時代後期の第２号土坑の南側に隣接している。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部の軸長は68×75㎝、底面の軸長は57×63㎝、深さ28㎝である。浅く、小さな土坑である。
［断面形・底面］断面形は箱型で、底面は平坦である。
［堆積土］２層に分層されたが、堆積土の大半は黒褐色土で覆われている。
［遺物］出土しなかった。
［小結］構築時期は不明であるが、縄文時代の可能性も考えられる土坑である。（畠山）

第７号土坑（ＳＫ７）（図186）
［位置］調査区の中央付近、Ｌ－39グリッドに位置している。第８号～10号土坑と隣接している。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部の軸長は94×100㎝、底面の軸長は87×88㎝、深さ41㎝である。
［断面形・底面］断面形は箱型で、底面は平坦である。
［堆積土］６層に分層された。堆積土の大半が黒色土や黒褐色土で覆われている。
［遺物］出土しなかった。
［小結］構築時期は不明であるが、検出状況から縄文時代の可能性も考えられる土坑である。（畠山）

第８号土坑（ＳＫ８）（図186）
［位置］調査区の中央付近、Ｌ－39グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は円形で、開口部の軸長は88×88㎝、底面の軸長は67×70㎝、深さ25㎝である。
［断面形・底面］断面形は箱型で、底面はほぼ平坦である。
［堆積土］５層に分層された。上位では黒色土、下位では黒褐色土が主体となっている。
［遺物］出土しなかった。
［小結］構築時期は不明であるが、検出状況から縄文時代の可能性も考えられる土坑である。（畠山）

第12号土坑（ＳＫ12）（図186）
［位置］調査区の北側、Ｊ－67・68グリッドに位置している。
［重複］第８号、10号溝跡と重複している。新旧関係は第８号溝跡よりも古いが、第10号溝跡とは不明である。
［平面形・規模］重複により東側が削平されているが、残存部から平面形は楕円形を呈すると思われる。開口部の軸長は残存部で188×216㎝、底面の軸長は216×270㎝、深さ101㎝である。
［断面形・底面］断面形はフラスコ型で、底面には凹凸が見られるものの、ほぼ平坦である。
［堆積土］10層に分層された。大半がシルト質の暗褐色土や黒褐色土と、ローム粒やロームブロック主体の褐色土や明褐色土、黄褐色土等が混在しており、人為堆積の様相を呈している。
［遺物］出土しなかった。（畠山）

第13号土坑（ＳＫ13）（図186）
［位置］壕の外側、Ｌ－31グリッドに位置している。
［重複］第１号、３号溝跡と重複している。第１号溝跡よりは古いが、第３号溝跡とは新旧関係は不明である。
［平面形・規模］大部分を削平されているが、平面形は円形と思われる。現状で、開口部の軸長は68×105㎝、底面の軸長は56×72㎝、深さ50㎝である。
［断面形・底面］断面形は逆台形で、底面には凹凸が認められる。
［堆積土］７層に分層された。堆積土の大半は黒褐色土であり、底面近くではロームブロックの混入が著しい。
［遺物］縄文土器が２点（９ｇ）出土した。
［小結］構築時期は不明であるが、縄文時代の可能性が高い。（畠山）

第15号土坑（ＳＫ15）（図186）
［位置］調査区北側のほぼ中央にあたる、Ｓ－66グリッドに位置している。
［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部90×95㎝、底面60×65㎝で、深さは30㎝である。
［断面形・底面］断面形は浅箱型になる。底面は平坦である。
［堆積土］黒色土を主体として２層に分層された。第２層にはロームブロックが少量含まれている。
［遺物］出土しなかった。
［小結］遺物が出土せず、帰属時期は不明である。（小山）

第62号土坑（ＳＫ62）（図186・191）

［位置］調査区南側で壕の外側にあたる、Ｊ・Ｋ－10グリッドに位置している。

［重複］縄文時代の第28号竪穴住居跡より新しい。

［平面形・規模］平面形は不整形である。軸長は開口部135×140㎝、底面90×135㎝で、深さは最も深いところで45㎝である。

［断面形・底面］断面形は長軸方向がフラスコ状で、短軸方向が箱形になる。底面は起伏が見られる。

［堆積土］黒褐色土を主体として５層に分層された。第４層はロームとの混合土層である。

［遺物］土師器片が４点（95.4ｇ）出土した。

［小結］重複から縄文時代前期以降と考えられるが、詳細な時期は不明である。（小山）

第65号土坑（ＳＫ65）（図186）

［位置］調査区北側のＯ－81グリッドに位置している。周辺には時期不明の第５号掘立柱建物跡が隣接している。

［平面形・規模］平面形は楕円形で、開口部の軸長は88×92㎝、底面の軸長は68×72㎝、深さ75㎝である。

［断面形・底面］断面形は箱型で、底面は平坦である。

［堆積土］５層に分層された。黒色土が主体で、第４層にはロームブロックが多量に混入している。

［遺物］出土しなかった。（畠山）

第69号土坑（ＳＫ69）（図186）

［位置］調査区南側の南端にあたる、Ｇ・Ｈ－４・５グリッドに位置している。

［平面形・規模］平面形は円形で、軸長は開口部125×145㎝、底面100×105㎝、深さは底面まで25㎝、溝底面まで40㎝である。

［断面形・底面］断面形は基本的には深箱型である。底面から壁際を全周している溝が検出された。溝の深さは約15㎝である。断面で確認すると溝は地山を掘り込んでおり、底面作出時に意図的に溝を構築したものと考えられる。

［堆積土］黒色土を主体として２層に分層された。

［遺物］堆積土中から土師器片２点（11ｇ）、須恵器片１点（４ｇ）が出土した。

［小結］帰属時期等は不明である。（小山）

第90号土坑（ＳＫ90）（図186）

［位置］調査区南側の南側にあたる、G-11グリッドに位置している。

［平面形・規模］平面形は不整形で、軸長は開口部120×180㎝、底面60×70㎝で、深さは底面まで25㎝、掘り方底面まで40㎝である。

［断面形・底面］断面形は浅箱型で、底面には起伏が見られる。

［堆積土］黒褐色土を主体として５層に分層された。第５層は掘り方層になる。

［遺物］出土しなかった。

［小結］遺物も出土せず、形態も不整であることから帰属時期は不明である。（小山）

第93号土坑（ＳＫ93）（図186）

［位置］壕の外側、多数の住居跡が重複して検出されている地域のＥ－16グリッドに位置している。

［重複］第４号方形周溝と重複し、これより古い。

［平面形・規模］平面形は不整円形で、開口部の軸長は113×122㎝、底面の軸長は128×132㎝、深さ49㎝である。

［断面形・底面］断面形はフラスコ型で、底面はほぼ平坦である。

［堆積土］２層に分層されたが、黒褐色土の単層ともいえる堆積状態である。

［遺物］出土しなかった。

［小結］構築時期は不明であるが、縄文時代の可能性が高い。（畠山）

第128号土坑（ＳＫ128）（図186）

［位置］調査区南側の壕の外側にあたる、Ｋ－11グリッドに位置している。第19号住居跡の掘り方面より検出した。

［重複］第19号住居跡より古い。

［平面形・規模］平面形は楕円形である。軸長は開口部100×140㎝、中場面70×110㎝で、中場の開口部は60×80㎝、底面50×40㎝である。深さは中場面まで25㎝で、底面まで55㎝である。

［断面形・底面］断面形は基本的に箱型になる。底面に被高差約30㎝の段差が見られる。

［堆積土］灰黄褐色土を主体に２層に分層された。

［遺物］出土しなかった。

［小結］重複から平安時代以前と考えられるが詳細な時期は不明である。（小山）

３　焼土遺構（ＳＮ01）（図185）

［位置］調査区中央のやや南側、Ｏ－31・32グリッドに位置している。基本土層の第Ⅴ層上面で検出した。

［平面形・規模］平面形は52×60㎝で、７㎝の厚さで被熱している。

［その他］基本土層の第Ⅴ層上面まで削平が及んでいる場所で検出した遺構である。周辺には縄文時代や平安時代の住居跡が検出されているが、この遺構に伴うと思われる柱穴は検出されなかったことから、単独で存在していた遺構と考えられる。構築時期は不明であるが、縄文時代の屋外炉の可能性がある。（畠山）

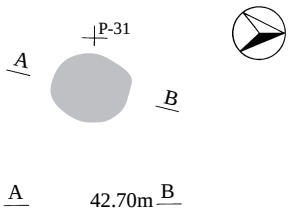
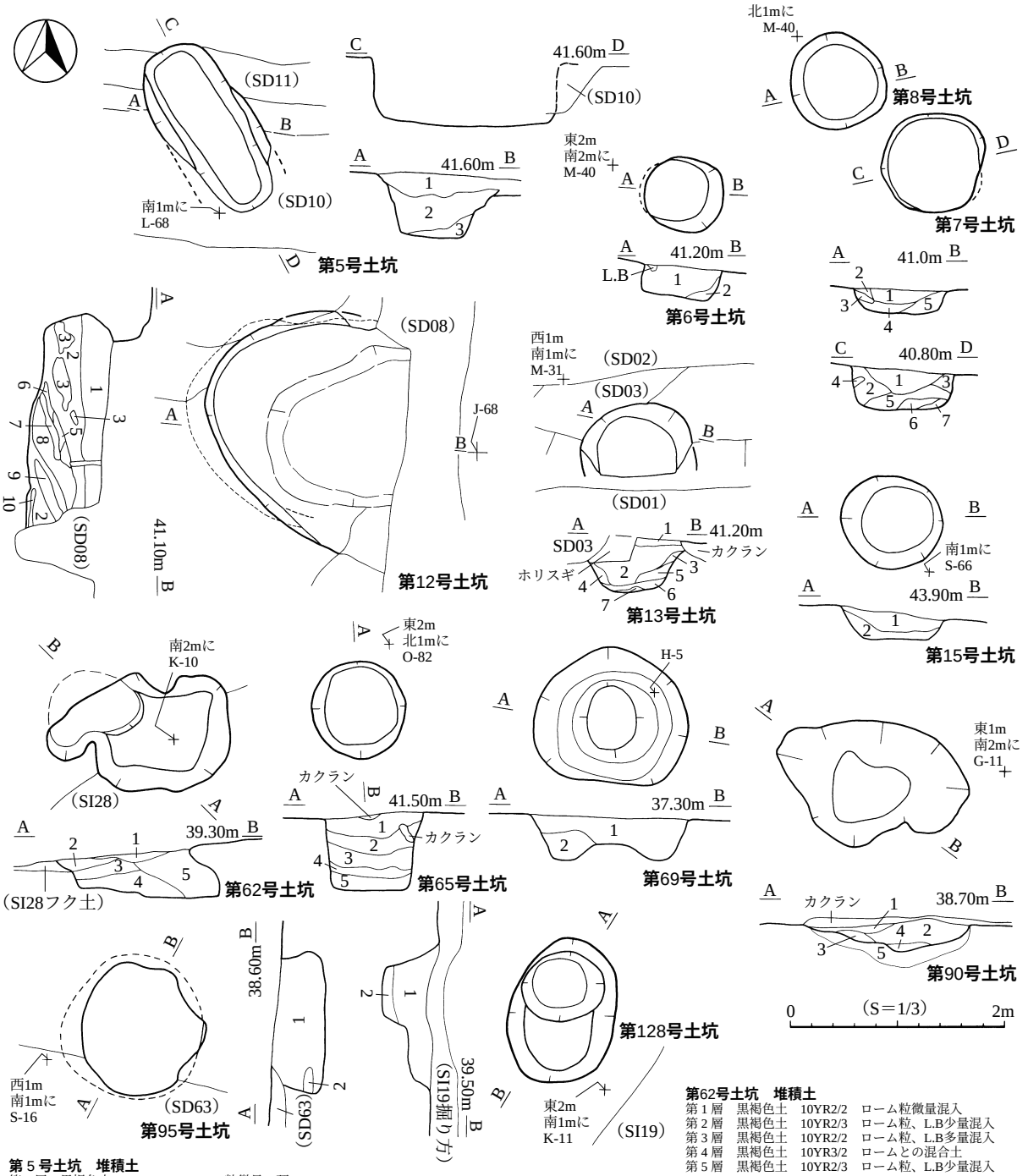


図185　第1号焼土遺構



第5号土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量、硬い
第2層	暗褐色土	10YR3/3	浮石ブロック多量、軟らかい
第3層	褐色土	10YR4/4	下部に粘土塊少量、軟らかい

第6号土坑　堆積土

第1層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒少量
第2層	褐色土	10YR1.7/1	ローム質、硬い
第3層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量

第7号土坑　堆積土

第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒微量
第2層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒微量
第3層	黒褐色土	10YR2/2	硬い
第4層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒多量
第5層	黒色土	10YR2/1	ローム粒少量
第6層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量
第7層	褐色土	10YR4/6	ローム質

第8号土坑　堆積土

第1層	黒色土	10YR2/1	
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒多量
第3層	暗褐色土	10YR3/3	ローム質
第4層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量
第5層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒多量

第12号土坑　堆積土

第1層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒・塊多量
第2層	褐色土	10YR4/6	ローム質
第3層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒・塊多量
第4層	褐色土	10YR4/4	ローム粒・塊多量
第5層	褐色土	10YR4/4	ローム粒・塊多量
第6層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒・塊多量
第7層	黄褐色土	10YR5/6	L.B多量、硬い
第8層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒・塊多量
第9層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム粒・塊主体
第10層	褐色土	10YR4/4	ローム粒少量、硬い

第13号土坑　堆積土

第1層	黒色土	10YR2/1	
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量
第3層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量
第4層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒多量
第5層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒多量
第6層	褐色土	10YR4/4	ローム質
第7層	鈍い黄褐色土	10YR5/4	ローム質

第15号土坑　堆積土

第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒微量混入
第2層	暗褐色土	10YR3/3	ローム多量、所により ブロック状に混入

第62号土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量混入
第2層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒、L.B少量混入
第3層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒、L.B多量混入
第4層	黒褐色土	10YR3/2	ロームとの混合土
第5層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒、L.B少量混入

第65号土坑　堆積土

第1層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒少量
第2層	黒色土	10YR1.7/1	軟らかい
第3層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒少量、やや硬い
第4層	黒色土	10YR1.7/1	L.B多量
第5層	黒色土	10YR1.7/1	

第69号土坑　堆積土

第1層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒微量
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量

第90号土坑　堆積土

第1層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量、L.B微量
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒、L.B少量
第3層	褐色土	10YR4/4	ローム粒、L.B少量
第4層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量
第5層	黄褐色土	10YR5/8	ロームとの混合土、貼り床層

第93号土坑　堆積土

第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒、炭化物少量
第2層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム質、脆い

第128号土坑　堆積土

第1層	灰黄褐色土	10YR4/2	L.B、ローム粒多量
第2層	褐色土	10YR4/6	L.B、ローム粒微量

図186　時期不明の土坑

４　溝跡

時期の不明な溝跡は、25条検出された。大半の溝跡は縄文時代や平安時代の遺構を切って構築されており、平安時代よりは新しい可能性がある。

第１号溝跡（ＳＤ01）（図187・190）

［位置］南北に長く検出された溝跡で、調査区南東の０Ｚ－25グリッド～Ｈ－23グリッド～Ｌ－25グリッド～Ｆ－57グリッドにかけて位置している。Ｌ－25グリッド付近が最も高い位置にあり、ここから東方向と北方向へと分かれる。東方向には外壕と重複しながら低地の０Z－25グリッドへのび、北方向へは等高線と並行するように、Ｆ－57グリッドへとのびている。調査区域外のため確認できなかったが、この先には東西に走る第８号溝跡が検出されており、これと繋がる可能性が極めて高い。また、西側には幅の狭い第２号溝が並行して検出されている。

［重複］平安時代の外壕や道跡、第24号住居跡、第３号・36号・74号溝跡、及び時期不明の第14号・25号・33号溝跡、第13号土坑などと重複している。このうち、第25号溝跡とは新旧関係が不明であるが、第33号溝跡よりは古く、他の遺構よりも新しい。また、縄文時代の溝状土坑（第５号・７号）とも重複している。

［規模］幅90～144㎝、深さ70～100㎝であるが、場所によっては40㎝の深さしかないところや、さらに40㎝ほど深く掘りくぼめられている部分がある。長さ約184ｍを検出した。

［堆積土］場所により若干の違いはあるが、自然堆積で、黒褐色土や暗褐色土等の堆積が見られるのが一般的である。底部や壁際にローム質の明褐色土や黄褐色土等の堆積が見られるところもある。

［出土遺物］土師器片304点（2,685ｇ）、須恵器片19点（254ｇ）、縄文時代前期の土器片178点（1,308ｇ）、剥片石器４点（石鏃、石匙、削器、剥片）、礫石器３点（砥石、半円状破損、敲石）が出土した。

［小結］第２号溝跡が検出されなかった部分もあるが、２条１組の構造の溝跡と考えられる。第８号溝跡と同じ溝跡の可能性が高く、北側の高屋敷館遺跡方面へと延びているものと考えられる。また、新旧関係が確認できなかった第25号溝とも同じ溝跡の可能性がある。

第２号溝跡（ＳＤ02）（図187）

［位置］第１号溝跡の西側、約20～70㎝離れて、並行して検出されている。外壕との重複部分から東側では検出されなかった。

［重複］第３号溝跡や道跡よりも新しい。

［規模］幅約60㎝、深さ15～55㎝、長さ約135ｍを検出した。

［堆積土］場所により若干の違いはあるが、黒褐色土や暗褐色土の堆積が見られるのが一般的で、底部に褐色土の堆積が見られるところもある。

［出土遺物］土師器片16点(146g)、縄文時代前期の土器片22点(244g)、剥片石器２点（削器)、礫石器２点(石鋸、多角状礫)が出土した。

［小結］第１号溝跡と対となって構築された溝跡である。北側に検出した第13号溝跡と同じものと考えられる。

第４号溝跡（ＳＤ04）（図188）

［位置］調査区の北側、Ｈ－70～Ｏ－71グリッドにかけて位置している、東西に長い溝跡である。後述の第５号溝跡と対となって検出されている。

［重複］第８号溝跡よりも古い。

［規模］幅88～124㎝、深さ30～60㎝で、約31.6ｍを検出したが、完全な形で検出されたのは第８号溝跡との重複部分から東側の約８ｍである。

［堆積土］２層が確認され、黒褐色土と暗褐色土の堆積が見られた。

［出土遺物］なし。

［小結］後述の第５号溝跡と対になる２条１組の構造であったと考えられる。第８号溝跡と重複しているが、ほぼ同時代の時代に構築されたものと思われる。

第５号溝跡（ＳＤ05）（図188）

［位置］第４号溝跡と並行して検出されたもので、Ｈ～Ｊ－70 グリッドに位置している。

［重複］第８号溝跡よりも古い。また、縄文時代の第１号溝状土坑よりも新しい。

［規模］幅44～70㎝、深さ９～20㎝で、約８ｍを検出した。

［堆積土］４層に分層された。暗褐色土と黒褐色土が主体で、底面には褐色土が薄く堆積している。

［出土遺物］被熱した礫が１点出土しただけである。

［小結］第４号溝跡と対となって構築されたもので、第８号溝跡との重複部分から西側では、第13号溝跡と同位置にあったと思われる。

第６号溝跡（ＳＤ06）（図189）

［位置］調査区の中央付近、Ｊ－44～Ｏ－45グリッドにかけて位置している。東西に長い溝跡で、西から東へのびている。約４ｍ離れて、ほぼ同規模の第７号溝跡が並行して検出されている。

［重複］なし。

［規模］幅70～86㎝、深さ25～42㎝で、長さ20.7ｍを検出した。斜面下方の東側へ行くにしたがい浅くなり、溝跡が不明瞭になっている。

［堆積土］全般に黒褐色土が主体であり、とくに底面付近にローム粒が多く見られた。

［出土遺物］土師器片２点（39ｇ）が出土した。

第７号溝跡（ＳＤ07）（図189）

［位置］調査区の位中央付近、Ｊ－43～Ｏ－45グリッドにかけて位置している。東西に長い溝跡で、西から東へのびている。北側約４ｍ離れた場所には、第６号溝跡が並行して検出されている。

［重複］直接的な重複はないが、第２号溝跡に接するように検出されている。新旧関係は不明であるが、これよりも新しい可能性がある。

［規模］幅50～60㎝、深さ17～40㎝、長さ25.8ｍを検出した。斜面下方の東側へ行くにしたがい浅くなり、溝跡がしだいに不明瞭になっている。

［堆積土］全体に黒色土の堆積が見られ、下半部にローム粒やロームブロックが多量に含まれている。

［出土遺物］土師器片２点（22ｇ）、縄文時代前期の土器片４点（63ｇ）が出土した。
［小結］明確な根拠はないが、堆積土の観察からは、第６号・７号溝跡は他の溝跡よりも新しい可能性がある。

第８号溝跡（ＳＤ08）（図188）
［位置］調査区の北側、Ｆ－59～Ｏ－71グリッドにかけて位置している。Ｋ－60グリッド付近で90度北へ向きをかえ、Ｊ－70グリッドで再び90度西へ向きをかえている。
［重複］第15・16溝跡、第４・５号溝跡、第12号土坑よりも新しい。また、第10号・11号溝跡とは重複や撹乱によって新旧関係を確認できなかったが、同じ溝跡の可能性がある。
［規模］幅70～120㎝、深さ60～110㎝で、約85ｍを検出した。断面はＶ字状である。溝跡底面はＫ－60グリッドの地点から東方向と北方向へ低くなる。北方向へ向かってのびた溝跡はＪ－70グリッドの地点で最も深い（112㎝）。
［堆積土］場所により若干の違いがあるが、大半は暗褐色土や黒褐色土が主体であり、下半部ではローム粒やロームブロックの混入が多い。また、底面には明黄褐色土が堆積している。
［出土遺物］土師器片２点（14ｇ）、須恵器片２点（63ｇ）が出土した。
［小結］第13号溝跡と対になる２条１組の構造で、第１号・２号溝跡の一部と考えられる。

第10号溝跡（ＳＤ10）（図188）
［位置］調査区の北側、Ｋ－68～Ｏ－69グリッドにかけて位置している。東西に長い溝跡である。第11号溝跡と並行して検出された。
［重複］第５号土坑より新しいが、第12号土坑との新旧関係は不明である。
［規模］幅84～112㎝、深さ42㎝で、長さ約22ｍを検出した。
［堆積土］４層に分層された。ローム粒を含んだ黒褐色土が主体で、第４層にはローム粒やロームブロックを多量に含んでいる。
［出土遺物］土師器片２点（37ｇ）が出土した。
［小結］後述の第11号溝跡と対になる２条１組の構造と考えられる。重複や撹乱により確認できなかったが、かつては第８号溝跡と繋がっていた可能性が高い。

第11号溝跡（ＳＤ11）（図188）
［位置］第10号溝跡と並行して検出された溝跡で、Ｋ－68～Ｏ－69グリッドにかけて位置している。
［重複］第５号土坑と重複し、これより新しい。
［規模］幅36～60㎝、深さ26㎝で、長さ21ｍを検出した。
［堆積土］1層のみの確認で、ローム粒やロームブロックを多量に含んだ暗褐色土が堆積している。
［出土遺物］なし。

第13号溝跡（ＳＤ13）（図188）
［位置］Ｆ－58グリッドからＯ－71グリッドにかけて位置しているが、Ｉ－67～Ｊ－70グリッドでは

検出されなかった。
［重複］なし。
［規模］幅30～40㎝、深さ20～30㎝で、長さ約85m（未検出の部分を含む）を検出した。
［堆積土］おおむね、ローム粒を多量に含む黒褐色土が主体で、底面にローム質の明黄褐色土が堆積している。
［出土遺物］須恵器片１点（９ｇ）が出土した。
［小結］第８号溝跡と対になる幅の狭い、浅い溝跡で、第２号溝跡と同じ溝跡と考えられる。

第14号溝跡（ＳＤ14）（図189）
［位置］調査区の中央付近、Ｈ・Ｉ－42グリッドに位置している。西側の第１号溝跡の縁から東側の斜面下方に延びている。
［重複］第１号溝跡と重複し、これよりも古い。
［規模］幅62～74㎝、深さ５～20㎝で、長さ約５ｍを検出した。
［堆積土］1層のみの検出で、ロームブロックが多量に混入した暗褐色土が堆積している。
［出土遺物］なし。

第15号溝跡（ＳＤ15）（図188）
［位置］調査区の北側、Ｈ・Ｉ－67・68グリッドに位置し、第16号溝跡の内部に検出された。西側には第８号溝跡が南北に横切っている。
［重複］第16号溝跡より新しく、第８号溝跡より古い。
［規模］幅120㎝、深さ88㎝で、長さ9.2mを検出した。溝の断面形はＶ字状である。
［堆積土］９層に分層された。上半部は混入物の少ない黒色土や黒褐色土が主体で、下半部はローム粒を含む暗褐色土が主体となっている。最下部の暗褐色土は砂質気味で硬い。
［出土遺物］なし。
［小結］第８号溝跡との重複分から西側に検出されていないことから、かつては第８号溝と繋がっていたものと思われる。

第16号溝跡（ＳＤ16）（図188）
［位置］調査区の北側、Ｈ・Ｉ－67・68グリッドに位置し、内側に第15号溝が検出されている。
［重複］第８号、15号溝跡より古い。
［規模］幅240～410㎝、深さ78～87㎝で、約９ｍを検出した。壁面や底面は凹凸が激しく、壁が袋状に掘り込まれている部分もある。全般に多数の土坑が重複した状況で、ピット状に掘り込まれている部分も見受けられる。
［堆積土］暗褐色土や黒褐色土、褐色土や黄褐色土のロームブロック等が混在しており、人為的な堆積状況を呈している。
［出土遺物］なし。
［小結］一般的な溝跡とは全く様相を異にしている。壁面や掘り方からは土坑が密集した状況を想定

することもできるが、平面でも、堆積状況からもその痕跡は見られなかった。粘土採掘場的な状況を呈している遺構である。

第18号溝跡（ＳＤ18）（図189）

［位置］調査区北側のＳ－64～Ｒ－69グリッドにかけて位置している。西側に第19号溝跡が並行して検出されている。

［重複］道跡と重複し、これよりも新しい。

［規模］幅80～100㎝、深さ40～54㎝、長さ約21ｍを検出した。

［堆積土］全般に、微量のローム粒を含んだ黒褐色土が主体となっている。

［出土遺物］土師器片２点（25ｇ）が出土した。

［小結］第19号溝跡と対となる溝跡で、２条１組の構造と考えられる。北東に検出された第10号・11号溝跡や第８号・13号溝跡、及び北側に検出した第20号・21号溝跡と同じ構造であり、これらのいずれかと繋がっている可能性がある。

第19号溝跡（ＳＤ19）（図189）

［位置］調査区北側のＳ－64～Ｒ－69グリッドにかけて位置し、東側に第18号溝跡が並行して検出されている。

［重複］道跡と重複し、これよりも新しい。

［規模］幅40～60㎝、深さ20～40㎝、長さ約19ｍを検出した。

［堆積土］暗褐色土と褐色土の堆積が見られた。

［出土遺物］土師器５点（25ｇ）、須恵器１点（16ｇ）、縄文時代前期の土器片10点（86ｇ）が出土した。

［小結］第18号溝跡と対になる幅の狭い溝跡である。

第20号溝跡（ＳＤ20）（図187）

［位置］調査区の北端、Ｔ－76～Ｔ－84グリッドにかけて、南北に長く検出されている。後述の第21号溝跡と並行して検出されており、これと対になるものと考えられる。西側には平安時代の道跡も並行して検出されている。

［重複］なし。

［規模］幅50～60㎝、深さ25～57㎝、長さ36.1ｍを検出した。

［堆積土］ローム粒を含んだ黒褐色土が主体となっている。

［出土遺物］土師器５点（31ｇ）、須恵器２点（18ｇ）が出土した。

第21号溝跡（ＳＤ21）（図187）

［位置］調査区の北端、Ｓ・Ｔ－76～Ｔ－84グリッドにかけて位置している。南北に長く検出されており、西側には第20号溝跡が並行して検出されている。

［重複］なし。

［規模］幅138～146㎝、深さ70～120㎝、長さ36.1mを検出した。
［堆積土］上半部にはローム粒を含んだ黒褐色土、下半部にはロームブロック主体の黄褐色土と黒褐色土が堆積している。第４層～６層は非常に硬く締まっている。
［出土遺物］土師器２点（21ｇ）、須恵器３点（96ｇ）が出土した。
［小結］第20号溝跡と対になる２条１組の構造と考えられる。未調査の区域を挟んで第８号・13号溝跡に繋がるものと考えられることから、この溝跡も第１号・２号溝跡の一部と考えられる。

第24号溝跡（ＳＤ24）（図189）
［位置］調査区の南西、Ｖ－23～Ｔ－25グリッドにかけて位置し、外壕の縁辺に沿って検出された。
［重複］外壕より新しい。
［規模］幅55～72㎝、深さ60～70㎝で、16.4mが検出された。断面はＶ字状である。
［堆積土］上部に黄褐色土、底面に粘土質の明褐色土が見られるが、大半はローム粒を多量に含んだ暗褐色土である。
［出土遺物］土師器片４点（138ｇ）、縄文時代前期の土器片12点（75ｇ）が出土した。
［小結］堆積土の観察から、比較的新しい時代の溝跡の可能性が高い。

第25号溝跡（ＳＤ25）（図190）
［位置］内壕の東壁に沿って検出されたもので、Ｐ－13～Ｋ－24グリッドにかけて位置している。
［重複］平安時代の壕や住居跡（第16号・18号）、土坑（第27号）、溝跡（第27号・24号）よりも新しい。また、第１号溝跡と同じ溝跡の可能性もあるが、これとの関係を明確にできなかった。
［規模］幅1m20㎝前後、深さ50㎝前後、長さ約40mを検出した。
［堆積土］場所によって若干の違いはあるが、ローム粒を含んだ暗褐色土が主体となっている。底部や底面直上には灰色気味の非常に硬い層が見られる場合が多い。また、検出面では確認できなかったが、セクション観察からは新旧の二つが見られる場所（セクション１・４）もあり、溝の作り替えが行われている。
［出土遺物］土師器片60点（752）、須恵器片17点（385ｇ）及び縄文時代前期の43点（399ｇ）、剥片石器５点（石匙、削器、掻器）、敲石１点が出土した。大半は重複している遺構からの流れ込みと考えられる。
［小結］明確にはできなかったが、セクションの観察から新旧の２条があり、作り替えが行われていた可能性がうかがわれた。また、第１号溝跡との関係を明確にはできなかったものの、これと繋がっていた可能性は高い。

第28号溝跡（ＳＤ28）（図189）
［位置］調査区の西南、Ｍ－26～Ｒ－28グリッドにかけて位置している。等高線に直交するように検出され、西から東南方向へ下っている。３～3.5m離れて、ほぼ同規模の第30号溝跡が並行して検出されている。
［重複］第10号住居跡、外壕と重複し、これらよりも新しい。第１号・２号溝跡と重複すると思われ

たが、これらとの関係は確認できなかった。
［規模］幅60㎝、深さ５～43㎝で、長さ20.8mを検出した。
［堆積土］場所によって若干の違いがあるが、下半部にはローム粒を多量に含んだ暗褐色土が主体となっている。
［出土遺物］土師器片40点（221ｇ）、須恵器片４点（32ｇ）、縄文時代前期の土器片181点（1,564）及び弥生時代後期の土器片や削器２点が出土した。

第29号溝跡（ＳＤ29）（図189）
［位置］調査区の西南、Ｑ・Ｒ－27グリッドに位置している。重複により、一部分しか検出されなかった。
［重複］第30号溝跡と重複し、これよりも古い。大部分が第30号溝跡に削平されている。
［規模］幅約40㎝、深さ約30㎝で、長さ3.6mを検出した。
［堆積土］セクションは記録していないが、ローム粒を少量含んだ暗褐色土が堆積している。
［出土遺物］土師器片４点（12ｇ）、縄文時代前期の土器片12点（140ｇ）が出土した。
［小結］重複の状況から、第30号溝跡の改築前の可能性がある。

第30号溝跡（ＳＤ30）（図189）
［位置］調査区の西南、Ｍ－25～Ｒ－27グリッドにかけて位置している。等高線に直交するように検出され、西から東南方向へ下っている。北側には、第28号溝跡がほぼ並行して検出されている。東端では、外壕の堆積土上部を掘り込んでいる。
［重複］第29号溝跡と外壕（SD23）と重複し、これらよりも新しい。
［規模］幅50～70㎝、深さ５～40㎝、長さ20.7mを検出した。
［堆積土］場所によって若干の違いはあるが、ローム粒を含んだ暗褐色土が主体であり底面に黄褐色土が見られるところもある。
［出土遺物］土師器片17点（40ｇ）、須恵器片２点（146ｇ）、縄文時代前期の土器片36点（423ｇ）、削器１点、敲石１点が出土した。
［小結］外壕の堆積土上部を掘り込んでいることから、比較的新しい時代の溝跡と思われる。また、検出された位置から、第24号溝跡と同じ溝跡の可能性もある。

第33号溝跡（ＳＤ33）（図190）
［位置］Ｊ－22～Ｇ－24グリッドにかけて位置している。Ｊ－22グリッドで突然現れ、斜面下方へのびている。
［重複］外壕（SD23）及び第１号・３号溝と重複し、これらよりも新しい。
［規模］幅50～11㎝、深さ18～62㎝で、13.1mを検出した。南西部分の約6.5mは深さが62㎝で平坦であるが、北東部は深さ20㎝以下の浅く、幅の狭い溝となって北東へのび、しだいに輪郭が不明瞭になって、確認できなくなる。
［堆積土］南東部の深い部分では、上部にローム粒やロームブロックを含んだ暗褐色土が見られるが、

大半は混入物の少ない黒褐色土が堆積している。また、北東部の浅い部分でも混入物の少ない黒褐色土が堆積している。
［出土遺物］なし。

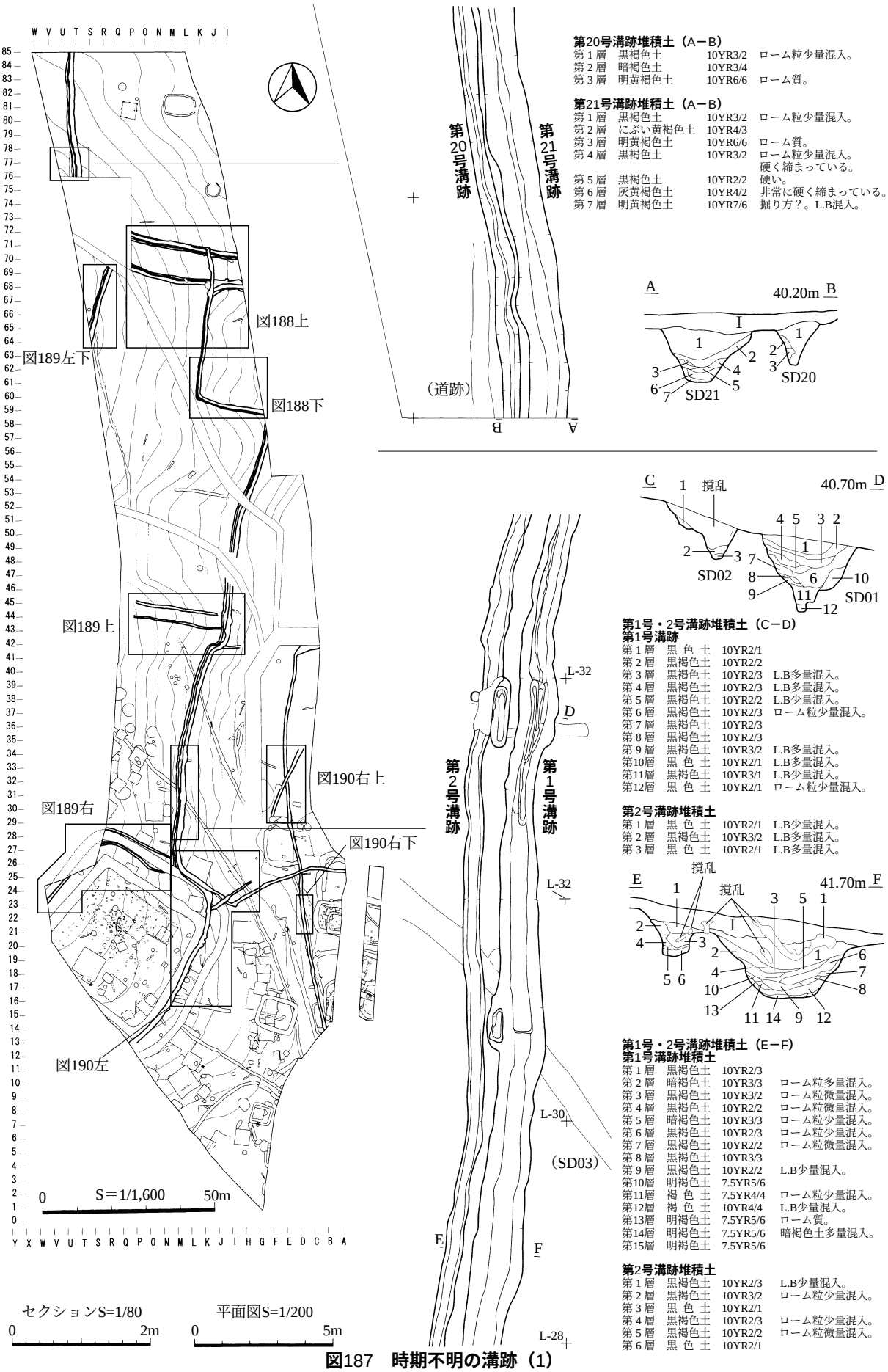
第39号溝跡（ＳＤ39＝ＳＤ53）（図190）
［位置］調査区の東側の低地に検出された南北に長い溝跡で、Ｂ－14～Ｃ－41グリッドにかけて位置している。
［重複］南側で検出された平安時代の溝跡（第40号・42号・44号など）よりも新しく、時期の不明な第１号溝跡・第62号溝跡よりも古い。
［規模］幅70～90㎝、深さ40～50㎝で、約117ｍを検出した。
［堆積土］場所によって若干の違いがあるものの、黒褐色土が主体となっている。
［出土遺物］土師器片354点（3053ｇ）、須恵器片14点（331ｇ）、縄文時代前期・中期の土器片28点（291ｇ）、石器７点が出土した。

第62号溝跡（ＳＤ62）（図190）
［位置］調査区東側の低地、Ｅ－29～Ｃ－34グリッドにかけて位置している。
［重複］第81号土坑よりも古く、第39溝跡よりも新しい。
［規模］幅70～110㎝、深さ40㎝、長さ約20ｍを検出した。
［堆積土］セクションは実測していないが、混入物の少ない黒褐色土が主体である。
［出土遺物］なし。（畠山）

５　小穴群

小穴群１（図192～195）
壕の内側より総数240基の小穴が検出された。平安時代のものと、時期不明のものが混在していると思われる。時期の違いは堆積土等で判断できなかったため、本節でまとめて図示することとした。掘立柱建物跡や、柱列のように組める可能性もある。（小山）

小穴群２（図196）
南側調査区の東端に拡がっており、特にＡ～Ｂ－20～22グリッド付近に集中している。溝とセットになって建物跡になる可能性も考えられる。（小山）



第20号溝跡堆積土（A－B）

第１層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量混入。
第２層	暗褐色土	10YR3/4	
第３層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム質。

第21号溝跡堆積土（A－B）

第１層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量混入。
第２層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	
第３層	明黄褐色土	10YR6/6	ローム質。
第４層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量混入。硬く締まっている。
第５層	黒褐色土	10YR2/2	硬い。
第６層	灰黄褐色土	10YR4/2	非常に硬く締まっている。
第７層	明黄褐色土	10YR7/6	掘り方？。L.B混入。

第1号・2号溝跡堆積土（C－D）

第1号溝跡

第１層	黒 色 土	10YR2/1	
第２層	黒褐色土	10YR2/2	
第３層	黒褐色土	10YR2/3	L.B多量混入。
第４層	黒褐色土	10YR2/3	L.B多量混入。
第５層	黒褐色土	10YR2/2	L.B少量混入。
第６層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量混入。
第７層	黒褐色土	10YR2/3	
第８層	黒褐色土	10YR2/3	
第９層	黒褐色土	10YR3/2	L.B多量混入。
第10層	黒 色 土	10YR2/1	L.B多量混入。
第11層	黒褐色土	10YR3/1	L.B少量混入。
第12層	黒 色 土	10YR2/1	ローム粒少量混入。

第2号溝跡堆積土

第１層	黒 色 土	10YR2/1	L.B少量混入。
第２層	黒褐色土	10YR3/2	L.B多量混入。
第３層	黒 色 土	10YR2/1	L.B多量混入。

第1号・2号溝跡堆積土（E－F）

第1号溝跡堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/3	
第２層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒多量混入。
第３層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒微量混入。
第４層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量混入。
第５層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量混入。
第６層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量混入。
第７層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量混入。
第８層	黒褐色土	10YR3/3	
第９層	黒褐色土	10YR2/2	L.B少量混入。
第10層	明褐色土	7.5YR5/6	
第11層	褐 色 土	7.5YR4/4	ローム粒少量混入。
第12層	褐 色 土	10YR4/4	L.B少量混入。
第13層	明褐色土	7.5YR5/6	ローム質。
第14層	明褐色土	7.5YR5/6	暗褐色土多量混入。
第15層	明褐色土	7.5YR5/6	

第2号溝跡堆積土

第１層	黒褐色土	10YR2/3	L.B少量混入。
第２層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量混入。
第３層	黒 色 土	10YR2/1	
第４層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量混入。
第５層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量混入。
第６層	黒 色 土	10YR2/1	

図187　時期不明の溝跡（1）

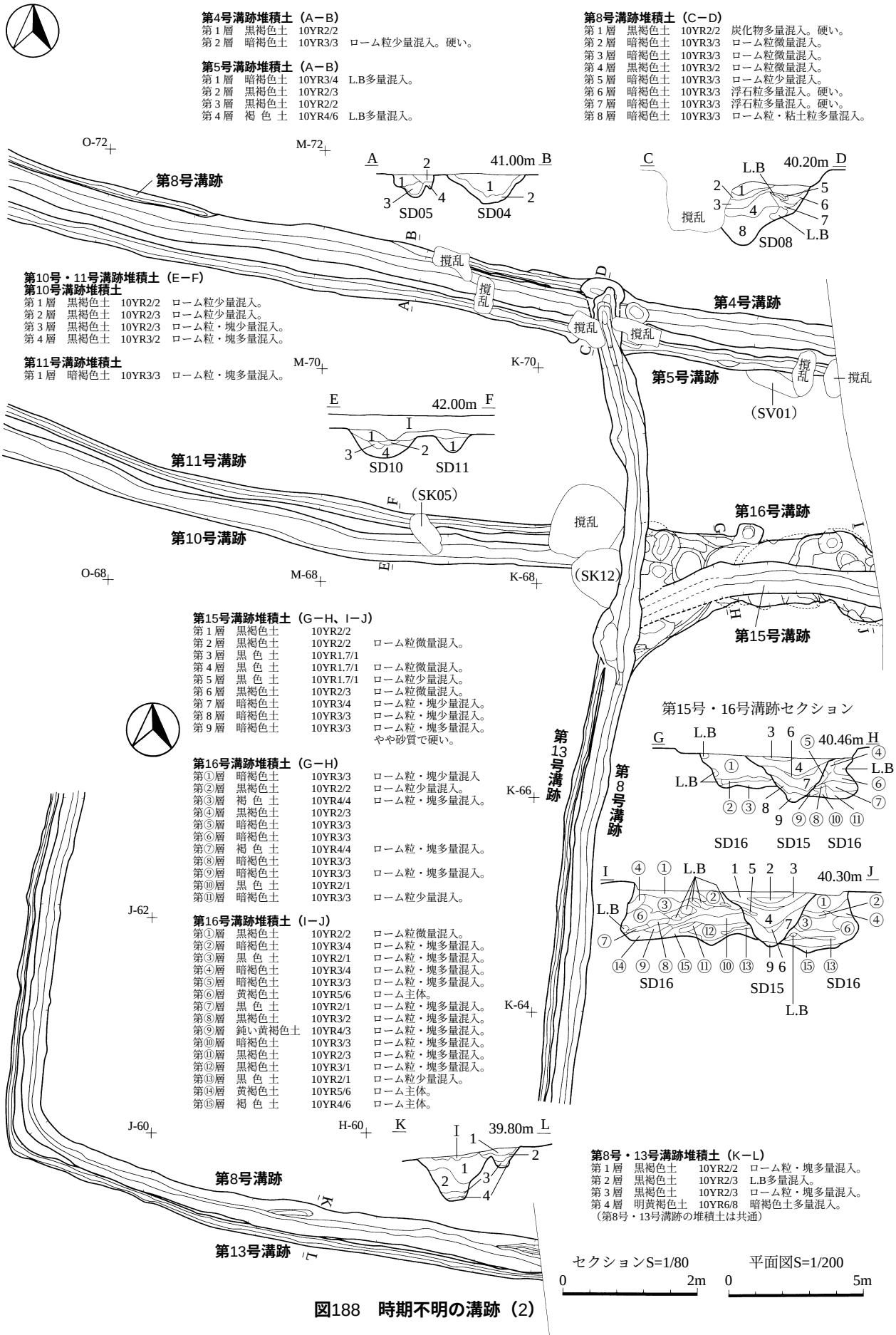


図188　時期不明の溝跡（2）

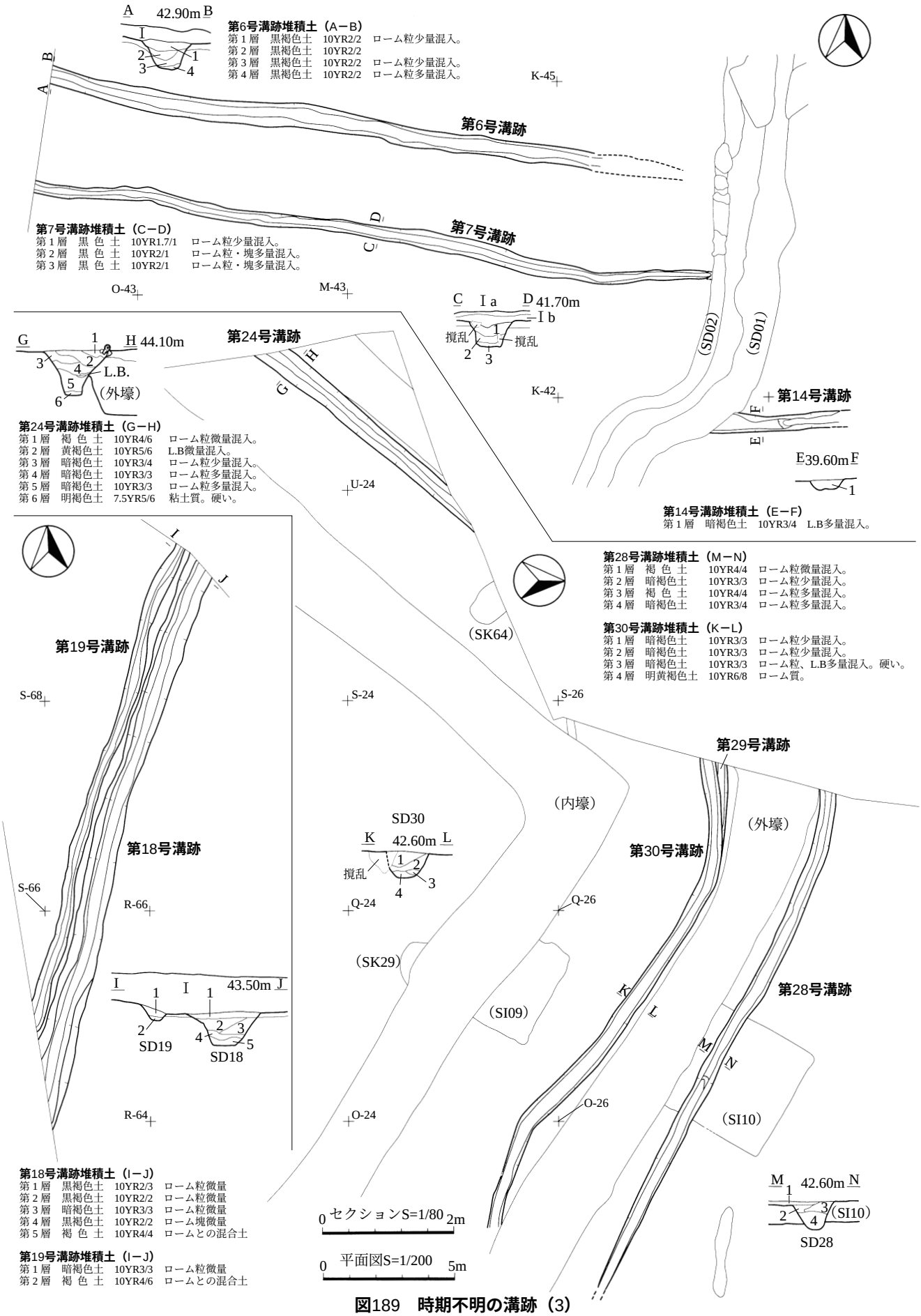


図189　時期不明の溝跡（3）

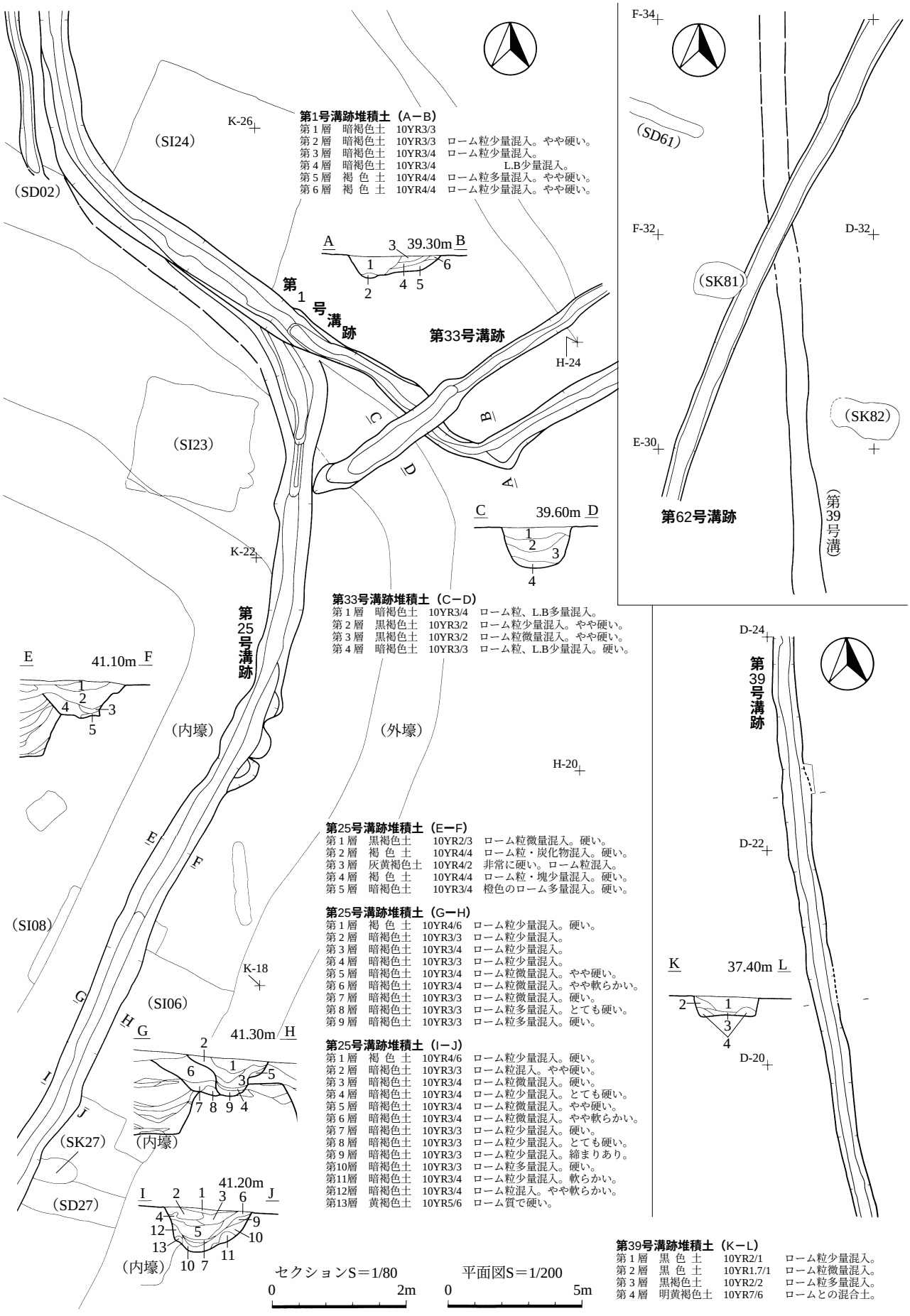


図190　時期不明の溝跡（4）

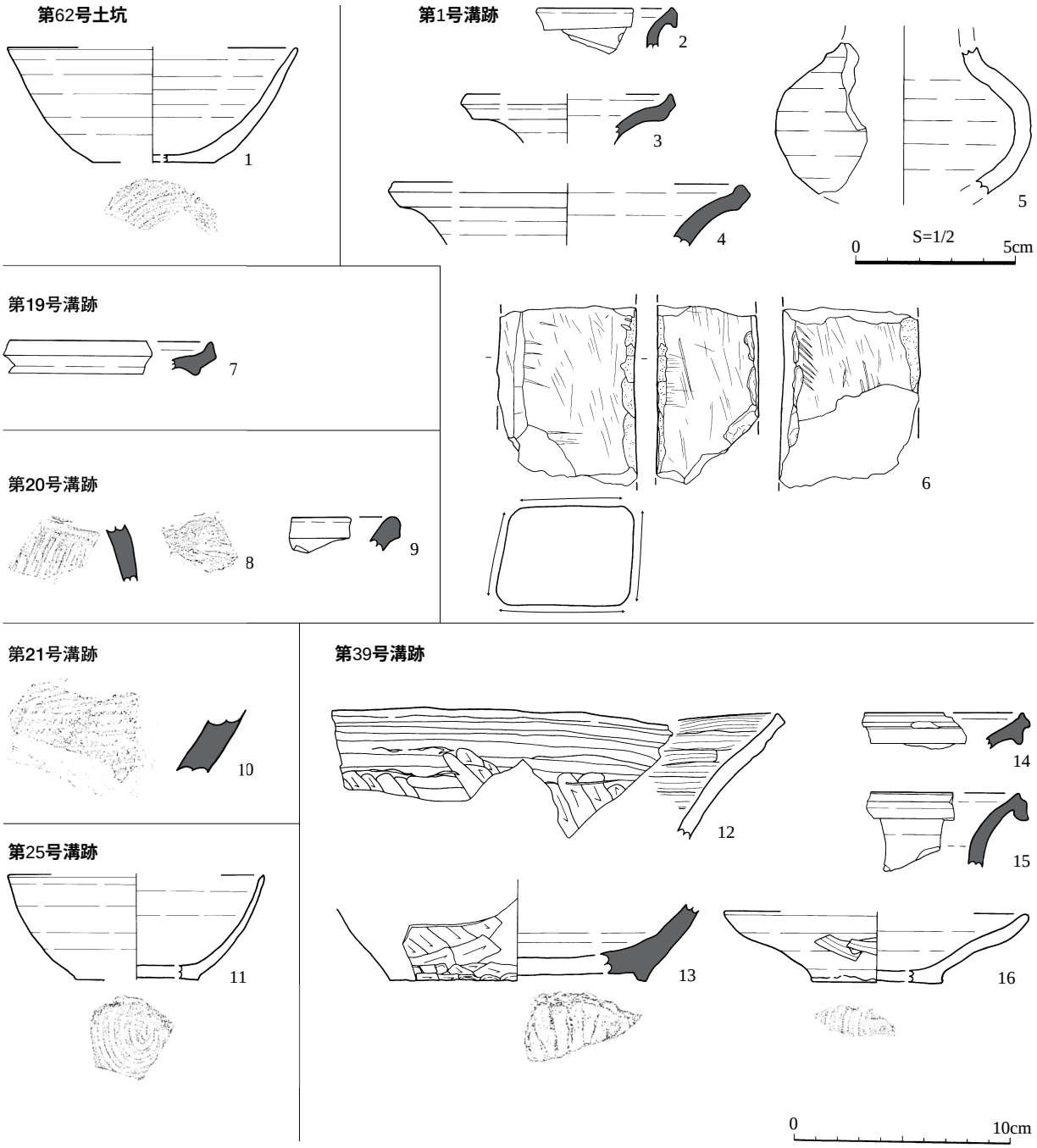


図191　時期不明の土坑、溝跡出土遺物

図192　小穴群 1　　全体図

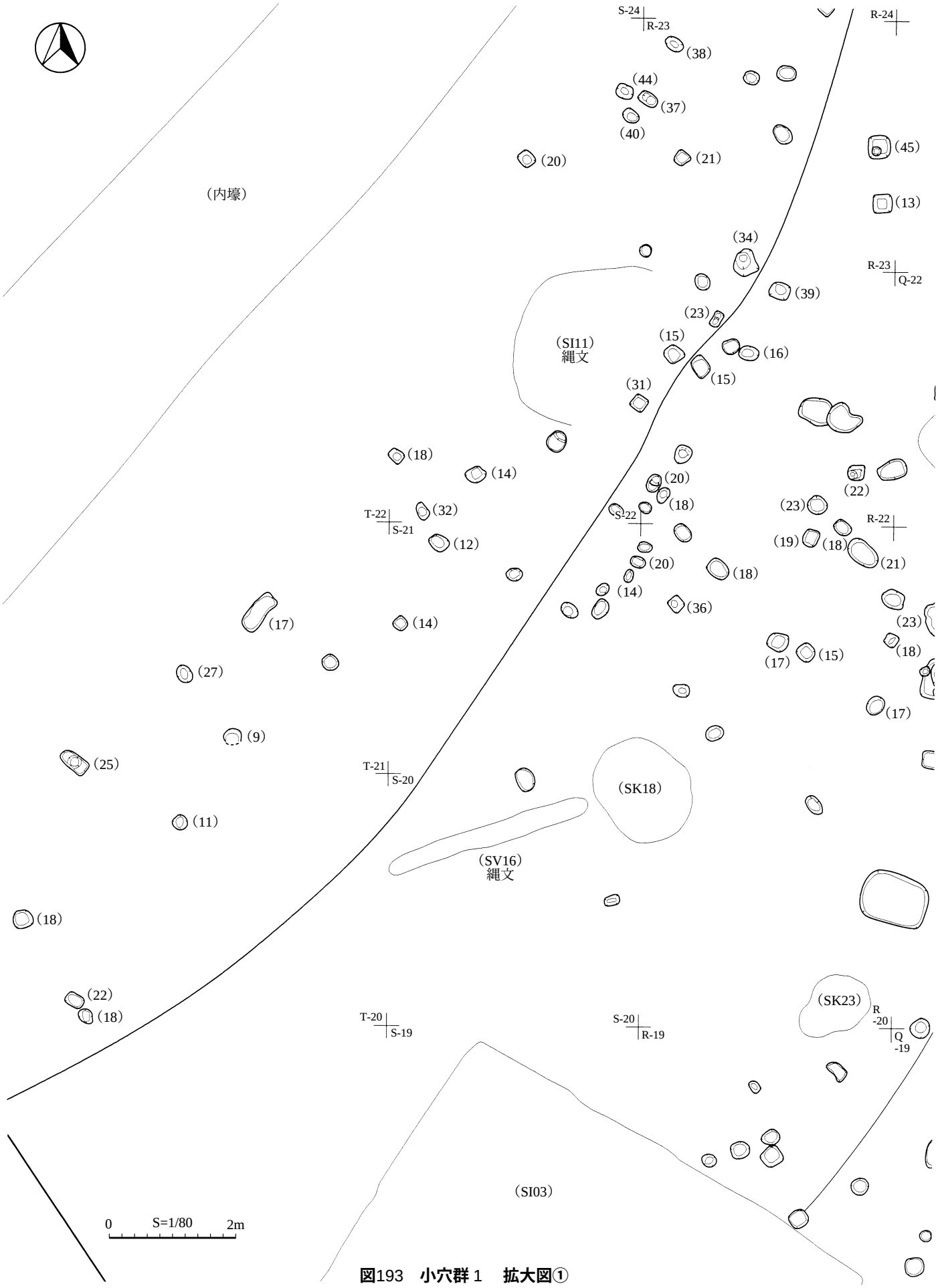


図193　小穴群１　拡大図①

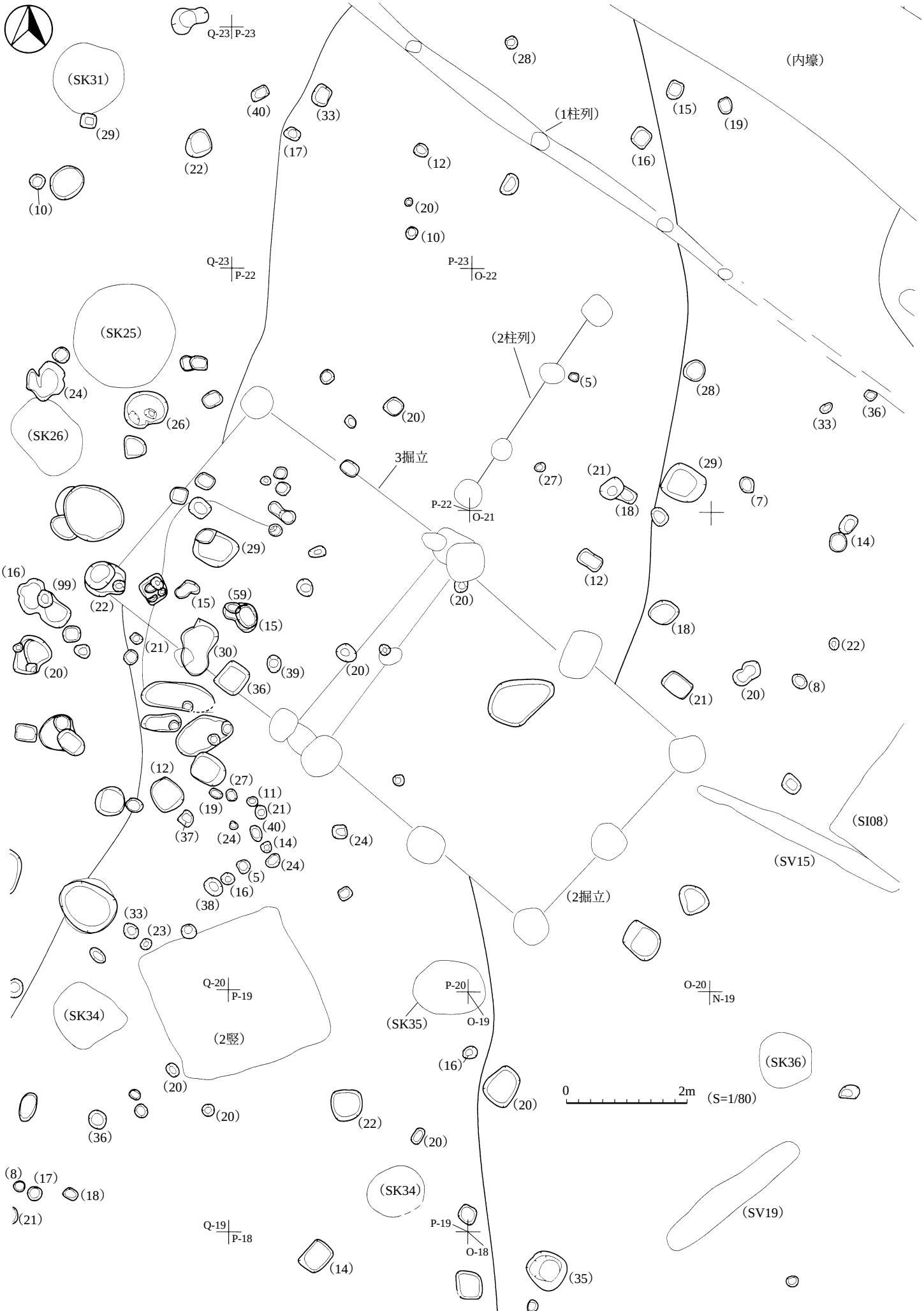


図194　小穴群1　拡大図②

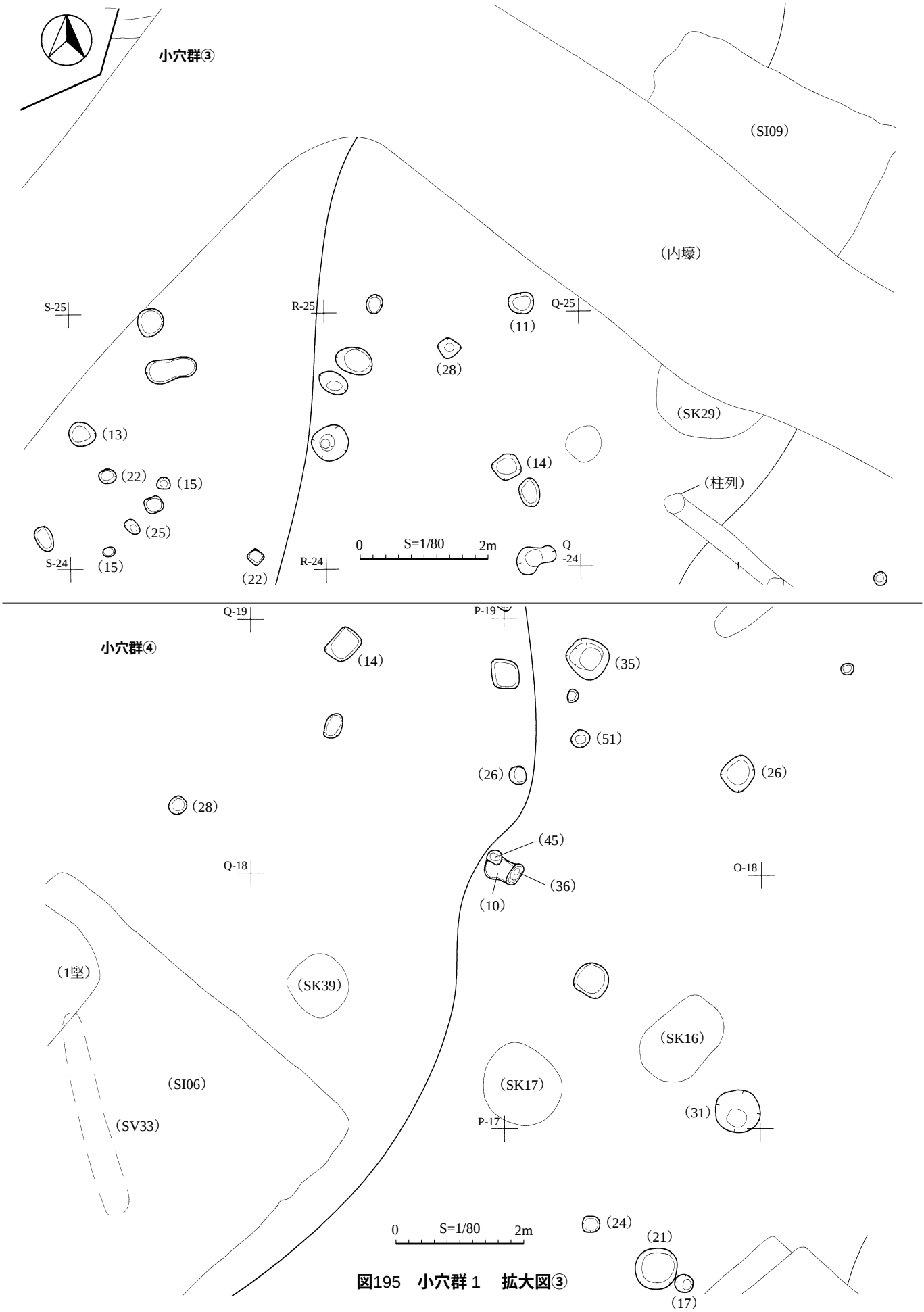
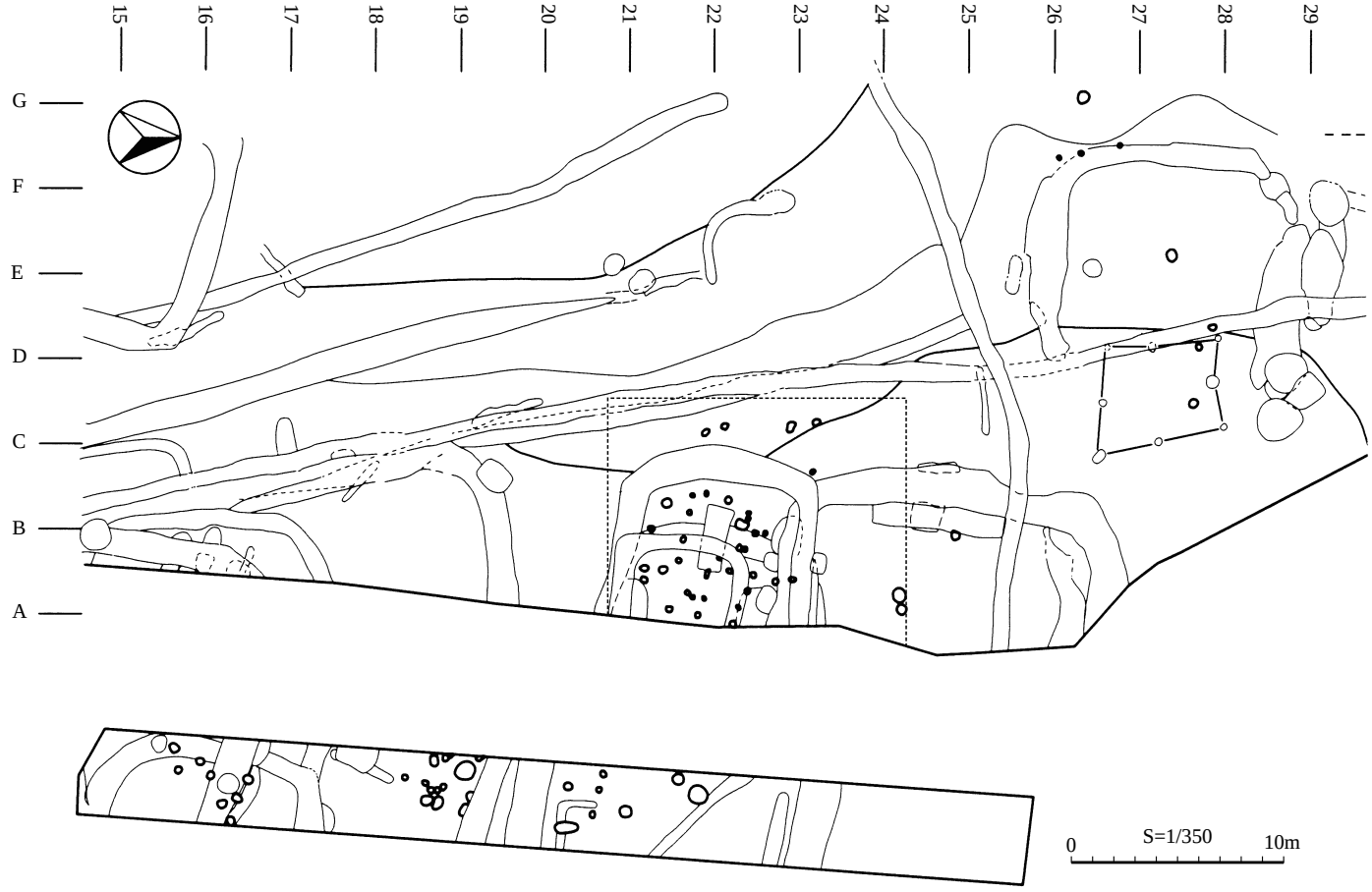


図195　小穴群１　拡大図③


15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
G
F
E
D
C
B
A
0
S=1/350
10m

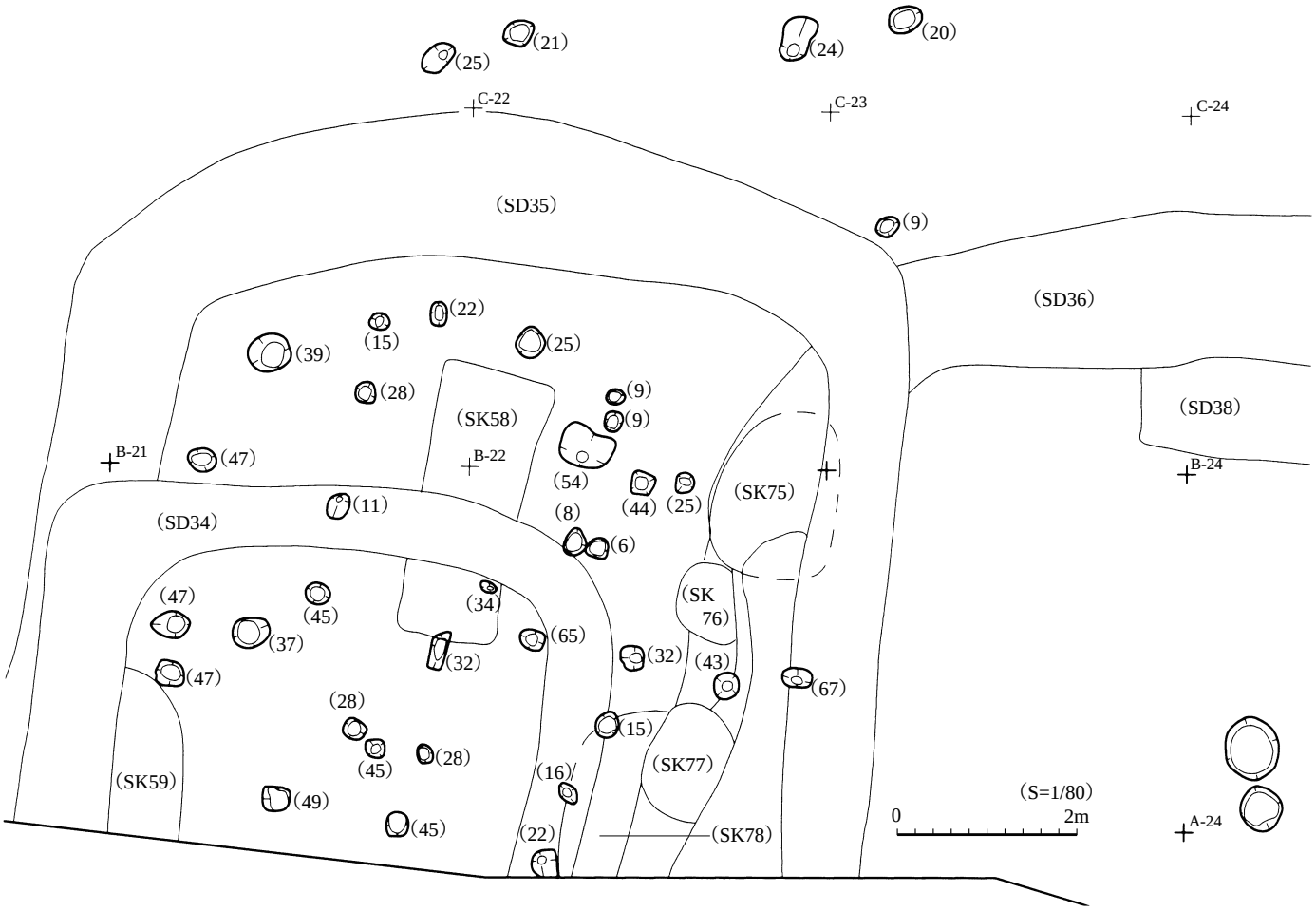

(25)
(21)
(24)
(20)
C-22
C-23
C-24
(SD35)
(9)
(SD36)
(22)
(15)
(39)
(25)
(28)
(SK58)
(9)
(9)
(SD38)
B-21
(47)
B-22
(54)
(44)
(25)
(SK75)
B-24
(11)
(8)
(SD34)
(6)
(47)
(45)
(34)
(SK
76)
(37)
(65)
(32)
(32)
(43)
(47)
(67)
(28)
(15)
(45)
(28)
(SK59)
(16)
(SK77)
(49)
(S=1/80)
0
2m
(45)
(22)
(SK78)
A-24

図196　小穴群2

第２節　遺物

１　珠洲（図197-1）

擂り鉢の底部片で１点の出土である。（小山）

２　近世陶磁器（写真）

11点出土した。18世紀前半～19世紀前半までの肥前系が出土している。殆どが椀類である。写真111-1はコンニャク印判がおされているもので、出土のものでは最も古いものである。（小山）

３　古銭（図197-10～22）

文久永宝（1863年）は玉宝（草書略宝、図197-１）、寛永通宝は、19～22が鉄一文銭の他は新寛永である。（中嶋）

４　土製品

・泥面子（図197-２～６）

遺構外から５点出土した。２は老婆の頭髪としわ、３は鱗状、４は不明、５は日除けバイザー的なものを被っている女の子、６は鞍を装着した馬をモチーフにしていると思われる。（中嶋）

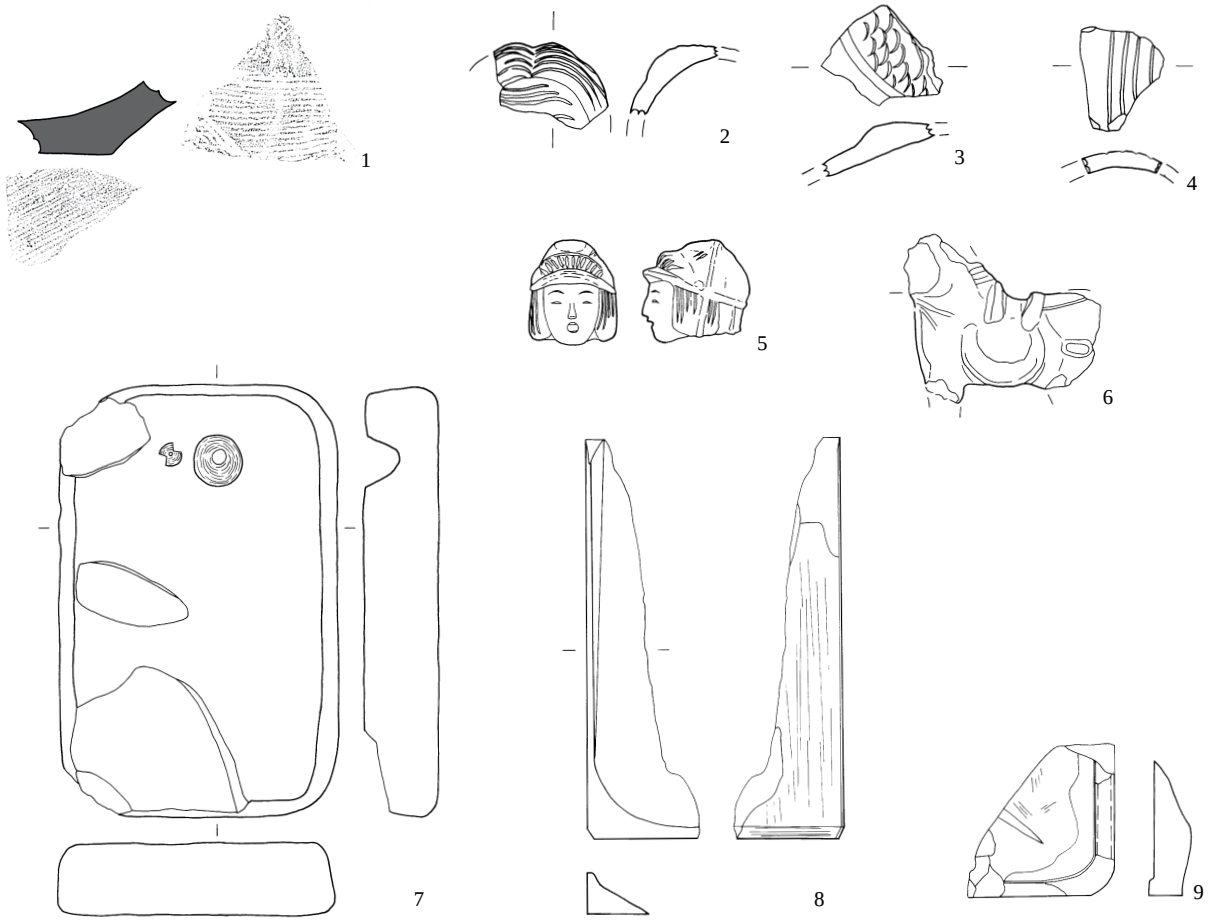
５　石製品

・不明石製品（図197-７）

遺構外出土である。珪藻質泥岩の石材を整形し、上部に窪み状の穴と穿孔途中と思われる凹みが見られる。用途等については不明である。（中嶋）

・硯（図197-8・9）

石製の硯が２点出土した。２点共に破損品で、石材は粘板岩を使用している。図197-９は４㎜程の縁取りが施されている。先端には墨と思われる黒色物が付着している。本遺跡に隣接している山元（２）遺跡の第１号鍛冶遺構より石製の硯になる可能性のあるものが出土している。記載の中で、本県において石製の硯は、平安時代からは出土しておらず、県内最古のものである可能性が示唆されている。本遺跡より出土したものは遺構外であるため、明確な時期は特定できないが、平安時代の集落が主体を占めていることなどから、平安時代に帰属する可能性も考えられる。（小山）


1
2
3
4
5
6
7
8
9

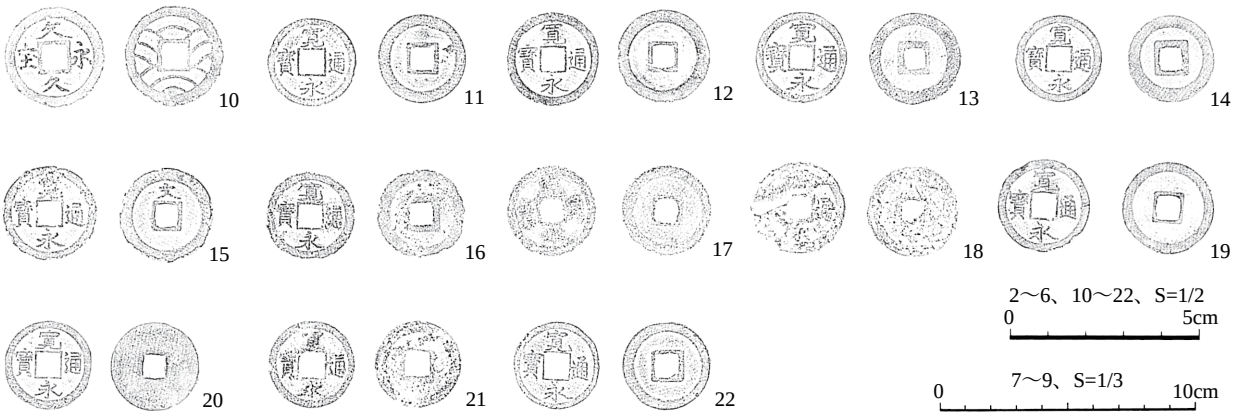

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
2〜6、10〜22、S=1/2
0
5cm
7〜9、S=1/3
0
10cm

図197　その他の遺物

第８章　調査の成果とまとめ

第１節　縄文時代の遺構

今回の調査で検出した縄文時代の遺構は竪穴住居跡（以下、住居跡）13軒、土坑14基、溝状土坑52基、土器埋設遺構１基である。これらの遺構の分布は図198･203のとおりであるが、住居跡や土坑は調査区域の南側に集中する傾向が見られ、溝状土坑は調査区全体に散在している。とくに住居跡は調査区の南側でも調査区の中央西寄り付近、Ｍ～Ｑ－29～39グリッドで囲まれた区域に11軒が集中して検出されている。

１　竪穴住居跡

今回の調査で検出した13軒の竪穴住居跡は、すべて円筒下層ｂ式期の縄文時代前期中葉に属するものである。以下、これらの住居跡について、若干のまとめを行う。

（１）形態・規模

全体形のわかる住居跡は４軒（第２号、第38号、第37号、第43号）、検出した部分から平面形を推測できる住居跡が６軒、平面形が不明なものが３軒である。前２者を対象に住居跡の平面形を見ると、円形４軒、楕円形４軒で、検出できた部分から推測して円形と思われるものが２軒ある。

住居跡の規模は、円形のものは直径2.5m～3.6m、床面積６～９㎡で、楕円形のものは長軸2.8m～４m前後、短軸2.6～3.9mで、床面積５～14㎡前後である。全体に小型で、最大でも第38号住居跡の13.47㎡（推定）である。

なお、第38号住居跡は新旧２基の炉が検出された住居であり、炉の位置が中央からずれていることや、壁のラインー長軸の部分に若干のくびれが見られることから、改築が行われた可能性が高い。

（２）柱穴配置

主柱穴の配置は２本柱と４本柱のものがあり、前者が一般的である。

２本柱の柱穴配置をもつものは、炉を中心にして向かい合うように配置されている。炉に接するか近接した場所にあるものが６軒、炉からやや離れて配置されているものが５軒、不明なものが１軒である。不明なものは、炉が後世の撹乱（平安時代の溝跡）によって失われていたためであるが、検出位置からは炉から若干離れていた可能性が高い。ここからは、主柱穴が炉に接した位置にあるものとやや離れた位置にあるものが、相半ばしている状況がうかがわれる。

４本柱のものは第38号住居跡の１軒のみである。炉を中心として、ほぼ方形の配置となっている。この住居跡は本遺跡では最大規模の住居跡であり、構造的に２本の柱では支えきれないことが理由なのかもしれない。

（３）炉

炉は円形もしくは楕円形を呈し、断面形が皿状の浅いものである。規模は、50～70㎝前後の大きさ

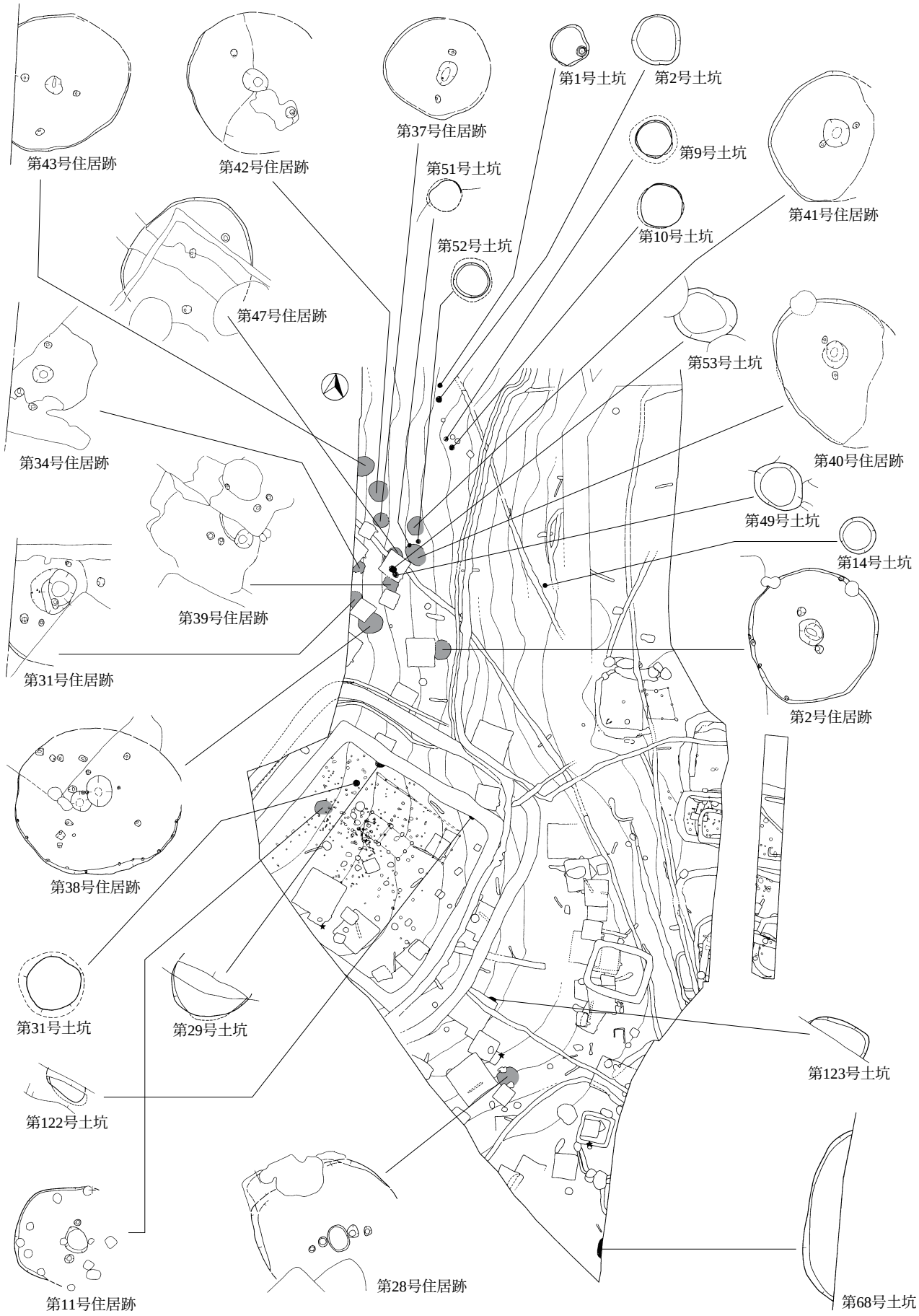


図198　縄文時代の住居跡と土坑の分布

で、深さ10～15㎝である。炉の底面は非常に硬く締まっている。炉の堆積土も同様で、ローム粒や焼土粒、炭化物粒を少量含み、非常に硬い。なお、１例だけであるが、堆積土中に灰が見られた住居跡が１軒ある。

全体形のわかる住居跡４軒（第２号、第38号、第37号、第43号）を対象に、住居内における炉の位置を見てみると、ほぼ中央に位置しているもの２軒、やや偏在しているもの２軒である。他の住居跡では、残存部から中央付近に位置すると思われ、中央付近に構築されるものが多いようである。

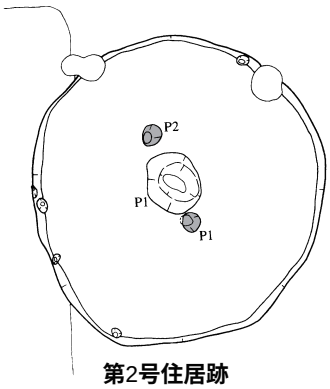
（４）他遺跡の例

縄文時代前期中葉（円筒下層ａ～ｂ式期）における県内の例では、青森市三内丸山遺跡、同熊沢遺跡、同稲山遺跡、同岩渡小谷（４）遺跡、碇ヶ関村大面遺跡、大鰐町大平遺跡、七戸町作田遺跡、野辺地町柴崎遺跡、八戸市沢掘込遺跡、南郷村畑内遺跡、川内町熊ヶ平遺跡等で検出例がある。

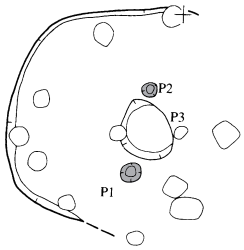
これらの遺跡の検出例からは、平面形が円形か楕円形あるいは不整楕円形を呈するものが多いが、隅丸長方形あるいは長方形を呈するものも相当数見受けられる。本遺跡や大面遺跡などでは円形基調の住居跡が主体となっているが、青森市三内丸山遺跡や岩渡小谷（４）遺跡、熊沢遺跡等では円形基調のものと方形基調の住居跡が混在している。南郷村畑内遺跡では楕円形の住居があるが、八戸市沢堀込遺跡では方形基調の住居跡が主体となってる。

炉は構築されないものが多いが、地床炉や掘り込み炉も相当数報告されている。しかし、炉として報告されているものには、焼土の痕跡（火床面）が見られないものが多いようである。大半の報告事例では、住居内における位置や堆積土中の炭化物、焼土の混入から炉としている場合が多く、焼土の混入が記載されている例はきわめて少ない。このような炉としての確証が得られていないことから、「地床炉？」と報告されている例や単に住居跡の中央に浅いピットを持つことが報告されている例も散見される。おそらく、本遺跡で「炉」としたものと同様の構造と思われるが、これらの施設が炉としての機能があったかどうかは、今後の課題でもあろう。なお、特殊な例では、熊ヶ平遺跡で砂敷炉の例が報告されている。

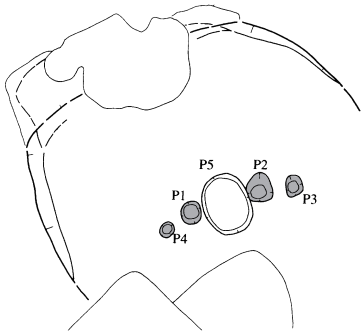
主柱穴は１本柱、２本柱、３本柱、４本柱の例のほか、壁柱穴のみが検出された例がある。このうち、２本柱の主柱穴配置は、炉を挟んで対峙するもので、本遺跡でも一般的である。４本柱の主柱穴配置は本遺跡では規模の大きな住居跡に見られることから、住居跡の規模と関係する要素であろう。なお、２本柱の主柱穴配置は前期後葉の円筒下層ｄ式期でも見られるが、前期中葉の特徴といえそうである。（畠山）



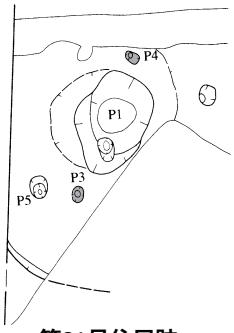
第2号住居跡



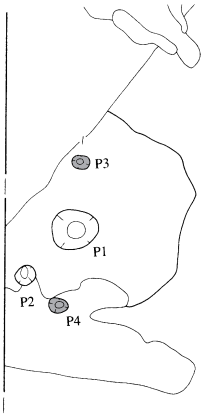
第11号住居跡



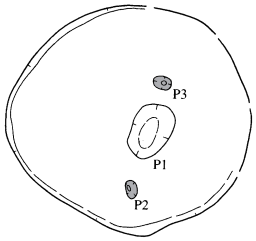
第28号住居跡



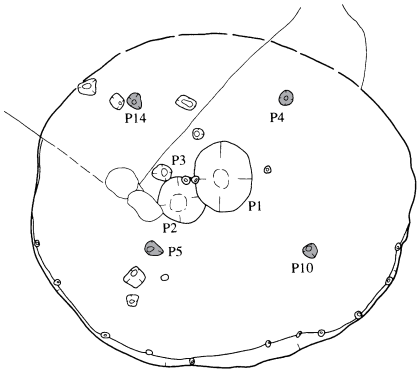
第31号住居跡



第34号住居跡

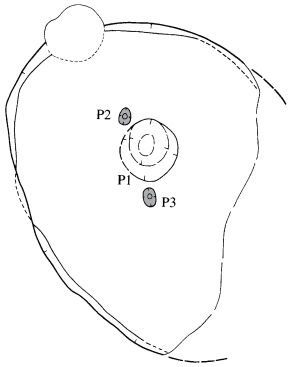


第37号住居跡

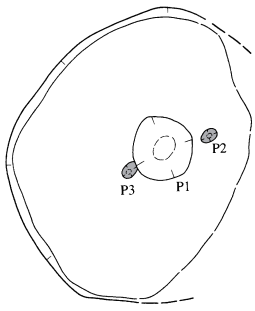


第38号住居跡

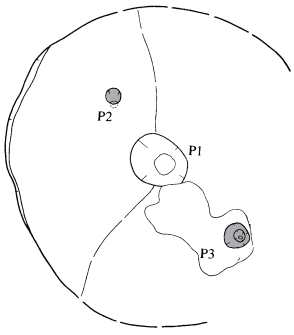
第39号住居跡



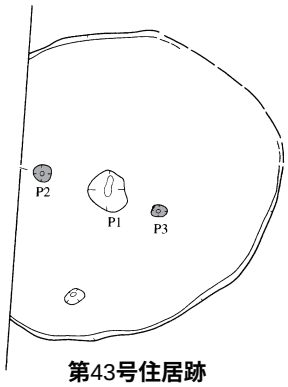
第40号住居跡



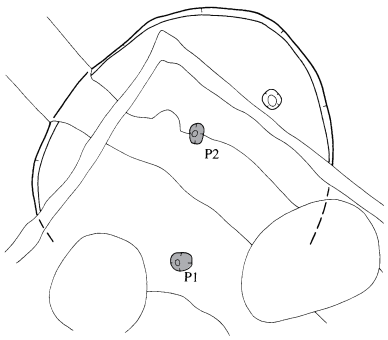
第41号住居跡



第42号住居跡



第43号住居跡



第47号住居跡

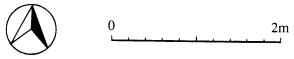
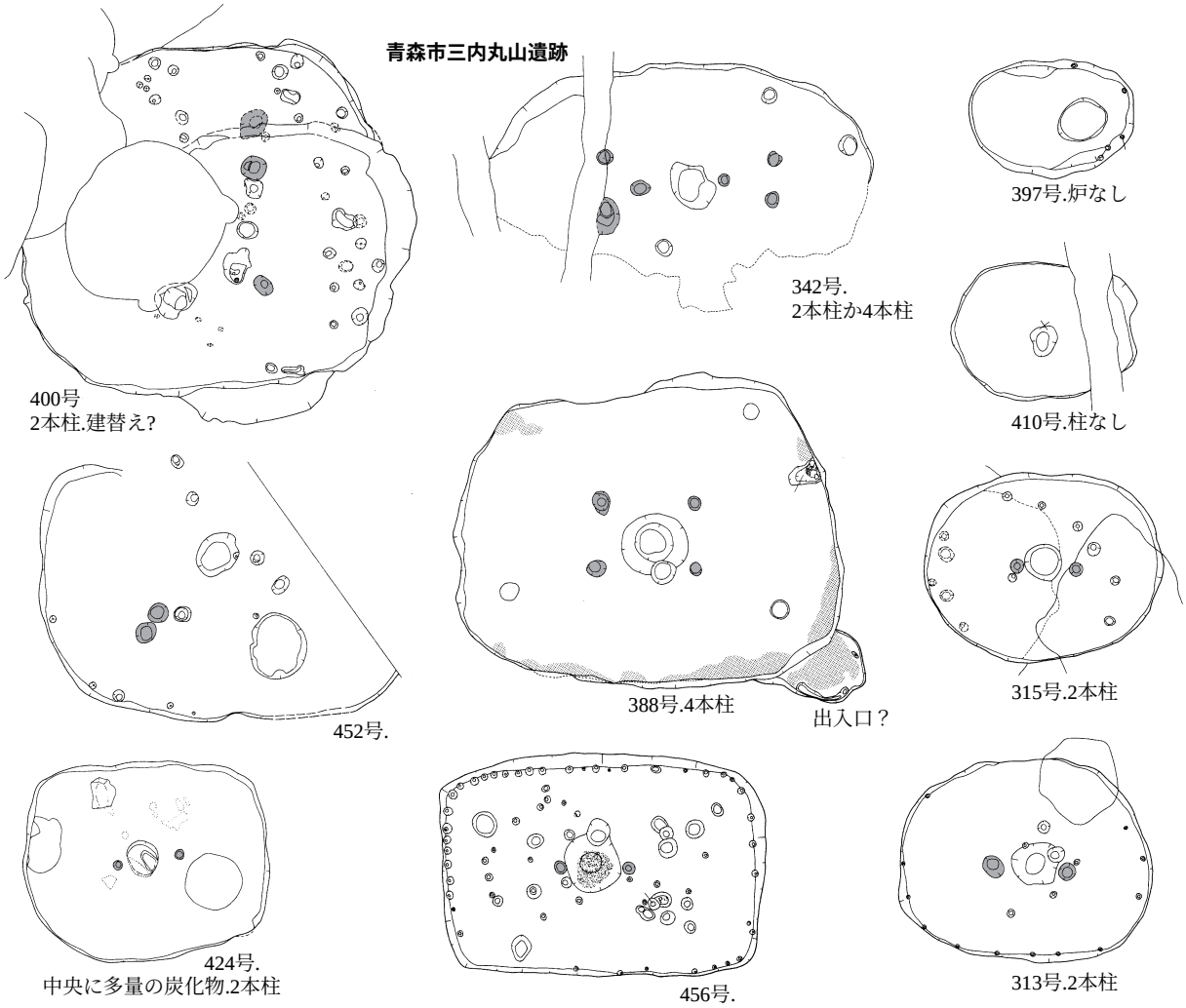


図199　縄文時代住居跡集成



青森市岩渡小谷(4)遺跡（前期中葉～後葉）

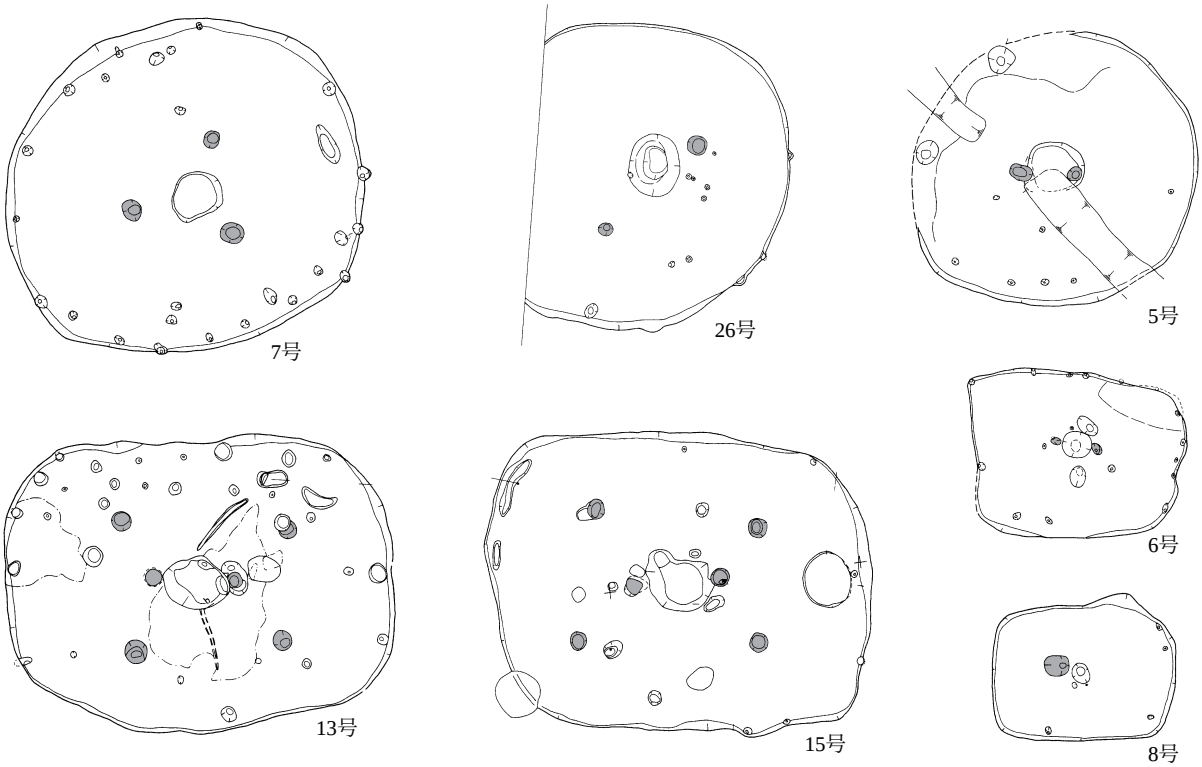


図200　縄文時代前期中葉の住居跡例（1）

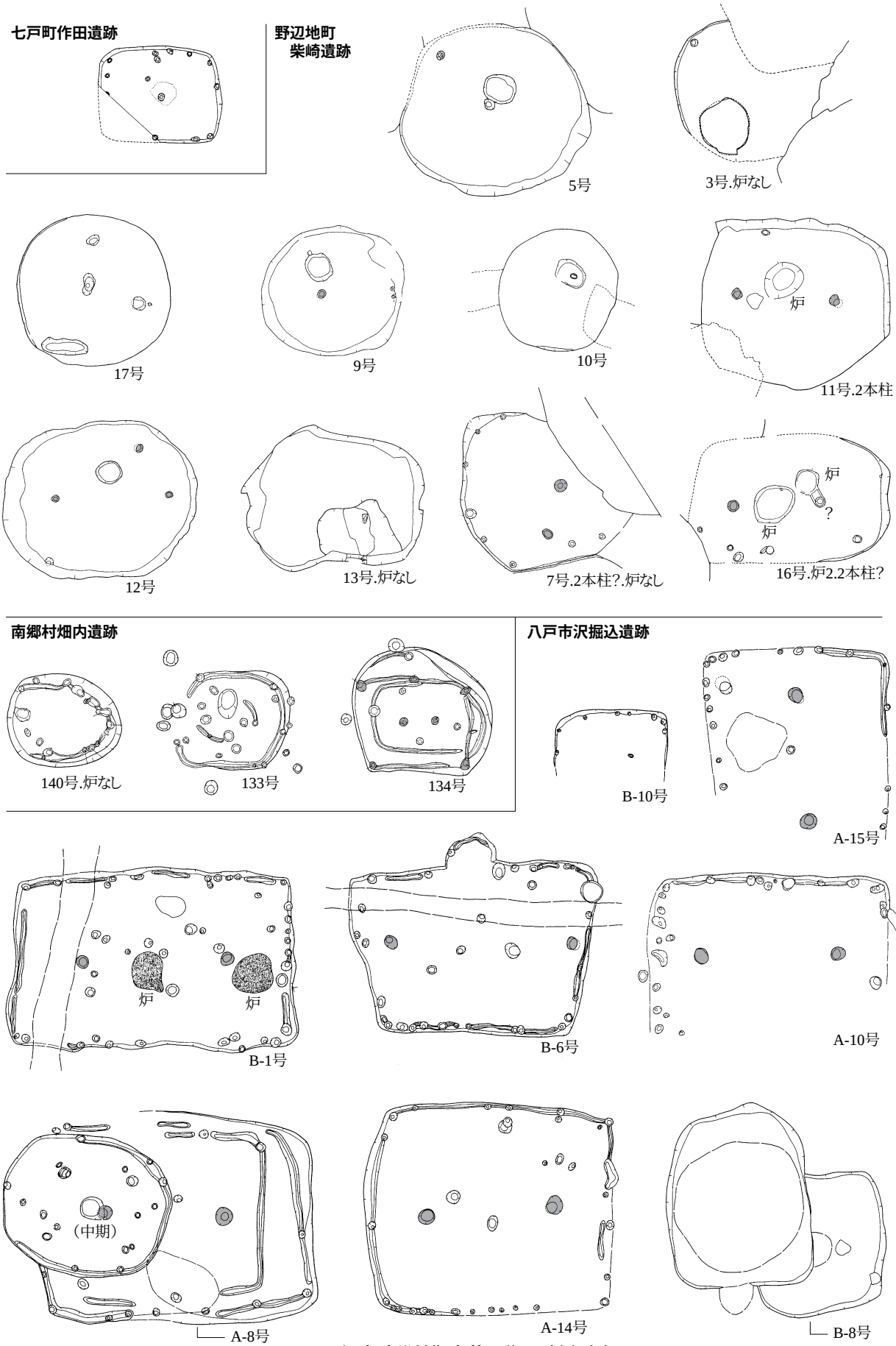


図201　縄文時代前期中葉の住居跡例（2）

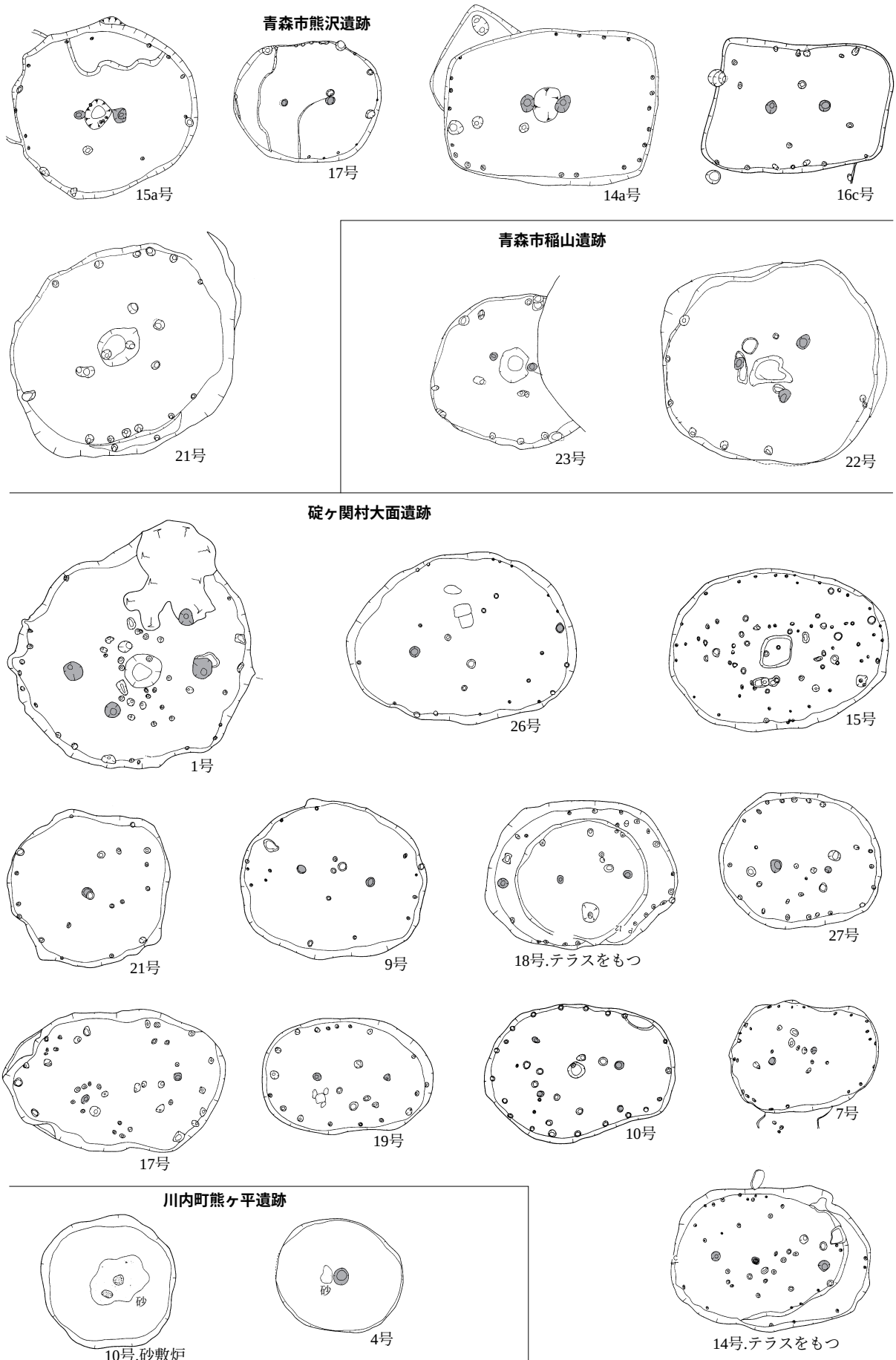


図202　縄文時代前期中葉の住居跡例（3）

２　土坑

縄文時代の土坑は14基である。諸特徴から、以下の４種類に分類される。

A類；円形で浅い土坑。２基（第１号、第２号）。

第１号土坑からは縄文時代後期、十腰内Ⅱ式の浅鉢型土器２個体が壁隅から重なって出土し、墓である可能性が高い。第２号土坑からも同時期の土器片が出土し、この２基の土坑は同時代に構築されたものと考えられる。

B類；円形で深さのある土坑。３基（第14号、第49号、第53号）。

第14号土坑は、全体に円筒状に掘り込まれた土坑である。基本層序の第Ⅳ層下部から掘り込まれていることから、縄文時代前期中葉の可能性がある。第49号・50号土坑は断面形が逆台形を呈している。平安時代の住居跡床下から検出されているが、縄文時代前期中葉の土器片しか出土していないことや、堆積土の様相から縄文時代前期中葉と思われる。同時期の住居跡に近い位置に検出されている。

C類；フラスコ状土坑。８基（第９号、第10号、第29号、第31号、第51号、第52号、第122号、第123号）。

第９号土坑からは、縄文時代後期と思われる土器片が、第10号土坑からは縄文時代前期中葉の土器片が出土している。これら２基の土坑は第１号、２号土坑と近接した場所に検出され、堆積土の様相も近似している。構築時期は不明であるが、ともに、縄文時代後期に属する可能性がある。第122号土坑は、重複により開口部での平面形や規模は不明であるが、深さ122㎝の深い土坑である。堆積土からは縄文時代前期中葉の土器片が出土していることから、当該時期の可能性がある。

D類；上記以外（第68号）

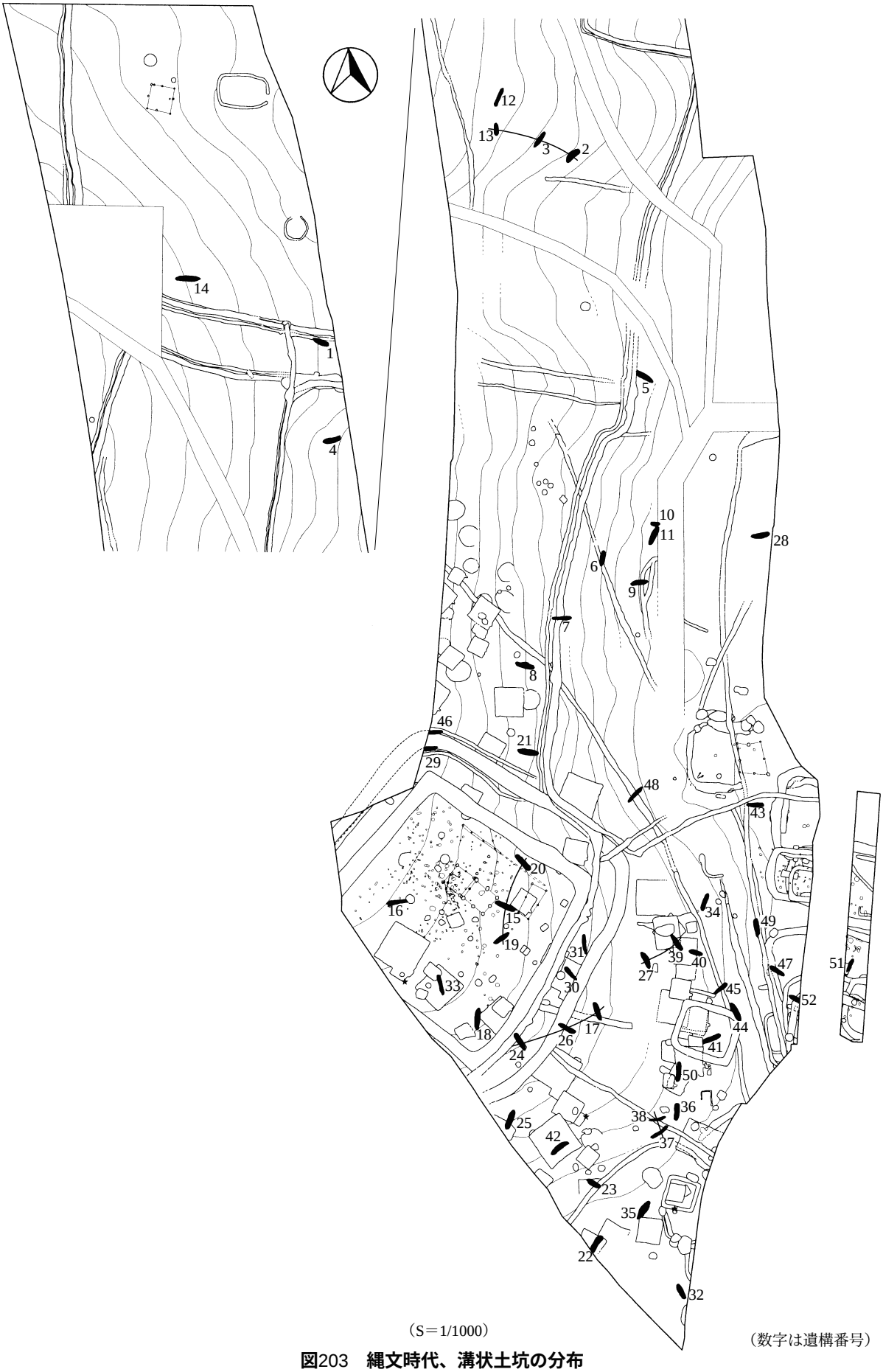
他の土坑と異なり、規模の大きいもので、検出できた部分の長軸は370㎝である。底面が硬く踏みしめられている。土坑と云うよりは、住居跡の可能性が高い。なお、構築時期は不明である。（畠山）

３　溝状土坑

一般に、縄文時代の落とし穴といわれている溝状土坑は52基の検出である。調査区の南側に多く見られ、中央から北側では散在する程度である。地形的には、西側の低位段丘上や東側の低湿地にも検出されている。また、等高線に平行している構築されている例や直交して構築されている例もある。全体の配置を眺めてみると、２～３基が一単位になって構築されたと思われるところもあるが、全般に規則的な配置は見られないようである。

平安時代の遺構と重複する例はあるが、縄文時代の住居跡や土坑と重複している例はない。土坑内からは縄文時代前期中葉の土器片が出土した遺構もあり、これに近い時期が考えられそうである。

（畠山）



（S＝1/1000）　　（数字は遺構番号）

図203　縄文時代、溝状土坑の分布

第２節　平安時代の遺構と遺物

１　検出遺構

（１）竪穴住居跡

山元（１）遺跡が位置している前田野目台地の東側縁辺には、国道７号浪岡バイパス建設事業に伴って多数の遺跡が調査されている。本遺跡の南側には山元（２）、（３）遺跡、北側には環壕集落として有名な高屋敷館遺跡や、野尻（１）～（４）遺跡が位置している。これらの遺跡の年代はおおむね９世紀～12世紀に至るまでであるが、中でも９世紀中頃からは竪穴住居跡の数も増え始め、この時期に集落が発展したと考えられる。また、浪岡町に隣接している五所川原市原子・前田野目・持子沢地区では須恵器の窯跡が多数発見されており、９世紀後半には操業されていたと考えられていて、集落の発展する時期と重なることがうかがわれる。

本遺跡は標高35～45mの台地上に立地している。平安時代の集落が検出された区域は標高37～43mの西から東へ下る緩斜面地に位置しており、壕跡をはじめ多数の遺構が検出されている。調査区の西側には平坦面が拡がっており、多数の土師器が表採されていることから、集落は西側へ拡がっていることが予想される。

平安時代の竪穴住居跡（以下、住居跡とする）は53軒である。このうち、白頭山火山灰の堆積状況と、重複関係から構築年代が10世紀中葉以降になると思われる住居跡は24軒ある。一方、十和田a火山灰の堆積状況と出土遺物から構築年代が９世紀代になるとおもわれる住居跡が２軒で、その他に、カマドの構築方法、及び十和田a火山灰の堆積状況から、本遺跡内で主体を占める10世紀中葉以前になると思われる住居跡が２軒ある。本項では構築年代が推定できるものを対象として遺構の属性をまとめていくものとする。

[構築年代が９世紀代の住居跡]

○第14号住居跡

出土遺物から構築年代が９世紀前半と考えられる住居跡である。大半が削平されており、全体規模、全体形、及び柱穴配置は不明である。カマドの構築方法に大きな特徴があり、土師器甕を半分に打ち欠いて、両袖の芯材としている。10世紀中葉以降の住居跡に構築されているカマドではこのような芯材は使われていない。また、本遺構は焼失家屋と考えられカマド脇の壁際から炭化した板材が出土した。検出状況から腰板と考えられ、樹種同定ではトネリコ属と同定された。

○第６号住居跡

第６号住居跡は十和田a火山灰が堆積している住居跡で、白頭山火山灰は含まれていない。構築年代は出土遺物から９世紀後半代になると考えられる。平面形はほぼ正方形で、長軸が6.2mの比較的大型のものである。柱穴は床面内と四隅に配置されており、壁溝は床面を全周している。住居内からはカマド脇に楕円形の小土坑が、壁際から中規模の土坑が３基検出されており、壁際の土坑には大量の遺物が廃棄されている。カマドは袖が残存せず、粘土材の残存量も少ないことから、カマド破壊が行われた可能性も考えられる。

[構築年代が10世紀中葉以前の住居跡]

○第26号住居跡

カマドの構造が地下式であることから古くなると考えられるが、遺物の出土が少なく詳細な年代は不明である。重複により全体形及び規模は不明であるが、残存している軸長は5.2mで中型以上の規模になると考えられる。

○第50号住居跡

堆積土に十和田a火山灰がみられ、出土遺物から構築年代は９世紀後半から10世紀前葉の可能性が考えられる住居跡である。平面形は方形で、規模は６mの比較的大型のものである。柱穴は床面内と四隅に配置されている。カマドは削平を受けており残存していない。

[構築年代が10世期中葉になるもの]

・白頭山火山灰が二次堆積している住居跡

第１号・３号・４号・８号・10号・15号・16号・18号・20号・21号・23号・32号・33号・35号・36号・58号・67号・69号住居跡

・白頭山火山灰が二次堆積している遺構と重複し、これよりも新しい住居跡

第19号・55号・56号・57号・62号・65号住居跡

これらの遺構の構築年代は検出状況から、白頭山火山灰降下以後になると思われ、下限は出土遺物から10世紀中葉の範囲内に収まる可能性も考えられる。以上の住居跡を対象に、属性をまとめていきたい。

○規模・平面形・柱穴配置

長軸規模は2.5mから8.6m（張出部を含む）までの範囲で分布している。柱穴配置とあわせて見ると、２m台、３～４m台と、５m前半、５m後半を境にして柱穴の配置状況が異なる傾向が認められる。

柱穴配置には以下のタイプがみられる。

１類　床面内に配置されるほか、壁柱穴とセットになるもの

２類　床面内に配置されているもの

３類　壁の４隅と壁柱穴がセットになるもの

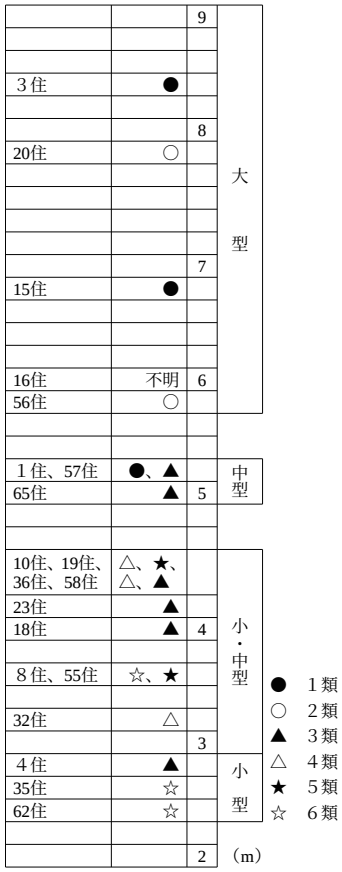
４類　壁の４隅に配置されるもの

５類　２隅でしか確認できなかったもの

６類　柱穴がないもの

７類　不明

柱穴配置と長軸規模の相関関係をみると、２m台のものは柱穴がないもの（６類）が多く、３～４m台の住居跡は４隅に柱穴が配置されるタイプ（３・４類）が多い。また、５m後半以上の規模の住居跡は床面内に柱穴が配置されるタイプ（１・２類）になる。一方５m前半台では、１・３類が混在している。このように、規模と柱



穴配置は相関性が認められることから、ここでは２m台の住居跡は小型、３～４m台は小・中型、５m前半台は中型、５m後半より大きい規模は大型の住居跡と区分することができる。

柱穴内から柱痕が検出された例もあるが、その断面形状は長方形になっている。また、柱穴及び小ピットの堆積土中から、完形に近い土師器、須恵器や、鉄製品が出土している例がある（第１号・15号・20号住居跡）。

平面形は規模の大小に関わらず、正方形が一般的で、ほかに、長方形が２軒（第62号、67号住居跡）検出されている。第62号住居跡は小型規模の住居跡で、第67号住居跡は残存壁長が５m以上ある事から、中型以上の規模になると思われる。柱穴配置及び住居構造で特徴的なのは第１号住居跡である。本住居跡は中型規模で柱穴配置が１類になる唯一の住居跡で、壁柱穴も他の遺構より密に並んでいる。また、掘立柱建物跡が付随している可能性のある住居跡である。

○床面及び壁溝

床面は地山を掘り込んだ後、土を盛って平坦に整えているもの14軒と、地山をそのまま床面としているもの３軒が認められる。地山を床面としているものは小型の住居跡や小・中型の住居跡に認められる。壁溝は全周しているものが圧倒的に多く、壁溝が施されていないものは４軒である。後者の４軒は小型や小・中型の規模の住居跡に認められる。

○土坑

住居内に作られる土坑はカマド脇に見られるものとそうでないものに大別できる。

カマド脇に見られる土坑は５mを超す規模の住居跡から検出されている。第３号・65号住居跡では、カマドの左脇から平面形が楕円形になる土坑が検出されている。いずれも、規模は40×60㎝前後、深さ10㎝前後で、底面はほぼ平坦になる。また、２基共に壁に平行して構築されている。第23号住居跡でもカマド脇から土坑が検出されているが、第３号・65号住居跡検出の土坑とは、長軸方向、規模、構築位置、底面状況の全てにおいて異なっている。

一方、カマド脇以外に構築されている土坑は、中～大型規模の住居跡から検出されており、小型の住居跡からは検出されておらず、住居規模に規制されていることが考えられる。構築位置は、住居規模が小さいほど壁際に構築される傾向があり、規模が大きくなるにつれて床面のほぼ中央付近に構築されている。

○出入り口

第32号・55号住居跡など、小・中型規模の住居跡から検出された。検出位置はカマドが構築されている壁辺側で、カマドの左側である。いずれも、ロームとの混合土が貼り付けられて、スロープ状に整地されており、使用面は堅くしまっている。

○間仕切り溝

第15号・20号・65号住居跡など、長軸規模が５mを超す中型以上の住居跡から検出された。第20号住居跡ではカマドが構築されている壁辺と平行している溝が、第15号住居跡では東端から西端へかけ

て斜行している溝が、第65号住居跡では床面中央にほぼ真っ直ぐな溝が施されている。

○張り出し施設

第３号・16号・20号住居跡など大型の住居跡から検出された。いずれも南壁の東端側に施設されている。張り出し部の底面の高さは、第３号・20号住居跡では若干低くなっていて、両住居跡の壁溝は張り出し部を区分けするように巡っている。一方、第16号住居跡では、床面とほぼ同レベルになり、壁溝は床面と張り出し部を区分けしていない。また、本遺構の張り出し内から中規模の小穴が検出されており、何かを貯蔵するための穴であった可能性も考えられる。

○焼失家屋

第９号・14号・第55号住居跡が焼失家屋である。３軒のみの検出であるため、ここでは構築年代に関わらず記載するものとする。ただし、第14号住居跡に関しては前述しているため、ここでは第９号と、第55号住居跡について述べる。

白頭山火山灰が二次堆積している第55号住居跡では、床面から床面直上にかけて、炭化材とカヤ状の炭化物が検出されており、炭化材には板状のものと小さな棒状の丸材とがある。棒状の丸材は樹種同定でモクレン属、ヌルデ類似種、カヤ状の炭化物はススキ属、イネ属と同定された。カヤ状のものはそれぞれに厚さやワラの向きが異なっており、敷物ではないようである。第55号住居跡は住居跡が密集する区域に位置しており、重複している住居跡の中では一番新しい。

第９号住居跡は壕よりも古く、出土遺物から10世紀前半頃の住居跡と考えられる。床面から床面直上にかけて炭化材が出土した。大半が10㎜に満たない小さな炭化材であるが、西壁付近では比較的大きな板材（現状で厚さ20～40㎜）が出土しており、出土状況から腰板の可能性が考えられる。残存状況のよい板材について樹種同定を行った結果アスナロとクリという結果が得られた。

「カマドの様相」

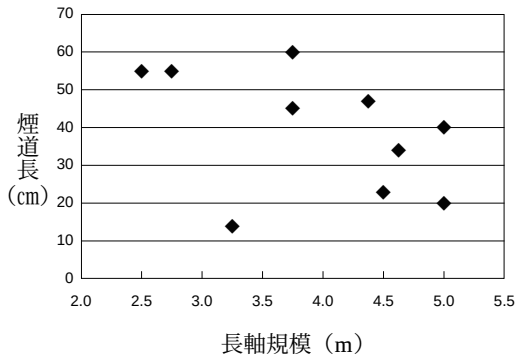
○位置と主軸方位

カマドは東壁の南寄りに構築されるのが一般的であるが、中には第１号・４号・35号住居跡のように北寄りに構築されている例もある。また、カマド位置は壁辺の１／３の所になるものが多いが、小型である第４号・35号・62号住居跡は壁際に位置している。

○煙道部の構造

10軒から煙道部が検出された。

構造はすべて半地下式である。煙道長は14～60㎝の範囲で分布しており、煙出孔の位置は壁に近接するものと考えられる。長軸規模との相関関係をみると、規模の小さいものほど煙道が長くなる傾向が見られるが、第32号住居跡は小型規模にも関わらず、煙道の長さが短くなっている。断面形は、煙道底面



がほぼ平坦になり、煙出し孔の直下で開きながら立ち上がっているものと、煙道口から煙出し孔へ向かって斜めに立ち上がっているものがみられる。煙道の長さが長いものほど前者の断面形になる。

○前庭部が堀込まれているもの

第３号・10号・33号住居跡で検出された。第３号住居跡は大型規模の住居跡であるが、第10号と第33号住居跡は、重複により全体規模が不明であるため、住居規模との相関性は不明である。堀込みの規模は30～50×90～100㎝で、深さは５㎝未満である。

○構築方法と構築材

カマドの構築方法は床面に直接粘土を盛るものと、黒色土やロームとの混合を用いて土台を築いてから、粘土を盛るものとの２種類が見られる。後者は第３号・20号・15号・65号住居跡など、大型規模の住居跡で確認された。

カマド本体に使用されている粘土は、含まれているものに多少の差はあるが、褐色～黄褐色の粘土を主体としている。大多数の住居では芯材が検出されていないが、中には第３号・36号・23号住居跡のように、袖に土師器片が含まれている例もある。しかし、いずれも小破片であり、含まれている数も少数であることから､芯材を使用しないで粘土のみで構築する方法が一般的であったと考えられる。

○遺存状況と破壊行為

・粘土材の遺存状況と支脚の検出例

粘土材の検出状況は大きく分けて以下のように分類できる。

１類　袖を除いて粘土材がほとんど残っていないもの

（第35号・62号・67号・15号・１号・10号住居跡）

遺構検出時にカマドを検出しているものが多く、削平を受けている可能性も考えられる。しかし、第62号・67号住居跡は掘り進めていくうちにカマドを検出したものであり、削平されている可能性は低いと思われる。いずれも袖部分、もしくはカマド内に若干の粘土材が堆積しているだけであり、一つのカマドに用いられている粘度の量としては非常に少ない。このことから、カマド破壊が行われ、他所に廃棄された可能性も考えられる。袖の遺存状況は第62号住居跡や、重複により削平されている第１号・10号住居跡を除くと良好で、両袖共に遺存している。支脚は第62号、第15号住居跡で検出されている。第35号住居跡からも支脚の可能性があるものが出土しているが、支脚の形態が他と異なっており、後述するがカマド祭祀に関わる可能性も考えられる。遺構規模と遺存状況において相関性は認められず、小型～大型の住居跡が本類に含まれている。

２類　カマドの手前側に崩れているもの。

（第３号・19号・36号・65号・20号・58号・23号・55号・４号・32号住居跡）

特に、第58号住居跡は床面中央近くまで、粘土材が散在して確認されており、カマド破壊が行われた可能性が強い。どの遺構も袖の遺存状況は良好で、両袖共に遺存している。支脚は第65号・20号・55号住居跡から検出されているが、第65号住居跡の場合、支脚は燃焼部底面より浮いた状態で出土し

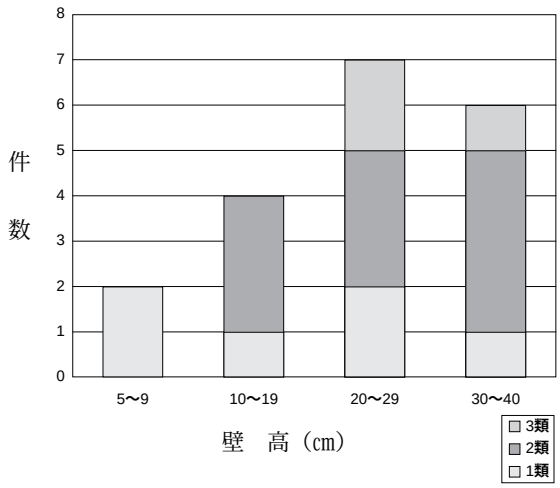
ており、支脚の土台となっている土は被熱していない。他に燃焼部底面から浮いた状態で検出されている例としては、第26号・14号住居跡があるが、これらは支脚の土台が強く被熱しており、使用時の状態のままであることが想定される。第65号住居跡は、この２例とは異なる事から、カマド祭祀に伴って置かれた可能性も考えられる。また、第20号住居跡から検出された支脚は右袖側に寄っており、支脚が２つ設置されていた可能性が考えられる。片方しか残っていないため、もう一方はカマド破壊に伴って抜き取られた可能性も考えられる。第55号住居跡は焼失家屋である。遺構規模は小型から大型までが含まれており、規模と遺存状況との相関性は見られない。

３類　概ねカマドの範囲内に収まるもの。

（第33号・８号・29号住居跡）

粘土材がほぼ直下に崩落している類である。本類に分類された住居跡の袖も遺存状況は良好で、両袖共に遺存しているものばかりである。支脚はどの遺構からも検出されていない。遺構規模との相関性は、調査区外へ延びるため全体規模が不明なものがほとんどであることから不明である。

１・２類は削平を受けている可能性も考えられるが、意図的に破壊している事も考えられ、３類に関しては、自然崩落した可能性も考えられる。そこで、カマドが設置されている壁の高さと、その中に類別したものが何件含まれているかを表してみた。壁の高さが低ければ、遺構確認面とカマド確認面がほぼ同レベルになり、削平を受けている可能性も高いと考えたからである。



自然崩落と考えられる３類が見られるのは20㎝以上の壁高からであり、それ以下からは検出されていない。壁高が20㎝以下であれば、削平を受けていることも想定される。検出場所によって削平の度合いは異なることも考えられ一概にはいえないが、20㎝以上の規模には自然崩落の可能性がある３類が含まれていることから、１・２類の中には意図的な破壊行為を受けたものが含まれている可能性が考えられる。特に壁高が30㎝以上になる第62号住居跡（１類）、第65号・58号・23号・55号住居跡（２類）は検出状況と併せてみてもその可能性は高いと考えられる。袖と粘土の遺存状況から、カマド破壊の方法も２とおりの方法が想定される。一つは、第62号住居跡に見られる事例である。本遺構は、袖が片方しか残存しておらず、かつ、遺構内に堆積している粘土の量も少ないことから、カマドを完全に破壊し、他所に粘土を廃棄するような方法が取られたことが想定される。二つ目は、第２類に見られるように、天井部を崩すだけの方法である。第２類において袖の依存状況が良好なのは破壊の仕方に起因していることも想定される。この違いが、時期差なのか住居規模によるものかは本遺跡内だけでは例が少なく不明である。

○カマドの祭祀行為

カマド祭祀の可能性が想定される事例が２例検出された。

１例目は第３号住居跡である。火床面の直上には崩落した焼土が堆積しており、その直上に須恵器甕が折り重なるように置かれている。遺物と火床面の間に崩落土が介在していることから、天井部崩落後に置かれたものと考えられるが、崩落した焼土の上には粘土材が見られないことからカマド破壊が行われた後に、祭祀行為が行われたと考えられる。この須恵器は、近接している１号竪穴遺構や、壕跡、遺構外出土のものと接合しており、余った素材を廃棄している可能性も考えられる。

２例目は第35号住居跡で、カマドの底面から２～３㎝浮いたところに、土師器甕の破片５点が積み重ねられ、その上に別個体の甕の底部を上にして被せている。出土位置から支脚であることも考えられるが、通常の支脚は単に甕や坏の底部を用いているのに対して破片を積み重ねるという段階をふんでいることや、遺物の台となっている土は被熱していないことなどから、カマド祭祀に伴って意図的に置かれた可能性も考えられる。また、本遺構からは天井部の崩落は確認されておらず、カマド破壊も行われた可能性が考えられる。これらの土器片は、カマド前方の床面や、床面直上から出土した土器片とも接合しており、住居の廃棄に伴ってカマド天井部を破壊し、その後に燃焼部内の支脚の位置に上記のように土器を置き、余った土器片を住居内に廃棄した可能性が考えられる。

２例の共通点としては

・カマド破壊が行われた可能性が考えられる。
・遺物が置かれている位置は火床面付近で、土師器または須恵器の破片を積み重ねるように置かれている。
・これらの破片は、同一遺構内、または他遺構出土のものとも接合することから、余った素材を意識的に廃棄している可能性が考えられる。

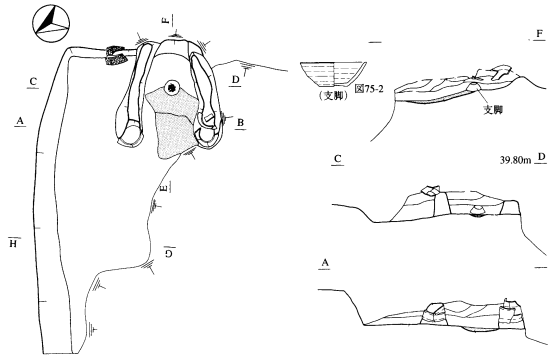
があげられる。

ちなみに第３号住居跡は張り出し施設を伴うもので、張出を含めた長軸規模は8.6mで検出された住居跡では最も規模の大きいものである。第35号住居跡の長軸は2.7mで小型規模の住居跡である。

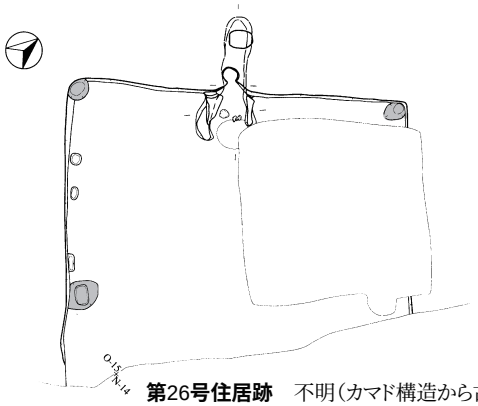
以上の属性をまとめると

規　模	柱穴配置	平　面　形	床　面	壁　溝	土　坑	出入り口	間仕切溝	張出施設	焼失家屋	カマド遺存状況	カマド祭祀
大型 第３号・20号・15号・16号・56号	１・２類	方形	掘り方	全周	カマド脇、床面中央付近	なし	15号・20号住	3号・15号・20号住	なし	1～３類	３号住
中型 第１号・57号・65号	１・３類	方形(長方形)	掘り方	全周	カマド脇、床面中央付近	なし	65号住	なし	なし	1～３類	
中・小型 第10号・19号・36号・58号・23号・18号・８号・55号・32号	３～５類	方形	掘り方、地山	全周、なし	床面、規模が小さくなるにつれて壁際に寄る傾向がある。	32・55号住、カマドと同じ壁辺に構築される。	なし	なし	55号住	1～３類	
小型 第４号・35号・62号	３・６類	方形・長方形	掘り方、地山	全周、なし	なし	なし	なし	なし	なし	1・２類	35号住

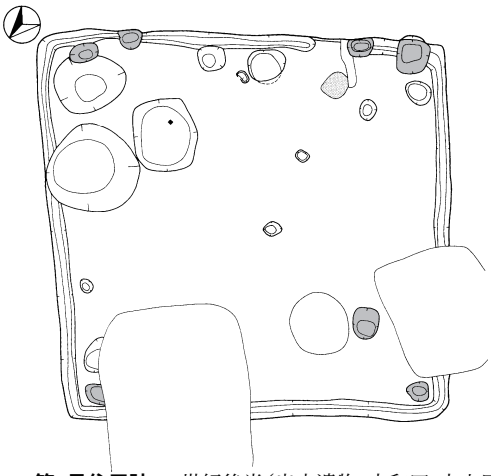
になる。本来であれば、ここから他遺跡との比較を行い、各属性を分析していくものであるが、今後の課題としたい。また、カマド破壊やカマド祭祀について、今回は積極的に可能性のあるものとして捉えたが、そうでない可能性も十分に考えられる。今後、類例が積み重なった時点で、具体的な検討が加えられるべきものと考えている。（小山）



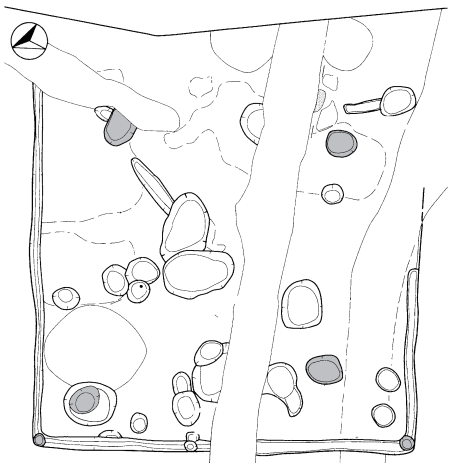
第14号住居跡　9世紀前半（出土遺物から）



第26号住居跡　不明（カマド構造から古手）

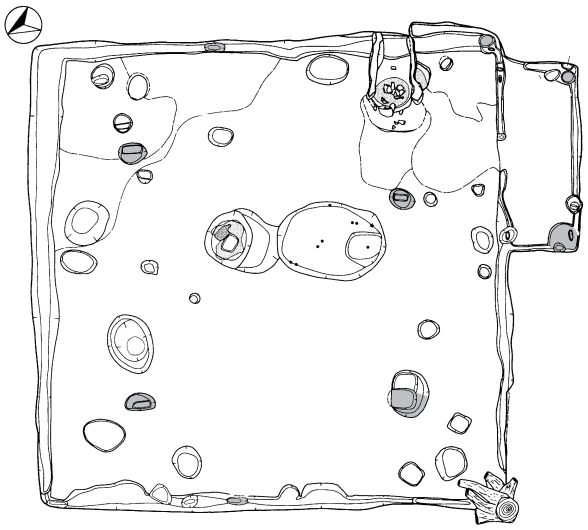


第6号住居跡　9世紀後半（出土遺物、十和田a火山灰）

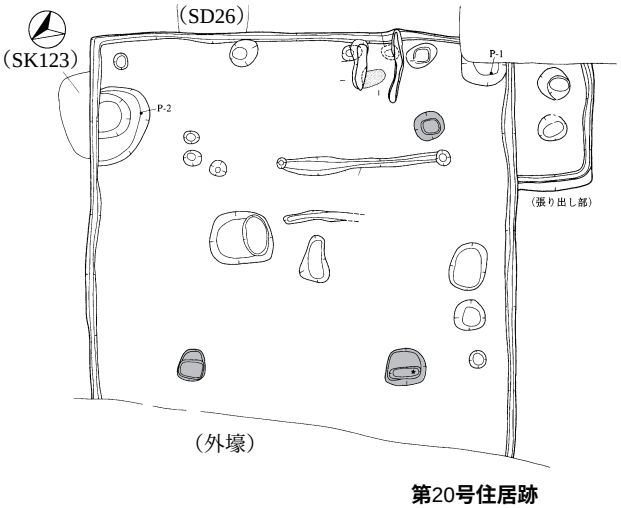


第50号住居跡　9世紀後半以降（出土遺物、十和田a火山灰）

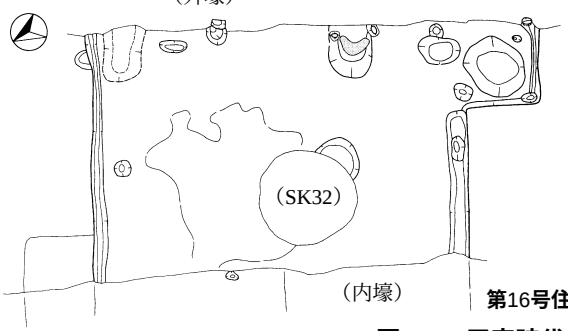
10世紀中葉以降（白頭山火山灰二次堆積重複関係）



第3号住居跡



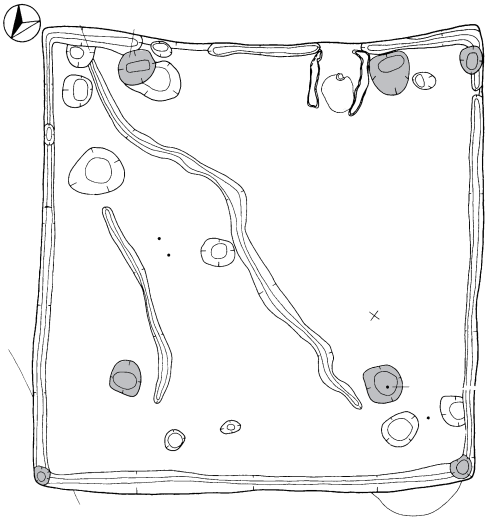
第20号住居跡



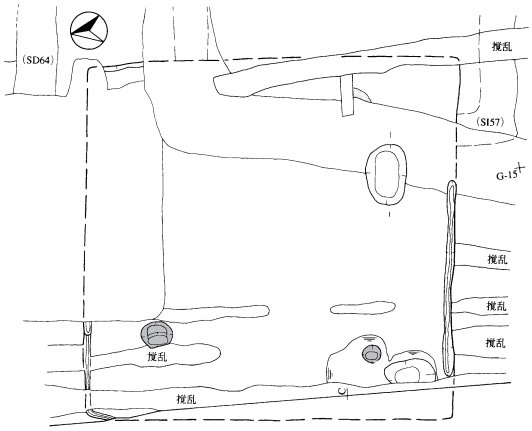
第16号住居跡

（S＝1/120）

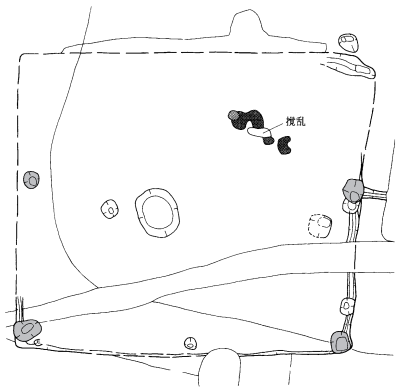
図204　平安時代住居跡集成（1）



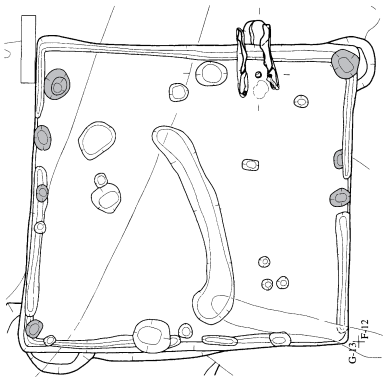
第15号住居跡



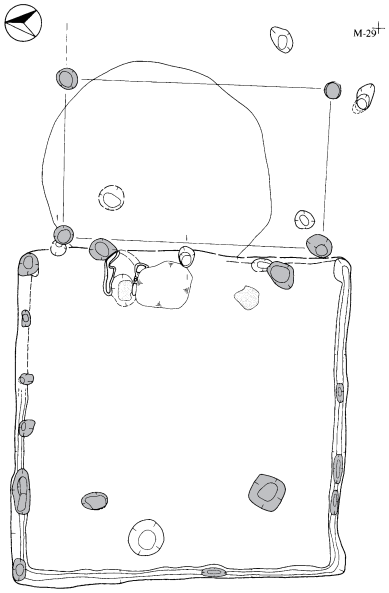
第56号住居跡



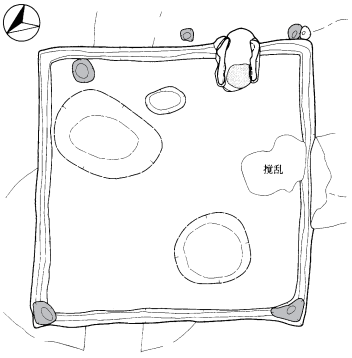
第57号住居跡



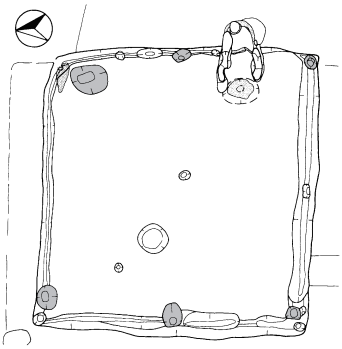
第65号住居跡



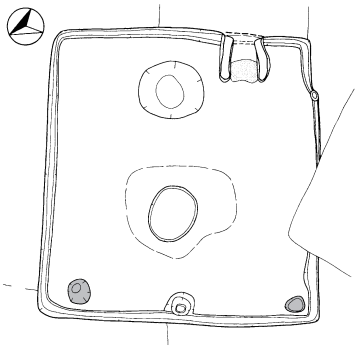
第1号住居跡



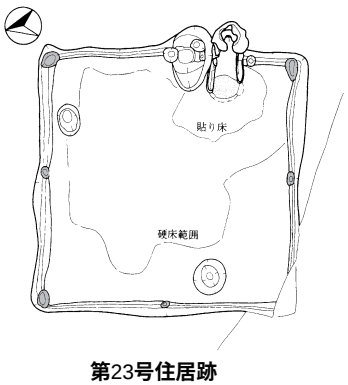
第36号住居跡



第58号住居跡



第19号住居跡



第23号住居跡

第18号住居跡

（S=1/120）

図205　平安時代住居跡集成（2）

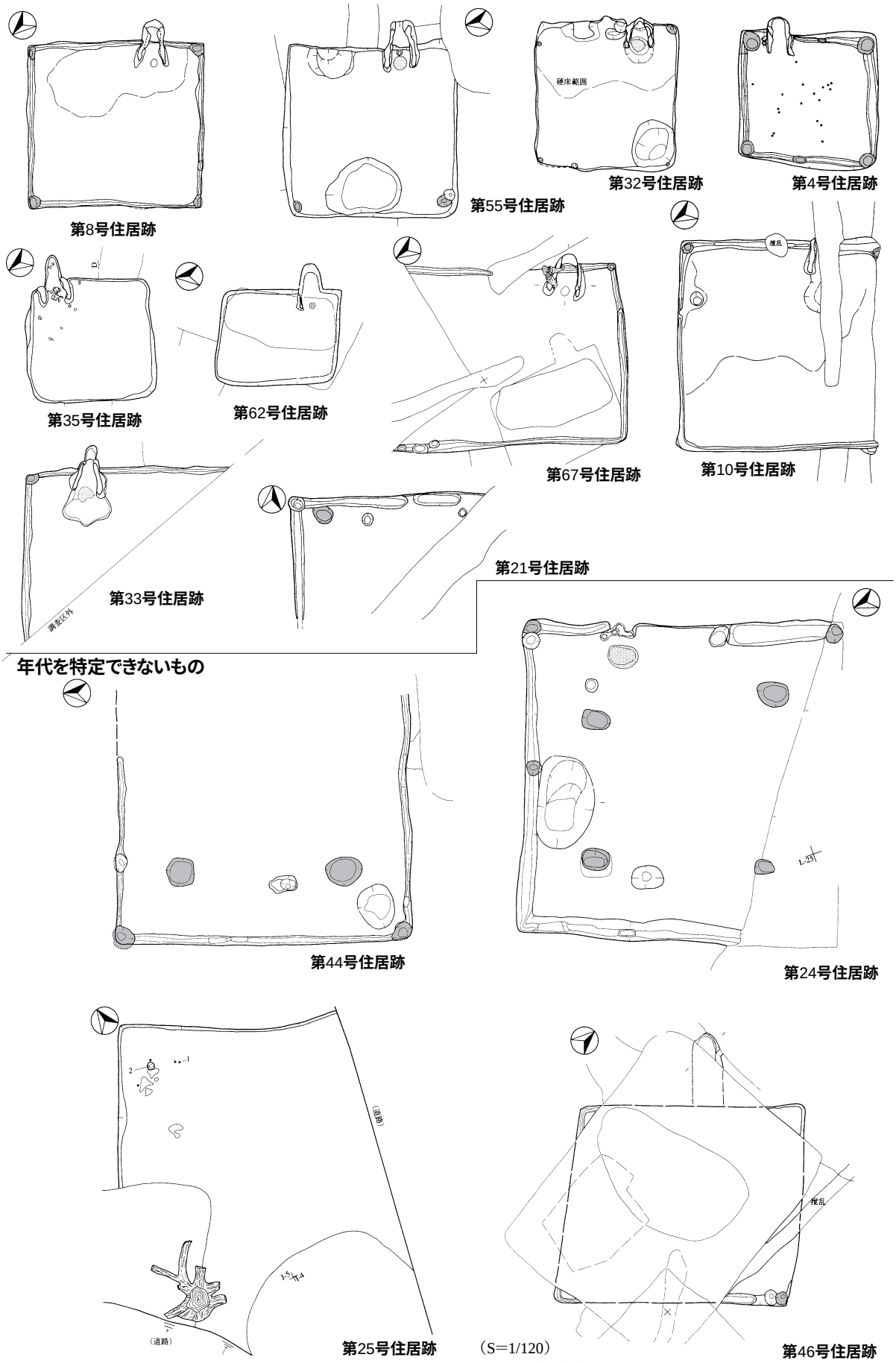
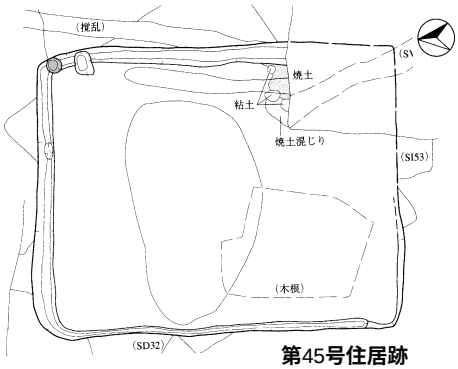
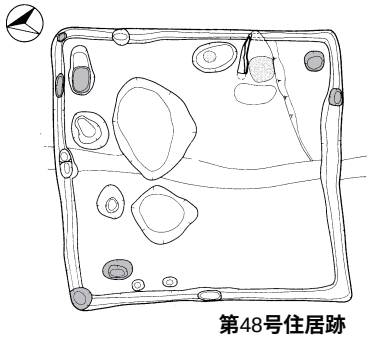


図206　平安時代住居跡集成（3）

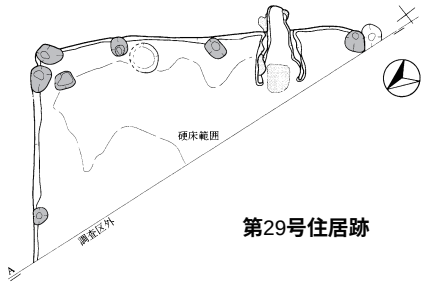


第45号住居跡

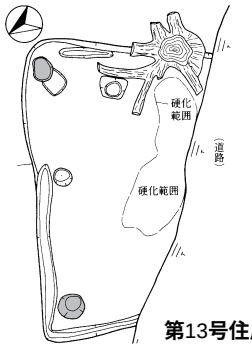
第51号住居跡



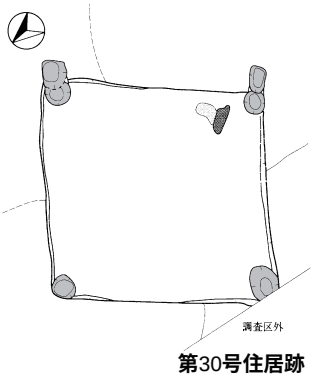
第48号住居跡



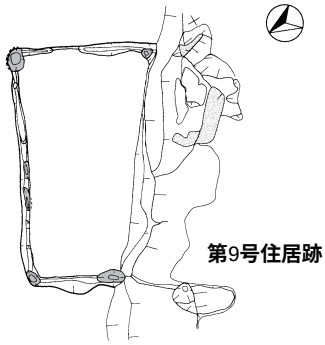
第29号住居跡



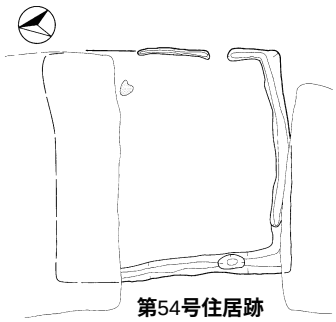
第13号住居跡



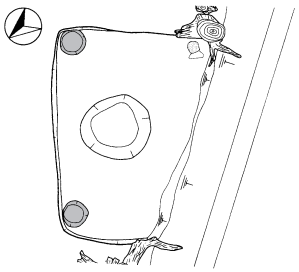
第30号住居跡



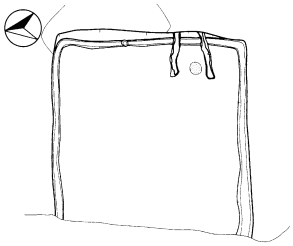
第9号住居跡



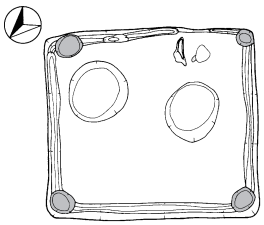
第54号住居跡



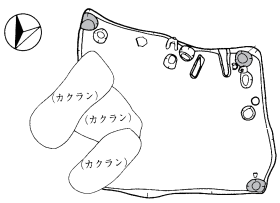
第22号住居跡



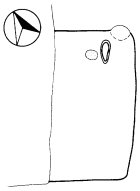
第49号住居跡



第12号住居跡



第5号住居跡



第27号住居跡

（S=1/120）

図207　平安時代住居跡集成（4）

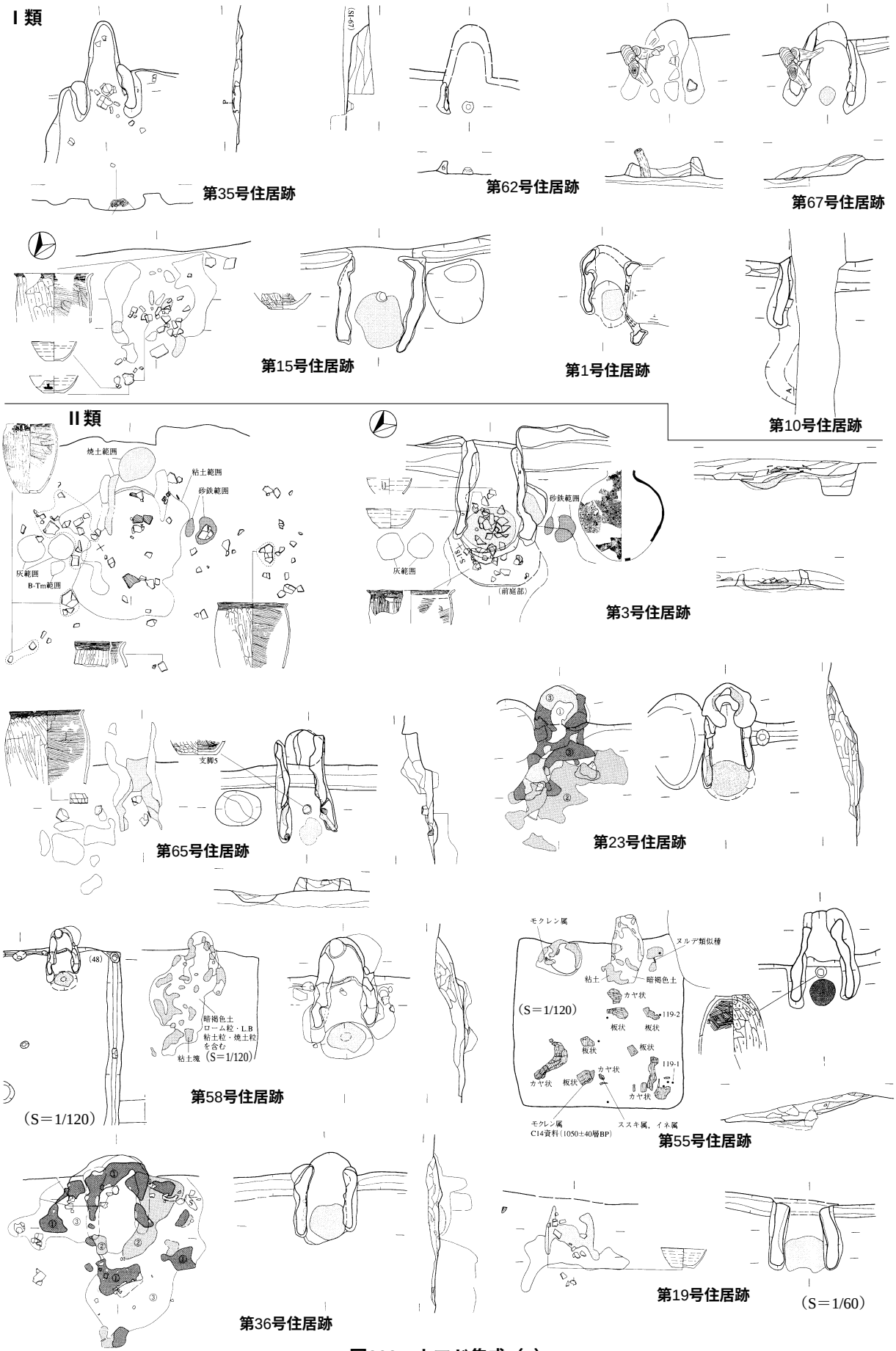
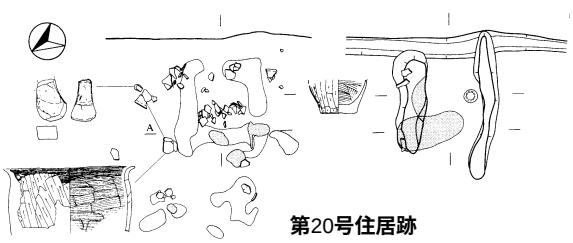
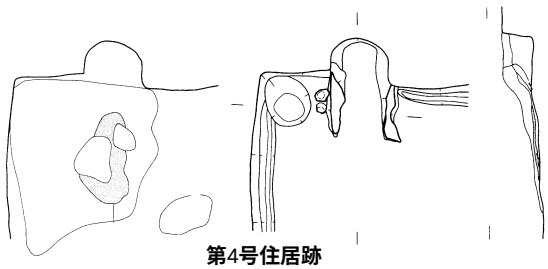

Ⅰ類
第35号住居跡
第62号住居跡
第67号住居跡
第15号住居跡
第1号住居跡
第10号住居跡
Ⅱ類
焼土範囲
粘土範囲
砂鉄範囲
灰範囲
B-Tm範囲
第3号住居跡
支脚5
第65号住居跡
第23号住居跡
(48)
暗褐色土
ローム粒・I.B
粘土粒・焼土粒
を含む
粘土塊
(S＝1/120)
第58号住居跡
モクレン属
ヌルデ類似種
粘土
暗褐色土
カヤ状
板状
119-2
119-1
ススキ属，イネ属
C14資料(1050±40層BP)
第55号住居跡
第36号住居跡
第19号住居跡
(S＝1/60)

図208　カマド集成（1）

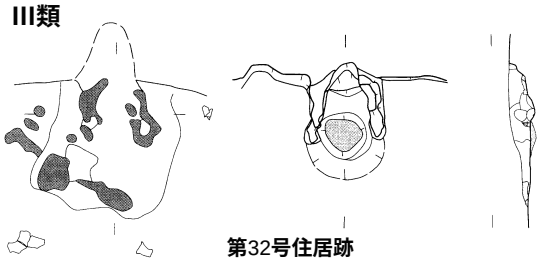


第20号住居跡

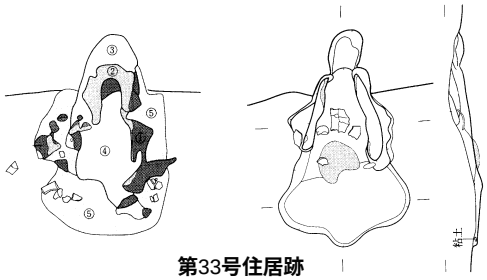


第4号住居跡

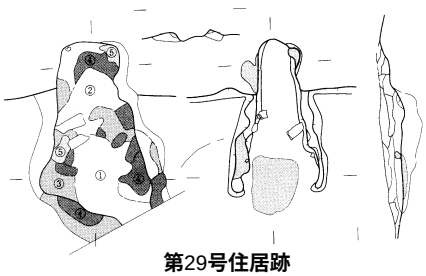
III類



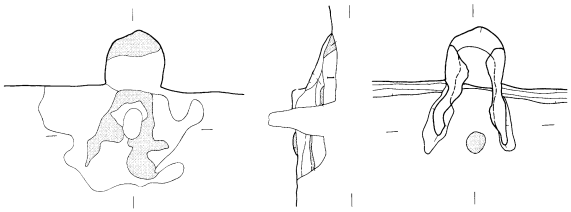
第32号住居跡



第33号住居跡



第29号住居跡

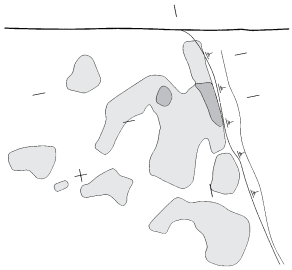


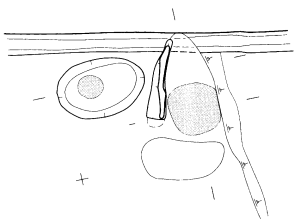
第8号住居跡

10世紀中葉期以外の住居跡

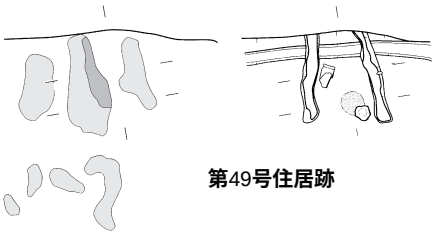
第12号住居跡

第5号住居跡

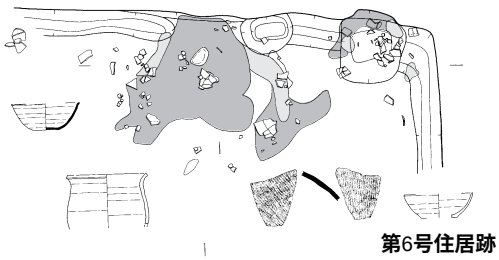




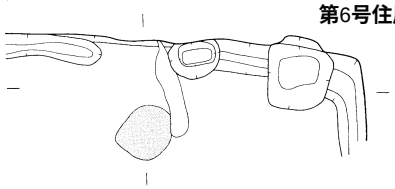
第48号住居跡



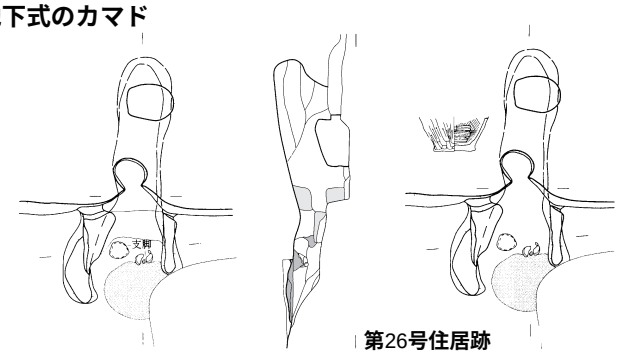
第49号住居跡



第6号住居跡



地下式のカマド



第26号住居跡

第46号住居跡

図209　カマド集成（2）

（2）壕跡

今回の調査で検出された壕跡には以下のような特徴がある。

① 調査区の南東側の小高い緩斜面上に方形に構築され、二重になっている。

② 壕は内壕と外壕が構築され、同時存在と考えられる。内壕と外壕はほぼ同規模であり、壕の断面形は逆台形状を呈している。なお、壕の規模は内壕が幅2.50～3.50m（平均2.94m）、壕底部の幅1.40～2.06m（平均1.74m）、深さ1.00～1.55m（平均1.19m）であり、外壕は幅2.20～2.74m（平均2.38m）、壕底部の幅1.02～1.73m（平均1.35m）、深さ1.00～1.55m（平均1.32m）である。

③ 壕で囲まれた区域の面積は、削平部分を含めると約1,200㎡である。また、南北軸は約34.4m、東西軸は35.6mで、軸方向は北から33度東へ傾いている。

④ 壕は途切れることなく掘り込まれていたことから、木橋が架けられていた可能性が高い。なお、壁面には柱穴状のピットが見られたところもあったが、橋脚の跡と思われるものは検出できなかった。

⑤ 表層が削平を受けていることから、土塁は確認できなかった。また、堆積土には土塁の崩落したような状況は認められなかった。

⑥ 堆積土には、白頭山火山灰の二次堆積のブロックが見られた場所もある。

⑦ 壕から出土した遺物には、縄文時代の遺物のほか、平安時代の土師器や須恵器、鉄製品等がある。廃棄されたと考えられるもののほか、周辺の住居跡から流れ込んだと思われるものもある。

⑧ 壕は10世紀中葉以降と考えられる竪穴住居跡や溝跡を壊して構築されていることから、10世紀中葉以降でもやや新しい時期の構築年代が考えられる。

・壕の内側で検出された遺構について

壕で囲まれた区域からは竪穴住居跡５軒、竪穴遺構４基、掘立柱建物跡３棟のほか、柱列２列（柵列）と多数の柱穴が検出された。このうち、第３号住居跡は壕の東西軸とほぼ一致していることや遺物の接合状況から、壕と同時存在の可能性も考えられる遺構である。しかし、出土遺物からは10世紀前葉から中葉にかけての時期が想定され、壕に伴う可能性は低い。

この他に壕と同時存在と考えられる遺構には掘立柱建物跡と柵列がある。第２号、第３号掘立柱建物跡の桁方向は壕と平行して構築され、第１号掘立柱建物跡の桁方向は壕と直角に構築されている。また、柵列はこれらの掘立柱建物跡の北側にあり、壕と平行して構築されていることから、掘立柱建物跡と柵列は、壕と同時存在の可能性が高い。また、同時に検出された多数の柱穴は、掘立柱建物跡が位置する区画内の北側に分布している。建物跡を組むことはできなかったが、この区域に何らかの施設が集中していた可能性がある。

さて、壕に囲まれた集落は三浦により防御性集落として評価されているが（三浦1995ほか）、内側には多数の住居跡が検出されるのが一般的である。これに対し、本遺跡では、防御施設として壕と柵列があるが、壕の内側で確認された遺構は掘立柱建物跡３棟のみであり、一般的な防御性集落とは異なっている。区画内からは、宗教的な遺物や何らかの工房跡といった際だった遺構や遺物の出土はないが、壕の東側には墓と考えられている２基の方形周溝と性格不明のコの字状の溝跡が多数検出されている。現段階では、壕の性格を判断する材料に乏しいが、本遺跡の壕はこれらの遺構と関連して構築されたものと思われ、宗教的な意味をもった区画施設ではないかと思われる。（畠山）

（3）土坑

平安時代の土坑は88基である。これらの土坑には、平面形が不明あるいは不整形のものが４基あるが、大きく円形基調のもの62基と方形基調のもの22基とに分類することができる。なお、観察表の断面形の項目では、断面形が長方形か逆台形を呈しているもので、おおむね50㎝以下を浅箱型、これ以上を深箱型とし、浅い皿状または堝底状のものを皿型、袋状に掘り込まれているものをフラスコ状として記述している。以下、今回の調査で検出した土坑の概略を述べていく。

ア　円形基調の土坑

平面形が円形基調の土坑は62基である。これにはほぼ円形を呈するもの29基、楕円形のもの17基のほか、長円形１基、不整楕円形３基、不整円形５基、全体形が不明であるが円形を呈すると思われるもの６基がある。

ほぼ円形を呈する土坑；断面形には浅箱型17基、深箱型９基、皿型２基のほか、不明１基がある。検出面における規模は直径約90㎝のものから200㎝前後の大きさのものまである。全般に浅箱型のものは直径100㎝前後で、深さ20㎝前後のものが多い。深箱型のものは深さ約60㎝前後のものが多いが、平面における規模は直径約100㎝から200㎝のものまで散在し、まとまる傾向にはない。また、皿型のものは90㎝前後のものと140㎝前後のものがあるが、深さは25㎝前後である。

楕円形を呈する土坑；断面形には浅箱型８基、深箱型７基のほか、皿型のもの１基と不整なもの１基がある。検出面における規模は長軸が100～150㎝のものが多いが、200㎝を超えるものが４基あり、うち２基は300㎝を超えている。深さは、浅箱型では20～40㎝のものが多いが、40㎝を超える深いものも１基ある。深箱型では70㎝を超えるものが５基あり、うち95㎝のものが１基ある。皿型の土坑（第35号）の規模は90×120㎝、深さ10㎝で、大きなわりは深さがない。断面が不整な土坑は底面が段状となっているものである。重複によって当初の規模は不明であるが、現存値は120㎝、深さ35㎝である。

全般に、楕円形を呈する土坑は規模の大きなものが多く、深さのあるものが多い傾向にある。

上記以外の土坑；長円形を呈する土坑１基（浅箱型）、長楕円形を呈する土坑１基（深箱型）、不整楕円形の土坑３基（浅箱型２基、フラスコ状１基）、不整円形の土坑５基（浅箱型４基、深箱型１基）のほか、重複によって全体形状が不明であるが、残存部分から円形と捉えられるものが６基（浅箱型４基、深箱型１基、不明１基）である。断面形がフラスコ状の土坑は、縄文土器と平安時代の土師器片が出土した遺構であり、第23号土坑の１基のみである。

イ　方形基調の土坑

平面形が方形基調の土坑は22基である。これには、長方形を呈する土坑10基、隅丸長方形を呈する土坑３基、不整長方形を呈する土坑２基、方形を呈する土坑２基、隅丸方形（台形のもの含む）を呈する土坑４基、不整方形を呈する土坑１基がある。

長方形を呈する土坑；断面形は浅箱型が10基で、検出面での規模は短軸90～140㎝、長軸130～310㎝、深さ10～30㎝のものが多く、最大でも50㎝（第58号）である。

隅丸長方形を呈する土坑；断面形は浅箱型３基で、検出面での規模は短軸100～130㎝、長軸150～

200㎝、深さ15～40㎝である。

不整長方形；断面形は深箱型２基で、検出面での規模は短軸134㎝、長軸180㎝の大きなものと、短軸53㎝、長軸120㎝の小さなものがある。ともに深箱型で、深さ80㎝前後である。

方形を呈する土坑；断面形には浅箱型１基、深箱型１基がある。浅箱型のものは短軸113㎝、長軸118㎝で、深さ27㎝、深箱型のものは全体形が不明であるが、200㎝前後の規模で、深さ60㎝である。

隅丸方形を呈する土坑；断面形はすべて浅箱型で、深さ15㎝前後の浅いものである。検出面での規模は短軸90㎝、長軸95㎝のものが３基、短軸142㎝、長軸180㎝のものが１基である。規模が大きな土坑でも、深さ18㎝と浅い。

不整方形を呈する土坑；断面形は浅箱型が１基で、短軸100㎝、長軸105㎝、深さ13㎝である。

全般に、方形基調の土坑は規模の大小にかかわらず浅い土坑が多い傾向がうかがわれ、深さ10～30㎝のものが多い。

ウ　不整形あるいは平面形が不明な土坑

不整形の土坑；不整円形に近い形状で、断面形は浅箱型の１基がある。短軸120㎝、長軸140㎝、深さ25㎝である。

平面形が不明な土坑；重複により、一部分しか検出できなかった土坑である。３基あり、深さ約50㎝のもの２基と77㎝のもの１基がある。（畠山）

分類別土坑一覧表

		浅箱形	深箱形	皿　状	フラスコ状	不　明	小　計	土坑番号
円形基調	円形	17	9	2	0	1	29	17，20，24，25，32，33，34，36，43，44，48，50，55，56，63，74，76，86，88，89，97，99，106，107，108，110，117，119，127
	楕円形	8	7	1	0	1	17	3，18，26，35，38，66，67，70，72，75，77，79，83，85，101，103，118
	長円形	1	0	0	0	0	1	115
	長楕円形	0	1	0	0	0	1	27
	不整楕円形	2	0	0	1	0	3	23，82，96
	不整円形	4	1	0	0	0	5	37，60，80，100，113
	円形？	4	1	0	0	1	6	59，71，78，116，124，126
方形基調	長方形	10	0	0	0	0	10	11，30，45，46，47，58，64，84，112，121
	隅丸長方形	3	0	0	0	0	3	16，54，92
	不整長方形	0	2	0	0	0	2	98，114
	方形	1	1	0	0	0	2	28，125
	隅丸方形	4	0	0	0	0	4	39，42，57，81
	不整方形	1	0	0	0	0	1	40
	不整形	1	0	0	0	0	1	61
	形状不明	1	1	0	0	1	3	104，105，120
小　計		57	23	3	1	4	88	

（４）溝跡

平安時代の溝跡は39条である。遺跡を縦断あるいは横断するように長く検出された溝跡や局所的に検出された短い溝跡のほかに、竪穴住居跡の外周溝に似た「コ」の字状の溝跡がある。

ア　長く検出された溝跡

第３号溝跡、第９号溝跡、第17号溝跡、第26号溝跡、第27号溝跡、第31号溝跡、第40号溝跡の７条である。

このうち、第３号、第17号、第40号溝跡は白頭山火山灰の堆積状況から、この火山灰の降下前に埋まっていたことがうかがわれ、９世紀後半から10世紀前葉の年代が考えられる。

第３号溝跡は壕跡の北側約30m付近から壕跡の北東側をかすめ、南東隅へ下るように検出された溝跡である。10世紀中葉のある時点では、住居跡がこの上に構築されている。なお、東側にはこの溝跡に平行するように道跡が検出されている。集落の前半期には、この溝跡や道跡の西側には住居跡が見られ、一種の区画溝的な様子がうかがわれる。

第17号溝跡は調査区の中央やや北寄りの場所に検出した東西に長い溝跡で、緩斜面に直交して検出された。堆積土上部に白頭山火山灰が見られることから、10世紀中葉にはすでに埋没していたことがわかる。

第40号溝跡は東側の低地に検出した溝跡で、南北に長い溝跡である。時期不明の第39号溝跡に平行して検出されている。一次堆積と思われる白頭山火山灰が認められていることから、10世紀前葉頃のものと思われる。

第９号、第26号、第31号溝跡は遺構間の新旧関係や白頭山火山灰の堆積状況から10世紀中葉以降の年代が考えられる。

第９号溝跡は調査区の中央付近に検出された溝跡で、南から西へと向きをかえる部分の検出である。

第26号溝は調査区の南側で検出された溝跡で、緩斜面に直交し、東西に長い。西側は壕に切られており、明確ではない。重複関係から、10世紀中葉以降の住居跡よりは新しく、壕よりは古い。

第31号溝跡は調査区の南東側に検出された溝跡で、南側から北東へのび、東方向へカーブして検出されている。

イ　短い溝跡

第27号、第32号、第61号、第64号、第79号溝跡がある。この他にも、東側の低地に存在しているが、重複が激しいことから本来の様子が不明である。

第27号溝跡は東西に長い溝跡で、緩斜面に直交して構築されている。西端は壕に切られて不明であるが、東端の壁は急に立ち上がり、溝が突然途切れている。白頭山火山灰の堆積状況からは、10世紀中葉以降の年代が考えられる。

第32号溝跡は住居跡に切られているが、流水によって抉れたような感じで、他の溝のように掘り込まれたような感じはない。

第61号溝跡は低地に検出された溝跡で、東端の壁が急に立ち上がり、突然途切れている。西側の部分は、町道があるため不明である。

第64号溝跡は東西に長い溝跡で、西端が10世紀中葉以降の住居跡に切られて不明であるが、東端の壁は急に立ち上がって、突然途切れている。

ウ　コの字状の溝跡

第67号溝跡は東側が開口したコの字状を呈し、竪穴住居跡に付随する外周溝に似た溝跡である。溝跡には土坑が重複しているが、同時存在の可能性のあるものもある。溝跡の途切れた部分（東側）には掘立柱建物跡が検出されており、一連の遺構と考えられる。内側には第108号土坑と性格不明遺構とした竪穴住居跡のカマドに酷似した遺構が検出されたが、住居跡の痕跡は認められていない。

エ　コの字状を呈すると思われる溝跡

調査区南東の低地に多数の溝跡が重複して検出されている。道跡の東側にまとまって検出されており、一つの「場」を形成しているが、東側が調査区外になっているため、全体の状況が不明である。おそらく、コの字状を呈する溝跡と思われるが、方形周溝のような溝跡もあるのかもしれない。第34号、第35号、第36号、第37号、第43号、第46号、第55号、第67号、第78号溝跡などがある。

第34号、第36号、第37号溝跡はそれぞれ重複関係にあり、とくに第34号、35号、37号溝跡は同一の場所での重複が認められている。これらの溝跡の内側には柱穴状の小ピットが検出されており、確認できなかったものの、建物が建っていた可能性もある。また、第35号溝跡の内部には深さ50㎝の長方形の土坑が検出されているが、当該遺構に伴うかどうかは不明である。なお、第35号溝跡の上部から馬骨が出土している。

また、上記の溝跡の南側にも第41号、43～46号号溝跡が隣接している。第41号溝跡は全体形状が不明であるが、比較的大きなコの字状の溝跡と思われる。第43～46号溝跡はコの字状の溝跡の可能性がある。このうち、第43～45号溝跡は同一の場所にあり、拡張が行われた可能性が考えられる。

これらの遺構のうち、第37号、第41号溝跡では白頭山火山灰がブロック状に見られたことから、10世紀中葉以降の年代が考えられる。また、これ以外にも堆積土中に白頭山火山灰がブロック状に堆積した溝跡が数基ある。おそらく、当該地区から検出された溝跡の多くは、これらの遺構と近い年代が考えられる。

（5）円形・方形周溝

４基検出し、円形周溝１基、方形周溝３基である。

第１号円形周溝は調査区の北側に位置している。溝の幅30～50㎝、深さ27㎝で、内径が3.7m前後の比較的小型の遺構で、北側が開口している。ここから約20m離れた場所には、第２号方形周溝が位置している。

第２号方形周溝は、時期不明とした第５号掘立柱建物跡の東側に隣接した位置にある。溝の幅約50㎝、深さ16㎝で、長方形に溝が巡り、東側は開口している。溝の内径は短軸（南北）5.36m、長軸8.54mである。

第３号方形周溝は調査区の南東側に位置している。北側約20m離れた場所には第４号方形周溝が位置している。ともに、方形に溝が巡っており、開口部はなく、閉じた輪となっている。また、南側の

溝内部から第２号土器埋設遺構が検出されており、調査所見では当該遺構に伴う可能性もある。溝の幅70㎝、深さ15～20㎝で、南北4.6m、東西4.7m規模である。

第４号方形周溝は溝の幅112㎝、深さ35㎝で、短軸7.40m、長軸9.20mの大きなものである。

第３号、４号方形周溝ともに、多数の遺構と重複しているが、遺構間の重複関係では最も新しい。10世紀中葉以降の年代が考えられるが、どこまで下るのかは不明である。遺構の向きは壕と同じような方向を向いており、壕と同時期の可能性も考えられる遺構である。

（６）道跡

調査区を南北に縦断するように、高屋敷館遺跡方面へ続いている。遺跡内では住居跡群と低地の溝跡群との間に検出され、第３号溝跡と並行している部分もある。削平のため本来の規模が不明であるが、遺存状態が良好なところでは幅1.4～1.7mのところがある。底面は約10㎝窪んでおり、硬く踏みしめられている。上限は不明であるが、周辺の遺跡の年代を考えると９世紀後半頃には存在していた可能性がある。また、白頭山火山灰の堆積状況及び硬化面の観察からは、白頭山火山灰の降下以後のある時期までは利用されていたことが考えられる。

なお、調査区域内に「おしらさま」が祀られていた場所がある。南から北西へ続いてきた道は、この付近で北東へ向きをかえ、高屋敷館遺跡へ向かっている。種々の理由で調査できなかったが、村はずれの社に相当するような建物跡がなかったかどうか、気にかかる場所である。（畠山）

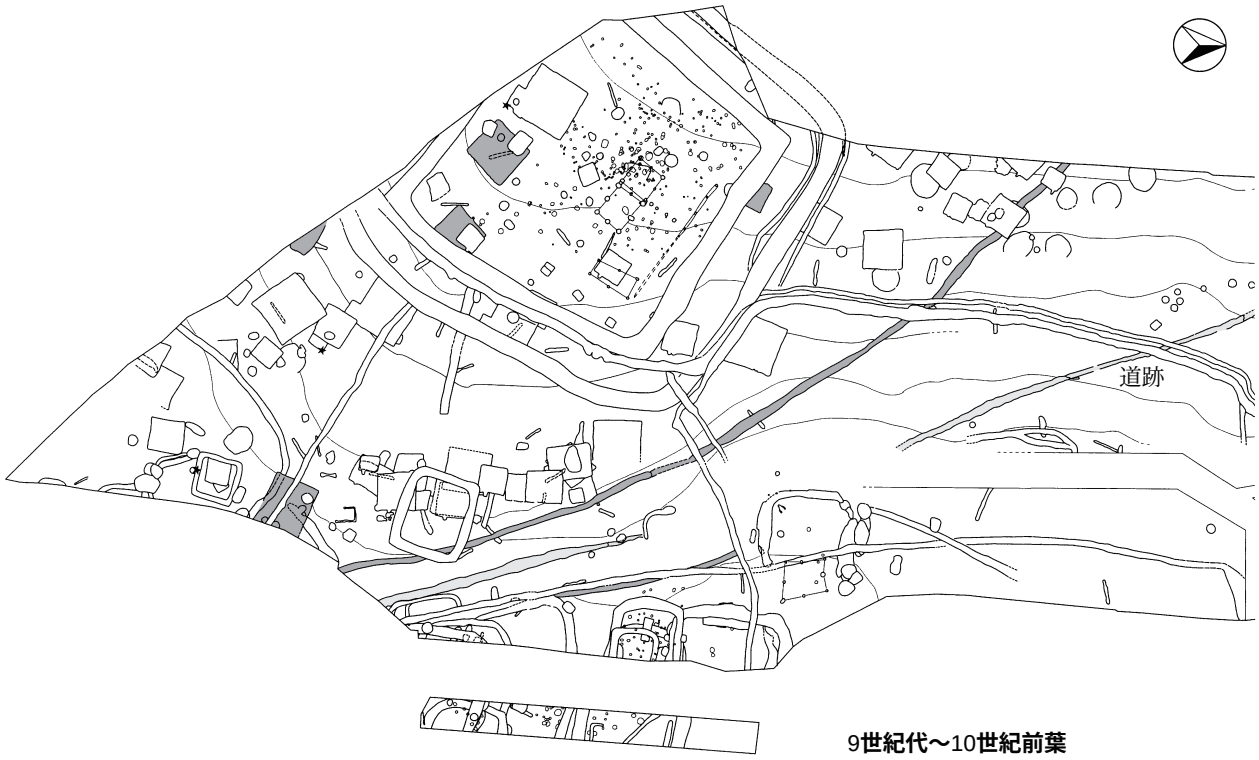
（７）遺構の配置について

・９世紀代～10世紀前葉

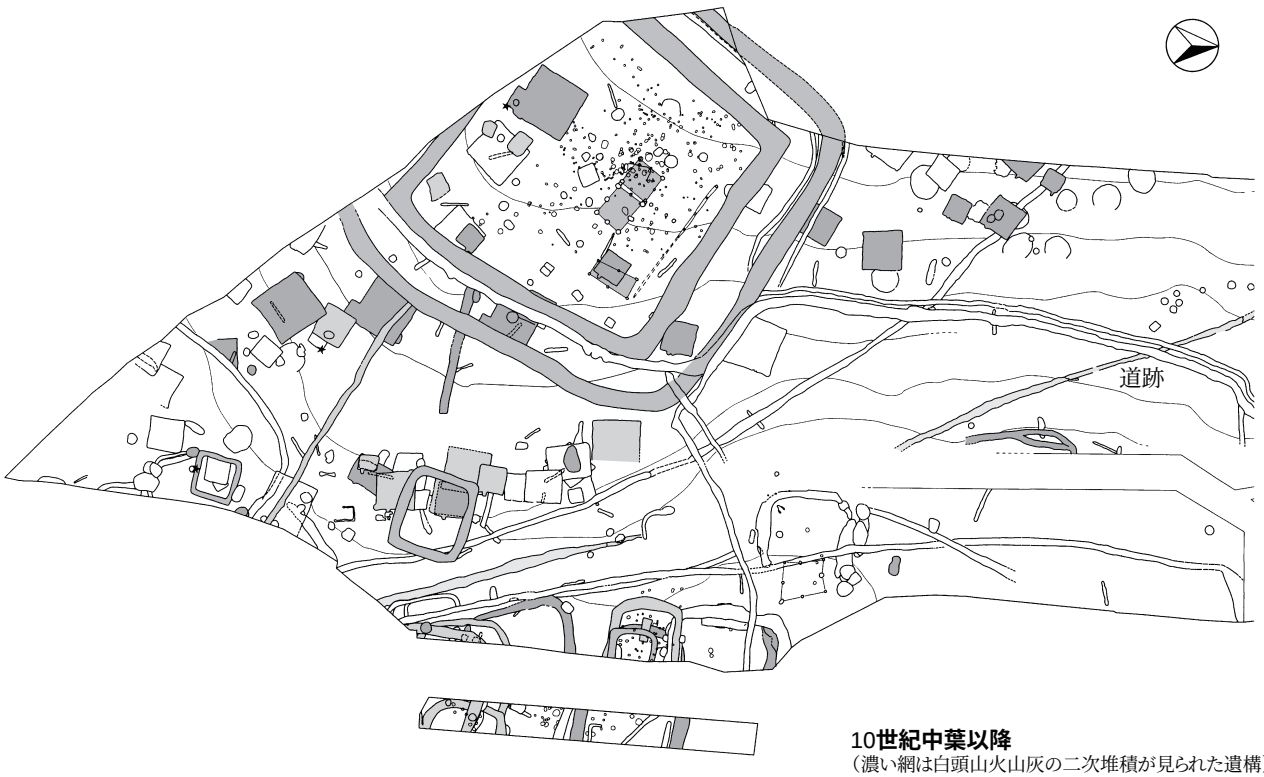
火山灰の検出状況や出土遺物から、第６号、14号、26号、第50号住居跡、第２号井戸跡、道跡、第３号、第17号溝跡などが含まれる。このうち、出土遺物から、第14号住居跡は９世紀前半、第16号住居跡は９世紀後半の時期が考えられる。第26号、50号住居跡は、出土遺物や火山灰の堆積状況からこの中に含まれる。なお、図示できなかったが、時期不明のなかに10世紀前葉の住居跡も相当数あると思われる。隣接する山元（１）遺跡は９世紀前葉から10世紀前葉までを盛期とし、10世紀代後半まで営まれた遺跡である。これらの住居跡は山元（２）遺跡と一体となって、存在していたものと考えられる。

・10世紀代中葉以降

白頭山火山灰の二次堆積が観察された遺構やこれよりも新しい住居跡が該当する。多数の住居跡が該当するが、おそらく２～３時期の変遷が考えられる。第３号溝跡はすでに埋まりきっており、この上にも住居跡が建てられている。道跡は、この頃のある時期までは存続していると思われる。この道跡の西側の緩斜面上には住居跡や壕、方形周溝などの遺構が、東側の低地にはコの字状の溝跡が構築されるものと思われる。壕や方形周溝はこの中でも新しい時期のものと考えられる。（畠山）



9世紀代～10世紀前葉



10世紀中葉以降
（濃い網は白頭山火山灰の二次堆積が見られた遺構）

（S＝1/1000）

図210　遺構の変遷

２　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、段ボール箱で約80箱分である。主な遺物としては、平安時代の土器（土師器、須恵器）、土製品（土鈴、土玉等）、鉄製品（鉄鏃、刀子、鋤先等）がある。

（１）土師器

今回の発掘調査で出土した土師器は、総22,735点、総重量288,414ｇである。竪穴住居跡や低地で検出された溝跡及びその周辺からの出土が多い。出土遺物の接合率の割合は低く、出土点数および検出された住居跡数の割に全体形状のわかるものは少ない。大多数が破片資料である。

出土した土師器の器種には、皿、坏、台付坏、甕、堝、壺、ミニチュア土器がある。大半が坏や甕で占められ、堝、壺はごく少量の出土である。

遺物の共半関係を知りうる資料は少ないが、カマドの支脚や芯材に使用された土器やカマド周辺から出土した土器、床面から出土した土器などを中心としては遺物の共伴関係や出土した住居跡の時期を知ることのできる資料となる可能性が高い。また、住居廃絶時における廃棄された土器についても、廃絶時とそれほど時間差がないものと考え、同様の基準で取り上げた。こうして抽出されたのが、第３号、５号、６号、９号、14号、15号、16号、20号、29号、33号、35号、36号、55号、65号住居跡の14軒と第３号埋設土器である。（なお、復原個体が少ないため残存率の高い土器を中心としたが、集成図には破片資料も載せている。前代のものが混入した可能性もあるため、参考資料として捉えて欲しい。）

図211には９世紀代の遺物を掲載した。第６号住居跡は９世紀後半、第14号住居跡は９世紀前半と思われる。

図212～214の上段には10世紀代と考えられるものを掲載した。一部に古手のものもあるが、おおむね10世紀前葉から中葉にかけてのものが主体となっている。また、第３号、15号、16号、20号、第33号、35号、36号、55号住居跡は二次堆積の白頭山火山灰が見られたもので、10世紀中葉以降の年代が考えられる。（畠山）

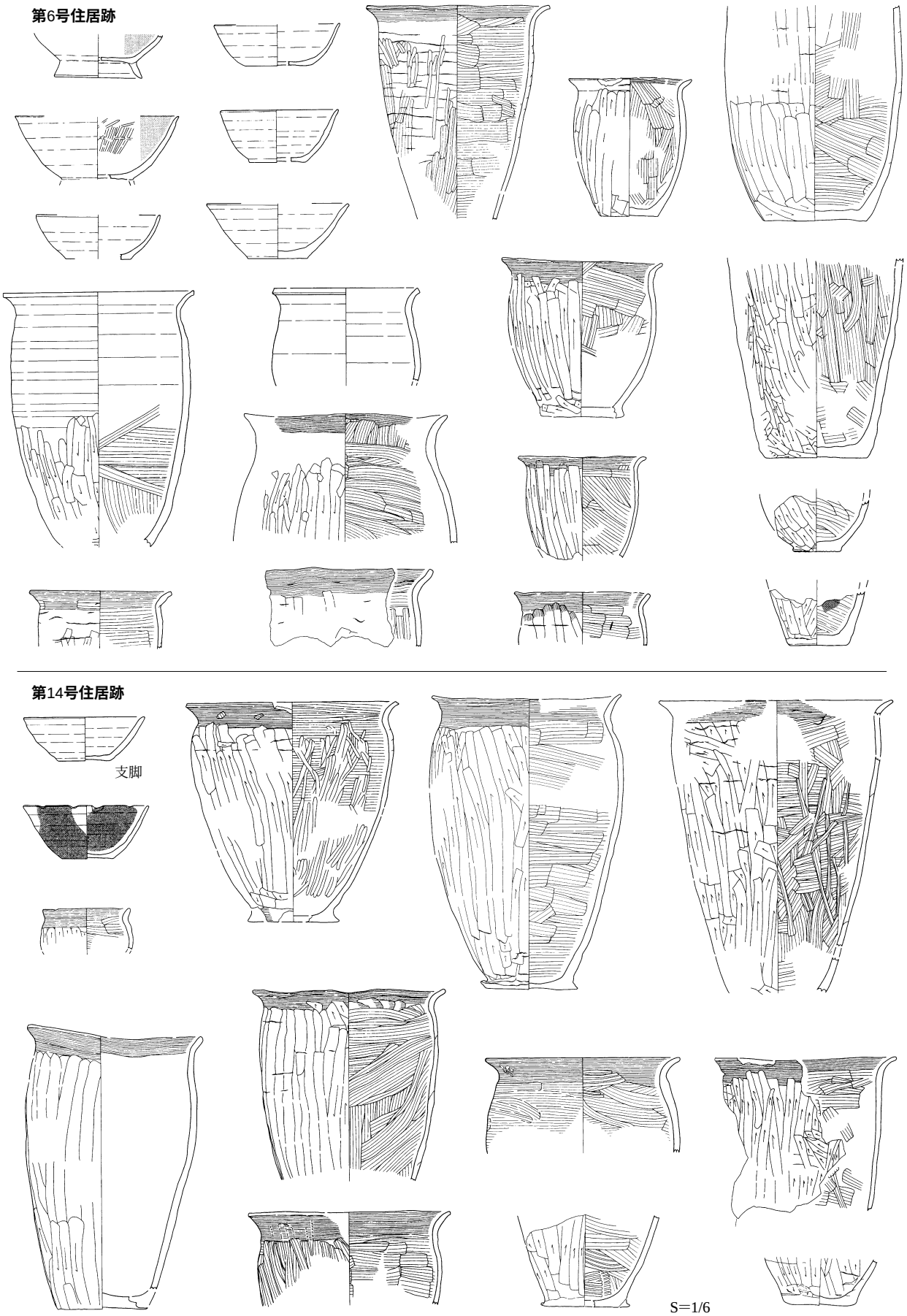
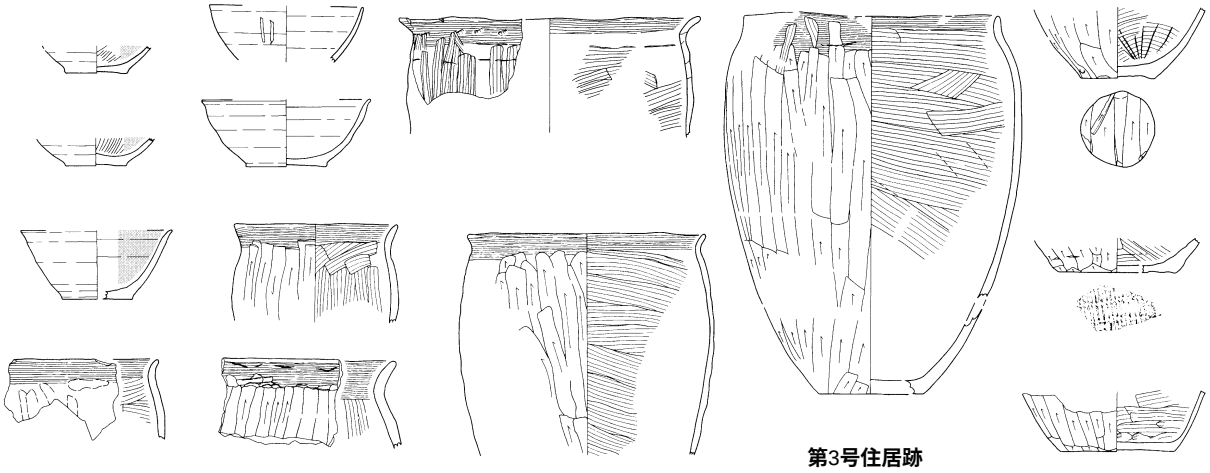
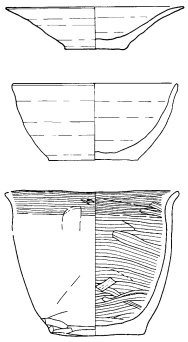


図211　一括遺物1

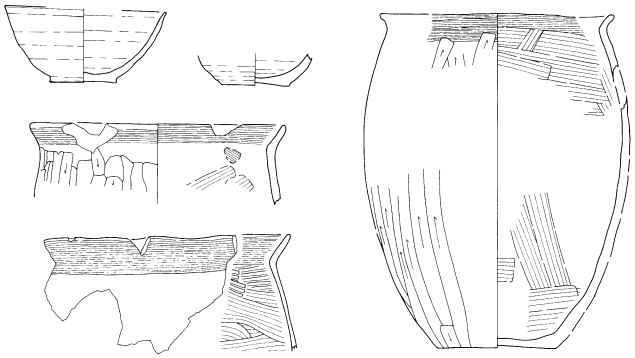


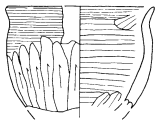
第3号住居跡

第5号住居跡

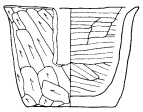


第9号住居跡





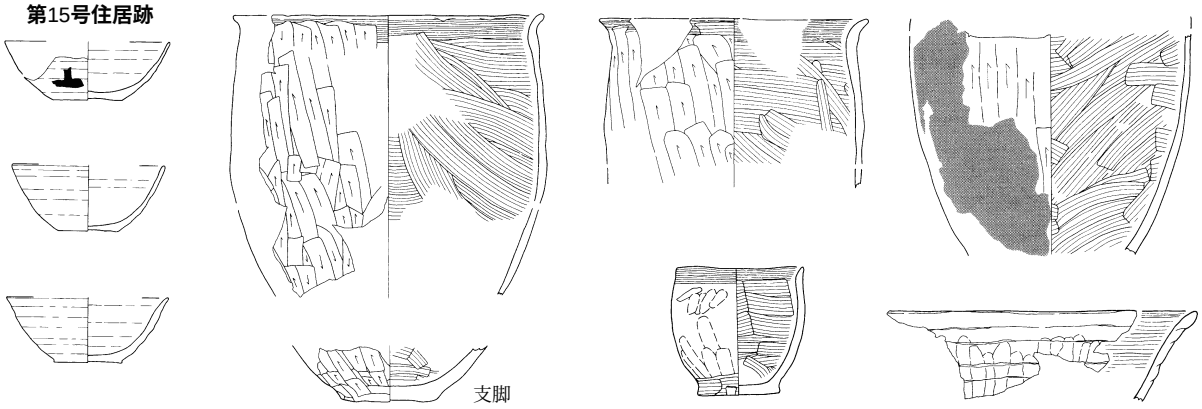
ミニチュア



ミニチュア

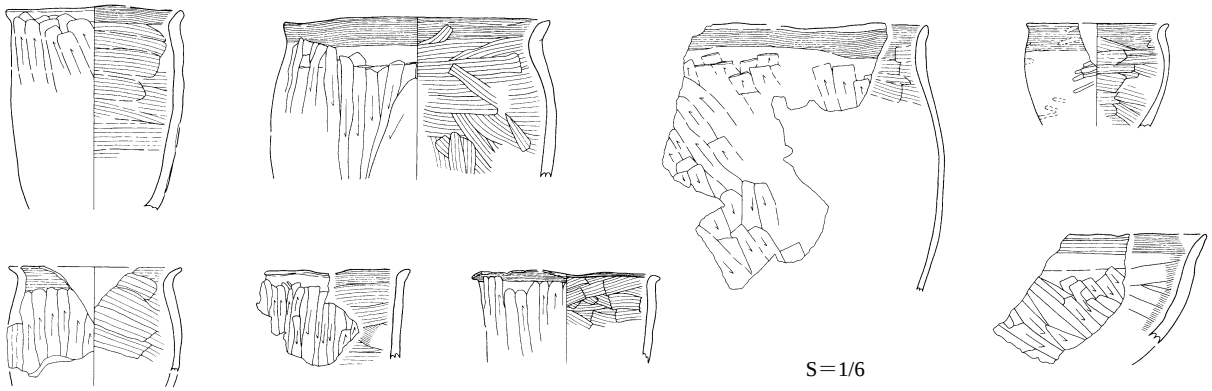
（S＝1/4）

第15号住居跡



支脚

第16号住居跡



S＝1/6

図212　一括遺物2

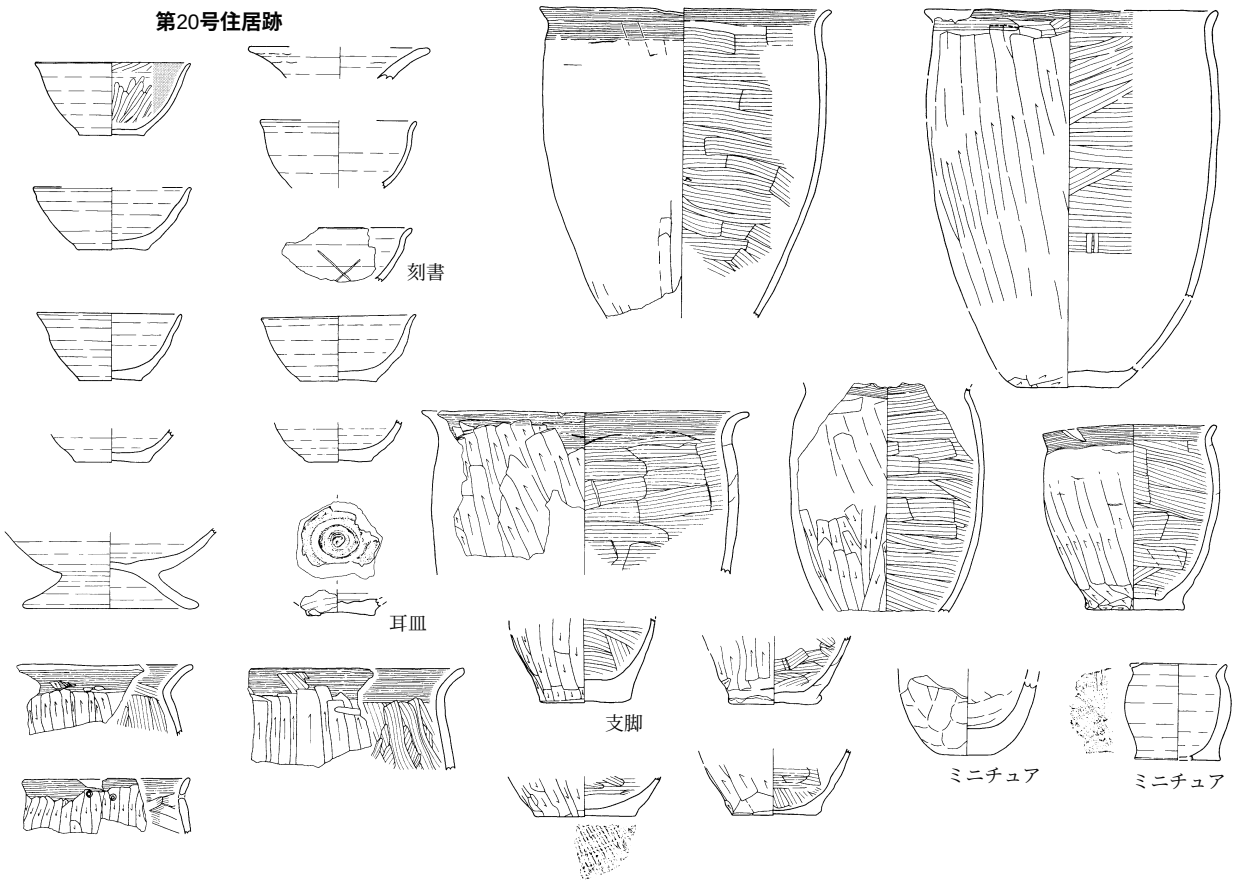
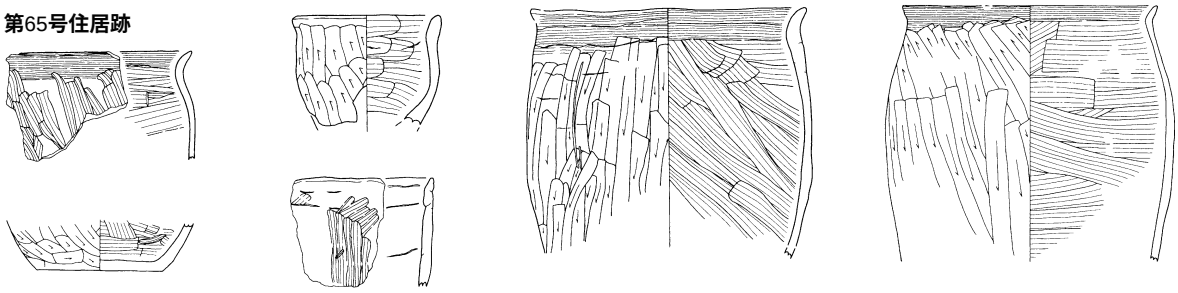
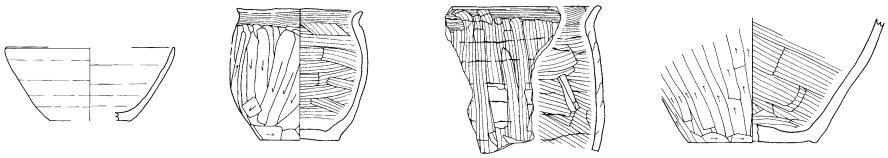

第20号住居跡
刻書
耳皿
支脚
ミニチュア
ミニチュア
第29号住居跡
第33号住居跡
第35号住居跡
第36号住居跡
ミニチュア（S＝1/4）
第55号住居跡
（S＝1/6）

図213　一括遺物3

第65号住居跡

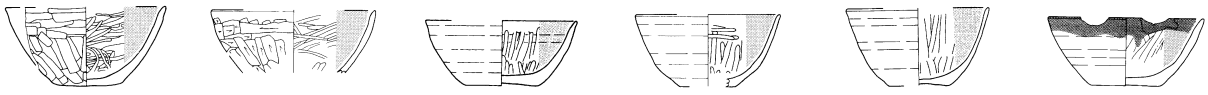


第3号土器埋設遺構

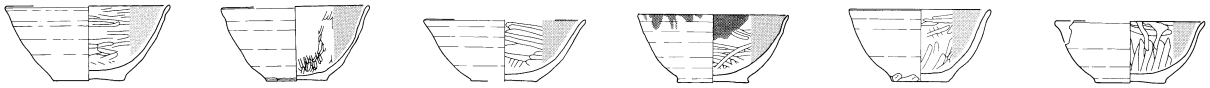


その他の資料

坏



遺構外　SK83　内壕　遺構外　内壕　SK83

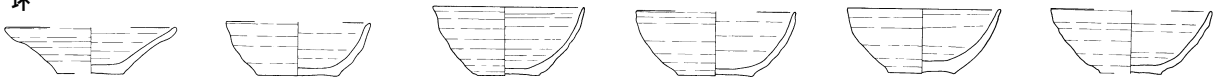


外壕　SD67　SI66　SK96　SD41　外壕

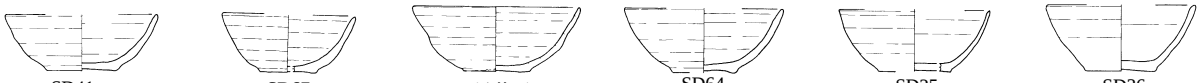
皿

SD39　SD67　SK96　内壕　SI69　SI56

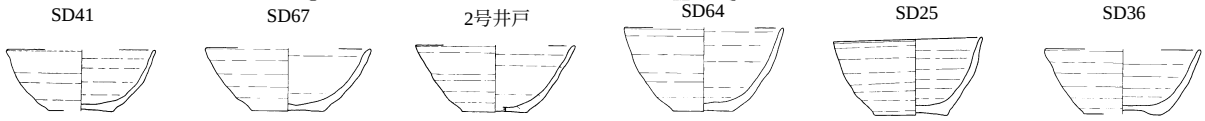
坏



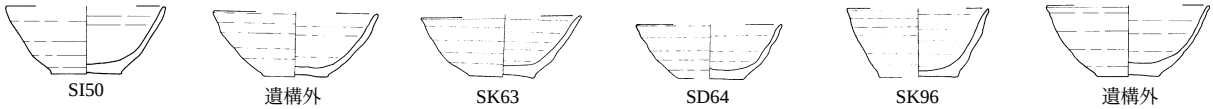
SI44　SD36　SI62　SK79　SI04　SD57



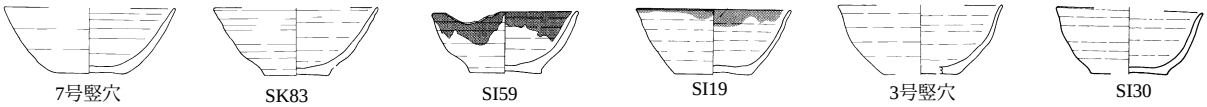
SD41　SD67　2号井戸　SD64　SD25　SD36



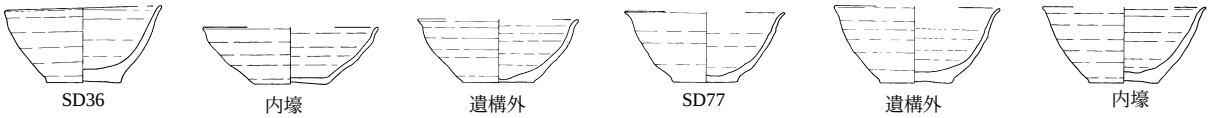
内壕　SK54　3号方形周溝　SK23　SI01　SK54



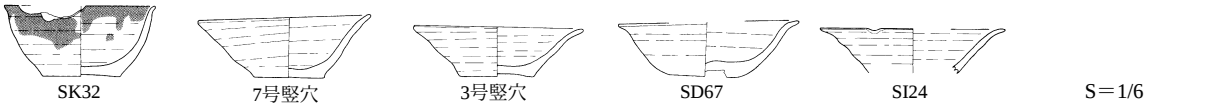
SI50　遺構外　SK63　SD64　SK96　遺構外



7号竪穴　SK83　SI59　SI19　3号竪穴　SI30

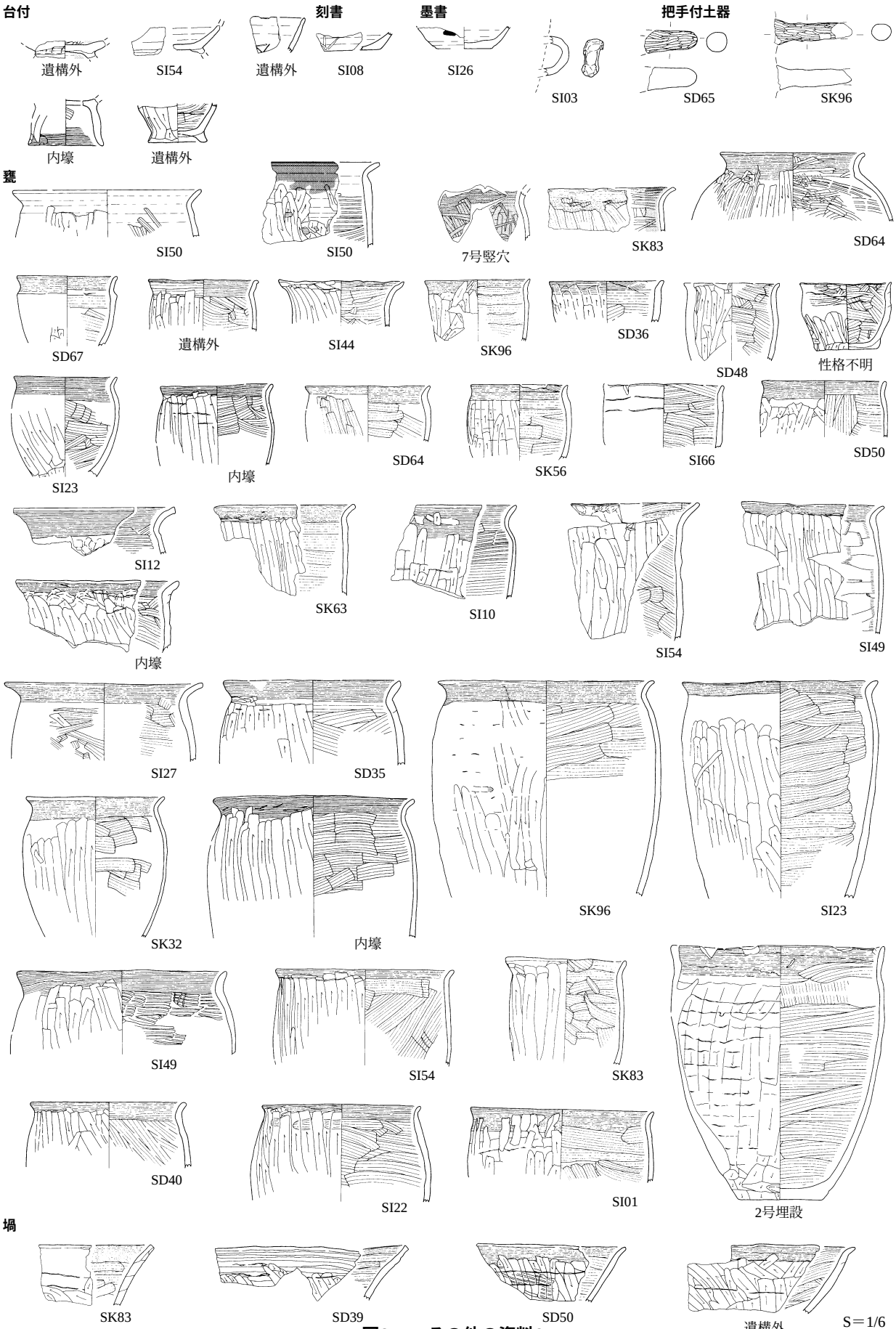


SD36　内壕　遺構外　SD77　遺構外　内壕



SK32　7号竪穴　3号竪穴　SD67　SI24　S＝1/6

図214　一括遺物4とその他の資料1



S＝1/6

図215　その他の資料2

（2）須恵器

総点数1,476点の須恵器が出土したが、破片での出土が多い。器種には坏、皿、鉢、壺、甕がある。以下に器種毎の諸特徴を簡単にまとめていく。

坏類

赤焼きの坏も須恵器に含めており、総点数380点が出土した。その中で口縁～底部まで復元できたのは23点である。調整技法はロクロ成形で、成形後の二次調整は施されていない。底部は回転糸切り無調整である。器形は、体部下半が内湾しながら立ち上がっているものが一般的である。一方、体部上半は、口唇端へ向けて直線的に立ち上がっているもの（Ⅰ類１～23）と、外湾しながら立ち上がっているもの（Ⅱ類24～32）、口唇際に段を有しているもの（Ⅲ類33・34）が見られる。口唇の断面形は先細りになるのが一般的である。特異な器形としては、内湾しないで直線的に立ち上がっているもの（８）、口唇端が弱く内湾して立ち上がっているもの（18）、底部が肥厚しているもの（36）がある。４は成形後の口唇部にケズリが施され、内面には煤状の炭化物が付着していることから、灯明具に転用された可能性が考えられる。43は底部片で、内面が研磨されている。墨等は認められなかったが、このような特徴を有しているものは転用硯と考えられる。

産地同定分析にかけたところ３、20、30が五所川原産という結果が得られた。

皿類

遺構外から１点出土した。口縁部片で、口唇部へ向けて直線的に立ち上がっており、断面形は端部に向けて先細りになっている。

鉢類

６点の出土である。口縁部から底部まで復元できたのは50（整299）のみである。いずれも、頸部から口縁部まで外反しながら立ち上がっているが、頸部に明瞭な屈曲点を有しているもの（48～50）と、緩やかに外反しているものが見られる（45、47）。口唇の断面形は、口唇端部まで器厚が変化しないもの（47～50）と、口唇端部を上方向につまみ出し面取り調整が施されている（45）がある。

調整技法はいずれもロクロ成形を基本としているが、50のみが胴部下半にロクロ成形後のケズリ調整が施されている。また、50の底部に布圧痕が付着している。圧痕は一部分にのみ見られ、かつ、布目が湾曲しながら付着していることより、押し当てて意図的に付けたと言うよりも、偶発的に付着したものと考えられる。

壺類

総点数585点が出土した。破片での出土が多く器形を復元できるものは少ない。壺は長頸壺と広口短頸壺に大きく分けられるが、頸部まで残存している破片が少なく、細分出来るものは少ない。調整技法は粘土紐積み上げ後のロクロ成形で、体部下半にはヘラケズリが施されているものが多い。ケズリの度合いは弱いものが多く、器面に面取りされた痕跡が明瞭に見られないものが多い。このような傾向は『五所川原須恵器窯跡群』（五所川原市埋報　第25集）の中で、藤原氏も指摘している。底面

は、菊花状のケズリ調整が施されているもの、ケズリ調整が施されているもの、無調整のものが見られる。菊花状の調整には、a　丁寧な調整が施され、最後に沈線が施されているものと、b　底部外面に削りだした粘土が盛り上がるほど、調整が荒いもの、の２種類が認められる。

51～78は、口径が中・小型になる口縁部片である。その中で、51～58は口唇の断面形が直線的になり、かつ外反する度合いが弱いもので、五所川原産の中でも古い段階に生産された可能性が考えられる。65～78は外反の度合いが強くなるものである。小破片であるため断定できないが、白頭山火山灰降下前後である10世紀前半に生産された可能性が考えられる。51・54・76・89は産地同定分析の結果、五所川原産、70は産地不明とされた。70の断面色調は褐灰色になる。典型的な五所川原産である赤褐色とは異なっている。しかし、口唇断面形は五所川原産のものと類似している。

79～87は口径が大型になる口縁部片である。80・81・84は外反の度合いが弱く、古い段階に生産された可能性が考えられる。他のものは外反の度合いが強くなっており、新しい段階で生産された可能性が考えられる。86の断面形は方形で、口唇端部で器厚が変化しないものである。本遺跡で一般的に見られる断面形態とは異なっており、産地同定分析により産地不明との結果を得ている。

88と89は口唇の断面形が特異なものである。88は断面形がくの字状に強く外反しており、89は断面形がＬ字状になり、口唇が直角に屈曲して立ち上がっている。いずれも、産地同定分析により五所川原産との結果を得ている。90～95は短頸壺である。91と92は同一個体と考えられる。口唇部断面形は、86と同様に方形になり、口唇部で器厚の変化は見られないものである。また、95も同様な断面形になるもので、これらを産地同定分析にかけたところ産地不明との結果を得ている。

96～103はリング状突帯が施されているものである。突帯はすべてケズリ出しにより作出されている。100・102は産地同定分析により五所川原産、103は産地不明という結果が得られている。103は肩部が張り出す器形で、五所川原産の中でも見られる器形である。なお、胎土を肉眼観察する分には五所川原産のものと比較しても大差はなく、産地不明とされたが五所川原産である可能性も考えられる。

104～125は胴部から底部片を集成したものである。産地同定分析により、111・114・115が五所川原産、104、118が産地不明という結果が得られている。産地不明とされた胎土は肉眼観察でも特異なものである。

甕類

総点数504点が出土した。破片での出土が多く器形を復元できるものは少ない。口径を計測できたものは、概ね20㎝前後であり、中甕の類になるものばかりである。製作技法としては、粘土紐積み上げ後タタキ調整が施されており、口径部はタタキ調整後にロクロナデが施され成形されている。肩部と底部に見られるタタキ目は平行タタキを異方向から敲くことにより、格子目状になっている。

126～141は口縁部が残存しているものである。口唇部の外反度が強いことから、比較的新しい段階に生産された可能性が考えられる。126～128は胎土が似ており同一個体と考えられる。産地同定分析により、五所川原産との結果を得ている。129～132も同一個体と思われるものである。129はゆがみの度合いが大きく、頸部の内外面に窯壁の熔着痕が見られる。産地同定分析により、産地不明（不明a）との結果を得ているが、胎土・色調は遺跡内で相当数みられるもので、特に違和感は感じられない。器形もゆがみも大きく、窯壁が熔着しているような粗悪品をわざわざ遠方より運んでくるのか疑

問の残るところである。136も分析の結果、不明とされたものであるが、これも、遺跡内で相当数見られる胎土である。

145-146、147-148、149-150、151-152、153-154、155-156、157-158は、それぞれ胎土が似ており同一個体と考えられる。産地同定分析により、153-154が五所川原産、145-146が産地不明（不明a）、149-150が産地不明（不明b）との結果を得ている。不明bとされたものは胎土、タタキ目、当て具痕など五所川原産のものと比較して違和感のあるものである。また、胎土分析は行っていないが、151-152はタタキ目の条が細く、胎土も異質であることより、五所川原以外の産地が想定される。

159～170は胴部～底部片を集成したものである。この中で159・160・161・163が五所川原産、164が産地不明（不明a）、162・165が産地不明（不明ｂ）との結果を得ている。

接合状況について

遺構間の接合状況を図233に示した。接合状況の特徴としては、斜面の上方と下方に位置している遺構同士の接合が目立っており、同じ等高線上で接合している例は少ない傾向が認められる。

接合状況、及び同一個体状況より、遺構が廃棄された時期の近似性を認識できる例が２例認められた。１例目は、壕内に位置している第３号住居跡（以下３号住）と壕、隣接している第１号竪穴遺構（SK19、以下１号竪穴）である。３号住は本遺跡内でも大型規模のもので、張り出し施設が伴っている遺構である。事実記載の項でも若干ふれているが、カマドから出土している159は、火床面付近に折り重なるようにして出土したもので、カマド祭祀が想定される出土状況を示しており、遺構の廃絶時期にきわめて近いものと考えられる。これが、内壕の下位層より出土したものと接合している事から、壕が空いた状態で廃棄されたことが想定され、極めて近い時期に埋没した可能性が考えられる。１号竪穴出土の遺物は覆土一括で取り上げているため、遺物の位置は不明であるが、３号住と隣接しており、立地、接合状況より濠、３号住と近い時期に機能していた可能性が考えられる。

２例目は第16号住居跡（以下16号住)、第32号土坑（以下32土）、第65号住居跡（以下65号住）、第20号住居跡（以下20号住）である。65号住と20号住では接合関係が認められ、65号住と32土は同一個体と思われるものが出土している。同一個体と判断した129（65号住）、130（32土）は、胎土だけでなく窯壁の熔着痕が付着している点で一致しており、同一個体である可能性は高いと考えられる。

32土、20号住出土の遺物は廃棄された状況を示しており、これらと65号住の床面より出土したものと接合することから、極めて近い時期に廃棄された遺構と考えられる。また、32土は事実記載の項でも述べられているように16号住に伴う土坑である可能性が考えられる。ちなみに、16号住と20号住は、３号住と同様に本遺跡内では大型規模のもので、張り出し施設が伴うものである。また、両住居跡は壕よりも古いが、白頭山火山灰が二次堆積している遺構である。

白頭山火山灰が二次堆積している遺構出土遺物について

図223で、濃いアミのかかっている遺構は、白頭山火山灰が二次堆積しているもの、若しくは、その遺構よりも新しいもので、10世紀中葉以降に構築されたと考えられる遺構である。一方、薄いアミのかかっている遺構は十和田a火山灰のみが検出されている第６号住居跡で、本遺跡内では古手の住居になる可能性のあるものである。図示している遺物は、遺構間どうしで接合したもののほか、住居

跡より出土したものは床面、カマド、及び小穴内より出土したもので、遺構廃絶時期にきわめて近いと思われる遺物である。溝跡、壕跡より出土したものは覆土一括のものである。その為、古めのものも図中では混在している。

住居跡より出土した坏は、直線的に立ち上がっているⅠ類や外反しながら立ち上がっているⅡ類の両方が見られる。また、高径比と底口比の差を見ても、この差が殆ど見られないものから、大きいものまでが出土しており、器形の面で特に際だった特徴はつかめなかった。ただ、第６号住居跡より出土している１は底部幅が大きく、底部から立ち上がる部分が丸みを帯びており、他のものと器形を比較するとシャープさ感じられない。このような特徴のものは五所川原でも９世紀代に操業していたと考えられるKY１号窯から出土しているものと類似しており、須恵器の面からみても第６号住居跡の構築年代は９世紀代になると考えられる。

ヘラ記号について

総破片数1,476点中、49点にヘラ記号が記されており、36点を図示している。内訳は坏類が380点中34点、鉢類が６点中１点、壺類が585点中12点、甕類が504点中２点となっており、坏類に多く記されている傾向が伺える。

記されている記号の種類は

１　縦に直線を１～３条記されているもの（６～51）
２　縦と横に直線が記されているもの（129～37）
３　斜行している線が記されているもの（９～106）
４　横と斜めに線が記されているもの（40、110）
５　鋸歯状になるもの（41）
６　文字のように見えるもの（50～８）

である。１は『五所川原須恵器窯跡群』（五所川原市埋報　第25集）の中で、どの窯の時期を通じても数は多いと述べられており（藤原2003）、五所川原付近で生産される須恵器には多く見られる記号といえる。また、各窯固有の記号も認められ、ＭＺ２号窯では「神」が固有のものであると述べられている（藤原2003）。同書中の個体NO61は鋸歯状の記号と、「神」という字がセットになって記されている。本遺跡より出土した41も鋸歯状の記号が記されており、ＭＺ２号窯にて生産された可能性も考えられる。

記号が記されている位置を見てみる。坏類は底部付近に記されているものが最も多いが、その他にも胴部中央や底面に記されているものがある。鉢、甕類は頸部に、壺類は頸部及び、頸部直下の体部に記されている。壺類の体部に記されているものは、白頭山火山灰後に操業されているMD３、16号窯跡で優勢を占めるものとされており（藤原2003）、その部分に記されている99・105・108～110・112は当該期の窯跡で生産された可能性も考えられる。

以上、器種毎の特徴と、遺構間の接合状況、ヘラ記号などを述べてきたが、これらのことをまとめると、本遺跡より出土している須恵器は９世紀代から白頭山火山灰以降に生産された可能性のあるものまでが出土している。破片での出土が多く、はっきりとしたことは言えないが、壺類の断面形状より、10世紀前半に生産されたものが主体を占めると考えられる。（小山）

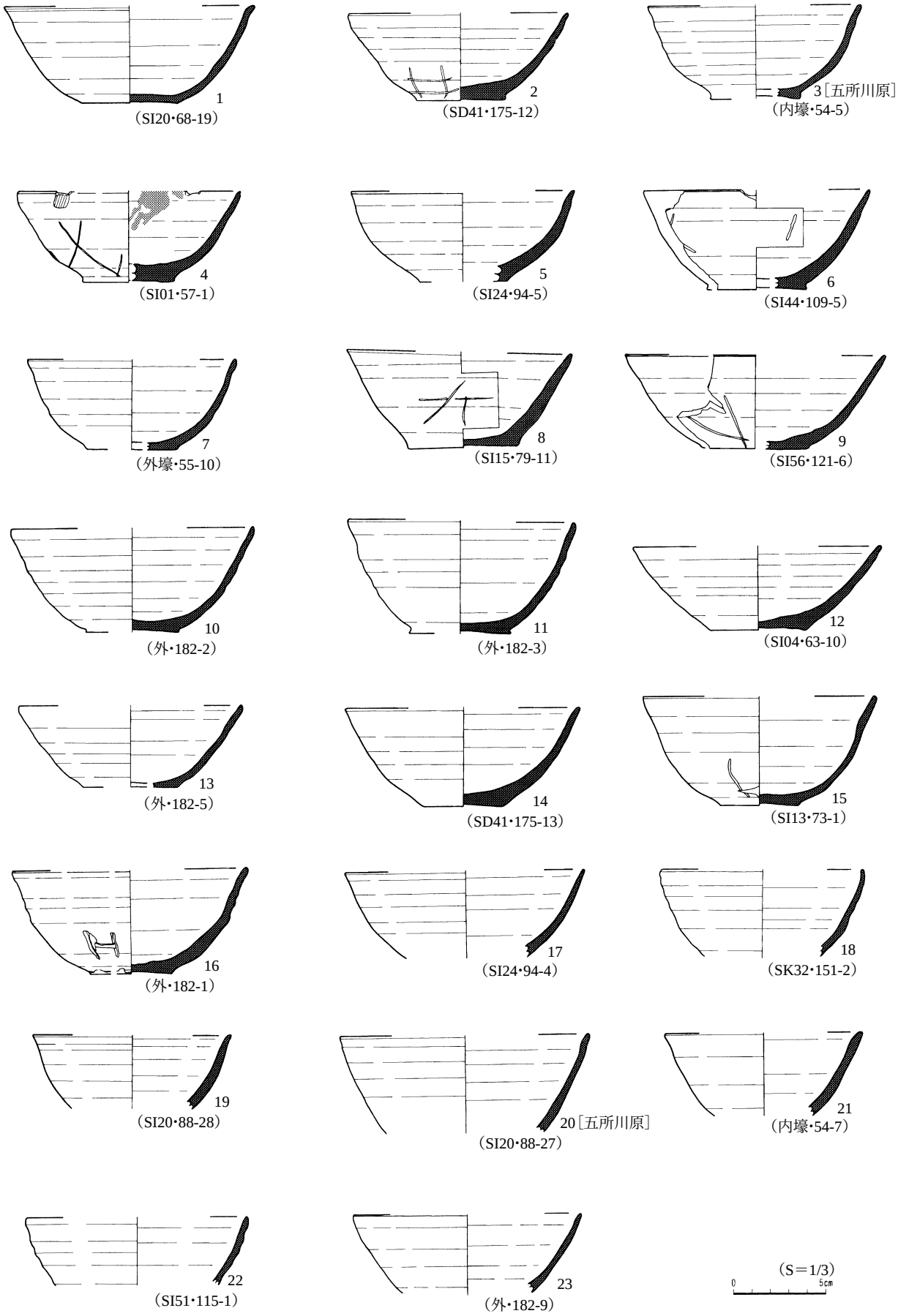

1
（SI20･68-19）
2
（SD41･175-12）
3［五所川原］
（内壕･54-5）
4
（SI01･57-1）
5
（SI24･94-5）
6
（SI44･109-5）
7
（外壕･55-10）
8
（SI15･79-11）
9
（SI56･121-6）
10
（外･182-2）
11
（外･182-3）
12
（SI04･63-10）
13
（外･182-5）
14
（SD41･175-13）
15
（SI13･73-1）
16
（外･182-1）
17
（SI24･94-4）
18
（SK32･151-2）
19
（SI20･88-28）
20［五所川原］
（SI20･88-27）
21
（内壕･54-7）
22
（SI51･115-1）
23
（外･182-9）
（S＝1/3）
0
5cm

図216　須恵器集成（1）

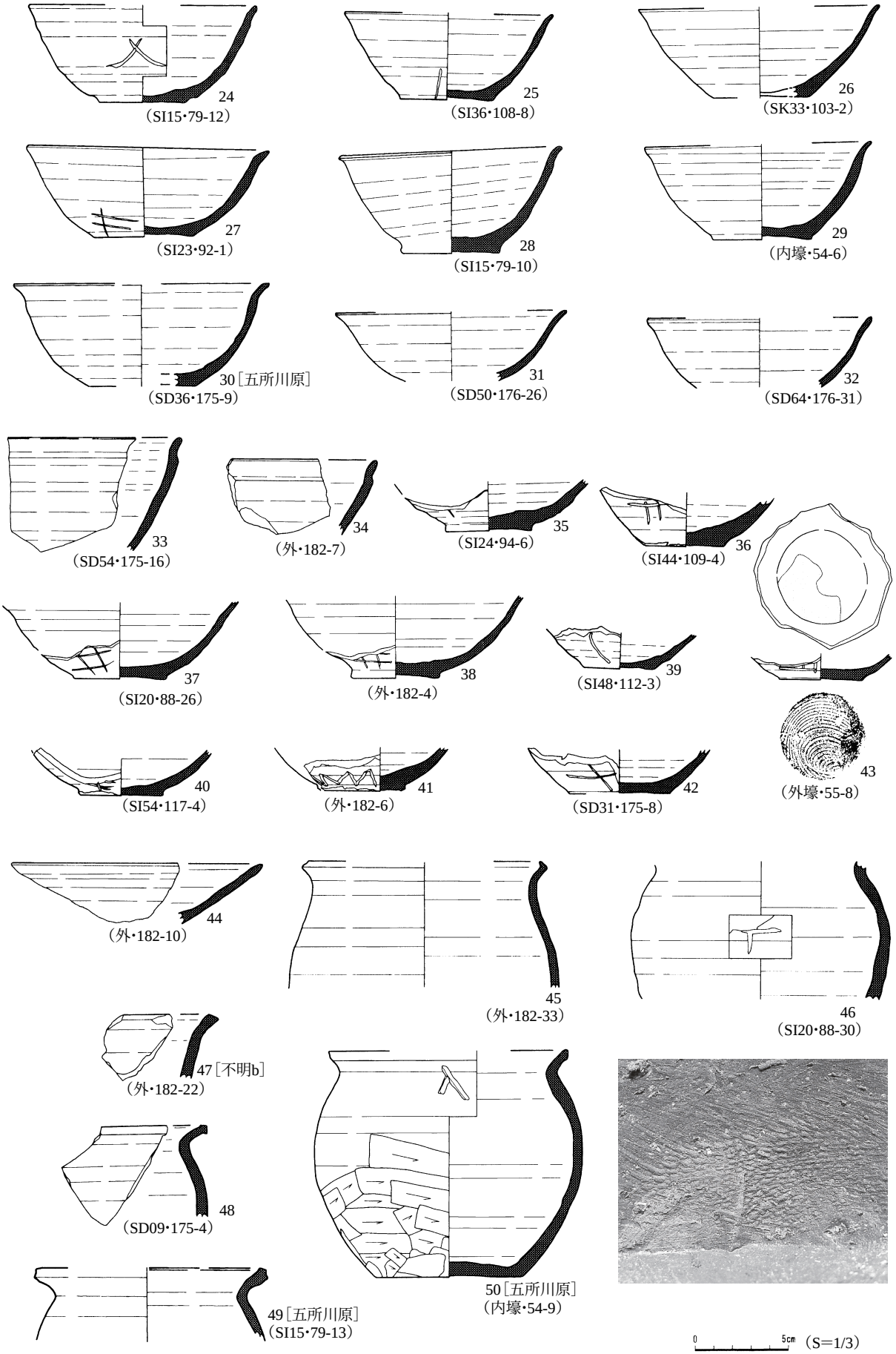

24
（SI15・79-12）
25
（SI36・108-8）
26
（SK33・103-2）
27
（SI23・92-1）
28
（SI15・79-10）
29
（内壕・54-6）
30［五所川原］
（SD36・175-9）
31
（SD50・176-26）
32
（SD64・176-31）
33
（SD54・175-16）
34
（外・182-7）
35
（SI24・94-6）
36
（SI44・109-4）
37
（SI20・88-26）
38
（外・182-4）
39
（SI48・112-3）
40
（SI54・117-4）
41
（外・182-6）
42
（SD31・175-8）
43
（外壕・55-8）
44
（外・182-10）
45
（外・182-33）
46
（SI20・88-30）
47［不明b］
（外・182-22）
48
（SD09・175-4）
49［五所川原］
（SI15・79-13）
50［五所川原］
（内壕・54-9）
0
5cm
（S＝1/3）

図217　須恵器集成（2）

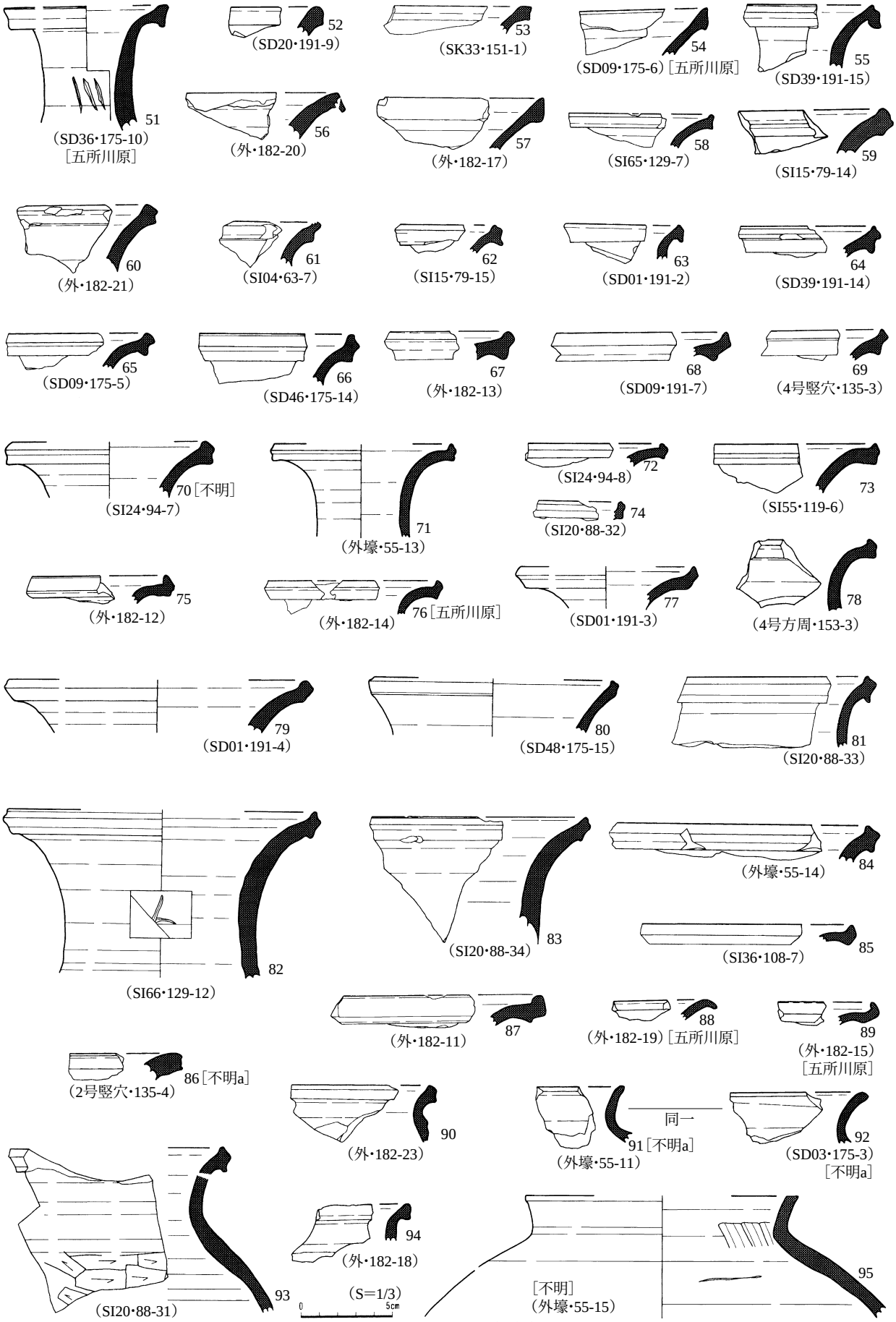

51
(SD36・175-10)
[五所川原]
52
(SD20・191-9)
53
(SK33・151-1)
54
(SD09・175-6)[五所川原]
55
(SD39・191-15)
56
(外・182-20)
57
(外・182-17)
58
(SI65・129-7)
59
(SI15・79-14)
60
(外・182-21)
61
(SI04・63-7)
62
(SI15・79-15)
63
(SD01・191-2)
64
(SD39・191-14)
65
(SD09・175-5)
66
(SD46・175-14)
67
(外・182-13)
68
(SD09・191-7)
69
(4号竪穴・135-3)
70[不明]
(SI24・94-7)
71
(外壕・55-13)
72
(SI24・94-8)
73
(SI55・119-6)
74
(SI20・88-32)
75
(外・182-12)
76[五所川原]
(外・182-14)
77
(SD01・191-3)
78
(4号方周・153-3)
79
(SD01・191-4)
80
(SD48・175-15)
81
(SI20・88-33)
82
(SI66・129-12)
83
(SI20・88-34)
84
(外壕・55-14)
85
(SI36・108-7)
87
(外・182-11)
88
(外・182-19)[五所川原]
89
(外・182-15)
[五所川原]
86[不明a]
(2号竪穴・135-4)
90
(外・182-23)
91[不明a]
(外壕・55-11)
同一
92
(SD03・175-3)
[不明a]
93
(SI20・88-31)
94
(外・182-18)
95
[不明]
(外壕・55-15)
(S=1/3)
0
5cm

図218　須恵器集成（3）

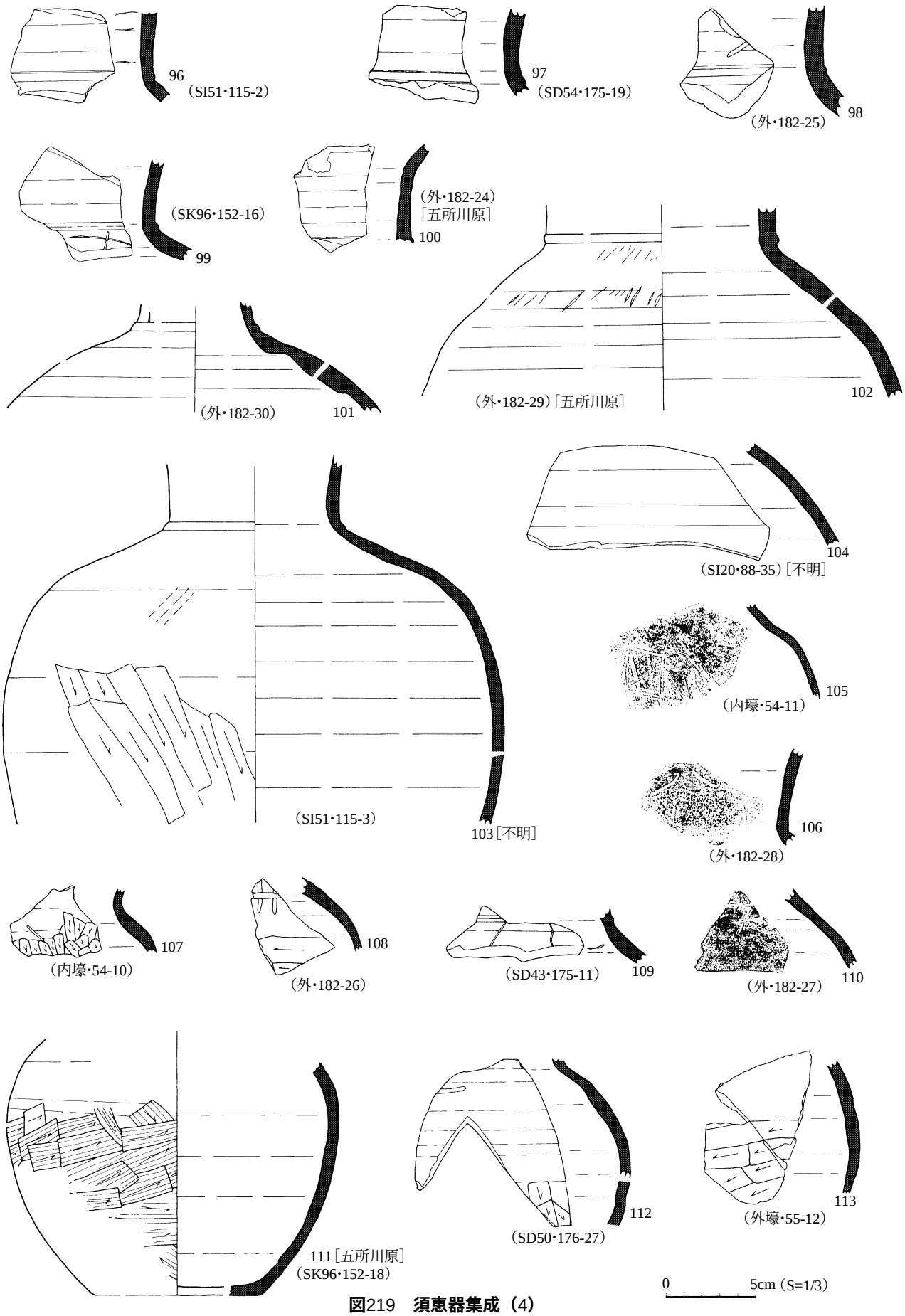

96
（SI51・115-2）
97
（SD54・175-19）
98
（外・182-25）
（SK96・152-16）
99
（外・182-24）
［五所川原］
100
（外・182-30）
101
（外・182-29）［五所川原］
102
（SI51・115-3）
103［不明］
104
（SI20・88-35）［不明］
105
（内壕・54-11）
106
（外・182-28）
107
（内壕・54-10）
108
（外・182-26）
（SD43・175-11）
109
110
（外・182-27）
111［五所川原］
（SK96・152-18）
112
（SD50・176-27）
113
（外壕・55-12）
0
5cm（S=1/3）

図219　須恵器集成（4）

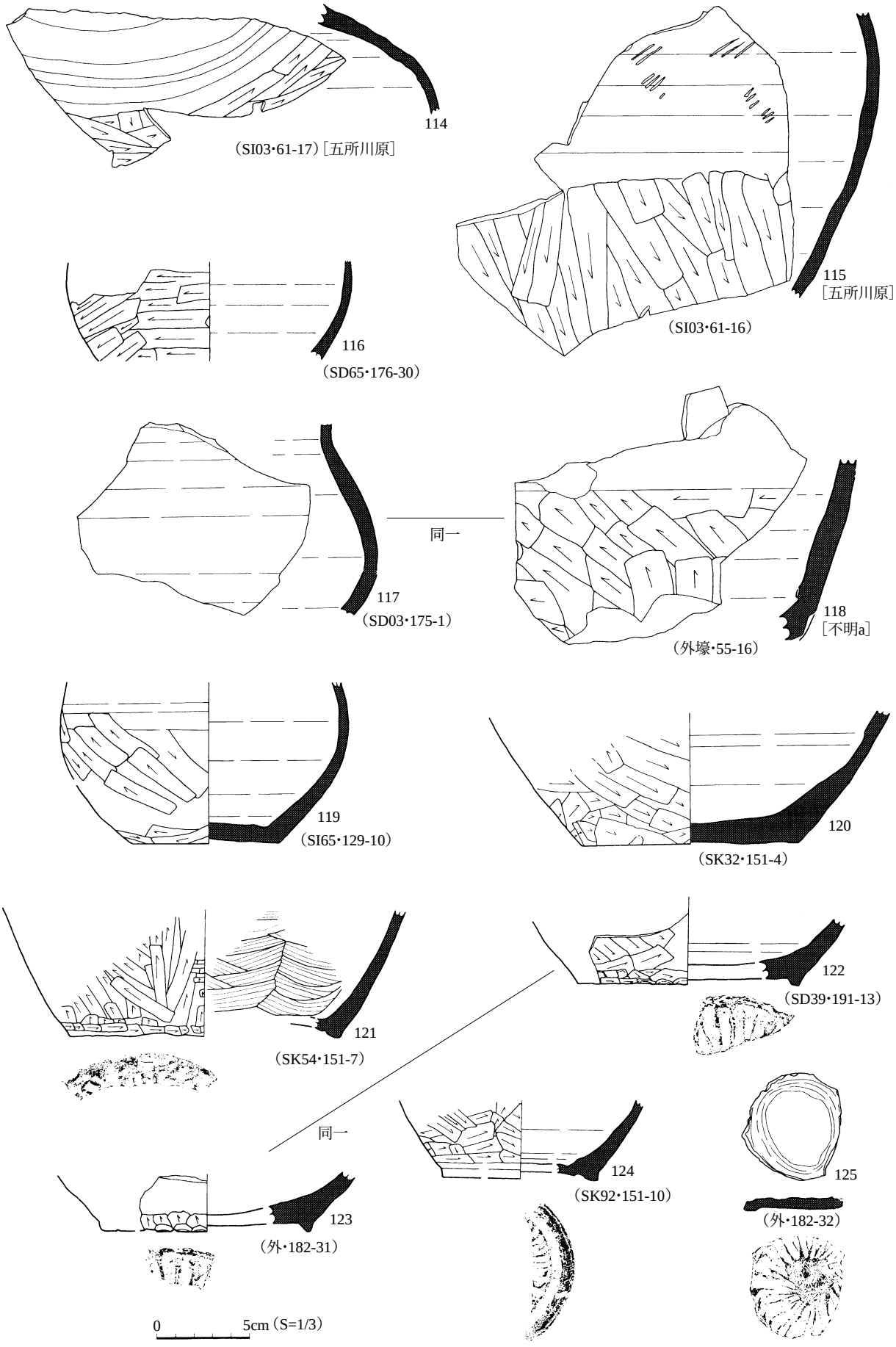

114
(SI03・61-17)［五所川原］
115
［五所川原］
(SI03・61-16)
116
(SD65・176-30)
同一
117
(SD03・175-1)
118
［不明a］
(外壕・55-16)
119
(SI65・129-10)
120
(SK32・151-4)
121
(SK54・151-7)
122
(SD39・191-13)
同一
123
(外・182-31)
124
(SK92・151-10)
125
(外・182-32)
0
5cm (S=1/3)

図220　須恵器集成（5）

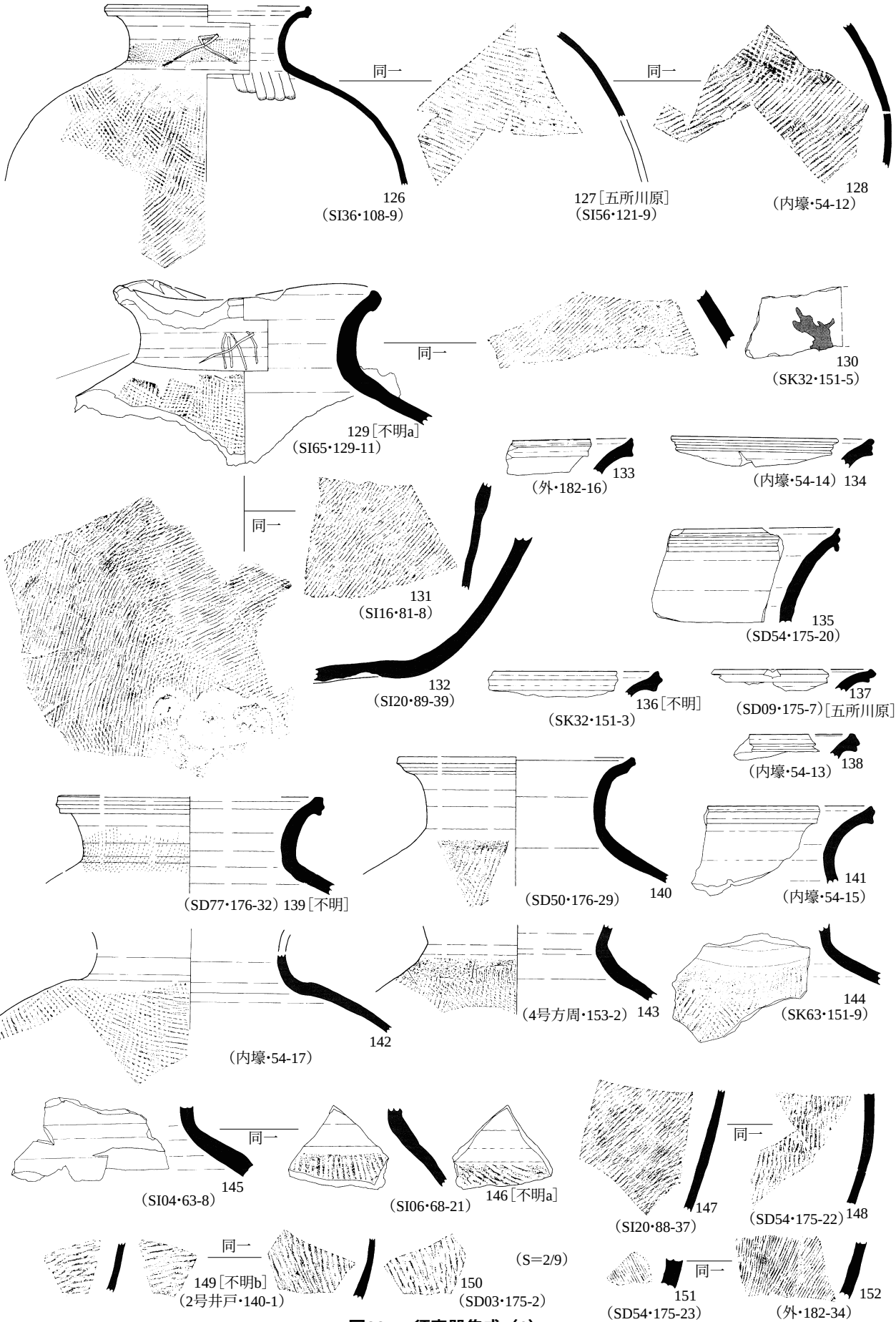

同一
126
（SI36･108-9）
同一
127［五所川原］
（SI56･121-9）
128
（内壕･54-12）
同一
129［不明a］
（SI65･129-11）
130
（SK32･151-5）
133
（外･182-16）
（内壕･54-14）134
同一
131
（SI16･81-8）
135
（SD54･175-20）
132
（SI20･89-39）
136［不明］
（SK32･151-3）
137
（SD09･175-7）［五所川原］
（内壕･54-13）138
（SD77･176-32）139［不明］
（SD50･176-29）
140
141
（内壕･54-15）
142
（内壕･54-17）
（4号方周･153-2）143
144
（SK63･151-9）
同一
145
（SI04･63-8）
146［不明a］
（SI06･68-21）
同一
147
（SI20･88-37）
同一
148
（SD54･175-22）
同一
149［不明b］
（2号井戸･140-1）
150
（SD03･175-2）
（S=2/9）
同一
151
（SD54･175-23）
152
（外･182-34）

図221　須恵器集成（6）

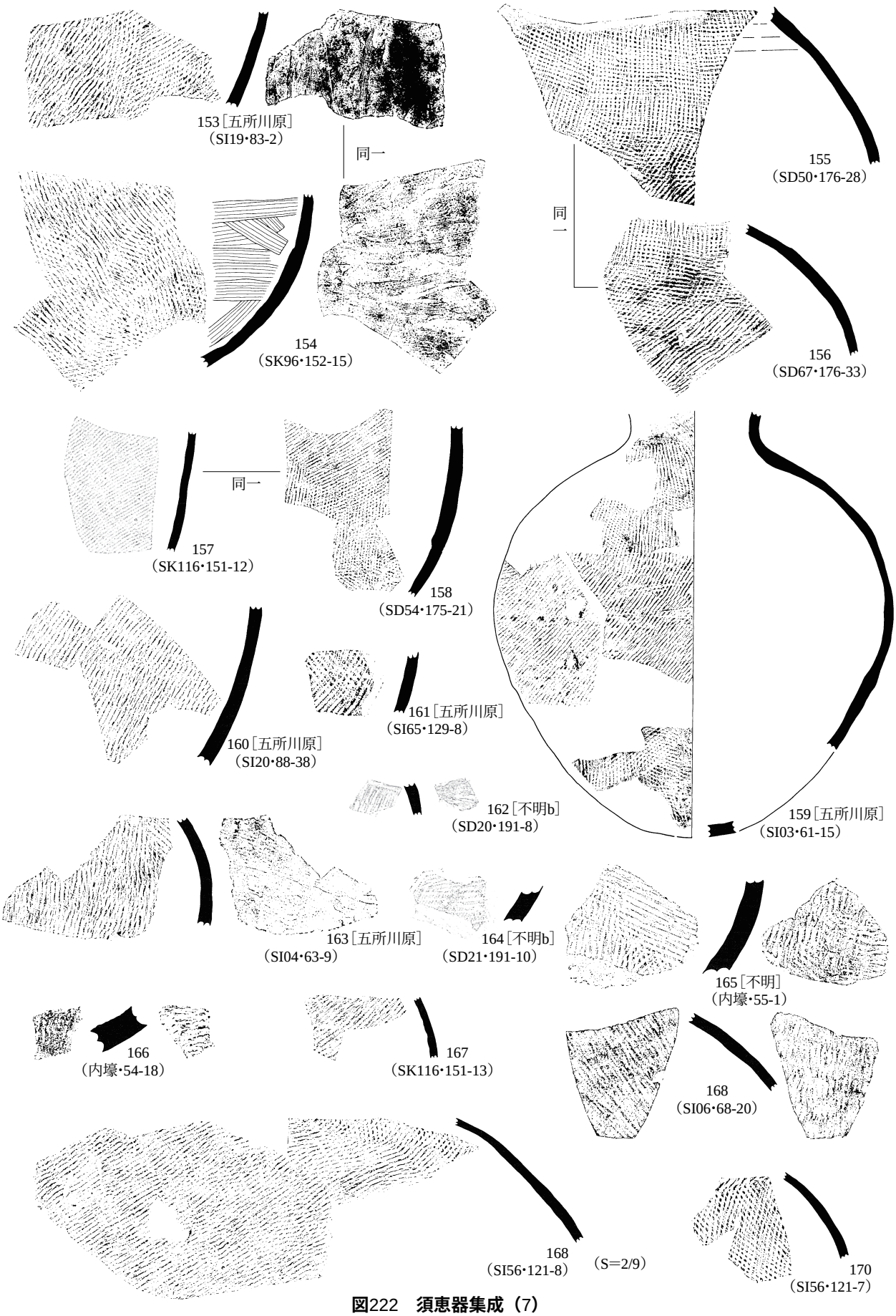

153［五所川原］
（SI19･83-2）
同一
154
（SK96･152-15）
155
（SD50･176-28）
同一
156
（SD67･176-33）
同一
157
（SK116･151-12）
158
（SD54･175-21）
160［五所川原］
（SI20･88-38）
161［五所川原］
（SI65･129-8）
162［不明b］
（SD20･191-8）
159［五所川原］
（SI03･61-15）
163［五所川原］
（SI04･63-9）
164［不明b］
（SD21･191-10）
165［不明］
（内壕･55-1）
166
（内壕･54-18）
167
（SK116･151-13）
168
（SI06･68-20）
168
（SI56･121-8）
（S＝2/9）
170
（SI56･121-7）

図222　須恵器集成（7）

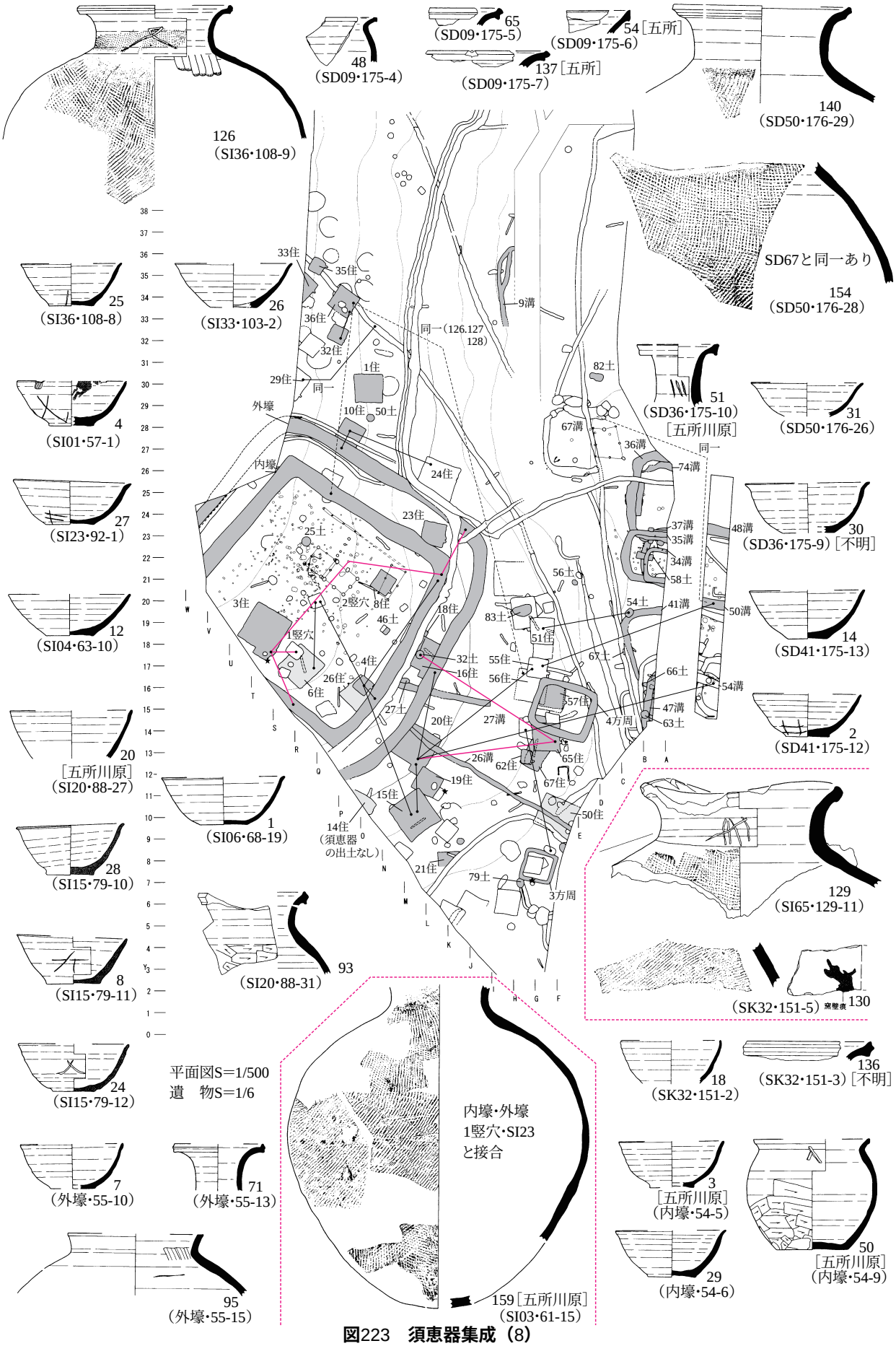

126
（SI36･108-9）
48
（SD09･175-4）
65
（SD09･175-5）
54［五所］
（SD09･175-6）
137［五所］
（SD09･175-7）
140
（SD50･176-29）
SD67と同一あり
154
（SD50･176-28）
25
（SI36･108-8）
26
（SI33･103-2）
4
（SI01･57-1）
27
（SI23･92-1）
12
（SI04･63-10）
20
［五所川原］
（SI20･88-27）
1
（SI06･68-19）
28
（SI15･79-10）
8
（SI15･79-11）
24
（SI15･79-12）
7
（外壕･55-10）
71
（外壕･55-13）
95
（外壕･55-15）
93
（SI20･88-31）
51
（SD36･175-10）
［五所川原］
31
（SD50･176-26）
30
（SD36･175-9）［不明］
14
（SD41･175-13）
2
（SD41･175-12）
129
（SI65･129-11）
130
（SK32･151-5）
136
（SK32･151-3）［不明］
18
（SK32･151-2）
3
［五所川原］
（内壕･54-5）
29
（内壕･54-6）
50
［五所川原］
（内壕･54-9）
159［五所川原］
（SI03･61-15）
内壕･外壕
1竪穴･SI23
と接合
平面図S＝1/500
遺　物S＝1/6
33住
35住
36住
32住
29住
同一
1住
10住
50土
外壕
内壕
24住
23住
25土
3住
2竪穴
8住
46土
1竪穴
4住
26住
6住
27土
9溝
同一（126.127
128）
82土
67溝
36溝
同一
74溝
37溝
35溝
34溝
58土
48溝
56土
54土
41溝
50溝
83土
51住
18住
32土
16住
55住
56住
67土
66土
54溝
57住
47溝
63土
4方周
20住
27溝
26溝
62住
65住
67住
19住
15住
14住
（須恵器
の出土なし）
21住
79土
3方周
50住

図223　須恵器集成（8）

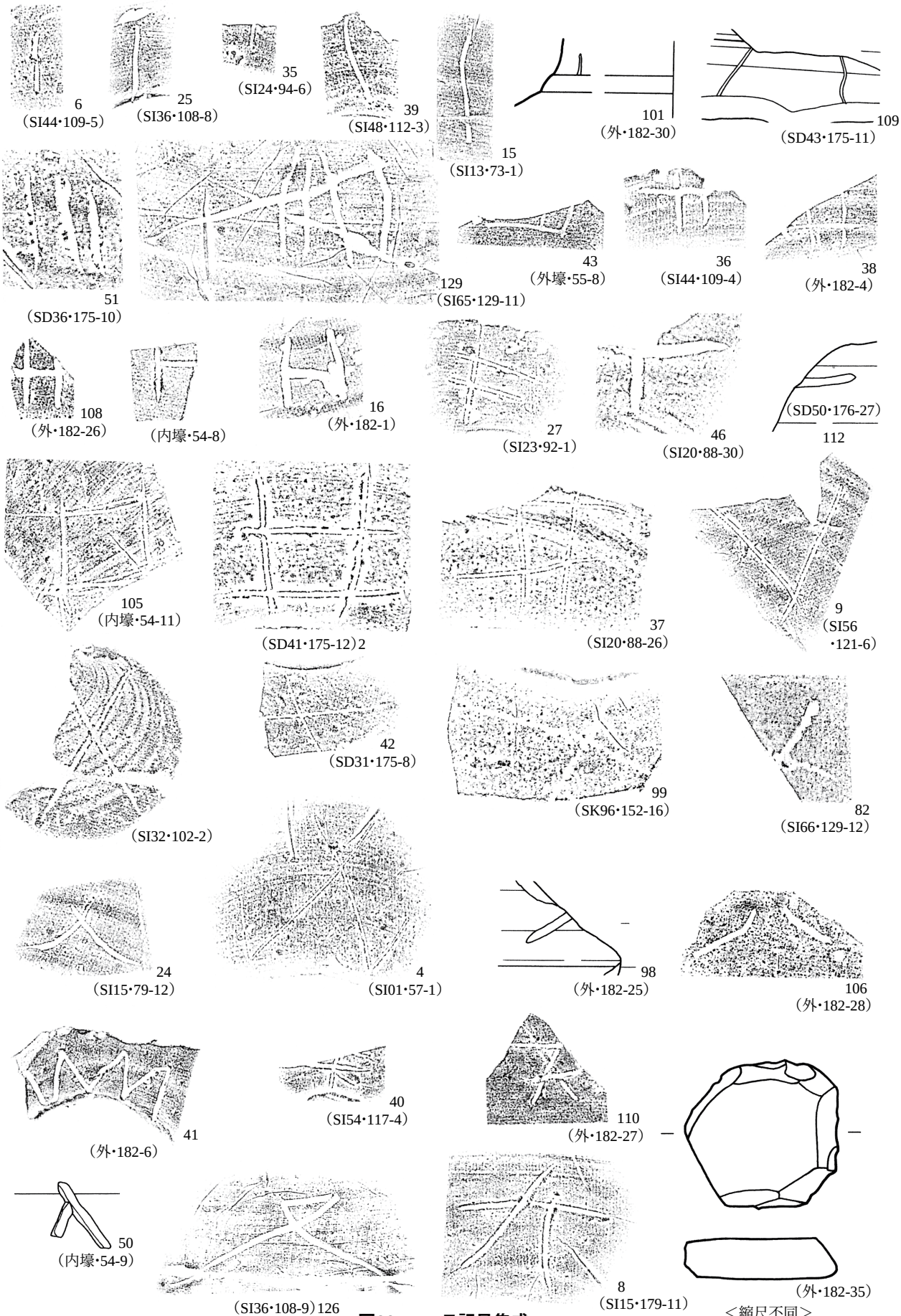

6
（SI44・109-5）
25
（SI36・108-8）
35
（SI24・94-6）
39
（SI48・112-3）
15
（SI13・73-1）
101
（外・182-30）
109
（SD43・175-11）
51
（SD36・175-10）
129
（SI65・129-11）
43
（外壕・55-8）
36
（SI44・109-4）
38
（外・182-4）
108
（外・182-26）
（内壕・54-8）
16
（外・182-1）
27
（SI23・92-1）
46
（SI20・88-30）
（SD50・176-27）
112
105
（内壕・54-11）
（SD41・175-12）2
37
（SI20・88-26）
9
（SI56
・121-6）
42
（SD31・175-8）
（SI32・102-2）
99
（SK96・152-16）
82
（SI66・129-12）
24
（SI15・79-12）
4
（SI01・57-1）
98
（外・182-25）
106
（外・182-28）
41
（外・182-6）
40
（SI54・117-4）
110
（外・182-27）
50
（内壕・54-9）
（SI36・108-9）126
8
（SI15・179-11）
（外・182-35）
＜縮尺不同＞

図224　ヘラ記号集成

（3）金属製品

ア　鉄製品

遺構内外から44点出土している。ほとんどが遺構内からの出土で、特に第20号住居跡からは12点出土している。

全体に残存状態は不良で、土壌などに錆が移行して本体を覆ったことにより、ようやく形状を維持しているものも少なくない。図化にあたっては、錆化物の付着が多いことからＸ線透過撮影写真を参考にした。

以下、器種ごとに特徴を述べる。文中の遺物番号は集成図と同一である。

鋤先（図225-１・２）

２点出土している。刃部の長さに違いはあるが、２点とも装着部の形状・規模ともほぼ同じである。装着部の両端は若干内側に張り出しており、ソケット部分もともに浅くかつ薄手である。刃部は厚さが２～５mm程度である。

刀子（図225-３～９）

７点出土している。略完形品が２点で、他は破片での出土である。

３・４は、形状・規模ともほぼ同じで、基部破片の５も形状が類似している。

７は茎の破片、８・９は刃部破片である。

手鎌（図225-10～14）

５点出土している。目釘穴が確認出来たものは１点である。他はすべて刃部の破片で、厚さがほぼ一様のものをこの類とした。以前の「山元（２）遺跡　青森県埋蔵文化財調査報告書第171集」では、「苧引金」として報告されている類である。

鉄鏃（図225-15～23）

９点出土している。いずれも破片で全体形は確認できない。鏃身は３点で、いずれも先端が短めの鑿根鏃である。また、雁又鏃と考えられる箆被部の破片１点（18）が遺構外から出土している。台状関で、全体に肉厚の作りである。

茎部としたものは５点で、断面が角状のものをこの類とした。ただし、出土時に鏃身とのセット関係がないものについては、他遺跡で角状の紡錘車の軸が存在するという例もあるため、断定し得ない。

鍋（図226-24・25）

２点出土しており、すべて破片での出土である。24は遺構外から出土した内耳鍋で、把手接合部が一部残存している。

破片のほとんどは細かい亀裂が入り、残存状態は非常に悪い。

責め金具（図226-26・27）

２点出土している。26は幅９㎜、厚さ２㎜の鉄片を長楕円形の環状に折り曲げているもので、上部に折り重なった部分が認められる。完形品ではなく、素材として保管していた可能性も考えられる。27も幅７㎜ほどの鉄片で、両端がやや湾曲していることから、この類とした。

釘状鉄製品（図226-28・29）

２点出土している。29は略完形で、28は頭部破片である。

軸部分は、断面形が角状である。頭部は、軸を直角に折り曲げたものを平坦に延ばしている。28は、円形で広目に加工されているが、29は錆により欠失した可能性もあるが、やや小さ目である。

軸状鉄製品（図226-30～37）

断面形状が円形の細い棒状のものを一括した。

直径などから30～32は紡錘車の軸と推定されるが、今回の調査では円盤が出土していないことから断定し得ない。

他は、錆化物に覆われており、鉄部分もほとんど残存していないことや小型のため、器種は不明である。

板状鉄製品（図226-38～43）

器種を特定できない板状の破片を一括した。

38～40はやや肉厚の破片で、41は非常に薄い破片である。42・43は鉄塊の可能性も考えられる。

保管素材？（図226-44）

一端（実測図上部）を三角錐のように接合しており、もともと特殊な製品であったものと考えられる。他の部分は、破損面？からコンパクトに折りたたまれており、内部は空洞状である。

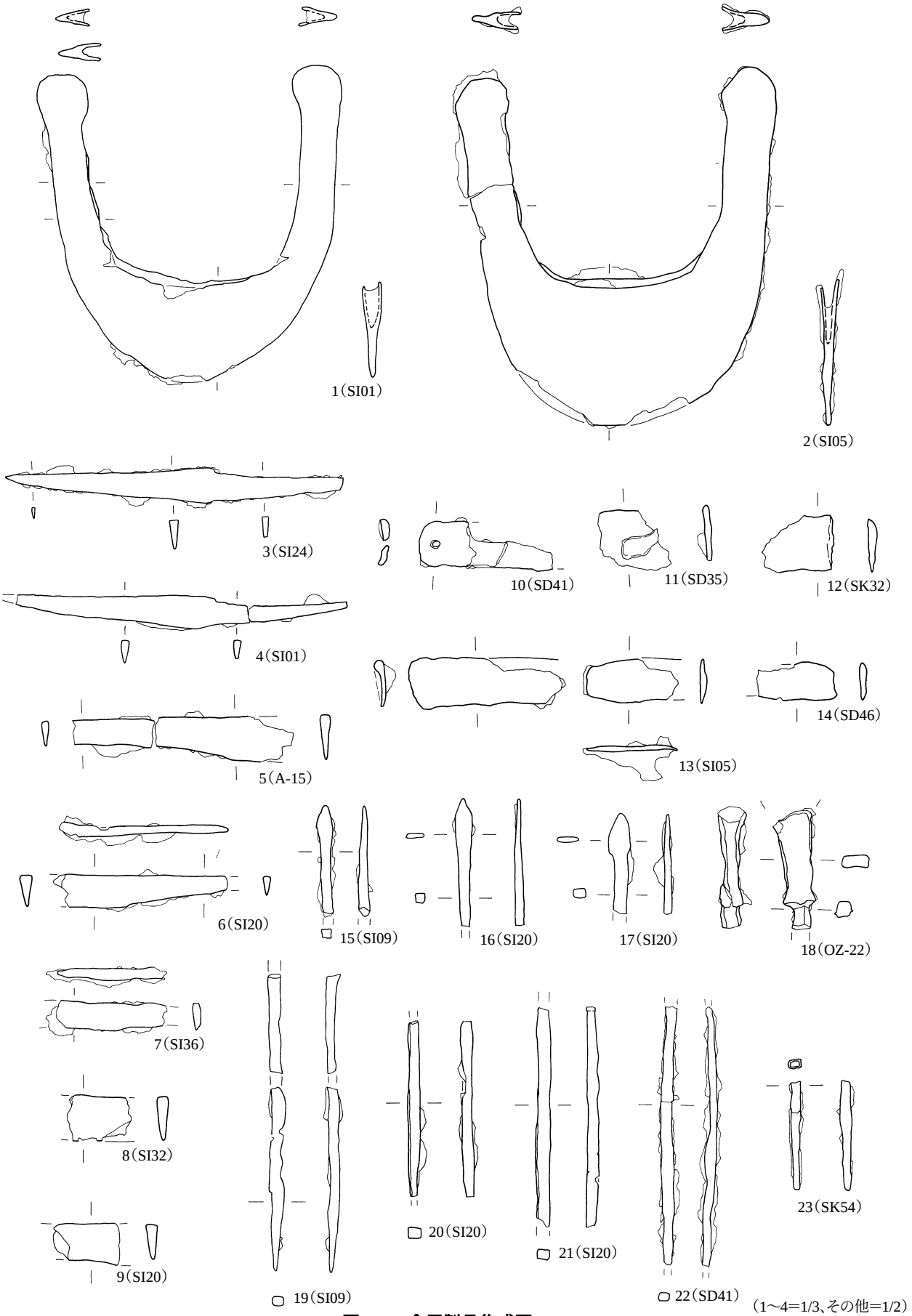
表面は若干光沢があり、また緑青が観察されることから銅または銅の合金の付着、または鉄地に何らかの塗金を施した可能性も考えられる。内部は鉄錆に覆われている。

原形に関しては類例を探し出すまでには到らなかったが､特殊な製品が何らかの理由により破損し、素材として保管されていたものと考えられる。

イ　銅滓（図226-45～47）

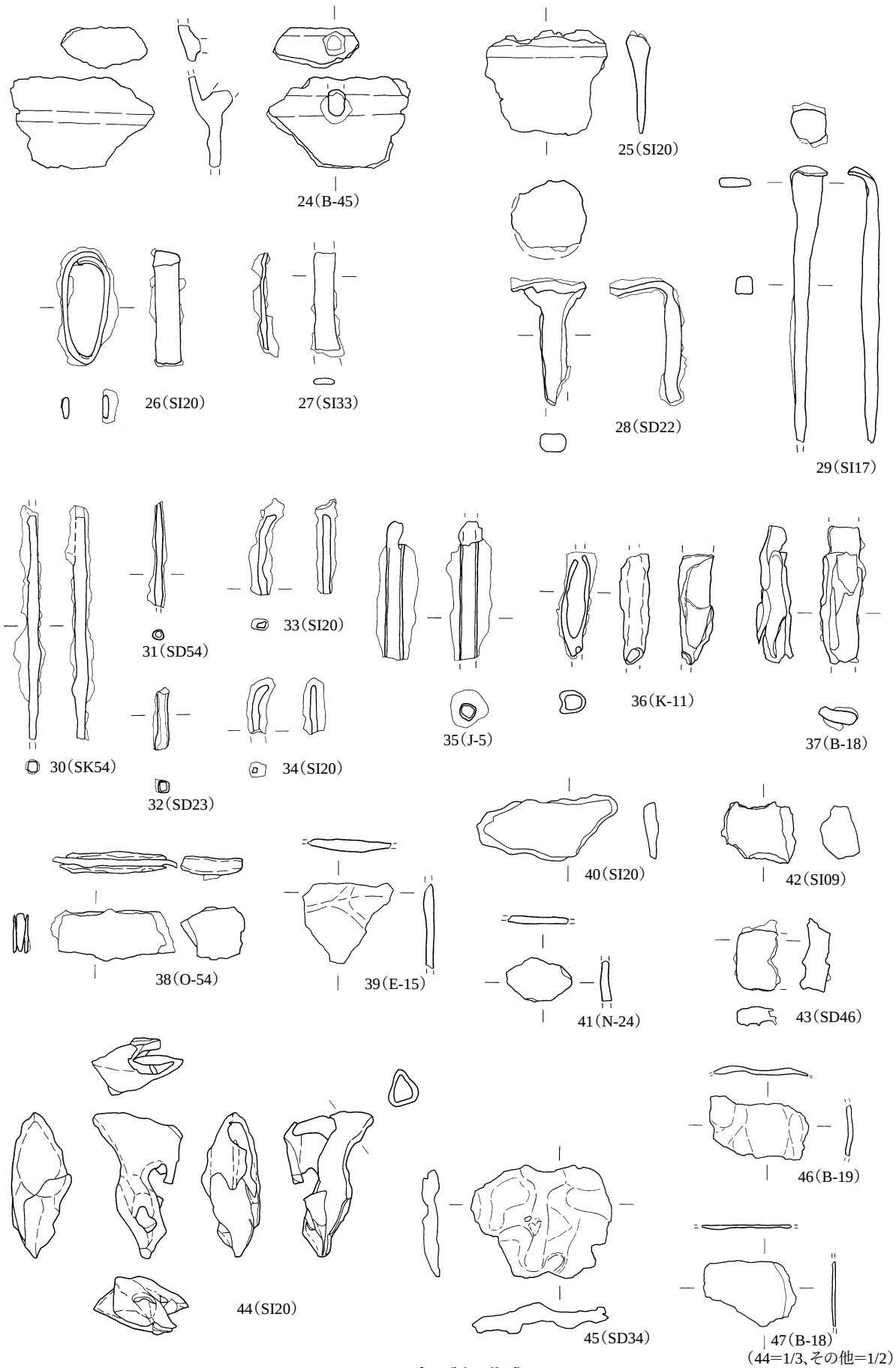
３点出土している。45はやや大型の破片で、表面には収縮がみられる。被熱によるものと考えられる。46も同様の破片である。47の表面は概ね平滑である。

全て表面には緑青が観察される。（白鳥）



（1～4＝1/3、その他＝1/2）

図225　金属製品集成図1



（44＝1/3、その他＝1/2）

図226　金属製品集成図2

（4）土製品・石製品

土製品

土玉（図227-１・２）

竪穴住居跡から２点出土した。２は無孔で、その胎土や焼成から土鈴（図227-５）の丸の可能性が考えられる。３は焼成前に穿孔され、表面はミガキによって仕上げられている。

土鈴（図227-４・５）

いずれも破損しているが大型の土鈴で、鈕（つまみ）部分が太くつくられ、その端をつまみ出しながらリング状にしていたと思われる。

不明土製品（図227-３）

１点出土した。鼓状に両端が膨らみ乾燥によるものと思われるひび割れが確認できる。

石製品

平玉（図227-６）

全面が磨かれた安山岩質凝灰岩で、やや扁平状な形状の中央に穿孔が施されている。

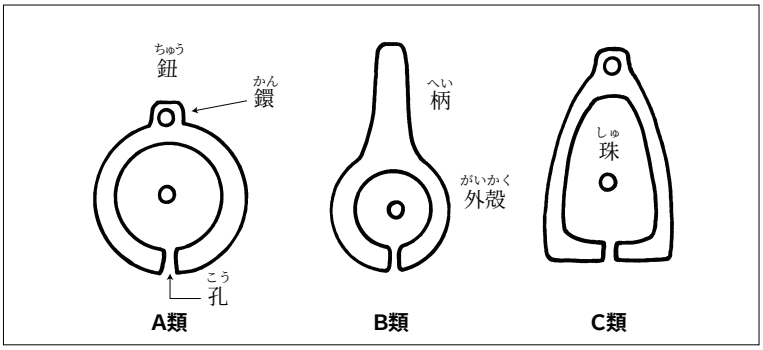
土鈴について

山元（１）遺跡から出土した２点の土鈴は大型で、鈕部分が太く柄のようにつくられ、欠損しているがその先端には、リング状あるいは角のような尖りをつけていたと考えられる。また、残存部分から製作方法は、薄く延ばした粘土の中央に丸（珠）を数個包み込むようにして棒状の粘土に巻き付けて整形し、スリット状の切れ込み（孔）と鈕の孔（鐶）を付け加えている。

近年、浪岡周辺の発掘調査において土鈴の出土資料の増加が著しく、現在のところ12遺跡（近野を除く）で124点を数えるが、その形態等の分類は行われていない。出土する土鈴の多くが破片資料であり、出土部位により土製品や手捏ね土器などに含まれているものもみられるが、あえて報告書の記載に沿ってそれらを分類してみる。

土鈴は、その形状から大きく球形（A類）、なすび形（いちじく形）（B類）、釣鐘形（鐸状）（C類）に分類でき、それらは約４㎝未満の小型のもの（Ⅰ）と４㎝以上の大型のもの（Ⅱ）に分けられる。さらに、鈕部分に穿孔などにより鐶などの痕跡がみられるもの（ａ）と、つまみ出したままのもの（ｂ）がある。

上記をふまえて浪岡周辺の出土土鈴を分類すると、表のようになり、山元（１）遺跡出土の土鈴はＢⅡａ類で、隣接する高屋敷館遺跡や山元（２）遺跡を含め、その多くが大型のＢⅡ類の土鈴である。



県内で大型の土鈴の出土する地域は浪岡地区に限定され、大釈迦川と十川に挟まれる地域と青森市の近野遺跡（平成13〜15年度調査）に見られる。そのことは、用途によるものなのか時期によるものなのかは不明であるが、いずれにしてもかなり狭い範囲での特殊性が考えれられる。（中嶋）

浪岡周辺の土鈴出土遺跡と分類

	遺　跡　名　点数　分		類
1	浪岡町野尻（１）遺跡	7	ＢⅡ…２　不明…５
2	浪岡町野尻（４）遺跡	23	ＡⅠ…１　ＢⅡａ…１　ＢⅡｂ…９ ＢⅡ…４　不明…８
3	浪岡町野尻（２）遺跡	1	ＢⅡ…１
4	浪岡町高屋敷館遺跡	24	ＢⅡｂ…５　ＢⅡ…６　不明…13
5	浪岡町山元（１）遺跡	2	ＢⅡａ…２
6	浪岡町山元（２）遺跡	46	ＡⅠａ…５　ＡⅡ…３　ＢⅠｂ…１　ＢⅠ…１　ＢⅡａ…１ ＢⅡｂ…１　ＢⅡ…17　不明…17
7	浪岡町羽黒平（１）遺跡	1	ＡⅠ…１
8	浪岡城跡	1	ＡⅠａ…１
9	浪岡町宮元遺跡	3	ＢⅡｂ…１　不明…２
10	五所川原市隠川遺跡（２）遺跡	6	ＢⅡａ…１　ＢⅡｂ…２　不明…３
11	五所川原市隠川遺跡（４）遺跡	3	ＢⅡｂ…１　不明…２
12	五所川原市隠川遺跡（12）遺跡	7	ＢⅡａ…１　ＢⅡｂ…５　不明…１
13	青森市近野遺跡（註）	1	ＡⅡａ…１

註、近野遺跡でも山元（1）遺跡と同様の大型土鈴が平成13〜15年度調査で出土している。

引用・参考文献

森瀬雅介・斉藤岳南　1979　『日本の土鈴』徳間書店
関根　一郎　1988　「東北の土鈴」『白い国の詩』風物編 東北電力株式会社
山田　光洋　1998　「楽器の考古学」『ものが語る歴史１』同成社
国生　尚　1992　「土鈴集成」岩手考古学 第4号
下山　信昭　1996　「東北地方における土鈴集成」研究紀要 第1号 青森県埋蔵文化財調査センター
立正大学考古学会　1999　『考古学論究』第5号〈特集　出土仏具の世界〉
（報告書関係の文献は別記）

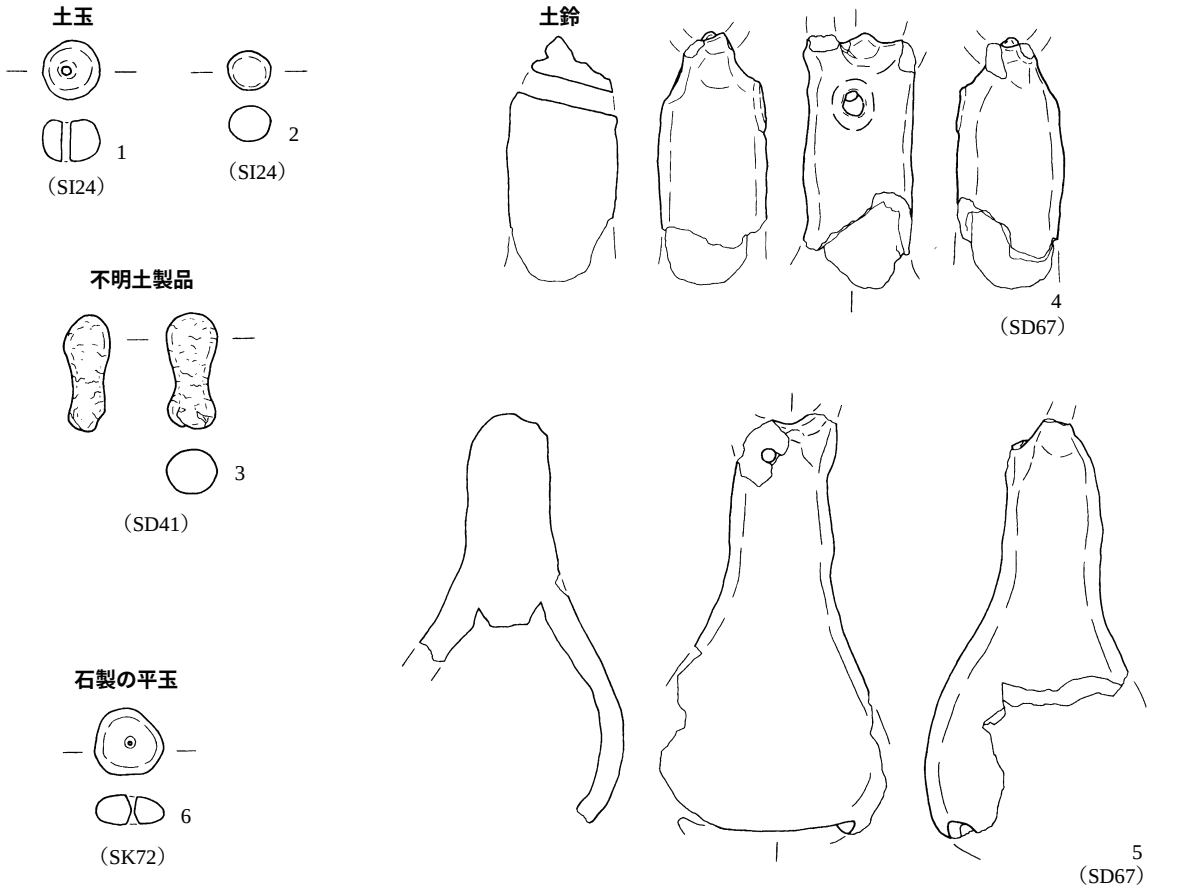

土玉
1
（SI24）
2
（SI24）
不明土製品
3
（SD41）
石製の平玉
6
（SK72）
土鈴
4
（SD67）
5
（SD67）
S=1/2
0
5cm

図227　土製品、石製品

第３節　時代、時期不明の遺構

時代、時期の不明な遺構には掘立柱建物跡１棟、土坑13基、焼土遺構１基、溝跡25条、小穴群２ヶ所がある。大半は平安時代以降の遺構と思われるが、中には、縄文時代や平安時代の可能性のあるものも存在する。

縄文時代の可能性がある遺構は、第６～８号、第13号、93号土坑と焼土遺構である。第６～８号土坑は第１号、２号、９号、10号土坑とともに検出されている。縄文時代前期中葉の住居跡や平安時代の住居跡が検出されたところから、若干離れた場所にまとまって検出されている。周辺には、平安時代の土坑が１基と道跡があるが、土坑の形状や堆積状況などから縄文時代の遺構と思われる。

平安時代の可能性がある遺構は、第５号掘立柱建物跡と第61号、69号土坑である。第５号掘立柱建物跡は高屋敷館遺跡南西地区に隣接した場所に位置し、東側に平安時代の第２号方形周溝、北側に平安時代の第１号井戸跡と時期不明の第65号土坑が隣接している。調査前は畑地であり、周辺には耕作時の柱や杭の跡が多数残っていたことや時期を決定することの判断材料がないことから時期不明としたが、平安時代の可能性がある。第61号、69号土坑は堆積土から土師器片が出土していることから、平安時代の可能性がある。

時期の不明な溝跡は25条検出されたが、大半の溝跡は縄文時代や平安時代の遺構を切って構築されており、平安時代よりは新しい可能性がある。このうち、大小の２条１組の溝が対になって検出されている溝跡がある。第１号溝跡（大きな溝跡）は幅幅90～144㎝、深さ70～100㎝、第２号溝跡（小さな溝跡）は幅約60㎝、深さ15～55㎝である。第２号溝跡は第１号溝跡から約20～70㎝離れて、並行して検出されている。同様な溝跡に第４号溝跡と第５号溝跡、第８号溝跡と第13号溝跡、第10号溝跡と第11号溝跡、第18号溝跡と第13号溝跡、第20号溝跡と第21号溝跡がある。このうち、第１号溝跡と第２号溝跡は第８号溝跡と第13号溝跡及び第20号溝跡と第21号溝跡は同一のものである可能性がある。このような大小二つの溝跡は本遺跡だけでなく、隣接する高屋敷館遺跡の南西地区や山元（2）遺跡でも検出されており、構築年代は不明であるが、いずれも平安時代の遺構よりは新しいことが確かめられている。（畠山）

引用・参考文献

三浦　圭介　1995　「北奥･北海道地域における古代防御性集落の発生と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第64集
三浦　圭介　1995　「青森県における古代末期の防御性集落」『考古学ジャーナル』387号
青森県教育委員会　1975　『近野遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第22集
青森県教育委員会　1978　『熊沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第38集
青森県教育委員会　1980　『大平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第52集
青森県教育委員会　1980　『大面遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第55集
青森県教育委員会　1984　『牛ヶ沢（3）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第86集
青森県教育委員会　1987　『山本遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第105集
青森県教育委員会　1992　『沢堀込遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第144集
青森県教育委員会　1994　『山元（3）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第159集
青森県教育委員会　1995　『松山・羽黒平（1）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第170集
青森県教育委員会　1995　『山元（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第171集
青森県教育委員会　1995　『野尻（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第172集
青森県教育委員会　1995　『熊ヶ平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第180集
青森県教育委員会　1996　『野尻（4）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
青森県教育委員会　1996　『野尻（2）遺跡Ⅱ・野尻（3）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
青森県教育委員会　1997　『高屋敷館遺跡発掘調査概報』青森県埋蔵文化財調査報告書第206集
青森県教育委員会　1998　『野尻（1）遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第234集
青森県教育委員会　1998　『高屋敷館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第243集
青森県教育委員会　2000　『隠川（4）遺跡・隠川（12）遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第244集
青森県教育委員会　1999　『野尻（1）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第259集
青森県教育委員会　2000　『野尻（1）遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第277集
青森県教育委員会　2000　『三内丸山遺跡ⅩⅤ』青森県埋蔵文化財調査報告書第283集
青森県教育委員会　2000　『青森県遺跡詳細分布調査報告書ⅩⅡ』青森県埋蔵文化財調査報告書第284集
青森県教育委員会　2000　『三内丸山遺跡ⅩⅥ』青森県埋蔵文化財調査報告書第288集
青森県教育委員会　2002　『畑内遺跡Ⅷ』青森県埋蔵文化財調査報告書第326集
青森県教育委員会　2003　『野尻（1）遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第351集
青森県教育委員会　2003　『岩渡小谷（3）･（4）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第352集
青森県教育委員会　2003　『宮元遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第359集
青森県教育委員会　2004　『野尻（1）遺跡Ⅵ・野尻（2）遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第366集
青森県教育委員会　2004　『岩渡小谷（4）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第371集
青森市蛍沢遺跡発掘調査団　1979　『蛍沢遺跡』
青森市教育委員会　2000　『熊沢遺跡』青森市埋蔵文化財調査報告書第48号
青森市教育委員会　2003　『稲山遺跡Ⅲ』青森市埋蔵文化財調査報告書第66号
浪岡町教育委員会　1985　『浪岡城Ⅶ』昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告書
浪岡町教育委員会　2004　『野尻（4）遺跡』浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第10集
五所川原市教育委員会　1998　『犬走須恵器窯跡発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第21集
五所川原市教育委員会　2000　『隠川（2）外遺跡』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第22集
五所川原市教育委員会　2003　『五所川原須恵器窯跡群』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集
野辺地町教育委員会　1996　『柴崎（1）遺跡』野辺地町文化財調査報告書第５集
七戸町教育委員会　1992　『作田遺跡』七戸町埋蔵文化財調査報告書第５集

表１　縄文時代住居跡観察表

番号	平面形	柱穴配置	面積(㎡)	長軸(m)	短軸(m)	備　　考
2	円形	2本柱	9.00	3.60	3.50	SI01と重複。柱穴は炉に近接。一部壁柱穴あり。
11	円形	2本柱	〈3.13〉	2.5	－	柱穴は炉に近接している。
28	円形	2本柱	〈4.98〉	3.9	－	計4個の柱穴を検出。炉に近接した2個1対の柱穴と、炉から30～40㎝離れている2個1対の柱穴
31	不明	2本柱	－	(4m前後)	－	SI30に切られる。炉を含む一部を検出。柱穴は炉に近接するが、炉からは14～20㎝離れる。
34	不明	2本柱	－	－	－	SI33に切られる。炉を中心とした部分を検出。炉と柱穴は50㎝離れる。
37	楕円形	2本柱	(5.35)	2.84	2.66	小型。柱穴は炉から20～28㎝離れる。柱穴ラインと長軸がずれる。中軸ラインは短軸方向。
38	楕円形	4本柱	(13.47)	4.52	(3.9)	SI38に切られる。炉は新旧2基。柱穴間は1.8m前後の間隔で4本が立つ。南壁に壁柱穴検出。
39	不明	2本柱？	－	(4m前後)	－	平安のSI32、SI36に切られる。SK49とも重複していると思われるが、新旧関係は不明。炉の南側の部分を検出。柱穴は炉に近接。柱の建て替え？
40	楕円形	2本柱	－	(4m前後)	3.2	東側不明。長軸方向は柱穴ラインとずれる。柱穴は炉に近接。SK51より古。
41	円形？	2本柱	〈6.70〉	3.55	〈2.84〉	東側不明。床面積は9㎡前後か。柱穴は炉に近接。
42	円形？	2本柱	－	－	(3.6)	東側が不明。柱穴は炉から50～76㎝離れる。
43	円形	2本柱	〈8.91〉	3.62	－	西端は調査区外。床面積は10㎡前後か。柱穴は30～46㎝炉から離れる。
47	楕円形	2本柱	－	(4m前後)	(3.4)	炉は破壊されている。SD03、SI36に切られる。SK53にも切られている可能性がある。柱穴ラインと長軸方向がずれる。

〈　〉は検出部分の現存値
(　)は推定

表２　縄文時代土坑観察表

遺構番号	グリッド	重複	平面形	断面形	開口部規模(㎝)	底面規模(㎝)	深さ(㎝)	備　　考
1	M-42	なし	円形	浅箱形	88×96	75×82	30	2個の浅鉢型土器。縄文後期、十腰内Ⅱ式。
2	M-41	なし	円形	浅箱型	105×110	84×95	24	後期土器片1。十腰内Ⅱ式。
9	M-39	なし	円形	フラスコ型	80×80	104×112	76	前期土器片1
10	L･M-39	なし	円形	フラスコ型	91×95	98×102	68	後期？土器片3。削器1
14	H-32	なし	円形	深箱型	78×80	62×63	86	円筒型の土坑。遺物なし
29	P-24	内壕より古	楕円形	フラスコ型？	－	－	40	半分以上を削平。前期土器片3。
31	Q-23	なし	円形	フラスコ型	115×120	140×150	40	前期土器片150ｇ出土。
49	O-33	SI36より古	楕円形	逆台形	〈97×118〉	80×80	(64)	SI36床下から検出。遺物なし。
51	O-34	SI40より新	円形	フラスコ型	61×71	71×74	42	遺物なし。
52	M-34	なし	円形	フラスコ型	77×81	90×98	72	前期土器片1
53	O-33	SI36より古	楕円形	逆台形	〈111×132〉	88×103	(73)	SI36床下から検出。前期土器片51。
68	F-1･2	なし	円形	浅箱形	－	〈370〉	40	底面が硬く締まっており住居の可能性が高い。
122	L-22	内壕より古	不明	フラスコ型	－	－	123	一部分を検出。前期土器片2。
123	K-13	SI20より古	楕円型	フラスコ型	〈140〉	〈140〉	35	中期末葉の粗製土器が完形個体で出土

〈　〉は現存値

表３　縄文時代溝状土坑観察表

遺構番号	グリッド	開口部規模(cm)		底面規模(cm)		深さ	長軸方向	遺　　物	重　複　等
		短軸	長軸	短軸	長軸	(cm)			
1	H-69	57～67	228	12～30	250	80	N-63°-W	なし	SD05より古。
2	K-54	87～98	257	25～42	268	115	N-52°-E	なし	
3	M-54･55	35～54	300	11～26	326	112	N-36°-E	なし	
4	H-65	30～43	278	11～23	293	92	N-71°-E	なし	
5	H-44	30～41	296	11～37	305	72	N-64°-W	なし	
6	J-35･36	20～30	263	8～22	288	73	N-0°	なし	道跡より古。
7	L-33	45	337	8～13	346	68	N-87°-E	なし	SD01･02より古。
8	M･N-31	65～92	350	20～30	440	142	N-78°-W	円筒下層a127(1348g)。削器1	
9	H-35	60～72	286	24～36	314	114	N-82°-E	縄文1(31g)	SD09より古。
10	G･H-37	〈56〉	〈90〉	〈30〉	〈110〉	120	N-84°-W	なし	SV11より新。
11	G･H-37	26	〈355〉	14	〈363〉	87	N-23°-E	なし	SD10より古。
12	N･O-56	25～45	335	10～15	345	65	N-20°-E	なし	
13	O-55	25～40	160	10	200	100	N-0°	なし	
14	N･O-72	38	433	18	484	96	N-88°-E	なし	
15	N-20	35	375	15	415	125	N-115°-E	縄文土器(1200g)。削器1点	SI08より古い。
16	S･T-20	35	335	20	410	85	N-70°-E	なし	
17	J-15･16	18～50	275	10～35	340	90	N-160°-E	なし	
18	D-24	20	325	15	330	60	N-0°	なし	
19	N･O-18･19	40	270	15	335	120	N-50°-E	縄文土器(0.5g)	
20	M･N-22	46	336	25	422	115	N-47°-W	縄文2(133g)	
21	M･N-27	35～54	343	20～28	370	138	N-83°-W	縄文27(503g)。石鋸1	
22	J･K-5	90	〈305〉	40	〈320〉	100	N-35°-E	縄文土器(500g)	SI13より古い。
23	J-8	45	250	15	290	90	N-110°-E	なし	SI21･SD31より古い。
24	M･N-14	60	〈335〉	15	350	80	N-150°-E	縄文土器1点	SD23･SD25より古い。
25	N-11	40～65	330	20～40	360	120	N-15°-E	なし	SI14より古い。
26	K･L-15	35～45	〈210〉	15～30	235	100	N-115°-E	なし	SD23(外壕)より古い。
27	H-18	28	238	8～20	280	102	N-34°-W	なし	
28	C-37	45	328	15～20	356	88	N-78°-E	なし	
29	R-26	〈29〉	〈114〉	〈20〉	〈100〉	102	N-80°-E	なし	内壕(SD22)より古。
30	K-17	45	〈310〉	23～40	〈350〉	120	N-45°-W	縄文4(48g)	外壕(SD23)SI16より古。
31	K-18･19	54	312	35	356	90	N-85°-E	縄文61(903g)	
32	F-3	25	〈195〉	15	220	70	N-60°-E	なし	
33	Q-16･17	40	325	15	335	80	N-80°-E	縄文土器(0.3g)。剥片1点	SI06･SK19より古い。
34	E-20	35～50	218	6～20	242	85	N-22°-E	なし	
35	H-6･7	105	290	30	305	100	N-30°-E	なし	
36	F･G-11	20～60	210	10～30	205	100	N-0°	なし	
37	G･H-10	35～55	370	25～50	360	55	N-60°-E	なし	SD26より古。
38	G･H-11	20	280	15	275	50	N-80°-E	なし	SD26より古。
39	F･G-18	〈30～44〉	〈316〉	16～30	342	〈80〉	N-33°-W	下層a14(168g)	周辺の住居より古。
40	F-18	〈31～42〉	〈137〉	25～75	〈178〉	〈75〉	N-78°-W	なし	SI51より古。風倒木で半分破壊。
41	E-14	50～72	385	30～43	442	105	N-71°-E	縄文3(57g)	
42	L-9	30	330	20	320	70	N-55°-E	なし	SI15より古。
43	D-24	20	325	15	330	60	N-85°-E	なし	SD39より古。
44	D-16･17	33～63	381	16～40	472	114	N-23°-W	縄文1(143g)	
45	D･E-16	38～61	372	20～39	357	108	N-48°-E	縄文2(47g)	SD03より古。
46	Q-28	33	〈222〉	18	〈250〉	115	N-90°-E	なし	外壕(SD23)、SD28より古。
47	B-17･18	90	〈290〉	15	265	130	N-140°-E	なし	SD40より古。
48	H･I-25	40～52	323	12～20	336	118	N-43°-E	縄文10(174g)	SD03より古。
49	C-19	40～62	358	16～40	445	105	N-18°-W	縄文2(55g)	
50	F･G-12･13	25～40	340	20	340	60	N-10°-E	なし	SI65･67より古い。
51	OY-17･18	45	320	30	300	35	N-25°-E	なし	SK125より古。
52	A-16	40	〈70〉	15	〈55〉	60	N-110°-E	なし	SK107･SD-47より古。

表４　縄文土器観察表

図	番号	整理	遺構名	位置	層位	時期	部位	外　部　文　様	内面調整	備　　考
11	1	4	SI02		4層	Ⅱ群	口縁	(口縁)単絡1横回, 隆帯, 隆帯際結節横回(胴部)RLR斜回	ミガキ	p-57
11	2	5	SI02		3層	Ⅱ群	口縁	(口縁)結節横回, 隆帯(隆帯上)結節横回(胴部)不明	ミガキ	p-16
11	3	6	SI02		覆土	Ⅱ群	頸部	(口縁)結節横回, 隆帯(隆帯上)結節横回(胴部)不明	ナデ	
11	4	3	SI02		床直	Ⅱ群	胴部	底径8.8cm(胴部)単絡1縦回(底面付近)ミガキ	ナデ	p-59
11	5	2	SI02		1層	Ⅱ群	胴部	単絡1縦回		p-58
11	6	1	SI02		1層	Ⅱ群	底部	単絡1縦回		p-58
12	1	7	SI11		1層	Ⅱ群	口縁	口唇際にLR側圧, (口縁)結節横回	ミガキ	
13	2	8	SI31		覆土	Ⅱ群	底部	底径(5.6cm), 単絡1斜回	ナデ	p-2、ミニチュア底部
17	1	10	SI38		床面	Ⅱ群	口縁	口径29.8cm(口縁)結節横回, 隆帯(胴部)RL斜回	口唇付近ミガキ	p-77
17	2	14	SI38		床直	Ⅱ群	口縁	(口縁)結節横回, 隆帯(隆帯上)結節横回(胴部)RL斜回	ミガキ	p-84
17	3	15	SI38		覆土	Ⅱ群	口縁	(口縁)結節横回, 微隆帯(隆帯上)指頭圧(胴部)LR横～斜回	ミガキ	p-19
17	4	19	SI38		覆土	Ⅱ群	口縁	(口縁)結節横回, 隆帯(胴部)RLR斜回？	ミガキ	p-82
17	5	16	SI38		覆土	Ⅱ群	口縁	(口縁)結節横回, 隆帯, 隆帯下結節横回, (胴部)単絡1？縦回	ミガキ	p-145
17	6	17	SI38		覆土	Ⅱ群	口縁	(口縁)R直前段反横回, 隆帯(隆帯及び胴部)R直前段反横回	ミガキ	p-33
17	7	98	SI38		床直	Ⅱ群	口縁	(口唇)結節回転(口縁, 隆帯上)結節横回, 隆帯(胴部)RLR斜回	ナデ	p-158
17	8	22	SI38		覆土	Ⅱ群	口縁	単絡1横回, 隆帯直下結節横回	ミガキ	
17	9	20	SI38		覆土	Ⅱ群	頸部	(隆帯上)RL横回(胴部)RLR斜回	ミガキ	p-51
17	10	21	SI38		覆土	Ⅱ群	頸部	隆帯(胴部)RLR横回	ミガキ	p-98
17	11	25	SI38		覆土	Ⅱ群	頸部	結節横回, 隆帯(隆帯上)沈線	ミガキ	
17	12	97	SI38	pit4	覆土	Ⅱ群	口縁	(口唇)RL側圧(口唇下)r側圧, RL側圧, 結節横回	ミガキ	
17	13	23	SI38		覆土	Ⅱ群	口縁	RLR側圧	不明	
17	14	18	SI38		覆土	Ⅱ群	口縁	LRL横回	ミガキ	p-72
17	15	26	SI38		覆土	Ⅱ群	胴部	単絡6縦回	ミガキ	
17	16	30	SI38		覆土	Ⅱ群	胴部	結束1羽状横回	ナデ	
17	17	13	SI38		覆土	Ⅱ群	胴部	単絡1縦回		p-30
17	18	11	SI38		覆土	Ⅱ群	胴部	(底径)9cm(胴部)結節横(底部)結節回転	ミガキ	p-73
17	19	32	SI38		床直	Ⅱ群	底部	底径(8.4cm), (胴部)RLR横(底部)RLR回転	ミガキ	p-106
17	20	31	SI38		覆土	Ⅱ群	胴部	底径(10.4cm)(胴部)RLR横(底面)RLR回転	ミガキ	p-144
17	21	33	SI38		覆土	Ⅱ群	底部	底径(8.4cm)(胴部)RLR横回	ナデ	p-49
19	1	35	SI39		覆土	Ⅱ群	胴部	RL横回	ナデ	
19	2	36	SI39	pit4	覆土	Ⅱ群	胴部	RL横回	ミガキ	
19	3	37	SI39		覆土	Ⅱ群	胴部	単絡1(RL)縦回	ミガキ	
19	4	34	SI39		覆土	Ⅱ群	胴部	単絡1(RL)縦回	ミガキ	p-28
20	1	38	SI40		覆土	Ⅱ群	口縁	(口縁～胴部)RLR横, 斜回, 微隆帯		p-10
20	2	40	SI40		覆土	Ⅱ群	口縁	(口縁)RLR横回, 隆帯(隆帯上)剥落(胴部)LR横回	ミガキ	p-26
20	3	45	SI40		覆土	Ⅱ群	胴部	RLR斜回	ミガキ	p-8
20	4	44	SI40		覆土	Ⅱ群	口縁	RLR横回	ミガキ	p-33
20	5	46	SI40		覆土	Ⅱ群	胴部	RLR横回	ミガキ	p-2
20	6	39	SI40		覆土	Ⅱ群	胴部	RLR斜回		p-6
20	7	46	SI40		覆土	Ⅱ群	底部	底径(14.4cm), (胴部)単絡1縦回(底面)単絡1回転	ナデ	p-1
21	2	47	SI41		確認面	Ⅱ群	口縁	結節横回	ミガキ	
21	3	50	SI41		確認面	Ⅱ群	胴部	単絡1縦回	ナデ	
21	4	49	SI41		確認面	Ⅱ群	胴部	RL斜回	ナデ	
23	1	54	SI43		覆土	Ⅱ群	底部	(胴部)単絡1縦回, 底面付近単絡1横回		p-2
24	1	55	SI47		覆土	Ⅱ群	口縁	(口縁)単絡1横回, 隆帯下RL側圧, 隆帯(胴部)単絡1縦回, 補修孔		p-3
24	2	57	SI47		床面	Ⅱ群	口縁	(口縁)結節横回, 隆帯(胴部)単絡1縦回	ミガキ	p-7
24	3	56	SI47		覆土	Ⅱ群	胴部	(口縁)結節横回(胴部)RLR横回	ミガキ	p-6
24	4	58	SI47		覆土	Ⅱ群	底部	底径(12.0cm)(胴部)単絡1縦(底部)RLR回転	ミガキ	p-1
26	1	202	SK1		床直	Ⅶ群	完形	口径19.5cm, 器高8.4cm, 底径4.7cm(文様構成)文様帯→ミガキ(文様帯)地文LR横回施文→文様帯区画の上方沈線→文様帯内の斜行沈線→下方の沈線	ナデ	p-2
26	2	203	SK1		床面	Ⅶ群	完形	口径24.4cm, 器高9.4cm, 底径6.0cm(文様構成)文様帯→ミガキ(文様帯)地文LR横回→文様帯区画の上方沈線→文様帯内の沈線→下方の沈線	ナデ	p-3
26	3	173	SK2		覆土	Ⅶ群	口縁	地文(LR斜回)→沈線, 胎土に小礫混入	ミガキ	p-1
26	4	60	SK9		覆土	Ⅱ群	胴部	RL斜回	ナデ	
26	5	61	SK10		覆土	Ⅱ群	胴部	RLR横回	ミガキ	

図	番号	整理	遺構名	位置	層位	時期	部位	外　部　文　様	内面調整	備　　考
26	6	63	SK123		覆土	Ⅳ群	完形	口径22.4cm、器高34.9cm、底径(9.6cm)、折り返し口縁,(胴部)RLR縦回(底面)ミガキ		J-14と接合
33	1	65	SV8		覆土	Ⅱ群	胴部	単絡1縦回	ミガキ	
33	2	64	SV8		覆土	Ⅱ群	胴部	RLR横回	ナデ	
33	4	67	SV15		覆土	Ⅱ群	胴部	LRL斜回	ナデ	
33	6	71	SV19		覆土	Ⅱ群	口縁	結節横回	ミガキ	
33	7	72	SV19		覆土	Ⅱ群	胴部	RLR斜回	ミガキ	
33	8	68	SV19		2層	Ⅱ群	頸部	(口縁)結節横回,微隆帯(隆帯上)結節端部側圧(隆帯下)結節横(胴部)RL横～斜回	ミガキ	p-1
33	9	70	SV19		3層	Ⅱ群	胴部	LR斜回	ミガキ	p-5整69と同一
33	10	73	SV20		1層	Ⅱ群	胴部	(隆帯上)結節横回(胴部)RL斜回	ミガキ	p-2
34	11	74	SV21		覆土	Ⅱ群	胴部	単絡1縦回	ナデ	
34	12	75	SV21		1層	Ⅱ群	胴部	RLR横回	ミガキ	
34	13	77	SV21		1層	Ⅱ群	底部	(底径)5.5cm(底面)RL回転	不明	
34	14	76	SV21		1層	Ⅱ群	胴部	RLR斜回	ミガキ	
34	16	79	SV30		覆土	Ⅱ群	口縁	結節横回	ミガキ	
34	17	83	SV31		覆土	Ⅱ群	胴部	単絡1斜回	ナデ	
34	18	81	SV31		覆土	Ⅱ群	口縁	(口唇)単絡1回転(口縁)単絡1横回,隆帯(隆帯上)単絡1回転(胴部)単絡1縦回	ナデ	80と同一
34	19	86	SV33		覆土	Ⅱ群	胴部	RL横,斜回	ミガキ	
34	20	85	SV33		覆土	Ⅱ群	胴部	RL斜回	ミガキ	
34	21	88	SV39		覆土	Ⅱ群	口縁	(口唇)単絡1回転(口縁)口唇直下RL側圧、上半分単絡1(r)横回,下半分単絡1(R)横回	ミガキ	
34	22	87	SV39		覆土	Ⅱ群	口縁	結節横回	ナデ	
34	23	89	SV41		覆土	Ⅱ群	胴部	RLR斜回	ミガキ	
34	24	90	SV44		覆土	Ⅱ群	胴部	単絡1縦回	ミガキ	
34	25	91	SV45		覆土	Ⅱ群	口縁	結節横回	ミガキ	
34	26	94	SV49		覆土	Ⅱ群	口縁	結節横回	ミガキ	
35		96	1号埋設			Ⅱ群	胴部	底径10.6cm(胴部)RL斜回		
37	1	143	SI06	カマド	底面	Ⅰ群	胴部	(表面)ミガキ	RL斜回	
37	2	137		L-24	Ⅲ層	Ⅱ群	口縁	(口径)25.4cm(口縁)RL横回(隆帯)RLR横回(胴部)RLR横,斜回	ミガキ	
37	3	112	SI36		覆土	Ⅱ群	口縁	結節横回	ナデ	SI33と接合
37	4	119	SD03		覆土	Ⅱ群	口縁	結節横回,隆帯	ミガキ	p-34
37	5	102	SI03	pit6	覆土	Ⅱ群	口縁	結節横回,隆帯(隆帯下)結節横回	口唇付近ミガキ	
37	6	103	SI08		覆土	Ⅱ群	口縁	結節横回	ミガキ	
37	7	123	SD23	N-25	下位層	Ⅱ群	口縁	(口縁)結節横回,隆帯(胴部)隆帯下結節横回,沈線？RL横回	ナデ、繊維剥落痕	
37	8	110	SI29		床面	Ⅱ群	口縁	結節横回,隆帯(隆帯下)結節横回	ミガキ	p-1
37	9	99	SI01		覆土	Ⅱ群	口縁	結節横回→横走沈線,隆帯	ミガキ	p-58
37	10	140		L-24	Ⅰ層	Ⅱ群	口縁	(口縁)結節横回(隆帯)竹管工具刺突(胴部)RL斜回	ミガキ	K-23と接合
37	11	130		K-34	Ⅲ層	Ⅱ群	口縁	(口縁)結節横回,隆帯,隆帯下結節横回,(胴部)RLR斜回	ミガキ	L-33と接合
37	12	125		L-31	Ⅲ層	Ⅱ群	口縁	(口縁)結節横回,微隆帯(隆帯)竹管工具刺突,隆帯の上下に横走沈線(胴部)単絡1縦回	ミガキ	補修孔
37	13	116			覆土	Ⅱ群	口縁	結節横回(胴部)RL横回	ナデ	
37	14	100	SI01	カマド	覆土	Ⅱ群	口縁	結節横回	口唇付近ミガキ	
37	15	141		M-30	Ⅰ層	Ⅱ群	口縁	結節横回→RL縦位に側圧	ミガキ	
37	16	120	SD22	K-22	上位層	Ⅱ群	口縁	(口唇)RL側圧(口縁)口唇際RL側圧,単絡1横回	口唇付近ミガキ	
37	17	135		K-23	Ⅰ層	Ⅱ群	口縁	(口唇)単絡回転(口縁)口唇際RLR側圧,単絡1横回,隆帯,隆帯の上下にRLR側圧(胴部)単絡1縦回	ナデ、繊維剥落痕	
37	18	118	SK53		覆土	Ⅱ群	口縁	単絡1横回	ミガキ	
37	19	131		K-23	Ⅲ層	Ⅱ群	口縁	(口縁)単絡1横回,RL側圧で胴部文様帯と区画(胴部)単絡1縦回	ミガキ、繊維剥落痕	
37	20	101	SI03		覆土	Ⅱ群	口縁	口唇際にRL側圧、単絡1横回	口唇付近ミガキ	
37	21	126		E-22	Ⅱ層	Ⅱ群	口縁	単絡1斜回	口唇付近ミガキ	
38	22	121	SD22	L-18	1層	Ⅱ群	口縁	単絡1横回	ミガキ	
38	23	134		N-23	Ⅰ層	Ⅱ群	口縁	(口唇)RL側圧(口縁)単絡1横回→縦回(胴部)単絡1斜回	ナデ	
38	24	127		E-23	Ⅱ層	Ⅱ群	口縁	単絡5横回	口唇付近ミガキ	
38	25	109	SI27		覆土	Ⅱ群	口縁	(口唇)単絡回転(口縁)単絡6A横	ミガキ	

図	番号	整理	遺構名	位置	層位	時期	部位	外　部　文　様	内面調整	備　　考
38	26	138		B-23	Ⅱ層	Ⅱ群	口縁	口径(15.6cm)2個1対の小波状口縁(口縁)口唇際単絡1斜回,単絡6A横回(隆帯)単絡1横回(胴部)単絡1縦回	ミガキ	B-29、C-23、D-22、E-22、E-24と接合
38	27	129		E-25	Ⅱ層	Ⅱ群	口縁	口唇際半裁竹管刺突,横走沈線,LR側圧	ミガキ	
38	28	122	SD23	N-24	底面	Ⅱ群	口縁	(口唇)RL側圧(口縁)RL側圧	ナデ	
38	29	107	SI15		覆土	Ⅱ群	口縁	底径(16.8cm),(胴部)RLR斜回	ミガキ	SI20覆土、K-11 Ⅰ層と接合
38	30	144	SD39	40トレ		Ⅲ群	頸部	隆帯,隆帯上RL回転,隆帯下U字状になるようにRL回転施文	不明	
38	31	177	SI08		覆土	Ⅳ群	口縁	単絡1(LR)縦回	ナデ	
38	32	176	SI03		覆土	Ⅳ群	口縁	LR縦回	ナデ	
38	33	180	SK26		覆土	Ⅳ群	口縁	LR縦回	ミガキ	
38	34	179		L-32	Ⅱ層	Ⅳ群	口縁	格子状沈線	ナデ,煤付着	
38	35	158		U-22	Ⅰ層	Ⅴ群	胴部	細隆帯,隆帯上刺突(先尖状工具),(胴部)地文LR斜回→沈線→ミガキ	ナデ	
38	36	149	SD22		覆土	Ⅴ群	胴部	細隆帯,隆帯上刺突(棒状工具),(文様帯)沈線→LR斜回	ナデ	
38	37	145	SD19		上位層	Ⅴ群	口縁	細隆帯口唇際に2本,その下に弧状に隆帯,隆帯上刺突	ミガキ	SD22と接合
38	38	174		B-17	Ⅰ層	Ⅴ群	胴部	RL斜回→沈線	ミガキ	
38	39	154		J-14	Ⅰ層	Ⅴ群	口縁	RL斜回→沈線	ミガキ	
38	40	161		D-24	Ⅱ層	Ⅵ群	口縁	波状口縁,口唇下2条の沈線,S字状入組文	ミガキ	
38	41	167	SD23	K-17	上位層	Ⅵ群	胴部	入組文	ナデ	
38	42	164		D-24	Ⅱ層	Ⅵ群	口縁	馬蹄状沈線,弧状沈線	ミガキ	
38	43	163		D-24	Ⅱ層	Ⅵ群	口縁	弧状文	ミガキ	
38	44	172		K-14	Ⅰ層	Ⅵ群	胴部	多条沈線文(極細)	ナデ	
38	45	183		Q-81	Ⅰ層	Ⅶ群	口縁	口唇際RL側圧,2本の平行沈線,瘤状突起	ナデ	
38	46	182		Q-81	Ⅰ層	Ⅶ群	口縁	口唇際RL側圧,2本の平行沈線,瘤状突起	ナデ	
38	47	184		M-33	Ⅰ層	Ⅶ群	口縁	口唇際瘤状突起,突起下2本の平行沈線,LR横回	不明	
38	48	190	SD35		覆土	Ⅶ群	口縁	0段多条LR縦回	ナデ	
38	49	185	SI06		1層	Ⅷ群	口縁	2本の平行沈線,RL横、斜回	ナデ	
38	50	186	SD22	S-23	3層	Ⅷ群	胴部	3本の平行沈線,LR横回	ナデ	
38	51	195	SD28	Q-28	覆土	Ⅷ群	口縁	LR横、斜回,胎土に黄色浮石混入	ナデ	
38	52	194	SD23	P-27	中位層	Ⅷ群	口縁	LR横回,胎土に黄色浮石混入	ナデ	
38	53	191	SD46		覆土	Ⅷ群	口縁	LR横回	ナデ	
38	54	200		P-84	Ⅱ層	Ⅷ群	口縁～底部	LR横回	ナデ	
38	55	189		M-29	Ⅱ層	Ⅸ群	口縁	口唇刻み,RL側圧,RL斜回	ナデ	
38	56	199	SI03		覆土	Ⅸ群	胴部	刺突,沈線	ナデ	
38	57	198		P-20	Ⅰ層	Ⅸ群	胴部	地文施文→沈線	ナデ	
38	58	201	SD23	I-22	覆土	Ⅸ群	口縁～底	口唇刻み,2条平行沈線,RL横回	ナデ	

表５　遺構内出土石器観察表

図	番号	委	器種	遺構名	グリット	層位	石　質	計測値(㎜)			重さ(g)	所　　見	備考
								長さ	幅	厚さ			
13	1	98	敲き石	SI31		覆土	安山岩	9.5	7.3	3.9	417.3	s-1	
18	1	5	無茎鏃	SI38		覆土	珪　頁	24.3	13.8	4.1	1.3	s-12	03
18	2	6	無茎鏃	SI38		覆土	珪　頁	42.5	19.1	6.5	4.2		03
18	3	28	縦型石匙	SI38		覆土	珪　頁	56.4	24.5	10.1	12.1	s-9	03
18	4	26	縦型石匙	SI38		覆土	珪　頁	76.9	32.0	8.2	19.5	裏面左側縁に弱い光沢	03
18	5	27	縦型石匙	SI38		覆土	珪　頁	82.0	30.3	10.7	15.3		03
18	6	21	半　扁	SI38		覆土	安山岩	(8.7)	(8.0)	(1.8)	(182.7)	s-8,側縁敲打整形	
18	7	39	半　扁	SI38		覆土	安山岩	(8.4)	(7.4)	(2.5)	(188.7)	s-4	
18	8	100	敲き石	SI38		覆土	安山岩	14.5	8.2	5.7	630.4	s-12,凹み	
18	9	101	敲き石	SI38		床面	安山岩	15.9	14.5	(11.3)	(3479.3)	s-5	
21	1	43	横型石匙	SI41		床面	珪　頁	39.4	65.3	8.5	18.1	裏面全体に強い光沢	03
33	3	39	石　錐	SV08		覆土	珪　頁	92.5	49.6	13.3		端部摩滅	02
33	5	64	削器Ⅰ	SV15		1層	珪　頁	99.6	47.9	20.1	75.4	s-1,裏面側縁に弱い光沢	03
34	15	67	半　扁	SV21		11層	安山岩	(8.5)	(10.0)	(1.9)	(195.7)	s-1	

表６　遺構外出土石器観察表

図	番号	委	器種	遺構名	グリット	層位	石　質	計測値(㎜)			重さ(g)	所　　見	備考
								長さ	幅	厚さ			
39	1	3	無茎鏃		O-33	Ⅰ層	珪　頁	36.2	16.8	5.5	2.9		03
39	2	28	無茎鏃		M-35	Ⅰ層	珪　頁	29.6	13.8	4.5	1.6		02
39	3	14	無茎鏃		L-29	Ⅲ層	珪　頁	45.3	15.5	5.4	2.9	被熱	02
39	4	13	無茎鏃	SI36		覆土	黒曜石	(18.9)	18.2	3.8	(1.5)		03
39	5	1	無茎鏃	SD22	O-27	上位	珪　頁	20.7	13.7	3.2	0.8	被熱	03
39	6	4	無茎鏃		K-28	Ⅰ層	珪　頁	(43.5)	18.3	5.0	(3.7)		03
39	7	2	無茎鏃	SI38		覆土	珪　頁	32.9	15.1	4.0	1.5		03
39	8	9	無茎鏃		H-32	Ⅱ層	珪　頁	30.7	14.0	3.9	1.6	被熱	02
39	9	15	無茎鏃		L-30	Ⅰ層	珪　頁	26.4	14.1	3.3	1.0		02
39	10	23	無茎鏃		M-30	Ⅰ層	珪　頁	27.7	14.1	4.2	1.5		02
39	11	9	無茎鏃		R-19	Ⅳ層	珪　頁	32.1	14.4	4.0	1.5		03
39	12	8	無茎鏃	SD22	M-22	上位	珪　頁	(39.4)	12.3	4.7	(2.2)		03
39	13	7	無茎鏃	SD23	M-13	覆土	玉　随	30.2	17.8	4.8	2.6		03
39	14	10	有茎鏃	SD22	R-25	14層	珪　頁	29.2	14.3	5.2	1.5	基部にアスファルト付着	03
39	15	11	有茎鏃		I-40	Ⅲ層	珪　頁	41.3	15.3	6.1	3.2		02
39	16	11	有茎鏃		H-09	Ⅰ層	玉　随	41.7	16.4	6.0	3.2		03
39	17	12	有茎鏃		L-26	Ⅰ層	黒曜石	30.7	21.4	9.8	4.2		03
39	18	18	石　槍		L-31	Ⅰ層	珪　頁	41.7	25.7	12.8	35.3	側縁ギザギザ,端部付近の稜摩滅,弱い光沢あり	02
39	19	15	石　槍	SD22	M-23	8層	珪　頁	105.2	28.3	18.9	52.0	側縁ギザギザ	03
39	20	14	石　槍	SI25		床直	珪　頁	93.7	30.4	17.2	43.9	s-1,被熱,側縁ギザギザ,縁辺ツブレ	03
39	21	21	石　槍		L-34	Ⅰ層	珪　頁	106.3	33.6	19.9	66.6	側縁ギザギザ,縁辺下位にツブレ	02
39	22	17	石槍破損品	SD22	Q-14	中位	珪　頁	(80.6)	34.1	18.8	(50.4)	側縁ギザギザ	03
39	23	19	石槍破損品		M-26	Ⅰ層	珪　頁	(40.6)	(27.0)	15.2	(15.3)	側縁ギザギザ	03
39	24	55	石槍破損品		O-17	Ⅰ層	珪　頁	(42.4)	(37.9)	12.6	(21.0)	槍の破損品	03
39	25	16	石　槍		B-21	Ⅱ層	黒曜石	68.8	25.6	9.4	12.0	左辺先端部に細かな押圧剥離,右辺上位には連続する微細剥離,スクレイパーに転用	03
39	26	18	石槍破損品		O-29	Ⅰ層	珪　頁	(80.2)	(48.8)	16.1	(56.6)	破損部に加工痕,スクレイパーに転用？薄手	03
39	27	20	石槍破損品		O-28	Ⅰ層	珪　頁	(55.4)	(42.3)	10.0	(27.3)	左辺下位の縁辺に見られる剥離稜摩滅,弱い光沢,スクレイパーに転用	03
40	28	32	縦型石匙	SD23		上位	珪　頁	65.5	26.4	16.3	17.1	裏面全体に弱い光沢	03
40	29	27	縦型石匙		M-34	Ⅲ層	珪　頁	64.2	(30.5)	8.8	(16.5)	裏面全体に光沢	02
40	30	38	縦型石匙		O-30	Ⅰ層	珪　頁	65.9	19.2	10.3	9.3	両側縁に連続する微細剥離	03
40	31	36	縦型石匙		N-26	Ⅰ層	珪　頁	77.9	22.5	9.5	12.2	裏面全体に強い光沢,両側縁に微細剥離	03
40	32	29	縦型石匙	SD03	P-35	覆土	珪　頁	94.7	27.2	15.3	22.1	裏面右側縁上位を除いてほぼ全体に弱い光沢,右側縁中位が最も強い。両側縁下位に連続する微細剥離	03
40	33	35	縦型石匙	SD03	M-35	Ⅰ層	珪　頁	92.3	21.9	13.6	18.1	S-5。両側縁に微細剥離,裏面全体に光沢	02
40	34	8	縦型石匙	SD03	N-32	Ⅱ層	珪　頁	84.2	24.6	16.8	19.2	S-1,裏面下半部に強い光沢,両側縁に微細剥離	02
40	35	42	縦型石匙		表採		珪　頁	86.5	25.5	9.3	19.9	裏面全体に強い光沢	03
40	36	40	縦型石匙		P-31	Ⅰ層	珪　頁	71.5	27.4	9.8	14.5	裏面全体に弱い光沢,両側縁に微細剥離	03
40	37	41	縦型石匙		Q-31	Ⅰ層	珪　頁	72.2	19.5	9.1	8.8	裏面下位に弱い光沢。端部再加工,錐に転用か？	03
40	38	12	縦型石匙		J-35	Ⅰ層	珪　頁	73.6	27.9	10.4	16.7		02
40	39	31	縦型石匙	SD23	I-19	上位	珪　頁	88.8	38.2	11.0	23.3	左側縁に微細剥離	03
40	40	34	縦型石匙		D-25	Ⅱ層	珪　頁	76.2	33.1	10.8	18.4	裏面全体に弱い光沢	03
40	41	25	縦型石匙	SI36		覆土	珪　頁	64.9	33.5	8.4	12.4	裏面左側縁に強い光沢	03
40	42	39	縦型石匙		P-29	Ⅰ層	珪　頁	68.6	28.4	8.2	13.2	横長剥片素材,つまみは末端部に作出。右側縁下位に光沢	03
40	43	33	縦型石匙		D-24	Ⅱ層	珪　頁	68.5	34.2	11.8	20.9	右側縁に微細剥離,被熱	03
40	44	24	縦型石匙	SI36		覆土	珪　頁	77.0	41.2	9.6	25.6	裏面全体に弱い光沢,左側縁の縁辺摩滅,右辺微細剥離	03
40	45	37	縦型石匙		O-19	Ⅰ層	珪　頁	63.3	34.2	10.9	16.8	裏面左側縁に弱い光沢	03
41	46	22	縦型石匙	SI20		覆土	珪　頁	55.7	32.0	8.0	12.7		03
41	47	30	縦型石匙	SD22	L-22	1層	珪　頁	49.5	32.7	10.1	9.1		03
41	48	2	縦型石匙	SI01		1層	珪　頁	(47.2)	44.0	9.6	(23.1)	S-4,破損品	02
41	49	29	縦型石匙		N-30	Ⅰ層	珪　頁	(36.0)	(26.3)	10.7	(11.0)		02
41	50	35	縦型石匙		M-19	Ⅰ層	珪　頁	42.8	38.4	7.0	8.6	裏面下側縁に光沢	03
41	51	46	横型石匙		R-27	Ⅰ層	珪　頁	40.6	(50.1)	6.9	(12.3)	裏面下側縁に弱い光沢	03
41	52	45	横型石匙	SD25	J-21	覆土	珪　頁	40.6	52.7	7.2	11.8	裏面下側縁縁辺に光沢	03
41	53	44	横型石匙	SD22	S-25	上位	珪　頁	35.6	53.7	10.1	12.6	裏面下側縁縁辺に光沢	03
41	54	19	横型石匙		L-31	Ⅲ層	珪　頁	34.6	64.1	12.8	18.1	縦長剥片使用	02

図	番号	委	器種	遺構名	グリット	層位	石　質	計測値(㎜)			重さ(g)	所　　見	備考
								長さ	幅	厚さ			
41	55	23	石匙破損品	SI33		覆土	珪　頁	(57.3)	18.7	7.6	(10.2)		03
41	56	4	石匙破損品	SD01	L-30	覆土	珪　頁	64.2	22.0	8.5	14.9	左辺縁辺摩滅,つまみ欠損部に再加工	02
41	57	47	石　篦	SD23	I-21	上位	珪　頁	88.8	36.0	12.8	39.6	刃部端摩滅	03
41	58	48	石　篦	SI01		床面	珪　頁	82.2	44.8	14.3	43.2	s-13,刃部端摩滅,刃部両面に光沢。側縁に弱い抉り,抉り部の器面には光沢。装着痕の可能性あり	03
41	59	50	石　錐		OX-22	Ⅱ層	珪　頁	(73.5)	(26.1)	13.3	(18.8)	先端部弱い摩滅	03
41	60	30	石　錐		N-30	Ⅲ層	珪　頁	(42.8)	(14.6)	8.3	(4.3)		02
41	61	77	石　錐		O-34	Ⅰ層	珪　頁	(76.0)	(23.6)	14.9	(13.5)	頂部端摩滅,錐	03
41	62	74	石　錐		N-26	Ⅲ層	珪　頁	101.2	31.1	18.2	31.4	端部に光沢,頂部端摩滅,錐	03
41	63	1	異形石器	SI01		確認面	珪　頁	64.0	22.0	6.8	6.9		02
41	64	51	異形石器	SI04		1層	珪　頁	77.8	24.6	9.9	15.1	s-1	03
42	65	79	掻　器			表採	珪　頁	77.4	40.3	16.3	57.4	側縁一部摩滅	03
42	66	76	掻　器		O-30	Ⅰ層	珪　頁	78.0	32.2	14.9	46.8	側縁摩滅,一部刃部端摩滅	03
42	67	49	掻　器	SD22		覆土	珪　頁	66.9	84.7	20.3	98.0		03
42	68	37	掻　器	SI01	pit3	1層	珪　頁	62.7	35.8	14.2	25.5		02
42	69	21	削器Ⅰ	SI10		覆土	珪　頁	76.1	26.6	11.1	23.3	両面調整,裏面側縁中位に加工が密に行われ,その縁辺は潰れる	03
42	70	57	削器Ⅰ		P-31	Ⅰ層	珪　頁	(68.5)	34.2	20.0	(52.3)		03
42	71	52	削器Ⅰ		J-25	Ⅲ層	珪　頁	90.4	42.3	15.1	51.4	左辺に刃つぶし加工	03
42	72	56	削器Ⅰ		O-34	Ⅰ層	珪　頁	44.4	47.6	12.7	31.1	下側縁に微細	03
42	73	22	削器Ⅰ		L-34	Ⅲ層	珪　頁	33.9	21.6	8.2	5.7		02
42	74	71	削器Ⅰ		E-23	Ⅱ層	珪　頁	(141.6)	47.4	24.2	(161.3)	右辺に微細	03
42	75	54	削器Ⅰ		N-25	Ⅰ層	珪　頁	62.6	38.8	12.5	27.8		03
42	76	69	削器Ⅰ	SD23	O-26	2層	珪　頁	66.7	31.1	8.2	13.4	被熱	03
42	77	38	削器Ⅰ	SI01		覆土	珪　頁	54.9	42.6	13.5	33.1		02
42	78	53	削器Ⅰ		K-28	Ⅰ層	珪　頁	51.4	37.0	15.2	20.8		03
42	79	65	削器Ⅱ	SD22	O-14	上位	珪　頁	62.4	27.7	10.9	16.1	裏面右側縁弱い光沢	03
42	80	16	削器Ⅱ		L-30	Ⅰ層	珪　頁	44.4	31.2	8.9	10.4	裏面に弱い光沢	02
42	81	26	削器Ⅱ		M-30	Ⅲ層	珪　頁	(51.2)	(26.7)	9.6	(15.1)		02
42	82	75	削器Ⅱ		N-31	Ⅰ層	珪　頁	(43.5)	(24.6)	11.8	(11.9)	石匙の破損品,側縁摩滅	03
43	83	67	削器Ⅱ	SD22	ベルト6	覆土	珪　頁	78.1	31.8	7.4	19.6		03
43	84	24	削器Ⅱ		M-30	Ⅰ層	珪　頁	79.8	37.8	16.0	30.7	両側縁上位に微細剥離	02
43	85	58	削器Ⅱ	SI03		床直	珪　頁	66.2	41.6	14.1	19.5	両側縁に連続する微細剥離	03
43	86	32	削器Ⅱ		M-61	Ⅰ層	珪　頁	54.8	31.7	7.2	8.9		02
43	87	66	削器Ⅱ	SD22	O-24	覆土	珪　頁	66.3	46.6	13.3	28.6		03
43	88	10	削器Ⅱ		H-36	Ⅰ層	珪　頁	44.8	26.6	8.3	6.0		02
43	89	20	削器Ⅱ		L-33	Ⅲ層	珪　頁	78.5	47.0	16.4	54.2		02
43	90	63	削器Ⅱ	SI30		床面	珪　頁	78.3	46.0	21.3	38.0		03
43	91	17	削器Ⅱ		L-31	Ⅰ層	珪　頁	28.5	19.8	4.5	1.9		02
43	92	34	削器Ⅱ		L-30	Ⅲ層	珪　頁	43.8	31.5	6.5	6.2		02
43	93	3	削器Ⅱ	SI01		1層	珪　頁	61.4	47.6	19.0	37.0	S-7	02
43	94	60	削器Ⅱ	SI23		中位	珪　頁	44.7	51.2	15.5	26.8		03
43	95	73	削器Ⅱ		L-24	Ⅳ層	珪　頁	102.4	41.2	16.7	78.3	左辺微細剥離	03
43	96	62	削器Ⅱ	SI29		床面	珪　頁	102.0	34.5	20.7	37.4	左辺微細剥離	03
44	97	68	削器Ⅱ	SD23	N-26	覆土	珪　頁	95.9	48.4	19.8	55.0		03
44	98	78	削器Ⅱ			表採	珪　頁	65.4	41.8	18.9	33.0		03
44	99	61	削器Ⅱ	SI23		下位	珪　頁	75.4	58.1	20.4	62.1		03
44	100	59	削器Ⅱ	SI08		覆土	珪　頁	63.9	58.3	29.0	46.5		03
44	101	25	削器Ⅱ		M-30	Ⅰ層	珪　頁	27.0	34.8	7.0	7.4		02
44	102	36	削器Ⅱ	SI01		掘方	珪　頁	40.5	41.3	8.9	12.7		02
44	103	31	削器Ⅱ		N-30	Ⅳ層	珪　頁	41.4	46.3	13.7	20.5		02
44	104	13	削器Ⅱ		K-33	Ⅰ層	珪　頁	61.5	42.4	11.7	21.6		02
44	105	72	削器Ⅱ	SD25	L-17	覆土	珪　頁	59.7	41.8	10.7	18.2	掻器？	03
44	106	527	削器Ⅲ		N-31	Ⅰ層	黒曜石	34.0	19.0	6.0	2.8		
44	107	145	磨製石斧		K-33	Ⅲ層	緑細凝	14.4	4.6	3.6	398.3		
44	108	90	磨製石斧	SD22	S-24	14層	緑細凝	11.4	5.2	2.8	297.2		
44	109	645	磨製石斧	SD22	Q-26	5層	輝緑岩	(7.7)	5.1	2.0	112.8		
45	110	52	石　鋸	SD22		底面	安山岩	(8.6)	(10.5)	(1.8)	(206.9)		
45	111	61	石　鋸		E-24	Ⅱ層	安山岩	(11.0)	(9.4)	(1.4)	(165.0)		
45	112	51	石　鋸	SD22	M-16	12層	凝灰岩	(15.0)	(10.9)	(1.4)	(306.0)		
45	113	55	石　鋸	SD22	L-18	3層	安山岩	(14.5)	(10.4)	(2.0)	(351.2)		
45	114	47	石　鋸	SI55		覆土	安山岩	(13.3)	(9.0)	(1.3)	(202.1)		
45	115	56	石　鋸	SD22	M-23	床面	安山岩	(8.4)	(9.3)	(2.2)	(206.6)		

図	番号	委	器種	遺構名	グリット	層位	石　質	計測値(㎜)			重さ(g)	所　　見	備考
								長さ	幅	厚さ			
45	116	57	石　鋸	SD22	R-15	攪乱	安山岩	(9.3)	(9.3)	(1.7)	(163.0)		
45	117	58	石　鋸	SD23	N-26	中位	安山岩	(9.2)	(10.3)	(1.9)	(218.0)		
45	118	48	石　鋸	SD02	L-28	覆土	安山岩	(10.4)	(10.2)	(1.3)	(192.9)	49と接合	
45	119	14	半扁Ⅰ	SI23		中位	頁　岩	20.2	12.0	0.8	(278.8)	14～18接合	
45	120	28	半扁Ⅰ		P-23	Ⅰ層	安山岩	17.6	11.6	1.7	423.9	端部に抉り	
46	121	12	半扁Ⅰ	SD22	ベルト3	覆土	安山岩	(18.0)	9.5	2.3	(453.1)	13と接合	
46	122	24	半扁Ⅰ		D-27	Ⅱ層	安山岩	(10.5)	(7.1)	(2.2)	(220.1)		
46	123	23	半扁Ⅰ	SD22	L-17	9層	凝灰岩	(11.6)	(8.0)	(2.1)	(206.3)	端部に抉り	
46	124	19	半扁Ⅰ	SI24		確認面	安山岩	(15.8)	(9.8)	(1.9)	(417.8)	20と接合	
46	125	30	半扁Ⅰ			表採	凝灰岩	(13.8)	(7.5)	(1.7)	(294.5)		
46	126	34	半扁Ⅰ			表採	安山岩	15.2	7.1	1.7	285.6		
46	127	22	半扁Ⅰ	SD22	N-23	7層	安山岩	(8.3)	(9.7)	(1.5)	(190.2)		
46	128	25	半扁Ⅰ		I-33	Ⅲ層	凝灰岩	(8.6)	(9.5)	(1.3)	(161.9)		
47	129	31	半扁Ⅰ	SI65		覆土	安山岩	17.9	7.1	2.9	399.0		
47	130	32	半扁Ⅰ		H-24	Ⅱ層	安山岩	(12.0)	6.3	(2.1)	(205.2)	端部に抉り	
47	131	33	半扁Ⅰ		M-39	Ⅰ層	安山岩	(7.7)	(7.1)	(1.6)	(108.0)		
47	132	36	半扁Ⅱ	SD39	D-26	覆土	安山岩	15.0	6.4	2.2	287.6		
47	133	44	半扁Ⅱ		M-27	Ⅰ層	安山岩	(15.2)	8.4	2.2	364.3		
47	134	35	半扁Ⅱ	SI64	土坑	覆土	安山岩	(12.4)	8.6	3.0	365.0		
47	135	38	半扁Ⅱ		U-24	Ⅰ層	安山岩	(7.7)	(8.7)	(1.9)	(180.1)		
47	136	41	半扁Ⅱ		D-25	不明	安山岩	(8.0)	(8.1)	(2.3)	(155.7)		
47	137	37	半扁Ⅱ		Q-34	Ⅰ層	安山岩	(8.5)	(6.3)	(2.5)	(182.5)		
48	138	43	半扁Ⅱ	SK92		覆土	安山岩	(14.2)	6.5	2.4	(296.9)		
48	139	40	半扁Ⅱ	SD54		覆土	安山岩	(12.1)	(8.9)	(2.4)	(425.7)		
48	140	45	半扁Ⅱ		P-29	Ⅰ層	安山岩	(12.5)	7.8	2.4	(337.7)		
48	141	46	半扁Ⅱ		P-28	Ⅰ層	安山岩	10.8	5.5	1.9	161.9		
48	142	94	磨り石	SD22	R-23	床面	安山岩	14.6	9.1	2.7	578.3		
48	143	96	磨り石	SD22	R-15	覆土	頁　岩	(11.2)	(6.4)	2.6	(204.0)		
48	144	93	磨り石	SI51		掘方	凝灰岩	12.0	5.7	3.9	365.8		
48	145	95	磨り石	SD67	D-25	覆土	安山岩	12.5	4.8	3.7	252.7		
48	146	114	敲き石	SD39	D-29	覆土	安山岩	13.7	6.6	3.9	437.4	磨りの複合機能	
49	147	107	敲き石	SD22	K-19	底面	安山岩	13.8	6.9	3.8	485.2	器面全面磨り	
49	148	102	敲き石	SI44		1層	安山岩	11.5	6.9	3.4	414.7	s-2	
49	149	121	敲き石		M-24	Ⅲ層	安山岩	(7.3)	8.6	(2.6)	(206.8)	磨りの複合機能	
49	150	115	敲き石		E-25	Ⅱ層	安山岩	13.4	3.5	3.6	520.3		
49	151	110	敲き石	SD22	K-21	3層	安山岩	15.0	6.0	3.5	402.1		
49	152	122	敲き石		M-24	Ⅲ層	安山岩	14.4	(6.1)	4.7	(529.8)	敲打痕の周辺に磨り痕	
49	153	113	敲き石	SD30	N-25	覆土	安山岩	10.1	7.8	4.1	391.5		
49	154	149	敲き石	SD01	K-37	覆土	安山岩	12.6	8.4	3.3	489.8	敲打痕,縄文の磨り石か？	
49	155	116	敲き石		H-37	Ⅲ層	安山岩	13.3	7.2	3.4	432.9		
49	156	104	敲き石	SD22	N-24	底面	安山岩	10.4	9.3	4.0	539.1	石錘に転用の可能性あり	
49	157	3	礫　器		D-16	Ⅰ層	粘板岩	10.9	5.8	1.9	162.9		
50	158	1	礫　器	SI54		覆土	安山岩	12.5	10.1	4.0	503.7		
50	159	9	石　錘		OX-16	Ⅱ層	シルト	8.1	6.1	2.5	92.4		
50	160	10	石　錘	SD23		10層	シルト	(8.2)	(4.1)	3.2	(53.4)	s-1	
50	161	8	石　錘		G-7	Ⅵ層	粘板岩	4.3	4.5	1.0	22.1		
50	162	5	石　錘	SI20		床面	安山岩	11.1	11.7	4.0	663.0	s-1	
50	163	7	石　錘	SI36	カマド	覆土	安山岩	18.0	9.0	4.5	940.0	s-2,端部弱い被熱	
50	164	126	石棒？	SD35		3層	流紋岩	27.2	8.1	6.7	2092.7	s-1	
50	165	152	石　皿	SD22	O-26	下位	安山岩	(23.9)	(35.3)	(2.1)	(1963.0)		
50	166	153	石　皿	SD23	M-25	下位	砂　岩	(16.2)	(9.7)	(2.4)	(347.8)	P-23と接合	

表7　土製品・石製品観察表

図	番号	整	遺構名	位置	層位	時期	部位	外　部　文　様	内面調整	備　　考
50	167	204	SI03		床直	Ⅱ群	ミニチュア	底径3.8cm	ナデ	
50	168	142	SD23	P-27	中位層	Ⅱ群	胴部	結節横回、縁辺削り円盤状に整形	ミガキ	円盤状土製品

図	番号	委	器種	遺構名	グリット	層位	石　質	計測値(㎜)			重さ(g)	所　　見	備考
								長さ	幅	厚さ			
50	169	7	石製品		J-6	Ⅰ層	軽石凝灰岩	(22.0)	(27.0)	6.0	(3.7)	岩版,頂部に有孔,器面には刺突,側縁には溝が刻まれる。	

表８　平安時代の住居跡観察表

遺構番号	平面形	規　模(㎡、m)			主軸方向	柱穴配置	カマド位置	煙道構造	カマド規模(cm)		付属施設	重　　複	火山灰	年　代	備　　考
		床面積	長軸	短軸					煙道	燃焼部					
1	方形	25.79	5.2	5.2	N-90°-E	4本	新；東壁北寄り	半地下式？	－	35×60	掘立柱建物跡？		B-Tm二次堆積	10c中葉以降	掘立柱建物跡はカマド側。
							古；東壁南寄り	－	－	(37×38)					
3	方形	53.8 57.11	7.4 8.6	7.3	N-125°-E	4本	東壁南寄り	半地下式？	－	55×120	土坑2基、張り出し部	SK24より古	B-Tm二次堆積	10c中葉以降	カマド祭祀の可能性あり。カマド脇に土坑。床面積、規模で下段に記載しているのは張り出し部を含めた規模である
4	方形	7.46	2.8	2.6	N-130°-E	四隅	東壁北寄り	半地下式	30	(35×50)	なし	SI26より新	B-Tm二次堆積	10c中葉以降	
5	長方形	〈5.35〉	2.8	2.2	N-150°-E	四隅	南東壁南寄り	半地下式？	－	(35×40)	なし	なし	なし	10世紀代	鋤先の完形品出土
6	方形	〈36.17〉	6.2	5.9	N-135°-E	四隅＋3本？	東壁南寄り	半地下式？	－	？×90	土坑3基	第1、3号竪穴遺構、SK20より古く、SV33より新	十和田a	9c後半～10c前葉	カマド脇に土坑
8	方形	12.45	3.5	3.3	N-120°-E	四隅	東壁南寄り	半地下式	45	50×50	なし	SV15より新、第1号掘立柱建物跡より古い	B-Tm二次堆積	10c中葉以降	
9	方形？	〈6.61〉	3.8	－	N-118°-E	(四隅？)	東壁南寄り	－	－	－	なし	内壕より古い。	なし	10c前半	
10	方形	〈17.83〉	4.5	－	N-121°-E	(四隅？)	東壁南寄り	－	－	－	なし	外壕より古い。	B-Tm二次堆積	10c中葉以降	
12	方形	9.03	3.2	2.9	N-130°-E	四隅	東壁南寄り	半地下式？	－	？×50	土坑2基	SI28、SK61より新	なし	10世紀代	
13	方形	〈10.01〉	4.4	－	N-115°-E	(四隅？)	－	－	－	－	なし	SI25、SV22より新	なし	10世紀代	
14	方形	〈6.66〉	－	－	N-120°-E	不明	東壁北寄り	半地下式？	－	40×95	なし	現代の道路により削平	なし	9c前半	9世紀代の焼失家屋、土師器甕を芯材とする。
15	方形	47.52	6.6	6.6	N-145°-E	四隅＋4本	南東壁南寄り	半地下式？	－	60×110	間仕切り溝2条	SI19、SK124、SV42より新	B-Tm二次堆積	10c中葉以降	主柱穴内より須恵器坏完形個体出土
16	－	〈23.62〉	6.0	－	N-119°-E	不明	東壁南寄り	－	－	43×？	張り出し施設、土坑2	壕、SD25、SK35より古。SI18、SV30より新。	B-Tm二次堆積	10c中葉以降	南側に張り出し部を持つ。
18	方形	15.14	4.0	3.9	N-116°-E	四隅	東壁南寄り	半地下式？	－	－		SI16、内壕、SK32、SD25より古。	B-Tm二次堆積	10c中葉以降	
19	方形	18.92	4.5	4.3	N-120°-E	2本？	東壁南寄り	半地下式？	－	45×75	土坑2基	SI20･27、SK128より新、SI15より古	なし	10c中葉以降	
20	方形	〈40.71〉 〈42.95〉	6.7 7.9	－	N-120°-E	4本	東壁南寄り	半地下式？	－	45×90	間仕切り溝2条	外壕、SD26、SI19より新、SK123より古	B-Tm二次堆積	10c中葉以降	主柱穴内より鉄製品出土、鉄製品及び鉄関連遺物の出土が多い。床面積、規模で下段に記載しているのは張り出し部を含めた規模である。
21	方形	〈7.07〉	－	－	－	四隅？	－	－	－	－	なし	SD31より古く、SV23より新	B-Tm二次堆積	10c中葉以降	
22	方形	〈6.43〉	3.3	－	－	四隅？	－	－	－	－	土坑1	現代の道路により削平	なし	平安時代	
23	方形	〈16.23〉	4.3	4.2	N-103°-E	4本＋四隅？	東壁南寄り	半地下式	40×45	35×80		内壕より古い。	B-Tm二次堆積	10c中葉以降	煙出孔は壁に近接。
24	方形	36.22	6.8	6.7	N-110°-E	4本＋壁柱	東壁北より	半地下式？	－	－	土坑1	外壕、SD01より古	なし	10世紀代	
25	方形	－	－	－	－	不明	－	－	－	－	－	SI13より古、現代の道路により削平	なし	平安時代	
26	不明	〈22.09〉 〈16.63〉	5.2 4.1	－	N-40°-W	四隅？	北西壁中央寄り	地下式	110	55×95	－	内壕、SI04より古い。	なし	9c後半以降	本遺跡で唯一の地下式カマドで、向きは西側である。カマド位置を変えずに拡張が行われている。

遺構番号	平面形	規模(㎡、m)			主軸方向	柱穴配置	カマド位置	煙道構造	カマド規模(cm)		付属施設	重複	火山灰	年代	備考
		床面積	長軸	短軸					煙道	燃焼部					
27	不明	〈3.00〉	2.4	－	N-35°-E	不明	北壁東寄り	－	－	？×45	－	SI19、第3号埋設より古い	なし	10c中葉以前	本遺跡で希少な北向きのカマドである。
29	不明	〈9.47〉	－	－	N-125°-E	四隅＋壁柱	東壁南寄り	半地下式	25×42	55×97	なし。	なし	なし	10世紀代	東壁辺の両隅にピットが近接。
30	方形	11.63	3.5	3.5	N-129°-E	四隅	東壁南寄り	半地下式？	－	－		SI31・38(縄文)より新	なし	10世紀代	東壁辺の両隅にピットが重複。
32	方形	8.83	3.2	3.0	N-115°-E	不明	東壁南寄り	半地下式	22×14	40×80	出入り口。土坑1。	SI39(縄文)より新	B-Tm二次堆積	10c中葉以降	
33	不明	〈7.76〉	－	－	N-132°-E	不明	東壁北寄り	半地下式	25×50	43×72	なし	SI34(縄文)より新	B-Tm二次堆積	10c中葉以降	柱穴は隅柱か。一辺4m前後の規模か。
35	方形	6.10	2.7	2.7	N-119°-E	不明	東壁北寄り	半地下式	37×55	38×50	なし	SD03より新	B-Tm二次堆積	10c中葉以降	柱穴未検出。カマド祭祀か。
36	方形	18.31	4.5	4.4	N-125°-E	不明	東壁南寄り	半地下式	37×23	42×100	土坑3基。	SD03、SI39・47、SK49、SK53より新	B-Tm二次堆積	10c中葉以降	壁外のカマドの両脇にピット。
44	不明	〈33.18〉	6.3	－	N-90°-E	不明	東壁？	不明	－	－	土坑1基。	SI46より新	なし	10世紀代	柱穴配置は4本柱か。
45	長方形	22.45	5.8	4.5	N-84°-E	不明	東壁南寄り	不明	－	－		SI51、SK83より古く、SI46・51～53・68、SD32、SV39より新。	なし	10世紀代	
46	長方形	20.03	5.0	4.2	N-53°-W	不明	北壁中央？	不明	－	－		SI44・45・51、SK83より古い。SI52・53とは不明	なし		本遺跡で希少な北向きのカマドである。
48	方形	22.09	4.5	4.2	N-105°-E	2本＋四隅？	東壁南寄り	半地下式？	－	42×80	土坑3基		なし	10世紀代	カマド脇に土坑。
49	方形	〈9.10〉	3.1	－	N-100°-E	不明	東壁南寄り	半地下式？	－	45×75	なし	第3号方形周溝より古く、SK84より新。	なし	10世紀代	
50	方形	〈34.16〉	6.0	5.5	N-115°-E	四隅＋4本	東辺の南側	－	－	－	土坑2基、間仕切り溝1条	SD26・31、SK88より古く、SD79より新。	十和田a	9c後半～10c前葉	拡張している可能性あり。
51	長方形	19.90	4.4	4.3	N-87°-E	四隅	東壁北寄り？	半地下式？	－	－	土坑2基	SI45・46・53・54・68、SV39・40より新。	なし		
52	不明	－	－	－	－	不明	－	－	－	－	－	SI45・46・51・68より古い可能性が高く、SD03とは不明。	なし		壁溝のみの検出。全容不明。
53	不明	－	－	－	－	不明	－	－	－	－	－	SI45・51より古い。	なし		
54	方形	8.83	3.6	3.6	N-97°-E	不明	東壁北寄り	不明	不明	不明	なし	SI51・55より古い	なし		
55	方形	11.82	3.7	3.5	N-99°-E	不明	東壁南寄り	半地下式	40×60	40×45	出入り口。土坑1	第4号方形周溝より古く、SI54・56、SD64より新。	なし		焼失家屋。
56	方形	(33.00)	(5.8)	(5.7)	N-98°-E	不明	東壁南寄り	不明	不明	不明	土坑2基	SI55、第4号方形周溝より古く、SI57・58より新。	なし		柱穴配置は4本柱か。焼失家屋。
57	長方形？	(24.00)	(5.3)	(4.5)	N-94°-E	不明	東壁南寄り？	不明	不明	不明	土坑1	SI56、第4号方形周溝より古く、SI58・70より新。	なし		柱穴配置は四隅と壁柱穴？
58	方形	17.77	4.6	4.3	N-94°-E	隅柱	東壁南寄り	半地下式	34×34	45×80		SI56・57、第4号方形周溝より古い。	B-Tm二次堆積	10c中葉以降	カマド破壊が行われた可能性が高い。
59	方形	－	－	－	－	不明	－	－	－	－	－	SI65・66、第4号方形周溝より古く、SI60とは不明	なし	10世紀代	
60	方形	－	－	－	－	不明	－	－	－	－	－	SI65,第4号方形周溝より古く、SI70より新、SI59とは不明	なし	10世紀代	
62	長方形	4.53	2.5	1.8	N-90°-E	不明	東壁南寄り	半地下式	55	35×？	－	SI67、SK92、SK112より新	なし	10c中葉以降	

遺構番号	平面形	規　模(㎡、m)			主軸方向	柱穴配置	カマド位置	煙道構造	カマド規模(cm)		付属施設	重　　複	火山灰	年　代	備　　考
		床面積	長軸	短軸					煙道	燃焼部					
65	方形	23.76	5.0	4.8	N-90°-E	四隅＋4本	東壁南寄り	半地下式	40	40×80	土坑1基、間仕切り溝1条	第4号方形周溝より古。SI59・60・64・66・67、SV50、第7号竪穴遺構より新。	なし	10c中葉以降	カマド脇に土坑
66	方形	〈9.23〉	3.3	－	－	不明	－	－	－	－	土坑2基	SI65・67、SK117、第4号方形周溝より古く、SI59より新。	なし	10世紀代	
67	長方形	〈14.33〉	－	3.8	N-125°-E	四隅	東壁南寄り	半地下式	20	50×70	－	SI62・65より古く、SI66、SK92、SK112、SV50より新。	B-Tm二次堆積	10c中葉以降	
68	不明	－	4.8	－	－	不明	－	－	－	－	－	SI45・52、SK83より古く、SI46とは不明。	なし		SI45の拡張前の住居か。
69	不明	－	－	－	－	不明	－	－	－	－	－	なし	B-Tm二次堆積	10c中葉以降	
70	不明	－	－	－	－	不明	－	－	－	－	－	SI57・60より古い。	なし		

〈　〉は現存値
（　）は推定値

表９　平安時代竪穴遺構観察表

遺番	グリッド	重　　複	平面形	断面形	長軸方向	開口部規模(cm)	底面規模(cm)	深さ(cm)	備　　考
1	Q・R-17・18	SI06、SV33より新	長方形	箱型	N-130°-E	235×305	210×285	45～60	
2	P・Q-19・20	なし	方形	浅箱	N-70°-E	250×265	240×240	15(40)	
3	R-16	SI06より新	不整方形	箱型	N-110°-E	170×205	150×180	25～40	
4	F-19	なし	方形	浅箱	N-20°-W	190×195	180×180	3～15(25)	
5	E-11・12	なし	長方形	－	N-0°-E	東西軸長195	東西軸長165	－	小型の住居跡か？
6	P・Q-20・21	なし	長方形	－		360	350	10	
7	E-14	SI65、第4号方形周溝より古い	不整形	－	不明	不明	不明	－	焼失家屋か？

表10　平安時代土坑観察表

遺構番号	グリッド	重　複	平面形	規　模(cm)			深　さ	備　　考
				断面形	開口部	底　面		
3	N–31	なし	楕円形	浅箱型	100×120	97×100	37	壁の一部が袋状。
11	L–38	なし	長方形	浅箱型	103×129	92×113	9	
16	O–17	なし	隅丸長方形	浅箱型	100×145	80×120	15	掘り方底面まで30㎝
17	O･P–17	なし	円形	浅箱型	120×130	50×65	45	
18	R･S–20･21	なし	楕円形	浅箱型	140×170	110×135	35	
20	R–16･17	SI06より新	円形	深箱型	90×100	45×55	60	
23	R–20	なし	不整楕円形	フラスコ形	90×105	93×110	62	
24	S–17	SI03より新	円形	皿状	75×90	50×50	20	
25	Q–22	なし	円形	浅箱型	170	130×150	40	B-Tm(分析結果より)二次堆積
26	Q–22	なし	隅丸方形	浅箱型	90×130	70×105	15	掘り方底面まで20㎝。
27	L･M–16	SD25より古、SD27より新	長楕円形	深箱型	96×128	77×80	60	B-Tm(肉眼観察による)二次堆積
28	L･M–20	なし	方形	浅箱型	113×118	97×109	27	
30	L･M–19	なし	長方形	浅箱型	100×148	89×131	16	
32	L–17	SI16より新？	円形	深箱型	152×154	113×122	74	隅に22㎝のピット。SI16と同時存在の可能性もあり。B-Tm二次堆積
33	J–8	なし	円形	深箱型	110×140	90×105	60	B-Tm(肉眼観察による)二次堆積
34	P–19	なし	円形	浅箱型	(80)×90	65×80	20	
35	O･P–19･20	なし	楕円形	皿状	90×120	65×105	10	
36	N–19	なし	円形	浅箱型	85×95	70×75	15	
37	J･K–8	なし	不整円形	浅箱型	80×100	55×75	23	
38	K–8･9	なし	楕円形	浅箱型	95×140	60×100	25	
39	P–17	なし	隅丸方形	浅箱型	90×95	75×75	15	
40	Q–19･20	なし	不整方形	浅箱型	100×105	80×100	13	掘り方底面まで25㎝
42	N–13	なし	隅丸方形	浅箱型	90×95	80×90	15	
43	Q–20	なし	円形	浅箱型	90×95	70×70	10	
44	M–12	なし	円形	浅箱型	135×140	50×60	20	
45	G･H–17	なし	長方形	浅箱型	97×158	92×152	20	
46	M･N–18	SK47より新	長方形	浅箱型	85×135	70×120	30	B-Tm(肉眼観察による)二次堆積
47	M･N–18	SK46より古	長方形	浅箱型	〈130〉	〈120〉	10	
48	M–18	なし	円形	浅箱型	75×85	65×75	20	
50	N–28	なし	円形	皿状	133×147	88×93	28	B-Tm(肉眼観察による)二次堆積
54	C–18	SD41より新	隅丸長方形	浅箱型	130×165	110×110	40	(AMS法　補正年代)1190±60(yBP)B-Tmが二時堆積している41溝より新
55	D–20	なし	円形	浅箱型	75×90	60×75	20	
56	E–20	なし	円形	浅箱型	90×110	55×55	40	B-Tm(肉眼観察による)二次堆積
57	A–23	SD35より新	隅丸方形	浅箱型	75×95	55×85	15	
58	A･B–21･22	SD34より古,SD37より新	長方形	浅箱型	115×310	110×295	50	
59	A-20･21	SD34,SD35より古	円形？	箱形	－	〈160〉	－	
60	H–10	なし	不整円形	浅箱型	90×110	40×40	35	
61	J–9	SI12より古,SI28より新	不整形	浅箱型	120×〈140〉	55×65	25	
63	A･B–14	SD46,SD47より新	円形	深箱型	150×155	125×125	75	B-Tm(肉眼観察による)二次堆積
64	S･T–25	なし	長方形	浅箱型	126×〈130〉	98×〈105〉	30	上部に焼土
66	A･B–15･16	SD47より古	楕円形	不整、段状	〈120〉	〈55〉	35	B-Tm(肉眼観察による)二次堆積
67	B–17	SD39より古 SD41とは不明	楕円形	浅箱型	〈115〉	〈70〉	35	B-Tm(肉眼観察による)二次堆積
70	G･F–5	SK71,SK72,SD56,SD57より新	楕円形	深箱型	〈150×180〉	〈100×110〉	70	
71	G･F–5	SK70より古,SK72･SD56･57より新	円形？	浅箱型	〈150〉	〈120〉	25	掘り方底面まで30㎝
72	F–5	SK70･71より古,SD56･SD57より新	楕円形	深箱型	240×340	215×300	75	掘り方底面まで90㎝、石製の平玉出土
74	A–15	SD47より古	円形	浅箱型	〈105〉	〈60〉	25	
75	A･B–22	SD35･36より古,SD37より新	楕円形	深箱型	－	〈115×160〉	85	
76	A–22	SD36より古,SD37より新	円形	深箱型	－	45×65	60	

遺構番号	グリッド	重　複	平面形	規　模(cm)			深　さ	備　　考
				断面形	開口部	底　面		
77	A–22	SD36より古, SK78・SD37より新	楕円形	深箱型	–	〈90〉	60	
78	A–22	S K77, S D34, S D36より古	円形？	深箱型	–	〈170〉	55	
79	G–6・7	3号方形周溝より古, SD56, SD57より新	楕円形	深箱型	135×180	110×135	85	B-Tm(肉眼観察による)二次堆積
80	G・H–8	なし	不整円形	深箱型	310×385	270×305	60	
81	E–31	SD62と不明。	隅丸方形	浅箱型	142×180	121×166	18	
82	C・D–30	なし	不整楕円形	浅箱型	139×258	105×214	34	B-Tm(肉眼観察による)二次堆積
83	G–19	SI45, SI46, SI68より新	楕円形	深箱型	204×354	152×243	95	B-Tm(肉眼観察による)二次堆積
84	F–7・8	SI49より古	長方形	浅箱型	140×180	130×160	15	
85	F–8	SD58より古	楕円形	浅箱型	130×230	110×200	45	
86	E–8	SD31より新	円形	深箱型	〈195〉	〈120〉	65	掘り方底面まで80cm、B-Tm(肉眼観察による)二次堆積
88	F–10	SI50より新	円形	浅箱型	135×150	120×125	25	
89	G–6	SD58より古	円形	浅箱型	〈80〉	〈60〉	30	
92	G–13	SI67より古	隅丸長方形	浅箱型	116×〈197〉	77×〈160〉	40	
96	C–28	SK98, SD66より新	不整楕円形	深箱型	201×217	129×150	56	
97	E–11	なし	円形	浅箱型	90×115	75×85	15	
98	C–28・29	SK96より古, SK99・SD66より新	不整長方形	深箱型	134×〈178〉	100×〈181〉	79	
99	C・D–28	SK98より古, SD66・71より新	円形	深箱型	〈180〉×202	93×144	60	
100	D–28・29	SD65と不明	不整円形	浅箱型	〈49〉×79	24×31	46	
101	E・F–28・29	SD62, SD70より新	楕円形	浅箱型	177×217	108×150	53	
103	E・F–28	SD67と重複, 新旧不明	楕円形	深箱型	〈125〉	29×42	45	
104	A–15	SD47より古	形状不明	浅箱型	–	〈45〉	40	B-Tm(肉眼観察による)二次堆積
105	A–15	SD47より古	形状不明	深箱型	–	〈70〉	55	掘り方底面まで，65cm
106	A–15	SD47より古	円形	浅箱型	–	60×70	15	
107	A–16	SD47より古	円形	–	–	〈90〉	15	
108	D・E–26	なし	円形	浅箱型	85〜90	34〜37	43	
110	OY–18	SD54より古	円形	深箱型	–	〈105〉	60	
112	G–12・13	SI62, SI67より古	長方形	浅箱型	110×240	80×180	30	
113	D・E–11・12	なし	不整円形	浅箱型	150×160	100×130	30	
114	D–25	SD67より古, SD69とは新旧不明	不整長方形	深箱型	〈53×120〉	29×92	86	
115	D・E–25	なし	長円形	浅箱型	〈66〉	〈46〉	17	
116	OY–17	SD78より古	円形？	浅箱型	–	〈110〉	35	掘り方底面まで50cm
117	G–14	SD63より古, SI66より新	円形	深箱型	110×135	80×100	55	壁面被熱、底面に小穴2個
118	D–21	道跡より新？	楕円形	浅箱型	100×133	82×116	29	
119	OY–15・16	SD78より古	円形	浅箱型	70×85	50×55	15	
120	B–24	SD36より古	形状不明	–	〈191〉	19×156	77	
121	A・B–24	SD36・37より古	長方形	浅箱型	〈150〉	〈130〉	30	
124	M–10	SI15より古	円形？	浅箱型	〈135〉	〈100〉	25	
125	OY–18	SV51より新	方形	深箱型	〈200〉	〈155〉	60	
126	E–9	SD26より古	円形？	浅箱型	〈70〉	<50〉	20	
127	E–9	SD26より古	円形	浅箱型	〈80〉	〈70〉	25	

〈　〉は現存値

表11　井戸跡観察表

遺構番号	遺構略号	グリッド	重　複	平面形	断面形	規　模(cm)			備　考
						開口部	底　面	深さ	
1	SE01	P–82	なし	円形	深箱型	223×234	123×130	131	上部にB-Tm。底面は不整形。
2	SK04	K–47	なし	楕円形	深箱型	155×180	83×105	158	上部にTo-a。中端から底面にかけては長方形。炭化材出土。
3	SE03	E–40	なし	円形	深箱型	113×123	73×78	174	木製品出土。AMS炭素年代は1350±50(yBP)。
4	SK111	OY–16	SD54より新	円型	深箱型	100×95	80×80	50	SD54を含むと，深さ約130㎝

表12　時期不明土坑観察表

遺構番号	グリッド	重　複	平面形	断面形	規　模(cm)			備　考
					開口部規模	底面規模	深さ	
5	K･L–68	SD10･11より古。	隅丸長方形型	箱型	〈85×170〉	46×153	60	墓坑か。
6	M–40	なし	円型	平箱	68×75	57×63	28	浅く、小さな土坑
7	L–39	なし	円型	箱型	94×100	87×88	41	縄文の可能性あり。
8	L–39	なし	円型	箱型	88×88	67×70	25	縄文の可能性あり。
12	J–67･68	SD08より古、SD10とは不明	楕円型？	フラスコ型	〈188〉×216	216×〈270〉	101	
13	L–31	SD01･03と不明	円型	逆台型	〈68〉×105	〈56〉×72	50	底面に凹凸あり。
15	S–66	なし	円形	浅箱形	90×95	60×65	30	
62	J･K–10	SI28より古	不整形	フラスコ型	135×140	90×135	45	
65	O–81	なし	楕円型	箱型	88×92	68×72	75	
69	G･H–4･5		円形	深箱形	125×145	100×105	25	
93	E–16	SD63より古	不整円型	フラスコ型	113×122	128×132	49	縄文の可能性あり。
128	K–11	SI29より古	楕円形	箱型	100×140	50×40	55	

〈　〉は現存値

表13　土師器観察表

図番号	整理	器種	出土地	残存	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	備　　考
53-1	255	坏	SD22、K-22中位層。	底部片	－	－	(5.0)	ロクロ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り	
53-2	254	坏	SD22、13層P-9。フク土	1/3	(12.0)	5.1	5.7	ロクロ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り	
53-3	250	坏	SD22、M-16下位層。	1/2	(11.4)	4.7	(6.1)	ロクロ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り	ゆがみあり。
53-4	263	高台部	SD22、R-25上位層。S-23、3層。	1/4	－	－	(8.0)	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		
53-5	251	皿	SD22、L-18、22層。L-18、12層。M-17底面。	2/3	(13.8)	3.3	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
53-6	248	坏	SD22、0-24、7層。0-24上位層。	1/2	(14.0)	4.5	5.8	ロクロ、ユビナデ	ロクロ	回転糸切り	
53-7	252	坏	SD22、ベルト3フク土	1/3	(13.0)	6.0	5.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
53-8	253	坏	SD22M-23、6層	底部	－	－	6.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
53-9	249	坏	SD22、L-22、10層。L-22、8層。	1/2	11.9	4.9	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
53-10	262	甕	SD22、N-14、12層。O-14、22層	口縁部	(12.2)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
53-11	259	甕	SD22、M-16、12層。M-16フク土	口縁部片	－	－	－	ケズリ	ヘラナデ	－	
53-12	258	甕	SD22、N-24、21層	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ、ユビナデ	－	
53-13	261	甕	SD22、崩落土P-25	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
53-14	260	甕	SD22、崩落土P-25	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ、指頭圧痕	ヨコナデ、ヘラナデ	－	内外面に炭化物付着
53-15	256	甕	SD22、N-24底面。ベルト3フク土	口縁部	22.0	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	整理257と同一か
53-16	257	甕	SD22、O-24下位層	底部	－	－	8.3	ケズリ	ヘラナデ	ケズリ	
54-1	247	甕	SD22、L-22、8層	底部	－	－	7.2	ケズリ	ヘラナデ、ユビナデ	ナデ	
54-2	264	甕	SD22、P-26(SI09近く)5層P-1	底部	－	－	8.4	ケズリ	ヘラナデ	簾状圧痕	
54-3	265	甕	SD22、S-24、11層	底部	－	－	5.1	ケズリ		ナデ？	底部厚い。炭化物付着。
54-4	385	ミニチュア	SD22、M-23	底部	－	－	5.4	ケズリ	ヘラナデ	ケズリ？	
55-5	267	坏	SD23、K-16・17、10層、フク土上位層	1/3	(13.1)	5.0	(5.0)	ロクロ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り	
55-6	266	坏	SD23ベルト5、8層	2/3	(11.9)	4.9	5.4	ロクロ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り。一部ヘラナデ。	内面に煤状炭化物付着。
55-7	268	坏	SD23、M-12下位。	口縁部片	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	内面に赤色顔料付着。
57-2	1	坏	SI01床直P-202～205	略完形	11.8	5.8	6.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
57-3	2	甕	SI01掘り方	口縁部片	(20.0)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
57-4	3	小型甕	SI01Pit9	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
57-5	5	甕	SI011層P-157	底部	－	－	7.0	ケズリ	ヘラナデ	砂底	
57-6	4	甕	SI01床直P-92	底部片	－	－	(9.6)	ケズリ	ヘラナデ	砂底	
60-1	6	坏	SI03カマド火床面直上P-66、68、74	1/2	(13.4)	5.3	6.3	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
60-2	10	坏	SI03床直P-1。	1/4以下	(12.0)	5.5	(5.4)	ロクロ	ロクロ、黒色処理	回転糸切り	
60-3	7	坏	SI03カマド火床面直上P-69	口縁部片	(12.2)	－	－	ロクロ	ロクロ	－	ヘラ記号
60-4	8	坏	SI03床直	底部片	－	－	4.9	ロクロ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	
60-5	9	坏	SI03ピット覆土。内土坑1覆土。	底部片	－	－	4.9	ロクロ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	
60-6	12	甕	SI03カマド床面P-70。床直。1層(P-4,6,11～15、17～19,24、26,29、55,56,59,61～63,65)	3/4	20.2	(30.0)	(8.4)	ヨコナデ、ケズリ、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ヨコナデ、ヘラナデ	大半を欠失	
60-7	15	甕	SI03床面。古カマド火床面直上P-79。カマド1層。	口縁部片	(23.8)	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
60-8	13	甕	SI03カマド1層P-39。覆土	口縁部片	(18.9)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
60-9	14	甕	SI03床直。内土坑2覆土	口縁部1/2	(12.8)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
60-10	16	甕	SI03カマド1層P-52	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ？	－	
60-11	17	甕	SI03床直	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		スス付着
60-12	19	甕	SI03床直P-1	底部片	－	－	9.0	ケズリ	ヘラナデ、ユビナデ	砂底。	
60-13	18	甕	SI03床直	底部	－	－	5.9	ケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ。	
60-14	20	甕	SI03床直	底部片	－	－	(9.4)	ケズリ	ヘラナデ	簾状圧痕。	

図番号	整理	器種	出土地	残存	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	備　考
61-18	370	ミニチュア	SI03	1/3	(8.0)	6.3	3.3	ケズリ？(摩滅)	ヘラナデ？(摩滅)	ケズリ？(摩滅)	口縁はごく一部残。
61-19		外耳	SI03覆土上層		－	－	－				外耳部分
63-1	22	坏	SI04覆土、P-19	略完形	12.0	5.1	5.3	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
63-2	23	坏	SI041層P-14。覆土	破片	－	－	6.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
63-3	21	坏	SI041層P-9	底部	－	－	5.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
63-4	24	甕	SI041層P-8	破片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
63-5	25	甕	SI04P-18	底部	－	－	7.8	ケズリ	ヘラナデ、ユビナデ	砂底。	
63-6	211、212	甕	SI04、1層P-5。フク土。SI04、1層P-7,13。SI04フク土上位層P-18。SI04フク土。SI23中位層。SK22覆土。	体部下半	－	－	(8.2)	ケズリ	ヘラナデ	砂底	
64-1	27	坏	SI051層P-3	3/4以上	13.2	6.2	7.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
64-2	26	皿？	SI051層P-4	3/4以上	14.2	3.3	4.7	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
64-3	28	小型甕	SI056層P-5。1層	3/4以上	(13.6)	11.3	7.2	ヨコナデ、不明、底辺にケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	ナデ	
67-1	31	坏	SI06土坑2。2層(P-7,120,140)。	3/4	(15.5)	5.9	6.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
67-2	29	坏	SI06床面P-49	略完形	13.0	5.6	6.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
67-3	34	坏	SI06カマドP-24。覆土	1/4	(13.5)	4.7	(7.1)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
67-4	33	坏	SI062層P-54,56	1/4	(13.7)	4.5	(6.8)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
67-5	30	高台付坏	SI06土坑2。1層(P-13,22,33,81)。	破片	－	－	(9.6)	ロクロ	黒色処理、ミガキ？		
67-6	32	高台付坏	SI06土坑2。2層P-44	1/4	(17.8)	－	－	ロクロ	黒色処理、ミガキ		高台部破損。
67-7	35	甕	SI061層(P-6,23,91)、2層(P-21,28,41,47,49,53～55,58,59,80,82,83,90,94,99,100,102,110,113,115～117,122,123,125,136,139,144,145,147～149)、土坑1覆土、土坑22層、焼土層。SI26覆土、SD22(N-14)2層、L-14Ⅰ層	底部欠失	20.8	－	－	ロクロ、ケズリ	ロクロ、ヘラナデ	－	焼成すこぶる良好
67-8	43	甕	SI06カマド3層P-61	1/4	(15.6)	－	－	ロクロ	ロクロ	－	
67-9	42	甕	SI06内土坑2層(p-57,77,79)	口縁1/4	(22.0)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
67-10	36	甕	SI06カマド1煙道。カマドフク土。カマドP-17、内土坑2。2層(P-46、48、52、56、66、78、86、88、91、92、96、103、112、126、147、154)。Q-16Ⅰ層、Q-17Ⅰ層	3/4	17.4	(17.1)	(9.1)	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		
67-11	40	甕	SI06カマド袖シンザイ(P-6、85,101)。カマド袖P-70。カマド2袖ダイ。カマド2(P-90,92,97,98)。カマド2カマド周辺。カマド2覆土。カマド床面。内土坑2、1層P-2、覆土	1/3	(13.4)	14.7	6.2	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	ヘラナデ	
67-12	41	甕	SI06床面P-84。カマドP-79。カマド床面。カマド脇ピット11層。カマド煙道。カマド芯材。底面。内ピット(7)1～3層。P-39	1/2	(14.1)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
68-13	38	甕	SI06内土坑2。1層P-8。内土坑2、2層(P-43,68,93,116,132～135、137)	体部上半	(19.8)	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ、ミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
68-14	46	甕	SI06床面P-40	口縁1/4以下	－	－	－	ヨコナデ、不明	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
68-15	47	甕	SI06内土坑1底面(P-1,3)	1/4	(15.4)	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
68-16	44、45	甕	SI06カマド床面。カマド2カマド周辺。カマド2(P-89、93)。内土坑2、1層P-24。	口縁部	14.5	－	－	ヨコナデ、ユビナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
68-17	39	甕	SI06カマド煙道。カマド左袖シンザイ。カマド床面P-81～83。カマド袖P-75。床直。内土坑2、2層P-61、87,90,98,147、150～152、157。	体部下半	－	－	11.4	ケズリ	ヘラナデ	一部ナデ	
68-18	37		SI06カマド(P-7,11,18)。土坑2、2層(P-60,76,79、84,141,143)	胴部下半	－	－	(11.0)	ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	小礫多量混入。
68-22	371	ミニチュア	SI06床面	底部	－	－	4.5	ケズリ	ヘラナデ	ナデ	内面炭化物付着

図番号	整理	器種	出土地	残存	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	備　　考
68-23	372	ミニチュア	SI06床面	底部片	－	－	(3.5)	ケズリ	ヘラナデ	砂底	
69-1	11	坏	SI08覆土	底部片	－	－	－	ロクロ	ロクロ		ヘラ記号
70-2	48	坏	SI09崩落土P-40	1/2	(12.9)	5.9	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
70-3	49	坏	SI092層P-8	底部片	－	－	5.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	焼成良好
70-4	53	甕	SI09床面P-19	破片	－	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
70-5	51	甕	SI09覆土	破片	－	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ、ヘラナデ	－	
70-6	52	甕	SI09床面P-21	口縁1/4	(19.8)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	内面に煤付着
70-7	50	甕	SI09床面P-12	1/4	(18.4)	26.5	9.5	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	ナデ	火ハジケあり
72-1	54	坏	SI10床面P-1	口縁1/4	(13.2)	－	－	ロクロ	ロクロ	－	
72-2	56	甕	SI10カマド2層P-2	破片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケメ、ヘラナデ	－	
73-1	59	甕	SI12、3層	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ？	ヨコナデ、ハケメ	－	
73-2	57	坏	SI12、3層	口縁部片	(12.1)	－	－	ロクロ	ロクロ	－	
73-3	58	坏	SI12床面	底部片	－	－	6.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
75-1	60	坏	SI14P-74	完形	13.7	5.7	5.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	灯明具に再利用
75-2	61	坏	SI14カマド支脚	完形	13.2	5.7	4.7	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
75-3	68	甕	SI14床直P-52。袖(P-11,13,64)。カマド右袖P-10。カマド確認面(P-3,4,12,13)。覆土	1/3	(25.4)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
75-4	69	甕	SI14カマド右袖P-10。袖(P-11､13,64,82)	口縁部片	(21.6)	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ。化粧粘土	ヨコナデ、ヘラナデ	－	頚部に弱い段
75-5	65	甕	SI14袖P-64。カマド右袖。	口縁1/2以下	(20.8)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ、ユビナデ	－	ゆがみあり。
75-6	67	甕	SI14床直P-62。袖(P-11､64)。カマド右袖P-10。カマド覆土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ、化粧粘土	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
75-7	64	甕	SI14床直(P-7,41,44,70,71)。カマド3a層(P-36,37)煙道。カマド確認面(P-5、7,34,36,37,39)。覆土	1/2	(22.8)	23.9	(10)	ヨコナデ、ヘラナデ、ケズリ、ユビナデ	ヘラナデ、ミガキ	ヘラナデ？	内面底部の一部が黒色化。
76-8	72	甕	SI14カマド3a層P-33	口縁1/4以下	(21.0)	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ、ハケメ	－	頚部に段。
76-9	63	甕	SI14床直(P-43、46,47,51,63,76)。カマド確認面(P-22、24,26,29,30,32)。カマド6a層P-31。覆土。	2/3	19.0	30.8	9.6	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、不明	砂底	口縁の一部欠失
76-10	62	甕	SI14床直(P-8,45,48,50,54,62,69,75)。煙道。カマド4層(P-78～80)。カマド袖脇6a層(P-22～25)。カマドフク土。カマド確認面(P-2､6,16,19)。カマド付近覆土。P-17。覆土。	2/3	20.6	32.1	10.4	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	砂底	
76-11	70	小型甕	SI14覆土	1/4以下	(9.4)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
76-12	71	甕	SI14袖P-82。煙道。カマド確認面P-1	底部片	－	－	(7.6)	ケズリ	ケズリ	砂底	
76-13	66	甕	SI14床直(P-53,55,56,58)。カマド確認面P-2。覆土	底部片	－	－	(9.6)	ケズリ	ヘラナデ、ハケメ	砂底。ナデ	
78-1	73	坏	SI15カマド火床面P-27。カマドフク土P-17。	2/3	(13.1)	4.7	5.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	墨書。
78-2	75	坏	SI15床面P-16。カマド住居覆土。カマド確認面	1/4以下	(12.2)	5.3	4.8	ロクロ	ロクロ、タール状物質付着	回転糸切り	灯明具？。
78-3	74	坏	SI15覆土	1/4以下	(12.8)	5.2	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
78-4	77	甕	SI15カマド左脇フク土P-7･8。カマド確認面。フク土	口縁1/3	(21.4)	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
78-5	393	甕	SI15カマド支脚P-24	底部片	－	－	(6.0)	ケズリ	ヘラナデ	砂底	支脚
78-6	76	甕	SI15床直。覆土	口縁1/4	(24.6)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	

図番号	整理	器種	出土地	残存	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	備　　考
79-1	80	甕	SI15煙道フク土P-20。カマド確認面P-2，3。フク土1層P-10	胴部片	－	－	－	ケズリ、炭化物付着	ヘラナデ	－	
79-8	78	小型甕	SI15フク土P-2。フク土	2/3	10.0	10.0	6.6	ヨコナデ、ヘラナデ、ケズリ？	ヨコナデ、ヘラナデ	木葉痕、ナデ	内面の一部ケズリ風
79-9	79	塝	SI15フク土	口縁部片	－	－	－	ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
79-17	373	ミニチュア	SI15覆土。G-15Ⅵ層	1/4	(7.2)	5.4	4.8	ケズリ	ヘラナデ	ケズリ	
79-18	374	ミニチュア	SI15	口縁部片	(8.0)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヘラナデ	－	底部欠失
81-1	270	甕	SD23、K-16・17、12層。K-16、6層。SI16カマド底面。SI16ピット5フク土P-49。SI16ピット5フク土。SI16周溝フク土P-48。SK32フク土P-13。	口縁部	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ？	－	砂粒多量混入
81-2	269	甕	SD23、K-16・17、10層。K-16・17フク土上層。K-163層。K-16、6層。K-16、11層。SI16床面P-7。SI16床直P-12。SK32フク土P-2、15。	口縁部	21.1	－	－	ヨコナデ、ケズリ、化粧粘土	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
81-3	84	甕	SI16床面P-6，46。カマド床面P-27	破片	－	－	－	ケズリ	ユビナデ、ヘラナデ	－	
81-4	83	甕	SI16床面P-5	口縁部片	(15.0)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	小礫多量混入。
81-5	81	甕	SI16カマド床面P-31，35～38，40～43。カマド底面	1/2	13.2	－	－	ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	底部欠失
81-6	85	小型甕	SI16ピット4セクション6層	破片	(11.2)	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
81-7	82	塝	SI16床直P-25	破片	－	－	－	ヘラナデ、ケズリ	ヨコナデ、ユビナデ	－	
81-9	375	ミニチュア	SI16床面、床直P-17、24	口縁部片	(9.3)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
82-1	86	坏	SI18掘り方P－4	底部片	－	－	(5.1)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
83-1	87	坏	SI19P-8。カマド煙道フク土。	1/3	(12.4)	5.2	6.0	ロクロ、タール状物質付着	ロクロ、タール状物質付着	回転糸切り。ヘラナデ	灯明具として再利用
86-1	93	坏	SI20内ピット8フク土P-1。2層	略完形	12.3	5.8	5.2	ロクロ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り	
86-2	91	坏	SI20床直P-44	2/3	(12.6)	5.0	5.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
86-3	92	坏	SI20床直P-24。フク土	略完形	11.5	5.4	5.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	硬質。
86-4	90	坏	SI20内ピット20フク土P-2	略完形	12.2	5.3	6.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	小礫中量混入。
86-5	94	坏	SI20床直P-3，4。フク土	口縁部片	(12.4)	－	－	ロクロ	ロクロ	－	
86-6	95	坏	SI20フク土。	口縁部片	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	ヘラ記号「X」
86-7	88	坏	SI20床直P-42	底部片	－	－	5.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
86-8	89	坏	SI20床直P-5	底部片	－	－	4.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
86-9	359	坏	SI20フク土。	底部	－	－	－	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	耳皿か
86-10	108	高台付坏	SI20床直P-12、82。フク土		－	－	(14.4)	ロクロ	ロクロ、ユビナデ		大ぶり
87-12	96、97	甕	SI20床直P-32，47～49、50～53，55，56，66，67，83。カマド確認面P-33，34，38。カマド付近フク土。フク土。床直P-6。	2/3	(23.0)	(29.6)	8.0	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ、ハケメ	一部ヘラナデ	
87-13	98	甕	SI20床直P-23、27，34，71。フク土P-22、40，69。SI15フク土。M-13Ⅰ層。M-14Ⅰ層。	1/2	(13.2)	－	－	ヨコナデ、ケズリ、化粧粘土	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
87-14	100	甕	SI20カマド芯材。カマド確認面P-26、28	口縁部片	(25.6)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
87-15	102	甕	SI20床面P-108	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
87-16	103	甕	SI20床直	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
87-17	101	甕	SI20フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ユビナデ	－	補修孔2個。
87-18	104	甕	SI20床直P-29、30，89。フク土	胴部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヘラナデ	－	小礫多量混入。
87-19	99	甕	SI20床直P-11，92～9496，99，100，101，103～105。フク土P-70	略完形	13.6	14.6	7.5	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	木葉痕	小礫中量混入
88-20	107	甕	SI20床直P-32	底部	－	－	6.6	ケズリ	ヘラナデ	木葉痕	
88-21	109	甕	SI20床直P-64	底部片	－	－	(8.0)	ケズリ	ヘラナデ	簾状圧痕	小礫多量混入。
88-22	105	甕	SI20カマド支脚	底部	－	－	7.2	ケズリ	ヘラナデ	砂底	

図番号	整理	器種	出土地	残存	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	備　　考
88-23	106	甕	SI20床直P-28	底部	－	－	6.2	ケズリ	ヘラナデ	砂底	
88-24	377	ミニチュア	SI20	1/5	－	－	2.7	ナデツケ？(摩滅)	ナデツケ？	ナデツケ？	内外面摩滅
88-25	376	ミニチュア	SI20	1/3	(5.2)	(5.1)	(4.6)	ロクロ、ヘラ記号	ロクロ	糸切り？	ヘラ記号
92-2	110	坏	SI23・4層	口縁1/4	(11.4)	－	－	ロクロ	ロクロ	－	
92-3	115	甕	SI23・5層	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
92-4	111	甕	SI23床面P-3,5。床直P-20。3層P-15	1/4	(21.4)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
92-5	113	甕	SI23床面P-16､21	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	小礫多量混入。
92-6	116	甕	SI23・5層	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ、ユビナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
92-7	114	甕	SI23床面P-3,6	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
92-8	117	甕	SI23床面P-9。床直P-7，8	底部	－	－	(6.2)	ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	
92-9	112	小型甕	SI23床直P-12,13。SI44床面P-35。SI44床直P-28	1/2	11.2	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	SI44小片4、SI23大片2
94-1	118	皿？	SI24、1層P-52	1/3	(14.7)	－	－	ロクロ	ロクロ	－	内面に煤付着
94-2	119	甕	SI24カマド5層P-92	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
94-3	120	甕	SI24床面P-85	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、不明	－	
94-9	378	ミニチュア	SI24床面P-97	1/4	(6.8)	(4.9)	(4.0)	ユビ圧痕	ユビ圧痕	－	
94-10	379	ミニチュア	SI24　確認面	ほぼ完形	(3.4)	(3.5)	1.5	ユビ圧痕、ヘラ記号	ユビ圧痕	ユビ圧痕	壺。ヘラ記号？あり
94-11	380	ミニチュア	SI24　覆土	完形	2.5	3.8	1.2	ユビナデ	ユビナデ	ユビナデ？	
95-1	121	坏	SI25床直P-1	1/4	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	ゆがみあり。
95-2	122	甕	SI25床直P-3	底部	－	－	8.5	ケズリ	ヘラナデ、黒色	ケズリ	
97-1	123	坏	SI26フク土	底部片	－	－	6.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	墨書あり。
97-2	124	甕	SI26カマド支脚P-1	底部	－	－	7.6	ケズリ	ヘラナデ	ケズリ	
98-1	125	坏	SI27床面P-1	1/4	－	－	(5.2)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
98-2	126	甕	SI27カマド確認面	口縁部片	(21.6)	－	－	ヨコナデ、ケズリ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
100-1	128	坏	SI29カマド上P-7,8	1/3	(11.4)	5.0	(5.4)	ロクロ、煤状炭化物付着	ロクロ、煤状炭化物付着	回転糸切り	灯明具として再利用？
100-2	129	坏	SI29掘り方	1/4	(11.8)	4.9	(6.0)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
100-3	130	坏	SI29カマド上P-6	底部片	－	－	(5.6)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
100-4	127	坏	SI29カマドsec7層P-19	底部片	－	－	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
100-5	131	甕	SI29カマドsec7層P-17	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ、ユビナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
100-6	132	甕	SI29床面P-2	底部	－	－	6.3	ケズリ	ヘラナデ	ケズリ、ナデ	底部肥厚。
101-1	133	坏	SI30掘り方P-9，11	2/3	11.6	5.3	6.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
102-1	134	甕	SI32カマド1層P-8。6層P-6	口縁部片	(17.4)	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
103-3	135	甕	SI33カマドP-9	口縁部片	(22.2)	－	－	ヨコナデ、不明	ヨコナデ、不明	－	器面摩滅
103-4	136	甕	SI33カマド床面P-3,4、S-2。床直P-1	底部	－	－	(8.2)	ケズリ	ナデ、ユビ圧痕	ケズリ	
105-1	139	坏	SI35カマドP-16。	底部片	－	－	4.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り、ヘラナデ	
105-2	140	甕	SI35カマド支脚P-17	底部片	－	－	8.8	ケズリ	ヘラナデ	砂底	小礫多量混入。
105-3	137	甕	SI35カマドP-10。	口縁部片	(14.4)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
105-4	138	甕	SI35床面P-3,4。床直P-2。カマド支脚P-17～20,22。カマドP-11。フク土		－	－	－	ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	細片多数が接合
108-1	141	坏	SI36ピット2フク土	1/4	(11.6)	－	－	ロクロ	黒色処理、ミガキ	－	
108-2	143	甕	SI36フク土P-22	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
108-3	144	甕	SI36床面。床直P-3	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ユビナデ	－	
108-4	142	甕	SI36カマド上層P-17。カマドフク土P-33,34	口縁1/2	(13.0)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
108-5	145	甕	SI36フク土P-2。	底部	－	－	6.9	ケズリ	ヘラナデ、ハケメ		

図番号	整理	器種	出土地	残存	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	備　考
108-11	381	ミニチュア	SI36カマドフク土	略完形	6.3	5.5	4.5	ロクロ	ロクロ	静止糸切り	
109-1	189	坏	SI44床直P-23	1/2	13.8	3.7	5.3	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	皿？
109-2	146	坏	SI44床直P-24	底部	－	－	(5.6)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
109-3	147	甕	SI44床面P-42,49。床直P-27,32	口縁部片	(13.8)	－	－	ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
110-1	148	坏	SI45床直P-12	底部片	－	－	5.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
110-2	149	甕	SI45フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
110-3	152	甕	SI45フク土	口縁部片	－	－	－	ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
110-4	150	甕	SI45内周溝フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	－	
110-5	151	甕	SI45、6層P-1	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	内面に煤付着
112-1	154	甕	SI48フク土	底部	－	－	(5.6)	ケズリ	ヘラナデ	ナデ	底部肥厚。
112-2	153	甕	SI48、ピットフク土P-1	底部	－	－	9.5	ケズリ	ヘラナデ	砂底	
113-1	155	坏	SI49フク土	口縁部片	(12.4)	－	－	ロクロ	ロクロ	－	
113-2	156	甕	SI49カマドフク土	口縁部片	(22.9)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケメ	－	
113-3	157	甕	SI49カマドフク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ユビナデ	－	
113-4	159	甕	SI49フク土P-3	底部片	－	－	7.0	ケズリ	ユビナデ	ケズリ	
113-5	158	甕	SI49カマドフク土	底部片	－	－	(8.8)	ケズリ	ユビナデ、ヘラナデ	ケズリ	
114-1	166	坏	SI50ピットフク土P-1	胴部下半1/2	－	－	6.9	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
114-2	160	坏	SI50フク土	1/4	(12.6)	5.4	5.6	ロクロ	ロクロ(内面剥落)	回転糸切り	
114-3	161、162	甕	SI50カマドフク土。カマド2確認面。カマド2覆土	口縁部片	(20.6)	－	－	ロクロ、ケズリ	ロクロ、ヘラナデ	－	
114-4	163	甕	SI50カマド2確認面。	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
114-5	164	甕	SI50カマド2フク土	口縁部片	－	－	－	ロクロ、ケズリ、ヘラナデ	ロクロ、ハケメ	－	161･162と同一個体？
114-6	165	甕	SI50ピット6フク土P-1	底部	－	－	9.2	ケズリ	ヘラナデ	ナデ	
117-1	167	坏	SI54床直P-4,5。掘り方。フク土	1/3	(11.0)	－	－	ロクロ	ロクロ	－	
117-2	364	高台付坏？	SI54フク土。	破片	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	
117-3	170	甕	SI54床直P-1,3	口縁部片	－	－	－	ケズリ、指頭圧痕	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
117-5	168、169、171	甕	SI54フク土。床直P-2	口縁部片	(19.5)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
119-1	173	坏	SI55フク土P-7	底部片	－	－	4.8	ロクロ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	
119-2	172	坏	SI55床直P-2。フク土	略完形	11.2	5.2	6.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
119-3	174	甕	SI55カマドフク土P-11,15,18,19,21。	口縁部	(25.6)	－	－	ヨコナデ、ケズリ、指頭圧痕	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
119-4	176	甕	SI55カマド支脚7層P-27。カマド7層P-26。カマドフク土P-12～14。	底部1/2	－	－	7.2	ケズリ	ヘラナデ	ケズリ	
119-5	175	甕	SI55カマドフク土P-20,22。	口縁部片	(15.0)	－	－	ケズリ	ヘラナデ	－	
121-1	177	皿？	SI56床直P-14	1/2	(10.9)	3.5	5.4	ロクロ	ロクロ	糸切り後、粘土貼り付け？	
121-2	180	甕	SI56床面P-7	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、煤付着	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
121-3	179	甕	SI56床面P-13	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
121-4	181	甕	SI56床面P-25	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
121-5	178	甕	SI56フク土P-21	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
124-1	182	甕	SI58床直P-4	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	182と同一？
124-2	183	甕	SI58床面P-11	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	183と同一？
124-3	185	甕	SI58カマド床直P-12	底部	－	－	9.2	ヘラナデ、ケズリ	ユビナデ	砂底、一部ケズリ	
124-4	184	甕	SI58フク土	底部	－	－	(5.4)	不明	ヘラナデ	ナデ	小礫多量混入。

図番号	整理	器種	出土地	残存	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	備　考
125-1	186	坏	SI60床面P-1	略完形	11.6	5.1	5.8	ロクロ、タール状物質付着	ロクロ、タール状物質付着	回転糸切り	口縁打ち欠き。灯明具に再利用
126-1	187	坏	SI62カマド支脚	略完形	12.0	5.5	5.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
126-2	188	甕	SI62フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、不明	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
128-1	195	甕	SI62カマドフク土P-4。フク土	口縁1/3	(20.2)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
128-2	196、197	甕	SI65フク土。カマドフク土。	口縁部片	(21.8)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
128-3	199	甕	SI65カマドフク土P-2	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
128-4	198	甕	SI65カマド付近フク土。	口縁部片	－	－	－	ヘラナデ	不明	－	
128-5	394	甕	SI65カマド支脚(注記は覆土)	底部	－	－	(10.0)	ケズリ	ヘラナデ	砂底	
128-6	382	ミニチュア	SI65フク土。	1/3	(8.0)	－	－	ケズリ	ヘラナデ	－	
129-14	200	坏	SI66ピット1フク土	1/4	(12.8)	4.9	5.2	ロクロ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り	
129-15	201	甕	SI66内床下土坑フク土。フク土	口縁部片	(13.0)	－	－	不明、炭化物付着	ヘラナデ、炭化物付着	－	
130-1	202	坏	SI67床面	底部片	－	－	4.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
131-1	203	甕	SI68床面P-2	底部片	－	－	(7.6)	ケズリ	ヘラナデ		
132-1	204	皿	SI69、8層	略完形	13.7	2.9	6.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	砂粒中量混入
132-2	205	甕	SI69トレンチⅡ層	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ユビナデ？	ヨコナデ、ユビナデ？	－	
135-1	207	坏	SK19、1層P-1。SK19フク土。	完形	13.7	4.8	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	底面にヘラ記号「X」
135-2	232	甕	SK91フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、指頭圧痕	ヨコナデ、ユビナデ	－	
135-5	208	坏	SK21	完形	13.5	4.1	5.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
135-6	209	坏	SK21床面P-15。フク土	1/4	(13.0)	5.5	(5.8)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
135-7	210	甕	SK21床面P-12, 16, 20, 22, 27, 29, 33。4層P-8, 9, 11。フク土。R-17Ⅰ層。	底部1/2	－	－	8.6	ケズリ	ヘラナデ	砂底	
135-8	192	坏	SI64フク土	1/3	(13.6)	5.2	(5.4)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
135-9	190	坏	SI64フク土	底部片	－	－	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
135-10	193	甕	SI64フク土	破片	－	－	－	ナデ、ミガキ→黒色処理、ナデ、ミガキ	ミガキ→黒色処理	－	
135-11	194	甕	SI64内土坑フク土	底部片	－	－	(8.2)	ケズリ	ヘラナデ	砂底	
140-5	244	坏	SK111フク土	略完形	13.3	5.2	5.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
149-1	206	坏	SK18フク土、2層P-1	1/2	－	－	5.2	ロクロ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	
149-2	213	坏	SK23フク土P-1。フク土	1/3	(12.6)	6.6	4.7	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
149-3	219	小型甕	SK56、3層P-1。フク土P-1	口縁1/2	(10.6)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
149-4	214	坏	SK32フク土P-16	略完形	12.0	5.6	6.2	ロクロ、タール状物質付着	ロクロ、タール状物質付着	回転糸切り	灯明具に再利用
149-5	239	甕	SK32フク土P-4	底部1/4	－	－	(7.2)	ケズリ	ヘラナデ、ユビナデ	砂底	
149-6	215	甕	SK32フク土P-10	1/3	(15.2)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
149-7	218	坏	SK54フク土P-8	1/4	(11.1)	5.6	(5.1)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
149-8	216	坏	SK54、11層P-51	1/2	(12.4)	5.2	6.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
149-9	217	坏	SK54、12層P-48	2/3	(13.2)	5.0	5.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	器面摩滅
149-10	227	坏	SK83フク土	1/4以下	(13.2)	－	－	ヘラナデ、ケズリ	黒色処理、ミガキ	－	
149-11	226	坏	SK83、4層フク土	1/3	(12.4)	5.4	5.6	ロクロ、タール状物質付着	黒色処理、ミガキ。タール状物質付着	回転糸切り	灯明具に再利用
149-12	225	坏	SK83フク土	1/2	(13.1)	5.4	5.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
149-13	228	坏	SK83フク土	底部	－	－	5.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
149-14	229	甕	SK83、5層	体部上半	(13.1)	－	－	ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
149-15	231	甕	SK83フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ、ミガキ、黒色処理	－	内黒の甕

図番号	整理	器種	出土地	残存	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	備　　考
149-16	230	鍋	SK83フク土	口縁部片	－	－	－	ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
150-1	222	坏	SK63フク土	1/4	(12.5)	－	－	ロクロ	ロクロ	－	
150-2	221	坏	SK63フク土	1/3	(12.6)	5.1	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
150-3	223	甕	SK63フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
150-4	224	坏	SK79フク土	1/2	(12.7)	5.1	(6.0)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
150-5	234	皿	SK96フク土	2/3	(14.4)	3.2	6.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
150-6	233	坏	SK96底面直上。フク土	略完形	12.0	5.4	5.5	ロクロ、タール状物質付着	ミガキ、黒色処理、タール状物質付着	回転糸切り	灯明具に再利用
150-7	235	坏	SK96フク土	1/4	(11.3)	5.5	6.3	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
150-8		把手付土器	SK96覆土上部	把手部分	－	－	－	ヘラミガキ	－	－	
150-9	238	甕	SK96底面直上。フク土	底部	－	－	(6.4)	ケズリ	ヘラナデ	砂底	
150-10	237	甕	SK96底面直上。フク土	底部	－	－	(7.8)	ケズリ	ヘラナデ	砂底	
150-11	241	小型甕	SK96底面直上。フク土	体部上半	(11.6)	－	－	ヨコナデ、ケズリ、指頭圧痕	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
150-12	236	甕	SK96底面直上。フク土	口縁部	(23.8)	－	－	ヨコナデ、ケズリ、ユビナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
150-13	243	甕	SK99フク土	底部	－	－	6.4	ケズリ	ヘラナデ	砂底	内外面に炭化物付着
150-14	242	甕	SK99フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	砂粒多量混入
150-15	245	甕	SK116フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
152-23	383	ミニチュア	SK83	底部片	－	－	4.4	不明	ヘラナデ	ナデ？	底部破片。
153-1	309	坏	SD58フク土	1/5	(12.6)	5.3	(5.2)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
172-1	246	坏	SD09,H-34フク土P-14	底部	－	－	4.1	ロクロ	ロクロ、炭化物付着	回転糸切り	
172-2	272	坏	SD26フク土P-2	底部	－	－	5.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
172-3	276	坏	SD35フク土	底部片	－	－	(5.0)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
172-4	273	坏	SD27P-21	底部	－	－	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
172-5	274	甕	SD27P-9,10。フク土	口縁部	(19.4)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
172-6	275	小型甕	SD27P-6	底部	－	－	6.0	ロクロ、ケズリ	ロクロ、ヘラナデ	ケズリ	
172-7	278	坏	SD36､B･C-26フク土	1/2	(11.5)	4.3	6.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	内外面に炭化物付着。
172-8	279	坏	SD36､R-27フク土	1/2	(11.8)	5.3	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	器面アレている
172-9	277	坏	SD36､B･C-26フク土	略完形	12.5	6.2	5.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	砂粒多量混入。
172-10	280	小型甕	SD36、B･C-26フク土。SD36、B-27フク土	口縁部	(12.6)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
172-11	283	坏	SD40、C-17付近フク土。	底部	－	－	4.2	ロクロ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り	
172-12	282	坏	SD40、C-17付近フク土。	底部片	－	－	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
172-13	284	甕	SD40、C-17付近フク土。	口縁部片	(17.2)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
172-14	285	甕	SD40、C-17付近フク土。	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
172-15	286	坏	SD41フク土	略完形	11.3	5.8	4.2	ロクロ、底辺にケズリ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り	黒色部はとんでいる。
172-16	288	坏	SD41フク土P-4。B-20付近フク土P-3	2/3	(12.1)	4.5	5.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
172-17	287	坏	SD41、A-19付近フク土	1/4	(12.8)	5.1	(5.6)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
172-18	289	小型甕	SD41フク土	底部欠質	(9.9)	－	－	ケズリ	ヘラナデ	－	
172-19	290	甕	SD41フク土P-6,8	底部片	－	－	(8.8)	ケズリ	ヘラナデ	－	
173-1	292	甕	SD47､B-15付近フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
173-2	293	甕	SD47フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
173-3	291	甕	SD47下層	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
173-4	365	耳皿片？	SD47フク土(B-15付近)	破片	－	－	－			－	
173-5	294	甕	SD48フク土	口縁部片	(10.4)	－	－	ケズリ	ヘラナデ	－	
173-6	295	甕	SD50フク土	口縁部	(13.6)	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	

図番号	整理	器種	出土地	残存	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	備　　考
173-7	296	甕	SD50フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ、ケズリ	ヨコナデ、不明	－	
173-8	367	塝	SD50フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
173-9	308	坏	SD57フク土	1/3	(12.8)	(5.1)	(4.8)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
173-10	298	坏	SD54フク土	1/4	－	－	5.2	ロクロ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り	
173-11	300	坏	SD54フク土	口縁部片	(15.0)	－	－	ロクロ	ロクロ	－	
173-12	297	坏	SD54フク土	胴部下半	－	－	5.3	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
173-13	299	坏	SD54フク土	1/4以下	－	5.1	－	ロクロ、タール状物質付着	ロクロ、タール状物質付着	回転糸切り	灯明具？
173-14	302	甕	SD54フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、不明	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
173-15	301	小型土器	SD54フク土	1/3	(8.1)	6.2	7.3)	ヨコナデ、ユビナデ	ヨコナデ、ユビナデ	ヘラナデ	
173-16	306	小型土器	SD54フク土	底部	－	－	(7.4)	ケズリ	ヘラナデ	ナデ	
173-17	304	小型甕	SD54フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
173-18	303	甕	SD54フク土	口縁部片	－	－	－	ロクロ、ヘラナデ	ロクロ	－	
173-19	305	小型	SD54フク土	底部	－	－	－	ケズリ	ヘラナデ	－	
173-20	315	坏	SD65フク土	底部	－	－	5.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
173-21	317	甕	SD65フク土	底部	－	－	5.4	ケズリ	ユビナデ	砂底	
173-22	316	甕	SD65フク土	底部	－	－	6.2	ケズリ	ユビナデ		
173-23		把手付土器	SD65覆土	把手部分	－	－	－	ヘミガキ	－	－	
174-1	311	坏	SD64フク土	1/2	(11.6)	(4.3)	(5.2)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
174-2	310	坏	SD64フク土	1/2	(12.6)	5.1	5.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
174-3	314	甕	SD64フク土	口縁部	(15.8)	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケメ、ミガキ？	－	
174-4	313	甕	SD64フク土	口縁部	(13.6)	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
174-5	318	坏	SD67､E-28フク土	2/3	14.3	4.7	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
174-6	319	坏	SD67､D-25フク土	1/5	(11.7)	5.9	4.8	ロクロ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り	
174-7	320	坏	SD67､D-25フク土	1/4	(10.6)	4.6	(4.5)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
174-8	321	小型甕	SD67､D-25フク土。SD68フク土。	口縁1/4	(11.0)			ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	火ハジケあり
174-9	322	甕	SD67､D-25フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	小礫中量混入
174-10	323	皿	SD67フク土	破片	－	－	－	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	肥厚。
174-11	324	小型甕	SD69フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
174-12	325	甕	SD71フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
174-13	327	甕	SD73フク土	口縁部片	－	－	－	ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
174-14	326	甕	SD73フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
174-15	329	甕	SD77フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
174-16	328	坏	SD77フク土	1/3	(12.8)	5.6	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
174-17	330	甕	SD78フク土	底部	－	－	5.5	ケズリ	ユビナデ	砂底	
174-18	331	甕	SD79フク土	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
177-5	389	ミニチュア	SD41	完形	3.2	3.2	1.7	ヘラナデ？	ヘラナデ？	ユビ圧痕	完形。
177-13	390	ミニチュア	SD66(E-28)	3/4	(7.0)	6.8	5.9	ユビナデ、ケズリ	ヘラナデ	ナデ	
177-14	392	ミニチュア	SD77	口縁部片	(8.0)	－	－	ロクロ	ロクロ	－	
177-16	391	ミニチュア	SD71	1/3	(5.8)	(5.3)	(3.0)	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	ナデ	
179-1	55	甕	SX01道跡。K－32底面直上P-1	破片	－	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ、化粧粘土	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
180-1	332	甕	2号埋設。SK99フク土	2/3	(23.1)	27.8	9.2	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	砂底	口縁の大半を欠失。
180-2	333	坏	3号埋設P-1	1/2	(13.6)	5.9	(6.4)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	硬質。
180-3	334	小型甕	3号埋設1層P-2	略完形	10.0	10.4	6.2	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	無調整	内外面に炭化物付着

図番号	整理	器種	出土地	残存	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	備　　考
180-4	335	甕	3号埋設1層P-2。	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
180-5	336	甕	3号埋設1層P-1	底部	－	－	10.0	ケズリ	ヘラナデ	ケズリ	
180-6	337	小型甕	SX02確認面P-1	略完形	10.0	7.4	(6.7)	ヘラナデ、ケズリ	ヘラナデ	ケズリ？	
181-1	351	坏	B－23Ⅱ層	1/4	(12.3)	4.2	5.0	ロクロ	ロクロ、黒色処理	回転糸切り	ミガキ痕跡なし。
181-2	339	坏	C－32Ⅱ層	1/3	(11.5)	5.7	(4.4)	ロクロ	ミガキ、黒色処理	－	
181-3	348	坏	E－22Ⅱ層	1/5	(12.7)	6.2	(4.0)	ヘラナデ、ケズリ	ミガキ、黒色処理	ヘラナデ	
181-4	349	坏	H－31Ⅰ層	破片	－	－	－	ロクロ	ミガキ、黒色処理	－	
181-5	341	坏	F－29Ⅱ層	1/2	(11.3)	4.9	(5.3)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
181-6	346	坏	OX－24Ⅱ層	1/4	(12.8)	5.0	5.7	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
181-7	338	坏	F－32Ⅱ層	2/3	(13.1)	5.1	4.9	ロクロ	ロクロ	回転糸切り、ヘラ記号	ヘラ記号「X」
181-8	345	坏	D－25。D－28	1/3	(11.4)	5.8	6.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
181-9	350	坏	A－17Ⅱ層	1/3	(13.1)	5.1	5.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
181-10	340	坏	B－22付近　Ⅲ層	1/4	(13.0)	5.7	4.9	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
181-11	358	坏	M－33Ⅰ層	破片	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	ヘラ記号あり
181-12	344	坏	OZ－13付近Ⅲ層	1/4	(12.5)	－	－	ロクロ	ロクロ	－	
181-13	342	坏	表採	底部	－	－	6.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
181-14	343	坏	G－29Ⅱ層	口縁部片	－	－	－	ロクロ	ロクロ、タール状物質付着	－	灯明具に再利用？
181-15	352	坏	D－29Ⅱ層	底部	－	－	5.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	底面にヘラ記号「X」
181-16	347	坏	表採	1/3	－	－	4.9	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
181-17	361	高台付	E－20	底部片	－	－	(6.4)	ケズリ	ヘラナデ		高台付
181-18	362	高台付	H－26Ⅱ層。	底部	－	－	－	ロクロ	ミガキ、黒色処理	黒色処理？	高台付
181-19	353	坏	B－14Ⅱ層	底部片	－	－	5.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	底面にヘラ記号
181-20	356	甕	B－17Ⅰ層	口縁部	(11.8)	－	－	ヘラナデ、ケズリ	ユビナデ	－	
181-21	355	甕	B－17Ⅱ層。B－19Ⅱ層。C－17Ⅱ層	口縁部	(12.4)	－	－	ヨコナデ、ヘラナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
181-22	369	塝	OZ－23Ⅱ層。	口縁部片	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
181-23	357	甕	G－8Ⅳ層(地山直上)	底部	－	－	5.8	ケズリ	ヘラナデ	笹の葉？	
183-1	387	ミニチュア	D－23、Ⅰ層	1/2	(5.9)	4.8	4.2	ユビナデ、指頭圧痕	ユビナデ	ナデ	1/2。
183-2	388	ミニチュア	D－25、Ⅰ層	1/3	(5.9)	5.9	3.9	ナデ？	ヘラナデ	ナデ？	1/3。
183-3	363	ミニチュア	P－19Ⅰ層	底部	－	－	5.8	不明	ヘラナデ	砂底	
183-4	360	壺	D－17Ⅱ層。	口縁部片	－	－	－	不明	黒色処理	－	外耳片。
191-5	384	ミニチュア	SD01(E-24)	胴部	－	－	－	ロクロ？	ロクロ	－	壺胴部破片
191-11	271	坏	SD25、N-25フク土。M･N-15フク土。	1/5	(12.0)	4.9	(5.6)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
191-12	368	塝	SD39、B-17付近フク土。SD41フク土	口縁部片	－	－	－	ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	－	
191-16	281	皿	SD39、D-21付近フク土。	口～底部	(14.2)	3.3	(6.0)	ロクロ、ナデ	ロクロ	回転糸切り	
191-1	220	坏	SK62フク土	1/2	(13.5)	5.4	(5.8)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	

表14　須恵器観察表

図	番	整番	産地	遺構名	出土位置	層位	器種	部位	法量(cm)			外面調整	内面調整	断面色調	含有物	備　考	接合状況		
									口径	器高	底径						同遺構	他遺構	遺構外
54	5	16	五所川原	内壕	Q-15付近	覆土	杯	略完形	(11.6)	5.1	(5.0)	ロクロ	ロクロ	灰黄色	石英,海綿骨針	火襷痕,回転糸切り,分1			
54	6	1381		内壕	M-23	底面	杯	略完形	(12.6)	4.8	5.5	ロクロ	ロクロ	オリーブ灰	石英	火襷痕,回転糸切り			
54	7	60		内壕	S-24	18	杯	口縁～胴	(10.8)	－	－	ロクロ	ロクロ	灰白色	石英,海綿骨針	火襷痕			
54	8	65		内壕	R-15	下位層	杯	口縁～胴	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針	ヘラ記号,火襷痕			
54	9	299	五所川原	内壕	M-16	下位	鉢	口縁～底	(12.9)	(12.1)	(7.8)	ロクロ,(胴,底部)ケズリ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針	ヘラ記号,火襷痕,底部に布圧痕,自然柚,分6			N-16
54	10	397		内壕	K-21	10	壺	頸部	－	－	－	ロクロ,ケズリ	ロクロ	暗赤褐色	石英	自然柚			
54	11	510		内壕	P-13	上位層	壺	胴部	－	－	－	ロクロ	ロクロ	にぶい赤褐色	石英,海綿骨針	ヘラ記号,自然柚			
54	12	1284		内壕	ベルト3	覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	－	灰白色	石英,海綿骨針	1272,1280(SI36,56)と同一	L-18 5層	SD23 M-14 中位	
54	13	319		内壕	S-24	14	甕	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	にぶい赤褐色	石英				
54	14	884		内壕	M-23	9	甕	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰色	石英				
54	15	889		内壕	L-22	中位層	甕	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	にぶい赤褐色	石英	自然柚	K-21,M-22上位		
54	16	959		内壕	ベルト3	覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	－	暗赤褐色	石英,海綿骨針		P-3		K-22,23
54	17	1004		内壕	L-22	8	甕	頸部	－	－	－	ロクロ,格子タタキ	ロクロ	にぶい赤褐色	石英,海綿骨針			SD23 K-16 14	
54	18	18		内壕	R-25	14層	甕	底部付近	－	－	－	平行タタキ	当具痕	橙色、灰色	石英,海綿骨針				
55	1	1204	不明	内壕	O-24	上位	甕	胴部	－	－	－	格子タタキ	当具痕	灰色	石英	分33	ベルト3 覆土		
55	2	1144		外壕	M-14	中位層	甕	胴部	－	－	－	格子タタキ	ヘラナデ	灰色	石英,海綿骨針				M-19
55	8	153		外壕	K-16	9	杯	底部	－	－	4.5	ロクロ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針	ヘラ記号,火襷痕,転用硯,回転糸切り			
55	9	67	不明	外壕	L-24	中位層	杯	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰白色	海綿骨針	火襷痕,分2			
55	10	145		外壕	M-24	底面	杯	口縁(小)	(11.4)	4.9	(4.8)	ロクロ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針	火襷痕,回転糸切り			Q-27
55	11	359	不明a	外壕	N-26	中位	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐灰	－	358(SD03)と同一,自然柚,分14			
55	12	473		外壕	P-27	中位	壺	胴部	－	－	－	ロクロ,ケズリ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針			SD28,Q-28覆土	
55	13	322		外壕	I-21	14	壺	口縁	(9.6)	－	－	ロクロ	ロクロ	暗赤褐色	石英	自然柚			
55	14	335		外壕	N-26	1	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	明赤褐	石英		O-26,1層		
55	15	362	不明	外壕	P-27	2	壺	口縁～胴	(15.1)	－	－	ロクロ	ロクロ、ヘラナデ	褐灰色	石英	分17			D-35
55	16	878	不明a	外壕	N-32	2	壺	胴部	－	－	－	ロクロ,胴部下半ケズリ	ロクロ	灰黄色	石英	589(SD03)と同一,分26		SD03	
57	1	1		SI01	pit9	覆土	杯	略完形	(12.1)	4.9	(4.9)	ロクロ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針	ヘラ記号,火襷痕,回転糸切り		なし	
61	15	1118	五所川原	SI03	カマド	火床面直上	甕	胴部								分30	カマド覆土	SD22 R-15,L-22下位層	K-23
61	16	528	五所川原	SI03	O-24	1	壺	胴部	－	－	－	ロクロ,ケズリ	ロクロ	褐色	石英	分24		SD22、O-24、P-24、Q-25中位層	S-19
61	17	554	五所川原	SI03		床面	壺	胴部	－	－	－	ロクロ,ケズリ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針	分25		SI03、SD22、K-22、上位	
63	7	863		SI04	pit8	覆土	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	にぶい赤褐色	石英				
63	8	1172		SI04		覆土	甕	頸～胴	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐灰	石英	1173(SI06)と同一		SI15,SD22 L-22 10層	
63	9	1325	五所川原	SI04		1	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	当具痕	褐色	石英	分37		SD22 O-15 8層	
63	10	2		SI04		1･2	杯	略完形	(13.5)	4.6	5.3	ロクロ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針	火襷痕,回転糸切り		SK22覆土	
68	19	3		SI06	カマド	袖	杯	略完形	(13.6)	5.3	(5.1)	ロクロ	ロクロ	灰色	石英	回転糸切り	床面	SK22覆土	
68	20	1242		SI06	カマド	覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	当具痕	褐灰	石英				
68	21	1173	不明a	SI06	カマド	覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	当具痕	褐灰	石英	1172(SI04)と同一,分32			
72	3	152		SI10		覆土	杯	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針			SD23	
73	1	4		SI13		貼り床	杯	略完形	(12.8)	5.9	(4.3)	ロクロ	ロクロ	橙	石英	ヘラ記号,回転糸切り			J-5,I-6
79	10	6		SI15	P2	覆土	杯	略完形	12.1	5.5	5.2	ロクロ	ロクロ	橙	石英	火襷痕,回転糸切り			
79	11	5		SI15		覆土	杯	略完形	(12.3)	5.5	6.0	ロクロ	ロクロ	灰白色	石英	ヘラ記号,火襷痕,回転糸切り			
79	12	7		SI15		床面	杯	略完形	(12.2)	5.2	4.6	ロクロ	ロクロ	橙	石英	ヘラ記号,回転糸切り			
79	13	354	五所川原	SI15		覆土	鉢	口縁	(11.2)	－	－	ロクロ	ロクロ	褐色	石英,海綿骨針	分12			

図	番	整番	産地	遺構名	出土位置	層位	器種	部位	法量(cm)			外面調整	内面調整	断面色調	含有物	備　考	接合状況		
									口径	器高	底径						同遺構	他遺構	遺構外
79	14	308		SI15		覆土	壺	口縁	−	−	−	ロクロ	ロクロ	褐灰	石英	自然柚, 302(SK96)と同一			
79	15	340		SI15		床直	壺	口縁	−	−	−	ロクロ	ロクロ	灰色	石英				
79	16	1243		SI15		覆土	甕	胴部	−	−	−	平行タタキ	−	灰色	石英, 海綿骨針				
81	8	1134		SI16	Pit1	2	甕	胴部	−	−	−	平行タタキ	−	灰色	石英	1126, 1127, 1138(SI65, S120, SK32)と同一			K-17
83	2	969	五所川原	SI19		覆土	甕	胴部	−	−	−	平行タタキ, 一部格子	ヘラナデ	褐色	石英	971(SK96)と同一, 分29			
88	26	1387		SI20		床直	杯	略完形	−	−	4.9	ロクロ	ロクロ	橙色	石英, 海綿骨針	ヘラ記号, 回転糸切り			
88	27	262	五所川原	SI20	pit20	覆土	杯	口縁	(14.7)	−	−	ロクロ	ロクロ	橙	海綿骨針	p-3, 火襷痕, 分4			
88	28	28		SI20		覆土	杯	口縁	(10.8)	−	−	ロクロ	ロクロ	灰白色	石英	火襷痕	覆土		
88	29	29		SI20		覆土	杯	底部	−	−	4.8	ロクロ	ロクロ	明黄褐色	石英, 海綿骨針	火襷痕, 回転糸切り			
88	30	405		SI20		覆土	鉢	胴部	最大径(14.0)	−	−	ロクロ	ロクロ	灰色	石英, 海綿骨針	ヘラ記号, 火襷痕		SD23　K-16, 17-10層	J-14, L-14
88	31	332		SI20		覆土	壺	口縁	−	−	−	ロクロ, ケズリ	ロクロ	褐色	石英, 海綿骨針	自然柚		SI55覆土	
88	32	341		SI20		床直	壺	口縁	−	−	−	ロクロ	ロクロ	褐灰	石英				
88	33	380		SI20		覆土	壺	口縁	−	−	−	ロクロ	ロクロ	褐色	石英, 海綿骨針	自然柚			
88	34	379		SI20		覆土	壺	口縁	−	−	−	ロクロ	ロクロ	褐灰	石英, 海綿骨針				
88	35	413	不明	SI20	P-13, 14	3(中位)	壺	胴部	−	−	−	ロクロ	ロクロ	褐灰色	−	自然柚, 分22		SD22	
88	36	975		SI20		覆土	甕	胴部	−	−	−	平行タタキ	−	灰色	石英	p-20			
88	37	945		SI20		床直	甕	胴部	−	−	−	平行タタキ	−	褐色	石英	949(SD54)と同一			
88	38	1206	五所川原	SI20		覆土	甕	胴部	−	−	−	平行タタキ	−	褐灰	石英	分34			
89	39	1127		SI20		覆土	甕	胴〜底	−	−	−	格子タタキ	−	灰色	石英	1126, 1134, 1138(SI16, 65, SK32)と同一		SI65	C-14, M-13
92	1	8		SI23		床面	杯	略完形	13.0	5.0	5.3	ロクロ	ロクロ	橙	石英, 海綿骨針	ヘラ記号, 火襷痕, 回転糸切り			
94	4	10		SI24		床直	杯	口縁〜胴	(13.4)	−	−	ロクロ	ロクロ	褐灰	石英, 海綿骨針	火襷痕	覆土		
94	5	59		SI24		床直	杯	口縁〜胴	(12.2)	4.8	(4.8)	ロクロ	ロクロ	灰色	石英, 海綿骨針	火襷痕			
94	6	9		SI24		覆土	杯	底部	−	−	4.6	ロクロ	ロクロ	灰色	石英, 海綿骨針	ヘラ記号, 火襷痕, 回転糸切り		SI10覆土	
94	7	311	不明	SI24		1	壺	口縁	(10.6)	−	−	ロクロ	ロクロ	褐灰	石英	分8	床下		
94	8	310		SI24		床下	壺	口縁	−	−	−	ロクロ	ロクロ	褐色	石英	自然柚			
101	7	422		SI29	覆土	2	壺	胴部	−	−	(9.6)	ケズリ	ロクロ	褐灰色	石英			SD03(N-32)	N-23, J-31
102	2	11		SI32		覆土	杯	略完形	−	−	5.4	ロクロ	ロクロ	明黄褐色	石英	ヘラ記号(底面), 火襷痕, 回転糸切り			
103	2	12		SI33	カマド	覆土	杯	略完形	(12.9)	4.8	5.1	ロクロ	ロクロ	橙色	石英, 海綿骨針	火襷痕, 回転糸切り			
108	6	548		SI36		床面	壺	胴〜底部	−	−	(9.4)	ケズリ	ロクロ	褐色	石英, 海綿骨針		Pit2覆土		K-37
108	7	312		SI36	Pit4	覆土	壺	口縁	−	−	−	ロクロ	ロクロ	褐色	石英				
108	8	13		SI36		床面	杯	略完形	(11.0)	4.6	5.0	ロクロ	ロクロ	橙色	石英, 海綿骨針	ヘラ記号, 回転糸切り	pit2覆土		
108	9	1272		SI36	カマド	覆土	甕	口縁〜肩	(23.4)	−	−	ロクロ, 格子タタキ	ロクロ、指ナデ	灰白色	石英, 海綿骨針	ヘラ記号, 1280, 1284(SI56, SD22)と同一		SI32　p-2, 3, SD03 O-33覆土	
109	4	1386		SI44	B-22	II	杯	底部付近	−	−	4.3	ロクロ, 底面一部ケズリ	ロクロ	灰白色	石英, 海綿骨針	ヘラ記号, 火襷痕, 回転糸切り			
109	5	14		SI44		1	杯	略完形	(12.4)	5.4	(5.4)	ロクロ	ロクロ	灰色	石英, 海綿骨針	ヘラ記号, 火襷痕, 回転糸切り			
112	3	292		SI48		覆土	杯	底部	−	−	3.8	ロクロ	ロクロ	褐色	石英, 海綿骨針	ヘラ記号, 火襷痕, 回転糸切り	覆土		
115	1	41		SI51		掘り方	杯	口縁	−	−	−	ロクロ	ロクロ	灰白色	石英, 海綿骨針	火襷痕			
115	2	384		SI51		覆土	壺	頸部	−	−	−	ロクロ, 突帯	ロクロ	褐色	石英, 海綿骨針				
115	3	297	不明	SI51		床面	壺	頸〜胴部	最大径(28.0)	−	−	ロクロ, 突帯, 胴部ケズリ	ロクロ	褐色	石英	火ハジケ, 分5	覆土		E-16, F-16
117	4	15		SI54		床直	杯	胴〜底部	−	−	4.6	ロクロ	ロクロ	にぶい黄橙	石英, 海綿骨針	ヘラ記号, 火襷痕, 回転糸切り	覆土		
119	6	313		SI55		覆土	壺	口縁	−	−	−	ロクロ	ロクロ	褐色	石英				

図	番	整番	産地	遺構名	出土位置	層位	器種	部位	法量(cm)			外面調整	内面調整	断面色調	含有物	備　考	接合状況		
									口径	器高	底径						同遺構	他遺構	遺構外
121	6	24		SI56		覆土	杯	口縁～底	(14.2)	5.1	(5.8)	ロクロ	ロクロ	灰白色	石英	ヘラ記号,火襷痕,回転糸切り,26(SI66)と同一	覆土		
121	7	998		SI56		覆土	甕	胴部	－	－	－	格子タタキ	－	褐色	石英,海綿骨針			SD39 B-15	
121	8	892		SI56		床直	甕	胴部	－	－	－	格子タタキ	－	褐色	石英,海綿骨針				
121	9	1280	五所川原	SI56		床面	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	－	褐灰色	石英,海綿骨針	1272,1284(SI36,SD22)と同一,分36			H-33
129	7	314		SI65		覆土	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針				
129	8	1363	五所川原	SI65		覆土	甕	胴部	－	－	－	格子タタキ	当具痕	灰色	石英,海綿骨針	分40			
129	9	917		SI65		覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	当具痕	褐色	石英	割れ口にも柚が付着			
129	10	298		SI65		床面	壺	胴～底部	最大径(15.6)		7.9	ロクロ,(胴,底部)ケズリ	ロクロ	褐色	石英,海綿骨針		覆土		B-14
129	11	1126	不明a	SI65		覆土	甕	口縁～肩	21.0	－	－	格子タタキ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針	ヘラ記号,自然柚,窯壁の溶着痕,1127,1134,1138(S I16,20,S K32)と同一,分31			C-14
129	12	375		SI66		覆土	壺	口縁	(17.0)	－	－	ロクロ	ロクロ	褐灰	石英,海綿骨針	ヘラ記号		SK85	
129	13	26		SI66		覆土	杯	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰白色	石英	24(SI56)と同一			
135	3	324		4号竪穴		焼土	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	黄褐	－				
135	4	360	不明a	2号竪穴		覆土	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐灰	－	分15			
140	1	1233	不明b	2号井戸		覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	当具痕	褐灰	石英	1234(SD03)と同一,分35			
151	1	371		SK33		覆土	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐色	石英				
151	2	185		SK32		覆土	杯	口縁	(11.2)	－	－	ロクロ	ロクロ	明黄褐色	石英,海綿骨針	火襷痕			
151	3	887	不明	SK32		覆土	甕	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐灰	石英	自然柚,分28			
151	4	463		SK32		覆土	壺	底部	－	－	(11.8)	ケズリ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針				
151	5	1138		SK32		覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	－	灰色	石英	1126,1127,1134(SI16,20,65)と同一,窯壁付着			
151	6	1080		SK32		覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	ヘラナデ	にぶい赤褐色	石英				
151	7	628		SK54		覆土	壺	胴～底部	－	－	(14.6)	ケズリ,底面菊花状	ヘラナデ	褐灰	石英	菊花文a			
151	8	1008		SK54		覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	－	褐色	石英,海綿骨針			SI51覆土	F-20
151	9	1245		SK63		覆土	甕	胴部	－	－	－	ロクロ,格子タタキ	ロクロ	暗赤褐色	石英,海綿骨針				
151	10	604		SK72		覆土	壺	底部	－	－	(8.5)	ケズリ,底面菊花状	ロクロ	褐色	石英,海綿骨針	菊花文b			
151	11	931		SK92		覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	－	にぶい赤褐色	石英,海綿骨針				
151	12	1189		SK116		覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	－	灰色	石英,海綿骨針	1197(SD54)と同一			
151	13	991		SK116		覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	当具痕	褐色	石英,海綿骨針				
151	14	1456		SK116		覆土	杯	底部	－	－	(4.8)	ロクロ	ロクロ	橙色	石英,海綿骨針	火襷痕,回転糸切り			
152	15	971		SK96		覆土	甕	胴部	－	－	－	格子タタキ	ヘラナデ	褐色	石英	火襷痕,969(SI19)と同一			
152	16	387		SK96		底直	壺	頸部	－	－	－	ロクロ,突帯	ロクロ	褐灰	石英	ヘラ記号			
152	17	561		SK96		底直	壺	底部	－	－	(10.8)	ロクロ,胴部下半ケズリ	ロクロ	灰色	石英				
152	18	302	五所川原	SK96		底直	壺	胴	最大径(18.5)		(19.4)	ロクロ,(胴,底部)ケズリ	ロクロ	にぶい赤褐色	石英,海綿骨針	308(SI15)と同一,分7	覆土		L-24
153	2	891		4号方周		覆土	甕	頸部	－	－	－	頸部ロクロ,胴部格子タタキ	ロクロ	褐色	石英,海綿骨針				F-14
153	3	374		4号方周		覆土		口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐色	石英,海綿骨針	内面に自然柚			
175	1	589		SD03	N-32	2	壺	頸部	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰黄色	石英	878(SD23)と同一			
175	2	1234		SD03	P-34	覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	当具痕	灰色	石英	1233(SK04)と同一			
175	3	358	不明a	SD03	N-32	1	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	にぶい黄橙色	石英	359(外壕)と同一,分13			
175	4	342		SD09	H-33	覆土	鉢	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	明赤褐	石英,海綿骨針				
175	5	317		SD09	H-34	覆土	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐灰	石英				
175	6	350	五所川原	SD09	H-35	覆土	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐色	石英	分11			
175	7	318	五所川原	SD09	H-33	覆土	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐	石英,海綿骨針	分9			

図	番	整番	産地	遺構名	出土位置	層位	器種	部位	法量(cm)			外面調整	内面調整	断面色調	含有物	備　考	接合状況		
									口径	器高	底径						同遺構	他遺構	遺構外
175	8	268		SD31		覆土	杯	胴～底部	－	－	(5.4)	ロクロ	ロクロ	橙	石英	ヘラ記号,火襷痕,回転糸切り			
175	9	233	五所川原	SD36	B･C-26	覆土	杯	略関係	(13.7)	5.5	5.7	ロクロ	ロクロ	明赤褐	石英,海綿骨針	火襷痕,回転糸切り,分3			
175	10	370	五所川原	SD36	B-27	覆土	壺	口縁	(9.0)	－	－	ロクロ	ロクロ	にぶい赤褐色	石英,海綿骨針	ヘラ記号,分20			
175	11	388		SD43		Ⅱ	壺	頸部	－	－	－	ロクロ,突帯	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針	ヘラ記号			C-15
175	12	1383		SD41		覆土	杯	略完形	12.1	4.8	4.9	ロクロ	ロクロ	褐灰	石英,海綿骨針	ヘラ記号,火襷痕,回転糸切り			
175	13	1382		SD41	B-20	覆土	杯	略完形	(12.8)	5.4	4.4	ロクロ	ロクロ	灰黄褐色	石英,海綿骨針	回転糸切り			
175	14	323		SD46	B-17	覆土	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐灰	石英,海綿骨針				
175	15	338		SD48		覆土	壺	口縁	(13.0)	－	－	ロクロ	ロクロ	褐色	石英,海綿骨針	内面に自然柚			
175	16	44		SD54		覆土	杯	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	にぶい橙	－	火襷痕			
175	17	50		SD54		覆土	杯	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰色	石英	火襷痕	覆土		
175	18	240		SD54		覆土	杯	底部	－	－	4.7	ロクロ	ロクロ	橙	石英,海綿骨針	火襷痕,回転糸切り			
175	19	386		SD54		覆土	壺	頸部	－	－	－	ロクロ,突帯	ロクロ	褐灰色	石英	火ハジケ範囲広い			
175	20	883		SD54		覆土	甕	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐色	石英,海綿骨針				
175	21	1197		SD54	B-17	覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	当具痕	灰色	石英	1189(SK116)と同一		SD54	
175	22	949		SD54		覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	－	褐色	石英	945(SI20)と同一	O-33	SI20,SD09,23,25,26	
175	23	1473		SD54		覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキc	－	灰白色		1471(ox18)と同一			
176	24	908		SD54		覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	当具痕	褐色	石英				
176	25	968		SD54		覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	ヘラナデ	褐色	石英,海綿骨針				A-19
176	26	54		SD50		覆土	杯	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針	火襷痕			
176	27	592		SD50		覆土	壺	胴部	－	－	－	ロクロ,胴部下半ケズリ	ロクロ	暗赤褐色	石英	自然柚,ヘラ記号			B-25
176	28	1054		SD50		覆土	甕	胴部	－	－	－	格子タタキ	ロクロ	褐色	石英,海綿骨針	1058(SD66)と同一			
176	29	888		SD50		覆土	甕	口縁	(19.4)	－	－	ロクロ	ロクロ	褐灰	石英,海綿骨針	自然柚			
176	30	764		SD65		覆土	壺	胴部	－	－	－	ケズリ	ロクロ	褐色	石英,海綿骨針				
176	31	197		SD64		覆土	杯	口縁	(12.1)	－	－	ロクロ	ロクロ	橙	海綿骨針	火襷痕			
176	32	882	不明	SD77		覆土	甕	口縁	(22.0)	－	－	タタキ→ロクロ,胴部格子状タタキ	ロクロ	褐色	石英	分27		SD50覆土	
176	33	1058		SD66	D-28	覆土	甕	胴部	－	－	－	格子タタキ	当具痕	褐色	石英	1054(SD50)と同一		SD71覆土	
182	1	23			D-28	不明	杯	略完形	(12.8)	5.6	(4.4)	ロクロ	ロクロ	橙	石英,海綿骨針	ヘラ記号,回転糸切り			
182	2	20			Y-18	Ⅲ	杯	略完形	(13.2)	5.6	5.1	ロクロ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針	火襷痕,回転糸切り			
182	3	19			C･D-27	覆土	杯	略完形	(12.3)	6.2	5.6	ロクロ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針	火襷痕,回転糸切り			
182	4	21			J-29	Ⅱ	杯	略完形	－	－	4.8	ロクロ	ロクロ	橙	石英	ヘラ記号,火襷痕,回転糸切り			
182	5	18			D-25	不明	杯	略完形	(12.2)	4.4	(5.2)	ロクロ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針	火襷痕,回転糸切り			
182	6	1384			B-20	Ⅰ	杯	底部	－	－	(4.4)	ロクロ	ロクロ	橙色	石英,海綿骨針	ヘラ記号,回転糸切り			
182	7	877			OY-15	Ⅱ	杯	口縁(小)	－	－	－	ロクロ	ロクロ	にぶい黄橙色	－				
182	8	75			B-18	Ⅱ	杯	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	にぶい黄橙色	－	火襷痕			
182	9	17			O-16	Ⅰ	杯	口縁	(12.4)	－	－	ロクロ	ロクロ	灰色	海綿骨針	火襷痕			
182	10	1406			D-25		杯	Ⅲ	－	－	－	ロクロ	ロクロ	橙色	石英,海綿骨針				
182	11	328			E-25	Ⅱ	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐、灰色	石英				
182	12	325			J-23	Ⅰ	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	にぶい赤褐色	石英				
182	13	326			南側調査区	表採	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰オリーブ					
182	14	330	五所川原		E-16	Ⅰ	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰色	石英	分10			
182	15	368	五所川原		O-33	Ⅰ	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針	分18			
182	16	347			J-22	Ⅰ	甕	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐、灰色	石英				
182	17	349			I-32	Ⅰ	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	にぶい赤褐色	石英				
182	18	382			L-32	Ⅰ	壺?	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	にぶい赤褐色	石英,海綿骨針				
182	19	369	五所川原		P-33	Ⅰ	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針	分19			
182	20	353			J-5	Ⅰ	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	にぶい赤褐色	石英				
182	21	327			G-61	Ⅰ	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰色	石英,海綿骨針				
182	22	361	不明b		P-83	Ⅰ	鉢	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐灰色	石英	分16			

図	番	整番	産地	遺構名	出土位置	層位	器種	部位	法量(cm)			外面調整	内面調整	断面色調	含有物	備　考	接合状況		
									口径	器高	底径						同遺構	他遺構	遺構外
182	23	372			L-14	I	壺?	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰色	海綿骨針				
182	24	395	五所川原		T-77	I	壺	頸部	－	－	－	ロクロ，突帯	ロクロ	灰褐色	石英	分21			
182	25	393			H-33	II	壺	頸部	－	－	－	ロクロ，突帯	ロクロ	褐、灰色	石英，海綿骨針	ヘラ記号			
182	26	823			K-36	II	壺	胴部(小)	－	－	－	ロクロ，ケズリ	ロクロ	にぶい赤褐色	石英	ヘラ記号			
182	27	850			表採		壺	胴部(小)	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰色	石英	ヘラ記号			
182	28	440			B-15	I	壺	頸～胴部	－	－	－	ロクロ，突帯	ロクロ	灰褐色	石英	ヘラ記号，火ハジケ			
182	29	416	五所川原		H-33	III	壺	頸～胴部	－	－	－	タタキ→ロクロ，突帯	ロクロ	褐灰色	石英，海綿骨針	分23			H-33
182	30	301			J-29		壺	頸～胴部	－	－	－	ロクロ，突帯	ロクロ	にぶい赤褐色	石英，海綿骨針	ヘラ記号？			J-27，I-31，32
182	31	509			B-14	II	壺	底部	－	－	(11.0)	菊花状にケズリ	不明	にぶい赤褐色	石英，海綿骨針	菊花文a，火ハジケ，508(SD39)と同一			
182	32	609			OX-24	II	壺	底部	－	－	－	菊花状にケズリ	ロクロ	にぶい赤褐色	石英，海綿骨針	菊花文b			
182	33	381			E-25	II	鉢	口縁	(12，4)	－	－	ロクロ	ロクロ	にぶい赤褐色	石英，海綿骨針				
182	34	1471			OX-18	II	甕	胴部	－	－	－	平行タタキc	－	灰白色		1473(SD54)と同一			
182	35	860			H-32	I	土製品	底部	－	－	－	－	－	褐、灰色	石英，海綿骨針	壺底部に周縁加工			
191	2	356		SD01	L-33	覆土	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐色	石英				
191	3	315		SD01	I-23	覆土	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐色	石英，海綿骨針				
191	4	316		SD01	L-30	覆土	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐色	石英				
191	7	333		SD19		上位層	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	褐色	石英				
191	8	1339	不明b	SD20	T-78	覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	当具痕	褐灰色	石英	分38			
191	9	593		SD20	T-78	覆土	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰白色	石英				
191	10	1350	不明b	SD21	T-80	覆土	甕	胴部	－	－	－	平行タタキ	－	褐灰色	石英	分39			
191	13	508		SD39		2	壺	底部	－	－	(12.0)	菊花状にケズリ	ロクロ	にぶい赤褐色	石英	菊花文a，火ハジケ，509(b-14)と同一			
191	14	343		SD39	B-17	覆土	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	暗赤褐色	石英				
191	15	357		SD39		覆土	壺	口縁	－	－	－	ロクロ	ロクロ	赤褐色	石英，海綿骨針				
197	1	17a			E-15	I	擂り鉢	底部	－	－	－	ロクロ	ロクロ	灰色					

表15　平安時代石器・時期不明石製品観察表

図	番	委	器　種	遺構名	グリット 出土位置	層位	石　質	計測値(㎜)			重さ(g)	所　　見	備考
								長さ	幅	厚さ			
61	20	140	砥　石	SI03		床直	細流業	(9.7)	(6.2)	(4.3)	356.5		
70	1	164	台　石	SI09	P-25	覆土	安山岩	17.5	19.5	9.3	4.0	s-3	
89	52	167	台　石	SI20	P15	1	安山岩	15.4	18.9	14.1	5.8	鉄付着礫	
89	54	141	砥　石	SI20	カマド	確認面	流紋岩	(8.2)	6.0	4.9	238.2	s-1	
89	53	142	砥　石	SI20	カマド	床直	細流業	12.2	6.3	6.4	587.5	s-2	
104	1	168	台　石	SI33		床面	凝灰岩	19.3	32.9	8.0	3.5	s-5、鉄付着？	
108	10	143	台　石	SI36	O-34	床直	安山岩	15.5	13.5	9.2	3.2	s-4	
109	6	144	砥　石	SI44	周溝	覆土	流紋岩	12.9	8.1	4.7	737.6	s-8	
114	7	146	砥　石	SI50		覆土	流紋岩	18.8	5.7	4.7	676.0		
121	10	145	砥　石	SI56		床直	細流業	(12.5)	(10.1)	(4.7)	674.3	s-1	
177	2	154	砥　石	SD26		覆土	細流業	(6.0)	(3.9)	(2.9)	76.2		
177	1	150	砥石？	SD09	H-34	覆土	凝灰岩	(6.6)	(10.5)	(8.6)	394.4	s-6	
183	16	158	砥　石		N-57	I	細流業	(5.6)	5.7	2.4	96.1		
183	17	161	砥　石		B-18	I	細流業	(7.3)	5.6	3.2	115.6		
191	6	148	砥　石	SD01	A-25	覆土	細流業	(8.4)	(6.1)	(4.8)	351.4		
197	8	93	硯		表採		粘板岩	(106.0)	(30.0)	(11.0)	27.2		
197	9		硯		I-29	I	粘板岩	(39.0)	(40.0)	(13.0)	20		

表16　鉄器・銅滓観察表

（計測値は錆取り後のもの）

図番号	整理番号	出土地	F番号	種　類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
55-3	№40	SD22、7層		釘状	4.5	2.7	0.65	7.7	頭部
55-4	№42	SD23、覆土		軸	1.95	0.5	0.5	1.0	
57-7	02-1	SI01床面	F-1	鋤先	17.1	16.1	1.3	168.5	完形
57-8	02-2	SI01床面	F-2	刀子	18	1.9	0.4	18.0	完形
64-5	№1	SI05、1層	F-1	鋤先	19.4	17.5	1.4	305.3	完形
64-4	№4	SI05、掘方		手鎌？	5.6	2.9	0.15	13.0	2片
70-10	№6	SI09、床面	鉄-2	鏃の柄	6.5、4.5	0.5	0.5	3.6	断面四角形。3片。
70-8	№7	SI09、床面	鉄-3	不明	1.1	2.25	1.3	11.4	鉄塊？
70-9	№5	SI09、床面	鉄-1	鏃の先	4	0.65	0.4	1.1	
81-10	№10	SI17、覆土	F-1	釘状	9.65	1.05	0.6	10.0	完形
89-42	№15	SI20、床直	Fe-4	鏃の柄	8.1	0.55	0.4	6.2	断面四角
89-41	№16	SI20、床直	Fe-9	鏃の先	3.7	0.8	0.4	2.1	
89-40	№13	SI20、床直	Fe-3	鏃先	4.7	0.7	0.35	1.7	
89-43	№14	SI20、床直	Fe-10	鏃の柄	6.3	0.42	0.5	3.1	断面四角
89-44	№17-1	SI20、床直	Fe-9	刀子基部	6.1	1.2	0.45	5.1	
89-45	№17-2	SI20、床直	Fe-7	刀子？	2.4	1.5	0.45	2.3	
89-46	№20	SI20、Pit21	F-1	軸	2.7	0.35	0.38	2.6	
89-47	№19	SI20、床面	F-11	軸	1.8	0.35	0.3	1.7	
89-48	№12	SI20、覆土	Fe-2	不明	4.55	2.15	0.5	8.1	
89-49	№17-3	SI20、床直	Fe-7	鍋	3.4	3.95	0.75	18.2	3片
89-50	№21	SI20、Pit12		締め金具	3.95	0.95	0.2	6.6	
89-51	№11	SI20、床直	Fe-1	不明	7.6	4.2	2.8	35.3	銅付着、特殊
94-14	№22	SI24	F-1	刀子	19.5	2.2	0.5	24.7	完形。3片。
102-3	№38	SI32、覆土		刀子？	2.3	1.7	0.45	4.3	重い
103-1	№23	SI33、覆土		刀子	3.4	0.9	0.2	2.2	
108-12	№24	SI36、覆土	F-2	刀子	4.0	1.0	0.41	2.9	
152-19	№26	SK32、覆土	F-1	手鎌？	2.05	2.5	0.35	2.7	
152-20	№28	SK54、12層	F-2	鏃の柄	3.95	0.4	0.35	0.8	断面四角
152-21	№27	SK54、3層	F-1	軸	7.9	0.4	0.4	7.6	紡錘車？。2片
177-10	№33	SD46、覆土			2.1	1.3	0.7	4.1	
177-11	№45	SD54、覆土		軸	3.8	0.6	0.4	1.2	
177-3	銅滓3	SD34、Ⅰ層			3.95	4.95	0.8	35.8	A-20付近
177-4	№43	SD35、覆土		手鎌？	2.0	2.3	0.25	3.2	
177-7	№30	SD41、覆土	F-1	手鎌	4.85	1.8	0.2	3.9	D-19付近。頭部のみ。目釘穴1個
177-8	№29	SD41、覆土	F-1	鏃の柄？	9.4	0.45	0.4	4.3	D-19付近。断面四角
177-9	№44	SD46、覆土		手鎌？刀子？	2.8	1.5	0.3	2.3	刃部
183-10	№48	L-15、Ⅰ層		不明	2.95	3.10	0.4	5.7	肉厚　刃？
183-11	№49	B-18、Ⅱ層		不明	4.9	1.5	1.2	15.9	刃部状の薄片は見える
183-12	№47	K-11			3.95	1.1	0.8	5.3	
183-13	№46	J-5、Ⅰ層		不明。軸？	4.8	0.6	0.65	8.9	木部が残っていたのか？
183-14	銅滓1	B-18、Ⅰ層			2.25	3.15	0.15	3.4	
183-15	銅滓2	B-19、Ⅰ層			1.8	3.35	0.2	5.6	
183-5	№36	OZ-22、Ⅱ層		鏃？槍？	3.45	1.35	1.05	7.2	茎部分？　肉厚
183-6	№37	B-45、Ⅰ層		鍋	2.9、4.85	1.3、3.1	0.55	34.4	内耳(部分)あり。2片
183-7	№35	A-14、Ⅰ層		刀子	7.9	1.65	0.4	7.5	2片
183-8	№50	M-24、Ⅰ層		手鎌？	3.3	1.5	0.35	2.0	
183-9	№51	O-54、Ⅰ層		不明。	4.4、2.1	1.8、1.9	0.8	14.1	刃部？3層の積層構造

表17　土製品・石製品観察表

図番号	種　類	出土地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
94-12	土玉	SI24壁溝	1.6	1.5	1.1	2.9	P-91。土玉。貫通孔あり。
94-13	土玉	SI24、P4	1.1	1.1	1	1.1	貫通孔なし。
152-22	石製の平玉	SK72覆土	1.8	1.9	0.8	2.7	安山岩製。貫通孔あり。
177-12	土鈴	SD67(E-25)	(6.7)	(3.0)	2.9	(53.9)	端部に貫通孔。
177-15	土鈴	SD71確認面	(11.0)	(6.0)	2.7	(111)	端部に貫通孔。
197-2	泥面子、老婆？	K-34、Ⅰ層	－	－	－	(5.2)	
197-3	泥面子、不明	P-65、Ⅰ層	－	－	－	(4.7)	鱗状。
197-4	泥面子、不明	P-65、Ⅰ層	－	－	－	(3.1)	
197-5	泥面子、女性？	B-19、Ⅰ層	－	－	－	(13.0)	
177-6	不明土製品	SD41覆土	3.1	1.4	1.2	4.3	
197-6	泥面子、馬	V-81、Ⅰ層	－	－	－	(27.6)	
197-7	不明石製品	C-39、Ⅱ層	17.0	11.0	2.9		珪藻質泥岩

報告書抄録

ふりがな	やまもと　いせき
書名	山元（1）遺跡
副書名	国道7号浪岡バイパス建設事業に伴う遺跡発掘調査報告
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第395集
編著者名	福田友之、畠山　昇、小山　浩平、工藤　司
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038－0042　青森市新城字天田内152-15　TEL 017－788－5701
発行機関	青森県教育委員会
発行年月日	西暦　2005年3月28日

ふりがな	ふりがな	コード		旧日本測地系（TokyoDatum）		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	（平成14年度） 20020416～ 20020705	5,300㎡	国道7号浪岡バイパス建設に伴う事前調査
やまもと（1）いせき 山元(1)遺跡	あおもりけん 青森県 みなみつがるぐん 南津軽郡 なみおかまちおおあざ 浪岡町大字 たかやしきあざ 高屋敷字 のじり　ほか 野尻41-16、外	29	054	40° 43′ 51.4″	140° 35′ 14.4″			
				世界測地系 (JGD2000)				
				北緯	東経	（平成15年度） 20030415～ 20031024	12,575㎡	
				40° 44′ 00″	140° 35′ 01″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山元(1)遺跡	集落跡	縄文時代 前期 後期	竪穴住居跡　13軒 土坑　14基 溝状土坑　52基 土器埋設遺構 1基	縄文土器 石器 岩版 総数15箱	縄文時代前期中葉の集落跡。 縄文時代後期の土坑。
	散布地	弥生時代		土器少量	
	集落跡	平安時代	壕跡　2条 竪穴住居跡　53軒 竪穴遺構　7棟 掘立柱建物跡　4棟 柱　列　2基 井戸跡　4基 土坑　88基 円形・方形周溝 4基 溝跡　39条 道跡 土器埋設遺構　2基 性格不明遺構　1基	土師器 須恵器 ミニチュア土器 土玉 土鈴 石製の平玉 鉄製品（鋤先、刀子、手鎌、鉄鏃、堝、責め金具、釘状鉄製品、軸状鉄製品、保管素材？） 銅滓 石器（砥石、台石） 総数80箱	平安時代、9世紀から10世紀後半にかけての集落跡。10世紀中葉には二重の壕が方形に構築される。 壕の内側には遺構が少なく、いわゆる防御性集落とは様相が異なる。内側には、住居跡のほか、掘立柱建物跡3棟と2基の柱列が検出されており、掘立柱建物跡と柱列は壕に伴う可能性がある。 道跡西側の台地上には住居跡や円形・方形周溝が、東側の低地にはコの字状の溝が多数検出されている。
		時代、 時期不明	掘立柱建物跡　1棟 土　坑　13基 焼土遺構　1基 溝　跡　25条 小穴群　2ヶ所	珠洲 近世陶磁器 泥面子 古銭 不明石製品 硯 遺物少量	

青森県埋蔵文化財調査報告書　第395集

山元（1）遺跡

－国道7号浪岡バイパス建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

（第一分冊）

発行年月日　2005年３月28日
発　　行　青森県教育委員会
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042　青森市大字新城字天田内152-15
TEL : 017-788-5701　FAX : 017-788-5702
印 刷 所　青森オフセット印刷株式会社
〒030-0802　青森市本町２丁目11番16号
TEL : 017-775-1431